杜言綺語

琉游舎
戸井　出琉

狂言綺語序・・・彼岸会にことよせて

彼岸は悟りの世界。煩悩に満ちたこちらの岸（此岸）に対して極楽浄土の向こうの岸（＝彼岸）を表します。私たちは六波羅蜜の教えを実践する事により、彼岸へ渡ることができるとされています。しかし凡人である我々は、六波羅蜜の教えを毎日実行することは難しいことなので、せめて春と秋の年二回はその教えを実行する。これが現在のお彼岸法要の意味となっています。

ちなみに六波羅蜜とは彼岸へ到達（パラミータ）するための６つの実践徳目です。

１布施：施しをすること。**２持戒**：戒律を守り反省すること。**３忍辱**：不平不満を言わず耐え忍ぶこと。**４精進**：一所懸命努力すること。**５禅定**：心を静かに保つこと。**６智慧**：真実を見抜く智慧をもつこと。

この六波羅蜜の教えは毎日実行することはおろか、年二回のお彼岸の日に実行することすら,困難なことに思えます。少なくとも私には僧侶にもかかわらず相当な忍辱と精進を要しそうです。

法要の導師を勤める私がこんな自信のなさそうな発言をしたのでは、皆さんにとって法要のご利益が失せ、有り難く思えなくなってくるかもしれません。でもそもそも有り難い僧侶や法要って何でしょう。皆さんに背中を向け、荘厳で威厳たっぷりに法要を取り仕切り、宗祖の教えを語る導師を後方から拝めば、それはたいそう有り難い存在かもしれません。僧侶は皆さんに法の布施を施し、皆さんは僧侶に財の布施を施す。それで八方丸く収まる。ホントかな？

法要と僧侶の「荘厳と威厳」は「形式と権威」に取って代わられ、導師として皆さんを彼岸に導くために先頭に立つことで背中を向けていたものが、いつの間にか皆さんの生きる悩みに文字通り背を向けて、一人高みに立って見下ろす存在になってはいないでしょうか。あるいは宗祖の教えの名のもとに、今が鎌倉時代や江戸時代や明治時代であるがごとく、文字に残されているという理由だけで部分部分を金科玉条オウム返しに語っていないと言い切れるでしょうか。

私は有難い存在になるより、今この現代を生きる社会と人々とそしてその中の、喜び悲しみ苦しみ楽しみを自分自身の目と耳と鼻と舌と身と心であるがままに受けとり、そして素直に、喜びを喜び、悲しみを悲しみ、楽しみを楽しみ、苦しみを苦しみ、すべてをそのままに観ることのできる存在になることができればと思っています。このことが今のところ私が唯一自信をもって皆さんにお話しできるお釈迦さまの教えだと信じているからです。

さあ大変な大風呂敷を拡げてしまいました。これからこの大風呂敷を少しでも畳めるようなサイズまで戻すべく、日々の生活の中から感じ取った仏さまの心を、率直に分かりやすく書いていきたいと思います。分かったことは分かったそのままに、分からないことは分からないそのままに。質直にして意柔軟に。

狂言綺語一・・・やすらぎのところ

六波羅蜜の実践。年二回くらいならできそうかな、でもやっぱり自分には無理かなと思われている皆さん。ご心配は無用です。かくいう私も全く実践できる自信がありません。最初からできないと開き直るのもなんですが、やはり出来ないものを出来ると言ってみてもしょうがないですよね。ただこの機会に、無

心で、素直に、自分の心の中を眺めてみるのも悪くないなと思っています。これが年二回だけでなく、毎月、毎週、毎日、そしていつも、自分の心をありのままに質直に意（こころ）柔軟に観ることができれば、いつの間にか「やすらぎのところ」に辿り着いているのではないでしょうか。

この「やすらぎのところ」は彼岸そのものだと思っています。難しい理論や実践によって彼岸に到達できる方はごくごく選ばれた人（例えば肉体的にも精神的にもマゾの人や教祖様命の宗教エリート）だけでしょう。生活者である私たちは六つの徳目を実践しなさいと言われると、その段階でもう心が萎えてしまいそうです。だからせめて自分に今できそうなことを一つ、「自分の心を素直に観る」ことを私は実践していきます（もちろんこれも簡単なことではないのですが）。

日常の流れに流されるままの生活をしている中で、一日一回ほんの一時流れの中に立ち止まって自分の心と対話する、そしておもむろに心の流れに棹さして日常の流れにもどっていく。流れに立ち止まる前と後ではほんのちょっとだけ気持ちが安らかに穏やかになっていればいいな。そして毎日毎日これを繰り返していけばいつの間にか「やすらぎのところ」にたどり着いているというのがいいなと。これが自分の行いがもたらす果報であったとしたら、もうこれで充分です。

仏教専門用語でいう「観心」というのは、このような行い（「行」と言うには恐れ多い）だと私は自分なりに思っています。宗教を生業としている人からは「おまえは何をいい加減なことを言っているんだ」とお叱りを受けるでしょうが、それもしょうがないですね。お釈迦様のおっしゃっていることを素直に聞いた結果、今の自分にできる行いがこれなのですから。

話は飛びますが、小津安二郎監督の名作「東京物語」の熱海の堤防シーン。笠智衆と東山千栄子演ずる老夫婦の姿に、私は二人の「やすらぎのところ」を観ました。東京の子供たちには厄介払いのように熱海の宿をあてがわれ、そこの旅館は社員旅行で眠られないという翌朝の堤防での二人の語らい。傍目から観て、「幸福な日々ですね」といえないような毎日。それでも一時の堤防での会話には互いの慈しみと安らぎが溢れています。そのシーンの写真を勝手に転載してしまいます。皆さん機会があればご覧ください。映像は直接心に語りかけてきます。言葉でいろいろと書き連ねる私の「狂言綺語」より、遙かに分かり易くまた心にすーっと入ってくると思います。

狂言綺語二・・・コリーナの秋

玄関を開けたとたん金木犀の香が朝の冷たい空気を和ませて、鼻の奥をこそばゆくさせていきます。

あちこちの庭に列になって咲く彼岸花の、繊細なのに鮮やかな赤が歩調に合わせて眼の端を歩き去っていきます。

アスファルトに今落ちたばかりの栗の鋭いイガを、靴底で踏んでいいものかどうかつま先が足踏みをして

います。

季節はずれの日暮らしの鳴き声が、ついこの間まで美声を競っていたツクツクボウシやミンミンゼミの声を耳の底に呼び覚まします。

七月の初めから毎日のように収穫し舌と胃袋を満たしてくれた夏茄子は、いつの間にか秋茄子と呼んだ方がふさわしいような大きさと手触りと味になりました。

昨日の雨で落ち葉となった桜の葉を掃いていると、風と共に新しい葉がこの身と竹箒にまとわりついて、また仕事を増やしていきます。

コリーナの秋は全身を使って味わい尽くすことができます。（注1）眼と耳と鼻と舌と身と意（こころ）で秋をありのままに受け取って、味わった色と声と香りと味と感触と心持ちをそのままに秋に返してあげれば、ちょっとだけ心根が優しく安らかな気分になって来ます。

このありのままに受け取るということは、どういうことでしょうか？

例えば栗は八月の終わりから今日にいたるまで大量に実を落とし、美味しさを提供してくれています。でも実を落とすその行為は他の生き物にごちそうを提供することが目的ではないでしょう。どんぐりの実は九月初旬の一週間ほどの間に、小さく青い実と葉っぱを四、五枚付けた塊を多量に落とします。まだ大きくはなっていない未熟などんぐりの実が、生き急ぐかのように大量に空から降ってきます。

生物学に詳しくないので私の見立ては間違っているかもしれません。ただ栗の実もどんぐりの実も落とされているのでなく、自らの意思で木から分れて地上に降り立っていると感じるのです。おそらく一番強い実一つが次の世代へと木の命をつなげるために、そうでないものは自ら落下を選んでいるのではないでしょうか？生き物が永遠の未来へと命をつなげるためのすがた。これが私がありのままに観た地上に降り立った栗とどんぐりの実のあるがままのすがた（実相）です。

イタチらしき小動物を口にくわえて歩道から森の中に入っていったカラス。皮と毛だけが残されたウサギの亡骸。車にひかれてぺちゃんこになったタヌキや蛇。木の下に取り残された大量のセミの抜け殻。バッタに丸坊主にされた大根の葉っぱ。イノシシに掘り返された畑。夜の狐の寂しい鳴き声。明け方の鳥の奇声。この一か月に私が見たコリーナの自然はきりがありません。これを残酷やかわいそう気味悪いなどという言葉で表現することは間違いでしょう。現象を言葉にして評価してしまうと、それはもうすでにありのままに受け取ったことにならないからです。

前回、ありのままに自分の心を観ることを仏教専門用語では「観心」と言い「自分の心を素直に観てその心と対話する」ことだとお話ししたと思います。今回は私なりの「観心」の実践方法をお話しします。

「コリーナの秋」を眼と耳と鼻と舌と身と意で受け取った当初は「気持ちいい」「楽しい」「かわいそう」「辛い」というような感情が沸き起こります。その感情がもたらすかたち（例えば落下した栗の実）に目を凝らしていると（観察する）、いつの間にかそのかたちの中にある栗のいのちが語りかけてきます。「僕はこのようなかたち（実相）なんだよちゃんと観てね」と。心も頭も空っぽにしてそのもののかたちを見つめると、いつの間にか栗というかたちの中にあるいのちが語りかけてきてくれるのです。その時「楽しい」や「かわいそう」や「辛い」という様々な〝感情〟は感動や感謝や慈しみに変わってくるのです。これを難しい仏教語で言うと〝観心によって永遠のいのちと感応道交した〟と言うようですが、話がややこしくなってきそうなので、ここまでにします。

ありのままにこの社会を観ることで、自分の“感情”が感動や感謝や慈しみに転じていく。そうなればきっと“やすらぎのところ”にいつかは辿り着けるような気がします。とここまで書いて「だが、それじゃお前はただ見ているだけの傍観者じゃないか?」と追及され、フリーズしてしまいました、締まらないまとめですみません。今回はここで強制終了いたします。

「見る」と「観る」についてもう少し考えてみる必要がありそうです

（注1）：眼・耳・鼻・舌・身・意の六種類の器官を六根といい、六根がその対象に対する執着を断って清らかな状態になることを六根清浄という。

狂言綺語三・・・見ることもなく

「狂言綺語」という題にふさわしく今回は現代詩を取り上げてみます。本来は和歌や物語を指す言葉ですが、この言葉がしきりに使われた中世にはもちろん現代詩はありませんでした。しかし高尚で有難い仏法の教えからすれば、当時の僧侶などの知識人にはたわごとにしか過ぎないとさげすまれていた文学の系譜の中でも、最も生産性が低く読者も少なく意味もよくわからない現代詩こそ、現代の狂言綺語にふさわしいジャンルではないかと思い、今回取り上げました。

私の大好きな詩人で黒田三郎という詩人がいます。彼の「見ることもなく」という詩です。

それを見ないわけではないのに
勤めにいそぐ駅までの道の
どのへんにこぶしが咲き
れんぎょが咲き
沈丁花がかおるのかを
僕は知らなかった
何と多くのことに気がつかず
ただひたすら道をいそいでいたことだろう
遅刻すまいとただそのことしか
念頭になかったかのように
五十歳を過ぎたある日突然勤めを止め
これからどうすればよいのか
見当もつかなかったのに
その日から僕には
見えなかったものが見えるようになった
いつも通る道のあちこちに
さまざまの花の咲いているのが

解説は必要ないでしょう。書いてある通り素直にお読みください。現代詩が難しいなんて嘘ですね。こん

なに素直で分かり易い詩は現代詩らしくなくて、格好がつかないと感じるかもしれません。私はこの詩を四十年以上前の高校生の時に初めて読みました。その当時はあまり記憶に残らず、「ああ彼は定年前に仕事をやめてしまったんだ、通勤の時には気づかなかった道すがらの花をみる余裕ができたんだ。」くらいの感想だったと思います。

ところがかくいう私も会社勤めを定年前にやめてコリーナを終の棲家と定めてちょうど一年が経ちました。直近の詩話会のテキストとして戸井みちおからこの詩を提示されて、「これこそ狂言綺語だ」と新たな発見をしました。文学はまやかしの言葉という当初の「狂言綺語」の意味が、白居易の文章に「狂言綺語の過ちを転じて……讃仏の因となさん」とあったことから，平安時代以降，和歌や物語が逆に仏教の修行に繋がり，これを助けるとする考えが成立したのです。これがこの首題の本来の意味です。

前回の「コリーナの秋」で書いたように、この一年間今までの会社勤めでは見えなかったものが、色々見えてくるようになりました。それはあるがままに対象を観る（観心）ということであり、観ることによって相手の永遠のいのちと感応道交しているのですとお話ししました。でも見えなかったものが見えるようになったのは、ひょっとしたら会社勤めをしなくなって、周りのものを感じる余裕ができただけと言えるかもしれません。黒田三郎もそのくらいの感覚で詩を書いたのかどうかは分かりませんが、文学がひとたび発表されるとそれは作者のものではなく、読者のものとなるのです。今この詩を読むとき、作者が道すがらの花たちと対話をしている姿を、そしてその対話の中に「やすらぎのところ」を見い出しているすがたに私は強く共感しています。そして自分はこれからも今まで通りコリーナの自然をありのままに観て自然と素直に対話していくことが、「行」であるという確信を持つことができるようになりました。それこそ黒田三郎の「見ることもなく」が私に与えた詩の力です。「見ることもなく見ていたもの（結局何も観ていないということ）から、見ることの先を観ることができるようになる」という確信を私に与える詩の力です。

前回から「『見る』から『観る』」ことについてこだわって書いてきましたが、少しずつでも前に進んでいるでしょうか?後退しているのであれば早く気付かねば。

狂言綺語四・・・はじめに行いありき

「はじめに言葉（ロゴス）ありき。」

聖書のヨハネ福音書の冒頭の有名な言葉ですね。僧侶である私がいきなり聖書の言葉を持ち出してきて、何を言い始めるのでしょう。私はかねてより「琉游舎はすべての人に開かれたフリースペースです」と申し上げています。琉游舎は思想・宗教・人種・老若男女を問わず、お互いが対話することで相互理解をし得られる共感の場だと思っています。同じ考えの人と話しても仲間褒めか些細な違いをあげつらうセクショナリズムに陥るだけでしょう。そこで今回は自分から遠くにある言葉や考えをもとに「見る」から「観る」について考えてみたいと思います。

ロゴスと言う言葉はギリシャ語です。私は学生時代プラトンのイデア論を専攻していたのですが、ロゴスという言葉の理解に大変苦労いたしました。簡単には説明し難いのですが、あえてまとめてみると「イデ

ア（真理）を認識するために必要なものがロゴス（言葉、理性、論理）」だと言うことでしょうか。であれば聖書の言葉は「神を認識するために最初に言葉や理性や論理があった」「神の認識はロゴスにおいてなされる」「神のなかにロゴスはある」と私には読めてしまいます。（勝手な読み方でしたらごめんなさい）キリスト教はまずロゴスによって受け入れられるべき宗教なんですね。たとえば「汝の隣人を愛せよ」という言葉（ロゴス）はすんなり私たちの頭に入ってきます。頭に入ってきたものはすんなり心に入り自分自身の血肉となっていくでしょう。キリスト教はロゴス（言葉、理性、論理）によって私たちを信仰へと導く宗教のようです。まさしく聖書と言う言葉（ロゴス）によって成立しているのですね。

ところがお釈迦様の教えには「汝の隣人を愛せよ」という類いの教えの真理を表した言葉は思いつきません。お釈迦様の言葉と言われるお経は膨大な数があります。その中の一つ、たとえば法華経こそが真実の教えだと標榜する宗派があり、浄土三部経こそが真実の教えであると標榜する宗派がありで、では仏教の聖書に当たるものは何だと言われると各宗派ごとに違ってくるのです。仏教には言葉（ロゴス）がないようです。あるのはさとりに到るための行いだけです。それは「煩悩を滅する行いによってのみさとりを得ることができる」と言うことです。煩悩を滅するための方法や悟るための行いの違い、悟ったらどこに行くのか？などでいろいろなお経と考えがあるのです。私にとってのそれは「ありのままに観ることの行いの積み重ねによって『やすらぎのところ』にたどり着くことができる」ということですから、あえて私はお釈迦様の教えを「はじめに行いありき」と言ってみたいと思うのです。「正しい教えは行いによってのみ顕現する」

論証の乏しい粗雑な話で恐縮ですが、私のあるがままに見た仏教の姿は、キリスト教の「はじめに言葉ありき」に対して「はじめに行いありき」だと感得されます。西洋的思考は対象を見たり聞いたり読んだりすることをロゴス（言葉、理性、論理）で認識するため、自己に対して他者という関係で成立する二元論の世界です。ところが「初めに行いありき」は見るや聞くや読むということを言葉や理性や論理というものを媒介せずに受け入れること（行い）だと思います。それはそのままをあるがままに受け入れるということになると思うのです。対象と一体化する。自己も他者もない一元論の世界です。

「見る」ことがロゴスによって認識され自己と他者が厳しく分別される世界に対し、「見る」ことから「観る」ことつまりあるがままに受け入れることによって自己と他者が一体化する世界。あえて対極に配置するとこういうことになるでしょうか。どちらが正しくどちらが間違っているかという議論は無意味です。私はこの両極端の間で毎日右往左往しながら生活しています。今までの生活や仕事や学習の場では二元論的思考が体に染みついているので、意識しないと物事を無意識のうちに「正か邪か」「善か悪か」「好か嫌か」などと峻別しているのです。ですから日々意識して物事をあるがままに観てあるがままに受け入れようと努力しなければ、自分の認識判断は片方に偏ってしまい「中道」というお釈迦様の教えに反してしまいます。この日々の努力と行いが私の「行」というものだと思っています。

今回は少し話が理屈っぽくなってしまいました。次回は「自分とコリーナの風景が溶け合い風景を自分の身にまとうことができたらそれは自己と他者が一体化するということではないか」と考えていることについて書いてみたいと思います。「見る」から「観る」そして「行い」は「風景となる」について。

狂言綺語五・・・行いは風景となる

やっと秋らしい天気が、ここコリーナでも続くようになりました。朝がどんどん遅くなり夜がどんどん早くなっていきます。生き物も自然も冬準備に大忙しの秋です。さて私たち人間は自然が冬支度をしているこの季節に、何をしているのでしょうか?私は明け方の澄んだ月をみながら今朝の冷え込みを感じたり、紅葉の見頃はあとどのくらいだろうかと、色づかないまま枯れ散った落ち葉をさくさくと踏みしめています。夜の虫の鳴き声も風前の灯火、小松菜やキャベツの葉っぱがバッタに食われることもこれからはないだろうな、などと思ったり。

私は人間や動物や草木そしてそれらを支える大地とその上に無限に広がるこの空間、今まさしく自分が生きて観て聞いて味わい触れる感触を「風景」と呼んでみたいと思います。「自然」と呼ぶと「文明の進歩は人が如何にして自然を克服してきたかの歴史だ。」とか「人間は今まで自然を破壊してきた、これからは自然を守らなければいけない」というような人間対自然の二元論的思考がどうしても働いてしまいます。「環境」もしかり。今行われているCOP23はパリ協定をどう進めるか、アメリカの離脱宣言を許していいのかなど、結局「人間にとってどう地球環境をコントロールしていけばよいのか?」ということが論点になってしまいます。だから倫理・哲学・宗教の視点からではなく、科学や経済の視点から環境が議論されることが必然となるのです。前回の繰り返しになりますが「初めにロゴスありき」がもたらす当然の帰結です。

誤解なきよう申し上げますが、私は「初めにロゴスありき」を起源とする世界のとらえ方に対しておかしいではないかと言っているわけではないのです。ただちょっと窮屈だなと感じているだけなのです。「地球環境は何としても守らねばならない」「受動喫煙の根絶は当然だ」「正義は貫徹すべきである」など、例が適当かどうかはともかく「ought to」(~すべきである、~するのが当然だ)という〝目的〟を示しそれを実現することが善であるという世界の認識方法について、ちょっと窮屈な感じを受けるのです。ところが実際は「自然は私の心の安らぎです」「受動喫煙は私には苦痛です」「あなたの正義は私の正義ではない」というような「is」(~です)という〝事実〟がわたくしたちひとりひとりにとっては切実なような気がします。「ought to」と「is」の間が離れていればいるほど、その世界は私たちには不自由で窮屈な世界であり、安らぎの処から遠いところのような気がするのです。

「風景」について考えてみます。「はじめに行いありき」これがお釈迦様の教えですと前回書きました。私がコリーナの風景に触れるということは澄んだ月や落ち葉を見、鈴虫や雉の声を聴き、風の冷たさを肌が感じ、渋いか甘いかと柿の実に思い致すことです。最初は耳や目や鼻などの体の器官が働きます。そして器官から心へとその感覚の在り場所が移動していきます。眼で「見」ていたものを私自身のいのち全体で「観」る。耳で「聴」いていたものを今ここにあるありのままの私が「聞」く。体の器官や脳が認識する「自然」や「環境」ではなく、私のこころが永遠のいのちに触れて風景そのものとなる。私はありのままの自分に私でないすべての存在(いのち)の風景をまとい、コリーナの風景のひとつとなり、すべてのいのちと一体化するのです。これが「はじめに行いありき」です。つまり私自身が私以外のすべての存在とともにひとつの風景となるそのために「行い」があるのです。

風景を身にまとい風景そのものとなること。そうなると人は自然をコントロールする存在でもなく、自

然に打ち負かされる存在でもなくなり、自然の中に生かされるいのちのひとつとなるのです。その時私は風景の中で生かされている自分に感謝し、自分でないいのちを慈しみ、そのいのちを頂くことに感謝するでしょう。そしてそこがやすらぎのところなのです。

風景をまとうという行いは絵空事でしょうか。風景そのものになれば自然と共生することができる、だから自然を破壊することもなく、仲良く暮らすことができるという楽天家、あるいは自分だけが自然と共生できれば良しとする隠とん者なのでしょうか。軍備を持たなければ他国から侵略されることもなく、いずれ他国も武装を放棄するだろうと考えた、かつての非武装中立の考えにどこか通底しているようにも思えます。しかし今、あえて自分が生きている社会の論理（ロゴス）の対極にある観る（行い）という視点から日常を振り返ってみることも必要だと思っています。こころを非武装中立にするのです。ロゴスに偏ると窮屈、行いに偏ると放埒。どちらにも偏らない中道の道が見つかればよいのですが。

狂言綺語六・・・ロゴスと行いのあいだ

山歩きをこのところよくします。車を置いて登り初め、頂上でおにぎりを食べてまた戻ってくるとおおよそ四～五時間。コリーナから車で一時間前後の山なので高くても二千ｍ弱、低ければ五百ｍ程度です。低ければ楽、高ければきついという事でもありません。登りの三十分間ずっと急登という低山もあります。登りで転ぶことはありませんが、下りでは転ぶことが多々あります。翌日筋肉痛のこともあれば、全くなんともないこともあり、「頂上はまだかまだか」と思って歩いているときもあれば、「あれもう着いちゃったの」という時もあります。それが山の険しさや歩く距離やエネルギーの消費量に比例しているわけでもないようです。不思議ですね。だから山歩きはくせになります。

前回「風景を身にまとう」について書きはじめてみましたが、ちょっと抽象的な話になってしまったと反省しています。私は常日頃、社会の論理（ロゴス）とその対極の観る（行い）とのあいだで右往左往の日常生活を送りながら、なんとかやすらぎのところにたどり着きたいと考えて生活しています。そこで前回はこころを非武装中立にするのも一つの方法かなと書いてみました。もっともらしい言葉ですがどうやるかの実践方法がありません。「こころの非武将中立」は「あるがままに観る」とか「風景を身にまとう」とか「全てのいのちと一体化する」と言うことの言い換えに過ぎないのでしょう。私は評論家や学者ではありません。僧侶は実践方法を示しそれを実践して初めて僧侶となります。大げさに聞こえるかもしれませんが「はじめに行いありき」に忠実に、私も「行い」の中でその実践方法を示していかなければならないのでしょう。

山歩きには「一気に」とか「たちまちに」ではなく「だんだんに」とか「いつのまにか」と言う言葉が似合います。一気に下ろうとするとたちまち転びます。下りほど足下を見て地面を踏みしめないと、バランスを失い翌日の筋肉痛につながります。足をだんだんに前に繰り出せば、ゆっくりでも必ずいつかは目的地に着きます。気がつけば頂上です。一歩一歩地面に足を置き続けていくうちに、いつの間にか鳥のさえずりや木々のざわめき、風のささやきも意識からなくなり、何も考えず、何も感じず、何もない私が、何もないまま足を前に踏み出しています。それを私でない私が観ることができたら、行いが風景となっている

はずです。このような、風景と一体化し風景そのものになる山歩きができれば、風景を身にまとうことを実践できたことになるのでしょう。

ところが実際はひやりとしたり、足を滑らしたり、転んだり、いつもと違うところが筋肉痛になったりと一体化するどころか風景と格闘しているのが実情です。駐車場にたどり着いたら、「ああ今日もしんどかった。早くビールが飲みたい。でも、車を運転しなければ」と家路をいそぐ。車中ではいつの間にか「次はどこに行こうか」と来週の山行きに思いを巡らす。この繰り返しです。格闘の後にまた新たな格闘を望むなんて、たとえ山が相手であろうとも自ら望むものではないような気がします。私は好戦的・被虐的な性格ではないつもりなので、だからこれは「格闘」ではなく「対話」と呼びたいと思います。自分に相手と対話するだけの心持ちも力量もなければ、本人は対話のつもりでも、はた目には相手と言い合い自分自身と格闘しているように見えるようなものです。自分が気づかないだけで、はた目からは滑稽に見えるでしょう。不謹慎かもしれませんがドナルドさんとジョンウンさんの『対話』が自分自身を自ら罵って自らと滑稽な『格闘』をしているように感じるのは私だけでしょうか？

しかし私はその格闘を繰り返すことでいつかは必ずそれが対話に変わっていくものと信じています。格闘という対話を通して相手を感じ、相手を受け入れ、相手の一部となる。言葉（ロゴス）の格闘から始まりその繰り返しの中から対話という行いが生じてくるのではないでしょうか。私のささやかな山歩きも格闘を繰り返すうちに、山道の岩や木の根や落ち葉と自分の足裏の距離が縮まり、対話が始まります。目や耳や鼻も、風や鳥や木々と対話するようになり、いつの間にか風景全体と対話をし、その対話すら意識することがなくなれば、いつのまにか風景を身にまとっている。一瞬でも風景と一体化出来たらそこがやすらぎのところです。その瞬間を少しでも味わいたいがために、また人は山歩きして風景と格闘（対話）し、そしてその繰り返しの行いがやがて風景となるのでしょう。

今回はロゴスと行いのあいだに格闘と対話を仮定してみました。この仮定が実践方法として有効かどうかは行いあるのみです。というわけで来週末また山歩きに行こうと思います。

狂言綺語七・・・無記

「無記」という言葉があります。仏教用語で「お釈迦様が哲学的な問いに対しては是か非かの答えを出さないこと」を言います。形而上学的な問いについて判断を示さず沈黙を守ることで、無用な論争の弊害をのがれ、苦しみを滅して彼岸に辿り着くための実践方法（行い）を見失わないために、ととられた立場です。言葉で表せない事柄だから無記ではなく、言葉で表すことに意味がなくかえって害となるから無記なのです。

原始佛典の中に「世界は永遠か否か、有限か否か、生命と身体は同一か否か、如来は死後存在するか否か」という質問について、お釈迦様は何も語らなかった（無記）と記されています。質問者が「答えられないのであればわたくしはあなたについて修行を続けることができません」と言うと、お釈迦様は「毒矢に射られ苦しむ人を前にして、医者が患者の身分、階級、弓の種類、矢の種類などについて答えを得られない間は治療しないとしたら、その人は死んでしまうだろう。　世界が永遠であろうと、有限であろうと、

生命と身体が同一であろうとなかろうと、死後存在しようとしまいと、人は生老病死からは逃れられず、悲しみ・嘆き・苦しみ・憂い、悩むのです。」そして「私は現実の生活の中で生きる苦しみ（毒矢）から逃れるための実践方法（毒矢の手当て）についてだけ説くのです」と語ります。とても率直で、現実的な態度ですね。

それから二千年以上の間、人類は何と無駄なおしゃべりを続けてきたのでしょうか？分からないことは分からない、役に立たないことは役に立たないと語る智慧を、私たちは二千年以上前の過去に置き去りにしてきて、分からないことをさも分かったように、役に立たないことをさも役に立つかのように語ってきてしまったようです。お釈迦様の教えは「苦しみを滅して彼岸に辿り着くための実践（修行）方法」だけです。この目的を見失うまいとするのが「無記」の立場であり、お釈迦様は自らが生きた時代の現実の中で、毒矢の手当て方法を処方されたのです。心の病（苦）を癒す処方箋を当時の社会環境に合わせて衆生に与えてくださったお医者様です。

「行い」の邪魔になるものは無記であるとの教えはまさしく「はじめに行いありき」の教えそのものです。毒矢に刺さった理由や属性をどんなに明らかにしようとしても、答えが出る前に死んでしまっては元も子もありません。唯一無二の目的は毒矢を抜いてその苦しみを和らげ、死なないようにすることであり、目的以外の行為は無駄であるばかりか、本来の目的を妨害するものです。答えがすべて与えられてからでないと「行い」に踏み込めないとしたら、その人はいつまでたっても無駄話と妨害を自らにし続けることになるでしょう。だから黙ることです。「無記」と。そして「行い」に踏み出すべきです。「行い」をし続けることでしか安らぎのところに辿り着く方法はないというお釈迦様の教えを信じることです。

とは言ってみたものの、私たちは具体的には何を「信」じて、何を「行」えばよいのでしょうか？私は二千年以上も無駄話に明け暮れた末に今語られている「仏のおしえ」と言われるものを、そのまま素直に信じることはできません。この長い年月の中では、途中立ち止まってお釈迦様の言葉（法）を直接聞こうと必死の「行い」をした祖師の方々、たとえば日蓮聖人や親鸞聖人や道元禅師を知っています。そこではその社会のなかでやすらぎのところにたどり着くための切実・必死の「行い」が実践されていました。「題目」を唱え「念仏」を唱え「只管打坐」に打ち込むことです。ところが彼らが亡くなり、信者が増え教団ができるとまた無駄話が始まってしまいました。

社会の中で生きている限り「行い」はその社会環境の中でしか「行い」得ないものです。変らないのは「行い」の目的だけです。私は今この時代に自分に最適で可能なそして心地よい「行い」を実践していきたいと思っています。その「行い」がなんであるかの答えは人それぞれですし、これを「行い」すれば必ず速やかに「やすらぎのところ」に辿り着けるなどという保証ももとよりありません。「行い」は自分にふさわしい方法を自ら選びとるべきで、人から指示されるものでも、与えられるものでもないでしょう。私は「行い」を続けることそのものが「やすらぎのところ」であり、その永続こそが「やすらぎ」であると信じています。ですから「何を信じ、何を行えばよいでしょうか？」と人から問われ、また自問したとしても「無記」としか答えられないでしょう。

今回は最後に「無記」という言葉で締めくくったため、煙に巻かれたような印象を持たれるかもしれません。「分かったことは分かったままに」「分からないことは分からないままに」書き続けられればと思っています。

狂言綺語八・・・雨から雨の言葉へ

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり…芭蕉

すでに初時雨の時期は過ぎてしまい、今は「氷雨」「寒雨」「冬雨」「凍雨」の時節となりました。冬の日の雨は、蓑ならぬダウンを着込んで出かけるのもいいのですが、ただひたすらアナグマのように家に籠るのも悪くはありません。コリーナの山に住む狸も狐ももう冬ごもりをしているはずですね。

時雨は冬の初めに降ったと思ったら晴れ、また降り出し、また晴れるというように短い間に目まぐるしく変わる通り雨のこと。詩人の高橋順子はエッセイ集「雨の名前」（小学館）で四二二語の雨の言葉をあげていますが、そのうち時雨だけでも「朝時雨」「磯時雨」「片時雨」「北時雨」「山茶花時雨」「小夜時雨」「雪時雨」など全部で二十語があげられているのです。この晩秋から初冬の短いあいだに降る通り雨は、季節の移ろいを、強く私たちに印象づけてきたからなのでしょう。

紅葉した木々はこの時雨のたびにその葉を一枚一枚散らされて、冬の準備を整えていきます。そして春から夏を過ぎ晩秋まで色彩を変化させてきた自然は、だんだんに色を消していくのです。古人は自然が色を消していく時の移ろいのなかに、滅びゆくものの美、無常のはかなさを観てきました。特に晩秋から冬にかけては、春の再生に向けていったん生命を終える過程を、自然はそこかしこで見せてくれます。この四季のいのちの巡りの中に、風景の一員であるひとは、また〝常なきもの〟の一員であることを強く意識せざるを得なかったのでしょう。そしてひとは無常の存在であることを受け入れ、この無常の風景と一体になって観たものを、詩歌や物語や歌謡に表してきたのです。

冬のコリーナでは、低気圧が近づくと明日は雨になるか雪になるかとやきもきします。この冬、コリーナにはどんな雪が降るでしょうか?新沼謙治の唄で確か、〝粉雪、粒雪、綿雪、ざらめ雪、みず雪、かた雪、氷雪、津軽には七つの雪が降る〟という唄があったと思います。コリーナにも十二月から四月初めにかけていくつもの雪が降ります。今期の初雪は十二月十四日。池の氷の上に早朝うっすらと雪が積もっていました。十二月十四日のこの雪を私は「たかはらふっかけ雪」と名づけました。

雨といい雪といい人はなぜこんなにも自分の観たものに言葉を与えたがるのでしょうか?雲や風や水や月や花など風景にかかわる言葉は、この国の中にあふれんばかりです。その豊饒な言葉の数々はその言葉を記し発する人たちの心の豊饒さの証しではないでしょうか。自然を対象化し乗り越えるべきものとして対峙してきた西洋の文化に対し、私たちの文化は自然のなかのひとりとして自然に生かされていることに感謝し畏怖してきた文化なのです。だから雨や雪などの自然は単なる雨や雪ではなく、その人がその中で観た心の風景が「雨」や「雪」として立ち現れてきたものなのです。本来言葉は伝達手段であったはずですから、雨は雨と言えば済むのであり、それが一番確実に伝わる方法なのです。なのに、自分が観た「雨」を自分の観たままの「雨」の言葉にせずにはいられなかったこと、それが古来より日本人の中にある言葉を記すことの「行い」だったように思われます。それはその雨を観てその雨の風景とひとつになり、風景とともに刻々と変わりゆき、一つとして同じものがない「行い」です。自分の観たその「雨」を言葉に記すことは、自分だけの、その風景との一度限りの対話だと思います。だから「雨」の言葉もその人が観た「雨」

の数だけあるのです。

言葉は「観る」ことからしか生まれないのではないでしょうか。自分の観たそのことを自分のものとして感得し、言葉にし、さらに詩歌や物語や歌謡へと表してきたことが、日本人の言葉の歴史だと思います。それは誰かに読ませたいとか、誰かに共感してほしいということではなく、風景と対話し風景と一体化するための「行い」だったのでしょう。「言葉」は実は人同士のコミュニケーション手段ではなく、自分のいのちのありかを観るための方法だったのです。もし聞いてもらう対象があるとすればそれは「かみ」や「ほとけ」や「たま」と呼ばれるものだったのではないでしょうか。つまりそれは自分の力の及ばない他の何者かと感応道交し一体となるための「行い」。だから「言葉」は「行い」そのものであり「言葉」は「行い」からでしか生まれないものなのです。

雨や雪は日常の中にあります。その日常が「雨」や「雪」の「言葉」となり「行い」となるとすると私たちの生活である「日常」は風景という「無常」の積み重ねの上にあるということになります。

私たちの一見代わり映えしないように見える毎日も、その毎日がかけがえのない無常の流れの積み重ねにあると考えれば、毎日の生活をあだやおろそかには決してできません。観たままをありのままに「言葉」にする「行い」は、この「狂言綺語」の原点です。日常の観たことを「分かったことは分かったままに」「分からないことは分からないままに」また書き続けます。

狂言綺語九・・・中心について

二〇一八年、新年明けましておめでとうございます。

元旦は三六五日で太陽のまわりを回る地球が、また新年という出発点に立って三六五日を新たにやり直す日です。二四時間の一日を毎日三六五回繰り返してやっと一年たったと思ったら、また繰り返しの出発点に戻って来てしまったと思うか、その繰り返しのように見える日常は、らせん状に上昇して昨日と違った二四時間、昨年と違った三六五日が始まる日と考えるか、天と地との差であることは言うまでもありません。地球は自らの地軸を中心にして二四時間を一回転し、太陽を中心として一年を廻っています。それでは私たちは何を「中心」に一日を繰り返し一年を繰り返し、一生を繰り返しているのでしょうか?

「自灯明、法灯明」という仏教用語があります。弟子たちがお釈迦様の死を間近にして「お釈迦様が亡くなられたあとは私たちは何を頼りに生きていけば良いのでしょうか?」と心配していると、お釈迦様は「自らを灯明とし、自らを頼りとし、他のものに依存しないで生きなさい。法（真理）を灯明とし、法を頼りとし、他のものに依存しないで生きなさい。」と言われたと伝えられています。「他人の権威に寄りかからず、自分で考え自分で何が正しいかを見定め、自分の判断で行動しなさい。その判断基準は『法（真理）』つまり物事のありのままの姿をありのままに捉えることです。」と言われているのです。「灯明」とは真実を照らす大いなる明かりであり、それは他から与えられる明かりではなく自らが自らを照らす明かりとなりなさいと教えているのです。この教えは一見分かりやすくなるほどと思えますが、これは仏教の根本に関わるとても重要な教えではないかと私は考えます。

原始、人類は太陽を中心とし、頼りとし、神とし、生きてきました。太陽は人類共通の信仰と崇拝の対象

であり「中心」であり「大いなる灯明」であり「真実」であり「神」であったのです。原始的な信仰形態は人間社会の形成と複雑化の過程の中で、それぞれの民族、自然、社会形態に合った宗教を生み出してきました。信仰対象は「太陽」から「唯一神」、「超越者」、「ヤハウェ」、「ロゴス」、「聖書」、「アッラーフ」、「コーラン」、「久遠実成の釈迦牟尼仏」、「法華経」など言葉や対象を変え人々のあいだで分化してきましたが、その対象は「信仰」を必要としているひとたちのそれぞれの「中心」であることには変わりはないのです。

学問的な検証も哲学的な思惟も経ない結論で反論も多いかと思いますが、私は信仰の本質は崇拝すべき「中心」を持つことだと考えます。「中心」は「柱」や「核」と言い換えても良いかもしれません。それは私たちが揺るぎないもの、変らないものとして、頼り、寄りかかり、信じ、預け、投げ出すことのできる、確固たる「中心」です。私たちの日常はその中心に向かって同心円状に生活し、その中心との距離を縮めていき、その中心といつかは必ず一体化できることを信じて生活しているのです。それが信仰を生きることの本質ではないでしょうか?私にとって「中心と一体化する」ことは「やすらぎのところにたどりつく」ことです。信仰対象つまり中心をどこに置くかによってそれは天国であったり西方浄土であったり救いの日であったりするのでしょう。

「自灯明、法灯明」に戻ります。今までの話の流れからすると「灯明」は「中心」です。とすればお釈迦様は「自らが中心になりなさい」と言っているように私には聞こえるのです。これは大変なことです。信仰は信ずることであり何かに頼ることであると思っていたら、お釈迦様は他のものに頼るな、自らを頼りとせよと言っているのです。せっかくお釈迦様に頼ろうと思っていたのに、私が死んだら「法」と「自ら」以外に頼るなと言っているのです。しかもその「法」は自らがありのままの姿をありのままにとらえることによって捕まえるものだと言っているのです。さて自らが中心となる、という大それたことを考えることも行うこともできないと思っているから、信仰があると思っていたのに、何か突き放されたような気持ちにもなりますね。どうしたものでしょう。

私はこのようなときはシンプルに考えるようにしています。お釈迦様の言葉を素直に聞くことです。私たちの自らの灯明は吹けば消えてしまうような、はかない心許ない灯明かもしれません。でもその灯明を常に消さずにともし続け、その灯明の指し示すところが中心であると信じて「行い」を続ければ、必ず「中心」にたどり着くことができると信じるのです。ときには消えてしまったと見えるかもしれません。他人の示す灯明の方が明るく魅力的に見えることがあるかもしれません。それでも今、自らが照らし出す灯明の場所が、今の自分自身の中心であると信じて、二四時間・三六五日の日常を過ごすこと、自分がどこに立っていようと、今自分が立っている場所が、今の中心だと信じること。私はこれを今年の「行い」の灯明として、当たり前の日々を、当たり前に過ごしていきたいと思います。

本年もよろしくお願いいたします。

狂言綺語十・・見ること見られること

琉游舎の窓から高原山の頂が見えます。晩秋まではコリーナの自然に囲まれて全く見えなかった頂が、冬になってすっかり葉っぱを落とした木々の枝の間から雪をうっすら被った姿を見せてくれます。ポコンポ

コンポコンと三つの頂の真ん中が鶏頂山。高原山が望めるどこから見ても鶏の頭に見えてどこかユーモラスなたたずまい。右側のとんがった頂が高原で一番高い標高一七九五メートルの釈迦ヶ岳。いずれも信仰の山です。鶏頂山山頂には鶏頂山神社が祀られ、釈迦ヶ岳山頂には祠と私の背丈より高い釈迦如来像が安置されています。

関東平野北端のこの地から、晴れた日には西から日光の男体山女峰山、北に向かって高原山から那須の茶臼岳、東方に目をやると八溝山、南に目を転じると筑波山と北関東の信仰の山々が、その姿でそれとすぐわかるたたずまいを見せてくれています。古来からこの土地の人はこの山々を見て、日和見をし、自然の恵みと農作物の豊作を願い、また自然を恐れ感謝してきたのでしょう。そしてこの山々が人々の姿をちゃんと見てくれたことの感謝のしるしとして、その山々の頂上には神社やお寺が創建され祀られているのでしょう。この一年余りの間に私は鶏頂山と釈迦ヶ岳の頂上に三回行きました。山頂の足元からすとんとおちた爆裂火口の先に、関東平野が一気に広がっていきます。コリーナは塩谷から大槻、喜連川へと続く山裾から丘陵地帯への連なりの中にあり、その南側を流れる荒川の南岸からはただひたすら平らで広大な関東平野が望めるのです。私は頂上から必ず、雄大な景色の中をピンポイントで「あの山のあそこが琉游舎」と見ます。私が毎朝琉游舎の窓から高原山の頂を見て、あの頂のあの場所に立つ自分自身を見るように。

私たちは日々の生活の中で何を見ているのでしょうか。ひょっとしたら見ているつもりになっているだけで、何も見てはいないのではないかという恐れが常に私に襲いかかります。この地で信仰生活に入り一年、誤解を恐れずに言うならば、今までの生活の中では見えていなかったものが見えて来るようになりました。それは目の前に存在していたのに、見ようとしなかったことであったり、視点を変えることで違う見え方が現れたと言うことに過ぎないかもしれません。まただからといって今まで見てきたものが誤った見方だったとも思いません。よりいっそう鮮明に見え、また見えるものが増えて、生活と心が裕福になった気がするのです。そしてかつてより気持ちが穏やかになっていることを感じるのです。どうしてそうなったか、一つ言えるとしたら、「自ら計らない、自ら分けない」と言うことを心がけているからだという気がします。見たいものだけを見て、見たくないものに目をつぶれば、あるがままに観ることにはどうやってもたどり着くことはできないでしょうから。

ところが世の中見たくないもの、目を覆いたくなるものばかりです。そして目に入ったら心が乱されてくる、何か言いたくなる、怒りたくなる、その繰り返しが日常だと言ってもいいでしょう。そこで提案です。「見る」ことは「見られる」ことだと考えてみればどうでしょう。するとこの心の乱れも相手からも見られてもいるんだなとなり、それは相手を鏡として自分の心の乱れが相手に投影されているのを見ることになると思うのです。そうすると心が乱れたこともばからしくなりますね。鏡に向かって小鳥が一生懸命自分の姿をくちばしでつついて攻撃しているようなものなのですから。

「見る」ことは「見られる」ことであり、そして「観る」ことはまた「観られる」ことでもあるのです。何を根拠にこのことがいえるかと問われても、「信」のことは「理」で論証のしようがありません。私が毎朝琉游舎の窓から高原山の頂を見るとき、その頂から自分自身が見られていることを強く感じます。山から促されてそこに心と体が向き合うとき、山を見ていると言う感覚が起こるのです。山から見なさいと促されること、つまり山から見られていることを感じてはじめて山を「見る」ことができるのだと思います。

これは山に何か神聖なもの、根源的な力を感じるからではなく、私たちにとって山は山をあるがままの山として見ることが比較的簡単にできる対象だからなのです。対象が人であれ、自然であれ、また行為であれ、それを「あるがままに見る」ことができたとき、その対象はあるがままに私たちに語りかけ、あるがままの姿を顕わし、あるがままの私たちを見てくれるのではないでしょうか。それが「見る」ことの本質のような気がします。「見ることは見られること」それは対象と「信」で一つになり心が自由に安らかになること。そして「見る」と言う行為が「観る」という「行い」になること。「観る」という「行い」は「観られる」ことによってはじめて成立すること。なのです。

コリーナは山の中にあるため、上に記した北関東の信仰の山々を一望できません。一望できる私のお気に入りの場所は氏家から北に向かう大宮街道の途中にあります。冬の晴天の日ばかりでなく雨の日も曇りの日も、そこで私は山々に思う存分見られる存在になりたいと思います。

狂言綺語十一・・・地獄極楽

今回は地獄と極楽についての話です。私は教訓めいた話は苦手ですし、好きでもありません。教訓は他人から与えられる倫理観だと思っていますので、もうその時点でありのままに観ることができなくなってしまいます。また地獄や極楽などの死んだ後の他界についても全く興味がありません。お釈迦様が言われたようにこの件は私も注1無記です。僧侶なのに人の疑問や悩みに答えないで「無記」などという無責任なことがよく言えるなと、自分でも思います。しかし思ってもいないことをさもあるかのように話して人をたぶらかしたり、「こんなことしたら地獄に落ちるぞ」と恐喝するよりはまだ無責任の方がましかなと思っています。

法話などでよく話される「地獄と極楽の箸」という教訓話があります。元の話はどうやら出雲の民話らしいのですが、こんな話です。“ある人がのぞき見た地獄の食事風景。地獄の住人のテーブルには大層なご馳走と長さ一メートルほどの箸が並んでいます。地獄の人たちは、その長いお箸を使って、食べ物を自分の口に運ぼうとしますが、長すぎて食べることができません。必死になって口までもってこようとするのですが、一口も食べられずに苦しんでいます。そして食事の時間が終わってしまい誰一人食事をとることができませんでした。次に極楽をのぞいてみると、ここも同じようにテーブルには大層なご馳走と長さ一メートルほどの箸が並んでいます。ただここでは自分で食べようとせずに、向かいの相手に食べさせてあげるのです。食べさせてもらった人は、お返しに相手の口に食べ物を運んであげています。互いに食べさせあうことで、幸せで楽しい食事の時間となっていました”とさ。

この教訓話は分かり易いですね。「自分のことだけ考えて行動すればそこは地獄」「他人のことを思いやって行動すればそこは極楽」しかし私は教訓話は苦手で嫌いですと言った手前、ここで「地獄も極楽もあなたの心の働き次第です。だから人の為に行動すればそこはもう極楽なのです」というような道徳先生になるつもりはありません。「人の為に行動する」という言葉にはどうしても自己満足と偽善の臭いを感じずにはいられないのです。広辞苑には『為にする:ある目的を達しようとする下心があって事をおこなうのにいう。』とあり、詩人の吉野弘は『人の為とは偽りさ』注2と詩に書いています。

私は地獄の住人は何故、箸を使うことにこだわり、手づかみで食べることをしなかったのだろうかといつい不道徳なことを考えてしまいます。箸で食べることが規則だからと言われても、そもそも地獄の住人は規則を守らず悪いことをしたから地獄に住んでいるのです。もちろんこんなことを言ったらこの教訓話は成り立たないのは承知の上でのいちゃもんなのですが・・・。現実世界では地獄と極楽が別々にあるのではなく、ある人にとっては極楽であり、ある人にとっては地獄なのです。極楽の住人になりたかったら時には地獄の振舞いをしなければいけないでしょう。みんなが長い箸で食べることにこだわっている中で、一人だけ手づかみで食べたり、箸を半分に折る工夫をしたり、あるいは相手に先に食べさせてもらって、後は知らんふりというような行動をした人がどうやら自分なりの極楽を勝ち取っているようです。正直者や真面目で不器用な人間、人の言うことを信じてしまう人にとってはこの世界はどちらかと言うと地獄で、地獄の振舞いができる人には極楽と言う、とてつもないパラドックスが起こってしまうのです。もちろんお釈迦様の教えは、地獄の振舞いで得た仮の極楽は本当の安らぎのところではなく、いつでもそれは地獄に変わるものだと言っているのは承知の上でのいちゃもんです。

さて、立派な法話がなにやら正直者は馬鹿を見るような話にも見えてきてしまいました。自分なりの極楽を得ようと思っている人間にはこの教訓はとても都合の良い話になり、みんなと一緒に同じ極楽を得ようとしている人にはとても残念な話にすり替わることができるのです。私が物を斜めからや横から見たがる性格だと言われればそれまでですが、視点をずらすこと、見方を変えることで、「ありのままに観た」とわたくしが言っていることが、本当に「ありのままの姿」であり「安らぎのところに」辿り着くための「行い」になっているかどうかの確認をしているのだとも言えるのです。

仏教の教えはとても危険な教えです。ある社会的立場をもってその教えを説くとき、それは簡単に権力となります。日常生活（娑婆世界）の中に地獄も極楽もあるという教えは、教える側（僧侶や先生）や指示する側（権力）からみるととても都合の良い教えであり、それを無批判に受け入れた教えられる側は、地獄と極楽を人質にして行動をコントロールされてしまう危険が大きいのです。お釈迦様の教えは教えられるものではなく、自らの「行い」によって感得していくものだと信じています。もし私に何か出来ることがあるとすれば、それは教えたり与えたりすることではなく、一緒に歩くことです。一緒に歩くことは、一緒に「行う」ことです。「地獄や極楽はあるの?」という疑問も、ひょっとしたら一緒に歩いていくことで、何か観えてくるものがあるかもしれません。

注1：「無記」詳しくは狂言綺語Ⅲをご覧ください

注2：人偏に為で「偽」という文字になる

狂言綺語十二・・・願い誓い行う

節分を過ぎたら夜明けが急に早くなってきました。まだ吹く風は冷たいのですが、日ざしが少し柔らかくなってきたような気がします。鳥の鳴き声が心なしか華やぎ、草木の小さな芽吹きが少しずつ風景を色づかせているようです。ずっとこのまま冬の方が良いなどという人はいないと思いますが、私たちが春を作り出しているわけでもないのに春は間違いなくやって来ます。私たちには春を作る力はありませんが、

春を願う気持ちはあるからなのでしょう。

「不求自得」という言葉があります。この言葉が語られる仏教の文脈は「求めずして 自ずから得られる利益（りやく）」と言うことです。「利益」はいろいろな解釈ができます。たとえば仏さまの真実の教えだったり、信心によって得られる不思議な奇跡体験であったり、それこそ宝くじに大当たりするような現世利益だったり。これと全く正反対のような言葉に「求不得苦」があります。これは四苦八苦の一つで「求めているものが得られないことから生じる苦しみ」を言います。求めないことで手に入るものがあるかと思えば、求めれば手に入らず逆にそれが苦しみとなると言われ、こんがらがってしまいます。私たちは「求めるべきなのか？」「求めざるべきなのか？」

「求めよ、さらば与えられん」有名な聖書の言葉ですね。この教えは私には「神に祈り求めなさい。そうすれば神は正しい信仰を与えてくださるだろう、そして物事の成就は祈り求める正しい信仰によってかなえられるだろう」という教えに聞こえます。ところが「不求自得」は「求めるな、さらば与えられん」というように私には聞こえてしまうのです。本来ならこの言葉が説かれた文脈に沿って解釈すべきなので少しだけ原典を引きます。法華経信解品に「無上宝聚不求自得」という一節があります。「無上宝聚」は仏さまの真の教えのことです。「この上もない真の教えは求めるのではなく、自ずから得られるものである」と説かれているのです。さあ分からなくなってきました。なにもしないこと、計らないことによって仏さまの真実の教えを得られるとしたら、人には努力とか希望とか頑張るとか言う言葉は必要なくなってきてしまいます。その点キリスト教の世界はとても分かり易いですね。「求めたら与える」と言うことは「求めないとあげない」と言うことです。そこには絶対者は求めるものには等しく与えるが、その等しくは祈り求める側にも等しく求められているものがあるようです。裏返すとそこには努力と信仰の強さが要求されているのです。絶対者への帰依を前提とし、理性と論理によって自己と他者を厳しく峻別する二元論の考え方です。現在の世の中を形作っている西洋的合理主義、資本主義の土台となる世界観です。

キリスト教で言う「求める」は絶対者と人が向き合って「求める⇔与える」という相互の関係性の中で語られる言葉のようです。ところが仏教で言う「求める」は仏さまと人が向きあっているのではなく、仏さまも人も同じ方向を向いて求めているような気がするのです。その同じ方向を向いている先にあるものは悟りの世界であり、やすらぎのところなのです。仏さまは私たちの導師です。やすらぎのところへ導いてくださる船長さんです。天上のどこかにいて「私を求めなさい。さらば私はあなたにそれを与えよう」と言う絶対者ではなく、私たちの傍らにいて一緒になって歩き見守ってくれる同行者の隊長です。仏さまの照らす真理の光（法灯明）注1と、自らの信心の強さが照らす足下の光（自灯明）注2を頼りに歩む私たちの「行い」を、ときには一歩先に立って頑張れと叱咤激励をし、あるいは後ろからへこたれるなと背中を押し、あるいは傍らにいて教えを楽しく語らい授けながら、私たちの歩みに寄り添いサポートしてくれる慈悲深い両親なのです。

「不求」は自分の計らいによる何かを求めないと言うこと。自分の考える悟りやもののありのままの姿は果たして仏さまの考える悟りでありありのままの姿であるかどうか、これは仏さまだけが知っていることです。だから私たちは自分が計らったものを求めてはいけないのです。それは間違ったものを求めているからであり、真理ではないものを求めても、もとより与えられるはずもなく、その結果求めたものが得られないことに苦しんでしまうのです。これが「求不得苦」。逆に正しい教えは仏さまとともに「行い」歩

んでいけば求めずとも自ずから得ることができます。これが「不求自得」。

「不求」はあくまでも我見によって何かを求めるなと言うことです。「衆生無辺誓願度」という四弘誓願の一節をきいたことがあると思います。これはすべての人を悟らせようという仏さまの誓いです。仏さまの誓いは私たちの願いそのものです。私たちが求めるべきことは欲求でなく「願い」です。他の求めは我欲による欲望です。だからそれは求めても与えられるわけもなく苦しみだけが残るだけなのです。「願う」ことは「誓う」こと「誓う」ことは「行う」こと。私たちが「願う」ことによって与えられるものは日々のかけがえのない日常の「行い」なのでしょう。

注1、2：「法灯明」「自灯明」は狂言綺語Ⅸを」覧ください

狂言綺語十三・・・自然（じねん）

一月に降った雪が北側の斜面ではずっと融けずに残ってもう一ヶ月になります。ところが二月の下旬に降った雪は春雪。一日であっという間に融けてしまいました。そのようなわけで今もコリーナの所々に見られる雪は一月の冬雪です。自然が毎年そっくりそのままコピーされるわけではないにしても、これも毎年繰り返される同じような自然の時の流れの一コマなのでしょう。

山や海などの環境やひと以外の生きものなど、人為が加えられていないものを私たちは「自然」と呼びます。「自然」は「しぜん」と読みます。何をいまさらと思われるかもしれませんが、実は明治以前は「自然」を「しぜん（漢音）」ではなく「じねん（呉音）」と呼ぶ呼び方が優勢だったようなのです。古代の日本人は山や海などの自然の姿に神を観てきました。平安貴族は山川草木の自然の移ろいに無常を観てきました。明治以前の日本人が持っていたのはこのような精神的な自然観だけで、明治時代に輸入された客観的.自然科学的な自然観＝「nature」はなかったのではないかと考えます。「nature」の訳語として探し出されそこに科学的な自然観を背負わされたものが、現在私たちが日常的に使用している「自然」という言葉なのではないでしょうか。

そこで今回は「nature」の訳語としての「自然」ではなく明治以前の「自然（じねん）」について少し考えてみます。日本に仏教が渡来したときお経はすべて漢音ではなく呉音で唱えられました。ですから中国からの輸入語である「自然」も呉音の「じねん」と読まれました。これを読み下すと「自ずから然る（おのずからしかる）」です。これは、おのずからそのままそうであること、あるがままのすがたということです。人為が加えられていないありのままのすがた、それはお釈迦様の言われる、物事をありのままに観ることによって感得できるそのものの真実のすがたであることを意味しています。仏教用語で言えば「実相」です。日本人にとって本来「自然」という言葉は、山川草木という自然環境も含めた宇宙のありように対してのとらえ方を表すとても精神的思惟的な言葉なのです。

法華経嘱累品第二十二の中に「能与衆生　佛之智慧　如来智慧　自然智慧」という一説があります。佛の智慧は実相を見通す真実の智慧。如来の智慧は衆生を救う大慈悲の智慧。自然の智慧は自ら心の中に生じた信仰の智慧。この三つの智慧を仏様は私たちに授けてくださると述べられているのです。どのような宗教であろうともその根本にあるものは「信」です。そして「信」を全うするためには「智慧」が必要です。「信」という宗教の心臓を動かし続けるために必要なエネルギーが「智慧」であると言ってもいいでしょう。その「信仰の智慧」は「自然の智慧」であると説かれています。誰からか与えられるわけでもなく強制されるわけでもなく、計らいを捨てて、あるがままに身を置

くことによって、自ずから然らしむ自然の智慧です。ところで「信」は自然に得られるものであるなら、信ずる誰かにひたすらすがってお祈りすればいいと考えることもできます。仏さまはそこに智慧が必要だと言われているのですが、でもその智慧も自ら計って得られるものではなく、自然の智慧だと言われています。だったらやっぱり何もしないでいいのではないか、自分たちを導いてくれる誰かにおすがりすればいいのではないかとなってしまいがちです。でもそれは果たして「信」でしょうか。

私は「信」とは「願い、誓い、行う」ことだと考えます。「自然」はもののありのままのすがたです。私たちがそのすがたをありのままに観ることを「願い」、ありのままに観ることを「誓い」、ありのままに観ることを「行う」ことそのものが「自然」なのです。「信ずれば自然にあなたには与えられるものがあります」と言うような文言はもうすでに「自然」ではありません。それは与えられる「こと」や「もの」のために信じているのであり、仏さまの「教え」を「願い、誓い、行う」ことつまり「信」とは似て非なるものです。明治以前まで「自然」という概念は肯定的、否定的両方の評価があったようです。大雑把な要約ですが「自然＝何もしなくていい」となれば否定的、「自然＝教えへの信」となれば肯定的、と言うことでしょうか。「教えへの信」がない「自然」はもう「自然」とは言えないのです。

私たちの慣れ親しんだ自然（しぜん）という言葉は環境と言い換えてもいいでしょう。自然（じねん）はその環境をも包括した宇宙のありようそのものを表す言葉です。日本古来の主体的で精神的な「自然観（じねんかん）」をもってもののありようを観ることができれば、環境や社会そして日々の私たちの生活すべてが「ありのままのすがた」＝「自然」として立ち現れてくると私は信じます。

山芋のことを自然薯（じねんじょ）と言います。あるがままに山の土の中に生えて、一つとして同じ形のない作物。私は今ここにあることが「自然」であると観ることで日々を過ごし、ここ琉游舎のこの場所が「自然処（じねんじょ）」と呼ばれる処でありたいと考えています。

狂言綺語十四・・・変化（へんげ）の人

ついこの間まで青く刺すように澄んでいた空気に、ここのところ、一枚フィルターをかぶせたような靄（もや）がかかりはじめてきました。杉の花粉でしょうか、ベランダの手すりがうっすら黄色くなっています。ああまた花粉の季節が来てしまったという人もあれば、芽吹きの春がやって来たと言う人もいる季節の変わり目です。入学や就職や転勤と春は多くの人にとって社会的な変化の季節でもあります。変わり目は私たちにとって未知の世界へと踏み込む希望と不安の交差する場です。四季の変化を含めて私たちの生活はことあるごとにこの変わり目の場に立たされて、その後の変化の相に心と体を順応させながら生きてきたのだと思います。いやひょっとしたらその変化する相を生活の中に積極的に取り入れて変化のサイクルと共存しながら生活してきたのかもしれません。

「則遣変化人　為之作衛護」これは法華経法師品第十の中の一節です。前の部分を追加して要約すると「もし法華経を信じる人を武器を持って害する者があれば、私（仏）は変化の人を遣わしてその人を護衛するであろう」となります。ここでいう「変化（へんげ）の人」とは、仏の神通力によって作り出された人間の姿をした仏の化身です。このインド仏教の考え方が日本に入ってくると独自の展開を見せていきました。「変化の人」は「権化」とか「権現」とも言われました。特に本地垂迹説においては仏が衆生を救うために日本の神の姿となって現れたと考えられ、日本古来の神様は仏の「変化人」「権化」として位置づけられた時代が明治維新まで続いたのです。これだけの説明で結論

めいたことを言うのは早急なのですが、日本人は「変化」という現象を生活のサイクルの中に上手に取り入れて、その変化にうまく合わせながら生きることが得意な人達だったのではと私は考えます。

当初「変化の人」は仏の化身の意味だけに使われていたようですが、その後、転じて化け物や妖怪にも使われるようになりました。「其の女は変化の者などにて有りけるにや（今昔物語）」「もし、狐などのへんげにや（源氏物語）」など多くの例があります。どうやら日本人は合理的に解決できない不思議な現象を何か形のあるものやイメージできるものに変化させて、それを恐れたり敬ったりしてきたようなのです。河童は泳いでいる人を水中に引き込みおぼれさせる妖怪として恐れられる一方、水の神様としても祀られています。このように妖怪を神様に変化させることも、時には功徳がないという理由で守護する立場から害をなす立場に変化させることもしてきました。最初は怨霊として恐れられていた菅原道真が、北野天満宮に祀られて今のように篤い信仰の対象となった変化の流れを見ていくと、「自然災害や恨みをもって死んだ人間は怨霊となり人にたたる。その怨霊を鎮めるために神社を建て祀って、逆に私たちを守護する神へと変化させていった。」という、日本人の神や仏に対する変化のさせ方の典型を観ることができるでしょう。

自分の力の及ばないものに対して、それに立ち向かって征服するのではなく、その現象を観念の中で変化させて自分たちの生活の中に取り込んでいくことに長けていた人達、それが私たちの祖先なのです。戦前の守護神であった絶対主義的天皇制が、戦後、悪魔であったアメリカが与えた民主主義に、守護神の座を平和的かつ友好的に譲った変化をもって、変わり身が早いとか、節操がないと言う非難は間違っています。日本人は神・仏・霊・怨霊・妖怪や自然、そして社会体制すらも変化の中に取り込んでその変化のサイクルの中で自由自在に往来させる知恵を持った人達であるとみるべきなのです。

キリスト教的世界観では「神」が「魔」に、あるいは「魔」が「神」に変化することは絶対にあり得ないでしょう。神と魔は対立概念であり、人は対立の中間に立って神や魔と対峙して生きていかなければならない存在です。ところが日本では「神」と「魔」の往来は自由自在なのです。魔を神に変えることも神を魔に変えることも、そこに関わった人達の自らの心と社会の有り様のままに変化させてきたのでしょう。神・仏・怨霊・妖怪をひっくるめた存在をもし霊という言葉でくくれるとしたら、私たちの霊は常に私たちとともに共存し見守ってくれる存在なのです。人がたまさかその霊に対する尊敬を欠いたり、霊の意に沿わない行動をしたとき、私たちはお仕置きをされるのです。現実社会で共同体の長老や親が、行為の間違いを正してあるべき方向へと導いてくれる存在と同じなのです。

日本においては怨霊や妖怪までもが「変化の人」となっていることに、さぞやお釈迦さまは驚かれることだと思います。しかしこれが日本人の仏教の受容の仕方なのです。宗教だけでなく外来の思想や技術・文化も日本に受容されていく過程で「変化の人」と同じ過程をたどってきたのではないでしょか。

私も日々これ「変化の人」でありたいと思っています。今ここにあるものを、質直に心柔軟にあるがままに観ていくこと、それは常ならない日常の変化をそのままに生きていく行いそのものです。「さて今日は何に変化しようか、たまには妖怪に変化するのも悪くはないかな」などというあらぬ想念に憑かれる前に今回の筆を納めたいと思います。

狂言綺語十五・・・諦める

恐る恐る出した芽で風の穏やかさを探っていた植物や、きょろきょろと様子見をして餌のありかを探っていた鳥たち

が、春分の日を境に自信をもって存在を主張し始めたようです。人間も生き物の発散する音や色や臭いなどの生命力に圧倒されないように、自らの生のエネルギーを外に向かって発散する時がやってきました。冬の寒さにさらされるほど桜の開花が早くなること、これを休眠打破と言うようですが、今年の冬は寒さが平年よりも厳しかったようなので、すべての生き物は、冬の休眠期間中にたっぷりと蓄えたエネルギーを、一気に打破して、今この時あふれんばかりのパワーを放出しているはずです。

「青春、朱夏、白秋、玄冬」という言葉があります。人間のライフサイクルを季節の移り変わりに重ね合わせた言葉です。青春は緑の芽吹きの時、未熟だが勢いと希望に満ちあふれた青年たちです。朱夏は真っ赤に照りつける太陽の時、人生の盛り真夏の成年。白秋は天命を知り人生に深みと落ち着きが出てくる中年。玄冬は安らかな場所を定めて、心置きなく彼岸へと向かう老年。「春夏秋冬」という一年のサイクルを何度も繰り返しながら「青春、朱夏、白秋、玄冬」という一生のサイクルを全うする。これは人の生きるあり方の一断面です。季節の移り変わりのサイクルのように、私たち人間も規則的な自然の摂理に任せて一生を過ごすことができれば良いのですが、なかなかうまくはいきません。かく言う私も本来ならば白秋の時なのですが、今の自分の体力・気力・智力をあきらめることなく、毎日「青春―朱夏―白秋」の間を行ったり来たり右往左往、悪あがきをしているようです。

人はあきらめの悪い生き物です。人以外はとてもあきらめの良い生きものです。自然や社会や他者に時には抗い時には協調しながら何とか自分の生きる場所を確保していこうとするのが人間。与えられた自然や社会や他者との環境を自分の生きる場所とさとり生きていこうとするのが人以外の生きもの。「あきらめる」は「諦める」と書きます。望んでいたことの実現が不可能であることを認めて、望みを捨てる。断念する。と言うような意味合いで使われる言葉です。とてもネガティブな言葉ですね。言葉は長いあいだ使われていく過程で原意が変っていき、変わった結果がその言葉の新たな意味になってしまうことは良くあることです。言葉の変遷のその過程を忘れてしまうのです。「諦める」は「あきらかにする」「つまびらかにする」が原意です。仏教で「諦」の字は「真理」「真実」という意味です。「諦念」は「道理を悟って迷わない心」をいいます。「諦念」＝「あきらめの気持ち」は「悟りの心」と言うことです。私たちが現在使っている「あきらめの気持ち」にはどこか投げやりな夢も希望もないという心が裏に透けて見えてしまいますが、本来は、すべてをありのままに観ることによって真実をあきらかにし、心安らかになることを意味している、とてもポジティブで主体的な言葉なのです。

なぜポジティブがネガティブに変わってきたのでしょうか。この意味の変遷の思考プロセスを自分なりにたどってみます。「諦める」ことで物事の真理や道理が「明らかに」なる時、それは自分の欲望が実現できない理由が明らかになる時でもあります。そもそも欲望は執着と無知と貪りの心からおこる煩悩なのですから、「諦め」れば「諦め」るほどその欲望が達成されない理由は「明らかに」なります。そしてその欲望は仏さまの言われる真実の姿、正しい教えとは正反対のものだと納得しその欲望を断念し「あきらめる」のです。「諦め」ずに「あきらめる」だけならば悔いや恨みや愚痴だけが残り、愚かな私たち人間はまた新たな欲望を求めて、「諦め」ずに「あきらめる」ことを繰り返すのです。その繰り返しのプロセスの中で人は欲望を実現するために、努力し科学を発展させ、戦いをし、破壊してきたのです。人はあきらめの悪い生きものですから、無知と貪りと怒りという煩悩の海を何とか溺れないようにと、必死になって手足をばたばたさせ、もがき苦しんでいるのです。「諦め」ればその煩悩の海から上がって、やすらぎの岸辺で心穏やかな日々を過ごせるはずなのに。

「諦める」は「願いを自覚」すること。「あきらめる」は「願いを放棄」すること。仏さまの願いを明らかにしそれを自分自身の願いとして誓い行うことが「諦める」こと。自分の欲望がかなわないことが分かりその欲望を放棄すること

でまた新たな欲望に向かうことが「あきらめる」こと。「欲望」はどこまで行っても欲望で決して願望にはなりません。「願い」「誓い」「行う」ことにはならないのです。ただ「願望」と「欲望」の区別はなかなかつけ難いので、「あきらめる」ことは簡単にできるのに「諦める」ことは困難なのです。なぜなら「人はあきらめの悪い生き物」なのですから。

「あきらめないで」と唄った歌は数多ありますが「あきらめましょう」と唄った歌は寡聞にして聞いたことがありません。やっぱり人は「あきらめない」で前へ前へと立ち向かうことが好きな生き物なのですね。私も自分の体力・気力・知力をあきらめないで、「願望」と「欲望」の間を行ったり来たりの悪あがきの毎日を過ごして行くことが「諦念」への近道と信じて、今回の筆をおきます。

狂言綺語十六・・・善知識

桜吹雪がイメージする光景は人それぞれですね。かつては四月の入学式の光景だったものが、最近の温暖化で三月の卒業式というイメージもあるようです。「ねがはくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの もちづきのころ」西行はこの歌の通り、桜の花の下、満月のころ、無常のままに生きた生涯を終えました。坂口安吾は「桜の森の満開の下」には魔物が住むと物語りました。コリーナのサクラは三月二九日に開花したと思ったらあっという間に満開になって、年度をまたいで、花吹雪とともに慌ただしく散っていきました。桜に別れを思うのか、新たな旅立ちを思うのか、無常の象徴なのか、希望の象徴なのか。相反するものの間にあって桜は私たちの心をざわつかせる存在のようです。日本人にとって、桜吹雪は冬から春へと変わる舞台変換の緞帳の役目を果たしているようです。冬の季節の色をあっという間に満開の桜色で消し去り、その桜の花びらを派手に散らすことで、新緑の春色に塗り替えます。それは同時に季節ばかりでなく社会的環境変化の緞帳の役目も果たしているのです。私たちにとって、入学入社異動など新しい社会環境への移行に、この桜吹雪の舞台装置はなくてはならないものなのでしょう。

「善知識」という言葉があります。仏教では「善き友、真の友人」「仏教の正しい道理を教え利益をあたえて導いてくれる人」を意味します。法華経に「善知識」という語彙が頻繁に出てきますが、その意味を確認することなくただ「良い知識を持っている人」くらいの意味だとずっと思っていました。読み進めるうちにどうしても「善知識＝善き友」とはシンプルには理解しがたくて、いろいろな辞書をあたってみたところ、一般的に私たちが使っている「知識」は「智識」と表記することが多かったようで、「知識」の漢語の本来の意味は「友達」だったようなのです。だから「善知識」＝「善き友」なのです。ちなみに岩波の仏教辞典には「知識＝友人」以外の説明は載っていません。この六〇年間私は「知識」について何の知識も持たないまま知識を振りかざしてきたということが、図らずも明るみに出てしまいました。

経典によってさかしらな知識に「知識」の正しい意味を与えられたとたん、私は仏教のことが知識ではなく実感として感じられるようになりました。原始経典の中でお釈迦様はこのようなことをおっしゃっています。「善き友を持ち、善き仲間の中にあると言うことは、この道のすべてである」これはお釈迦様が弟子に対して「やすらぎのところにたどり着くための道は善知識とともにあることそのものだ」とおっしゃっているのです。弟子たちを天の高みから教え諭して、こちらに来なさいと呼んでいるのではなく、今一緒に居るこの仲間たちとともに相携えて道を歩んで行こうと言われているのです。ですからお釈迦様は弟子たちにとってはもちろん善知識なのですが、弟子たちもお釈迦様にとっての善知識であり、お釈迦様は指導者ではなく皆と平等な、お互いを善知識と認める同行者なのです。

仏教はこのような成り立ちが故に、西洋的な宗教概念は当てはまらないようです。お釈迦様が悟り、教示された「教え(法)」を信ずることただその一点で宗教として成立しているのであり、何らかの神性や救済の力がお釈迦様に付与されているわけではありません。キリスト教徒は神の恩寵を受ける身としては平等であり、そこには区別も差別もありませんが、ただ彼らの上には天にまします神があり、その神によって使わされた仲保者としてのキリストがあるのです。お釈迦様とともに歩む人たちの上には何もいません。神も仲保者もなく、教祖であるお釈迦様でさえも、同行者の一人、善知識の一人にすぎないのです。

仏教は危険な教えであると何度か書きましたが「善知識」にもそれが言えるでしょう。絶対的な神から罰を与えられることもないし、神の指示のもとに行動を規定されることもない、純然たる自由が仏教にはあるのです。「教え」を「智識」として受容すれば、解釈が生まれ、判断が生まれ、放逸無法への危険な道も開けてしまうでしょう。だから「教え」を同行者として「行い」続けることが求められるのです。ひたすらお釈迦様の「教え(法)」の明かりを信じ、自らの足で「教え」とともに「行い」続ければよいのです。ひれ伏して恩寵を願う相手も頼るべき仲保者もない中で、頼るべきはともに歩む善知識だけです。

私はこの生きている社会そのものとそれを構成する人や自然や環境すべてを善知識と考えたいと思います。今ここにあることが「行い」であるならば、その同行者は自分以外のすべてです。そして同行者は善知識そのものです。これは「善知識」これは「悪知識」といって自分のさかしらな判断で選別した瞬間、ありのままに観ることができなくなってしまうでしょう。桜吹雪の緞帳が上がって、新しい舞台へと移行するこの季節、新しい善知識と出会う時でもあります。♫一年生になったら　一年生になったら　友達百人できるかな♫　私はこの歌のように、毎日が一年生になったばっかりの気持ちで一日が始まり一日がおわり、そして一生をおえることができればいいな、などと桜吹雪を観ながら夢想しているところです。

今回は、桜吹雪が演出する季節の目まぐるしい変化に惑わされて、ちょっと感傷的になってしまったようです。桜の花の満開の下にはやはり人を惑わす魔物がいるのでしょうか?魔物は自分が作り出すもう一人の自分。この自分もありのままに観ていかなければならないですね。

狂言綺語十七・・・春の蛙

田んぼに水が入り、代掻きが始まりました。そろそろ田植えも見られるようになりますね。川から小川、小川から田んぼのあぜ道の用水へそして田んぼへと、水が勢いよく流れ始めました。いっとき水面の光の反射で大地がキラキラとまぶしいくらいに輝きます。やがて苗が植えられ、鮮やかな緑が水面にやさしく反射し揺らめきます。そうなると春の蛙の合唱も聞こえてきますね。そして稲の成長にしたがって大地は緑に覆われていきます。気が早いようですがじきに夏です。ところで最近あまり蛙の鳴き声が聞こえませんが、どうしたのでしょうか?

春の蛙で思い出しました。曹洞宗の宗祖道元の「弁道話」という著作に「声を暇なくせる、春の田の蛙の昼夜に鳴くがごとし、ついにまた益なし」と書かれています。前文から素直に読めば経や念仏や題目をただ唱えるだけでは、春の田んぼに鳴く蛙のごとくなんの役にも立たないといっているようです。悟りに至る道はただ座禅修行の中にのみあるということを述べる書の中の言葉です。念仏や題目を悟りへの道と信じている人にとってこの言葉は受け入れ難いでしょうが、逆にただ坐っているだけではそこら辺の石ころと同じで邪魔なだけだとも反論できるのです。私は悟

りへ至る道が座禅であろうが念仏であろうが題目であろうが、その議論はやすらぎのところにたどり着くためには無意味なことだと思っています。そのような宗派的形式論に執着していては、お釈迦様を善知識として伴に歩むことなどできないと思うのです。もしお釈迦様が題目を知らなかったら、題目を唱えるようにお釈迦様に強制（折伏）するのでしょうか。

仏教はお釈迦様がなくなられた後は分派活動、異端活動の繰り返しだったのです。ですから唱える経も悟りに至る方法も千差万別。異端活動を正当化するために新しいお経が編み出されていきました。そして新しいお経とともに信仰形態とその対象である本尊に正当性が与えられていったのです。キリスト教では聖書とキリスト以外を信仰の対象としたものや、正統から外れたと判断されたものは、異端としてことごとく排除されてきたのに、仏教はなんと寛容でいい加減な宗教なのでしょう！

私は経典を読み始めたとき、一つのお経の中にもつじつまが合わないことが散見され、ましてや異なるお経になると正反対の主張をしていることに違和感を覚え、同じ仏教というカテゴリーの中に正反対の教えがあることが不思議でなりませんでした。もちろん現代のわたくしたちは、今残されている経典は百年以上にも渡って、ある人が自分の考えの正当性を主張するために、以前のお経に新しい主張を書き加えてきたということを知っています。ところが明治時代になるまですべての経典はお釈迦様の金口（こんく）と信じられていました。つまりお経はお釈迦様の生涯の中ですべて語られたものであると信じて疑われなかったのです。その結果、矛盾だらけの各経典を、すべてお釈迦様一人が語った言葉として、矛盾無く見えるように整理することに仏教は多くのエネルギーを費やしてきました。つい一五〇年ほど前まで、文献批判とか文献比較という視点は全くなかったということでしょう。

中国や日本では、お経はすべて実在のお釈迦様の言葉であると固く信ぜられ、その前提の下に仏教活動のすべてがあったのです。この間違った前提で日本に移入された仏教が今ここにある私たちの知っている仏教なのです。とは言っても私は、お釈迦様の実際に語った言葉（原始仏典）に帰らなければいけないと言うつもりは全くありません。間違った前提、異端分派活動の末に今ここにある仏教は、今この時代この環境にある私達には必要だから今ここにある、と考えたいのです。春の蛙と揶揄されようが、ただの石ころと無視されようが、それを行う人たちには、お釈迦様と同行して安らぎのところに辿り着く「行い」のひとつのカタチだと思うのです。このカタチは「信」のカタチです。

春の蛙が鳴いていることはただ益のないことなのでしょうか？蛙は鳴かなければならないから鳴き、蛙なりに鳴くことが必要だから鳴いているのです。その理由は私には分かりません。恐らく蛙にも分からないかもしれません。同じように念仏や題目を唱えること、座禅を行うことも、理由を問い始めると、形式や現象の違いを強調し他を非難・排除する方向に行ってしまいます。それぞれの行いのカタチはそれぞれの「信」によって支えられたかけがえのない「行い」です。異端も分派もすべて「私の教えの中にある」とお釈迦様がおっしゃってくれてきたからこそ、今ここにある仏教の教えが今ここにある、と私は考えたいのです。

もうとうに時効だと思うのでここに書きます。小学生の頃畦道を自転車に乗っていて田圃に落っこちたことがあります。さいわい田植前だったので実害はなかったと信じたいのですがそのまま泥だらけで逃げ帰ってしまいました。農家の方ごめんなさい。ところで今気がついたのですが「蛙」と「畦」、字がそっくりですね。今年は畦道をゆっくり歩きながら、うるさくて耳を塞ぎたくなるくらいの蛙の声を楽しみたいと思います。

狂言綺語十八・・・国に俗あり

「国に俗あり。道、これがために異なり」「竺人の、幻における、漢人の、文における」この言葉は江戸時代に仏教思想発達史を独自の視点から説き起こした富永仲基の「出定後語」の中の一節です。経典はすべてお釈迦様の生涯の中で説かれた言葉であると固く信じられていた江戸時代に、彼は「経典は古い経典（教説）の上に新たな要素（教説）を加えながら（加上）その経典の優位性を示し発展してきた歴史だ」という独自の「加上説」によって、仏教の思想発達史を科学的に説明した学者です。この詳細については今回は煩雑になるのでこれ以上触れませんが、その思想発展史を語る「出定後語」の中で先の引用の文言に出会いました。この文言は、お釈迦様の教えが二五〇〇年あまりの時と、数えきれない人たちと、数多の山河を渡って、今この時、ここ琉游舎までよくぞ辿り着いたという感慨を私にもたらせました。今回はこの文言について触れてみたいと思います。

先の引用文を全体の主張から読み解くと「国（民族や地方）にはそれぞれ固有のくせ（風俗習慣）があり、そのくせが教説・思想に大きな影響を与える」「インド人は空想的・神秘的、中国人は修辞的で誇張する、日本人は正直で簡潔、隠すくせがある」と書かれています。仏教発展史は空想的なインド人がお釈迦様の教えを思想としてまとめ上げ、修辞的な中国人が言葉によって日本に伝え、日本人はそれを正直に簡潔にまとめ（念仏や題目などにして）教えを広めていったという大雑把なとらえ方ができるでしょう。

私はお釈迦様の教えの（原始仏教）本質的な部分をまとめると「合理的」「現実的」と言う言葉に行きつくと考えます。今回はこのまとめを提示するだけにとどめますが、もし私の考えが間違っていなければ、お釈迦様の合理的で現実的な教えは空想的で神秘的なインド人の手にかかり、時を重ねるとともに「観念的」で「空想的」な教えへと変質してしまったような気がするのです。それを今度は言葉の技術にたけた中国人が修辞たっぷりのお経に仕上げ、正直で真面目な日本人はそれをそのまま受容したのです。こう考えるとインドで仏教が滅びたのも納得がいきます。観念的空想的な世界を登り詰め、もうそれ以上登るところがなくなったとき、お釈迦様の考えた現実的な教えの山はいつの間にか神秘的な山に変質し、密教を頂点として反対側のヒンズー教の方にポロリと転がり落ちてしまったような気がするのです。中国では文を極めた仏教の教えはいつの間にかインテリの修辞学に堕し、民衆の要望と乖離して、ついには道教などの民衆宗教の中に取り込まれて行ったのではないでしょうか。

日本人は簡潔にまとめるまではよかったのですが、宗教，学問，芸能などの本質部分を、秘事や作法などとして口頭で伝授することでしか弟子に相承しなかったため、いつの間にかうわべの形式や方法だけが広まって、その方法を支える本質的な部分が忘れ去られていく傾向があったような気がします。「仏さまの教えは題目の『南無妙法蓮華経』の七字にすべて包摂されている。」と簡潔にまとめるまではよいのですが、なぜそう言えるのか、日蓮上人の書かれた原典にあたっても、その解説書にあたっても私は今一つ完全に理解できないのです。それは念仏の「南無阿弥陀仏」にも同じように言えることです。おまえは信心が足らないから理解できないのだと、えらいお坊さんや学者から叱られそうですが、分からないものをさも分かったように語ることは、ありのままに観ると言うお釈迦様の教えに反することになるでしょう。

お釈迦様が最初に唱えた仏教の教え（原始仏教）は当時のインドの社会、風土、民族性の中から生まれたものであり、今そこで生きている人の問題を解決する、「合理的」で「現実的」な教えであったことは間違いないでしょう。だからお釈迦様と弟子たちは互いに「善知識（善き友）」として同じ道をともに歩むことができたのです。ところで、「国に俗あり（民族のくせ）」のフィルターを幾度も通過し、日本にたどり着いた今ある「お釈迦様の教え」と呼ばれるも

のは、果たして現実社会に生きている人の問題を解決する教えとなっているでしょうか。

仏教の教えの根本は言うまでも無く不変です。「現実の世界の生きる苦しみを滅し、やすらぎのところにたどり着くための行いの実践」です。そのためにその人、その時、その社会に合わせていろいろな実践方法が説かれてきました。根本さえ諦めることができれば、大樹のように茂る、空想と修辞の枝葉が切り落とされ太い幹がみえてくるはずです。幸い「東人の絞における」と富永仲基が喝破したように、私たち日本人は要点を簡潔に正直にまとめることのできるくせを持っているようなので、教えの本質を特権階級の秘事とせず、隠すことをしなければ、分かったことは分かったままに、分からないことは分からないままに、お釈迦様の教えを示すことができるはずです。

竺人や漢人が教えを理解するために必要とした空想的誇張の装いは、東人には厚化粧で装飾過多だと言ったら彼らに失礼にあたるでしょうか。普通の日常を素直にあるがままに過ごすことを「行い」と信ずるここ琉游舎では、すっぴん、普段着が似合うようです。

狂言綺語十九・・・マーラのささやき

五〇代の前半、一時ランニングに打ち込んだことがあります。酒席の場の口約束で半年後の一〇キロの大会に出る羽目になり、完走を目的に練習を始めたのが始まりです。それから二年間は月間一五〇キロの走り込みと、設定タイムを突破することに喜びを見出だし、ハーフマラソン大会や会社の仲間とチームを組んで駅伝大会に出たりと、休日はランニング三昧の日々を過ごしていました。当時は記録の更新とレース後のお酒のために、ひたすらランニングを楽しんでいたものです。しかし五〇代の私の記録がぱたっと伸びなくなるには、二年もあれば充分でした。するとそれまで苦しいともつらいとも思わなかったランニングが、急に苦しくなってきました。楽しくて簡単に思われた行為が、急に難行苦行に変わってしまったのです。そんなとき、今まで以上に大きな声で頻繁に耳元に聞こえてくるのが「マーラのささやき」です。そしていつかはそのささやきを受け入れてしまうことになるのです。

壁に突き当たり、心に葛藤や迷いが生じるとき、必ず聞こえてくるマーラの甘い誘惑のささやき。これをお釈迦様は何度も聞きました。「マーラ」とは訳すと「悪魔」のこと。仏教的な意味での悪魔は多様で複雑な性格を持つ存在であるため、一言で片付けることは困難なのですが、唯一言えることは「マーラとは私たちに害を加える実体のある他者ではない」ということです。私なりの解釈では私たちの心の中にある葛藤と迷いです。お釈迦様は神様でも仏様でもなく、悩み考えそして歩み続ける一人の人間です。ですから生きることは自らの内なる声との戦いの日々だったのだと思います。その「マーラのささやき」にすべて勝ってきたからこそお釈迦様はブッダ（目覚めた人）となりました。

その消息は原始仏典に数多く書き残されています。（注1）「サンユッタ・ニカーヤ」の「悪魔についての集成」の章は特にマーラとの対決の経を集めたもので、全編を通じて同じ構造です。まずマーラがお釈迦様にいろいろなことを囁きます。例えば「苦行こそが悟りへの唯一の道なのにおまえはその苦行を放棄して悟りに到達したと考えている」と、これはお釈迦様自身が自分の行いを自己検証している言葉です。このようなマーラのささやきのたびにお釈迦様は「この者は悪魔・悪しき者だ」と看破します。マーラのささやきは自分の迷いや欲望がもたらすものだとの認識の言葉です。そして次のように答えます。「苦行は陸に乗り上げた船の舵や艫のように全く役に立たない。悟りへの道は戒めと精神統一と智慧に寄って成就する」と、その悟りの言葉を聞いたマーラは「尊師はわたしのことを知っておられるの

だ。幸せな方はわたしのことを知っておられるのだ」と気づいて、打ち萎れ、憂いに沈み、その場で消え失せてしまうのです。

このマーラとの戦いの記録は、人のぬくもりと確信に満ちた「人間お釈迦様」の魂の記録です。これが今に多く伝わっていると言うことは、悟りの結果だけを弟子たちに語ったのではなく、自分が悟りに至る行いの紆余曲折、思考過程などすべてを正直に語ったということです。この告白により弟子たちは、お釈迦様と同じ道を一緒に歩めば、私たちも間違いなく「安らぎの処」へたどり着くことが出来ると信じたのです。「私もみんなと同じように欲や迷いや無知によって日々マーラの誘惑にひきずり込まれる危険があるんだよ」と言う赤裸々な告白ともとれるお釈迦様の教えは、弟子たちの共感を呼ばないはずはありません。自分自身の言葉を絶対化することもなく、また弟子たちもお釈迦様を神格化することなく、同行者として「行い」の道を歩む信仰者たちの、帰依と尊敬の姿が「マーラのささやき」のやりとりからも強く立ち現れてきます。

私たちの耳元で日常頻繁に囁かれる悪魔のささやき。これはお釈迦様の耳元で囁かれたものと全く同じものです。生きている限り欲や怒りや無知に妥協してその場しのぎのラクな行動をとるのが私たちのありのままの姿です。そしてお釈迦様もそのような自分のありのままの姿を見て日々反省し、今以上の戒めと精神統一と智慧を積むことを自らに求め、あるべき姿に向かって次の朝を迎えたのではないでしょうか。マーラは私たちの今のあり方をありのままに観るための鏡です。仏教の教えは絶対的な真理はどこにもなく、世界のありよう(実相)は相対的な関係(縁起)でしか捉えることは出来ないという教えです。マーラという存在があってこそ私たちのありようも観ることが出来るのです。誤解を恐れずに言えばマーラも私たちをやすらぎのところへ導く「善き友＝善知識」の一人なのです。

私は「悪魔(デーモン)から身を隠すために絶対者に従う」という日常ではなく「悪魔(マーラ)と日々向きあって対話する」という日常を過ごしたいと思います。「マーラのささやき」を日々聞くことが出来ること、それが生きている実感であり、「行い」だと思っているからです。

ところで最近ランニングを復活しました。走るたびにマーラとの対話を楽しんでいます。これが楽しいと思えている間は、あごを突き出し前屈みとなって坂道をヨタヨタ走る私の姿が、ここリーナで見られるはずです。

(注1)ブッダ「悪魔との対話」中村元訳・岩波文庫

狂言綺語二十・・・他人の牛を数える

僧侶の一日は朝のお勤めから始まります。私も五時半から毎日朝勤（ちょうごん）をしています。他の法要と同様、朝勤にも一連の決まった儀式があります。さて、この朝勤は何のためにやっているのでしょう。お勤めは仏道修行に勤め励むことそのものだということになっています。もちろんそれは否定しませんが、そこに座って一人で儀式を行い口をパクパクしてお経を唱えているだけでそれが修行に励んでいます、と言っていいものかどうか。

朝勤は「行い」への挨拶とウォーミングアップだと私は考えています。お釈迦様への朝のご挨拶とこれから一日をいつも通り当たり前に過ごすための心と体の暖機運転です。いわば朝のラジオ体操みたいなもの。本当のお勤めは、そのあとにやって来る日常です。日常はいつも通りやってきていつも通り過ぎていくものでは決してありません。何も起こらないのも日常、何かが突然起こるのも日常。何があろうともそ

れは縁起（よりておこるもの）と観て、心安らかに前へ歩むことが「行い」です。仏教は実践の宗教です。実践の舞台は日々の生活の中にしかありません。

「ためになること（仏の教え）を数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。．．．牛飼いが他人の牛を数えているように。彼は修行者の部類に入らない」[注1]原始仏典「ダンマパダ」の中のお釈迦様の言葉です。厳しい言葉です。ただ座ってお経を唱えているだけの人は修行者ではないとはっきり言っています。お釈迦様の生きている時から、オウム返しに教えを語っているだけの弟子たちが沢山いたということでしょう。他人の牛をいくら数え上げてもそれは決して自分のものにはなりません。その人は相手を羨んでいるのか、暇つぶしに数えているのでしょうか。下手をすると牛泥棒に間違えられてしまうかもしれないのです。同じように仏さまの教えを語っただけではその教えは自分のものにはならないのです。実践無き語りは騙りに等しい行為でしょう。お釈迦様の教えは「教えを自ら実行して初めてお釈迦様と一緒の方向に向かって歩み始めることができる」ということです。数多の宗教は信じることによって救われるという救済の宗教だと思うのですが、仏教は信じるだけでは救われないのです。実践することつまり救済の道（安らぎのところ）を歩み始めたところで、初めて救済への道が開かれてくるのです。そしてその救済はお釈迦様から与えられるものではなく、自らの実践によって日々つかみ取るものなのです。

「ダンマパダ」の百六十偈に「自己こそが自分の主（あるじ）である。他人がどうして自分の主であろうか?自己をよくととのえたならば、得難き主を得る。」[注2]という言葉があります。この言葉も厳しいですね。自分の主は自分しかいないと言っています。お釈迦様が教えと実践の方法を導いてはくれるが、同じ道を歩めるかどうかはすべて私たち自身にかかっているのです。すべて自己責任だと言われているような気がします。自分の眼で観て自分の足で歩かないといけないのです。できれば自動運転の車に乗って救済の場に辿り着きたいと願うのがわたしたち人間なのに、これではお釈迦様の後を辿って行ってよいのか、躊躇してしまう人も出てくるでしょう。

私はここまで二つの言葉を例に引き、仏教の教えは厳しいものだと語ってきました。でもお釈迦様はできないことを求めてはいないようです。二つをまとめると「自身の眼をしっかりと見ひらいて毎日を生きていきなさい。そのために自身を信じなさい、そして自身を信じるに足る自分になるために、毎日をよりよく過ごしなさい、それが安らぎへの道を歩む行いです」と語っているのです。その実現は難しくても、言っていることは明快です。結果を求めているのではなく実践を求めているのです。そして他人に便乗するのではなく、自分の足で歩きなさいと語っているのです。毎日をお釈迦様の教えの通りに過ごせたかどうかの結果に一喜一憂したり、結果の検証をする必要もありません。出来ることも出来ないこともある、それが自分というものだという自覚があれば、それでいいのです。その自覚をもって毎日を過ごすことが、毎日を豊かに楽しく暮らすことだと私は信じています。自分の行動はすべて自分がもたらしたものですからその悪果も善果もすべて自分のもの。その両方の果実を日々享受できることが私は生きる楽しみだと思っています。

となると毎日の生活を実際は怠けていても、精進していますと自分を納得させれば、それで済んでしまいますね。これが仏教の教えの危険な側面です。他の宗教ではインチキは即座に神から罰せられてしまいます。でも罰せられるからやらないとか、頑張ろうという考えは仏教にはなじみません。怠けたり、イン

チキをするのが自分というものだという自覚こそが大切なのです。「凡夫の自覚」ということだと思いますが、宗教用語として用いるとあちこちから使い方が間違っていると言われそうなのでここまでにします。

凡人が凡事を凡庸に勤める平凡な毎日。これが朝勤後の私の日常のお勤めです。

注1，2：「真理の言葉」中村元訳　岩波文庫

狂言綺語二十一・・・眼横鼻直

今年のほうれん草はよく出来た。ブロッコリーもこれなら合格点だ。と野菜作り二年目の少しは進歩した作物たちの姿を見て喜び勇んで収穫してみたところ、思わぬ落とし穴が待っていました。先客が私より前においしさをすっかり堪能してしまったようなのです。収穫した野菜を洗っているとブロッコリーの中から大量の青虫を発見。全部取り除いたと思ったら、茹でた鍋にまた数匹がプカッと浮いてきました。ほうれん草の葉っぱの縮んでいるところでナメクジを発見。しかも大量の黒い粒、ナメクジのふんです。人がおいしいと感じるものは、青虫やナメクジにとってもご馳走なんですね。さあ困ったことになりました。これからも虫などの生きものがおいしさを堪能した食べ残しを私が頂くか、あるいは私だけがそのおいしさを独占するために、彼らにいなくなってもらうか。「自然との共存共栄」「生きものを大切に」というようなスローガンは言う易く行うは難しです。だから私は明日になると、せっせとピンセットで青虫をつまんで駆除するか、手っ取り早く農薬を撒いてしまっているかもしれません。

自分とカタチが違うものに対して、人は本能的に拒絶反応を起こすものなのでしょう。そしてそのカタチの違うものが私たちの権利を侵し始めると、人は攻撃に出るか逃げるかするのだと思います。人が野菜の虫たちから逃げると言う選択肢はあまりないでしょうが、山菜採りで熊に出会ったら、確実に逃げようとするはずです。人以外の生きものから侵入を受けた時の私たちの対応は、おそらくこのどちらかのはずです。虫や動物は見た目が人と明らかに違うから、対応も明らかなのです。ところが人は人に対してもこのような対応に出てしまうものです。人間同士皆人間なんだから「同じだ」と観るのではなく、肌の色、しゃべる言葉、信じる思想や宗教、性別、などから「違う!」と観てしまうのです。残念な事ですが、これが私たち人間社会のありようです。おそらく人はこれからも「同じ＝平等」ではなく「違う＝差別」の論理で社会を成立させようとするでしょう。

「眼横鼻直（げんのうびちょく）」という言葉があります。鎌倉時代の祖師の一人道元が留学先の中国から帰国したとき、迎えの人に「留学の成果はなんでしたか?」と問われて「ただ眼横鼻直なるを知るのみ」と答えました。「何を悟ったのか?」ときかれて「眼は横に並び、鼻は縦についているだけだと知った」と、何ともとぼけた答えですが、当たり前のことを当たり前に言っただけなのです。人の顔の形は皆同じであると観たとき、道元は「眼横鼻直」という言葉にたどり着きました。「違う」と見ることはそんなに難しいことではないでしょう。「眼が大きいや小さい」「瞳が黒いや青い」など見ればすぐ分かります。見た目の「違い」はすぐ発見され言葉となり行動に移されますが、「同じ」は分かりきったことだから言葉にもされないのでしょう。それとも「同じ」に気づくことがなかなか人は出来ないのでしょうか。

「同じ」であると観ることは「あるがままに観ること」だと思っています。素直に当たり前のことを当たり前として観ていくと、「違い」は次第にそぎ落とされて「同じ」というカタチが自ずから立ち現れてくる

はずです。最初に「違う」から入ってしまうと、違う部分だけがフレームアップされ、肥大化し、ついには受け入れ難い「違い」にたどり着いてしまいます。そうすると人はその違いに抵抗するか服従するかあるいは逃走するかの選択を迫られるのです。私はどれも選択したくはありません。自分の観たありのままの「今あるここ」に居たいだけなのです。道元が言ったように「眼横鼻直」と観れば良いのです。楽しいことは楽しいと観る、悲しいことは悲しいと観る、その観たままを素直に受け入れればよいのだと思います。ありのままに自分を観る、他人を観る、社会を観る、自然を観る。それがやすらぎのところへ向かう「行い」だと、道元のこの言葉は語っています。経典の難しい教えを会得したり厳しい修行をすることではなく、私たちが生きるこの場所の当たり前のことに真理があることに気づいたこと。それが道元の悟りの言葉「眼横鼻直」だったのです。

さて、私もお釈迦様の導きにより当たり前のことに真理があると言うことに気づきました。では青虫と私の「眼横鼻直」はなんでしょうか。青虫と私の違いをそぎ落とした先に待っている「同じ」はおそらく「生きている」ということでしょう。ただ私はその「同じ」のために自分のせっかく育てた野菜たちを虫たちに横取りされることには納得がいかないのです。僧侶たるもの不殺生戒を守らずにどうすると言うような無駄な問いかけに答える気もありませんし、生きもののいのちを頂くことで私たちはいのちを繋ぐことが出来るのです。感謝しなさいと言うお為ごかしを言うつもりもありません。ただ納得がいかないという感覚を大事にしつつ、であればどのように行動するかという「行い」だけを考えていきたいと思います。

これから暑くなってくると、さらにいろいろな生きものが私の畑にご馳走を食べにやってくることでしょう。虫も鳥も動物も不味いものは食べないはずですから、私の野菜作りの腕も上がったと自負していいかなと思っています。虫たちに褒められてせっせと野菜作りに励む毎日もいいものですね。

狂言綺語二十二・・・文を綴る

自筆の手紙というものを綴らなくなって、もうどれくらい経つでしょう。私は礼状や、年賀状に一言書き添えるだけで、自筆の手紙を綴った記憶がもうこの三十年近くありません。パソコンで打ってそれをプリントアウトするか、メールで送るかのどちらかです。下手な字で何度も何度も書いては直し、勇気を出して送ったラブレターはもう過去の遺物なのでしょうか。単なる連絡の手段であればメールで充分です。切手代も便箋代もかかりません。連絡はワンウェイの事務的な手続きの一つなのですから、一方的にこちら側の言いたいことを言って、それに対して「いいね👍」を連発してもそれはコミュニケーションとは言わないでしょう。単なる「聞いたよ」とか「見たよ」以上の意味はありません。コミュニケーションとは送り手側の伝えたいことに、共感したり感謝したり、あるいは反発したり反論したり、というそのやり取りの中で初めて成立するものだと思います。

「満月のごとくなるもちゐ二十　かんろのごとくなるせいす一つつ　給候い畢んぬ、春のはじめの御悦びは月のみつるがごとく　しをのさすがごとく　草のかこむが如く　雨のふるが如しと思し食すべし。」これは日蓮聖人が弟子の四条金吾にあてた礼状の冒頭です。「満月のようなもち二十　甘露の清酒を一筒頂きありがとうございます。新春の悦びは月や潮が満ちる時、雨が降って草木が芽生える時のようにめでたい

ことと思い頂きます。」とお礼を述べた後、お釈迦様の生誕以来の吉事を述べそして弟子の信仰の厚さを「恐れながら尊いことです」とほめたたえています。便せん一枚程度の短い手紙のなかに、日蓮聖人の感謝と喜びの気持ちそして弟子・旦那との信頼関係と交流が生き生きと綴られています。

鎌倉時代の祖師、日蓮聖人や親鸞聖人が信者との間に交わした多くの自筆の手紙が、今に多く残されています。そこには、お礼だけではなく弟子たちの仏法上の疑問に答える返事であったり、現実の生活と信仰の板挟みに遭って悩む弟子・旦那たちを、時には易しく時には厳しく教え諭す祖師たちの姿が生き生きと描かれています。時間や距離などがコミュニケーションにはさして障壁でないことがその手紙を読むとよく分かります。どうしても知りたいこと、解決したいこと、感謝したいこと、意見したいことなどは、距離を超えて時間を超えて、そして時代を超えて現代にまで伝えられているのです。この手紙の数々を読むと、人は何に喜び怒り哀れみ楽しむか、時代を超えて変わらないことがよく分かります。そのような手紙の中でも、特に興味深いのは頂き物に対するお礼の言葉です。祖師のように新しい仏教思想を確立した人でも、当たり前のことですがまずは頂いたことに喜びと感謝の気持ちを表しています。数を数えたことはありませんが日蓮聖人のお手紙の相当数の冒頭はまずはお礼から始まります。お酒の贈物が多かったようで、冷え切った体の中にお酒が入っていく様を「汗に垢を洗い、雫に足をすすぐ」ようだと何とも不思議な形容をしています。故郷勝浦の海を思い出すような「生わかめ　青のり」そして貨幣経済がやっと発展し始めたこの時代に欠くことの出来ないお金、米・味噌・麦など沢山頂いています。

徒然草の一節に「よき友三つあり　一つには物くるる友　二つには医師　三つには知恵ある友」とあります。以前「善知識＝よき友」についてお話ししましたが、まさしく日蓮聖人とその弟子・旦那衆は「よき友」でもあったのです。一方が与え、もう一方が与えられるという一方通行ではなく、お互いが持っている物を与え合う関係です。信者たちは物を持たない日蓮聖人に物理的な物を与え、逆に聖人は信者の悩みを解決する処方箋を心の医師として信者に与えています。そのバックボーンとなる基本がお釈迦様の「智恵」つまり「教え」なのです。この3つをお互い与え合う関係が善き友であり「善知識」です。仏教はお釈迦様の時代も鎌倉時代も、信者と仏祖や祖師たちとの、双方向のコミュニケーションの積み重ねの上に今ここにあるのだと思います。八百年近い時空を超えて今に残されている自筆の手紙たち、最初は1対1のやり取りであったコミュニケーションの手段が、今では何千、何万という人の共通の手紙となっています。もちろん紙と墨文字が残されているという文化財的な価値に意味があるのではなく、そこにやりとりされたコミュニケーション内容の切実さと深さが現代に生きる私たちにも共通の切実さと深さをもって訴えかけてくるものがあるからなのです。

「文字を書く」という言葉はあと何年ほど生き残ることができるしょうか。私にとってはすでに「文字は打つ」ものになっています。「書け」ばその時の精神や肉体の状態がそこはかとなく文字に現れてくるものなのでしょうし、文字には書く人の個性や知性もにじみ出てくるのでしょうが、残念ながら悪筆の身である私はもう自筆には戻ることができません。文を「綴る」ことは「行い」の実践の一つであり、読んでいただく人たちへのラブレターでもあると考えます。「打つ」文字がどこまでラブレターの役割を果たすか、はなはだ心もとないことですが、素直に、意柔軟に、分かったことは分かったままに、分からないことは分からないままに、ありのままを文に綴り続けていきたいと思います。

狂言綺語二十三・・・知足

私の畑は今が夏野菜の収穫の盛りです。去年と比べて茄子が小さいだとか、今年はトマトがよく出来たなど、努力と工夫のおかげか、気候のせいか、たまたまだったのかその因果関係は分かりませんが、野菜たちの出来を素直に悦び、そしちょっとだけ自慢しながら、毎日の食事をおいしく頂いています。買った方が、手間暇もかからず肥料代や種代のことを考えれば割安で味も安定しているでしょう。物理的なすべての物が有り余り、欲しいものはお金で解決できるこの時代、趣味とは言え炎天下の草むしりや蚊に刺されながらの収穫。全く物好きなことです。

「衣食足りて礼節を知る」と言う言葉があります。衣食は、生活上の根本であるから、それらが満たされることによって心にもゆとりができ、礼儀を知ることができるものだという意味なのですが、私は前からどうもこの言葉にしっくりきていませんでした。食べるものも着るものも不足して、生きるためだけに必死の時代は礼節などとは言ってはいられないのも事実でしょうが、物が不足し弱肉強食の時だからこそ礼節が生まれたのではないでしょうか？いつまでも衣食をめぐって礼節を欠いた行動を取っていれば、どのような争いごとが起こるか分かったものではありません。だからこそ社会秩序と倫理が生まれてきたと思うのです。ところが物理的な衣食が足りた瞬間に、人はその足りていることに満足せず、おひれはひれをつけた衣食（ブランド&グルメ）を求めるものです。物理的な満足が満たされた瞬間に心の満足は逆に減少していくようなのです。「みんなと同じもの」が足りた瞬間「みんなと違うもの」を求め始める。そこからまた弱肉強食と差別のサイクルが回り始めます。人はいつまでも「足ることを知らない」生きものなのです。「この衣食」が足りたら今度は「あの衣食」が足らないということに気づく繰り返し。私には「衣食足らずして礼節を知る」あるいは「衣食足りて礼節を忘れる」と言う言葉の方が、この人間社会にはふさわしい言葉だと思っています。

京都の禅寺、龍安寺の庭にある有名な石の手水鉢には「吾唯知足」という四つの文字が刻まれています。「われ　ただ　足るを　知る」と読み、一般的には「際限なく求めるのではなく、自分にとって必要なもの、量を知り、そしてその必要なもので満足することを知る」という意味になるのでしょう。禅寺にある言葉なので、「自分の分をわきまえなさい」というような教訓的な意味ではないと思いたいのですが、現実肯定を強要する言葉にも見えてしまいます。誰が何のために語った言葉かを見極めずに、四文字だけを取り出すと、やはり私にはちょっとしっくりこない言葉となってしまいます。

私はこの言葉はお釈迦様が自分の安らぎの境地を語った言葉と考えたいのです。「知足」は自分の心の器に満足感、充実感、安らぎが１００％満たされた状態を言っているのだと思っています。「私の心はただ安らぎに満ち足りているばかりである」「私は安らぎのところ（彼岸）にたどり着きそこに安住している」と言っているのです。人は「知足」を知らない生きものです。だからこそ今の自分の心も体も社会的な環境もありのままに観て、「知足」と観ること。それが「安らぎのところ」へ向かって歩む道であるという、お釈迦様の教えそのものを言っているように私には思えるのです。ですから「吾唯知足」はお釈迦様の言葉です。「吾」はお釈迦様自身、「知足」はお釈迦様だけが感得できる境地であり、私達人間は「知足」を求めてお釈迦様の歩んできた道を歩み続けるしか方法はないのです。「足ることを知らない」からこそ人は「知足」の道をお釈迦様と伴に歩もうとするのです。

「知足」を知らないことがわたしたちのありのままの姿であると観る、そして「知足」への道をお釈迦様とともに歩むこと。これが私たちの日常の生活であり「安らぎのところ」へたどり着くための日々の「行い」です。「知足」は悟りの世界です。悟ってしまったら人間はやることがなくなってしまいます。だから毎日を右往左往、喜怒哀楽の、やることだらけの日常を私たちは与えられているのです。このやることだらけの毎日を私たちは有難く思わなければなりません。やることがなくなったと思った瞬間に、私たちはまた次のやることをお釈迦様に与えられるのです。それは「知足」を知らないことを自覚させられることであり、それによって「知足」を求めてまた歩んでいこうとする「行い」そのものだからです。

昨年は茄子が豊作でした。今年は実の大きさも小さく、数も少なめです。昨年のトマトは病気にやられほぼ全滅でしたが、今年は丸々と太った真っ赤なトマトがいくつも採れています。三度の挑戦でやっと食べられるほうれん草ができたと思ったら、その前に全部虫に食べられてしまいました。まだまだ二年目の素人野菜作りは、「足るを知る」には程遠い状態です。作物たちもこんな作り方じゃ満足して大きく実ってくれることもないでしょうし、虫たちももうちょっとおいしい作物を作らないと、よその畑に鞍替えするぞと内心思っているかもしれません。私だけでなく作物たちも虫も鳥もまだまだこの畑が「足るを知る」に至っていないのは承知しているはずです。「知足」の歩みの為にも私の作物を期待して待っている虫や鳥たちの為にも、今日も作物のご機嫌伺に、炎天下の畑に行ってきます。

狂言綺語二十四・・・遊戯

夏休みに入りました。朝のラジオ体操、午前中の宿題、午後からのプール、友達やいとこ達との虫取りやボール遊び、そうめんにスイカにかき氷、蚊取り線香に扇風機、花火、昼寝。学校の日課から解放された自由な毎日。五十年前の私と今の子供達の夏休みが同じとは思いませんが、夏休み前には「さあ今年の休みは何をして遊ぼうか」と心躍らせていることには違いないと思います。夏休みは子供は子供なりに「夏と遊び戯れる」「遊戯三昧」の貴重な日々です。

「遊戯」を「ゆうぎ」と読むようになったのは明治時代以降のことです。そこから「遊戯」は主に子供の遊びごとの意味に使われてきました。鬼ごっこ，綱引き，ままごとのような子供の遊びや、「お遊戯」と呼ばれる幼稚園や小学校の集団的な遊び踊りを表す言葉です。ところで子供の遊びの起源は実は大人の行事のまねごとから始まっていることが多いのです。近代以前の大人の行事と言えばそれはほとんどすべて宗教的行事と言っても良いでしょう。鬼ごっこは鬼追いなどの神事芸能の模倣から子供の遊びへと一般化したものでしょうし、綱引きも元来は豊作を祈ったり、豊凶を占うための神事行事だったと思われます。子供にとって「遊戯」は大人の行事をまねることで、成長し社会性を身につけていく中で欠くことのできないものだったのです。

「遊戯」は明治以前は「ゆげ」と読み、最初は仏教用語として伝来してきたものと言われています。原意は「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」ことを意味します。法華経の中でお釈迦様は「私は衆生の父であるから、彼等の苦難を抜き無量無辺の仏の智慧の楽しみを与えて、自在に遊戯できる人生を与えなければならないのです。」注1と言っています。「遊戯」の境地は「自由自在で何ものにもとらわれな

い」境地です。これはありのままに観ることによって得られる境地であり、安らぎのところです。つまりは悟りの境地ということです。「ゆうぎ」が「ゆげ」へと読み方が変わると子供の遊びが悟りという一見無関係な世界に変身してしまいました。しかしこれは読み方で意味が変わったわけではありません。「遊戯」の言葉に通底する「子供の遊び」と「悟り」の本質を、私達は見誤らないようにしなければいけないと思います。

子供は遊ぶとき、一心不乱に遊びます。親の言葉も注意も聞かず、無邪気に無心に一つのことに集中しています。いわゆる遊びだけでなく、勉強でも、スポーツでも、習い事でも何でも同じです。一つのことに心乱れず専心し、邪な気持ちは一切無く、その行為と遊び戯れているのです。そのとき子供は「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」のだと思います。これが「遊戯」の本質です。私達大人は日常生活の中で子供の遊びのように無邪気に一心不乱に無心になることはなかなか難しいことだと思います。無邪気になれば幼稚だと言われ、一心不乱になれば少しはまわりのことを考えろと言われ、無心になればつけ込まれる。とかくこの世は不自由で生きづらい。人は普通の日常生活を送っていたのでは悟りの世界なんてとっても無理だと考えます。そうなると普通の人にはとうてい出来ない難しい修業をして、難解な仏教理論を与えてくれる人に、お布施と引き替えに自分の悟りの境地をゆだねるのです。これが現代人が宗教へと導かれる一つの典型だと思われます。でもここには「遊戯」のかけらも見ることが出来ません。あえて断言してしまいますが「遊戯」のない悟りは偽の悟りです。「悟り」という言葉に心も体も囚われの身になってしまっているからです。

子供だけでなく私達大人も「遊戯」という言葉を取り戻すことが必要です。日々の生活の中で一時でも、心から一心不乱に無邪気に遊び戯れる「遊戯三昧」の時を過ごすことが、安らぎのところへと向かう行いの道を歩むことであり、すでにその時こそが安らぎのところでもあるのです。ひとそれぞれ「遊戯」のカタチはいろいろあると思います。そこに善悪、低俗高尚、有用無用などの社会的な価値観は全く必要ありません。自分自身が「いっさいの束縛を脱して自由自在の境地にある」ことがすべてです。大人の神事のまねごとが子供達の「遊戯」の起源ならば、私達はそこに通底している自分なりの自由自在の境地を、子供達の「遊戯」を見本に、自分なりの方法で取り戻していくことができるはずです。そこは自分なりの安らぎの場所と時間であると信じたいと思います。

私も毎日遊戯三昧の日々を送っています。朝勤や写経会や勉強会は言うまでもありませんが、朝のラジオ体操、畑作り、鳥や虫の声を聞きながらの散歩、初めての方との語らい、琉游舎で過ごす子供達を眺めること、先日のイベント観戦広場の企画や実施、次の企画を考え打ち合わせし議論し実現に向かうこと、ランニングにゲームに読書、こうして「狂言綺語」を書いていることも、ひょっとしたら毎日の食事も後片付けもその後のお酒も睡眠すらも「遊戯三昧」の時ではないかと思っています。

「遊戯三昧」の日常はことによると自由気まま、お気楽な毎日にも見えてしまいます。それでもいいんだと言い切るには私はもう少しいろいろと遊戯する必要がありそうです

注 ワイド版岩波文庫法華経上巻 一七二

狂言綺語二十五・・・縁起

まだまだ暑い日が続いていますが、わが家の畑では冬の野菜のための土作りをしている最中です。大根と白菜、人参にネギ、いずれもキムチやたくあん、鍋やしもつかれに欠かせない重要な野菜たち。あとは春菊とほうれん草と小松菜があれば、次の冬もおいしい食事が待っているはずです。夏は、鳥も虫も雑草も木々も生命力に溢れ、ちょっと油断をするとわたし達人間はその生命力に圧倒されて夏バテにもなりかねない季節です。でもその夏にこそ、来たるべき冬に備えて生きものたちはそれぞれのやり方で、いのちを繋ぐ算段をしているのでしょう。大げさかもしれませんが、私の冬野菜作りの準備も、その一つとして考えれば精がでるというものです。夏をちゃんと過ごすことの出来なかった生きものは、秋から冬そして次の春へとうまくいのちを繋ぐことが出来るのか心配です。

「春暮れてのち夏になり　夏果てて秋の来るにはあらず」注1季節は突然変わるのではなく、春の中に夏の兆しが有り、夏の中に秋の兆しがあると言うこと。だから生きものもその兆しを感じ取り、次の季節に備えた準備をしていくのでしょう。この時期は二十四節季で言うと立秋から処暑、白露の節です。日々秋と夏が交互に入れ替わり次第に草に降りた露が白く光り秋を実感する季節。変化は行ったり来たりしながら流れ、気づくと秋の側にたどり着いているという次第です。ところが、最近の気候の移り変わりは極端で、行ったり来たりの緩やかな変化を省略して、いきなり春から夏、夏から秋、とデジタルに変化しているように感じます。これは地球の温暖化の中で、日本の自然が緩やかな季節の変化を許されなくなったからなのか、それとも私達が変化の中にある兆しを感じ取る感受性を失い、変化の結果だけを見るようになってしまったからなのか。

「縁起」はお釈迦様の悟りの根本をなすものです。すべては原因と条件が互いに関係し合って起こるものであり、決して自立して起こるものではないと言うこと、であれば条件と原因がなくなれば自ずからその結果もなくなるという悟りの内容です。秋という変化の原因（兆し）はすでに夏の中に条件として内包されていることをあきらかにできれば、自ずと秋という変化に対処できると言うことでもあります。これは太古の昔から生きものがいのちを繋ぐために、記憶の中にセットされ続けてきた生きる知恵です。それぞれの生きものがその記憶を受け継いでいくことが、いのちを繋ぐことなのです。お釈迦様は私達が生きている毎日の中に永遠のいのちを観ることを教えてくださいました。わたし達のいのちは自立して存在するのではなく、縁りて起こる永遠のいのちの一つであることを、お釈迦様の「縁起」の悟りは教えて下さったのです。それは物理的な生命の生死によって途切れてしまう幻の道ではなく、永遠の過去から永遠の未来へとつながる一本の揺るぎない道であり、安らぎのところへと私達を導く道です。その道は行いの道、わたし達の日々の道でもあるのです。

縁りて起こるその条件と原因をありのままに観ることができればその結果は自ずから明かになります。そしてそれをありのままに受け入れ、日常の生活そのものになれば、もうそれは安らぎのところです。ところが人は従容としてその結果を受け入れるには、あまりにも諦めの悪い生きものです。その結果を時には受け入れがたいものとして抵抗し、戦い、技術によって結果を変えようと科学を発展させてきました。ところが人間以外の生きものは条件と原因をいのちを繋ぐ本能として感得しているので、その結果を素直に受け入れ、受け入れきれないものに対しては自らを変化させて受け入れるように努めてきました。環境

に生態を順応させてきたと言うことです。人は自らの生態を変えるのではなく、環境や他者を変えることによっていのちを繋ごうと考えてきました。ところがそれは自然や他の生きものや人々のいのちを侵すことでもあるのです。侵されたものたちもいつまでも黙ってはいないでしょう。もしその声が今聞こえてきたら、その声に耳を傾けなければならないはずです。

最近季節の変化がデジタルで凶暴で極端になってきた。土砂崩れや洪水が頻繁に起こる、火山の爆発や地震も多い。といわれています。統計的に見て結果はそうなのかも知れません。が、そろそろ人は結果を変えることではなく、その結果がおこる「縁起」をありのままに観ることで、「原因」と「条件」をあきらかにし、結果に対する今やらなければいけないことを審らかにし実行する必要があるようです。もし今わたし達人間によって侵されたいのちの声がこの宇宙に飛び交っているとしたら、その声を聞く感受性と智慧を磨く方法がわたし達には求められているのではないでしょうか。私にとってその方法は、日常をちゃんと楽しく過ごすこと。冬野菜のための畑の準備も、琉游舎での皆さんとの語らいもその一つだと考えています。

この文を書いている今現在、今年はまだ「秋の風の音にはっと気づく」注2ことはありません。秋の気配はまだなのか、感受性が鈍っているのかどちらでしょうか。

「自分の感受性くらい　自分で守れ　ばかものよ」注3

注1：徒然草第155段、注2：「古今和歌集」秋歌上169　藤原敏行
注3：「自分の感受性くらい」茨木のり子

狂言綺語二十六・・・自業自得

琉游舎だよりの裏面に「狂言綺語」と題して書き始めて今回で二六回目となります。彼岸会法要にあたりその意味を自分なりに理解することから始まり、コリーナの自然と日常生活の中で、分かったことは分かったままに、分からないことは分からないままに書きとどめ、宗教者として、ありのままのお釈迦様の教えをありのままに観ることにつとめ、その観たままに日々を過ごし、そしてそれが安らぎのところ（彼岸）へとたどり着く行いであると信じた実践の毎日を書き綴ってきました。正統と言われるような仏教の理論と実践の教えを受けず、ただ独学独習で一年間やって来ましたが、幸いなことにコリーナの自然と琉游舎での皆さんとの交流が、私にとっては何よりの学びの道となりました。自らの行いの結果はそれが悪い結果だろうと良い結果だろうと、自らが得るものである、というお釈迦様の教えに忠実に、今ここにある私もこの一年間の行いの自業自得の結果なのです。

自業自得というと現代ではあまり良い意味に使われない言葉だと思います。「朝起きると頭が割れるように痛かった。それはあなたの昨夜の飲み過ぎという行為（業）によって自らが得た結果なのです。だから悪いのはあなたなのです。」とこのような意味で使われることが多いと思います。自分でした悪い行いが報いとして自分にかかってくると言うニュアンスが強くあり、そら見たことか、だから正しい行いをしましょうという懲罰的・道徳的な臭いが紛々としています。しかしお釈迦様の言われる自業自得は決して悪い意味でも、教条的でもありません。自分の行為の結果は善も悪も自分で享受するという意味です。だから

「寝る間も惜しんで勉強をしてついに誰もが無理だと思われた難関校に合格した！」という結果も自業自得なのです。お釈迦様はいつもシンプルなことしか言っていません。自分に関わるすべての結果は全部自分がもたらしたものであるから、人のせいにも批判したりも出来ないのです。ましてやご先祖様がひどい悪業を行ったから、今その報いを受けてわたし達はつらい目に遭っている。などというたわ言はお釈迦様の言葉では決してありません。「あなたの先祖の悪業が今のあなたの不幸の原因です」というようなセールストークを聞く機会があるかもしれませんが、自業自得という言葉を思い出して下さい。そしたら無駄な買い物やだまされたと後悔しなくてすむはずです。

「自ら悪をなすならば、自ら汚れ、自ら悪をなさないならば、自ら浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることはできない」[注1]「自業自得」について端的に分かり易く語ったお釈迦様の言葉です。「悪」をなせば「汚れ」「悪をなさない」ならば「浄まる」という単純な法則だけなのです。そして他人から「汚れ」や「浄め」を与えられることも決してないということです。完全に自己責任の原則です。これは大変厳しい言葉だと思います。人に原因を転嫁したり、偶然の結果だとあきらめたり、今度はきっとうまくいくはずだと考えたりすることを許してはくれません。同じ行いを繰り返す限り、結果は常に同じです。それは前号でお話しした「縁起」の教えにも明らかです。お釈迦様は自ら浄まるための道は自分自身にしかないと示されているのです。人を責めるのでなく、自身の中に原因を探して、改めていくことが唯一の解決の道だと言われているのです。

自己責任と言われるとやっぱりお釈迦様の教えは厳しすぎて、ついて行けないと考えるのも無理はありません。人は今の苦境の原因が自分の行いの結果だとはなかなか認め難いものです。その苦境を他人のせいにしても苦しみは除かれないでしょう。逆に他人を責めるという苦しみが増え、他人をもその苦しみに巻き込んでいくばかりなのではないでしょうか。自分だけですむはずの苦しみを他人を巻き込むことで拡散させ、仕舞いには大きな苦しみとなってブーメランのように自分に戻ってくるのです。ある一人の苦境が家族を巻き込み、地域社会から国家の苦境まで拡散し、ついには地球全体を苦境に陥れることもあるかもしれません。戦争が起こるメカニズムをこのように考えることも、あながち妄想とは言えないと私は思っています。苦境の拡散はその原因を曖昧にし、拡散の過程で対立を引き起こしていくものです。だから自業自得という言葉にあらためて戻るべきなのです。自分の行為（業）の結果は自分が得るという原則をしっかり自覚してさえいれば、自分の苦境も悦びもしっかり自分が引き受けることができ、逆に他人の苦境も悦びも理解し共有できるはず。そうすれば悦びはお互いが享受し、苦境には救いの手をさしのべ合うようになるでしょう。このように考えると、自業自得と観ることは、自分がもし今苦境にあるとしたらそこから逃れる唯一の方法であると、私は信じています。そしてそこはもう安らぎのところでもあるのです。

この一年間の琉游舎の生活で「狂言綺語」を一人でも読んでいただける方がいるという実感が、私にありのままに観て、受け入れ、行い、書きとどめるという業を続けさせて来たと思っています。一年後に私がどのような自業自得の中にいるか、自分でも見当がつきませんが、語り・飲み・考え・実践するという日常はこのままに二年目も筆が続く限り日々の業をつんでいきます。

注1：真理の言葉　中村元訳　岩波文庫

狂言綺語二十七・・・無頓着

あれほど暑かった夏も終わりを告げ、このところのコリーナは秋雨前線が停滞し洗濯物の乾きが悪いと嘆くような日が続いています。人間勝手なもので、暑ければ暑いでこれでは畑仕事が出来ないといい、雨が降り続けばこれはこれで畑仕事が出来ないといい、万事全てに渡って何かといいわけと不平を述べるものです。私もご多分に漏れず、結局何もしないで無為に過ごす一日を「季節の変わり目は体が重い」と日記に書き綴りながら、それでもタイムリミットになる寸前には、なんとか天気と自分への言い訳の折り合いをうまくつけて「よっこらしょ、さてやるか」と、重い腰の上げ下ろしを繰り返しながら、実りの秋に乗り遅れないよう、辻褄合わせだけはしっかりやってきたようです。誇れたものではありませんが冬においしい漬物と鍋を食べたいというこだわりがなせる業なのでしょう。

こだわりがないように周りに見せて、結構こだわっていることが人には一つや二つあるものです。”何でもいいよ、みっともなくなければ“と服装にこだわらないところを装いながら、会社に着ていくスーツの色やネクタイにも、今日予定されている出来事や会う人に合わせて自分で選んだりするものです。私にはほど遠いことですが、無理なく等身大にノンシャランと着こなすセンスがあれば、もう少し私の衣装箱は違ったデザインの服が収納されていたことでしょう。会社員生活をやめてから私は文字通り服装に無頓着になってしまいました。僧侶の日常着は作務衣、仕事着は道服と袈裟です。それ以外は夏はこれ以上暑くならない服装、冬はこれ以上寒くならない服装をしていればすんでしまいます。服装にこだわらないといえば聞こえがいいのですが、気遣いがなくなると安易に流れ、いい加減で節度がなくなってしまうでしょうから、少しは服装にも頓着した方が良いかなとも思っています。

法華経五百弟子授記品第八に、弟子の富楼那がお釈迦様について述べる「抜出衆生　処処貪著」という一節があります。前の言葉を補うと「（お釈迦様は衆生のために教えを説き）様々な貪りと執着から解き放ってくださいます。」という意味になります。「頓着」と「貪著」は同語源で意味は全く同じ。かつては「貪著」が使われ「とんじゃく」と読みます。法華経に「貪著」という言葉は何度も出てきますが、それは良い意味ではなく、衆生の迷い・苦しみの根源[注1]の一つが「貪著」であるとお釈迦様に断言されている言葉なのです。貪りこだわり執着する心は迷いや苦しみを引き起こします。「利養に貪著」したり「名利に貪著」[注2]したりするのが人間であり、そこからお釈迦様の教えによってこだわりがなく自由にあるがままに観ることができる境地に救い出され、そこがやすらぎのところとなるのです。そしてそこは「貪著」の真反対の境地「無貪著」の境地です。つまり今の言葉でいえば「無頓着」です。

ところで、無頓着の境地が覚りのところといわれても、今の私には全面的に受け入れるにはまだ頓着がありすぎるようです。お釈迦様の言われていることを素直に受け取れば、無頓着こそが私たちの求めるべき境地なのでしょうが、日常社会の関係性の中では、無頓着を実践し続けないと、その言葉は「無気力」「無関心」「無責任」になってしまうでしょう。あるいは「無感動」と「無作法」を付け加えてもよいかもしれません。何度もこの場で書いてきましたが仏教の教えは一見シンプルで分かり易いのですがそれは危険な教えでもあるのです。言葉の表面をなぞるだけでは「こだわりのない」は「関係ない」や「誠意がない」にいつでも変わってしまうでしょう。教えの言葉の表面を都合よく受容し、それを自分たちの利養や

名利のために使ったとしたらそれはもうお釈迦様の教えでも何でもありません。

「頓着」に否定の「無」をつけると「無頓着」になります。これを正反対の意味・対立概念だと見てしまうと、お釈迦様の教えを誤って受け入れることになります。あるがままに観ることからほど遠いこの二元論的見方は「正・邪」「善・悪」と同じように価値観で判断することであり、コインの裏表のように、価値を決める人にとってはいつでも入れ替え自由なのです。お釈迦様の言う「無」は否定の「無」ではありません。あえて言葉でいえば「空っぽ」です。ごまかすわけでは決してありませんが、いわゆる理（ロゴス）ではこれ以上は説明できないのです。それは全く位相の異なる「信」によって立つものだからです。お釈迦様の言われる「無頓着」は「頓着」も「無頓着」もない「空（からっぽ）頓着」です。日々の生活の中でこだわりを極めて何かを作り上げること、そのこだわりを離れて新たな創造を行うこと、そしてその実践を日々飽くことなく続けることが、私にとっては頓着に空っぽでいる状態だと思っています。「こだわる　こだわらないに　こだわらない」あるいは「こだわる　こだわらないに　こだわる」という双方向出入り自由な毎日を実践することがお釈迦様の言われる「無頓着（空頓着）」であると信じています。

私は毎日を豊かに楽しく過ごすことにこだわりたいと思います。ただ、そのことに執着したくはありません。暑ければ着ているものを一枚脱ぐ、寒ければ一枚重ねる。そのようにこだわりを日々脱いだり着たりの毎日が、楽しい毎日の秘訣ではないかと思います。暑ければキュンと体を冷やすビールが、寒ければ心底温まる熱燗が、もう一つの楽しさの秘訣であることは言うまでもありません。

注1：三毒（貪欲・瞋恚・愚癡）
注2：ワイド版岩波文庫　法華経序品 P5062

狂言綺語二十八・・・慢心と虚心の間

林道行き止まりの駐車場に車を置いて登山道に入り、雑木林の間を熊笹をかき分けながら一歩一歩足を運んでいると、急に視界が開け眼下に先ほどの駐車場が見えてきました。豆粒のように私の運転してきた車が見えます。地図の等高線で確かめると四〇〇メートルほどの高さを小一時間かけて登ってきたようです。一時間足らずでも足を前に運び続ければ、こんな高いところまでいけるのだなと、人の足の大変な能力にあらためて驚かされるとともに、せっかく登ってきたのに、またあの場所に戻らなければならないのかと思うと、下りは頂上からハングライダーで直接登り口まで降りられたらいいのにと、有りもしないことを考えてしまいます。山歩きは全く不合理で非生産的な行為です。時間と体力をかけて頂上に行き写真を撮っておにぎりを食べて、また時間と体力をかけて振り出しに戻る。なぜ毎回毎回振り出しに戻る行為を飽きもせず繰り返しているのか、私には私の行動が不可思議でなりません。

「胃のほかは誰の支配もうけずに暮らしている」注1という慢心の極みのような小説の一節に先日出会いました。権力にも常識にも社会にも、自分以外の誰にも支配をうけず自分は生きていると言うことを力強く主張している言葉です。主人公たちは戦後のどさくさの中で公共の財産を盗み取る犯罪集団です。しかしながら行為の善悪や倫理的な視点でこの一節を判断してはいけないでしょう。反社会的な行為を題材にとりながらこの小説が魅力的で読む者の心を揺さぶってくる理由は、全ページを通して人間本来の生きる

自由と原始的なエネルギーを作者が全身で書き綴っていると言う点にあると私には思えるのです。主人公たちの行動は無茶苦茶で、他人からみれば理解不能、本人たちも合理的な説明が出来ないでしょう。なぜならば「誰の支配もうけずに暮らしている」からです。ただ残念ながら「胃の支配」だけからは逃れられません。胃の中が空っぽでは動くことも考えることもままなりません。つまりは人間どんなに自由であると主張しても生きることからは自由になれないと言うことなのでしょう。

お経によく出てくる言葉に「我慢、邪慢、増上慢」があります。いずれも自らを過剰に評価して自我に固執し思い上がる心のことです。我慢は「おれがおれが」という慢心、邪慢は「自分は悪くない」という無反省の慢心。増上慢は「悟ってもいないのにすべてを悟っている」と錯覚する慢心です。人の行為の始まりは大概「自分にだってできるんだ」という根拠のない慢心から出発しているのかもしれません。それでも精進と忍耐を怠らず続けていき、だんだん思うような結果が得られてくれれば自信が芽生えてくるでしょう。そうなれば対象を過小評価することも羨むこともなく、正しく物事を判断できるようになるはずです。根拠のない慢心に精進と忍耐という根拠が与えられそれが自信となり、慢心はいつの間にか虚心に取って代わる可能性があるのです。虚心は何物にもとらわれずありのままに観る心のこと。

私たちは慢心と虚心の間を行ったり来たりしている生き物ではないでしょうか。「胃のほかに誰の支配も受けない」という言葉が大言壮語、増上慢の極みとなるか、「胃＝食べること＝生きること」と観て、生きること以外自分はだれの支配も受けないという精神の自由の宣言となるか、それはその行いに向けて虚心にたゆまぬ歩みを続けているかどうかにかかっているのです。少しでも歩みを止めれば「我慢・邪慢・増上慢」が忍び寄って来るでしょう。この歩みを止めないために、お釈迦様は「自分の持てるものを持たざる者に与え（布施）」「行いの規範を良く守り（持戒）」「不平不満を言わず耐え忍び（忍辱）」「一生懸命怠らず（精進）」「こころを静かに保ち（禅定）」「真実を見抜く力（智慧）」を持ちなさいと言われています。いわゆる六波羅蜜です。安らぎのところへ向う歩みを止めればそれは慢心となり、歩み続けることができればそれは虚心でいられるのです。「よく生きること」が絶対条件です。そのためには食べなければなりません。「よく生きること」はお釈迦様の私たちへの願いです。ですから「自分の胃のほかは誰の支配もうける必要はありません」ということも精神の自由と平等を願うお釈迦様の願いのはずです。慢心から始まり虚心との間を行きつ戻りつする歩みは、人間本来の生きる自由とエネルギーをお釈迦様が私達に与えてくれているから出来ることなのだと私は考えます。

「よく生きること」といわれても、具体的にどうしてよいものか分からないものでしょうが、私はそれを日常の生活の結果としてついてくるものと考えたいのです。毎日の生きることの積み重ねとして「よく生きる」があると考えるのです。慢心と虚心の間の往来の中に毎日があると観ることです。そしてこの毎日はお釈迦様の願いである「自分の胃の他は誰の支配もうける必要はありません」によって与えられている毎日です。だから自分や他人の行為を合理的に説明したり理解したりは、あまり意味のあることとは思われないのです。なぜならばわたし達のこの毎日は、お釈迦様だけが思惟出来る不可思議な生きる自由とエネルギーによって与えられ動かされているものだからです。

私の繰り返し振り出しに戻る山歩きも、頂上で梅干しのおにぎりと胡瓜の塩漬けと卵焼きを食べる悦びのためだけに、不可思議なエネルギーが導いてくれたまでのことなのでしょう。雪の降る前にあと何座でこの悦びを味わえるか楽しみです。

注1：「三文オペラ」 開高健

狂言綺語二十九・・・無常

秋雨前線がようやく消えて、爽やかな秋晴れの季節になってきました。今年は梅雨らしい梅雨が無く、いきなり六月から真夏となりましたが、帳尻を合わせるかのように九月は毎日雨が降っている印象でした。私の不正確な日記の記載と、気象庁の塩谷での観測記録を照らし合わせると、九月にコリーナで全く雨が降らなかった日は九月の三十日間中十日間だけだったようで、三分の二は何らかの雨が降っていたことなります。

ところで「秋雨」という言い方を江戸時代の人は好まなかったようです。「あきさめ」が「飽きる冷める」に通じるからか、春雨と違った情緒を大切にしたかったのかと注1ある詩人は書いています。春雨は冬が終わって春の暖かさを連れてくる雨。自然に緑といのちを与える暖かい雨です。秋雨は冬の寒さを連れてくる雨。自然から色彩といのちを徐々に奪っていく冷たい雨です。春と秋は異なった情緒を日本人にもたらしてきたようですが、どちらの雨も季節の移り変わりを象徴する雨には変わりが無いようです。

「季節の移りかわり」というと私達はそこに「無常」という言葉を重ね合わせてしまいます。特に夏から秋そして冬への季節は、あらゆる自然のいのちが死に向かって移ろう季節です。それが再生の準備であろうとも、人はそこに自分のいのちを重ね合わせ、人間の命のはかなさや世の頼りなさを感じずにはいられませんでした。「無常」は「常でない」ことです。簡単に言えば「変化」すると言うことでしょう。仏教的に解釈すると、この世の中の一切のものは常に生滅流転して、永遠不変のものはないということです。

「無常」は仏教用語でしたが、日本に輸入されて日本の自然と日本人の感性と結びついたとき「無常感」として、人生のはかないことやそのさまを表す言葉になっていきました。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」鴨長明の方丈記の冒頭です。世の中の生滅流転を川の流れと水の泡にたとえて「無常感」を表現しています。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし」これは平家物語の冒頭です。「祇園精舎」はお釈迦様の僧房の名前。「諸行無常」は仏教の三つの根本教理（三法印注2）の一つで、世の中の一切のものは無常であるということ。そして「沙羅双樹」の下でお釈迦様は涅槃に入られました。平家物語は冒頭から仏教用語が立て続けに現れる、日本的な「無常感」の物語です。

全てを「無常」と認識する「無常観」と、「無常」を感情として受け入れる「無常感」は似て非なる言葉です。世の中の一切のものを全て常がないものであると観ること、つまりはありのままに観ることが「無常観」です。その無常の世は「苦」そのものであり、そこから脱却し安らぎのところ（涅槃）にたどり着くことが仏教の目的です。「無常感」は常がない世間や人間の儚さを情緒的に感じ受け入れること。方丈記や平家物語に代表される「無常感」です。芸術や隠遁生活を支える日本人の情緒的美意識です。

どうやら仏教としての「無常観」は日本人に受け入られる過程で「無常感」に変わっていったように見受けられます。本来「無常観」は全てを「無常」と観てそこから脱却するための智慧の働きです。どこまでも世の中をありのままに観ようとする、平等かつ慈悲に溢れた仏さまの智慧が要求されるのです。ところが日本人は「無常」の中に生きることを高踏生活と見いだしたか、その中で生き続けるしかないとあきらめたか、いずれにしても、そこに安住することを選択したのです。それは現実逃避とも言える態度かもし

れません。現実世界から、詩歌・小説・物語・歌舞・音楽などの狂言綺語の世界に逃避できる日本人はごく一部の貴族だけでした。ほとんどの大衆は現実逃避したくてもする場所もないのが現実です。ですから、唯ひたすら題目や念仏を唱えることで後生 来世の安楽を願いながらも、現世安穏のためにむしろ旗を掲げて現実世界で戦い続けなければ生きて行くことが出来なかったのです。

「無常観」はありのままの「事実」です。「無常感」は事実に対する私達の「思い」です。「事実」と「思い」の間を埋めてくれるものが本来の宗教の役割ではないでしょうか。「事実」と「思い」の乖離が大きければ大きいほど、その食い違いに苦しみ、その世界は住みやすい世界ではなくなるのです。その時人は、逃げるかその世界にとどまるために戦うしかないでしょう。日本の仏教は平安末期以降、現実逃避している貴族たちの国家鎮護・為政者の宗教から、逃げ場が無く戦う選択肢しかなかった大衆のための国民宗教となりました。法然 親鸞 道元 日蓮などの祖師の開いた、今に連綿と続く私達のための仏教です。それは「無常観」と「無常感」が一体化した安らぎのところを求めるものだったのです。さて、今私達の周りにある宗教は「事実」と「思い」との間を埋めてくれるものとなっているでしょうか。

秋晴れの天気が安定するかと思えば、このところ台風が頻繁に近くを通過していきます。「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。」注3台風の翌日はしみじみとした趣があり面白い、とはとても言えないような災害が今年は非常に多くありました。「事実」と「思い」の間で行ったり来たりの私の日常に、自然はいつも「事実」の冷徹と「思い」の儚さを突きつけてくるようです。

注1：「雨の名前」高橋順子　小学館
注2：「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂静」　注3「枕草子」

狂言綺語三十・・・行と学

初めて山にキノコ採りに行ってきました。と言うより椎茸などのキノコが群生している「キノコの畑」に、導かれるままに連れて行って貰ったという方が正しいのかもしれません。その人は実践知識と学術知識の両輪を兼ね備えたキノコマイスターと呼ぶにふさわしい人です。ですから私はマイスターの歩く後をその通りにたどり、その通りに収穫しその通りに調理しその通りに頂きその通りに保存しました。そして来年もまたそのマイスターの行う跡を忠実にたどり、キノコ取りの悦びのお裾分けをいただきたいと、今から一年先を楽しみにしているところです。

人の歩く後をその通りに歩み行動すると言うことは、簡単なようでとても難しいことではないでしょうか。ただ根拠無く後をついて行くだけであれば、それは盲信であり信頼とは別物です。その人に身も心も預けるわけですから、前を行く人の言動に疑念が浮かんだ瞬間にもう後をついて行くことは出来ません。その人に対する絶対的な信頼がないと成り立たないのです。ではその信頼はどこから来るのでしょう。

行き帰りの車中でキノコマイスターへの道のりを伺うと、きっかけは、今までの経験知だけに頼って採ったキノコでひどい食中毒になったことだそうです。それから彼の「行学二道」が始まりました。キノコに関する図鑑や文献を渉猟し、シーズンには三日と空けず山に入り、学習ー実践ー確認・修正をたゆみなく今日まで続けてきているのです。キノコの名前・外観・生育環境・生育過程・成分・食べ方・保存方法・

効用などの知識を頭に入れ、実践と情報収集により日々知識の更新をしているのです。「実践＝行」と「知識＝学」を車の両輪として「きのこの道」を歩む姿は求道者そのものです。左の車輪が大きいと右にカーブしてしまいます。真っ直ぐに道を進むには両方の車輪が等しく回らなければなりません。「行」が大きければその行為によって暴走し、道を外れてしまう危険があるでしょう。「学」が大きければ蘊蓄と議論に終始して、いつまでも道に走り出すことは出来ないでしょう。どちらかに傾くことなく車輪の大きさが等しければ、「行」の道と「学」の道を脱輪することなく平行に進むことが出来るはずです。絶対的な信頼は、その人の行学両輪が走らせる車に私達が安心して乗せて貰うことなのかもしれません。

日蓮聖人の「諸法実相抄」の一節です。「行学の二道をはげみ候べし　行学たへなば仏法はあるべからず我もいたし人をも教化候へ　行学は信心よりをこるべく候」口語訳は「修業と教学の両方に励みなさい。行学が絶えたところに仏法はありません。自分も実践し人にも教え導いて行きなさい。行学は信心から起こるのです」となります。「実践」と「知識」の二つがあって初めて仏の道、つまりはお釈迦様の歩んだ後を辿ることが出来ると言われているのです。そしてその道のたどり着くところは安らぎの処です。また一人だけでその道を進むのではなく、自ら実践し獲得した教えを人にも語り、手を取り合って一緒に歩んで行きなさいとも言われています。導くとは誰かが誰かの手を引っ張っていくことではありません。互いが得たものを分かち合い、伴に善知識となって導き合うことです。そして行学の原動力は「信」です。私はここで言う「信」を仏教を信じることと限定したくはありません。日蓮聖人の時代に限らず西洋の哲学が輸入される明治以前は「学」に裏付けられた人の行動や倫理規範はほとんど仏教に依存していたと言っても過言ではないでしょう。人々が「今を何とか良く生きたい」と願うためのよるすべは仏法のほかないのが現実でした。特に日蓮聖人にとっては仏法が生きることそのものだったのです。「信」は良く生きたいという願いを信じることです。現代はその願いを信じることが難しい時代です。願い（欲望）が多すぎて真の願い（誓願）が見つけられないからです。宗教家とはいつの時代も、私たちの真の願いを見極めこれだと言って提示し一緒になって実現に向かって歩む人達のことです。言わずもがなでしょうが、今の日本には宗教家は果たして存在しているのでしょうか？

良く生きたいと願うことは「今あるここから歩み続ければ必ずたどり着くことが出来るあそこ」を信じることです。今を信じ毎日を信じ明日を信じ未来を信じつまりは「今あるあなたの生きること」を信じることです。生きることを信じるからこそ、こうやって毎日の生活があり、喜怒哀楽があり、自分が今ここにあると実感できるのでしょう。先ほどの日蓮聖人の言葉を、私は今あるわたしに沿って現代語訳してみます。「日々前向きに意志を持って行動しなさい（行）そして生きるための智慧を身につけなさい（学）そうすれば毎日の生活を楽しく安らかに過ごせるのです。自分一人だけでなくその楽しい生活を皆と語り合い、分かち合いなさい。それは今あるあなたの生きることを信じること（信）から始まるのです。」

私の行学二道はこの現代語訳につきます。日蓮教学を極めた偉いお坊さんや学者の方からは素人考えの戯言と無視されるか、どこにそんなことが書いてあるのかと糾弾されるかでしょうが、実践と生きる智慧に裏付けられた「信」は強いのです。私は先日のキノコ採りで行学二道の本質を教えられました。かのキノコマイスターだけでなく、道を求める人達は、私が見ようとしなかっただけで、周りにはたくさんいるはずです。それぞれの道を求める人との出会いこそ私の求める道と思い至ったその一日は、私にはとても貴重な一日でした。

狂言綺語三十一・・・境界

あっという間に朝晩冷え込む季節になりました。つい1ヶ月ほど前は最低気温が十五度前後だったのが今は五度前後霜も降りそうな朝です。日が西に傾いた瞬間急激に気温が下がり大気も乾燥してきて、暖房と加湿器が欠かせない季節がこれから数ヶ月続くことでしょう。日中との寒暖差が大きくなり秋晴れの晴天が続く中、大根や白菜は日々大きくなってきましたがそれに反比例して大切な小松菜を丸坊主にしてくれたバッタや青虫の跳梁も終わりのようです。今度は鳥の攻撃が始まるでしょう。彼らの侵略から野菜たちを守らなければなりませんが、さてどうしたものか案山子が良いのか有効な対処法が思い浮かびません。

猪と思われる足跡を見つけました。足跡と言うよりは大地をガッガッと荒々しく蹴散らして行ったような跡が規則正しく三十メートル程続いています。そして始点と終点には笹竹の群生の間にぽっかりと小さな穴が空きその先は荒れた雑木林の崖へと繋がっています。冬支度のためのえさをあさりに、笹竹の入り口を通って深夜山から人里に侵入し、そして笹竹の出口からまた住処に戻って行ったというところでしょうか。その足跡の周りにはドングリの実や栗のイガが散乱していました。山の食料が乏しくなって里に紛れ込んだか、意図的に人里に侵入したか、冬を乗り切るためにお腹を満腹にする必要があったのでしょう。

「弟子の第一人者」とはどういう人かについて語ったお釈迦様の言葉が残されています。注1「弟子たちよ、これらの人達は私の弟子の中で第一の者たちである。智慧の第一はサーリプッタである。私の教えを多く聞く第一はアーナンダである」と次から次へ第一人者があげられていきます。「神通第一」「持律第一」「頭陀第一」などのように明らかに仏道修業を極めた第一人者のほかに「良い声の持ち主第一」「粗末な衣服第一」「寝床を設けること第一」「最初に食券を引く者の第一」など、あれと思うような第一人者も見らます。お釈迦様は一つのことに専念しそれを求め続ける者たちを「〇〇第一」と呼んで讃えています。おのおのができることから始め、他の人がまねしようとしても簡単には出来ないまでに専念し続けた者は、みなすべて安らぎの処（悟り）へと続く道を歩み続けている者たちだと言われているのです。自分のできることにおのおのが専念すること、それが仏道への入口になるということです。

入口がいろいろあれば道もいろいろあることでしょう。出口ももちろんいろいろあるはずですから、その出口の先にある世界も千差万別のはずです。しかしお釈迦様の指し示す道に限っては出口の先にある世界は一つです。そこは「安らぎの処」。人それぞれ、その人に合った入口の扉を指し示し開けてあげることがお釈迦様の役目です。その人の能力や経験、性格などを見極め、この入口から仏の道に入りなさいと教え、その教えを私たちが信じることで初めて入口は開かれるのです。その後はその道をお釈迦様と伴に歩み精進を続ければ必ず娑婆世界の出口が見つかります。その出口の先の世界は、それぞれの入口から入って、お釈迦様と伴に歩み精進した人達に満ちあふれた「安らぎの処」。

以前「自灯明」「法灯明」という話しをしました注2。「法（教え）と自ら（信と行）を頼りに仏の道を歩みなさい」というお釈迦様の教えです。自らを頼りとする「信と行」は人それぞれ違います。性格も体格も能力も経験も違うわけですからあたりまえのことです。だからこそその人に合った入口をお釈迦様は示して下さるのです。歩む道も自らの足で歩まねばなりません。仲間たちは隣で同じような仏道修行に励んでいるように見えても、出口の先の同じ世界にたどり着くためには、それぞれが異なる道を歩んで行かなければならないのです。大きな円を私たちの住む娑婆世界とすると、その三六〇度の円周上に無数の入口が

有り、そこから延びる道は中心の核に向かって伸びています。ただ直線的に向かっている道は皆無で、曲がりくねり戻り交差し紆余曲折しながら複雑な軌跡を描いているのですが、しかし必ず最後は中心の核に繋がっています。言うまでもなくその核は「安らぎの処」。お釈迦様と伴に歩んでいるという実感があればこそ、紆余曲折の道を自灯明と法灯明で歩んでいくことができるのです。ですから、一見孤独でつらい道のりに見えるかもしれませんが、この道を歩むことは大きな悦びなのです。

出入り口のあるところは境界です。「内と外」「山と里」「ハレとケ」「極楽と地獄」「生と死」など異なる世界の境界には必ず出入り口があります。日本人は二つの異なる世界の往来は可能と考え「内」と「外」の往来の時は、無事を祈り体を清め汚れを祓い、その境界を往来してきました。私たちの日常もいろいろな境界を毎日出入りしているのだと思います。一番身近な境界は玄関です。そこを出れば外の世界。私は日常にある沢山の物理的、心理的境界を越えるとき、自由にストレスなく出入りできるようになりたいと思っています。それが「安らぎの処」そのものではないかと考えるからです。ですから私は、できる限りいろいろな境界を往来することを日々試みます。境界を往来し、試行錯誤を重ねることがお釈迦様の示す「核」へ繋がる道と信じているからです。

いとも簡単に猪が超えたあの山と里の境界は琉游舎の敷地から道路を挟んだ所です。そこで深夜、猪がえさを漁りに蠢いている姿を想像すると、ここはもはや猪には「内」で私には「外」なのか、それとも両者の「入会地」なのか分からなくなってきてしまいました。

注1：増支部経典第十四是第一品　注2：琉游舎だより17号・20号

狂言綺語三十二・・共棲

今年もタヌキが車にはねられている姿を何度か目撃しました。猫であれば、一瞬動くものを認めると静止しますがすぐに素早く身を隠す行動に出ます。ところがタヌキは静止した後、またヨタヨタと歩き始めるのです。運転している人は猫と同じように素早く逃げ去ると思っているので、間に合わずにはねてしまうようです。このような光景を見るのは春の初めと秋の終わり。山の中で冬の飢えを耐え春になって食料探しに里に下りて、空腹でよれよれになっているところを車にはねられたのでしょうか。秋の終わりは冬に備えてお腹にいっぱい食料を詰め込んで、重い体をずるずると引きずっているところをはねられたのでしょうか。よくタヌキは人を化かすといわれていますが、あのヨタヨタ歩きを見ていると、滑稽さを覚えても狡猾さを感じることができません。気の毒に、何であのような汚名を着せられたのでしょう。

私が住んでいるこのコリーナという開発分譲地は、かつては里山と言われたところです。里山は、ならやクヌギの落葉樹を中心とした森や竹林で構成されている、人の生活圏の周辺にある低山の森林地帯のこと。周辺に住む人々はおよそ三十年周期でならやクヌギの木を伐採して薪や炭を焼いたり、椎茸栽培の原木にしたり、毎年落葉を集めて腐葉土の肥料にしていました。里山は人にとって経済価値の高い重要な資源だったのです。人は継続的に燃料と肥料を得るために、里山を管理し持続可能な循環型として使用してきました。しかし薪や炭は電気やガスへ、腐葉土は化学肥料に取って代わられてしまい、もはや手間暇のかかる里山の管理は不要になってしまったのです。そのおかげで私は今この土地に住むことができている

のですが、その代償に循環型としての里山は失われ、ただ管理されない雑木林が周りに遺されることになりました。タヌキは「けものへんに里」と書きます。里山の生きものだった狸は、整備されたコリーナの居住地区と、かつては里山として整備されていたのに今や荒廃した山となりはてた住みかの間を、えさを求めて徘徊している時に車にはねられる、哀れな存在となってしまいました。

狸は里山と共に生きてきたのに、今ではそこに人が住んで里山を破壊してしまったわけですから、狸にとってはいい迷惑です。あとから入ってきた人間は少しは遠慮しても良さそうなものですが、なぜかあとから来た人間ほど、権利を主張し、声も大きく、賢く攻撃的なので、元いた生きものたちは小さくなっているしかないのが実情なのでしょう。野焼きの煙が洗濯物に付くと言って農家から野焼きの権利を取り上げ、牛舎が臭いといって移転を余儀なくさせると言う話しをよく聞きます。人間同士ならばまだ話し合う余地もありますが（でもたいがい先住民は負けます）居住地を侵された小動物たちはただ身を隠してひっそりと生きるしかないのでしょうか。

共棲と言う言葉があります。文字通り共に棲むと言うこと。では「共に棲む」ということはどういうことでしょうか。私はエコロジストでも動物愛護を標榜するものでもないので、生きる権利や環境破壊、可哀想や可愛いなどの文脈で語るつもりはありません。「共に棲む」ことは「私も社会も自然も共に生きる」ことと私は考えます。「私が私ためだけのために生きること」はできません。「互いが持ちつ持たれつ」の「お互い様」の考えによって初めて「私が生きる」ことが可能になるのです。「縁りて起こる」という「縁起」の法則に従って説明すれば、私が今ここにあることは、私と私以外の全ての関係によって縁りて起こった「結果」であり、自らの行為によってもたらされたもの（自業自得）です。「共棲」は「お互い様」の原理によって支えられる概念です。そして「私は私以外の全てによって生かされている」ことを深く自覚して初めて可能になる言葉ではないかと考えます。

「共棲」は共に棲む他者と生きることですから、身近な例をいえば「夫婦」です。夫婦げんかは真の共棲に至るための重要な過程です。けんかという対立がお互い様という共棲の心に触れたとき、互いを必要とし、理解し、尊重し、そしてどちらか片方だけでは不可能であった新たな創造的関係を可能にしていくのではないでしょうか。個人でも集団でも国家でも異なるもの同士が接触し融合し共棲していく過程で、対立や矛盾、戦いなどの緊張関係が生じないわけがありません。緊張関係の中から互いの共通部分を見いだし拡げて行き、異なる部分は尊重し侵さないという「お互い様」の原理が働けば「共棲」への道を進むでしょう。反対に異質点を尊重せずそれを無きものにしようとするとき、緊張関係は服従や破壊、同化や抹殺への道を歩むことになるでしょう。他者を理解し尊重し共感することは他者をありのままに観ることです。そしてその他者は鏡となって自分自身をありのままに観ることにもなるのです。ですから「共棲」の道を歩むことはお釈迦様とともに「安らぎの処」へと向かうことなのです。

私がコリーナの自然や住む人々と共棲することは、私自身がありのままに観て考えて語り合い働きかけ続けることです。つまり不断の「行い」。ここに住み続けて二年半、私はここで、何によって何とともに生かされているのか、まだ分かっているわけではありません。ただあの車にはねられたタヌキと私は共棲していたとは決して言えないでしょう。里山を追われた生きものたちは人との共棲を望んでいるのでしょうか？最近の猪などの獣の目撃情報は、彼らによる里山再生への意思表示かもしれません。

狂言綺語三十三・・言語道断

最近辞書を引いても読めない字が多くて困ってしまいます。正確にはどう読んでよいのか分からない字が多いということです。漢字は表意文字ですから文字自体に意味があります。音読みは中国語の発音（主に漢音や呉音）をそのまま音にしたもの。訓読みは漢字に翻訳としてつけられた日本語です。と言うような言わずもがなの漢字の基礎は今やガラガラと崩れ落ちているようです。ある名簿を見ていたら、瞬間的に意味や音を捉まえられない漢字の羅列で、目がクラクラとして漢字酔いになりそうでした。いわゆる当て字というものなのでしょうが、なんと発音してよいかふりがなが付いていないと読めません。たとえ付いていたとしても何でこの発音になるのかが分かりません。言葉は時と共に変遷していくものですから、意味や読み方が変わったり、新しい意味が加わることは当たり前で、それは言葉にとって健全なことです。このいわゆる「キラキラネーム」や「DQN（ドキュン）ネーム」と言われるものが、果たしてこの健全な変遷の流れにあるものなのか、日本語と日本人の将来を写す水晶玉のような気がしてなりません。余談ですが、昭和の時代に塀などで散見したやけに意気がった漢字の羅列を思い出してしまいました。私は日本と日本語を愛死天流ので、どうか鬼魔愚零で日本語を仏恥義理したりしないで下さい。夜露死苦！

かつての文学によく見かける「五月雨（さみだれ）」「氷菓子（アイスクリーム）」「嗚呼（ああ）」「亜米利加（アメリカ）」も「英吉利（イギリス）」も全部当て字です。お経の中にも沢山当て字が出てきます。「般若（はんにゃ）」「涅槃（ねはん）」は、お経の原語であるパーリー語ではそれぞれ「パンニャー」「ニッバーナ」と発音され、音そのままを漢字の音に当てたものです。お経を訳すときに同じ意味の中国語がある場合にはその中国語に置き換えて訳しましたが、ぴったり一致する中国語がない場合や既存の中国語に置き換えてしまうとニュアンスが伝わらない場合は、パーリー語をそのまま音写したのです。

「般若」は「悟りを得る智慧・真理を把握する智慧」、「涅槃」は「煩悩を滅した悟りの境地・死ぬこと」などと辞書で解説されています。さあこの解説で「般若」や「涅槃」が理解できたでしょうか。私には「悟り?」「真理?」「煩悩?」「それはどういうこと?」という新たな疑問がわいてくるばかりです。言葉の解説が解説する言葉の周りをぐるぐると回っているだけにしか見えないのです。言葉はその言葉を受け入れ、言葉の指し示すままに実践して初めて意味が体得できるのだと私は考えます。狂言綺語で私が毎回書いていることはいつも同じたったひとつのことです。それは「ありのままに観る（般若）という行いの実践が安らぎの処（涅槃）にたどり着くことそのものだと信じること」です。「般若」も「涅槃」も「行い」の中で初めてその言葉の意味が次第に形を表し、体に実感できるようになるのです。

法華経の中に「語言道断」[注1]と言う言葉があります。これは私達もよく使う「言語道断」のこと。通常は「そのふるまいは言語道断だ!」など言葉では言い表せないとんでもないひどいことの意味に使われますが、本来の意味は「言葉では表現できない仏さまの真理」をさす言葉です。「言語道断」は長い年月に渡る僧侶たちの、仏の真理（言語道断）の代弁の中で意味が真反対になってしまいました。このように「仏の真理」が「ひどいこと」に変わってしまった理由はなんでしょう。最近ニュースを見ていると「沖縄の心に寄り添う」というフレーズをよく耳にします。何人かの立場ある方がその言葉を喋っているようですが、いつの間にかその言葉は「沖縄の心を踏みにじる」と私には聞こえてきてしまうのです。「寄り添う」という単語の意味が「踏みにじる」という意味になって私に受容されてしまったということです。全く正反対

の意味に聞こえてしまう理由は明らかでしょう。その人の話す「寄り添う」には寄り添うという実践も実体もなく、真反対の振る舞いをしているその矛盾を取り繕う言葉にしか聞こえないからです。意味を伝えるための言葉を、意味をごまかすために使っているのです。日本人は古代より言霊信仰がありました。言葉に宿る霊力が，言語表現の内容を現実に実現することがあるという言葉への信仰です。「寄り添う」を乱発されている方々は言霊信仰の持ち主なのでしょう。乱発しすぎで神仏の怒りを呼び起こさないことを祈るばかりです。

「言語道断」の意味の変容も「寄り添う」と同じように言霊信仰を信じて、聞く人に「言語道断」を乱発してきた人たちの仕業なのです。仏の真理（言語道断）を説法する僧侶たちの現実での振る舞いに、言語道断（ひどいこと）の所行を見たり、説法を信じてとんでもないひどい目に遭った人々の総体が「仏の真理」を「ひどいこと」に変化させてしまったのです。日本に入ってきてからこのように全く違う意味に変容して使われている仏教由来の言葉が沢山あります。「諦める」「無学」「分別・無分別」「道楽」「因縁」「縁起」「我慢」など枚挙にいとまがありません。その意味の変遷は「行い」を怠った人々の置き土産であり、日本人の仏教受容の歴史の一断面なのでしょう。仏教は「はじめに行いありき」です。「行い」によって言葉は私達の身となり実となります。そしてその行いの道そのものは「言語道断」であり、つまりは「言葉で語る道が断たれている」ところまで日々実践し続けることなのです。

私の実践の場である「琉游舎」はその言葉の意味するとおりに、私の身となり実となっているでしょうか?今回は言葉で表現するもどかしさを感じながら筆を置きたいと思います。

注1：法華経安楽行品14

狂言綺語三十四・・・犀の角

十二月十日を過ぎてやっと冬らしくなって来ました。霜柱が立ち、絞った雑巾も朝の八時ならばカチカチになってしまいます。最後の一葉も散って落ち葉掃除はこれで今年最後を迎えられそうです。ここコリーナの冬は昼も夜も空のきれいな季節。空気が耳元でキーンと音を立てるような冷え込みが厳しい朝、まだ暗い空には星がまぶしいくらいに煌めいています。十二月に入ると明けの明星が見られるようになりました。一目でそれと分かるこの星は、日の出前後にしか輝くことができない自分の存在を懸命に主張しているのでしょう、燃焼と呼ぶのがふさわしい力強い輝きです。真青な空に、丸い地球をなぞるかのように飛行機雲が北に向かって伸びていきます。どこに向かって飛んでいくのかと思っていると、逆に東に向かってもう一つの飛行機雲。青空に描かれる白い線の行方につい見とれ寒さを忘れてしまい、自分のくしゃみで我に返るありさま。冬の冷え冷えと澄んだ空気の中で一人空に向き合っていると、宇宙に包まれて自分は孤独であることと、宇宙のすべての存在と自分は共棲しているのだということの相反する思いを強くします。

お釈迦様の言葉を集めた「スッタニパータ」に「犀の角」と題された章があります。最初の偈文です。

「あらゆる生き物に対して暴力を加えることなく、あらゆる生き物のいずれをも悩ますことなく、また子

を欲するなかれ。況や朋友をや。犀の角のようにただ独り歩め。」[注1]　四十一ある偈文の前半部分はそれぞれ、人と交わることによって引き起こされる「貪欲（むさぼり）瞋恚（いかり）愚癡（無知）」の根本的な三種類の煩悩を強く戒め、そうならないためには「犀の角のようにただ独りで歩め」という言葉で全て締めくくられています。インドでは犀の一本の角は「孤独」の象徴です。お釈迦様は「犀の頭頂部にそそり立つ一本の角のように、独り自分の足で自ら歩んでいきなさい」とおっしゃっています。相変わらず厳しい言葉ですね。行いの道を歩むとき私たちはお釈迦様や善知識（善き友）と伴に歩みます。お釈迦様の教え（法灯明）をそれぞれ共通の灯火としながら、おのおのあるがままの道を信と行（自灯明）を頼りに歩んで行くのです。以前もお話ししたように[注2]共通の「法」と独自の「信行」ふたつの灯明を頼りに歩まなければならないのが仏の道です。自らの「信と行」はそれぞれ皆違います。仲間だから一緒にやろうと言ってもそれはあるがままの行いにはなりません。だからお釈迦様は「犀の角のようにただ独り歩め」といわれるのです。自灯明は孤独の灯明。孤独でなければ自らの道を歩むことはできないのです。

～ひとつの妖怪が日本を徘徊している、きずな主義という妖怪が～　現代の日本にはつながり不安症候群の人たちが溢れかえっているように見えます。誰かとつながっていないと不安だからあたりかまわず四六時中スマホで文字を打ち続けている。仲間内の関係の「きずな」だけが唯一の自分の命綱だと思い込み、いざその糸を切断されると、もう私の居場所はないと苦しむ。「つながり・きずな教」を盲信している社会では、そこから弾き出された人や距離を置く人は、変人奇人、のけ者にされ、いじめられ、揚句の果てに敵対視されかねません。ここ数年私の耳には「きずな」を賛美し、「つながり」を唯一無二の人間関係だと唱える布教の言葉が、歌・漫画・小説・ドラマ・評論などに形を変えそこかしこから聞こえてきます。私には「きずな」は人の行動をがんじがらめにする見えない鎖のように思えるのです。それは人に苦しみを与える原因です。他者とのつながりを求めれば求めるほど、それが断たれるであろう時の不安が増すばかりで、その不安が強迫観念となって、見かけだけのつながりを求めて右往左往しているのではないでしょうか。「きずな」という名の見えない鎖に縛られた行動はあるがままの行いとは言えないのです。

お釈迦様は一度その鎖を断ち切って、真のあるがままの自由、つまり孤独であること、そこから歩み始めなさいといっているのです。犀の角の歩みをつづけることは「孤独＝無我」を獲得する歩みであり、その道のりの中で初めて真の絆を感受することができるということです。それは法灯明に鮮明に映し出される、私と善知識とお釈迦様とを繋ぐ「法の絆」。自灯明が照らす「信と行」の歩みはきずなへの執着を一度断ち切る行いです。そして日常の中でその歩みを続けることで、私と宇宙のすべての存在とを結ぶ関係の糸がだんだんに再構築されていくでしょう。私はその毎日の行いの中で再構築された関係性を「絆」と呼びたいと思います。私たちの毎日は社会との関係性の中でしか生きることが出来ませんから、その「絆」は一見今までの「きずな」と同じように見えているかもしれません。しかし「犀の角」の自覚を持って日常をあるがままに過ごすとき、私の関係性の糸は縦横自在に時を変え所を変え自分の計らいを越えて繋がり紡がれていくのです。そして当たり前の日常こそが、毎日を心穏やかに楽しく安らかに過ごすことのできる毎日であることを私に教えてくれるのです。

夜空を眺めていると「銀河鉄道の夜」と宮沢賢治に思いを馳せてしまいます。彼の作品は、独りである自分と永遠のいのち（宇宙）と共棲する自分、この相反する二つの思いが生んだものだと勝手に思っていましたが、最近読み直すとちんぷんかんぷん。彼の童話は昔よく読んでなんとなく分かった気になってい

ましたが「分かったということが分かっていなかったこと」と分かっただけで今はよしとし、本格的読み直しは棚上げにします。

注1：「ブッダのことば　スッタニパータ」岩波文庫　中村元訳
注2：琉游舎だより第17.20.39号

狂言綺語三十五・・・睫毛と虚空の間

新年明けましておめでとうございます。皆さんおせち料理を頂いているでしょうか。かつて五節句（桃の節句や端午の節句）をお祝いし、神様に供え食べたものを「御節供（おせちく）」と呼んでいました。これが一年の節日で一番大切なお正月料理をさすようになって広く庶民に行き渡り「おせち料理」と呼ばれるようになったとのことです。おせちはまずは土地の神様や祖先を供養するお供えだったのですね。現代は既製品の方が手間も材料費もかからずおいしくできているので、お重を買ってくるか詰める人がほとんどでしょう。食べることが目的であればそれでも良いのですが「御節供」が目的であれば、できる限り材料は自分で作り、土地のものを使い、自分で調理することが、私たちの一年を支えてくれた大地と生き物と人々に感謝をすることであり、また次の一年を楽しく豊かに過ごすことができるよう、願い誓い行うことと私は信じています。その様なわけで今年も、鏡餅におせちやキムチ、御守護袋を作りコリーナの花木で琉游舎を荘厳し、新しい一年の初日の出を迎えることができました。ありがとうございます。

「正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め　これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく　日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく　とくもまさり人にもあいせられ候なり」注1日蓮聖人が正月に女性信者の方から「蒸し餅百枚、果物一篭」を供養されたお礼に書いた手紙の言葉です。要約すると「元日は一切の始めの日です。この日を大切にする人は、月が次第に満ち、日が普く照らしていくように、内には人徳を積み、外には人から敬愛をされるのです」となります。正月は一年のスタートの日、それは全ての始まりの日でもあるのです。そのかけがえのない日を大切にする人は、この一年も自分ばかりでなく周りの全ての存在と供に豊かで実りある楽しい日々を享受できるという言葉です。あらためて自分自身の居ずまいを正す一年で一番大きな節目が正月。日蓮聖人の生活されていた七百年ほど前から変わらない正月の意味はここにあるのだと思います。

正月を寿ぐこの言葉に続いて日蓮聖人は「そもそも地獄と仏とはいづれの所に候ふぞとたづね候へば」と、いきなり地獄と仏はどこに存在しているのでしょうと問いかけています。この疑問も何百年も変わらない定番の疑問ですね。対する聖人の答えは明快です。様々な経を仔細に調べてみると「我等が五尺の身の内に候ふとみへて候ふ」そして「我等凡夫はまつげの近きと虚空のとをきとは見候ふ事はなし　我等が心の内に仏はをはしましけるを知り候はざりけるぞ」と明快に断じています。「地獄も仏も私たちの身の内（己心）に存在しているのであり、それが分からないのは、あまりに近すぎる睫毛とあまりにも遠すぎる宇宙の果てを私たちが見ることが出来ないようなものなのです」と語られています。あまりにもシンプルで拍子抜けするような答えです。もう少し難しい理屈をこねて煙に巻いて貰った方が有り難い言葉に聞こえるかもしれませんね。しかしお釈迦様や日蓮聖人が見られたありのままの世界（実相・真如）は自分の

目の前にあるあたり前のとても明快でシンプルな世界なのです。ところが私たちは睫毛と虚空の間を右往左往し、地獄に落ちるぞと脅迫されては紙切れを買い、成仏できますよとすかされては木屑や石ころを有難がり、あるはずもないものにすがっているのが現実の姿なのです。

自分の睫毛を見るには鏡を見ることです。虚空を見るには目を閉じることです。このように観ると、自分が自分自身を観ていることと、その自分は目を閉じれば何もない真っ暗闇の世界にいるという事が分かります。そしてひたすら観ることに専念し続けると、次第に自分自身というものが果てのない宇宙の光り（法）の中に包まれているという安心感に満たされていくでしょう。これを難しい仏教用語でいうと「観心（かんじん）」といいます。「観心」は人それぞれ自分に合ったやり方を見出せばよいのです。例えば真冬の夜空の星をひたすら眺めるとき、あるいは眠る前のひと時まぶたの裏に自分の姿を映し出してみるとき、そこに集中し一心に観つづけると何かにすっと引き込まれる感覚がわき起こって来るでしょう。そしてやがては何もかもなくなる空っぽの状態がやって来るのではないでしょうか。空の心になると言ってもいいでしょう。それがありのままに観るということなのです。鎌倉時代の祖師、道元や親鸞や日蓮は只管打座し念仏や題目を唱えることで、つまり「観心」によって自分の内なる地獄を打ち消し仏を観ようとしてきました。私たちはどのような方法で仏さまを観ることができるか、方法は自由です。ただわたしにとっては、自分の内なる地獄を打ち消し仏さまに出会いたいと願い誓いありのままに行うこと、それ自体が仏さまに出合うことだと確信しています。

わたしの睫毛と虚空の間を右往左往する日常は、昨日も今日も明日も続いていきます。今年の正月で六〇回目の年の節目を迎えました。一日の節目は二万回以上、細かい節目は右往左往のその時ですから数え切れません。一生の節目はまだまだ先かもしれませんし、明日かもしれません。一日、一年、一生の節目はまた今この瞬間そのものでもあるとわたしは考えます。ですからこの一年も、考え、行動し、撥ね返され、また考え、行動していくその瞬間を節目節目と観て、傍目にはあたふたと悪戦苦闘しているように見えても、心はいたって平穏というような一年にしていきます。一年の計は元旦にあり。有言実行、本年も宜しくお願いいたします。

注1：昭和定本日蓮聖人遺文 1855 ページ「重須殿女房御返事」

狂言綺語三十六・・・鏡を磨く

車を屋根のないところに駐車していると、コリーナではよく鳥のフン攻撃にさらされます。特に私の車の場合はサイドミラーやその近くのドアのところが集中攻撃に遭っています。おそらくサイドミラーに映る姿を自分か他の鳥か判断つかないまま、ミラーを闇雲に嘴でつつき、戸惑いと恐れの中でフンをしているようなのです。その姿を愚かといって哀れむのは簡単ですが、そこに映るもう一人の自分は何者か知ろうとして必死になっているようで、ちょっといじましさを感じてしまいます。それが私の毎日の生活の姿ともダブって見えてしまうのは私が少し考えすぎているからなのでしょうか。

子供には怖いものが沢山あります。二歳の莉子はお父さん以外の男の人が怖くてなりません。三歳だったときのジオは犬がダメでした。正月に家にやって来る獅子舞の頭が怖かったり、墓の前を通り過ぎるこ

とや夜トイレに行くことが怖かったり。私も子供の頃は怖いものが沢山ありました。さて還暦を過ぎて人生も二周目に入ると、「怖いものなんぞ何もない！」と逆に強がりを言いだす始末です。怖いものがなくなったのではなく、怖いものを避けて通ったり、眼をつぶる世間知が身についただけなのでしょうにね。

日蓮聖人が信者に与えた手紙の一節です。「迷う時は衆生と名づけ悟る時をば仏と名づけたり、譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し」[注1]前を少し補って訳すと『(浄土や穢土といっても別の国土ではなく、そこに住む私達の心の善悪によって浄土にもなり穢土にもなるのです。)衆生も仏もまた同じで、迷う時を衆生と名付け、悟った時を仏と名付けるのです。譬えば曇っている鏡を磨いたならば輝く珠のように見えるようなものです。』浄土も穢土も迷いも悟りも私たちの内にあるものなのです。そしてその内にあるものを曇った鏡で見たならば迷いであり、磨き上げればそれは悟りとなります。鏡は自分自身をありのままに映し出します。鏡を磨き上げることはありのままに観てありありのままに行うことなのです。

ではその鏡をどこまで磨き上げればありのままに映し出す鏡となるのでしょう。それは私には分かるはずもなく、もちろんお釈迦様でも分からないでしょう。というのも鏡を磨く行為そのものが、行いであり信心であるからなのです。信心にも行いにもここで終わりという終点はありません。ですから今この時点で私の鏡も皆さんの鏡も曇っていてあたり前なのです。何も見えなくても悲観することはないでしょう。闇鏡を明鏡にすることが目的ではなく磨き続けることが大切なのですから。例えば日々を自分の願い通りに過ごすことが、自分を映す鏡を磨いていることと考えてみたらどうでしょう。お釈迦様には「毎自作是念　以何令衆生　得入無上道　速成就仏身」[注2]という誓願があります。「私は(お釈迦様)すべての人が仏の道に入り、仏になれることを常に願っている」のです。そのためにお釈迦様は永遠の過去から永遠の未来まで自分の鏡を磨き続けています。私達はそのお釈迦様の磨く鏡(教え)にいつかは自らの姿を写したいと心に願いながら、毎日自分の鏡を磨き続ければよいのです。自らの願いを誓い、それを毎日行うことが自分の鏡を磨くことです。私の場合、願いはとてもシンプルです。毎日を穏やかに楽しく豊かに過ごすこと。そのために日々の生活があり、それが私自身の鏡を磨くことだと信じています。

人それぞれ願いも鏡の磨き方も違っていて当然です。「深く信心を発して日夜朝暮に又おこたらず磨くべし　何様にしてか磨くべき　只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」[注1]日蓮聖人は前出の手紙に続けて、ただひたすらに「南無妙法蓮華経」と題目を唱えることが鏡を磨くことだと語っています。時代も社会も個人状況も違う中で、十把一絡げの同じ磨き方をする必要を私は感じません。何かを拝んだり唱えたりすることは鏡を磨くための準備にしか過ぎず、ただの木片や紙切れを拝んでも、田の蛙[注3]のようにただ題目を唱えても、それは信心を形にしているに過ぎません。形は行いが伴わなければすぐ形骸化します。私は仏さまの道を歩む方法に定型があるとは思っていません。毎日をちゃんと過ごすこと、それが自分の願いであるならばそのようにちゃんと過ごしてみることが、仏さまの道を行く自分なりの唯一の方法だと信じています。そしてそれが自分なりの鏡の磨き方であることは言うまでもありません。

自分にとっての怖い存在は私の曇った鏡を良く磨いてくれます。例えば自分を叱る存在であった両親や先生や上司は、私の言動が彼らにどのように映っているかということを叱咤激励することで私に示し、より良い行動を促し、今私は何を考え何をしてここにいるのかを、容赦なく映してくれる存在なのです。成長するにしたがってその鏡は家庭から学校、社会まで広がって行き、自分の周りは自分を映す鏡だらけと

なります。そしてその鏡を避けて通ったり見ないようにする取捨選択の知恵を身に着けていきます。これは人が社会的な存在として生きていく知恵であることは言うまでもありません。私はその数多ある社会的な鏡を磨くことを諦め、毎日を穏やかに楽しく豊かに過ごすというために唯一一枚の鏡を磨き続けることに決めています。ですから「怖いものは何もない！」というのはただの強がりに聞こえるかもしれませんが、私の磨く鏡をお釈迦様の磨く鏡（教え）の末席に加えてもらうのだという誓いの言葉でもあるのです。

たまに洗面台の鏡に映る自分の顔を見ると、自分ってこんな顔をしていたんだと驚くことがあります。サイドミラーに映る自分を嘴でつつく鳥の気持ちがちょっと分かった心持ちになります。自分のことを自分は何も知らないんだなと

注1：一生成仏抄　注2：妙法蓮華経量来壽量品　注3：琉游舎だより第２５号

狂言綺語三十七・・・無明

冬至を境にして日の入りの時間がゆっくりと遅くなってきています。日の出も一月十日あたりからだんだんと早くなってきています。私は目覚ましに頼らなくても朝の光で眼がさめてしまうのですが、まだ起きる時間でないと知るとつい二度寝をしてしまい、そんな時はたいてい寝過ごして大慌てとなります。朝の光と鳥の声で目覚める春。うるさいセミの声と暑さで目覚める夏。涼やかな虫の声と夜長でついつい寝すぎる秋。寒さと暗い朝でいつまでも布団から出られない冬。私の四季折々の寝覚めをまとめるとこんなところでしょうか。カーテンを遮光にしていてもその間から漏れる光で、朝の寝覚めは左右されてしまいます。日の出とともに目覚め、日の入りとともに眠くなる。人間が動物である限り当たり前のことですね。

今、地球上は過剰な光に溢れています。常夜灯の光により星空は失われ、農作物は生長を阻害され、人は寝不足にとりつかれ、エネルギーは無駄に浪費されていきます。これは光害です。防犯灯と星空の二者択一は意見が別れるところでしょうが、二十四時間営業の店に隣接する田圃の稲の生育が著しく悪いという事実を知ると、同じ生物である私達も過剰な光を浴びると、どこかに生育不良が生じたとしても不思議ではありません。闇の世界を克服して望むままにいつでも光が得られる豊かな生活を実現したと思ったら、その光が害を及ぼすことになろうとは、エジソンさんも松下幸之助さんも考えもしなかったでしょう。

佛教において「光」は大きな意味を持っています。「爾時佛放眉間白毫相光　照東方　万八千世界（その時仏さまは眉間の巻毛から光を放って東方世界中を悉く照らされた）」注1この眉間にあって光明を放つという長く白い巻き毛を白毫相と言います。仏像ではその部分に水晶などをはめ込んで表現しています。仏教では、光は仏や菩薩などの智慧や慈悲を象徴するもの。つまりこの白毫相から放たれ、すべての世界を遍く照らす光は、煩悩の根本原因である無明（むみょう）を取り去り、私たちをありのままの世界（安らぎのところ）へと導くお釈迦様の知恵と慈悲の象徴なのです。その「光」はお釈迦様の「教え」であり「法」ということです。ありのままの世界を全く見ることのできない真っ暗な世界が「無明」です。「貪り・怒り・無知」によって眼を閉ざされた私たちの生きる場所。その無明の暗闇の世界で日々右往左往している私たちに、お釈迦様は教えの「光」を絶えず放ってくださっています。ただ残念ながら私たちはその「光」になかなか気づくことが出来ないのです。それはなぜなのでしょう。

闇があるから光がある、光があるから闇も存在できる。「光と闇」は表裏一体コインの裏表のような存在です。光だけの世界に慣れてくるといずれ闇の存在を忘れ、そして光のありがたさも感じなくなるでしょう。反対に闇の世界に安住してしまうと、光を求める気持ちは失せて闇こそが光の世界だと勘違いをしてしまうようになるでしょう。「光と闇」だけでなく「善と悪」「生と死」「楽と苦」「権利と義務」「自由と束縛」すべて表裏一体であるという認識がわたしたちには必要ではないでしょうか。つまり片方をしっかり自覚しなければもう一方を希求することが出来ないということです。「悪」を認識できなければ「善」を求める行いに歩みだすことが出来ません。「束縛」を自覚できなければ「自由」を求める行動には進めないはずです。自覚があればこそ求めるものがはっきりと照らし出されるのです。

お釈迦様の「光」はあまねく人々の無明を照らし出します。その時私たちの内側に果てしなく拡がる無明の世界が明るみに出されるのです。私たちの毎日はこの「光」の照らし出す自分自身をしっかりと見つめ、そして無明を克服したと思っていたことが実は単なる思い上がりであったことを思い知る毎日なのです。「無明の自覚」です。この自覚があればこそ、また明日を迎えるための日々の「行い」の歩みが可能になるのです。このお釈迦様が照らし出す「光」は求めなければ与えられません。求めるということは信ずるということ。お釈迦様の「光」つまり「教え」を信じ求めたとき、初めてその「光」は私たちを照らし、今の自分のありのままの姿を映し出してくれるのです。そこに映し出される、いまだに「貪り・怒り・無知」に支配された自分に、がっかりする必要はありません。その自覚は逆に少しずつでもその闇に「光」がさしていくように日々「願い・誓い・行う」ための力となってくれるはずです。ありのままの心を覆っている黒々とした闇、しかしその闇の雲の下には「光」輝く安らぎのところがあると信じ、毎日を心穏やかに楽しく豊かに過ごすことが出来れば「光」はどんな深い闇にもいつかは必ず届くはずなのです。

お釈迦様の「光」は信心が、光害の光は物理がもたらすものです。それは心と体に作用します。人は「心身一如」。精神と肉体は一体です。闇を忘れた体は心にどのような弊害をもたらすのでしょう。環境からも身体からも闇を奪われてしまったら、畢竟、心の闇も完全に奪われてしまうはずです。そのとき世界は苦しみも悲しみもないユートピアになる！　そんな筈はないですよね。苦しみも悲しみもなくなれば、楽しみも喜びもなくなってしまうのですから。

春はあけぼの注2闇からだんだんと白く成りゆく羽黒山の山際を眺めながら西に傾く満月を見る。以前はもう少しきれいに星空が見えていたはずの明け方のコリーナの空。ここも年々闇の存在感が薄れていくと感じる私は、目が老化したのか、ただ単に防犯灯がまぶしいだけなのか、無明のせいなのか。

注1：法華経序品　注2：枕草子

狂言綺語三十八・・・如蓮華在水

水が温んできました。コリーナの池の水は3月に入ってから日中の温かさで水温が上がってきたのでしょう、朝の冷え込みがマイナス五度くらいになっても、もう凍ることはありません。夏には一面にその池を覆っていた睡蓮は寒い冬を氷の下でいのちを永らえていたのでしょうが、まだ三月末になっても茶色に枯れたままで、緑の芽を伸ばすことはありません。しかし眠っていたはずの池の鯉がいつの間にか活発に

動き始めました。やがては山に最近住み着いた大ぶりの川鵜が、獲物を求めて池の面を伺う光景を目にするようになるでしょう。そうなればもう春の盛り、気がつくと睡蓮の花が池一面を覆いはじめ新緑の季節となります。この池はふもとの田圃に水を供給する溜め池の役割を果しているようで、調整池と味気ない名前で呼ばれているだけですが、私にとっては自然のいのちの理と流れを教えてくれる安らぎの場所のひとつです。

睡蓮と蓮は植物学的には全く違う種類のようです。睡蓮は水面に花が咲き葉に撥水性がなくスイレン目スイレン科に分類されます。蓮は反対に水面より上で花が咲き葉に撥水性がありヤマモガシ目ハス科に分類されます。蓮根ができるのは蓮の方。ただ英語では睡蓮も蓮もロータスと言うようですし、仏教でもどうやらその区別はしていないようなので、私はコリーナの調整池を密かに蓮華池と呼んでいます。

蓮華は仏教では非常に重要な植物です。お釈迦様や菩薩の像が坐っているところは蓮華座。日本でおそらく一番読まれ文学や芸術にも大きな影響を与えた法華経は「妙法蓮華経」が正式名称です。サンスクリット語の原題は「サッダルマ・プンダリーカ・スートラ」直訳すると「正しい教えである白い蓮の花の経典」となります。つまり蓮華は正しい教えの喩えとして用いられているのです。蓮は泥の中にあっても汚れることなく美しい花を咲かせます。泥から生じて泥に染まらず、水面にひろがり泥をはじいて咲く気高い花の姿が、俗世間の欲にまみれず清らかに生きる象徴のように捉えられているのです。法華経の一節に「不染世間法　如蓮華在水」（世間の法に染まざること、蓮華の水にあるが如し）注1とあります。私達の生活の場であるこの世間で、その汚れに染まらず蓮華のごとく生きることがお釈迦様の正しい教えそのものなのです。

仏教はこの「如蓮華在水」と言うことをちゃんと説明してこなかったために、ずっと教えの神髄が正しく伝わらずに今日まで来てしまったようです。というよりは仏教教団がその組織を経済的に維持をしていくために意図的に私達をミスリードしてきた結果なのかもしれません。「地獄・極楽」とよく言いますが、それはこの私達が生きている世間以外の何処にも存在しません。世間の法（関係）にどっぷりとつかり欲と欲がぶつかる毎日にもがき苦しめばそこは地獄、泥の中にあってもそこに染まらず正しい教えを守って毎日を心安らかに送ることができればそこは極楽。地獄も極楽も私自身の心の中以外の何処にも存在しません。でも自分の心中ほど頼りにならないものはないでしょう。正しい教えに対する私達の無知や迷いにつけ込んで、この世間以外の場所が恰も存在するかのように設定し、その口利き、代理人の役を演じてきた一部の仏教関係者が確かに昔から今に至るまで存在することは事実です。僧侶はお釈迦様の教えを導く導師のはず。ところがいつの間にか地獄極楽のエージェントになり果ててしまっていたのです。誤解を恐れずに言えば「地獄の沙汰も金次第」は地獄にいる閻魔大王ではなく世間に溢れるエージェントたちを指す言葉です。

世間の法の中で地獄と極楽を行きつ戻りつしながらそれでも何とか世間の泥に染まらないように悪戦苦闘する姿が「如蓮華在水」ということです。仏教の教えはこの私たちが生きている世間以外のどこにも適用することはできないはずなのですが、なぜこの世間以外に「浄土」や「後世善処」などと別の世界を設定する必要があるのでしょう。親鸞や日蓮などの祖師たちは、自分自身の無明の闇を凝視する中、その煩悩からはどうやっても逃れられない絶望の中に指す一条の教えの光を見出した人たちです。それはその人だけにしか得られない信仰体験でしょうが、なんとかその歓喜の光を皆にも味わってもらいたいと考え、祖

師独自の方法によって伝えていこうと布教してきました。その過程で「浄土」や「後世」という「方便（真実の教えに導くために仮に設けた教え）」が必要だったのです。祖師たちの言葉の断片を切り取って「これが真の教えだ」ということは教えの牽強付会です。その方便の数々を包む根本の思想を掴まなければ私たちは祖師たちに触れることもできないでしょう。ましてや祖師たちの教えを通してお釈迦様に触れることなど到底できない相談です。親鸞聖人の他力本願・念仏信仰の根本は絶望の暗闇の中に「生きる喜びの光」を見出したこと。日蓮聖人は題目を唱え現世安穏の実践の中で永遠のいのちに触れ「生の肯定の喜び」に出会ったこと。彼らの信仰の根本は、等しく、現世の生きる喜びにあることは、私には疑いようのない宗教的事実です。生きているこの瞬間が生きる喜びにあふれた瞬間と歓喜すること。それ以外に信仰の喜びはないと私は考えます。ですからこの日常の所以外には、地獄も極楽も浄土も後世も彼岸も涅槃もなにもかも存在できないのです。

コリーナの蓮華池の底は泥のため一見濁っているように見えますが、鯉の泳ぐ姿が水面から三メートルほど上の道路からもきれいに観ることが出来ます。風のない日などは鏡のような水面を見ていると、きれいな水を通して池の底の泥の中に吸い込まれるような錯覚に襲われてしまいます。その先にどんな世界があるのか、大蛇の住処か、竜宮城へ繋がる道か、楽しい妄想のひととき。この場所この時間もまた私にとっての安らぎの処の一つです。

注1：法華経従地涌出品第15

狂言綺語三十九・・・無分別

いつの間にか四月も半ばを過ぎ、桜が咲きそして散っていきました。ただここコリーナではそれはソメイヨシノだけに言えることで、まだ様々な種類の山桜があちこちに咲き誇っています。植物に関しては全く門外漢の私ですが、先に葉をつけてから花が咲く桜、花が散ってから葉をつける桜、葉と花をほぼ同時につける桜など、いろいろな種類の桜のあることがここでは観察できます。日当たりや土壌などが原因でそれぞれの姿を見せているだけなのかもしれません。あるいは専門の植物学者たちが丹念に調べればいくつかの種類と名前に分類されるものなのかもしれません。しかし私にとってはいろいろな桜があり、おのおのがそれぞれのところでありのまま、おもうがままに咲いてくれてさえあれば、それが一番美しいのです。

人は存在するものを分類してそこに名前を付けずにはいられない生きものです。「分類」をごく簡略にまとめれば「異なる存在同士の類似点と相違点を見極め、類似点の多数派と相違点の多数派との間に境界線を引くこと」そして「それぞれにAやBという名前を与えその境界に客観性を与えること」だと思っています。西洋の哲学や科学はギリシャ時代以来ずっとこの作業を理性という名の下に続けてきたのでしょう。ですから分類され名前がつけられていく一連の作業は論理的であり客観的であることが保証されるのです。ただこの客観的という評価軸が、今私の中では、お釈迦様に帰依して以来揺らぎ始めてきているようなのです。

「初めにロゴスありき」に端的に表されている西洋的思考は、全ての存在は神＝ロゴス＝理性（論理）に

よって真偽・正邪・善悪が認定されます。つまりロゴスによって分類し命名された存在は客観的な存在価値の保証が与えられるということです。ところが仏教の教えは「初めに行いありき」注1です。行いの原理は「ありのまま」と言うことです。私には私の、あなたにはあなたのありのままが、桜にも、ポチにも、路傍の石にも、日本にも北朝鮮にだってそれぞれのありのままがあると言うこと。それを認めて、おのおのがありのままに行うことを決して否定せず、尊重し、認め合うということです。仏教が全ての生きとし生けるものには「仏性」があると言えるのは、自己を含めた全ての他者の「ありのまま」を認めるからなのです。

「無分別」と言う言葉があります。私達が通常使う意味は「分別がないこと、思慮がなく軽率で道理をわきまえないこと」です。「おまえは分別のないやつだ」と親や先生に言われたら不本意であってもぐっと我慢するでしょうが、友達や年下の人間に言われたら殴りかかってしまうなどの無分別な行動に出てしまうこともあるでしょう。世の人で「あの人は分別のある人だ」という評価を嫌う人はいないでしょう。「あなたは物事の道理をよくご存じの常識のある方ですね」といわれて悪い気はしないはずです。ところが仏教の世界では「分別」は「ありのままに観る」ことを妨げる「悟り」には邪魔なものなのです。字に表されている通り「別して分ける」。つまり何らかの主観的尺度により分類していることになるわけで、ありのままに観ることと正反対の評価をしているのです。人の分別はどこまで行っても客観を装った自己の主観的な判断にしか過ぎません。「無分別」は自分と他者とを区別しません。また対象を言葉や概念で分析的に捉えようともしません。つまりは「ありのままに観る」ということ。「無分別」は「悟り」そのものなのです。

私達は社会にあるかぎりあらゆる分別にさらされて生きていかなければなりません。言葉や宗教によって分別され境界が引かれたところが国境となるとき、自然の山や川などの地形と分別された人たちの居住区が一致していればそれは無分別の自然な境界線とも言えるでしょう。しかし地図を見るとアフリカや中央アジアは国境線が直線にひかれています。誰かが分別したことは一目瞭然ですね。分別し境界線を引くことが公平平等な線であるかそれとも客観を装った恣意的な利害の線なのか、国境に限らずあらゆる境界線には分別が働き、あちら側とこちら側、善悪・貧富・好嫌・敵味方などの選択を私たちに迫ってきます。その時私たちができること、それはまずは分別することで自分と他者との間の類似や相違を見極めることです。その後に類似が徒党とならないよう、相違が差別にならないよう、その互いの認識的分別を認め合いながらコミュニケーションによって感情的な分別を埋めていく必要があるのです。感情的な分別を乗り越えた先に初めて「無分別」がみえてくると私は考えます。残念ながら今私達の生きている世界であらゆる存在を「無分別」に観ることができる方はお釈迦様だけです。私たちは分別を超えてあるであろう「無分別」の世界を信じ、そこに向かい行い歩み続ければよいのです。それがお釈迦様の教えを信じることなのです。

境界を接するこちら側とあちら側は、互いの分別を振りかざして角を突き合わせることがよくあります。こちらの分別の有る人たちはあちら側をサッカーのゴールポストを勝手に動かす約束を守らない分別の無い人たちとなじり、あちらの分別の有る人たちはこちら側を歴史を正しく認識しない分別の無い人たちだとなじります。こうなると分別の有無は大同小異。言葉を投げつけあうことによって言葉の無意味化・無力化が起きてしまうのです。もう一度言葉に力と意味を取り戻すためには、ロゴス（分別）が生み出す言葉ではなく、行い（ありのまま）が生み出す言葉に帰って行く必要があると思うのですが、いかがでしょ

うか？

しだれ桜は気持ちよさそうですね。風にまかせてゆらゆら。風が枝を揺らすのか、ゆれる枝が風となるのか。枝が揺れ花びらが散るとき、大気は風となり、そしてそこに風を観る。もとよりしだれ桜にも風にも分別などある訳もないよなぁ、と桜吹雪の中で一人うなずきながら筆を置きます。

注1：琉游舎だより12号「初めに行いありき」

狂言綺語四十・・・仏性

桜の開花が号砲だったのか、草花も生きものも一気に自分の命を発散して駆け抜けていくこの季節は、ちょっと油断すると瞬く間にすっかり景色が変わってしまいます。昨日まではただの枯れ野だったところがいつの間にか緑に覆われ、花々が次々と咲いては散っていき、道には毛虫の行列、蜂はぶんぶん飛び、土の中では虫がもぞもぞ。畑の作物も一雨ごとに成長し、雑草の間にこぼれた赤紫蘇の種から芽が出始めました。自然の色も香りも日々変化する季節。去年と同じような光景でありながら少しずつ去年と違う自然。これが十年も経つとすっかり変わっているのか、全く同じ自然のままなのか、それは人間が自然とどう向き合って生きていくか次第でしょう。いい加減に考えていると人間は自然から共棲を拒否されるかもしれませんね。

自然は一年単位で同じサイクルを繰り返します。人間から見ると毎年飽きもせず同じことの繰り返し、進歩も何もあったものではないと見てしまいがちですが、何百年何千年というスパンで見ると、確実に変化しています。繰り返しの円環の時間が、実は人には気づかない程のゆっくりさで変化をもたらしているのです。ところが人間は自分の生きているせいぜい百年の時間を直線的に突っ走ることしか能のない生き物。人間以外の生き物は命を繰り返し再生することで種のいのちをつないできました。ところが人間は個人の生命だけをいのちと考え、自分以外のいのちを繋げるという気が端からない生き物なのでしょう。自然は種の再生のために円環の時間を生き、人間は個人の生命のために直線的な時間を生きているようです。円環の時間は後戻りし繰り返すことが出来ますが、直線の時間は過ぎたら後戻りのできない時間となってしまうのです。

西洋哲学では自分と自分以外の存在を認識し、分別し、マネジメントするための人間だけが持つ最高の認識能力を「理性」と呼びます。ところが仏教の世界では理性と書いて「りしょう」と読むのです。ありのままの存在の在り方を示した言葉で真如や実相ともいうことが出来ます。ところが明治になって西洋哲学が輸入された時、「ロゴス」を発祥とする論理的な思考能力の訳語に「理性」という漢字が当てはめられたのです。誤訳ではないかと思われるほど「りせい」と「りしょう」では根本的な意味が違います。理性（りせい）は人が存在を認識するための能力なのに対して、理性（りしょう）は人を含めた存在そのものを表した言葉です。紛らわしいのでここからは「りしょう」を「仏性（ぶっしょう）」と呼びます。仏教の世界では存在するものすべてに共通に備わっているものを「仏性」と呼ぶからです。つまりすべての存在そのものを表す言葉が「理性（りしょう）」であり「仏性」なのです。

「草木国土悉皆成仏」という仏教思想があります。草木や国土のようなものも含めてすべての存在する

ものは「仏性」をそなえているので皆悉く成仏することができるという日本独自の佛教観です。生きとし生けるものばかりでなく、道端の石くれや土くれまでもが「仏性」を持つという何とも日本的かつ過激な思想です。「仏性」から見れば人間も草木国土の一員であり、蛇や蚊や倒木や水たまりと同じで平等であるということ。つまり「仏性」は宇宙のすべての存在が等しく平等に持っている能力なのです。「自分も他者も仏様」ですから「仏性」には対立の概念は産まれようがありません。皆同じ宇宙にいのちをつなぐありのままの存在です。このように宇宙のありようを認識することが「草木国土悉皆成仏」という仏教思想なのです。

片や「理性（りせい）」は宇宙の存在の中のごく少数派である人間しか持っていない能力です。人が理性で存在の認識をすることは「自己と他者」という対立の概念を基盤にするということになるのです。そうなると「理性」の意志は愛と平和より、支配と戦いの方へ引っ張っていく力の方が強くなるでしょう。今の科学文明はこの理性認識のたゆまぬ活動によってもたらされた創造と破壊の繰り返しの結果であり、「理性」によって宇宙のすべてを人間の支配下に置こうとした意思の表れです。「理性」は宇宙を人間の意志のもとにマネジメントするために神が人間だけに与えた能力であるという考えが西洋思想の根底を支えているのです。

そろそろ私たちは「理性」から自由になってみませんか。と言うと倫理や道徳の戒めからも放たれて人は悪のし放題になってしまうではないかという人がいるかもしれません。確かに「自己と他者」という考えに立つ限りはその通りでしょう。それでは「私は（I am）」ではなく「私も（Me too）」というように考えてみればどうでしょうか？つまり「私はこうだ」ではなく「私もそうだ」と世界を観ることです。これを私は「理性」ではなく「仏性」で世界を観るということだと考えます。そうなればすべての存在はそれぞれのいのちを永遠のいのちとしてつないでいくために「お互い様」「お蔭様」の相互扶助の間柄にあるはずだということに気づくでしょう。そしてすべての存在は「無我」「無常」「縁りて起こる（縁起）」というお釈迦様の根本の教えに辿り着くはずです。そしてそこが「安らぎのところ」なのは言うまでもありません。

円環の時間は、自分が好きなだけそこにとどまったり後戻りしたりすることができながらも、大きな宇宙の時の流れに身も心も任せる時間なのです。私は自然豊かな地に暮らしはじめて三年近くたち、やっと円環の時間を生きるということが少しづつ実感できるようになりました。これは隠棲でも田舎暮らしでもなくスローライフでもロハスな生活でもありません。毎日が変化に富み、刺激的でスリリングな時間です。考え、歩き出し、立ち止まり、考え、また歩き出す行いの日々です。その時の同行者が仏性を備えた草木国土だと気付いたとき、どうやら私は「悉皆成仏」の教えを受持することが出来るようになったようです。

狂言綺語四十一・・・仏性Ⅱ

前回は「草木国土悉皆成仏」。全ての存在は「仏性」を備えているから皆ことごとく成仏できるというお話をしました。これは自然の中に八百万の神を見るという元来の日本人の原始宗教と、中国から輸入された仏教の哲学的思考とが融合した日本人独自の仏教観だと言われています。自然と人間は皆同じ仏性を持つ仏さまなのですから、自然と対立したり制圧したりと言うような考えは出て来るはずもありません。自

然と共棲する農耕民族の日本人らしい楽天的な自然観、宗教観ですね。

天台宗の創始者、中国人の智顗に「一念三千」という教理があります。この教えが最澄（伝教大師）によって中国から比叡山にもたらされ「悉皆成仏」という日本独自の仏教観へと発展?していったようです。

「一念三千」は私達が起こす一瞬（刹那）の思いの中に三千の世界が備わっていると言うこと。要点だけ述べると、人間の心の「一瞬の思い（一念）」には「仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄（三千世界）」の全てがあるという主張です。三千は全ての世界・宇宙と言ってもいいでしょう。つまり人間の心の中は仏から地獄までの間を有機交流電燈の波動(注1)のように行ったり来たりしていると言うことです。この一瞬に地獄の沙汰を発するかと思えば、また次の一瞬は菩薩の救済の心に満ち、ある一瞬は修羅のごとく戦闘的になったかと思えば、仏の慈悲深い心を見せてくれる。全てが別々に存在するのではなく互いに行き来しながら一念のうちに宇宙をその中に内包しているという姿が、存在のありのままの姿であることを示しています。この存在のあり方をよく観ることによって自分の中にある仏（仏性）を観なさいと智顗は教えているのです。と言うことは自分の中にある「地獄性」もちゃんと観なさいと言っていることでもあるのです。ところが日本に輸入されるといつの間にかこの教えは「草木国土悉皆成仏」だけが強調され。その中にある地獄の側面は忘れ去られてしまったようなのです。本来は「草木国土悉皆亦住地獄（草木国土もまた皆悉く地獄にも住している）」と言う思想がそれを支えているはずなのです。

宗教は本来楽天的でありプラス思考でないと救済にはたどり着けないでしょう。「地獄性」という悲観的マイナス面にこだわっているかぎりは、そこに安住して地獄の振る舞いの限りを尽くすか、絶望してあきらめの結果地獄に住み続ける羽目になるからです。そしてそこがいつの間にか自分にとっては安らぎの場所だと錯覚してしまうようになるでしょう。他者にとっては地獄かもしれない自分にとっての安らぎの処は、それを極楽とは言わないものです。私にとって安らぎの処はあなたにもみんなにも草木国土全てにも安らぎの処でなければなりません。それがこの宇宙に存在する全てに「仏性」があると言うことなのです。それを信じることはとても楽天的で前向きなことです。自分に「仏性」があると信じることが出来れば相手の「仏性」も信じることが出来るはず。自分に「地獄性」があると分かれば相手の「地獄性」も受け入れることが出来るはずです。「一念三千」の教理で一番重要なそして見落としてしまいがちなことがあります。それは「お釈迦様（仏）にも『地獄性』がある」と言うことです。「一念三千」はとても楽天的にみえる教えですが、その根底には「あるがままに自己を観よ」「あるがままに宇宙を観よ」と言う無我の眼が必要なのです。

「一念三千」の元となる人間の心の境地を「地獄性」から「仏性」までの十段階に分類したものを「十界」と言います。下から「地獄界＝怒りと恐怖」「餓鬼界＝貪り」「畜生界＝本能と欲望のままの行動」「修羅界＝喧嘩から戦争までの争い」「人界＝平常心」「天界＝歓喜」ここまでを六道と言い、安らぎのところに辿り着けなかったものはこの六道の中で生命を繰り返しているのです。これを六道輪廻と言います。この輪廻の輪から悟りによって抜け出すことを「成仏」すると言います。この六道の次に「声聞界＝仏道を学ぶ」「縁覚界＝自己の内面的な悟り」「菩薩界＝仏の使いとして行動すること」「仏界＝無私の絶対慈悲の心」以上の十界を私たちは刹那の間に行ったり来たりしていると考えることが「一念三千」の教えです。お分かりのように現実世界以外のどこかに地獄があったり仏さまが居たりということはありません。地獄から仏まですべて私の心の中にあるのです。方便（人を真実の教えに導くための仮にとる便宜的な手段）

によって地獄や極楽を描いたり彫ったり物語ったりすることがあってもそれは仮のもの、方便なのです。

「一念三千」の教理を前向きに受持すれば、必然的に「餓鬼界」や「阿修羅界」などの下の界でうろうろしていてはいけないという自覚とともに、上の界へ向かっていく希望と勇気が湧いてくるでしょう。三千という全宇宙が網の目のように繋がっている中で、私もあなたも一切のものは全体を離れて個別に存在することが出来ないことも分かります。つまり自分だけが救われたと思ってもそれは本当の救いにはなっていないということ。そうなると全体が救われなければ自分の救済もないということが分かるはず。ならば次に私達は全体の救済のための「行い」に踏み出すはずです。その時私たちは宇宙に存在する全てのものに「仏性」が平等に与えられていることをはっきりと信じることが出来るようになるでしょう。

自然と対話していると、今まで何とぼんやり生きてきたのだろうということを思い知らされます。自然は今日雨が降るか日が照るかなどと思い煩って時を過ごすわけではないでしょうが、少なくとも雨には雨の晴には晴れの装いを融通無碍に纏いながら生きていることだけは分かります。私は自然を手本として仏性も地獄性も融通無碍に纏えるようになることを信じて琉游舎で日々楽天的な毎日を過ごしていきます。

注1：宮沢賢治「春と修羅」から
（わたくしといふ現象は　仮定された有機交流電燈の　ひとつの青い照明です）

狂言綺語四十二・・・頭を丸める

頭を丸めているといいことずくめです。まず寝ぐせの心配がない、出かける前に髪を整える必要がない、髪の毛やふけが落ちることもない。シャンプーもすすぐお湯も必要ない。散髪代も整髪剤もドライヤーも必要ない。頭が涼しい。熱く（カーッ）なっても気化熱ですぐ冷える（冷静になる）。など経済的にも衛生的にも精神的にもいいことばかりです。と思っているのは六月までで、また蚊の季節がやってきました。湿度の高い朝夕は蚊の食欲が旺盛な時刻なのか、畑で収穫や草むしりをしていると麦わら帽子の隙間から皮膚を露出した頭に針を突き刺してきます。髪のある時分は頭を蚊に刺されたことはありませんでしたが、頭を丸めて以来この時季から三か月ほどは毎日のように蚊の攻撃にさらされます。頭はほかの場所以上に痒くてたまりません。丸めた頭をポリポリ掻いている坊さんでは様になりませんね。まだまだ修行が足りません。

人を外見で判断をしてはいけません。という考えはこの現代日本では言わずもがなのことでしょうが、髪型で身分や職業を区別することが、秩序維持に必要とされた時代がつい一五〇年ほど前まで続いていました。公家や武士、豪商や町人、学者、芸人、芸妓など、外見で身分や職業が分かる必要が有史以来江戸時代まではあったのです。明治以降は自由平等、人権意識の高まりで身分差別も職業差別も建前上はなくなったので、髪型だけではその人の職業や地位も分からなくなってきました。昔から変わらず髪型を守っている職業はおそらく、大銀杏を結う相撲取りと剃髪する僧侶だけでしょう。

ではなぜ僧侶は剃髪をするのでしょうか。お釈迦様が生きていた古代インドでは頭髪を剃ることは重罪の一つで最も恥とされていたようです。昔の日本でも、戦いに負けた者が剃髪して勝者の前に出て悔悛、恭順の意を表したり、刑罰として「御成敗式目」などには剃髪刑の定めがあったようです。余談ですが、か

つて私が所属していた職場でも職務上の大失敗をしでかすと、次の日に丸坊主にして謝罪の意をあらわすという時代錯誤の挙に出る人がたまにいました。このように剃髪の意味が歴史的に刑罰や改悛と強く関係づけられている中で、お釈迦様は釈迦国の皇太子の身分を捨てて出家するにあたって、あえて重罪人の印である剃髪姿を選んだといわれています。社会秩序から自らを追放する（出家）ためには、重罪人と宣言するしか方法がなかったのかも知れません。今となっては真意をお釈迦様に聞くことはできませんが、恐らく俗世間との関係を断ち切るための自分自身への覚悟と戒めの宣言だったのでしょう。それ以降お釈迦様に帰依した人々は同じように剃髪をして弟子となりました。これが今に続く僧侶の剃髪の起源といわれています。

出家するということは親も子も財産も捨てて社会の法律と秩序の埒外に出るということですから、確かに秩序の破壊者、重罪人です。ただ現実は出家しても寺院や教団という新たな俗世間を生きていくことになってしまいます。どのように精神的に親子や社会との縁を切っても、その社会のどこかで「食べて寝て起きてまた食べて」の繰り返しの毎日を生きていくしか肉体を維持する方法はないのです。出家をどんなに理論化し正当化してもその本質は矛盾です。俗世間から抜け出すという考えがすでに矛盾であることは、寺院や教団が巨大な集金装置として社会機能の一角を占めている事実が表しています。そこは新たな俗世間であり、そこも社会の一つの組織にしか過ぎないのです。出家者が俗世間から資金調達をして生活の糧にしていると言う事実は立派な経済活動と言うほかありません。ですから僧侶は職業なのです。剃髪することは職業人としての目印であり看板なのです。現代では髪型が看板になる職業は前述したように相撲取りと僧侶だけのようです。この看板は営業許可証のようなもの。大切にしなければなりません。最近は剃髪もせず髪を伸ばしている僧侶をよく見かけますが、職業人として営業力をアピールするのであれば看板をしっかり整えておくべきと思うのですが、いかがでしょう。私達もただきらびやかで大きな看板に惑わされることがないようにしなければなりません。「看板倒れ」「看板に偽りあり」はどの商売でもあることですから。

私は僧侶ですが、僧侶という職業を営んでいるわけではありません。他に呼び方が思いつかないので「私は僧侶です」と自称していますが何か良い呼び名はないでしょうか。私の毎日を自省すると「安らぎの処に歩んでいく行いの日々を過ごすこと」それが僧侶と自身を呼ぶ理由のようです。剃髪し毎日経を唱え、食べて寝て飲んで話して笑い喜び哀しみ怒る毎日を変わらず過ごすことがお釈迦様と共に歩むことであり、それを僧侶の日々と呼んでいるだけです。出家前と違うことは剃髪と朝勤をするこの二つだけです。このように職業人としての自覚のない僧侶は、本物の僧侶から「僧侶を騙るニセ者よ、営業妨害するな」と糾弾されそうです。蚊の攻撃さえしのげれば頭を丸めているといいことずくめなので、自ら剃髪を放棄する理由が見当たりません。だから私は当面この快適な髪型で過ごすつもりです。僧侶の職を営むビジネスマンの方々と混同されないよう「私は僧侶ですが僧侶を職業とする僧侶ではありません」とここで繰り返したいと思います。

私の中学時代は丸刈りが強制でした。田舎ではそれがあたり前で先生も親も生徒も誰も疑問を抱かず、私だけが丸刈りに異を唱えていたものでした。甲子園に出る高校野球生も例外なく丸刈りです。ナチスの恋人だった連合国の女性たちは見せしめに丸刈りにされました。私にとって丸刈りは強制と罰のイメージしかなかったものですが、今は嬉々として剃髪までしています。これはどういう心境の変化なのだろうと

つるつるの頭をなでていると「そうだ明日から畑にに出るときはタオルでほっかむりをして行こう」その方が麦わら帽子より蚊の攻撃を防げそうだという妙案が浮かびました。

狂言綺語四十三・・・生死不二

「物事の生起（生）と失せる（死）ことわりを見ないで百年生きるより、この生死のことわりを見て一日を生きることのほうがすぐれている」注1原始仏典にあるお釈迦様のこの言葉が象徴するように、仏教は「生と死」は縁りて起こる不可分なもの（生死不二）と観て、その生滅からの解脱を思惟し実践する宗教なのです。

「未知生、焉知死（いまだ生を知らず、いずくんぞ死を知らん）」注2弟子に死の意味について問われたとき孔子はこのように答えたと論語は伝えています。未だ人間としての生き方が解らないのに、どうして死のことが解るだろうか。そんな暇があるなら与えられた生を充分に生きることに傾注しなさいということなのでしょう。現実主義的な中国人の実践倫理を簡潔に表している言葉です。

「死は魂の消滅ではなく，人間のうちにある神的な霊魂の肉体の牢獄からの解放である」注3とプラトンはソクラテスに魂の不死を語らせています。肉体と魂を峻別し、ロゴスによって論理構築する西洋の理性哲学の源はここにあると言ってもよいでしょう。

紀元前のほぼ同じような時代に離れた場所で三人の偉大な思想家はそれぞれ「生と死」について異なる考えを語っています。「生」と「死」を一体と考えるか、別のものと考えるか、立場の違いはあれ「生と死」の問題は生きているかぎり避けて通れない問題であり、思考の出発点にあるものです。

私は「狂言綺語」では「生」のことばかりで「死」について語ってはきませんでした。それはこの現代社会では「死」は「生」から隠されていて、生活の場では「死」を実感する場所がほとんどないからです。ありのままに観ることをあらかじめ拒絶された「死」ならば、そこに踏み込むことはとても勇気のいることです。日常生活の中で肉体的な死の兆候が現れると、ほとんどは一旦病院という非日常空間に隔離されてしまうでしょう。そこで行われることはいかに「肉体的な生を持続させるか」が全ての目的であり、いかに「良く生を全うするか」という思考は許されなくなるのです。それは「死」は苦痛で悲しく不幸なことだと考えられているからなのです。が、それでは逆に「生」は楽しく喜びに溢れ幸せなことといえるのでしょうか。

お釈迦様は人としてまぬがれられない四つの苦しみ。すなわち生まれること、年をとること、病気をすること、死ぬことを「四苦」と呼び人生は「一切皆苦」だと語られました。「死」も苦ならば「生」も苦なのです。生まれてから死ぬまでの全てが苦しみであるという認識がお釈迦様の観たありのままの人の姿です。そして苦からの脱出を願いそれを実現するための実践方法が仏教の教えです。その行いのたどりついたところが「安らぎの処」。悟りや解脱と言われる境地です。その境地は私がこの場で繰り返しお話ししているように、どこかこの世界と違うところにあるものではなく、今生きている日々の中にあるものです。日々の「生」が苦痛であるならば、「死」もまた苦痛です。反対に「生」が楽ならば「死」もまた楽のはずです。日々生きることを「一切皆苦」から「一切皆楽」に転換すれば良いのです。それはお釈迦様の教えに

忠実であれば可能なはず。なぜならば仏教の教えでは「生と死」は不可分（生死不二）であるからです。ですから日々の行いが安らぎの処へたどり着くための実践であるならば、私は「生」と伴に「死」もまた語らなければならないのです。「良く毎日を生きること」は「良く毎日を死に向かって生きていること」つまり「良き死」は「良き生」の必然の果であり、「良き生」は「良き死」の必然の因だからです。

仏教では「生死不二」と同様に「色心不二」つまり「肉体（色）と心は不可分のもの」という根本的な考えがあります。現代社会では「生」から「死」への介添え役は医者が担っています。これは肉体死のコントロール（いかに物理的な死を遅らせるか）が主目的となっていますが、「良き生を全うし良き死を迎える」という考えはないように思えます。私は本来、「色」の専門家である医者と「心」の専門家である僧侶は「不二」の関係になければならないと考えています。人が「生」から「死」へ歩むとき「色心」両面の介添え役があって初めて「良き生死を全う」できると考えます。しかし日本では宗教家がその介添え役になることはほとんど皆無です。少なくとも僧侶の役目は肉体的な死の後始末にしか過ぎません。残念です。

私は「生死不二」を行うことでこの残念な僧侶の役割の現実を打開していきたいと考えています。次回より日々の生活の中で観て聞いて行い考えた「生死」のありのままについてお話ししていきます。今回はその序文のようなものなので少し理屈っぽく抽象的な話となってしまいました。これまでに私は幾たびも「あなたはなぜ出家したのですか？」と質問されてきましたが、その度に「前世からの因縁で私が出家することは決まっていたことなのです」と言っては皆さんを煙に巻いてきました。しかし今、出家して七年お釈迦様と伴に行いの道を歩み始めて二年、ここに至ってやっと私のその信仰の柱はもう倒れることがないだろうという確信を得ることができたので、ここに私の信仰の出発点をしっかり言葉にして行かなければと考えています。

“私は最後の死ぬ瞬間まで「ああ、楽しい人生だったな」とそう思い続けて死んでいきたいと望み、その望みを実現するための「良き生を全うすることは良き死を全うすること」という「信」を得ることができました。後はひたすら「日々これ楽し」と思い続けて死に至ることができるように歩み続けていくだけです。”

言葉にするとなんとたわいないありふれた日々でしょう。ありふれた日々をあたり前に過ごすことが、私の願いに向かって進む道だと信じて、今日も「ありふれた楽しい毎日」をこの琉游舎から皆さんに送り届けていきたいと思います。

注1：「ダンマパダ」113　注2：「論語」先進第十一　注3「パイドン」

狂言綺語四十四・・・生死不二（承前）

毎日日課のように歩くコリーナの道には一年中いろいろな生きものの姿が見られます。その道は雑木林と池との間にある道です。この夏の時期は池の面いっぱいに広がる緑の蓮華の葉と清楚な白い花。その間を悠々と泳ぎ回る鯉たち。草や木々の緑からはき出される酸素のあまりの多さに、逆に息苦しくなるくらいです。雑木林の上では「ちょっとこい、ちょっとこい」とコジュケイの誘いの声、「ガーガー」とカラスの拒絶の声、そんな合間に聞こえる「ホーホケキョ」のなんともとぼけた合いの手。池の草むらでは様々な虫たちの声の合間からガマガエルとおぼしき間の抜けた太い声が重なり、樹上では「ジィー」と同じ音程

の上を「ミィーンミィーン」と音をかぶせる蝉たちの饗宴。夏は一日中命に溢れています。

私達はその命を音や空気や匂いで感じ取ることはしても、手にとってその命を確かめようとはなかなか思わないものです。ペットを除けば、手にとりたいと思うのは甲虫やトンボくらいまでで、ほかの生きものは物好きでもないかぎりは逆に忌避してしまうでしょう。声や気配でその生きものを感じ取っているうちはまだ安心していても、その存在が自分たちの領分に侵入したと見るやいなや人はその生きものを遠ざけるでしょう。私達は自分の見たい生きものだけを見て、見たくない生きものは拒絶し、場合によっては殺傷するという差別を行っています。生きものたちの「生」は人間の間では不平等の扱いを受けているのです。

見たくないと意識が拒絶していても、目の端にその姿が入るとついその姿を確かめたくなるときがあります。そんなときはその生きものはすでに命を失った状態が多いのです。今、四〇〇メートルあまりのいつものコリーナの道を歩くといくつもの亡骸を目にすることができます。車にひかれたであろう蛇や蛙。命尽きて木から滑り落ちた蝉、蟻に引かれるいくつもの昆虫たち、強い子孫を残すために青いまま自ら落下した栗たち。事故死、自然死、自死、捕獲された死、闘争による死、自然摂理による死が実はそこら中に溢れています。しかし私達をそのような死を、見たくないもの、気味わるいもの、穢らわしいものとして目をそむけてしまっています。死はどんな死でも見たくないものです。すべての生きものたちの「死」は人間の間では見たくないものとして平等の扱いを受けているのです。

私が「生死」について語っていこうとするとき、私が観たままの生き物の「生死」を明らかにしなければなりません。ここまで述べたようにそれは人は見たい「生」を見、見たくない「生」は忌避するものであるということです。人の「生」の見方には差別があるということ。反対に人は「死」はすべて見たくないものとして眼を背けてしまうということです。人の「死」の見方はどのような生き物であろうと平等であるということ。「生」は不平等で「死」は平等。このように観た私のあるがままの生き物の「生死」は、では人にも当てはまることなのでしょうか。実は「生死」を語る時ここが一番重要な分岐点であると私は考えます。生き物の一員として人間を見るか、生き物と対峙した存在として人間を見るか。

人間はこの地球に存在するものの中で理性を持つ唯一の生きもの、と考える思考は西洋の合理主義の基本です。神が人間だけに与えた理性という能力によって他の存在を支配することを認められた存在なのです。人は有史以来自然を支配することにありとあらゆる能力を浪費してきました。そこから生まれる存在認識は「自己と他者」です。「生死」についても「人の生死」と「それ以外の生死」が支配と被支配の関係にあることは必然でしょう。人間同士でも「我の生死」と「他の生死」が同様の関係に発展することも必然なのです。私はこのような認識の中で「生死」を語ることは不可能です。語るだけの能力があるかないかの問題以前に、そもそも私には「神（理性）→人間（理性の代行者）→他の存在（理性の道具）」という思考は、私自身が安らぎの処にお釈迦様と供に歩んでいくには全く必要のないものなのです。私は「理性」ではなく「信」で語ろうとしているのです。皆さんが理性や道徳や常識などの社会的な知恵でもし私の言葉を聞いたとしたら、非常識とか身も蓋もないではないかと感じることがあるかもしれません。語る前から言い訳がましく聞こえるかもしれませんが、「理性」ではなく「信」で語るということは往々にしてそのような摩擦や価値の顛倒が起こりうるものだとご承知いただければ幸いです。

少々話が煩雑になったようです。まとめると、私が今後語る「生死不二」には自分とそれ以外の存在と

の間に区別はないということです。「自他不二」のなかで「生死不二」を語っていきます。「生死」があると考えられている存在全ての中で、人の「生死」も語るべきではないかということです。生物としての人間の「生死」を明らかにすることが、今生きている私たち人間の毎日を如何によく生きるかを明らかにすることだと考えるからです。「生」は不平等で「死」が平等であると私が考える通りならば、人は血や環境の差別がある中で生まれ、生まれながらのDNAや出自を差別から個性に変えることでよき生を全うし、死を迎える中で初めて平等になるはずです。人はすべて平等の中で同じ権利をもって生まれるという常識に、私は今、異を唱えています。ありのままに「生」を見るならば不平等であると観ることから始めなければ、よき生を全うし、よき死を迎えることはできないはずと考えます。そうでなければ平等な「死」も迎えられないでしょう。「信」が希薄な現代、人は「死」をも平等と感じることが出来なくなっているのではないでしょうか。そしてそれを作り出している原因の一つが宗教であるとしたら、そのような宗教は他の原因と伴にいずれ消滅させなければなりません。

「よき生を全うし、よき死に至るために。」

狂言綺語四十五・・・雪山偈（生死不二）

雪山偈という四句の偈が涅槃経の中にあります。お釈迦様が過去世に雪山童子として修行中、羅刹（人を食う悪鬼）から「諸行無常・是生滅法」という言葉を聞きました。童子は後半部分を教えて欲しいと羅刹に求めると、おまえの軀と引き替えならば教えてあげようと言われ、童子は残りの二句「生滅滅已・寂滅為楽」を聞くとそこで約束通り崖の上から羅刹の口もとに飛び込んだのです。とその瞬間、羅刹は帝釈天に姿を変え童子の軀をしっかり受け止めて礼拝したというお話。絵に描かれたり、道徳の教材などに取り上げられて聞いたことがあるかも知れません。この話は童子(お釈迦さま）が真実の法（仏法）を知るためには命をも投げ出す話として読まれますが,私はこの四行の偈に「生死不二」の真理が語られていると考えます。

「諸行無常（しょぎょうむじょう）是生滅法（ぜしょうめっぽう）」全ての事象は移り変わる。生じては滅することがその本性である。と前半部分で言っています。私達の生きている世界には何一つ同一不変のものはないのです。だから「生」は「苦」であるという認識です。「生滅滅已（しょうめつめつい）寂滅為楽（じゃくめついらく）」生滅することがなくなり、滅び去った後にくる本当の静けさにこそ、求むべき真の喜びがあると後半の二句は述べています。ここでいう「寂滅」は「涅槃」と言うことです。これを物理的な死と取ってしまうのは余りに浅薄な理解でしょう。現実の生活の中でこの言葉を捉えないと、ただ虚無的な言葉、人間は死ねば楽になれるのだ、と言う意味に聞こえてしまいます。宗教は生きている人たちのものです。死ぬことを推奨する宗教などというものはそもそも存在するはずがありません。人は生きているからこそ「苦」も「楽」も「喜」も「悲」もあるのです。死んだら何もありません。何もないのであれば、そこは安らぎの処でも何でもない何もない場所です。ですから「涅槃＝死」の状態ではありません。涅槃は執着の炎（煩悩）を消し去った安らぎの状態を示す言葉です。ただそれが物理的な肉体がある間は不可能だと考える人たちにとってはいつの間にか「涅槃＝死」と認識されるようになってしまったのです。

私は仏道に入り宗教家の道を歩み始めて以来ずっと疑問だったことは、なぜ「涅槃＝死」という認識が生まれてしまったのかということでした。日々を毎日心豊かに暮すための糧として宗教があるべきなのに「現実の生活は『苦』だらけで死ななければ『楽』にはなれないですよ」というような宗教を信ずることができるでしょうか。少なくともその様な宗教を私は信ずることができません。なぜその様な認識が生じたのか、それは「涅槃」を語る人たちが「生死不二」を信じずに「生」の側からだけ雪山偈を読んでいるからです。宗教のほとんどは「生」の側から「生」を見ていく宗教だと考えます。論証のない認識ですが、お釈迦様は「死」の側から「生」を見ていたのではないでしょうか。人は必ず死ぬるものである。そしてその死を「ああとても良い『生』を過ごすことが出来て楽しかった」と安らかに迎えられるために、現実の生きている世界をありのままに観ることの必要性を説いたのです。そのありのままの「生」の世界が「諸行無常・是生滅法」です。そして「死」の側から「生」を見た言葉が「生滅滅已・寂滅為楽」です。ここで説かれる「死」は「煩悩の死」です。人は日々「煩悩の生」と「煩悩の死」を絶え間なく繰り返し、そして最終的に「肉体の死」を迎えるのです。「生死不二」を信ずるということはこのことを信ずるということです。

「肉体の生」がある限り「煩悩の死」を迎えることはとても困難なことでしょう。かといって「煩悩の死」＝「肉体の死」と安易に結論づけてしまったら、娑婆世界と信仰の世界の狭間で生きる一人の人間の「生死」の不安や葛藤を無視することになってしまうのです。その結論はどんなにもっともらしい崇高な教えで言いくるめようが結局「死んだら楽になれるよ」ということなのです。宗教家は人々の生活の安寧を願いそして自ら行い導く人であるはずです。「煩悩の生」と「煩悩の死」を絶えず繰り返しながら「肉体の生」を豊かに楽しく心安らかに過ごし、そしてよき「肉体の死」に至ることができる。この「信」があって初めてお釈迦様の真理の法、つまり「諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為楽」を受持し行い導くことができるのです。そしてその様な人だけがお釈迦様と共に歩むことができる人なのです。

親鸞聖人が弟子の唯円から「私は念仏を唱えても喜びを得られず、極楽に生まれたいとも全く思わないのです。どうしてでしょうか」と質問されると「私（親鸞）もそう思っていたのだが、おまえもやはり同じ気持ちだったんだな」と答えられました。[注1]極楽が理想の世界と信じていても、生ある限りはこの娑婆世界になんとしてでも生きていたいという、あたり前の人としての素直な告白です。私はこの親鸞聖人の言葉に娑婆世界の中で葛藤しそして揺るぎのない「信」を獲得した宗教者の人間としてのあるべき姿があるがままに顕われていると考えます。私にはこの親鸞聖人の言葉を解説することができません。なぜなら「信」は言葉ではなく行いだからです。もしあえて言葉にするとすれば親鸞聖人も「死」の側から「生」を見ることで「生死不二」を悟り、そして念仏によってそれを実践したということだと思います。

私は日蓮宗から正式に認められた僧侶です。その人間が他宗派の宗祖の言葉を受持するとは何事かといぶかしがり怒る方もおられることでしょう。私は「生死不二」を明らめるためならあらゆる行いにも歩み出すでしょう。「生を明らめ死を明らしむるは、仏家一大事の因縁なり」[注2]「妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり」[注3]道元も日蓮も皆同じことを言っています。

「生死」を明らめることが宗教家の唯一無二の役目なのです。

注1：歎異抄　注2：正法眼蔵　注3：生死一大事血脈抄

狂言綺語四十六・・・善知識（生死不二）

今私には善知識と呼べる方がいます。以前この欄で書いたように[注1]「善知識」は「善き友、仏教の正しい道理を教え利益を与えて導いてくれる人」のことです。彼と知り合いになったのは今年の二月。有志三人と語らって始めたお助け合い組織「コリーナシップ」の活動の中のことです。彼は八三歳、末期がんで闘病中。昨年の暮れまでは日常生活に支障のない程度に動けたのですが、がんが全身に転移し年末から急に右足の自由が利かなくなりました。足のしびれと痛みで支えられながら杖で歩くことがやっとの状態。症状を和らげるために放射線治療を受ける必要ができたのです。ついこの間まで可能だった運転ができなくなり、奥さんも免許がなく、お子さんもいないようです。放射線治療を受ける病院は往復四十キロ以上、三週間毎日治療に通わなければなりません。不便で時間を要する公共交通で行くことは困難で、タクシーは往復で一万五千円はかかります。年金生活者で身寄りのない老夫婦には肉体的、経済的負担が大変なことは言うまでもありません。

朝八時半に市営住宅の彼の住まいに迎えに行き、奥さんと二人で支えながら五段の階段を転ばないように下って車に乗せます。彼は助手席、奥さんは後部座席に。約四〇分で病院に到着です。車椅子で広い病院を放射線科まで移動し、九時半から治療が始まります。治療や会計に時間がかかっても、大概は十時十五分くらいには病院を出て、また家に送り届けると十一時くらい。今度は車から降りて五段の階段を支えながら昇り玄関の中に置かれた椅子に座らせるまでが「コリーナシップ」の付き添いサービスの内容です。十五日間ほぼ毎日同じ日課です。そして往復の車中の後ろと前で交わされるやり取りもまた日課でした。やり取りというよりは言い合いです。ここに書くのも憚られますが、要約すれば奥さんの言い分は「お金と手間ばかりかかり、シルバーの仕事にも行けない、これでは生活ができなくなる。わがままばかり言って、苦労させられる。早く死んでくれればいいのに」ということ。彼は何度か弁明と抵抗の言葉を試みますが、最終的には黙り込んでしまいます。私は互いから同意を求められても答えようもなく、ただただ聞いているしか術がありません。

三週間の治療を終えた後は薬をもらうために一か月に一回病院に付き添いました。症状は全く改善されず帰りにスーパーで買う食べ物も、おかゆや介護食の類に変わっていきました。そして五月のある日、下血が止まらないのですぐ病院に連れて行ってほしいとの連絡。そこから一週間の検査入院を経て退院するまでの間に、彼は全く歩けなくなっていました。車から自宅のベッドまでおんぶして送り届けました。医者からもう治療方法はないので在宅医を頼むか、最後まで過ごせる病院に転院するしかないと言われたのです。彼は家に戻る車中で「俺はついに医者から見放されてしまった」と呟きました。私は彼のケアマネージャーと話して在宅医療や看護の段取りを確認すると、もう物理的に出来ることは何もなくなってしまいました。

それから約三か月半、今では、彼はおかゆではなく白米を毎日食べています。食欲も回復し、基本的には何でも食べます。そして八月の終りには床屋さんに行きたいというので付き添いをしました。その時「今度焼き肉を食べに行こう。ご馳走するから」と誘われました。この三か月間に彼と彼の奥さんに何があったのか具体的には私には分かりません。私が知っていることは、食欲も足も心も外出したいと思うまでに回復したということ、二週間に一回程度の奥さんの買い物に付き添う車中で、奥さんが彼の食べたがって

いるものを挙げては、今日はこれを買うのでどこそこに連れて行ってくださいと楽しそうに話すことだけです。帰りに寄ってしばらく三人で話している時に感じることは、車中の前と後ろで言い合っていたとげとげしさではなく、夫婦の間の感謝といたわりの和やかな空気です。彼のむくんでいた顔は今ではすっきりし、奥さんの顔からは険が消えてなくなりました。ただ痛み止めの量だけは日々確実に増えているとのことです。

医者から見放されたと彼が呟いてから一週間後、奥さんから連絡があり「葬式の費用と方法について教えてほしい」と言われました。通夜も葬式もいらないがお経だけはあげてほしい、最小限の費用で済むようにしたい。そしてその内容を彼に直接話してほしいとの要望でした。これは私にとってはとても困難な命題です。何も心配しないで安らかにお休みください。あなたには極楽が待っています。などというごまかしは通じないはずです。またそれを彼は望んではいないでしょう。私は知り合いの葬儀屋さんから、自宅で亡くなりそのまま火葬場で弔うまでの方法、法律的な問題と費用を詳しく聞きとり、その内容を二人の前で詳細に話しました。それは肉体の死を迎えた体の物理的処置と費用の話です。そしてもしあなたが亡くなるその時から火葬場に行き納骨するまで、許される限り私は一緒にいてお経を唱えてお見送りします。と付け加えました。この私の言葉が二人の今の安らかな毎日に影響しているとは到底思えませんが「戸井さんがずっと付き添ってくれるなら安心だね」との二人の言葉は有難いものでした。私は彼の「生死不二」に同行することを望まれ、許されたということだからです。そして二人はこの時から私の善知識となりました。

二人の今の穏やかな生活の理由を言葉で説明することは私にはできません。ただ一つだけ確かなことは二人は「死」の側から今あるありのままの「生」を観ることで「生死不二」を瞬時に信じることが出来たということです。そして教えや導き手がいなくても、人は「信」を得ることが出来るということです。人はいずれ物理的な死を迎えます。彼のその日はいつになるか分かりませんが、二人は互いが必要とする善知識として心安らかな日々を送るでしょう。私はこれからも二人に同行し続けます。そして二人は私に仏の道理を教え利益を与えお釈迦様のもとへと導いてくれることでしょう。

注1：琉游舎だより第２４号

狂言綺語四十七・・・善知識Ⅱ（生死不二）

鎌倉時代の随筆家吉田兼好の言葉に「友とするに悪しき者七つあり　一つには高くやんごとなき人　二つには若き人　三つには病なく身強き人　四つには酒を好む人　五つにはたけく勇める兵　六つには虚言する人　七つには欲深き人」注1とあります。私は酒は大好きで毎晩呑んでいます。無病息災でランニングも山登りも人並み以上に速く走り登る自信があります。私は嘘をついたことがありませんといったとたんもう私は嘘をついています。大変欲深く明日は今日よりももっと楽しく暮したいと常に思っています。七つのうち四つも当てはまるようでは私は兼好さんのお友達にしてもらえそうもありませんね。続いて彼はこうも言っています。「よき友三つあり　一つには物くるゝ友　二つには医師　三つには智恵ある友」これは確実にどれも当てはまりません。ものをくれる人は大好きですがあげたくても私にはあげるほどの持ち

合わせがありません。知恵と猿知恵の区別が未だに私にはつかないのです。もちろん医者の資格は持ち合わせていません。

自分自身が「悪しき友」の典型で「よき友」にはとうていなれない腹いせで言うわけではありませんが、私は兼好さんがあげた「よき友」の三つには賛成しかねます。「ものをくれる人」はその見返りを求めないで純粋に施すことに喜びを感じる人なのでしょうか。「医師」は病める人の身と心の苦痛を和らげてくれる人なのでしょうか。「知恵ある人」は全ての人に共通の慈悲ある知恵を示すことができる人なのでしょうか。

前号で「今私には善知識と呼べるよき友がいる」と書きました。彼は末期がんの患者で五月に病院からは見放され、歩くこともできなくなり、在宅医療で最後を待つばかりだったのです。そんな状態の彼が、あるきっかけで自ら「生死不二」を明らかにして以来、介護する奥さん共々見違えるほどに心安らかな毎日を過ごすようになりました。[注2]つい一週間前には彼は約束通り私に焼き肉をご馳走してくれました。杖をつき支えられながらの歩行ですが、車からお店まで歩くことができるようになり、ランチの焼き肉セットをデザートのアイスクリームまで残さず平らげたのです。その時彼が話してくれた話に私は衝撃を受けました。

在宅医療は二週間に一回医者がやって来ます。末期がんの患者には治療方法はもうないと思っているのか、軀を触診するわけでもなくパソコンに向かって二言三言何か喋って五分あまりで帰ってしまい、翌日奥さんが二週間分の薬をもらいにその医者の病院に行く繰り返しの二週間です。ある日彼はまた歩けるようになったので往診ではなく病院で診察を受けたい、薬も以前の病院では一ヶ月分もらえたのでその様にして欲しいと要望しました。これは歩けるようになったのでたまには外に出たいという気持ちとともに、年金生活者の夫婦にとっては切実な医療費の問題でもあったのです。具体的な金額を聞くと二週間毎の往診の医療費と交通費は大変な負担です。これが一ヶ月毎に本人が病院に出向くことが可能であれば相当軽減できます。これは自分の軀が動く間は外の空気を吸いたいという生きる意志と、経済的観点からあたり前の要望に思えます。

医者はその話を聞いて余り良い顔はしなかったようですが、彼は往診を一旦中断して貰いその医者の病院へ受診に出向きました。そこで彼と奥さんが言われたことは私は二人からの又聞きなので正確に書くことはできませんし、言った言わない、そんなつもりで言ったわけではないとなりがちな話なのでやりとりは書きません。ただ彼らがその医者から受け取った意味を要約すると「なんで医者の指示に従わない、いつ死んでもおかしくないんだから勝手なことをするな。今度歩けなくなったらどうするんだ。うちがいやだったらよその病院に行けばいい」ということ。二人は今までいろいろな医者に見て貰ったがこんな言葉を浴びせられたことは初めてだと、とても悔しそうに話しました。ただ残念なことに彼らは大病院からは治療の方法はもうないと言われ、経済的にも終末ケアを手厚く受けられる施設に入ることもできず、最後は在宅医療に頼るしか方法がないのです。だからまた歩けなくなったらこの医者に往診に来てもらう選択肢以外ないのです。

私は彼が自らの意志でまた歩くようになり、床屋に行きたい、一緒に焼き肉を食べに行こうと言われたときは心底嬉しく思いました。「それではいつ行きますか、何時に迎えに行きますね」となっても「転んだら危ないからやめておいたほうがいいですよ」という話にはなりません。一時とはいえここまで回復したことを喜び、生きる意志を尊重して出来る限り応援したいと考える方が自然な反応だと思います。でもそ

れは医療の立場から見ると間違った考えなのでしょうか。患者の意志が尊重されるのではなく医療の意志が優先されているように見えますが、それともそれは現在の彼の主治医の特殊な考え方なのでしょうか。

私はこのところ「生死不二」について書き綴っています。それは「死の側から生をみる」ことでもあると書きました。ところが医療は生の側からだけしか死を見ようとしません。物理的な肉体の生を維持することしか念頭になくその肉体が心によって動かされているということを考えようともしないのです。「生死不二」を悟っている彼は、肉体の生死へのこだわりを解き放ち心の自由の中で現在の「生死」を見ているわけですから主治医と意見が合うはずもありません。幸い彼は悔しそうにこの話をしても、落ち込むそぶりもなく気持ちは穏やかで晴れやかです。「生死不二」への厚い「信」を私はそこに見ることが出来たのです。

兼好の言う「よき友」が私の考える「すべての人の苦痛を取り除き慈悲とありのままに観る知恵を与えてくれる友」であるならばそれは人々の苦痛を取り除く医師、つまりお釈迦様そのものです。私は善知識の皆とともにお釈迦様の道を辿り、私が皆の「よき友」であることを願い誓い行う日々を心穏やかに過ごしたいと思います。

注1：徒然草一一七段　注2：琉游舎だより第六十一号

狂言綺語四十八・・・即是道場（生死不二）

私は「日蓮宗の僧侶です」と自己紹介するとき、居心地の悪さをいつも感じています。その後に言い訳がましく「私は檀家も持っていませんし職業として僧侶をやっているわけでもありません」と付け加えてしまうのは、私の考える「僧侶」と「僧侶」の実態の間に違和感を感じているからなのでしょう。確かに私はいくつかの試験を受け、最終的には三五日間の結界修業を終了して「准講師」という免状を「日蓮宗」から頂きました。それは裏千家の茶道師範や草月流華道師範のお免状と同類です。それを持っていればその流派の看板を掲げて弟子を取って月謝を頂くことが出来るという資格と同じように、日蓮宗の看板を掲げて法要の導師を演じその対価としてお布施を頂いても良いという資格です。「茶道は茶を点て振る舞う行為（儀式）に過ぎない」「華道は植物を美的に飾る行為（技術）に過ぎない」と言ったら怒り出す人がたくさん出てくるでしょう。もちろん茶道や華道がそんな表面的でないことは承知の上での暴言なのですが、それでは僧侶は導師（技術者）として法要（儀式）を行う者に過ぎないと言ったとしたらそれも暴言でしょうか。

ここで皆さんに私が日蓮宗の資格を最終的に得たときの修業についてお話しします。まず修行の心構えの第一は「三宝給仕」と「道場荘厳」にあります。「三宝」は「仏・法（教え）・僧」のことで、日蓮宗ではそれぞれ「久遠実成の釈迦牟尼仏」「妙法蓮華経」「日蓮聖人」となります。この三宝のおそばでいろいろな用をしてお仕えすることが「三宝給仕」です。「道場荘厳」は三宝の住まわれている場所（道場）をそのお住まいにふさわしい場所として荘厳（飾る）することです。この二つの心を養い具体的な所作を身につける中で法要儀式の習熟のための式作法である「尊重の心」と「厳粛な態度」の二つが徹底的に仕込まれます。朝四時の水行から始まり夜九時までの時間は三宝への給仕と式作法の修練のための時間です。その間の食事も掃除も歩くことも話すことも衣食住の全てが修業の時間です。結界の中で修業するわけですから

修行僧にとっては外の世界は存在しないと同じなのです。というととても大変なことのように聞こえますが、本来何かを習得するということは余計な雑音がなく集中できる環境が必要だと考えればこの結界修業も非常に合理的で技術の習得には最適な方法だと思われます。当時私が消灯までのわずかな時間に付けていた日記を読み返すと「つらい修業と聞いていたが思いのほか楽しい毎日である。所作と心構えの習得という観点からはとても良く出来たシステムだ」と書いてあります。「ここは僧侶の職業訓練校だ」とまで書いてあります。

私が僧侶としての資格を習得した目的は日々の行いの「基礎＝信」を強固に築くことにありました。現在の私の毎日は朝勤と琉游舎という「場」を作ることを通じて「三宝給仕」と「道場荘厳」を実践しています。以前にも書いたように注1朝勤はお釈迦さまへの朝のご挨拶と一日をありのままに行うことへの心と体のウォーミングアップであり、基礎（信）への感謝とそれが不動であることへの確認です。基礎だけ作ってその上に建物を建てなければその基礎は何の意味もないと同じように、基礎（信）の上に「行い」を積み上げていかなければ、「三宝給仕」も「道場荘厳」も形骸化してしまいます。「形式」と「技術」に安住して「行い」を怠る僧侶は資格だけの僧侶ということになるでしょう。基礎の上に積み上げる行いの日々があって、初めて私は僧侶となるのです。冒頭の自己紹介の言葉への違和感はそこに由来するものなのです。

私は琉游舎での法要の他に葬儀場やご自宅に伺って法要を執り行うことがあります。法要の技術は免状で保証されているので問題はないと自負はしていますが、免状が保証する尊重の心を持って厳粛に行う儀式は法要の基礎にしか過ぎません。その基礎に積み上げる法要の「行い」とはなんでしょうか。それは施主を初めとした参列の皆さんと供養される方との間に立って、お互いの心を行き交い語らう場を現前させることです。「生者」と「死者」とをお釈迦さまの神通力をお借りして感応道交させることにあります。法要は「生者」と「死者」の出合う「場」つまり「生死不二」の「場」なのです。仏さま（死）の働きかけとそれを感じ取る私たち（生）の心とが通じ相交わるこの場所が感応道交の「場」です。僧侶は法要を導師として執り行うことで「生」と「死」がお互いの働きかけに応じて心が相交わる「場」を「道場」の中に現前させる「者」です。私はその「者」になるために日蓮聖人の教えを通してお釈迦様の力をお借りし、その勤めを果そうとしている「者」です。その時初めて私は「日蓮宗の僧侶」となることができるのです。

法要を儀式と規定してしまうことは大きな間違いです。法要は「生死不二」の「場」です。葬儀や彼岸などの法要を儀式と呼ぶと分かり易いでしょうが、それは儀式の形を取っているだけで本来の役割はその場に「生死不二」の「場」を現前させることです。「当知是処　即是道場」（当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり）注2法華経は「教えのあるところそこは全て道場である」と教えています。仏壇と本尊があり香と花と蝋燭があるところだけが道場ではありません。「教え」があるところは全てそこが道場です。「教え」は「信」と「行い」によって私たちの前に現前します。信行一致のところがすなわち道場であり法要の場であり生死不二の場となります。私たちの生きているこの場所と毎日が全て道場なのです。

「書を捨てよ、町へ出よう」注3という歌人の言葉は「書で蓄えた知識を今こそ町で実践しようじゃないか」という意味でしょう。「さあ修業で蓄えた信の力を町に出て実践（行い）しようじゃないか。そして町という道場の中で日々修業を続けようじゃないか！」これが僧侶である私自身へのメッセージであり誓いです。

注1：琉游舎だより第28号　注2：妙法蓮華経「如来神力品第21」　注3：寺山修司

狂言綺語四十九・・・遊行期（生死不二）

インドのヒンドゥー社会にはアーシュラマ（住期）という理念的な人生区分の考え方があります。バラモン（司祭）クシャトリア（王族・武士）ヴァイシャ（農業・牧畜・商業従事者）の三階級の男子は四つの人生区分に随って一生を過ごすように決められていたのです。どこまで厳格に実行されていたかは定かではありませんが、インド人の中から生まれたこの考えから仏教の人生観の源泉が見えてくるような気がします。

アーシュラマは学生期、家住期、林住期、遊行期の四つです。「学生期」は師のもとでヴェーダを学ぶ時期。ヴェーダは宗教文書であり知識のことですので、まずは一人前になるための学びの時期。学生時代です。「家住期」は家庭にあって子をもうけ一家の祭式を主宰する時期。経済活動を行い家族を守り先祖を祀る一家の大黒柱であり、社会的責任を引き受ける時代です。「林住期」は 森林に隠棲して修行する時期。経済活動からの引退。そして一族の財産と祭祀を子供に相続させ、社会的責任から解放されます。社会的存在から宗教的存在への移行です。「遊行期」は一定の住所をもたず乞食遊行する時期。森林での修業を経て真の宗教的自由を得、あるがままに道を遊行する時期です。宗教的生活の実践、信行一致の日々です。

時代も風土も違う今の日本にこの四住期を当てはめることは無理がありますが、漠然と私たちの人生区分に当てはまるようにも思えます。学生期と家住期はそのままなので分かり易いのですが、後の二つは一般的には退職後の人生で「余生」や「第二の人生」という言葉でまとめられてしまうものでしょう。私は「余り物の人生」と読めてしまう余生や「悠々自適」が理想のように誤解される第二の人生という言葉が今でも好きになれません。私が宗教生活に入った真の理由は林住期と遊行期に当てはまる人生期を余生や第二の人生として生き、そして死んでいくことに耐えられなかったからです。

私がインド人のこの人生観をどのように見たかをお話しします。四住期をそれぞれ年相応に随って果すべき役割のように見れば分かり易いかも知れませんが、私はその様に見るとどうしても後半の二つは社会的存在からの離脱、社会的なコストとならないための隠居、もっと過激な言葉で言えば姥捨て山の思想にも通じてしまうように感じてしまいます。つまり経済活動には役立たないから邪魔にならないように林の中に隠棲して、人から食を乞うて（乞食）細々と暮しなさいという考え方。生産性のない人たちの体の良い社会生活からの追放です。現実の日本の高齢者社会とその未来を考えると、林住期と遊行期にあたる年代を今の日本で年相応の役割を果すには、このように考えることは決して極端な見方ではないでしょう。しかし私は四住期を年相応の役割とは見ません。最初の三つは遊行期のための準備期間にすぎないと見ています。

「遊行」は、私の宗教生活が進むべき道そのもの、つまり「何ものにも囚われずあるがままの姿で行いの毎日を過ごすこと」なのです。遊行期を迎えて初めて「信行一致」が実現し安らぎの日々を思うがままに歩むことが出来る。これが私の「願い誓い行う」ことです。そのためには長い準備期間が必要だったのでしょう。私の学生期は二三歳まで。世界は理性と感情で全て説明できると考える「信」のかけらもない時期でした。しかしそれは今考えれば種々の知識に触れる智の拡散の時、「信」への助走期間だったのです。家住期は五五歳まで、経済活動によって一家を構え社会に寄与し実践を積み上げる経験の拡散の時、「行い」

の助走期間だったのです。五五歳で出家し精神的な林住期に入りました。まだ表面上は経済活動を続けていましたが、余生や第二の人生ではないこれからを送るための精神的隠棲と修業に励んだ時期です。そこで今までの知識と経験の拡散を「信」と「行」に収斂させることが出来るようになりました。そして五九歳で遊行期に歩みを進めることができたのです。思えば準備期間に五九年の歳月をかけてやっと遊行期を迎えることが出来ました。そこは日々刺激的で変化に富み豊かで喜びに溢れた処です。決して余生でも第二の人生でもない、三つの準備期間の試行錯誤が培った経験と知恵の堅固な土台の上に築かれた信行一致の「場」です。その場で私が観たものは「生死不二」です。教えのあるところは全て道場です。その道場は信行一致を実践することによって現前するのです。そしてそこが道場であり法要の場であり生死不二の場となります。その場を見つけるために私の五九年にわたる学生期と家住期と林住期があったと言えます。ここまでが永かったか短かったかは分かりません。しかし今過ごす遊行期は永遠に続きます。なぜなら遊行期は生死不二の場だからです。

私は現在琉游舎とコリーナシップの二つの場を道場に信行一致を実践しています。前者は集いの場・祈りの場・学びの場・稽古の場・語りの場・瞑想の場・酒宴の場としてのプライベート公民館、現代の寺です。後者は老若男女互いに出来る人が出来ない人のために助け合う組織、お互い様・相互扶助の安心の船（シップ）です。二つの場とも世代間横断と持続可能性を二本の柱にして、ここコリーナ矢板の地が「高齢者にとっては終の棲家であるように、働く世代にとっては安らぎのわが家であるように、子供にとってはいつでも戻ることのできる故郷となるように」と願い誓い行う場となりました。場を作ることは一人でもできますが場は動かなければただの器です。ただの器を動かすものはその場にいるみんなの「願い」です。琉游舎とコリーナシップに、みんなの「こうしたい」「ああしたい」の願いが注がれると場は動きだし、生死不二を現前させます。私の遊行期は皆さんの願いのあるがままに動かされ、自由に何ものにも囚われずに遊ぶことの出来る安らぎの処。願いがある限り場は永遠に動き続けます。みなさんの願いが、これからも数限りなく琉游舎とコリーナシップに注がれますように。

狂言綺語五十・・・涅槃像（生死不二）

先日縁あって伺った真岡の真宗高田派本寺専修寺で「涅槃像」の仏像に出会いました。涅槃像はお釈迦様の入滅の時の姿を表現したもので、寝釈迦、ねぼとけとも呼ばれ、右手を枕として頭は北向き、顔は西向きで横たわれている姿です。かつてタイの寺院で強大な金色に輝く涅槃像に出会ったことはありますが、日本ではまだ寡聞にして拝見したことがありませんでした。この専修寺の涅槃像は元禄時代に作られたもので、木造金箔塗りの三メートルにも及ぶ大きなものです。眼をつぶられているので、最後の説法を終えすでに入滅された姿を表現されたものでしょう。穏やかなお顔です。お釈迦様は入滅されたその時から私達の中で永遠のいのちとして生き続け、教えが受け継がれてきました。専修寺の涅槃像はまさしくその瞬間を表しているのです。観光地でもなく、大寺院でもなく、参拝に訪れる方もほとんど見受けられないこの専修寺は、親鸞聖人が建立された唯一の寺院であり七年の間聖人が居住され専修念仏の根本道場とされた聖地です。重要文化財に指定されているそのほかの像や建物にもまして、私はこの涅槃像に、ここで八

百年近くもの間ひっそりと誇るでもなく教えを守り続けてきた信徒たちの、信仰の喜びと自負を見ることができました。

先日私の善知識が亡くなられました。この欄で二回ほど[注1]彼が私の善知識であることのお話をしました。直前まで好きなものをおいしく頂き、一時の歩行困難からも回復していたのですが、痛みがひどくなり救急車で緊急入院されました。二一時まで看護師さんと話されていたとのことですが様態が急変して二二時に亡くなられました。今年の二月以来私の行いを一緒に歩んでくれた彼は私の永遠のいのちの一人となったのです。

原始仏典はお釈迦様がそのときどきに語られた言葉が集められています。ただ断片的な言葉の集成のため、系統だった生涯や理論としての教えは明確には捉えかねるところがあります。ところが死とその前後の出来事については詠嘆と哀しみを込めて、かなり詳細に「小乗涅槃経（大パリニッツバーナ経）」[注2]に記されています。弟子たちにとってお釈迦様の死は永久に忘れられぬ一大事だったのであり、以後の弟子たちの行いの歩みにも決定的な影響を与えたのでしょう。死はお釈迦様にとっては突然の出来ごとでもなく、死に支配されることでもありませんでした。主体的に死を自ら受け入れ死を制圧した結果なのです。これは自分のなし得ることをなしたもの、死を明らかにしたものに訪れる心境なのでしょう。死の直前まで弟子たちを励ましています。「私はあなた方を捨ててゆかねばならない。私が自己に帰依することを成し遂げたように、あなたたちも勤め励み、心を静め、保ち、教えの通り行いなさい、そうすれば輪廻から離れて、苦しみも消滅するであろう」と。そして最後の言葉は「全てのものは移りゆく、怠らず行いを完成させなさい」です。この言葉を残された時から、私たちお釈迦様の弟子たちは行いを完成させるために止めることなく日々の歩みを続けているのでしょう。お釈迦様は自らの死、つまり「人は死すべき存在」であることを示すことで、私たちに日々の生の在り方を教えてくださったのです。

お釈迦様はこのように自らの死を通して、人は死への存在であり人生は流転する無常のものであることを解き明かしました。そしてそこに立ちすくんではなりません、死に目を背けることなくありのままに「死」を観なさいと教えています。ありのままに観ることによって「生」に対する執着を断ち切り「苦」から解き放たれるのだと言われているのです。お釈迦様は肉体的な死によって「苦」から解放されることが出来るとは決して言っていません。人は死すべき存在であることを明らかにし受け入れることで「苦」から解放されるのだと言っているのです。だから自らの死にあたっても弟子たちを励まし「自らの明かり（自灯明）と教えの明かり（法灯明）を頼りに歩まれよ」とおっしゃっているのです。

「生死不二」という言葉を私はこの「狂言綺語」の場で何度も使ってきました。この言葉は「生に執着することもなく、死を否定することもなく、生死のこだわりに翻弄されることもなく日々歩んでいきなさい」と言う教えです。「人は死すべきものとしてのみ生を与えられた存在」ということを明らかにし、そのことに帰依することが悟りであり、安らぎの処であり、涅槃であるということです。

人はよく亡き骸をみて「安らかなお顔でまるで眠られているようですね」と言います。それは眠っているからではありません。お釈迦様は肉体的な死の前と後のお顔に変化があったでしょうか。説法されるときも死を迎えて横たわっている時もどちらも安らかな顔をしていたはずです。そして私たちがいろいろな場で拝見するお釈迦様のお顔もいつも安らかなお顔のままです。先日亡くなられた私の善知識も安らかなお顔のままで亡くなられました。彼が「人は死すべきもの」と明らかにされた時以来、いつお会いしても

安らかで穏やかなお姿と心は今も変わりません。彼の涅槃像のように横たわる姿の前で私が読経するときも、骨となった骨壺の前で読経するときも、変わらぬ安らかなお顔のままにこの「生死不二」の場に現前されるのです。

さて今鏡に映される私の顔は安らかでしょうか。僧侶は「生死不二」を現前させることで初めて僧侶となる注3と言った限り、私は安らかな顔で涅槃像のように横たわるその時まで「生死不二」を日々の行いの中で問い続けなければなりません。その問いの一つが、近しい人の死に直面し残された人の感情を「生死不二」の言葉に収斂させてしまっていいのかということ。言葉で断ち切れるほど感情はもろくないはずです。感情が「生死不二」と一体化し言葉にする必要がなくなる時が必ずあるはず。その時はどんな時なのか、楽しみな琉游舎の日々です

注1：琉游舎だより61、62号、注2：「ブッタ最後の旅」岩波文庫、注3：琉游舎だより63号

狂言綺語五十一・・・問答

問いに答えることは思いのほか難しいことです。特に自分自身のことについて問われると答えに窮してしまうことがあります。たびたび問われる「なんで僧侶になったのですか？」への答えは以前この場でも書きました。ただそれがこれからずっと正答なのかどうか、三年後には違う答えになっているかもしれません。しかし質問に真摯に正直に答えられたものがその時の正答であると考えてなんとか質問には応えていこうと考えています。一方「趣味は何ですか？」という問いには無趣味の私は真摯に答えようがないのです。「映画と読書です」と無難にこう答えると「一番好きな映画は？」と二の矢が飛んできます。私はここ数年映画館に行っていないボロが出ないよう「殺しの烙印」と「仁義の墓場」ですと答えるようにしています。そうすると第三の矢が飛んでくることはほとんどありません。これで煙に巻くことが出来ました。

ところで前回で狂言綺語はちょうど五十回となりました。切りのいいところで全部を読み返すと、私は最初から同じことを書き続けていることが改めて分かりました。「安らぎのところ」と「願い、誓い、行う」この二つの言葉を私自身の「毎日」にするために自らに問いを投げかけそれに答えて五十回、一の矢から五十の矢まで自らに問答の矢を射続けてきたようなものです。このように私の狂言綺語は自問自答の繰り返しですから的を大きく外すことはありません。しかし真ん中の十点満点を射貫くことは決してないのです。私の放った五十本の矢は六点のあたりできれいに同心円を描いています。これはいけない、的を外すことがあってもいい、失速して届かなくてもいい、途中で撃ち落とされてもいい、キレイな同心円を描くような結果は予定調和です。真ん中の十点満点は決してこれからも射貫くことはできないでしょう。それは「信」の場だからです。「信」は再三述べてきたように言葉（ロゴス）では決して射貫くことはできない場。真ん中は「行」によってのみ射貫くことのできる場。その「信行」の場所をぐるりと取り囲むように言葉の矢が同心円を作っています。この様子を眺めていると、自分自身が唯円が歎異抄で痛烈に批判（異議批判）注1していた、仏法を自らの計らいで解釈しようとする似非僧侶（パリサイ人注2）たちの姿とだぶって見えてきてしまいました。と、いつもの狂言綺語であればここから自分の放った問いの矢が六点の的に届くように答えを書いていくのですが、今回は予定調和をやめにして最初の段で煙に巻いた趣味の話に

戻ります。

趣味には時間と資金が必要です。特にコレクション趣味は投資対効果が全く不明で「花より団子」がモットーの私には向いていません。コレクションにそれを求めるのはそもそも筋違いなのでしょうが、小学生の時に夢中となった切手収集は今ではプレミアムどころか、額面でも引き取って貰えません。切手として使おうとすれば、封書の四分の一ほどが切手で埋め尽くされてしまうでしょう。保管場所をたいしてとらないので今は死蔵状態です。コレクションの大半は興味ない人にとって、骨董は燃えないゴミに、スクラップブックはトイレットペーパーに、庭石は躓きの石となってしまうに違いありません。私は子孫にゴミや負債を残さないためにもコレクションは切手収集以来持たないようにしています。とはいって他の趣味があるわけではありません。ランニングを趣味にしようとしていたのですが、コリーナのアップダウンは過酷なためこの地で趣味にする覚悟がまだできません。ゴルフやカラオケは会社員時代に接待の道具としてさんざん仕事してきたので今更仕事を趣味にすることはできません。尺八を趣味にしようと最近購入してみたものの趣味と言えるようになる前に肩たたきの棒に変身してしまいそうです。私の無趣味は根気不足かめんどくさがりが原因のようですが、無趣味でいることは時間を自由に使えることなのだと勝手に得心して今は満足しています。

時間が自由に使えると、皆さんから「少し時間を貸してくれませんか」と言われた時喜んで自分の時間を差し上げることができます。これはまた皆さんの時間を私が有難く頂戴しているということでもあるのです。これはお互いの時間の共有、対話の時。ここの所様々な方と会話する機会があります。これは自問自答ではなく他者との問答です。どこから問いの矢が飛んでくるかもどこへ答えの矢を射返していいいかも全く予想がつきません。このやりとりは実に楽しい時間で、お互い時の経つのも忘れ三時間も四時間も話をし続けることがあります。「言葉」の投げかけ合い(議論・ディベート)であれば、言葉で相手を納得させるか屈服させればそこで時間は終了してしまいます。「行」の問いかけ合いであればお互いがその「行」を理解し尊重し自分自身の「行」にまた再び歩を進めるその時まで対話(問答・ダイアローグ)が果てしなく続くでしょう。先日の問答の相手は帰り際に「これで確信をもって前に進めます」と言われました。有り難い言葉です。私自身もその問答によって自分自身の日々の行いが形(言葉)となっていく姿がよく見えます。問答は互いの「行い」を言葉に変えて、真摯に問い答える「行い」の場のような気がしてなりません。

十点満点の「信行」の的は「言葉」では絶対射貫けないものだと考えても、そこで開き直ってはいけないでしょう。「信行」を「言葉」に変えて行く行為は続けなければなりません。皆さんとの会話の中で、それは「問答」を繰り返し続けることだと最近分かった次第です。そういえばプラトンの著作は「対話篇」と呼ばれ全て師ソクラテスと他者との問答によって書かれています。日蓮聖人が時の最高権力者の北条時頼に提出した諫文にして主著「立正安国論」も旅の客と宿の主人との問答体です。

「乞う、対話の相手。当方、時間はたっぷりあります!」皆さんの時間を私にお貸し下さい。琉游舎でお待ちしています。

注1：歎異抄（第二条以降）注2：「歎異抄現代語及びこころ」（梅原猛）

狂言綺語五十二・・・ブッダとの問答

「あなたもブッダになれる」「あなたをはなれて仏教の真理はない」このコピーはＮＨＫで十一月に放送された「100分de名著・法華経」のテキスト本の表紙に書かれていたものです。テレビの放送は見ていないのですが書店でこの表紙を見て思わず買ってしまいました。税込み五七四円です。私は日蓮宗の僧侶ですから毎日のように法華経を読誦し全巻を読み通したことも五〇回は下りません。二年間に渡る読書会のために一字一句の意味を精査し理解しながら読んでもきました。また手に入る解説書もできる限り購入して読んできました。あまりにも教団擁護に堕した解説書などは無視してきましたが、それでも職業を生業にする僧侶の皆さんに負けないくらいの読書量と理解はあるはずです。ただ、どう読んでも理解できないところや各章間の矛盾、法華経の根本精神と反する記述などの問題は解決できませんでした。ところがこのテキストで（二時間弱で読めます）今までの疑問点はすべて氷解してしまいました。五七四円と二時間足らずの読書時間でです。

このテキストの著者注1の法華経解釈の基本的な態度は、法華経が成立する過程と当時の社会状況、仏教界が直面していた課題を切り離して理解をしてはいけないということです。法華経はあるときに一気に完成したものではなく長い年月を経て書き加えられ挿入されて今に至っています。その加筆にも時代要請が必ずあったはずです。明治時代までは紀元四〇〇年に鳩摩羅什によって中国語に訳されたものが法華経でしたが、その後サンスクリット語の原典が発見され、中国訳との異同などがたくさん見つかるようになったのです。著者はサンスクリット語原典の言葉の用法、当時のインドの社会と仏教界の状況、原始経典に残されているお釈迦様の言葉（教え）との違いや変遷を精査し、言葉の解釈、なぜこのような表現が必要とされこの章が挿入されたのかについて、当時の社会と仏教界の課題要請に沿って理解し、なぜ法華経は書かれたのかという目的を解き明かしています。その目的は実在のお釈迦様の言葉（教え）の原点に戻ること。数多の教えや仏が散乱している当時の仏教界の現状を一つの「教え」と「仏」に統一することです。これを難しい仏教用語で言うと「一仏乗」と「久遠実成の釈迦牟尼仏」です。私たちの言葉に直すと「すべてのいのちは平等である」と「お釈迦様の永遠性」ということ。そしてもっと分かり易く言うと冒頭のコピーになります。

「すべてのいのちは平等である」＝「あなたもブッダになれる」「お釈迦様の永遠性」＝「あなたをはなれて仏教の真理はない」と、かくも簡単に結論付けられると高名な宗教学者や宗門の偉い人からバッシングを受けるか未熟者と嘲笑されるかでしょう。法華経の教えが全く崇高に聞こえてきません。では最初に仏の教えを唱えたお釈迦様は崇高な存在だったのでしょうか？信仰は仏壇や神棚の奥深くに崇め奉るものではありません。ましてやどこにいるかも分からない絶対者に身も心も無条件に預けてしまうことでもありません。お釈迦様にとっては仲間たち同士、ともに「安らぎのところ」へと歩む行いが仏への道だったのです。ところが亡くなったあとお釈迦様の神格化が始まりました。初めは慕い悲しむ気持ちからだったのでしょうが、次第にそれは僧侶たちの権威を示し特権階級化するための手段となってしまったのです。「教え」が分かり易いことは僧侶にとっては大変不都合なことです。「教え」をかみ砕いて説明する仲介者の役も自分たちの都合の良いように読み替えることも出来なくなってしまうからです。残念ながら宗教の

歴史はこの繰り返しなのかも知れません。お釈迦様も日蓮聖人も、その言葉は数多の時と人を経ていく間に読み替えと師の絶対化が始まってしまいます。生きている間は同じ道をともに歩んできたのに、亡くなってしまうと仏壇の高いところに仏像や祖師像として崇め奉られて身動きが出来ないように幽閉されてしまうのです。「私たちの手の中にお釈迦様や祖師を取り戻すために、今何を行うか」法華経はこのように私に問いかけてきます。

絶対化されてしまった存在と私たち衆生が、自由に障りなく問答など出来る訳がありません。今この私たちが生きている営みの中で日々起こる喜怒哀楽をともに分かち合い、迷いや疑問を語り合う場が信仰の場だと私は信じています。そして私たちのこの日常がお釈迦様や日蓮聖人との問答の場なのです。その問答の場は自由で障りは一切ありません。私たちの日々の行いへの確信と自省の問いかけにお釈迦様や日蓮聖人は「教え」でお答えになって下さるからです。その問答のやりとりの時、私たちの中に仏が内在してきます。「すべてのいのちは平等になる」ときです。つまり「あなたもブッダになる」のです。そしてその問答は私たちが求めれば永遠に続けることが出来ます。なぜならば「教え(法)」は法華経そのものでありそれは「永遠のお釈迦様」のことだからです。私たちが「教え」と問答を繰り返すとき、心に内在する仏によって真理が立ち現れ、人は自分自身に目覚めるのです。これが「あなたをはなれて仏教の真理はない」ということ。仏教は現実社会や人間生活から離れて存在することは決してありません。その中で自分自身を見失うことなく「自己」と「教え」を灯明[注2]にして生きていくことを仏教は強く私たちに要求をしているのです。だから別の架空の世界に絶対者を仮構することはあり得ません。「現実社会の中で自分自身と法に目覚め生きていきなさい」法華経が私たちに示してくれたことはただこの一点にあるのだと、私は今確信しています。

私がブッダになるとき、あなたもブッダとなるはず。またその逆も真実です。対話を通じて互いに行いの道を歩むとき、たとえそれが一瞬であろうともそれぞれ心の中にお釈迦様の教えが立ち現れてくると信じて、内なる私のブッダとあなたのブッダとの対話を楽しみたいと思います。今日も琉游舎で皆さんをお待ちしています。

注1：植木雅俊　注2：「自灯明」「法灯明」

狂言綺語五十三・・・美しい日本

いつもなら十二月に入ったとたん冬を実感するようになるのですが,今年はまだ冬と秋の間を行ったり来たりしているような気候が続いています。おかげでコリーナの紅葉もまだ全て散ってはいません。小春日和の中を散歩すると風が吹くたびに舞い散る葉が日に煌めき、足元の枯葉はサクサクとした音を奏でます。かと思えば翌日は厳しい冷え込みとなり落ち葉に降りた霜にキラキラと朝日が反射します。その下の霜柱を踏む音がザクザクと足裏を刺激し心も体も覚醒してきます。これが初冬の美しいコリーナ。私の毎日の生活の中にある美しい日本。夏には夏の、冬には冬の、人それぞれのかけがえのない美しい日本があります。殊更に「美しい日本を作るのだ」と気負わなくても、ありのままに観ればそこはどこもかしこも美しい日本です。

理想的な立場を表明しているように見える言葉は、耳にも心地よく、口当たりもよいだけにとても厄介な代物です。「美しい国、日本」「一億総活躍社会」「人づくり革命」どの言葉も反対できそうもない見事なかけ声（プロパガンダ）です。かけ声は一見平易で輪郭が明確、考える間もなく脳を直接刺激する言葉が有効です。そしてもっともらしく見えることが肝要。それは誰にも当てはまりそうで実は誰にも当てはまらない巧みな言葉であることが往々にしてあります。私たちは掛け声が実は絵に描いた餅に過ぎず、何らかの不都合な真実から目をそらすための逃げ口上でしかない現実を何度見てきたことでしょう。「世界平和実現」や「核廃絶」もしかり。どこの国も宗教も同じようなことを言っていますが、そこに正義や宗教理念が入り込むとテロや戦争を引き起こしかねません。賢明な宗教家はその言葉が行いと結びついたとき危険な対立を生むことを理解しているので行いには踏み込まないようにしているのでしょう。その対立を対話で解消できると愚直に信じる宗教家だけが掛け声を行いに変えて行くことが出来るのです。先日ローマ教皇フランシスコが被爆地広島と長崎を訪問し、そこで核兵器廃絶へのメッセージを発信しました。彼の言葉は少なくとも異教徒の私にも強い力をもって聞こえてきました。翻って被爆国の日本の賢明な宗教家は何をしているのか。「いや、ちゃんとうちの教団でも世界平和や核廃絶を宗是としている」と言われるかもしれません。でも行いを通して私たちの前に示さなければそれはただの掛け声です。それは言わないほうがまだましな言葉。言っただけでやった気になってしまう言葉、いつの間にかそんなはずではなかったということになってしまう言葉。耳に心地よく理想を語ったように聞こえる言葉は要注意です。「美しい国、日本」のように。

「あなたもブッダになれる」これは前回述べたように法華経が書かれた目的です。何と耳に心地よい言葉でしょうか！しかし果たしてこの言葉にもっともらしい掛け声の影はないでしょうか？法華経の平等主義を端的に表した「あなたもブッダになれる」は、信仰の世界の平等であり俗世の平等を約束した言葉ではないと解釈されると、逆に俗世の不平等を容認し見過ごす言葉に転化することも可能なのです。「信仰の世界では私たちは平等なんだから、俗世の不平等は我慢しなさい」と。信仰の世界の平等を語ることは簡単です。それはあなたの心の問題だからです。しかし俗世の平等を唱えることは大変困難なことです。それは必ず時の権力や常識と軋轢を引き起こすからです。お釈迦様の教えが俗世の不平等を容認し見逃すことによって流布しているならば、それは誤った教え（謗法）です。宗教改革者と言われる人たちは、謗法を信じてしまい苦しむ人々を救うために、正しい教え（正法）と信じる教えを愚直に説き続ける人を指しているのです。

その宗教改革者の一人日蓮聖人は、人々が悪政と自然災害に苦しんでいるのは世に様々なお釈迦様の教えと称する謗法が広まっているからだと考え、信仰の世界が平等であれば俗世も平等の世界になるはずだと信じて、お釈迦様の正しい教え、正法を愚直に説いてきました。「あなたもブッダになれる」を信仰の世界だけでなく俗世の現実社会の中でも実現できると信じて行い続けてきたのです。その結果、時の権力から島流しの刑を受け頸を切られそうにもなりしました。お釈迦様の言葉をそのまま信じてそれを行いに変えていった結果は俗世からの厳しい弾圧だったのです。信行一致を信仰の世界だけで実現することはそんなに困難なことではありません。自分一人だけで精進し修行すればよい自己完結の世界だからです。しかし私たちは社会や他者の関係性の中でしか生きていくことが出来ないのです。信行一致を実践するならば社会生活の中で実践するほかないはずです。言葉（教え）が掛け声に終わってしまったらそれは謗法です。

言葉（教え）の通りに実践すればそれは正法です。それがいかに困難なことかは日蓮聖人の例を見るまでもありません。

自分たちだけの聖域である僧坊に閉じこもって、あるいは国会の多数派の砦に守られ、そこからいくら理想的な言葉を表明しようがそれはプロパガンダに過ぎません。特定の思想・行動へ誘導する意図を持った集団の利益追求の手段なのです。実践と対話なき言葉はその虚飾の衣装をはぎ取ったら、中には何も残らない空っぽの空洞が残されるだけでしょう。現実の生活の場で対話し実践されて初めて言葉は数多の装飾を脱ぎ捨てありのままの姿を現してくれるのです。その時こそ私たちが言葉を信じることが出来る時。宗教家は言葉が教えとして実践されるように、自らも信行一致の言葉を語り行い続けなければならないのです。

私の美しい日本は私の日々の生活そのもの。ここで観ること聞くこと行うことすべてが美しい日本との対話と実践です。あえてここで私の美しい日本を語らなければならないことに実はもどかしさを覚えています。美は語るものではなく享受するもの。しかし今語ることの実践を続けないと、私は私の美しい日本との生活が誰かに奪われてしまうのではと恐れるのです。それはまたあなたの美しい日本でもあるはずです。

狂言綺語五十四・・・祖霊

今回の狂言綺語は元旦の発行となりました。皆さん、正月はどのようにお過ごしですか?あわただしい年の瀬と帰省ラッシュを乗り越えて、元旦は実家でのんびり過ごすことが出来ているでしょうか。子や孫が帰省して逆に忙しい正月を過ごしているでしょうか。テレビとお屠蘇とおせちの寝正月もいいですね。ついこの間までは日本人の正月の行動パターンは大体似たり寄ったりだったのではないでしょうか。私が上京した四〇年以上前は一人で正月三日を東京で生活することはほぼ不可能でした。お店はどこも開いていません。もちろんコンビニもありませんでした。繁華街でたまさか営業している喫茶店は通常の三倍以上の正月特別料金でした。だからというわけでもありませんが、とにかく正月は実家に帰ることがあたり前だったのです。

離れ離れに暮らす家族が年二度全員集まる日の一つが正月。もう一つは盆です。核家族化する以前は親類縁者一同が本家に集まる日でした。そして集まった人たちで「年神」を迎える日だったのです。この年神とはもとは先祖の霊が一つとなった「祖霊」であると言われています。地方によっていろいろな意味合いがあるようですが、柳田国男は年神を一年を守護する神、農作を守護する神、家を守護する祖霊の三つの神が一つになった民間信仰の神が年神様だとしています。注1本来正月と盆は祖霊祭祀の機会、死者のための祭りの日だったのです。この一年を無事に過ごすことが出来るよう、豊作をもたらすよう、家内安全であるようにとご守護してくれる年神様を家にお迎えし感謝する日が正月だったのです。門松も鏡餅も御節料理も年神様をおもてなしするものだったのでしょう。もはや核家族化どころか家族も崩壊し始めて、友達や一人で過ごすことが多くなった現代の正月に、私たちはどの神様をもてなしどの神様にご守護をお願いしているのでしょうか。神様は供物と感謝を怠らなければ善神として私たちを守護してくれます。し

かしいったんそれを怠ると悪神となって私たちに祟りをなします。普段神様や仏さまへの信心がない大方の日本人も初詣には出かけるでしょう。やはり迷信として一蹴するには引っかかる何かが正月にはあるからなのに違いありません。

仏教の基本的な考え方では、仏さまがお盆や正月に家に戻ってくることはありません。仏さまになるということは六道輪廻から解放（解脱）されて、苦に満ちた現世を離れた存在になったことを言います。仏さまは家族や子孫に戻って来てくださいとお願いされ、供物や感謝の言葉につられてまたのこのこと現世に戻ってくることはないのです。盆や正月に祖霊を家にお迎えするという考え方は仏教の根本の教えと矛盾します。しかしこの矛盾を矛盾とすることなく民俗信仰としてつい現代まで連綿と続いてきた祖霊祭祀の伝統は、仏教が伝来するずっと前から日本人の心のDNAにプログラムされていた信心なのでしょう。日本の仏教はその信心の上に立っているのです。宗教は本来排他的なものです。改宗はそれまでの信心をすべて破却しないと成立しません。しかし仏教は日本人の本来的な信心を破却することなくその上にお釈迦様の教えを積み上げていった歴史があります。これが「心のDNA」に組み込まれた神への信心と「教え」としての外来の仏教信仰とが融合・調和して今にまで続く神仏習合の伝統です。明治維新に神仏分離令が出て廃仏毀釈が起こりましたが、権力が強制した法律は定着しようもなく今でも日本人は神仏習合の伝統の中にいます。「祖霊」が私たちを常に守護して下さるという「生来の信心」の上に、現世を心安らかに豊かに楽しく生きるための「教えの信心」を日本人は常日頃行ってきたのです。殊更に他の宗教との違いを言い立てられることもなく、自分の信心を否定されることもなく、誰に強制されることもなく、とても平和的で自然な信心の在り方です。

仏教の正月を祝う法要は「新年祝祷会」です。祖霊に感謝し供養する日。仏教では本来祖霊を現世にお呼びすることはありませんので、自身の中に祖霊を現前させるために私は法要を行います。それは祖霊に来てもらうのではなく私たちが祖霊に会いに行くことです。祖霊（仏さま）に会いに行くということは私たちが仏の住まわれる場所に出向くということです。そしてその瞬間は私たちが仏さまになる瞬間でもあるのです。日蓮聖人のご遺文にある言葉です。「佛と申す事も我等の心の内におわします（中略）我等が心の内に佛はおわしましけるを知り候わざりけるぞ」[注2]聖人が言われるように、私たちの心の中には常に仏さまがいらっしゃるのに私たちはそれを知らないで毎日を過ごしているのです。正月と彼岸と盆に行う琉游舎の法要は皆さんとともに私たちの心の中の仏さまにお会いする日であると私は考えています。形や方法は異なっていても日本人の根底には祖霊を敬い感謝する信心が大きく根を張っているはずです。その根の上に太い幹と良い枝ぶりを拡げていくことが永遠のいのちをつないでいくことそして日本をつないでいくことだと考えます。

一年前にも引用した日蓮聖人の正月について記した遺文を再録します。「正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め　これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく　とくもまさり人にもあいせられ候なり」[注3]日蓮聖人が正月に女性信者の方から「蒸し餅百枚、果物一篭」を供養されたお礼に書いた手紙の一節です。要約すると「元日は一切の始めの日です。この日を大切にする人は月が次第に満ち、日が普く照らしていくように、内には人徳を積み、外には人から敬愛をされるのです」となります。正月は一年のスタートの日。そのかけがえのない日を大切にする人は、この一年も自分ばかりでなく周りの全ての存在と供に豊かで実りある楽しい日々を過ごすこ

とができるという日蓮聖人の言葉を自分の身にしっかり納め、今年も心安らかな日々を歩んでいくことを願い誓い行ってまいりたいと思います。合掌。

注1：柳田国男「先祖の話」　注2，3：重須殿女房ご返事

狂言綺語五十五・・・大聖堂

街中至る所で歩きたばこをする人たち。地下鉄で携帯電話に向かって大声で話をする人たち。美術館の絵の前で自撮り棒で写真を撮りまくる人たち。芋を洗うような混雑の中やっと辿り着いたジュリエットの家という名の架空の名所。信仰の場所に入るための長い行列と高額な入場券と手荷物検査。寒空の中1時間半も待ち続けたレーンの横を次々と通り過ぎて建物に吸い込まれていく案内人に先導された、いくつもの集団。

先日三十五年ぶりにイタリア旅行に出かけたときの「?」と感じた光景を無作為に書き留めてみました。最近私は大都会の雑踏や観光地などからは縁遠くなっていたため、日本でも同じような状況か判断はできませんが、少なくとも銀座の歩行者天国で歩きたばこをする人はいないでしょうし、山手線の中の電話もたまに見かけても大概遠慮がちに喋っています。日本が変わったのかイタリアが変わっていないのか、観光地の特別な光景なのか分かりませんが、少なくとも三十五年前はイタリア人の生活の息づかいが感じられる街を旅していたのですが、今回はツアー客（旅行会社）のためにシステマチックに整備された観光地を観光のために観光していた印象が強く感じられました。ツアー客には特別の入場レーンや予約方法があるため、何事も時間通りに効率よく自動的に名所旧跡に連れて行ってくれます。ところが自由行動になったとたんとても不便になるのです。予約なく出かけた美術館は陽の当たらない城壁の冷たい壁沿いに長時間並びました。その横を予約のある団体が次々に通り過ぎていきます。やっと入場できたと思ったら、中はひどい混雑。有名な絵画の前は写真を撮る人だらけです。ふらっと来て好きな絵の前でしばらく佇んで時を忘れるなどという経験はとうてい味わえません。美術館は入場料が高くて敷居の高い場所です。三十五年の年月がイタリアの街を自由に旅を満喫できる観光地から、効率かつ画一的な観光のための観光地へと変えて行ってしまった気がします。

イタリアの街には教会がたくさんあります。そこはキリスト教カソリック教徒の人たちの信仰の場。たとえ観光で訪れた仏教徒であろうとも、ここは頭を垂れ静かに人々の祈りの声を聞くべき場です。ミラノ、ベネツィア、フィレンツェ、バチカンと誰もが観光で訪れる大聖堂に私も足を運びました。有料・無料・待ち時間の長短などまちまちでしたが、荷物検査だけは必ずあります。信仰への尊重の心を持って大聖堂の中に足を踏み入れるはずが、そんな感情を一気に吹き飛ばしてしまうような無粋な関門です。私はその瞬間に宗教家から物見遊山の観光客に早変わりしてしまいました。テロなどを警戒した対応なのでしょう。実際教会が襲撃され犠牲者が出る事件も起こっています。私はその事実を聞くたびに、宗教家として宗教について懐疑的な心境になってしまいます。宗教は寛容、慈悲、平和などの言葉と強い親和性があると信じたいのですが、実際のところ狭量、冷酷、戦争という言葉の方がぴたりと当てはまってしまうことの方が多いのです。猛反発を承知で「宗教の名の下に行われる平和活動や人道的支援は、宗教という名の下に

行われる戦争や迫害を隠蔽するための手段あるいは免罪符である」と極言してしまいたくなります。一人一人の信仰の根底は「愛」であってもそれが組織されると容易に「憎」に変貌してしまうことが可能だという事実を、私たち宗教家は認めなければなりません。宗教家はその認識から日々の行いを歩んでいかなければならないのです。

カソリックの総本山サン・ピエトロ大聖堂も私にとっては単なる観光地の一つとなってしまいました。これは宗教家としてあるまじきことなのか答えようがありませんが、私の信じる「信」のあり方からすればあたり前のことなのです。三十五年前は物見遊山の観光客としてなんの逡巡もなく見物することが出来た大聖堂が、僧侶となった今、他宗教への心理的な抵抗や僧体（剃髪）の合掌が不自然に見えないかなど、躊躇し立ち止まってしまう事態が起こるのではないかと直前まで頭を悩ませました。しかし何のことはありません、荷物検査と言う関門がそれらの躊躇をすべて吹き飛ばしてしまいました。信仰の場に入るために入場料や関門があるという場所は私にとってはもうすでに信仰の場ではありません。大聖堂に限らず清水寺も東大寺も東照宮にも、そこにある数々の仏像や絵画にも、私は今まで一度として宗教的な感覚を味わうことができなかったのです。その理由が今度のイタリアの大聖堂巡りでよく分かりました。信仰の場は自分の「信」との対話の場です。対話の相手は仏像や建物や絵画ではなく「教え」です。それはその宗派の宗祖の言葉にあるのではなく、人が幸せに豊かに心安らかに過ごすための「行い」にあるのです。その教えと対話する場所に必要なものは自由と平等です。法華経の教えで言えば「遊行」と「一仏乗」。つまり「融通無碍にありのままに行う」ことで「誰もが仏になることができる」ということです。この自由と平等の二つが存在する場が私にとっては信仰の場です。それは観光地の有名な大聖堂や社寺にあるのではなく、日々の生活の中にあって自らの行いによって作り上げていくものなのです。そのことが改めて確信できたイタリア旅行でした。

今回の旅行の楽しみの一つは昼からワイン三昧で過ごすことでした。しかしレストランのテラス席で見る光景はミネラルウォーターばかり。最近のイタリア人は勤勉で真面目になったようで、三十五年前のワイングラスを傾け陽気に食べ呑み語る彼らの姿は消えてしまったようです。グローバル化が進むと名所旧跡自然は変わらないままでも、それを管理・運用するシステムや人情というものは画一的で民族性が希薄になってきてしまうのでしょうか。旅行システムがビジネスとして整ってくると平準化した効率的なサービスをお金次第で受けられるようになる一方、旅の情緒が失われてくるのではと、日本酒好きの坊さんはまたもう一杯ワインを注文するのでした。

狂言綺語五十六・・・人為

まだ新芽が出る前の一月下旬、寒中の晴れた日、外に出るとどこからか草木を燃やすにおいが微かに流れてきます。霞ではないのに景色が少しけぶり厳しく冷えた大気が和らいだような錯覚に陥ります。どこかで野焼きをやっているようです。子どもの頃はあちこちで見られた風景。春を招くどこか郷愁を誘う野焼きのにおい。ところが最近は法律で制限され、勝手に野焼きをしてはいけないようなのです。野焼きの火が民家に延焼したらどうしてくれる、煙が目に染み喉を傷める、灰で洗濯物が汚れる、有害物質が燃え

ている、大気汚染だ。とこのような苦情が役所や消防に寄せられたからなのでしょう。確かに風の強い日の野焼きは火事の危険を高めます。どさくさに紛れて産業廃棄物を燃やしてしまう不届き者もいるでしょう。しかしそれらはルールを徹底し注意を払えば防げる問題です。空気中にただよう灰や匂いはどうしようもありませんが、これも年に二，三日程度でしょう。その日は洗濯物を外に干さず外出時にマスクをすれば済む問題です。花粉アレルギーの方はたくさんいますが野焼きアレルギーになったという話は聞きません。花粉アレルギーの大きな実害に比べて野焼きの害は果たして法律で禁止するほどの公共の利益に反することなのか疑問です。

私がここで言う野焼きは野山の枯草や田んぼの畔や河川敷を燃やして大地を再生させるための行為を指します。日本の自然はそのまま放置すると草原は森林へと遷移していきます。野焼きを行うことでこの遷移がリセットされ一年毎に植物にも微生物にも人間にも最適な大地の再生が行われます。一年間人やそのほかの生き物によって酷使された大地は、野焼きすることでまた次の一年も同じ大地環境を生きものに提供してくれるのです。循環型の自然環境は野焼きという人為によって作られている面があると言ってもよいでしょう。ここで言う人為は「自然のありのままと共棲する方法・手段」ということです。「自然は人為によって破壊される」という考え方が環境保護運動の人たちの根底にあるとしたら、私はそれに賛成することが出来ません。私は自然豊かなかつての里山の地で四巡目の季節を過ごしていく中で、生き物が定住できるはずの大地の環境が毎年変わっていくことに驚かされています。例えば耕作放棄地です。かつての田圃は雑草地からいつの間にか笹が茂り今は実生の雑木が生え始めています。何年か後にはそこは雑木林になっているでしょう。そして猪や狸が棲みつくようになるはずです。人の住む領域に点々と形成される新たな雑木林群。かつて先祖たちが苦労して開墾した耕地はまた荒地に帰ってしまう。これを自然保護、地球温暖化対策の観点からは望ましいことと単純に考えるほど私はお人好しではありません。これは自然保護ではなく自然の放置です。環境保護ではなく環境破壊です。人為がなければ人と自然は共棲できなくなります。すると今度は自然を「管理（マネジメント）」する思想が幅を利かせます。自然との対話を打ち切り拒否する思想です。

自然は人が管理できるものではありません。「保護」も「破壊」もその根底には、人はすべての存在の管理を神から委託されているという傲慢な思想が流れているような気がしてならないのです。世界の経済人が集まるダボス会議の議論が環境問題一色だったと報道されています。経済はどんな専門用語で語ろうが本質は「損得勘定」です。ということは環境問題も「損得勘定」だと言うことでしょうか。私は経済人や政治家そして未だ大学で経済学を学ぶ前の若者たちが環境問題を論じ合う状況を見て違和感を禁じ得ません。「損得勘定」によって仕切られている土俵の上で環境相撲を取っても私には勧進興行の類いにしか見えないのです。私たちは損得勘定とマネジメントの呪縛から自然を解き放ち、人は自然の一部としてありのままに自然と共棲していくことが、唯一地球が永遠のいのちを獲得することの出来る道だと信じるべきなのです。

野焼きの話から随分大げさな話になったように見えるかも知れません。実は野焼きは焼き畑農業と同じ意味合いだったと思われます。これは原始時代から続く人と自然との共棲の手段です。この人為は循環の論理によってできています。循環サイクルは自然の大きなサイクルの中で人も樹木も動物も生きものすべてが互いを食べて排泄し利用し合う食物連鎖の中で生きているということです。棄てる物が一切ない百％

リサイクル・リユースです。農業や漁業や狩猟はその自然の循環サイクルの中で人為のなす一部分です。そしてその中でもごくごく一部が野焼きだと私は考えます。野焼きを禁じると雑草を除くため除草剤を撒きます。その段階で循環サイクルは修正を余儀なくさせられるでしょう。除草剤は大地の微生物を殺し土地を痩せさせ化学肥料の使用が必要となります。次々と修正を重ねていき、リユースできない廃棄物はどんどんたまっていきます。人は原始的な自然の循環サイクルを修正していく過程を科学の発展、文明の進化というかも知れませんが、逆に大量の廃棄物が生み出されそれを自然に戻す処理をしなくてはならなくなったのです。そしてついに人はどうやっても自然に帰すことが不可能な核廃棄物というエイリアンを生み出してしまいました。

直線的な時間観と生命観しか持てない人々は地球に永遠のいのちをもたらすことは不可能でしょう。幸い私たちは仏教の輪廻という循環する時間観と生命観を持っています。保護と破壊の論理ではなく共棲と再生の論理です。永遠のいのちとは個人や個体の生命ではありません。それは地球を含めたすべての存在のいのちを認め、そのいのちを互いに尊重し繋ぐことに日々を生きること、それによって得られる「信」です。

再生可能エネルギーのための無粋な黒いパネルが森林の代わりに山肌をすべて覆っています。この山はもう再生不可能でしょう。あの黒い巨大なパネルは耐用年数が過ぎたら再生不可能な巨大な粗大ごみでしょう。クリーンエネルギーが作るダーティーなゴミ。私たちはこのアイロニーを笑えるでしょうか。

狂言綺語五十七・・・逍遙

冬のコリーナは空の面積が拡がり明るくなります。雑木林の葉っぱがすべて落ちて枝だけになり、視界が一気に開けるからです。今まで葉っぱに覆われて見ることの出来なかった日の出も日光や高原や那須の山々もいくつかのポイントに立てばその姿を顕わしてくれます。羽黒山も手に届くところにあります。夏に比べて空の面積が広くなりそれだけ夜空の星の数も増えるのでまだ暗い明け方の散歩が楽しいのです。三〇分ほど歩いて家に戻る頃には東の空が次第に赤くなり、いつの間にか星が消えてなくなります。山も星も変わらずそこにあり続けるのに私たちの目からは見えるときもあれば見えないときもある。あるがままに観ると言うことはいま目に見えていることだけを観ると言うことなのか、いま目に見えていなくてもそこにあるはずのものを観ることなのか、などという屁理屈はどうでも良くなり、いつの間にか頭の中が空っぽになって、気づくと琉游舎に戻っています。日々の気ままな逍遙は頭と心の清掃の役目を果してくれているようです。

お腹でも頭でも空っぽになるとそれを満たしたくなります。そんな時ふと手に取った本に感心し深く考えさせられました。「宗義制法論」[注1]という一見難しそうな江戸時代初期の論述です。これが面白い。互いに日蓮聖人を宗祖とする相手を論旨明快、コテンパンに論断し蟻の這い出る隙間もないほど追い込んでいく迫力に、思わず吹き出し論破される相手方が気の毒に思えてしまうほどでした。著者の日奥は日蓮宗不受不施派の始祖といわれ安土時代から江戸時代にかけて活動した人です。不受不施派は余り知られていないのですが江戸時代にはキリシタンとともに弾圧の対象とされ信仰を認められなかった宗派です。幕府の

寺請制度から排除され地下活動で細々と法灯を保ち続け、明治になってやっと公に認められた時の信者は二万人ほどだったそうです。隠れキリシタンと同じように、日蓮宗にもこのような弾圧の歴史がありました。著者の日奥も二度島流しの罪を得ています。不受不施派の主張は明快です。日蓮の教えの根本にある「法華経を信仰しない者から布施を受けたり供養を施したりしない」という宗義を守ること、この一点です。それに対して日蓮宗の大方の寺は幕府との対立を避け権力秩序に組み込まれていく（幕府から布施を受ける）ことを選択していきました。宗祖日蓮聖人の根本教義を曲げてでも教団の存続を図るか、寺を奪われ教団がなくなり命を落としてでも宗祖の教えを守るか。現実世界の中ではこの勝負はどうやっても日奥の負けです。国法（権力）の中でのみ存在を許される宗教組織が、国法より仏法を上に置くことが不可能なことは自明の理なのですから。むろん私の所属する現在の日蓮宗は日奥にコテンパンに論破された側の流れを汲むものです。

しかし私がこの書で考えさせられたところは日奥の主張にあるだけではなくその主張を成立させている膨大な教養のバックボーンにあります。私は常日頃仏教関係の本を読んでいくときに、日本人の思想文化の根底に共通に流れる基礎知識というものを今までの教育の中で全く受けていないことを痛感させられていました。経の注釈書、祖師たちの書いた遺文など彼らが引用する中国典籍の出典や意味は、補注がなければほとんど理解できません。そればかりではなく古典や和歌にさりげなく引用されている仏教や中国思想なども全く分かりません。明治以前の貴族や僧侶や学者は四書五経、老荘思想、兵法書、史記、漢詩、三蔵[注2]などに共通の理解があるという前提で、歌を詠み物語を書き教えを説き論争を戦わせていたのです。これをごく一部のインテリだけの教養だったと考えてよいものでしょうか。例えば私が感心した日奥の「宗儀制法論」は同レベルの教養を持った法敵日乾に向けて書かれたものです。しかしこれが弾圧下の地下組織、不受不施派のバイブルとして読まれ続けたから現在私が読むことが出来るのです。主な読者は明治まで信仰を守り通した二万人の学なき庶民（農民）だったでしょう。そこに引用されている中国典籍、経、日蓮上人の遺文の意味は恐らく主導者の僧侶が注釈したかもしれません。が、彼らにそれを聞くだけの教養の受け皿がなければ馬の耳に念仏だったはずです。文化科学思想はごく一部のインテリだけで成立するものではなくそれを支える三角形の底辺が必ずあるはずです。その底辺が拡がり頂点が高くなること、つまり教養のピラミッドが大きくなっていくことがその民族の文化が成熟していくことだと思います。私たちは今、江戸時代の地下に潜る農民たちの持っていた日本文化にはるかに及ばない成熟度の低い日本文化しか持ち合わせていないのです。

私が受けた教育はいわゆるキリスト教を源とする合理主義と二元論の思考方法です。これによって日本は莫大な科学的恩恵を受けたことは承知の上で、しかしその教育と引き換えに有史以来連綿と引き継がれてきた日本人の教養遺産を明治以降食いつぶしここに至って雲散霧消させてしまったことが残念でなりません。少なくとも私が日本人として持ち合わせるべきこの教養は江戸時代の庶民に遥かに及ばないことは明らかです。それとも江戸時代まで引き継がれたその教養は、これからの未来には何の役にも立たないので顧みる必要はないと言うことでしょうか。グローバル化が日本文化を支えた教養の廃棄を支持するのであれば国是として「美しい国、日本」[注3]ではなく「世界は一家、人類は皆兄弟」[注4]のスローガンを掲げるべきでしょう。

今年の冬は暖冬です。日々の気ままな小一時間の逍遥（徘徊？）から戻ると汗ばむほど。寒い季節は冷

えた空気が頭を覚醒させてくれるはずなのですが、どうも今年は勝手が違います。琉游舎に戻っても頭と心の清掃が行き届かなかったようで、本を開く間もなく気持ちのいい睡魔が襲ってきます。これもまたあるがままの自分なのか、暖冬のせいであるがままに観ようとする目が曇ったのか、と下手な考えをこねているうちに眠りに落ちていきました。

注1「近世仏教の思想」岩波書店、注2：仏教聖典の総称、注3：現在の日本の国是、注4：笹川良一

狂言綺語五十八・・・信

空気だけでなく景色までが春めいてきました。例年よりちょっと早めですがいつもの春がもうそこまで来ています。ここコリーナで日々自然の移ろいと一体となって過ごしていると、コロナウイルスにまつわるテレビや新聞の中の世の動向が私には縁遠い出来事に見えてしまうのは陽気のせいなのか、己の危機感のなさなのか。しかし宗教家がウイルスについて言及すれば、それは非科学的言辞であり徒に世の人心を惑わす流言飛語の類にもなりかねません。このウイルスにまつわるすべてのことも日々の私たちの行いの中にあるありのままの姿。分からないことは分からないままに、私たちはありのままに観ていくしかすべがないのです。

人は自分の目で確認できるものや科学的に説明がつくものは比較的素直（無批判）に信じることが出来ます。しかし目に見えないものや理屈で説明できないものには不安を覚えるものです。いつの時代にも自然災害や伝染病はありました。その発生が予想できずメカニズムも分からなかった時代は人は不安と恐怖にさいなまれ、そこから逃れるために占いや加持祈祷にすがっていたのです。それを無知蒙昧な未開人の所行と嘲笑して良いものでしょうか？現代に生きる私たちは科学が目に見えない恐怖や不安を払拭してくれる唯一のツールだと盲信していますが、果たしてその盲信が私たちに安らぎをもたらしてくれたでしょうか？コロナウイルスは電子顕微鏡で見ることは出来ます。放射能は計測された数値で見ることは出来ます。でもそれは見たつもりで実は何も見えてはいないのです。自分の目や手で確かめることの出来ない忍び寄る恐怖に、人はこの科学万能の時代にすら精神的に不安定な苦しみの日々を過ごすことになってしまうのです。

いつの時代にも不安と恐怖はありました。鎌倉時代の祖師[注1]たちは民衆の不安を少しでも取り除きたいと考え三蔵[注2]を渉猟し当時の最先端の知識と論理的な言葉を使って人々に安らぎを得る方法を説いてきたのです。その中でもひときわ異彩を放つ祖師が日蓮聖人です。彼は民衆だけでなく時の権力鎌倉幕府にも彼の信ずる教えを説きました。その幕府に提出した諫言書が「立正安国論」です。簡単にまとめると「相次ぐ自然災害と政治動乱によって民衆が苦しみにあえいでいるのは、人々が正しい教えである妙法蓮華経（正法）を信じずに、浄土宗などの誤った教え（謗法）を信じているためである」ゆえに「このまま謗法を放置すれば国内では内乱が起こり、外国からは侵略を受けて滅びてしまう」しかし「正法である法華経を中心にして国を治めれば国家も国民も安泰となる」と諫言したのです。今の合理主義・科学万能の視点から見ると全く無茶な論法のように見えてしまいますが、日蓮聖人はこの立証のために様々な経典を引用してきわめてロジカルに説いています。おそらく当時では最も明快で合理的な論法であったため幕府は影響

の大きさを危惧しこの諫言を無視し続けていたのですが、いつのまにか謗法と名指しされた宗徒は幕府筋からこの書の内容を聞き及び日蓮聖人を幾たびか襲撃し、幕府に働きかけついには佐渡流罪の罪を聖人に与えることとなりました。

幕府を巻き込む大騒動を引き起こした「立正安国論」は聖人には大変失礼な言い方ですが、今から見ると非科学的妄想の書と見るむきもあるでしょう。しかしその見方は「信」なき現代人の見方にしかすぎません。「信」が生きることの安心の柱であった当時の人たちにとって、法華経への絶対的な「信」の上に構築された「立正安国論」は彼岸へ通じる一本の大道を人々に示したのです。いつやって来るか分からない災害や理不尽な権力の横暴、食べ物にもままならない日々の中でもやはり人は生きていかなければなりません。そのためにはいつの時代も人は寄って立つ安心の柱を求めるのです。私はその柱こそが「信」だと考えます。

今、世界は理性がすべての現象を合理的に解明できると言う理性信仰によってささえられています。そして宗教は非合理で信頼をおくに値しないものと考える人が大半でしょう。しかしこの現代の理性信仰は日蓮聖人が妙法蓮華経によって国家国民の安泰が実現できると信じた法華経信仰といかばかりの違いがあるでしょうか。科学の観点では前者は正しく後者は誤りでしょう。しかし私は「理性」と「妙法蓮華経」は「信」の立場では全く優劣はなく同じ土俵で考えるべきだと考えます。私たちが理性への絶対帰依で獲得した便利な生活と、鎌倉時代の人たちが妙法蓮華経へ南無[注3]と唱えたことで獲得した心の平安を、どちらかの二者択一ではなく、どちらもが共存できる道を指し示すことが宗教家の役割です。大地震がくれは犠牲者の供養を行い、感染症が蔓延すればウイルス退散法要を行う。この信なき宗教儀礼にうつつを抜かすことを宗教家はもう終わりにしなければなりません。今ここにある私たちの不安と恐怖からの解放は理性でも信なき宗教でも獲得できないことは明らかなのです。「信」は政治家や学者や宗教家から与えられるものではありません。ひとりひとりが自分の願う「安らぎのところ」を見極め、そこに立つ安心の柱に向かって行いの道を歩み続けること、それが「信」です。ひとりひとりが自分の「信」を見いだすとき、そこが「安らぎのところ」なのです。人から与えられる信はまやかしの信です。それを盲信や妄信といいます。信なき現代に今必要な「信」はひとりひとりによって獲得された自分だけの「信」です。

今テレビや新聞から毎日のように聞こえてくる「私たちの言葉を信じなさい。さればウイルス退散、経済繁栄、美しい日本が実現する」という妄言を盲信する時代を終わりにしませんか。そのためにはまず今まで私たちが信じてきた価値観や道徳などを一度根本から疑わなければならなりません。そして不信なものは捨て去り最後に残ったもの、それこそが私だけの、あなただけのかけがえのない「信」です。「信」によって立つ国を春の夜の夢に見て筆を置きます。

注1：法然、親鸞、道元、日蓮たち、注2：仏教聖典の総称、注3：南無＝絶対帰依

狂言綺語五十九・・・まことの言葉

人偏（にんべん）は人間の行為・動作に関連する漢字に用いられる偏です。人の為と書くと「偽（いつわり）」という文字になります。人に夢と書くと「儚（はかない）」という文字になります。人が木によりかか

っています。「休む（やすむ）」という文字です。いずれも漢字の成り立ちや形が分かりなるほどと思われる文字です。ところで人に言（ことば）と書くと「信（まこと）」という文字になります。漢字が生まれた古代中国ではどうやら人が語る言葉は真実（まこと）と考えられていたようです。私はそんな牧歌的な時代があったことに驚き、またうらやましくも感じます。現代の私たちは人の語る言葉が真実か偽りかを判断する能力が不可欠です。もしその能力が欠けていたならばこの日本の社会ではとてもつらい立場に追いやられてしまいます。人の語る言葉（信）が信用できない時代。それが「信」なき時代、日本の今です。

私は仏教を信じています。では私は仏教のなにを信じているのでしょうか。私はお釈迦様の教えを信じています。つまりお釈迦様の「教え」が私の「信（まことの言葉）」です。前回申し上げたように「信」は人が寄って立つ安心の柱です。その安心の柱のある場所が「安らぎのところ」です。その場所を仏教ではいろいろな呼び方をします。彼岸、浄土、菩提、涅槃、悟りなどなど。私はかつてそれらはそれぞれ違うものだと思いこみ、違いがどこにあるかを知るためにいろいろな本を読みました。読めば読むほどこんがらがるばかりです。そして仏教は訳が分からない小難しいものとして放り投げる寸前に「涅槃（ニルバーナ）」を「安らぎ」と訳す経[注1]に出会ったのです。後世の学僧たちがいろいろな理屈をこねてさも権威がありそうに厚化粧をして私たちを煙に巻いてきた仏教の教義は、実はとても易しく身近なものだということを発見できたのです。その時以来私はお釈迦様の教えに絶対的な「信」を置くことができるようになりました。「信」は「まことの言葉」です。ですから私は私が信じる教えをまことの言葉で今、語っていこうと思います。

お釈迦様のまことの言葉（教え、信）はとてもシンプルです。「皆それぞれの安らぎのところ（悟り）に向かって毎日を生きなさい。そのためには執着を捨てて心穏やかに自分の頭で物事を考えなさい。日々そうやって過ごすことがあなた自身のかけがえのない安らぎのところなのです」これが私の帰依するお釈迦様のまことの言葉です。お釈迦様の教えを信ずればお金持ちになったり超能力を持てるようになるわけではありません。「教え」はあっけないくらい簡単で合理的です。「日々を自分の足と頭と心を遣ってちゃんと生きなさい」ということです。これを道徳や倫理観あるいは人が地球上でちゃんと生きていくための生活規範とみれば、他宗教や私たちが見聞きする現在ある仏教からすると、これを宗教と呼ぶことは困難なことでしょう。ただ私にはお釈迦様の「まことの言葉」に帰依することがすべてなのです。それが「信」です。

「信」と「まことの言葉」と「教え」は三位一体・不可分のものです。私はこの狂言綺語の場で今まで同じことを語り続けてきました。そして今お釈迦様の「まことの言葉」として改めてここにまとめました。また私が幾度も使ってきた言葉には他に「ありのままに観る」と「行い」があります。まことの言葉の中の「執着を捨てて心穏やかに自分の頭で物事を考えること」これが「ありのままに観る」と言うことです。仏教用語では「実相や真如」などと言います。「安らぎのところに向かって毎日を生きる」これが「行い」のことです。仏教用語では「修行」と言うようですが要は毎日をちゃんと過ごすことです。まことの言葉は簡にして要を得る言葉です。「ありのままに観ることで得られた信のままに日々を行うこと」がお釈迦様の教えの核心でありすべてなのです。ありのままに「観」たことをまことの言葉と「信」じ安らぎのところに向かって日々「行」うことです。「観」によって「信」が確立し「行」を続けることでまた「観」「信」「行」の日々を繰り返すこと。この三つのサイクルの中で日々を生きることが「安らぎのところ」なので

す。

ところで人によって性格や能力など千差万別です。ですからお釈迦様はその人に合わせて具体的な「観」「信」「行」の方法（方便の教え注2）をお話されてきたのだと思います。僧侶たちはその方法論のどれがお釈迦様の真実のものかと競い合い、後世仏教はいろいろな教団（方法論）に分かれていったのだと思います。方法論はどこまで行っても方便の教えです。お釈迦様は法灯明と自灯明で自らの道を歩みなさいという言葉を弟子たちに残して亡くなられました。法灯明はここに書いたお釈迦様の「まことの言葉（法）」です。そして自灯明はそれぞれの人の性格と能力に合わせて自らにふさわしい方法論を「自分の頭」で考えて進みなさいと言うことです。法灯明は一つです。それはお釈迦様のまことの言葉です。自灯明は法灯明の導きによって歩む人の数だけあります。教団は自灯明だけでは心許ない人々が協力して歩むための仲間たちの集まりです。ひとりひとりの灯明が集まりある教団の灯明の塊となり、その灯明のいくつもの塊がいろいろな方面（方法論）からお釈迦様の掲げる法灯明に向かって歩んでいく。これが仏教徒の信仰の姿です。

日本には古来言霊信仰がありました。言葉に霊が宿っておりその霊のもつ力がはたらいて言葉にあらわしたことが実現するという信仰です。その信仰を悪用して今巷に掲げられる「美しい国、女性が輝く国日本」「成長戦略」などの国民の為の言葉。さてこの言霊が思惑通り現実のものとなるか、それとも為にする偽りの言葉となるか。言霊信仰では良いも悪いも言葉にしたとたんに実現してしまいます。だからこそ真の言葉しか語ってはいけないのです。さて私たちは耳に心地よいこの言霊がいつになったら実現するか、信じて我慢強く待つしかすべはなさそうです。

注1：ブッダのことば（岩波文庫）中村元訳　注2：真実の教えへと導く巧みな手段

狂言綺語六十・・・不信

ちょうど一年前の今頃新しい年号「令和」が発表されました。先日法話のさなかに「令和になってこの一年、悪いことばかりが続き不安です。この不安をどう払えばよいのでしょうか」と質問されました。確かに台風による大規模な停電、洪水被害、そして目下のウイルス感染症。それに詭弁強弁を繰り返す政治家への不信を加えてもよいでしょう。自然災害は今までの備えを遙かに上回る被害をもたらし、目に見えない敵ウイルスとの戦争はいつ止むとも知れません。いつの時代も人々を不安に陥れる災害や変事はありました。そんな時その時々の人は「時代の不安」ともいうべきその現状をどう理解し解決してきたのでしょうか。

古来日本人、特に鎌倉時代のころまではこれら時代の不安をもたらす自然災害や動乱などを「怨霊」の仕業と考えてきました。「怨霊」とは憎しみや怨みをもった人の生霊と非業の死を遂げた人の死霊のことで、この怨霊が生きている人に災いを与えるとして恐れられていました。私はこの考えを非科学的な迷信と一笑に付すことをしません。人は今起きている災いから逃れるために、必死になってその理由を探り解決策を考えます。そしてその災厄の原因とそこから逃れる方法を人々の共通認識として形にまとめ、実行し人心を安からしめることがかつての日本のまつりごと（政治）の基本でした。怨霊を「祀り」怨霊の恨みを鎮

めることは重要な「政（まつりごと）」なのです。その考え方を現代人の知識でもって排除し愚かなことと蔑むことは厳に慎むべきです。怨霊の怒りを鎮めることで今ある災厄から逃れることが出来ると「信じる」こと、これが当時の人々が時代の不安から解放されるための手段でした。だから時の権力が怨霊を鎮めるために寺や神社を作り祈祷を行い布施をしたことは全く合理的な「まつりごと」なのです。

少しさかのぼり鎌倉時代の半ばになって、日蓮上人は怨霊を祀ることで「時代の不安」を取り除く方法に代えて、新たに妙法蓮華経（正法）による政（まつりごと）を幕府に諫言しました。[注1]いずれの方法も「何が（因）その災い（果）をもたらしたのか」という思考方法によって分析された論理的帰結です。仏教用語で言えば「縁起」と言うことです。すべての存在は原因（因）と条件（縁）によって成立（果）すると言う考え方です。「因縁」や「因果応報」と言えば分かり易いでしょう。いずれも現代から見れば根拠とするものが非科学的で迷信や独善的な論理に見えますが、それは現代人が持っている科学的成果から見た判断です。後付けの知恵で過去の方法を否定することはフェアではありません。当時の人にはとても合理的で説得力のある考え方であったのです。ですから人は怨霊を祀る方法を支持し、正法に寄って国を治める方法に理解を示しました。時代の不安の原因をつきとめそれを取り除くことで人々を不安から解放し、人心を安らかにすること、それがまつりごと（政治）の役目です。時代の不安はその時代への不信に根ざしています。不信を信に代えることができれば人心は安定します。人が不安の中で生きることはとてもつらいことです。だから人は信ずるものを求めるのです。「信」は生きることの安心の柱です。いつの時代も不安を取り除くために宗教家や政を行う人は、人々に安心の方法を提供してきました。そしてその方法に「信」を置くことが出来たときに初めて人は不安を払い安心の中に生きることが出来たのです。令和の時代が不安の時代と今私たちが実感しているならば、その「不信」の源は何であるか?そこを突き止め取り除き「信」ずべき安心の柱を示すこと、そしてその通りに行うことが政に求められていることは言うまでもありません。それが政治家であるのか宗教家であるのか、人は「信」ずべき「まことの言葉」と「行い」を不安の中で待ち望んでいます。

ここから令和の怨霊の話をします。オカルト話に抵抗のある方はここまでにしてください。「令和」の年号は万葉集の梅の花の歌三十二首の序文にある『初春の令月にして　気淑く風和ぎ　梅は鏡前の粉を披き蘭は珮後の香を薫らす』から引用されたものです。当時首相記者会見で「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められ、また初めて漢籍ではなく国書に典拠があることを誇らしげに語っていた記憶があります。ところがそこに敢然と異を唱えた万葉学者[注2]がいました。要点だけを述べます。天平十九年に天然痘が大流行し最高権力者藤原武智麻呂ら四兄弟が立て続けに発症し死亡したことがありました。当時彼らの陰謀で抹殺された長屋王の怨霊の祟りであるという観測が流れたのです。令和の年号の典拠となった梅の花の序文は、長屋王抹殺以降完全に権力を掌握した藤原一族に向けて「長屋王抹殺の事実を俺たちは（大伴旅人）知っているぞ」というメッセージを放っているのです。この寄稿文で品田教授はこの隠された刻印を見事に学問的に解明しています。なんと「令和」という年号によって「権力の横暴を許さないし忘れない」という梅の花の序文が、長い沈黙から今、蘇ったのです。さあ大変です。今まで万葉集の中に眠っていた権力告発の矢が令和を生きる私たちに向けて放たれ、それは同時に長屋王の怨霊をも目覚めさせてしまいました。定説ではありませんが、国家鎮護の寺東大寺も万葉集編纂（大伴家持）も真の目的は長屋王怨霊鎮魂のためと言われています。さて、この蘇った怨霊が誰に祟るのか、少な

くとも権力なき我々民衆に崇ることはありませんが、権力を独占し専横に振る舞っている人たちには祟る可能性があるでしょう。急ぎ鎮魂しなければなりません。もちろんそれは祈祷や寺を建てて怨霊をなだめることではありません。ましてや「マスク二枚で新型コロナ退治!」では「竹槍でB29を撃墜!」とほぼ同じ論理ですからこれでは不信を「信」に変えられないことは長屋王の怨霊も承知のはずです。怨霊の怒りは人々の不信が高まるほどに力を増していくでしょう。今、かの怨霊も私たちも望むことはただひとつ。「まことの言葉（信）」を早く聴き、安心の日々をこの手にもたらしたいだけなのです。

注1：琉游舎だより第74号　注2：「短歌研究」五月号収録　品田悦一氏寄稿文

狂言綺語六十一・・・信ずべきこと

三年前のちょうど今頃、私は僧侶になるための最後の修行を身延山で行っていました。身延山はしだれ桜の名所で久遠寺の境内には多くの観光客の姿が見られます。道場の中に居ようと観光客の中に居ようと、私たち修行僧の周りには結界が張られているため、皆さんが居るいわゆる俗界という空間とは見えない境界線で厳格に隔てられています。三五日間私たちはこの結界の外へ出ることは許されませんでした。ですから私たちが桜に見とれていたり、俗界の人と言葉を交わしたりすれば即刻結界からの追放を命ぜられてしまいます。つまり修行からの追放です。結界はただの観念の中の世界と言えばその通りですが、この信行道場での修行は外側から不浄なものが入らない結界の中での修行だと自ら「信ずべき」ことが大前提なのです。

よく修行は厳しかったのではないかと聞かれますが、五日も続ければこれが日常となってしまい、私は厳しいとかつらいと思ったことがありません。逆に毎日が決まった日課の繰り返し、次から次へとやることが決められてトイレに行く時間を見つけるのが精一杯。また外部からの情報はすべて遮断されているので、考える余裕も悩んでいる時間もありません。良く言えば自分の「信」と向き合うことだけに集中できる場、悪く言えば「信ずべき」ことに流されるままに身を預ければよいという場、でした。

この修行の場は信行道場と名づけられています。基本的な装束は白衣に素絹の法衣、五条袈裟。素足に白木の下駄。道場の外に出るときは網代笠をかぶります。雨でも晴れでも寒くても暑くても同じです。朝四時の水行に始まり行列唱題して本山（久遠寺）登詣、本山朝勤、祖廟（日蓮上人の墓）参拝、道場に戻りまた朝勤。ひたすら経を読み題目を唱えます。八時になってやっと朝食です。食事は十二時と十七時の三回でもちろん精進料理。修行中の私語は基本的にあり得ませんので、食事中も無言。食間に許されるのは水のみなので、三度の食事をきっちりとることが必要です。意識して毎食どんぶり一杯の飯を食べていましたが、琉游舎に戻った時は六二キロの体重が五六キロに減っていました。朝食後は掃除、そして課業です。夜の八時まで続きます。内容は講義と法要の実習、作務衣を着ての作務（草取りや清掃）となります。夜の八時から九時は入浴などの時間、そこだけが唯一身心が休まる時間です。九時に消灯。この日課の繰り返しと、何かをゆっくり考る時間や外部の刺激が全くない状況の中では、月日と曜日の感覚が一切なくなります。また世界で何が起こっても全く気にならなくなります。当時アメリカと北朝鮮の関係が相当緊張していたので紛争が起こるのではと言われていましたが、結界から戻ってきても世界も日本も私自身も

何も変わってはいなかったのです。

日蓮宗の僧侶の資格を取るための修行であれば、この特殊な三五日間を必要な三五日間と考えて無難に過ごすことができます。だから修行から戻って何一つ変わっていなくてもあたり前です。しかしこの修行の私だけの真の目的は「何を信じて僧侶になったのか」を知ることでした。出家してみたものの「何を信じて」の部分が分からないままだったので人から出家の理由を聞かれても「宿世の因縁です」としか答えようがありませんでした。自分自身の「信」を認識し自覚するために私は修行に赴いたのです。ところが修行から戻っても世界も私自身も何も変わっていませんでした。三五日間精進料理と素足で過ごした日々で得たものは「信」ではなく、日蓮宗の准講師の資格と法要の技術だったのです。修行の途中うすうす気づいたのですが、この信行道場の修行は僧侶になるための職業訓練の総仕上げの場であり、ここで「信ずべき」ことは結界という聖なる場で伝授される聖なる儀礼の技術、そしてそれを支える法華経と日蓮聖人の教えだったのです。

「信ずべき」ことと「信」は全く別ものです。前者は与えられるものです。人は与えられた数多の「信ずべき」ことから自分の願いを実現してくれそうなものを選択しそしてそれを信じているのです。では「信」はなんでしょうか。「信ずべき」ことが他者から与えられるものであるならば「信」は自ら獲得するものです。「信ずべき」ことが宗派の教えとして世間で共有されるものならば「信」は個人の信行の中に深化され特殊化されるものです。私たちは日蓮聖人や親鸞聖人などの祖師たちが「信ずべき」と語ったことを書物や代々の教えの継承によって知ることができます。しかし彼らの「信」を知ることはできません。彼らの信行が唯一のものであればあるほど、その「信」は深くその人だけの「信」となっていくのです。それを教えとして語り記述したとき「信」は言葉として流布し「信ずべき」こととして人々の中に共有されていくのです。お釈迦様や祖師たちが獲得した独自の「信」は本来どうやっても人に伝えることも共有も不可能なのです。

私の三五日間の信行道場の修行で知ったことは「信」は誰かからか教えられるものではなく、自ら獲得するものだということでした。「信ずべき」ことはその獲得の手段と手掛かりです。私にとってのそれは法華経と日蓮上人の教えだったわけですが、実はそれは何でもいいはずです。自分にふさわしく親和性のある「信ずべき」ことを頼りに、自分だけの「信」を見つけること、それが宗教のある毎日の生活なのです。宗教とは何かという難しい問いに答えるならば、私は「世の中に数多ある『信ずべき』ことから自分に優しいものを選びそれを手掛かりに自分だけの『信』を見つけようとする日々を生きること」と答えたいと思います。

時々信行道場の修行が懐かしくなることがあります。朝四時の水行は裸で水行肝文を唱えながら冷たい水を頭から十回ほどかぶる行です。よく風邪をひきませんでした。成人以来最長の三五日間一切アルコールなしで過ごしました。禁断症状は出ませんでした。肉魚を食べなくても息切れすることはありませんでした。かといって、今琉游舎でおなじことをしようとも思いません。「信」は結界の中の特別な日々の中にではなく、ごく当たり前の日々の中にあるからです。

狂言綺語六十二・・・自然（じねん）の信

今年もいつものところでいつものものを採取し、いつもの方からいつもののものを頂きました。今日採ったものを今日頂く、みな旬のご馳走です。蕗の薹竹の子タラの芽コシアブラにこごみわらびなど季節の風味を体の中にたっぷり頂きました。植物の苦みやえぐみを総称してアクといいます。その植物特有のアクは草食動物に食べられるのを防ぐための防御物質とも言われています。人だけが持つアク抜きの知恵が食べ物固有の風味やうまみを損なうことなくいつもの春と変わらぬ自然のおいしさを今年も私たちに届けてくれました。

春になって私の畑に通う日が頻繁になりました。今年もいつものように土を耕し肥料を入れ種を蒔き苗を植えれば、後は自然が夏の美味しい収穫をもたらしてくれることを私は全く疑っていません。私たちは冬の後に春がめぐり芽吹き花が咲きそして夏が来ることを信じています。人は自然のサイクルを観察し二十四節気七十二候の一年間の暦を作り、その通りに気候が変わっていくことを信じて農事を行ってきました。歳によってその時期が前後することはあっても、一年経てば季節は元に戻っています。自然のサイクルに「信」を置くことは人が生きるための根本原理だったはずです。一年ごとに同じ季節が戻ってくると信じなければ農事をいつ行ってよいか分かりません。誤った時期に農事を行えば不作となりたちまち死活問題です。その「信」は何代にもわたる経験知の蓄積によって育まれた「信」のはずです。祖先の経験と観察が継承したその智慧に支えられて、私たちは自然へ「信」を置きます。それは「信」の原初的形態なのかも知れません。

ところが自然を信頼しつくしてもそれを人がコントロールすることはできません。時には自然が人に牙を剥くことがあります。洪水、干ばつ、風水害、何か自然の機嫌を損ねることをしてしまったのか、感謝や供物が足りなかったのか、自然への「信」が足りないことを自然が怒っているのです。その時私たち日本人は自然の中に神を感じ取ります。自然は神そのものです。ここで言う自然は nature の訳語の「自然」ではなく、「自然（じねん）」[注1]と読まれていた明治以前の語法です。これを読み下すと「自ずから然る（おのずからしかる）」です。おのずからそのままそうであること、物事をありのままに観ることによって感得できるそのものの真実のすがた。nature も含めた森羅万象すべての存在の「ありのまま」「あるべきよう」です。私たちには八百万の神がいます。それはすべての存在に神が宿っているということです。私たちが八百万の自然（じねん）に「信」を置いていることの証です。私たちの信頼に応えて自然が私たちを信頼してくれた時、お互いに双方向の「信」が交感しあい、怖れと感謝が立ち現れます。そこは祈りと祭祀の場です。「信」はあるがままの存在を自分自身の中に取り込みそれと一体になること。自分とあらゆる存在（森羅万象）が互いに内在することです。その時、自然の一員である自分は「わたしが仏になる」とき、日々の行いでは「琉游舎の自然（じねん）と共棲する」とき、農耕民族の私は「自然のサイクルと一体化して鍬をふるう」ときです。そしてそれはあるがままに生きることであり「信」とともに生きるということなのです。

アニミズムと言う言葉があります。「自然界のあらゆる事物に、霊魂があると信ずること」と解説されます。つまり「森羅万象に神（霊魂）が宿る」という信仰です。これは宗教学者が宗教の発展段階の一番原始的な信仰の形態として定義づけた言葉です。アニミズムは死霊崇拝や呪物崇拝、精霊崇拝から多神教へと

発展し，やがて一神教が生まれたと言う宗教進化論的な考え方の中でもっとも原始的な未開人のものと考えられていました。この西洋の宗教学から見れば、私が今まで述べた「自然」と「信」の関係はまさしくアニミズムの典型でしょう。私たちが「神」と名づける存在を彼らは「霊魂」と呼びます。彼らの「神」は一神教の唯一神、絶対神だけです。私たち日本人は道端の石ころや草木、目の前の小高い丘にも神様が宿り仏性があると信じてきました。果たしてそれは未開人の原始的な信仰だったのでしょうか。さすがにこの宗教進化論的な考え方は西洋の優位とそれ以外の文化への蔑視があると最近では非難されているようですが、それは彼らが唯一神を信じている限り、差別的な見方はよくないという自由平等人権思想の発露にしかすぎず、キリスト教を精神の支柱に置き理性によって組み立てた合理主義の優位性を誇ることの裏返しにしか過ぎません。今ここで日本人のアニミズム的な「信」が正しいか唯一神への信仰が正しいか優劣を論じるつもりはありません。ただ根本的な自然観の違いだけは改めて記したいと思います。唯一神を信じる人たちにとっては自然は神の支配下にあります。彼らは絶対神との信仰契約の見返りとして神から自然を支配する権限を与えられたと考え、またその様に実践してきました。一方日本人は自然と共に生きることが神とともに生きることでした。自然を信じることは神を信じることでもあり、その「信」は長年にわたる自然との共棲によって身につけた「智慧」によって支えられてきたのです。「自然を屈服させるか」「自然と仲良くするか」と迫られれば私は自然と仲良くする方法を選び取ります。私にはそちらの方が心安らかに生きられるからです。

森羅万象に神が宿るという私たちの「信」は決して無知によるものではなく、智恵に支えられた「信」です。新型コロナウイルスを人々は今、屈服させ支配しようとしていますが、果たして共棲する方法はないのでしょうか?あるがままの生があるなら、あるがままの死もあります。共棲という考えはウイルスによるあるがままの死もあるということを認める考えです。このおそらくひとりひとりの人間としては受け入れがたい視点を取らない限り、そして統計上の何十万という個体死をありのままの死として受け入れる覚悟がなければ、人間と森羅万象との戦いは決して終わることはないでしょう。ウイルスとて坐して滅亡を待つことはないはずですから。

注1：琉游舎だより第21号

狂言綺語六十三・・・善知識の信

前回の狂言綺語で「自然（じねん）の信」について書いたところ、この文を読んで下さったフェイスブック友達からとても示唆に富むメッセージを頂きました。細田さん、ここに無断転載することお許し下さい。

【「図書館だよりなる小冊子に『魚屋さんにいくと養殖の魚と天然の魚ってのがある…。自然の魚とは言わない。』とあった。自然を守るとか破壊するとかいうけど、天然を守るとか言わない。自然ってのをぼくらは、なんか人間の外側にあって、ぼくらが何か仕掛けていじれる対象として捉えられてるように感じる。天然色とか天然の馬鹿とかいうとき僕らは『もう手出しできない』『もうかなわない』…みたいな謙虚さあるいはあきらめみたいな感情を感じる。」なんて書いたら、文学の授業を担当されてた先生がおもしろがって、僕にたくさんの古い釣竿をくれたっけ…、東作の和竿とか！『天然』は英語で表現できるのでしょう

か?】

私が自然（じねん）とふりがなを振らないと日本人の自然観について語ることができなかったもどかしさを細田さんのこの言葉が一気に解決してくれました。「天然」も英語では「nature」です。「天然の」と形容詞で使うと「natural」となります。英語に訳すと「自然」も「天然」も同じ訳語です。ただ「もうかなわない」と言うニュアンスで使われる「天然」に該当する意味は「nature」にはなさそうです。そもそもnatureを既存の日本語に当てて訳すことに無理があったのでしょう。Philosophyの訳語の「哲学」が明治時代になって造語されたように、natureとその概念が一致しないのだから造語を当ててくれていたならば「自然（じねん）」とわざわざ断る必要もありません。「天が然る」と「自ずから然る」はかつての日本人にとってほぼ同じ意味だったはずです。「天」は天地・万物を支配する理法であり神です。宇宙や世界そのものです。天がそのままそうであることは天をありのままに観ることによって感得できる天そのもののありのままの姿です。「自ずから然る」と全く同じことです。ただ現代の日本語のニュアンスでは「自然」は人間の外側にあってコントロール可能な対象、「天然」は天性や人為の加えられていないコントロール不可能な対象に意味が分化していったように感じられます。「天」は日本人の神であり宇宙であり森羅万象です。「天」に日本人は「信」を置き内在化させ「天」と一体となって生きてきたのです。「天然」には森羅万象を諦めた末の「もう手出しできない」「もうかなわない」という畏敬の念が素直に表出されているように思われます。

私には師僧を除くと同行の僧はいません。僧侶が職業となり宗派が既得権益を守るギルド（同業者組合）になってしまった現代では、宗派が違うとなかなか善知識と呼べる人に出会う機会がないものです。しかし私は日々の生活の中で毎日のように善知識を得ています。善知識は「善き友」「真の友人」のことで、仏教の正しい道理を教え利益を与えて導いてくれる人を指していう言葉です。[注1]「天然」について示唆を与えてくれた細田さんもその一人、日々琉游舎で出会う人たちも妻も父も子供たちもすべて善知識です。昨日琉游舎に遊びに来た小学一年のユミちゃんは音をならすことが楽しくて木鉦を叩きたいのだろうとばかり思っていたら、さにあらず、私と一緒に合掌礼拝し題目に合わせて木鉦を叩くことを望んでいたのです。小さな子どもでも御宝前（神や仏の御前）の前に坐ると傍若無人に振る舞えない何かを感じるのだと改めてユミちゃんに教わりました。彼女も紛れもない私の善知識です。そして堤さんも半年ほど前に私の善知識となりました。

会社時代の同僚の紹介で去年十一月に琉游舎にやって来た時、堤さんは横浜で小学校の先生をしていました。歳は三十代後半現場の教師として働き盛りです。彼は三月で教師を退職し一家四人で伊賀上野に引っ越し、実家のお寺で住職となる行を積むと言う一大決心をしていました。彼の寺は真宗高田派、親鸞聖人のお弟子さんです。私は日蓮聖人の弟子です。しかしその前に二人ともお釈迦様の弟子です。この日が全くの初対面でしたが、お釈迦様の弟子として夜遅くまで酒を汲み交わしました。その後退職前の三月にもう一度琉游舎で語り合い、四月からは実家の大仙寺で僧侶としての生活をはじめられました。直接会って話すことは難しくなりましたが、メールでのやりとりやオンラインで酒を酌み交わしながら語り合っています。

さてなぜ彼は私の善知識なのでしょう。夜遅くまで酒を飲みメールでやりとりをし話をする。これは特別なことでもなんでもありません。友達や同僚、恋人、親子でも毎日のように行っていることでしょう。難しい教えを語り合うわけでも、互いの宗祖の優位性を誇示するわけでもなく、ただ淡々と昨日今日何を

して、そして明日はこうしようと思うことを語り合うだけです。二人とも日々を自分なりのありのままを過ごしていこうと考えて日々を送っていること、そしてそれが僧侶になり続けることだとお互いが信じていることに共感を覚えたからです。僧侶の立場であり続けるのではなく、僧侶になり続けるということはお釈迦様の弟子としてお釈迦様の指し示す法灯明に向かって日々歩き続けることです。私たちの周りにいるすべての人たちは、皆私たちの善知識です。細田さんは「天然」という言葉を私に発見させてくれました。ユミちゃんは子どもにも仏性があることを現実のものとして認識させてくれました。堤さんは同行の僧になりました。そして本人たちがそう思っているかどうかにかかわらず、私にとっては皆お釈迦様の弟子であることがはっきりと分かります。日常の些細な出来事や関係、言葉、行動が私に気づきをもたらし、それが共感に変わり、私の中の血肉となって毎日を生きる力となっていきます。その力のすべては私と関わる人たちからもたらされるもの。そして皆私の善知識です。私以外のすべての人を善知識と信じること、善知識がもたらす力を信じること、それが法灯明が指し示す道だと信じること。私が僧侶になり続けるために置く「信」がここにあります。

注1：琉游舎だより第24号

狂言綺語六十四・・・大いなるものとの交感

五月から六月は季節の変わり目、暖かく湿った空気と冷えて乾いた空気が日ごとに行ったり来たり、真っ青な高い空に一気に雲が湧きあがり、雷雨が駆け足のように通り過ぎ、そしてまた小一時間もすると雲間から強い陽ざしが射し込みます。今は梅雨の走り、北の空気と南の空気が小競り合いを繰り返しながら次第に調和し本格的な梅雨の季節になっていくのでしょう。この時期は作物が一気に成長します。ついでに雑草もここぞとばかりに繁茂します。雨上がりはしっとりした空気が気持ちよい散歩日和。気が合うのか蛇の散歩にもよく遭遇します。私もびっくりですが、蛇もたまげたのか慌てて山の方へと退散、いつもの光景です。

いつもと違う今年の春がもう終わろうとしています。しかしそう思っているのは私たち人間だけで、自然はいつもと同じようにいつもの春を終えようとしています。今を新型コロナの時代とするならばアフター・コロナの時代は果たして来るのでしょうか。それともこれからずっと私たちはコロナ時代を生きていかなければならないのでしょうか。今を「不信」の時代とあきらめるか、このようなときこそ「信」が必要な時代と考えるか。人間という生きものだけが「不信」の時代を生き、自然が「信」を生き続けているならば、私たち人間も強い「信」を獲得して自然の「信」の仲間入りをする必要があるのではないでしょうか。

内村鑑三の著作に「代表的日本人」があります。彼は無教会派キリスト教伝道者にして評論家。一高教授のとき教育勅語に対する敬礼を拒否して免職となり、日露戦争に際しては非戦論を唱えるなど、聖書とキリストへの純粋信仰の立場から明治大正の日本の宗教、教育、思想、文学、社会その他多方面に広く深い影響を及ぼしました。従来の教会的キリスト教に対し無教会主義を主唱。英語で書かれた「余は如何にして基督信徒となりし乎」は彼のキリスト教への回心が綴られた世界中で読まれているキリスト教文学の名著です。「代表的日本人」も英語で書かれています。欧米先進国の「日本人は唯一神を信じない未だ『信

仰』というものを知らない精神的文化的に遅れた民族だ」と言う誤解を払拭するために、果敢に打って出た著作です。日本人には古来、強い信仰心があったことを五人の代表的日本人を挙げて語っています。

宗教というと私たちはほぼ「宗派」と同じ意味に受け取りますが、内村のいう「宗教」は宗派の差違を超えて、「大いなるもの根源的なものと人間との交感」を指しているようです。それは日本ではしばしば神や仏、天、徳、道、至誠、仁術などの言葉で表現されるものです。彼は「大いなるもの」に強固な「信」を置きこの原理に基づいて政治・経済・教育を実践した人について語りました。西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹です。彼らは広義の宗教家です。最後に狭義の宗教家として日蓮上人が挙げられています。意外に思われるかもしれません。原理主義的な側面を見ると、彼の無教会聖書信仰と日蓮の法華経信仰の教義は両極端に位置します。しかし信仰の峻厳さに於いては全く等しい処にいたのです。「余は、基督教外国宣教師より、何が宗教なりやを学ばなかった。すでに、日蓮、法然、蓮如、その他敬虔なる尊敬すべき人々が、余の先輩と余とに宗教の本質をしらしめしたのである」[注1]このように彼は日本人の中に脈々と受け継がれている強い信仰心の正統な継承者であることを強く宣言しています。彼は時代と彼の気質・能力が聖書の教えと交感した結果キリスト信徒となっただけであり、彼にとっての宗教家は「信」に基づき自分のやるべき使命を自覚し強い意志と実行力を持って行う人です。そして彼らが日本人と呼ばれるべき人たちなのです。

内村は日蓮が初めて仏教を日本の宗教にしたと述べています。「彼は彼の独創と独立とによって、佛教を日本の宗教たらしめたのである」[注2]それまでの天台・真言・浄土・禅などの宗派はすべて中国からの輸入品でした。日蓮は教えを解釈し広めた人の言葉に「信」を置くのではなく法華経そのものに絶対的な「信」を置きました。「依法不依人（法に依って人に依らず）」と言う立場です。内村が聖書に絶対的な「信」を置き教会などの仲介者を置かなかったことと全く同じです。「法」そのものに依れば、その法のある「国・時・人」つまり日蓮にとっては日本の鎌倉時代の社会の中で法華経がその法の力を現わすはずです。そして日本で顕現した法華経の力を日本発で中国からインドへと逆輸出しようと構想していました。この雄大な世界観を持った日蓮の独創性と独立心に内村は最大限の賛辞を送っています。「彼の大望もまた、彼の時代の全世界を包容せるものであった。・・・疑いもなく、甚だ御し易き人間ではなかった。彼は彼自身の意志を有っていたからである。併し斯くの如き人のみが独り国民の脊髄である。」「争闘性を差引きし日蓮は、我等の理想的宗教家である。」[注3]本文結びの言葉です。毀誉褒貶、評価が背反する異端異形の僧日蓮に異教徒の内村は日本人宗教家のつまり日本人の理想像を見ています。これは不思議なことではありません。「信」に基づいた強い意志と実践、そしてその独創性と独立心に彼は日本人のあるべき姿を見ているからです。

日蓮の言葉に「我れ日本の柱とならむ我れ日本の眼目とならむ我れ日本の大船とならむ」[注4]とあります。これは大言壮語ではありません。「信」に裏付けられた決意と覚悟の誓願です。そしてその通りに彼は「行い」続け、度重なる権力の脅しや死罪流罪をも「信」の力ではねのけました。日蓮の言う「柱」は大いなるものであり根本原理です。「眼目」はありのままに観る智慧です。「大船」は皆を安らぎの処へと導く行いです。「私を（法華経）を信じよ、さすれば私が智慧の目となり必ず安らぎの処へ導かん」彼の誓願です。

私たちが今、いつもと同じ日々を迎え続けるためには、大いなるものと交感する「信」の人が必要です。「不信」が大好物のマーラ（魔羅）の代理人たちが日々偽りの約束をバラマキ続ける中で「信」の人の誓願を待ち望むことは余りにも宗教的なことでしょうか？

狂言綺語六十五・・・生きる

それを生業にしている人にとっては喫緊時なのかも知れませんが、そうでない人にとっては、今なくてはならないものと、なくても不便を感じないもの、つまり不要不急のものがはっきりと分かったこの二ヶ月だったのではないでしょうか。私自身、昨日今日明日も全く変わらない日々を過ごし何らこの緊急事態宣言に不便やストレスを感じることはありませんでした。自分の毎日から何かを削ったり足したりする必要がなかったということです。今現在コロナ禍と戦い悪戦苦闘している人たちにとっては高みの見物のようにも聞こえる失礼な発言かも知れません。誤解を恐れずに言えば、食べて寝て次の日に目を覚ますことができれば、それ以外のことは私にとって不要不急のものだ。と言うことに気づいてしまったのです。それは裏返せば、私自身がこの社会の中にあって「食べて寝て起きる」だけの不要不急の存在であるということでもあります。

ここで私は「私たちはせんじ詰めればすべて不要不急の存在だ」などと言う厭世的な言辞を吐くつもりは全くありません。私の不要不急はあなたの必要至急かもしれませんし、またその逆もあり得るでしょう。政治家や専門家が不要不急の外出は自粛しましょうと催眠術のように繰り返すので、試みに、自分が必要至急と思いこんで重ね着をしていた不要不急の衣を一枚一枚脱ぎ捨ててみると、残った衣が「食べて寝て起きる」ということでした。これは「生きる」と言うことなのでしょう。言うまでも無く「生きる」ことはその人個人にとっては最大の必要至急事です。決して不要不急ではありません。ここに社会と個人の関係に大きな矛盾が生じてきます。「生きる」ことは個人の唯一無二の必要事であるのに対し、個人の「生きる」にとどまっている限り、社会にとってはその個人は不要不急の存在になってしまいます。個人が「生きる」と社会で「生きる」、この矛盾と両立を考えるとき私は二人の対照的な宗教家を思い浮かべずにはいられません。

宗教家にとって「生きる」ことは「信」を生きることです。親鸞は阿弥陀仏の他力の慈悲に「信」を置くことが「生きる」ことでした。日蓮は法華経の行者として社会に正法の「信」を確立することが「生きる」ことでした。親鸞の言葉に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」[注1]とあります。阿弥陀の慈悲を独り占めしようとするなんとエゴイスティックな言葉でしょう！「弥陀の五劫思惟の願」は「本願」と言われるもので「名号（南無阿弥陀仏）を唱えた者は必ずその救いによって極楽浄土に生まれる」という阿弥陀の誓いです。「無量寿経」に説かれたこの誓願はもちろん親鸞一人のためではなく、総ての念仏者に等しく向けられたものです。しかし彼はその誓いは親鸞一人のためにあると豪語しているのです。日本最大の信者を抱える真宗系教団の宗祖なる人の、これが「信」を生きる姿です。実はここに「信」の本質と逆説があります。宗教は個人と「信」との長く孤独な対話です。親鸞にとってそれは、独り荒野における阿弥陀仏との長い長い向き合いだったのです。その孤独の「生きる」を極めたときに初めて阿弥陀の慈悲に包まれ、安らぎの処へと赴くことが出来ました。彼の安らぎの処は彼一人だけのものです。だから彼は「ひとへに親鸞一人がためなりけり」という言葉を発することが出来たのです。し

注1 内村鑑三「代表的日本人」序文、注2、注3：同本文　注4：日蓮「開目抄」

かし彼は同時に「あなたにもあなただけの安らぎの処があるはずです。だから独り阿弥陀仏と向き合い対話しなさい」と語ってもいるのです。これが親鸞の「生きる」ということです。各々が阿弥陀仏と対話し（念仏を唱え）各々が安らぎの処へと赴くことが彼の宗教です。親鸞も各々の内の一人として他力の慈悲の指し示すままに歩むとき、各々の孤独の「生きる」が共聴し合い、ともに共通の「生きる」になるのです。孤独の極限の末の共通の喜び、弥陀と共に生きる安らぎ。なんと素晴らしい宗教の本質とパラドックスがここにあります。

一方日蓮は自力の宗教家です。彼は法華経との長い長い対話の末に法華経と一体化する道を選びました。それが唯一彼の信じた安らぎの処へ進む道だからです。彼はこの正法の教えを独り占めにせず皆と共有しその喜びを分かち合いました。弟子や信者たちにも法華経とともに歩むことを求め、彼はその先頭に立って正法（法華経）の「信」を鎌倉の世に掲げるために社会へと進軍していきました。さながら日蓮は正法軍の大将です。これが彼の「生きる」ことでした。「法王（釈迦）の宣旨（命令）背きがたければ経文に任せて権実二教（諸経と法華経）のいくさを起し（中略）一部八巻（法華経）の肝心・妙法五字（妙法蓮華経）の旗をさし上げて（中略）権門（諸経）をかつぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ・・・」注2日蓮が流刑地の佐渡から鎌倉の門弟に送ったまるで軍記物を読んでいるような書簡です。戦闘的で独善的という批判はここでは留保させて下さい。日蓮は法戦ののちに「現世安穏」安らぎの世が実現すると考え、法華経を身に纏い法の化身となって人々の先頭に立って生きてきました。個人の「生きる」を共有の「生きる」に自覚的に変えていく「信」。これが日蓮の「自力の信」です。一方、各個人の極めた「生きる」を自然（じねん）に共有する「信」。これが親鸞の「他力の信」です。この対照的な「生きる＝信」の優劣・好悪を論じることは意味が無いでしょう。いずれも彼らはたった独りで教えと対座し、極限まで語り合った結果の「行い」であり「生きる」の究極にある宗教者の「信行一致」の顕現がここにあるからです。

二人の「生きる」を語った後で私の「食べて寝て起きる」という「生きる」はいかほどの意味があるのでしょう。ただ不要不休の衣を脱ぎ捨てた果てに分かったと言うその一点だけは揺るぎのないものです。ここからでしか私の「生きる」も「信」も「行」も何もないはずです。今日も「食べて寝て起きる」日々を自然（じねん）にか、それとも自覚的にか、どちらもあるがままに生きることに変わりはりないと「信」じ、常にここに戻り原点として歩んでいきたいと考えます。

注1：唯円「歎異抄」　注2：日蓮「如説修行抄」

狂言綺語六十六・・・信　信ずる　信仰

梅雨は雨の止み間をぬって畑に行く楽しみがあります。途中藪に寄って支柱用の笹を十本程刈り取って畑に到着すると、一晩で胡瓜も葉物類も周りの雑草もぐんぐんと大きくなっています。一時間ほどの短い時間ですが、収穫し雑草を抜き雨風で倒れた作物に支柱を立て土を寄せてと、何もせず手ぶらで帰してはもらえません。しかし楽しみと同じくらいがっかりすることも多々あります。作物が病気かモグラの仕業か、原因不明のまま枯れてしまうことがあります。春先に撒いた小松菜は五月に食べ頃になりました。虫にも食べ頃だったのですが、まだ人間の食べる分は残してくれています。穴ぼこだらけの葉っぱもおひた

しにすれば味も見栄えも問題はありません。ところが夏用にと五月に撒いた小松菜は虫除けの覆いにもかかわらず、二枚葉から本葉になるやいなや間引きする間もなくほぼ葉脈だけにされてしまいました。人の食べ頃は七月と思っていましたが、青虫の食べ頃はどうやら六月だったようです。〝はらぺこあおむし〟に丸ごと食べられた小松菜を見ると、あまりの見事な食べっぷりに感心するやらあきれるやら、夏の葉物野菜の調達のあてがハズレてしまいました。ところで売っている小松菜は葉っぱに穴一つあいていません。不思議です、、、でもないか。

梅雨の中休みのとても暑い日の夕方、突如畑がゲリラに襲われました。自然の影響は虫除けや気候対策など経験知の積み重ねで、完全に防げないにしても備えをして収穫を待つことは可能です。ところが雹には無防備でした。雹は降っても五分ほど、小豆ぐらいの大きさですぐ溶けてしまうイメージ。ところが今回の雹は二十分以上も降り続けしかも砂利石大、すぐには溶けませんでした。翌朝畑に行くと葉っぱは大きな穴ぼこだらけ、虫食い穴の比ではありません。虫は葉脈まで食べ尽くしはしないので、先端まで水分が届く余地を残してくれています。しかし雹は容赦なく茎や太い葉脈までへし折っているので、その先に水分が届かず結局枯れてしまうのです。私は今年の収穫がなくても買って食べることができます。しかし農作物を売って食べていた人にとってはこれは死活問題でしょう。ましてや自給自足が原則だった近代以前の人々には、農作物の被害が即生死に関わっていたはずです。干害や水害であれば時をかけてため池や堤防を作り水路を変えるなどの備えが可能です。突発的に起る雹のゲリラ攻撃に、備え無き私は空を仰いで呆然とするばかりです。

私はここのところ狂言綺語で「信」について書いてきました。「信」は「信仰」でも「信ずる」ことでもありません。では何かと言うことを、先人の言葉や行動、私の日々の生活の中から感得したことなどを手がかりに多角的なアプローチをしてきました。「信」を論理的に普遍化できれば良いのですが、私は各々に「信」があると考えるのでそれがとても困難なのです。お釈迦様にはお釈迦様の「信」が日蓮聖人には日蓮聖人の「信」がそして私には私の「信」があると言うことです。「ありのままに観たことを信じそのままに日々を行うことが安らぎの処そのものである」このお釈迦様の教えのままに日々を生きることが私の「信」であり「信」を生きることです。「信」は何か固定的な存在として措定されるものではなく「生きる」ことと一体となって「信＝生きる」こととしてわたしの中に内在し続けるものです。ですから私の「信」は私だけの「信」なのです。そして他者には他者のそれぞれの「信」があるはずなのです。一方「信ずる」ということは他者の「信」を肯定し理解をすることから始まります。その過程でお互いの異なる「信＝生きる」が共感を生み共通項として、ある一つの行いや言葉に収斂していくことが「信ずる」という行為です。自分の「信」の中に他者の「信」を取り込むこと、つまり「信ずる」ことで、私は他者とともに社会の一員として「生きる」ことができるのです。次に「信仰」についてです。私はこの言葉をできれば使いたくはありません。「仰ぐ」という行為がどうしても私にはなじめないのです。「信」は自分だけのものであり、互いの「信」を尊重し合い共有したいと願うことが「信ずる」ことです。そこに何かを「仰ぎ見る」必要はありません。この世に「信」というかけがえのないものがあることを教えてくれた方はお釈迦様です。そのことでお釈迦様を尊重はしても、こと「信」に関する限りは、おのおのの「信」は等価であり、互いが尊重すべきものであっても仰ぎ見る対象では無いはずです。これが「信じて仰ぐ」ことを私が忌避する大きな理由です。

人の歴史は空を仰ぎ見ては地に目を落とすことの繰り返しだったのでしょう。降り注ぐ太陽や雨を喜び悲しみ、そして地に目をやっては期待し絶望する。私たちの恵みも禍も大概は空からやって来ます。適度であれば恵みをもたらし、過不足あれば禍をもたらしてきたのです。その空から降り注ぐものを地上で受け止め制御しようとした繰り返しが科学や宗教を作り、私たちの生活を豊かにしてきたのです。空ばかり仰ぎ見ていると信仰は盲信となり、自分の立つ地面ばかりに気を取られているとそこは不信の地となるでしょう。私だけの「信」を「生きる」ということはまず自分の足下の地面に「信」を置き、次に他者の「信」をありのままに観て共感し「信じる」ことです。そしてその他者とともに「生きる」ことを喜ぶとき、その時がお釈迦様と共に生きているという「信」を私が確信できる瞬間です。私が今立つ場をすっぽりと包む空間に優しく包まれその空間と一体化し心安らかに日々を生きること、これが私の「信」であり安らぎの処です。

空から降り注ぐものは慈悲の光や雨ばかりだと思ってぼーっと空を見上げていると、カラスのフンをぽとりと落とされたり、雹にあたって頭に瘤を作るかもしれません。幸い私はまだ直接的な被害には会っていませんが身代わりに作物や車やベランダが天からの無慈悲な恵みを受け取ってくれています。私はお釈迦様に帰依してから「仰ぎ見る」という行為を一切していません。仰ぎ見るまでもなく空からは容赦なく慈悲も無慈悲も誰にも平等に降り注ぐからです。

狂言綺語六十七・・・根を切る

先日身延山に行って参りました。ここは日蓮宗の総本山です。流罪を赦免され佐渡から戻られた日蓮聖人がその残りの人生を思索の深化と弟子への教化に捧げた場所です。そこには久遠寺が建てられ毎日多くの参詣人が訪れる日蓮信徒の聖地です。私もこの場所は幾度となく訪れています。修行の時を除けば大概は久遠寺三門から菩提悌という二八七段標高差約一〇四メートルの階段を息を切らしながら直登し本堂に参拝、日蓮聖人の墓（祖廟）や草庵跡を巡り、余力があれば奥の院までのプチ登山、門前の仏具屋さんを数件覗いた後は下部温泉へ。そして翌朝五時半からの朝勤に出て気持ちを新たにし、また自分のあるべき居場所に戻ります。

日蓮聖人がご存命の折りにも多くの門弟が身延山を訪れ対面を請いました。下部温泉の湯治のついでに訪問したという者には真剣な信心が認められないとして面会せず、追い返していたようです。老齢の内房の尼御前が訪ねてきた時も、氏神に参詣したついでに来たと言ったので、聖人は、仏が主で神は従であるとの道理を尼に分からせるためにあえて面会しなかったとみずから消息文（手紙）に残しています。[注1]私もこの尼のように聖人に追い返されていたでしょうか。今回私は身延山の前に諏訪大社を訪れています。朝勤の前夜には下部の温泉宿に泊まり地酒を飲みながら山梨牛に舌鼓を打っていました。下部と諏訪大社と身延山のどれがついでなんだと詰問されても、もののついでなど何もありません。身延で聖人のお心に触れ自分の日々を新たにすることと同じくらい、下部の湯で身心を労りつかの間の贅沢を味わうこと、諏訪の御柱にまみえ今に連綿と続く日本人の心の不思議を感じること、どれも私には日々を過ごすための大切な一コマなのです。

原始経典の中にあるお釈迦様の言葉です。「たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執(渇愛)の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現われ出る。」[注2] 妄執の樹は切ってもいずれまた大樹へと成長していく、目に触れない地中の根を断たなければ、渇愛を断つことはできない、渇愛を断ち切らねば苦しみは尽きることなく襲いかかる、とお釈迦様は言われているのです。私たちはのこぎりやチェーンソーで比較的簡単に樹を切ることができます。しかしそのままにしておくと切り株の横から枝が伸びいつの間にか樹木へと成長していきます。では根こそぎ掘り起こせば良いかというと、これが木を切る何倍もの労力を要します。私も庭の小さな雑木を切りましたが、鍬一本では根っこを取り除くだけの気力も体力もなく未だに切り株はそのままです。かように根は厄介です。ましてや潜在する見えざる妄執の根はではどうやって断ち切れば良いのでしょうか。「愛欲の流れは至るところに流れる。欲情の蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によってその根を断ち切れ。」[注3] 蔓草は厄介です。四方八方に伸びる蔓の跡を辿って根っこに行き着くと、そこは木化していて深くひろく根が張っています。これを鍬で断ち切っても気がつけばまた蔓草が生えています。雑草は土と空気と水と光がある限り必ず生えてくるでしょう。この人と雑草のモグラたたきを根本的に解消するための根絶やし方法が、私には思いもつかず実践もできません。ましてや欲情の根においてはなおさらです。

お釈迦様は蔓草に例えた欲情を智慧によって断ち切れと言われました。欲情とうまくつきあって生きていくのではなく根本からその根をすべて断ち切って二度と生えてこないようにしなさいということ、そしてそれは智慧によって可能だと言われているのです。この「智慧」は仏さまの智慧です。これは「善」か「悪」か、「真」か「偽」かなどのように「AでなければB」「BでなければA」と判断する人間の知恵とは全く違うものです。すべての存在は因縁によって生じ、因縁によって仮に存在しているもので実体はないと観る智慧です。例えば、一粒の種を「因」とするとそのままでは何も生じませんが、これを土に撒き雨や日光や肥料と言うような様々な「縁」の力が加わると、種は花開き実を結び「果」となります。「因」と「果」の間に無数の「縁」が作用して相互依存しながら常に変化し存在するというものの見方です。これが佛教の基本的世界観です。これを佛教用語では「真如」「実相」「不二」「一如」「空」などと言います。どれも“一切の諸法は因縁より生ずる、その因縁を如来は説き給う”の偈文[注4]を術語にしたものです。「色即是色」「空即是色」も「ありのままに観る」も同じ意味です。このすべての存在をありのままに観るという仏の智慧を私たちも得られれば、欲情の根を断ち切り苦から解放されると、お釈迦様は語られています。

私の欲情の根は地中に縦横無尽に張っています。そして他人の根も同じように地中に張り巡らされ自分のものと区別できないくらい複雑に絡み合っているでしょう。私たちがありのままに欲情の根を観れば、もう自分一人ではどうしようもないほどに因縁に絡み取られて身動きがとれなくなっている自分しか見えないでしょう。しかしお釈迦様はその根を断ち切れと言います。そんなことが可能でしょうか。社会という因縁から逃れて、独り天上天下唯我独尊とうそぶくことは可能でしょうか。そのような問いをお釈迦様以来、今に到るまで問い続け行い続けてきた人たちが仏教者と呼ばれる人たちです。「可能か不可能か」と結論を出すことが仏教者の道ではありません。「可能と不可能」の間を絶え間なく行き交いそれをありのままに観て、行い続けることに毎日を生きること、それが仏教者の「根を切る」ことそのものなのです。

日蓮聖人の「ついでに来ました」と失言（本音?）した人を追い返した一事に、厳格で不寛容な宗教家と

見る向きもありますが、遺文を読むと情に篤く面倒見がよく女性に優しい酒好きの人物像が見えてきます。私は遺文の人柄に甘えて、一年に一度は身延山詣で聖人の教えにふれ、ついでに下部温泉で聖人とバーチャル酒宴を催したいと考えています。（乞う同好の士！）

注1：三沢抄（日蓮上人遺文） 注2：ダンマパダ 338 中村元訳 注3：同 340 注4：縁起偈

狂言綺語六十八・・・ご先祖様

皆さんの目には見えないかも知れませんが、今この時、ご先祖様がお盆（十三日）に間に合うように自分の祀られている家に向かって歩いている頃です。お盆はご先祖様があの世からこの世へと戻ってくる日です。この世にお迎えし、またあの世にお見送りする風習はその地域によって大きく異なります。そこに土着の祖霊信仰と外来の仏教との融合が見てとられとても興味深いものです。本来仏教の教えとお盆の風習は相反するものでなじまないはずなのですが、インドから中国を経て辺境の地日本に来る間にいつの間にか年中行事となり、祭りや里帰りの機会と合わせて日本人の生活の重要な一部となりました。外来のものを取り入れるとき従来の土着信仰を否定するのではなく、融合する方法を採った日本人の智慧の一端がここにあります。

私の住む栃木県北部を辺境の地というと怒られるかも知れませんが、ここは平安時代には間違いなく日本の辺境、大和朝廷支配の北端でした。ここに仏教がもたらされ、土着の信仰と融合していく過程で今に到るまで続く風習なのではと、私が勝手に想像している光景が、冒頭に書いた一節です。この地方では八月一日に地獄の釜の蓋が開きます。お墓の中のあの世へと通じる蓋が開き、ご先祖様はお盆に間に合うように十三日間かけて自分の生まれ育った家まで歩いてやって来るのです。長い道のりでお腹をすかせないように釜の蓋まんじゅうをお供えします。さて皆さん、眼をつぶると今、無始以来の数多の祖霊の方々が、一斉に帰るべき家を目指して四方八方押し合いへし合い歩いている姿が見えませんか？裸足で足が真っ黒だろうと玄関先に足洗いの水桶を用意する家もあるようです。私はこの光景を想像すると、とても楽しく、心が豊かになります。亡者の行進というような暗く陰惨なイメージは全くありません。おおらかで微笑ましい風景です。短い足をちょこまか動かしながら片手でまんじゅうをぱくつき、さあおらが子孫は今年はどんなご馳走を用意してお迎えしてくれているだろうかと勇躍歓喜しながら家路を急ぐ姿。そして今年もご先祖様に満足して頂けるようにと、仏壇にお供えをしてお迎えの準備に抜かりはない子孫の姿。宗教とか信仰とかと理屈づけるよりはるかに本質的な、日本人のありのままの心象風景がここに見て取れます。そしてかつての辺境の地には案外、原日本人の死生観の源流がこのような思わぬ形で残されているのではと考えてみたくなります。

地獄の釜の蓋と言うことは、自分のご先祖様は地獄に落ちていたのか！亡者には足がないはずだから、足洗い用の桶は不要なのでは？などと突っ込みどころ満載の風習です。仏教では人は亡くなると仏さまとなり浄土に住んでいるはず。輪廻の鎖を断ち切ってもう二度と娑婆世界には戻ってこないのです。お盆は仏教の教えと相反することだらけですが、そんな仏教の理屈が屁理屈にしか聞こえないほど、お盆の風習は日本人の中に強く根ざしています。祖霊崇拝をどうやって仏教教義に取り込むか、昔の僧侶の苦労が忍

ばれますが、根本が違うもの同士どうやっても論理的整合性を取ることはできません。とはいえ、かなりの仏教原理主義者だと自負している私も、毎年必ず盆供養の法要を行っています。それは、私たちが永遠のいのちに触れ、今ここに生かされていることを実感できる数少ない機会だからです。ご先祖様は、生きとし生けるものの永遠のいのちのなかでも、自分自身がそのいのちの一員だと言うことを本能的に感受できる身近な存在です。それは私たちが仏教教義を信じる信じない以前の、今自分がここにあるありのままの姿の反映なのです。

かつてはご先祖様の継続の根拠は家でした。家を継ぐ本家の当主がご先祖様として祀られ、それが未来永劫継承されることがご先祖様の願いでした。次男以下は本家に従属する一生か養子に出るしかありません。稀に荒れ地を開墾し分家が認められ新本家となるか、家を出て一旗揚げ上げ新たなご先祖様の始祖となるか、いずれにしても、家制度の存続と一体化した日本の社会構造の基盤が、ご先祖様でありご先祖様を祀ることでした。ところが家制度の崩壊で私たちが認識できるご先祖様はせいぜい親や祖父母、曾祖父母までとなってしまいました。核家族化の中でご先祖様を祀る意味合いや方法が変わってくることはあたり前のことです。お盆は里帰りしてご先祖様にまみえる日だったのが、いつの間にか子や孫が両親祖父母に会いに行く日となりました。お小遣いをくれて何でも言うことを聞いてくれる祖父母や生み育ててくれた両親が亡くなれば孫や子は悲嘆に暮れるでしょう。愛する人の死が悲しいのは人の自然な感情です。しかしその感情を毎日変わらず維持し続けて生きていくことは不可能です。肉親の死という最大の哀しみは、日常の喜怒哀楽の波間にいずれ同化されていくでしょう。そしてこの哀しみの感情は、亡き人の供養を重ねるにしたがって、悲嘆から亡き人に守られながら私たちは今ここに生かされているという、喜びと感謝の感情に変わっていくのです。通夜、葬儀、四十九日、一周忌、三回忌、七回忌、三十三回忌と続く法要は、哀しみから感謝へと変わっていく感情の過程にあるものです。そして故人は次第に私たちを守護するご先祖様となっていくのです。

家の存続の中にあるご先祖様、あるいは自分の記憶の中に存在するご先祖様（両親祖父母など）は有縁のいのちであり、永遠のいのちのごく一部にしか過ぎません。私たちは血脈によって今ここにあるのではなく、生きとし生けるものすべてのいのちの一つとしてここにあるのです。それが私の考える死生観です。私たちは有縁無縁を問わず、すべての永遠のいのちに生かされています。そして物理的な死を迎えるとき、私もまた、残された人たちの永遠のいのちの一つとなって、皆さんを生かす側に立つのです。それが生死不二と言うこと。釜の蓋が開いてご先祖様が私たちの元にやってくることは、その象徴です。ですから、今私の周りをお盆の家路へと急ぐ数多のご先祖様は、皆が等しく共有する共通のご先祖様です。釜の蓋の閉まる十六日まで、皆さんどうか私たちのご先祖様を慈しみ感謝しましょう。

狂言綺語六十九・・・帰省

ご先祖様が生まれ育った家にもどられる日は盆だけでなく正月もその日にあたります。しかし今や盆も正月もご先祖様が家に戻ってくる日と考える人はいかばかりでしょうか。かく言う私もかつては、年二回実家に帰省する日という認識しかありませんでした。母の手料理を味わい、孫の成長を喜び、家族の無事

と明日の安寧を願う機会。これも親子三代の血脈を確認する核家族時代のご先祖様を祀る一形態かもしれません。しかし「Go toトラベル」は推奨されてもお盆の「帰省」は自粛要請されている今年は、これを境にご先祖様を祀る意識はさらに希薄化し雲散霧消する恐れがあります。実はこの希薄化は今に始まったことではありません。

七五年前柳田国男は戦後すぐに「先祖の話」を出版し、明治以降天照大神を頂点とする国家神道に強制的に序列付けられた日本の神さま（祖霊）たちの復権を試みました。日本人が古来祀っていた神さまは、家制度の存続を守護する「ご先祖様」と地域の共同体・土地を守護する「氏神様」の二つでした。日本人にとってこの「祖霊」を祀ることが神さまを祀ることです。天照大神は天皇家の氏神であり、戸井家の祖霊でも氏神でもないのです。明治以降天照大神を頂点とする国家神道体系に編集された日本の八百万の神さまたちは、不本意ながらみな天照大神の臣下としてその命令に従うことを強制されてきました。巨大な国家権力の下では愛媛の小さな村の戸井家を守護する氏神様もご先祖様も、その神棚の首座を天皇家の氏神に明け渡さざるを得なかったのです。それ以来戸井家も数多の家もその家、一族、村を守護する祖霊の上に天照大神が鎮座し、その神は守護する代わりに自分の命令に絶対服従することを命じてきました。これが明治政府が行い今に続く国家神道の本質です。そうなれば必然的に家を守護する祖霊の地位の低下が起ります。柳田は次第に消えゆく祖霊信仰を憂い「先祖の話」を上梓しました。この著作は天照大神を頂点とする創作された神の序列（それは権力の序列でもあります）を解体し、古来の日本人の祖霊信仰の姿に戻すことが目的だったわけですから、戦争が終るまでは発表できませんでした。国家神道の立場からは大変危険な著作だったのです。

祖霊を祀ることが、それを祀る家や集団の守護と繁栄を祖霊に委託することであり、その集団の祀りをより大きな集団の祀りが統制していくことが政（まつりごと）と考えるならば、政を治める政治というものは必然的に個人の信仰をある秩序の下に統制していくものとなるはずです。戦後七五年、国家神道の秩序が解体されて、今や彷徨える神さまの時代なのか、それとも日本人の潜在意識の中にはまだその秩序は残っているのか、神も仏もない不信の時代なのか、少なくとも柳田が望んだような家制度の存続と一体化した祖霊信仰は今やほとんど解体されているでしょう。私は今を混沌や無秩序の時代とレッテルを貼って論評するほど博学でも厚顔でもありませんが、この様な一見何が何だか分からない状況にこそ、人々の持つ本質的な共通相が見えてくる気がしてなりません。例えば先号に書いた「地獄の釜の蓋が開いて、ご先祖様が一斉に自分の家を目指して歩いている盆の光景」に見られる盆の風習です。それは死んだ人も今を生きている人も一所に集まり過去の御守護を感謝し未来の安寧を願う場です。死者と生者が一堂に会する生死不二が顕現する場です。そして日本人は仏教の教義がそれと矛盾していようが、国家神道が祖霊をないがしろにしようがそんなことはお構いなしに、ただひたすら祖霊に感謝し守護を願って今に到ったのです。それは日本人の根本的な死生観に違いありません。仏教や儒教やらの教えや政の要請によって何重にも化粧を施された日本人の死生観から素顔を取り戻すチャンスが今あると私は考えます。その素顔こそがありのままの私であり日本人なのです。

私は自分に子供ができるまで、必ずしも盆と正月に帰省をしていたわけではありません。仕事が片づかなかったのか、東京にいた方が楽しかったのか記憶が定かではありませんが、お参りする墓があるわけでもなく、先祖を意識する場は皆無でしたから、盆や正月がご先祖様と相見える機会という考えは全くあり

ませんでした。互いの無事を確認し母の手料理を味わうだけであればいつでも帰省できます。ところが子供が出来ると状況は一変し定期的に帰省するようになったのです。これを少し理屈っぽく分析するとこういうことです。親にとって子供は未来ですが、子供にとって親は過去です。親子は同じ現在を生きていても子は親の過去を一緒に生きることはできません。しかし親は子の未来を一緒に生きていくことはできるのです。自分は子として親の過去を頂き今ここにあること、同時に自分は親として子の未来をこれから生きていいかなければいけないことに気づいたのです。ここに親・子・孫の三つのいのちが繋がりました。過去現在未来の三世を同時に生きる形がここにあります。さらに日本人は生者にとどまらず、死者であるご先祖様も祖霊として三世を当時に生きていると考えました。死者たちは今を生きる私たちを守護し生者はその守護に感謝するという祖霊信仰です。私はこれがありのままの日本人の死生観ではないかと考えます。これはまた永遠のいのちに感謝しそのいのちを繋いでいくために、仏教者として日々を行い続けることと全く同じことだと考えています。

八月は広島と長崎に原爆が投下された月。八月は戦争をやっとやめてもらえた月。八月は戦死病没公私殉難の霊や有縁無縁のすべての祖霊をお迎えし、お見送りする月。八月はこの日本中に祖霊が満ちあふれ、死者と生者が一同に会する月。八月は誰もが手を合わせ、自分だけでなく他者にも思いを馳せる月。八月は私たちが永遠のいのちに生かされていることを自覚する月。もし日本人の誰もが八月をその様な月と考え、永遠のいのちに自然と手を合わせ感謝し未来の安寧を願う光景があたり前となれば、八月は熱中症と新型コロナの脅威に怯えるだけの月ではなく、鎮魂と生きる喜びと希望に満たされる月であるはず。これが暑さと湿気で思考力が低下した末の妄想ではないことを願って。

狂言綺語七〇・・・陀羅尼

「同世代ですね」や「同郷ですね」と分かると一気に相手との距離が縮まり、仕事がうまく運ぶことがよくありました。何か共通の体験をしてきた気分になり親近感が湧くからなのでしょう。特に、同郷同期同窓などのカテゴリーがひとつでも一緒だと初対面でもついため口となり自然と話が弾むものです。中でも音楽や映画や本の体験が同じだった場合は強く同世代を感じます。当時はあまりポピュラーでもなく友人からは「お前の趣味は変わってるな」などと言われながらも今に至るまでずっと好きであり続けた音楽を、たまたま知り合った人との何気ない会話の中で「僕も実は十代のころ夢中になって聴いていたんですよ」と分かった瞬間は、ああここにも十代の頃から同じ空気を吸っていた同世代がいたんだ、となんだか嬉しくなります。

「紙風船」　黒田三郎

落ちてきたら
今度は
もっと高く

もっともっと高く
何度でも打ち上げよう

美しい
願いごとのように

この詩は六年の国語教科書にも載せられている、現代詩の中でも馴染みやすい詩の一つです。私も中学時代に読みそしてつい先頃まで忘れていました。ところがある方とフォークソングの話となり、彼が「赤い鳥が好きでよくギター片手に歌ったものです。」と話した瞬間、急に思い出しました。「紙風船？」「ええ」「黒田三郎？」「いい詞ですね！」と一気にこの詩まで話が進んだのです。「赤い鳥」は美しいコーラスラインを聞かせるフォークグループです。「紙風船」はメンバーの一人が黒田三郎の詩に曲をつけて昭和四八年にリリースされた楽曲です。同世代の彼が私の記憶の底に眠る不可思議なものを呼び覚ましてくれました。私はかつてこの詩この歌に魅せられ、四〇年以上経った今もまだ魅せられていたことに気づかされ、そしてその理由も瞬時に理解しました。

今私はこの瞬時の理解を宗教的体験として語ることに躊躇はありません。この詩歌は陀羅尼（ダラニ）なのです。願いごとは願っても願っても紙風船のようにふんわりふわりと落ちてきます。それでも何度でも願い続けること。各々の願いは、光指す大空に向かってもっともっと高く願い続ければそれはどれも「美しい願いごと」です。「願い」続けることが私たちが生きることそのものであり、その毎日は「美しい」毎日なのです。これは私がこの欄で縷々述べている「願い」「誓い」「行う」ことです。紙風船は願いであり私たち自身です。私たちの願いを高い青空の彼方からさす光（仏の智慧、永遠のいのち、法灯明）に向けて誓い、何度でも更に高く打ち上げ続ける行いが私たちの日々を生きることであり、それが「安らぎの処」なのです。私が同世代の彼との何気ない会話の中で瞬時に摑んだ宗教的体験を解説すると以上のようになります。

陀羅尼はサンスクリット語をそのまま音写したもので呪文のことです。漢語に訳すと総持や真言です。辞書的に言うと「教えの精髄を凝縮させてそれを含んでいる言葉。教えの真理を記憶させる力、行者を守る力、神通力を与える力があるとされる呪文」となります。何だか分かったようで分からない説明ですね。私は陀羅尼を唱えれば呪術的な何か特別な力が備わるという考えには全く同調しません。祈祷や加持と言われる儀式はあくまでも「願い」を確認する場にすぎないのです。その「願い」を永遠のいのち（教え）たちに「誓い」その誓いの実現のために「行い」、それを日々繰り返すことが仏教行者としてのあり方です。護摩を焚いて木剣を鳴らし派手に呪文を唱えているだけではただのパフォーマンスで、宗教的には無意味な行為です。

私は陀羅尼を否定するものではありません。ただ陀羅尼を唱えれば何かが叶うと言う考え方を否定しているだけです。美しい言葉と音韻が陀羅尼として唱えられ声明として奏でられるとき、そこには間違いなく宗教的体験があるはずです。例えばグレゴリオ聖歌やミサ曲を聞いたときにも感じる崇高な体験です。たとえ宗教は異なっても〝永遠なるもの〟に触れる一瞬がそこにはあるはず。その一瞬に触れた私たちはその喜びを日々の生活の中でも実現していかなければと必ずや〝永遠なるもの〟に誓い行うのではないで

しょうか。それが本来の陀羅尼の力です。一度機会があれば「紙風船」の曲を聴いてみて下さい。ネットで聴くことができます。ソロから始まり次第にコーラスが重なり曲は高揚感を増しただひたすら紙風船（願いごと）を打ち上げ続けます。この歌は初めて聴いて以来私の身に何か見えない力を与えてくれたに違いありません。それは「願い誓い行う」力です。その力に無意識なままに四〇数年経って、今それが陀羅尼の力であることをしっかりと自覚できるようになりました。陀羅尼は経や僧侶が唱える呪文、真言の類いの中にあるのではありません。日常体験の中の歌や映像や文章が私たちを〝安らぎの処〟への行いへと駆りたてるとき、それが陀羅尼となるのです。和歌や物語が逆に仏教の修行に繋がりこれを助けるとする「狂言綺語」の面目躍如です。私たちは僧侶の語る言葉や経や儀式の中だけに何か仏教の真実があるように思い込まされているようですが、それは宗派の護教や利権維持のための主張にしか過ぎません。宗教的体験は私たちの身の回りの自然や人や言葉や音や香りなどの中にあるのです。ただそれに私たちはなかなか気づくことができないだけです。私は身の回りに溢れている未だ見えぬ仏さまの姿を可視化する試みとして「狂言綺語」を書き続けていきます。

冒頭に同世代や同郷について書きましたが、私は「同」の響きの中に「異」を排除する旋律を感じて実は心から肯定はできません。私自身、多数派の「同」が少数派の「異」を差別し排除する光景に出会ったとき、同調や看過したことがなかったとは決して言えません。そのような自分もありのままに受け入れて、日々の居心地の良い「同」に安住することなく、互いの「異」を尊重し「同」の部分に共感した日々を送り続けたいと考えています。

狂言綺語七十一・・・予言

神輿は担がれて初めて神輿となることができ、また担がれなくなって初めて神輿でなくなることができるのです。つい最近まで霊験あらたか日ノ本の国を統べる神輿は、今年に入って突如見舞われた疫病蔓延になすすべもなく、災厄や穢れを清める神力をみるみる失っていきました。そして民を睥睨し支配していた快適な神輿の座は次第に居心地が悪くなってきたのです。神輿はその座を奪われる前に自らの神力を誇示したままその座を降りたいと考えました。一方担ぎ手たちも神輿の効力が眼に見えて失われていく現実に危機感を抱き新たな神輿探しが密かに始まりました。神輿が自らその座を投げ出しては己の神力の否定となってしまいます。やむを得ない事情、例えば神輿の一部に虫食いが見つかり、よくよく調べてみたら補修では間に合わず新調が必要だと、皆に「それではしょうがないな」と思わせる段取りと口実が必要です。一方担ぎ手達は自分たちの意のままになり、かつ彼ら全員が望む神力と一致する神輿を探さなければなりません。さて諸々の段取りが整ったようで、現在神輿の新調作業が着々と行われています。神力（権力）を維持したまま神（権力の顔）の入れ替えを行うこの難しい作業はおそらく古来、日本のまつりごと（政）の中では繰り返し行われてきたことでしょう。真の神力は神輿ではなく、担ぎ上げる人たち各々にあるのです。それを良く知る担ぎ手たちは強い結束力をもって神力の誇示と維持を行います。そこからはじき出されまいと人々は雪崩を打って担ぎ棒に殺到しますが、でも大半の人々はその神輿新調作業を呆然と傍観するしかありません。

私がどんなに過酷な修行を積みすべての経典に精通しようとも、怨敵悪魔を退散させる呪術力も未来を予測する千里眼も備えることはできません。この現代にその様なことを標榜する宗教家がいたとしたら、虚言癖、自信過剰、詐欺師というような類いの人物と判断し、絶対近づかない方が良いでしょう。仏教の世界観は「ありのままに観た（空観）」ことを「因」としてさまざまな「縁」の力が加わることで今の「果」があるという考えが基本です。しかもその結果は固定的ではなく、瞬時に次の結果の原因となります。「因縁生起」や「縁起の法」と言われているものです。つまり今この瞬間の「原因」とそれに関わる「縁」の力をありのままに観ることができれば、自ずと未来の「結果」を観ることができるのです。これを予言や神託と人は言うかも知れませんが、仏教的に言えば因縁生起による論理的帰結に過ぎないのです。オカルトでも憑依でもありません。但しそれは理性で組み立てられた論理ではなく、ありのままに観る（空観）ことで得られた論理です。これができればその道筋を論理的に辿って行き着く所を指し示すことは誰にでもできるのです。

私は何らかの利益を願う呪術や加持祈祷の類を徹底的に否定する宗教家ですが、現在起っている神輿交代劇の台本は五月の段階で大筋を読むことができました。そしてほぼ台本通りに進行しています。なんの神通力も持たない私ですら、ありのままに観ることを心がければある因縁生起の姿を頭に描くことは可能です。ありのままに観るとは「善・悪」「利・害」「浄・穢」「同・異」などの二項対立の判断基準を一度全部捨て去ることです。その状態からもう一度現実に起っている現象を観れば後は自ずと縁起の法によって道筋が見えてきます。これが「空観」です。「色即是空」「空即是色」のことです。そこに自己の思惑や主義主張などが忍び込んだら絶対にそれは見えてきません。逆に観る対象の思考・行動原理が権力・利害・保身の三角形の中にすっぽりと収まっている今回の神輿新調劇は、どさ回りの勧善懲悪芝居並みの分かり易さです。

日蓮聖人を予言者と呼ぶ人たちがいます。彼は「立正安国論」に国内では内乱が起こり外国からは侵略を受けて滅ぶと書き記し、実際北条一族の内乱と蒙古襲来という事態が起りました。しかし彼に何か特別な予知能力があったわけではありません。当時の国内外の政治動向、自然災害、人心の疲弊などの客観的事実を自己の思想や思惑を一切排除して鳥瞰すれば、自ずと観えてくるものがあります。それを経文と突き合わせ、論理的証拠として採用し書き上げた書が「立正安国論」です。決して経文に書いてあったことから未来の出来事を予言したのではないのです。ですから彼をいわゆる「霊感により啓示された神意（仏意）を伝達し、あるいは解釈して神（仏）と人とを仲介する者」という意味での予言者と呼ぶことは私にはできません。彼は徹底的に自己を無にして（無我）、ありのままに観たこの世（無常）を自分以外の人たちにも同じように観てもらい、一緒にこの世に生きる苦（一切皆苦）から脱出し、安らぎの処（涅槃寂静）に赴こうと「願い誓い行う」菩薩行の実践者です。人にない能力を持つ予言者と決して崇め奉ってはいけないのです。

日蓮聖人の縁起の法による帰結をあえて予言と呼ぶならば、彼は予言が的中したことが不本意であり行いの道半ばであることを自覚するに十分な出来事だったでしょう。「立正安国論」は予言を実現させないために、幕府も民衆も法華経（正法）に帰依せよと訴えた書です。しかし事態は予言通りに進み、正法に帰依した人たちもほとんどいませんでした。逆に弾圧がさらに強められたのです。これは鎌倉時代の現実では失敗です。しかし未来の日蓮聖人にとっては成功だったのです。なぜ失敗であり成功だったのか、今はま

だこの宗教的二律背反を語る準備が私にはできていません。整ったときには必ず書き留めていきたいと思います。

世の中はいろいろな神輿で溢れています。町内会サークル会社と人の集団では何らかの神輿が指名され担がれています。でもよくよく見ると、とうに降ろされているのにまだ担がれているつもりや、神輿に必死にしがみつく者、降りたいのに降ろしてもらえないなど、神輿の思いと違うものが見えて、神輿見物は楽しいものです。ただ、傍観者のつもりがいつの間にか神輿の片棒を担がされていることがないように、自戒を込めて要注意ですね。

狂言綺語七十二・・・行う人

今年は残暑というのも憚られるような猛暑が九月になっても続いているため、秋冬用の野菜の種まきの時期を随分迷いました。早ければ虫に襲われ、遅ければ成長が遅れます。日記をめくり、ネットで調べ、人に話を聞きながら蒔き時を計っていたといえば聞こえはいいのですが、実のところはお盆が過ぎても暑くて土を耕す気にならず怠けていただけとも言えます。結局昨年より一週間遅れで大根の種を蒔き、白菜の苗を植えました。と同時に昨年はさんざんバッタや芋虫にご馳走を提供したので不織布の防虫シートをかぶせました。双葉からやっと本葉が出始めた葉っぱは虫たちの大好物のようで、私がご馳走に預かるはるか前に彼らに食い尽くされてしまいかねないのです。さて私の畑に侵入できないと知った虫たちは何処へ行くのやら。

畑を始めて三年、よその畑が気になります。散歩や車で走っていてもつい畑に目が行き、一本仕立てだと実のなりがよくなるんだ、雑草一つ生えていない綺麗な畑だな、日当たりがいいと成長が早くてうらやましい、などと〝人の畑はよく見える〟ことばかりです。ならばせっせと雑草を取り、こまめに芽かきをすればよいのですが、夏の暑い盛りは熱中症になるから夕方からと思っているうちに夕立となる毎日。結局野菜も雑草も生長するに任せるばかりです。頭では分かっていても、体がそれになかなか反応してくれない。初心者にありがちなことです。それでも自分の食べる分くらいは収穫できる素人の野菜作りは当分やめられません。

「たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。牛飼いが他人の牛を数えているように、かれは修行者の部類には入らない。」[注1]お釈迦様の語った言葉を集めた原始仏典の一つ「ダンマパダ（真理の言葉）」の一節です。「修行者」は難行苦行などの仏道修行をする者ではなく、法灯明の指し示す処へ自灯明を頼りに日々を行う人たちのことです。後は書かれている通りに受け取って下さい。講釈を垂れるだけで実行が伴わない者は行う人ではないと言われているのです。それは暑さにかまけて畑での作業を怠り、他人の牛を数えるようによその畑の実りを数えている私の姿です。原始仏典はすべて分かり易い喩えと言葉で書かれています。また恐らくお釈迦様が現実に遭遇した場面に応じてその時、その人に対して説いた言葉だと思われるので、リアリティーがあり自分自身のことに引き替えて受け入れることができる言葉です。ですから私も素直にそのまま言葉を受け取ることができるのです。

原始仏典は後世の大乗仏典（法華経や般若経など日本で経と言えば大乗仏典のことです）のように難解で誰かの講釈を通してでしか理解できないものではありません。この誰にでも受け入れられるお釈迦様の言葉が、仏教の繁栄に従って次第に難解な言葉になった理由を学者でない私が述べることはできませんが、日々を行う人である私には実感として分かります。先の引用した言葉をそのまま当てはめればよいのです。講釈を垂れるばかりで実行の伴わない僧侶たちはその正当化のためにお釈迦様の生の言葉を系統だて論理整合性がとれるように解釈をしてきたのです。一方お釈迦様の言葉に忠実であろうとした人たちは、講釈の前に実行すべきだと唱えました。これが大乗仏教（菩薩）運動です。仏教の原点回帰、原理運動です。しかし運動を言葉（経典）にした段階で解釈の必要性が出てきます。しかも今まである経典を全否定せずに古い経典の上に新しい説を付け加えて（加上説）[注2]大乗仏典が成立していますから、内容はますます複雑となり、誰か偉い人に説明してもらえないと、お釈迦様の言葉と称されるものを理解することが困難になってしまったのです。僧房の奥深くで解釈に専念する僧とそれを有り難く信じる私たちという構図が出来上がりました。「教え」と「行」の分離です。僧は教えを説く人であなたたちはそれを実行する人となれば、誰がその教えを実行するでしょうか。それが自分自身の現世利益にならない限りはよほどのお人好しでもないかぎり誰も「行う」ことはないでしょう。これがお釈迦様の存命中から今に到るまで続く仏教の不都合な真実です。

お釈迦様の言葉を論理的整合性の中で一つの学説に仕立て上げてはいけません。彼は一人の人間としてある局面において臨機応変に人々の疑問や振る舞いについて答え語っただけです。その言葉が私にも思い当たるものであればそれを素直に受け入れればよいのです。解釈ではなくありのままに受け入れることです。彼の言葉を信じ日々の行いに励み、それが法の光に向かって着実に歩んでいると確信が持てたとき初めて言葉にできるのです。「はじめに行いありき」です。私は僧籍を持ち僧体をしています。ですから講釈と金銭を交換することが布施と考える現代の数多の僧侶たちと同じカテゴリーの中で見られます。そんな時私は「願い誓い行う」僧侶としての実践について話し始めますが、すぐに自分はなんという講釈を垂れているのだと気づき恥ずかしさを覚えます。どこまで行っても行いは行いでしか伝えられません。原始仏典に書かれた言葉は分かりやすく受け入れることは難しくありませんが、しかしそれを行うことがなければただ他人の牛や畑の実りの数を数えるだけの者です。行い続けることが唯一仏道の実践でありそれ以外に仏道はありません。

畑作りが私の行いの一つと話せば、何を大げさなと思われるかも知れませんが、私の行いは日々を楽しく豊かに心安らかに生きることにあります。種のまき時を悩み、暑さに鍬入れを躊躇し、虫の対処を考えることも、毎日を生活する喜びの一つです。ところで防虫シートをかけて一週間、私の畑に侵入を拒まれた虫たちの行先を心配する必要はありませんでした。不透明な不織布から覗くと白菜の葉に点々と虫食いの跡。これは虫たちの私への挑戦状?それとも居心地の良さに定住を願う姿?さて、シートの中から全員退去願うか、不法占拠を快く認めるか、強硬手段は使いたくないが、かといって一匹ずつ捕獲するのも大変。今が思案のしどころです。でも「それもまた楽し」ですね。

注1：「ダンマパダ十九」中村元訳　注2「出定後語」富永仲基

狂言綺語七十三・・まれびと

板木が「コツコツ」と鳴ったらどなたか見えた合図です。琉游舎ではドアフォンやベルが設置されていないので、初めての方はどうやって訪問を告げればよいか玄関先で迷われていることと思います。大きな声で訪う方やノックする方もいますが、ドアベル代わりとおぼしき板木を見つけてこれでよいのか迷いながら叩く音が聞こえると、どなたが来たのだろうと心が浮き立ち足早に玄関の扉を開けます。都会に住んでいた頃は、訪問者と言えば荷物の配達かセールスや勧誘の類しかありませんでした。大概はベルが鳴ると誰?何の用?と不信感が先に立ち、モニターで扉の開閉を判断して、開けることは稀でした。かつての我が家の扉は侵入者を防ぐ防御の扉だったならば、今の琉游舎の扉は「まれびと（客人）」を歓迎し招き入れる扉です。

先日、文字通り「まれびと」が琉游舎を訪れました。珍客です。コツコツと板木の鳴る音で扉を開けると、見知らぬ男の人が細長いものを手に下げて私の目の前にさし出すのです。えっ!トカゲ?「前の道にマムシの赤ちゃんが死んでいた、この様子だとまだ親と合わせて七，八匹はいるはず、気を付けるように」と、注意喚起をしに来てくれたのでした。彼はここが開発された三〇年以上前からこの山に入り猪を鉄砲で撃っていたとのこと、ここはマムシの巣だったが、開発によって最近あまり見かけなくなっていた、今日久しぶりに見つけた。用心のため頭部を押え、ほらここがスーッと赤いだろう、赤マムシだ。特別な焼酎につけたマムシ酒はうまいぞ。最後に、マムシは猪の大好物なんだがちょっと捕りすぎたかな。と言って去っていきました。

「まれびと」は稀に来る人の意味で、今では客人や珍客と同じように使われますが、古代の信仰の中では神や聖なる者の来訪を意味しました。折口信夫は異界から人間界に来訪する聖なる者（まれびと）が私たちに幸福をもたらすという信仰に、日本の古代信仰の根源があるとし、異界の異人に対しては畏敬の観念をもちこれを厚くもてなす異人歓待の観念が「まつり」や芸能の源流であると考えました。日本人は本来異なる文化や民族を受け入れ歓待する、外に開けた民族だったことがこの古代信仰に伺えます。その末裔である私もこの「まれびと」を聖なるものの来訪として畏敬の観念を持たなければならないはずですが、さて。

私は迷信俗信を信じる者ではありませんが、その様な考え方が出てきた人間の心理や環境や事象などに思いを巡らすべきだと考えます。長い間人々に信じられてきたという事実は重いものです。ですから迷信俗信を科学的根拠がない妄想だと切り捨ててよい訳がありません。先日訪れた「まれびと」も、たまたま前の道に紛れ込んだマムシを通りがかったマムシに詳しい人が見つけ、近くにいた私に親切心で知らせたとみれば、それは「毒蛇出没、危険、注意!」という警告です。これはごく一般的な現代人の見方です。一方、山（異界）から道（境界）を命がけで渡り、私（俗界）に幸福（災厄）をもたらそうとしたマムシ（聖なるもの）は途中で力尽き、代わりのもの（まれびと）がかのものの思いを使者として私に告げてくれたとも考えられるのです。これは「聖なるものや異界との交感」を信じる日本人の信仰の根源です。後者は、原始宗教が呪物や精霊崇拝から多神教へ発展しやがて一神教が生まれたと考える宗教進化論からすると、未開人の見方です。現代に生きる宗教家はこの未開人と現代人との見方の間を大きく揺れ動く振り子である必要があると私は考えます。事実、私は合理的現代人として翌日ホームセンターに行き「ヘビレス」とい

う名のヘビを寄せ付けない忌避剤を購入して庭に撒きました。一度は招き入れた「まれびと」を二度は招き入れないぞと言う意思表示です。一方、かのものは私に何を告げ何をさせようとしていたのか、その想念が未だに私の頭から消えることはありません。私はかのものの住み家であろう道の向こう側の崖の淵まで行き、深い底を覗き込みます。そして谷底に降りて行きたいという誘惑に駆られ、やがてそこに吸い込まれていくのでした。

この「まれびと」の訪れは、この現代に宗教家として生きることは可能かという命題を私に考えさえる出来事でした。すっかり理性的思考に飼いならされてしまった私に、あの世や地獄や浄土や閻魔大王や輪廻や悪霊や怨霊やと、書きだせば限がない仏教に関わる俗信を合理的に説明できるわけがありません。それはあなたの心の中の問題だといえばそれまでなのですが、それですべてが説明できると考えれば、それはもはや宗教ではなく心理学の領域です。宗教による安寧と救いを“それはあなた自身の心の問題だから自分で解決しなさい”と自己責任に帰することは宗教の無力を意味します。一方、谷底（異界）に吸い込まれて行った私が“異界の聖なるものとの交感で特別な呪術力を授かり、俗界のあらゆる不幸や苦悩を幸福と歓喜に変えることができる”と宣言したならば、それは高僧か稀代の詐欺師か精神医学のクランケか、紙一重でしょう。

私はここに宗教のもつ両極端の様相をちょっとだけ極端な表現で示してみました。今、宗教はこの極端をはみ出さないよう行儀よく社会の中に収まっています。“自助共助公助”という題目の下、自己責任ありきの社会を作ることに積極的に肩入れする宗教に「自行化他」[注1]という大乗仏教の根本精神を見ることはできません。また谷底（異界）への誘惑へ駈られることもなく、教団の認可だけを根拠として加持祈祷祓いを行う行為は経済活動にすぎず、聖なる者との同一化を希求する行為とは認められません。私は一人の宗教家としてこの両極端を揺れ動く振り子でありたいと思います。社会の中に居場所を定めそこに歯車として収まることは、宗教のあり方として一見正しいことのようですが、社会と共存しても同質化してしまっては宗教になりえないのです。社会の中の振り子として常に「行い」続けることが宗教です。振り子が止まるときは「行い」が止むときです。

そしてそこには二度と「まれびと」は訪れないでしょう。

注1：自らの仏道修行により得た功徳を自分が受け取るとともに、他のための仏法の利益をはかること

狂言綺語七十四・・生語（しょうご）

生きものに寿命があるように言葉にも寿命があります。技術や習俗の変化でその言葉を使う意味がなくなれば、自ずとその言葉は消えて行きます。“私のマイブームは花金の銀ぶら。おきにの店でイタ飯ナウとメル友に送る瞬間が最高のリア充です。”書いている私が恥ずかしくなるくらいの死語のオンパレード。ここには私の見立てで、八個の死語があります。三十代以上はどれか二，三個ずつくらいは分かるでしょう。花金や銀ぶらが分かる人は間違いなく五十歳以上です。全部分かる人は流行に翻弄された毎日を過ごしてきたか、軽薄ないわゆる業界人に違いありません。これらの言葉は同世代だけに通用した行動や感情表現であり、共有ができない集団や世代にはちんぷんかんぷん[注1]なはず。一方，道具などが変貌を遂げてその

道具と一緒に消え去った言葉もあります。「ダビング、テレホンカード」「巻き戻し、ダイヤルを回す」などです。いずれも社会がその言葉を必要としたから生れ、必要としなくなったときに消え去った死語たちです。

ここ数年〝台風一過の秋晴れ〟という言葉に実感が伴わなくなってきました。最近の台風はぐずついた曇天や雨を残したまま、一人風と供に去って行ってしまうようで、空が抜けるような清々しい晴天を連れて来ることがとんとなくなりました。かつての台風は雨と湿気と塵・埃をまとめて持ち去り、晴天と乾燥したきれいな空気をもたらす天空の大掃除をしてくれました。台風は災害ですので、その存在を擁護するわけではありませんが、〝台風一過の秋晴れ〟という肯定的な言葉が実感として感じられなくなっている現在、今の気象状況が十年も続けば、この言葉は死語となり、台風がただの災害になってしまうのではという危惧があります。もしそれが現実となれば、ここに「同世代同集団だけに通用した言葉」「道具の変革によって生滅した言葉」の二つの死語のカテゴリーに「自然によって無用化された言葉」が加わることとなるのでしょう。

死語は死んだ言葉、つまりそこに名づけられた現象や存在や感情が意味を持たなくなったと言うことです。ではその反対の生きた言葉とは何でしょう。ここでは仮にそれを「生語（しょうご）」と名づけます。「無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞くほうがすぐれている。」[注2]お釈迦様が語った真理の言葉の一偈です。お釈迦様の言葉は仏教の教えに沿って受持しなければただの人生訓に堕してしまいます。「この道より我を生かす道はなし、この道を行く」「あたらしい門出をする者には新しい道がひらける」日本を代表する二人の処世指南者の言葉から無作為に書き出してみました。お釈迦様が語る言葉と一見区別がつきませんね。しかしお釈迦様の語る「道」は、教え（法灯明）が指し示すところなのです。「行く」はその道を自ら行い続けることです。それはありのままに観る智慧（般若）で自ら道を照らし（自灯明）続けることで可能となることです。ここに引用した「無益な語句」は人間の欲や執着から発せられた言葉です。「有益な語句」はありのままに観る智慧と行いから発せられた言葉です。だから「聞いて心の静まる」言葉なのです。これが「生語」です。前者の「無益な語句」は言うまでもなく「死語」です。

私が造語した「生語」は仏教の伝統的な術語に従えば「真言（しんごん）」ということになるのでしょう。しかし「真言」は「たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである」[注3]というお釈迦様の真の言葉に従えば死語です。秘密の呪文の中にこそ真実があるという「真言」は行いとありのままに観ることを否定しているから死語なのです。世界はありのままに私たちの前にあります。それをありのままに観ようとも行おうともしないで、見えない秘密の世界の中に「真言」があり、その「真言」は意味不明の呪文の中にある。と言われても、私はそれをお釈迦様の教えと認めることはできません。お釈迦様の言葉を都合の良いように解釈し続けてきた自称釈迦弟子たちの辿り着いた先は、死語の墓場です。そこには生きた教えはありません。「行い」がないからです。呪文を唱え加持祈祷を行うことが「行い」だと言うのであれば、それは宗教ではなくおまじないの範疇だと思うのですが如何でしょうか。

言葉は流行や技術変革の中で存在する限り、死語となっても笑い話や郷愁で済まされるでしょう。また自然の力に死を宣告された言葉は人智の及ばないことと諦めるしかありません。一番厄介な言葉は実践や

感情のない言葉です。そこに行いと智慧はありません。言葉にほんの少しでも感情や行為の裏付けなどの身体の働きかけを感じ取ることができれば、私たちはその言葉とコミュニケーションができます。しかし智慧と行いのない言葉は身体のない言葉です。つまりゾンビが語る「死語」です。本来、心や肉体機能に基づかない言葉は虚空をさまようばかりで聞き手である私たちの身体に突き刺さることはないはずです。しかしゾンビが語る死語は、論点すり替えの話法（ご飯論法）や反復刷り込み論法で生きた身体が語る言葉「生語」と思い込ませる奸計があります。日々の喜怒哀楽の中で語られる言葉はその人にとっての真の言葉であり身体が語る「生語」です。死語に丸め込まれないためには、私たち自身が生語を語り続けなければならないのです。

ゾンビが語る最近の死語例を二つ挙げます。「想定外」と「適切に対応する」です。翻訳すると「私に責任はない」「何もする気はありません」という意味。「次は想定してやってくれるはず」や「適切な対応とは有り難い」などと期待や感謝をしたあなたはすでに死語に取り憑かれています。「適切に判断する」と言うのもありますね。これは「俺のやることにケチをつけるな！」という意味です。数え上げれば尽きないほど今、日本語はゾンビに操られ次々と死に絶えています。早く死語を大掃除して台風一過の秋晴れのような生きた日本語を取り戻さないと、私たち日本の言葉・文化・人が生きた屍と化す日はそう遠い将来ではなくなるでしょう。

注1：江戸時代から使われている言葉、難解な儒学者の言葉を揶揄したもの、注2，3「ダンマパダ」100、19

狂言綺語七十五・・境

秋らしい秋晴れが訪れないままに、紅葉がそろそろ平地までおりて来たようです。地球温暖化による気候変動か、地球生命の営みのちょっとしたバイオリズムの変化か、近年は毎年「いつもと違う秋」を感じてしまっています。今年はからっとした晴天が少なく、夏以来山頂からは何も見えない山歩きが続いていました。重い雲に覆われ間近な人の姿さえさえもよく見えない頂上では、どんなに想像力を働かせても快晴時の雄大な眺望は浮かんできません。三時間の登りに疲れ頂上でおにぎりを食べる他にすべもなく、そそくさと下山です。ところが小一時間ほどして振り返ると山は快晴。頂上もきれいに見えます。”これもまたありのまま”と思うまでの度量は私にはなく、悔し紛れに二度と来るものかと山への恨み言。まだまだ修行が足りません。

秋晴れの休日が待ち遠しい中、十月二五日（日）やっと快晴の予報が出ました！喜び勇んで早朝五時の出発。高速を北上して六時半安達太良山登山口に到着。雨、気温六度、強風。白河を過ぎたあたりで時々雨粒がフロントガラスに当たっていましたが、天気予報の快晴マークを信じ切って、単なる明け方のにわか雨程度に考えていました。登山口で待機すること四〇分、さらに雨は安定して降り続け雲が停滞してしまいました。恐らく頂上付近は霙か雪でしょう。撤退です。帰りの高速も白河を過ぎるまでは断続的な雨。南の空は晴れているのに、西側から時々雨雲が流れてくるようで、那須連山の福島側に雲が取り付いています。ところが栃木県内に入ったとたん快晴の秋晴れです。白河の関を境に北側は日本海からの湿った冷たい空気が流れこみ、冬が始まっていました。今まで幾度となく車で白河の関を行き来していましたが、

那須と白河の間が古来地形による人為的な境界であっただけでなく、自然現象の境界でもあったことを強く実感させられた日でした。

山や川や海が作る地形的な境は往来の他にも気候や作物、言葉、気質、境遇などの境界を形成し、いずれは国や思想・経済、民族の境となっていくでしょう。すると必然的に、こちら側とあちら側という峻別が作用し内側へは求心力、外側へは対抗心が働いていきます。これは国や社会などの集団を維持するための本能なのでしょう。そんな時人は自由や友愛よりも差別や闘争の感情に基づいて行動してしまう生き物なのです。今から私が語ろうとする自由や友愛は、いわゆるフランス革命以降西洋民主主義の根本を支え続けた文脈ではなく、仏教の教えのなかに存在する自由と友愛です。今行われているアメリカの大統領選挙や、表現の自由を揶揄や嘲笑と恣意的に混同しているフランスの風刺漫画騒動の状況を観察するにつけ、彼らの主張する「自由」や「友愛」は境界の内側への求心力を維持するためだけの論理であることは明らかです。自ら境界を作りそこで「自由」と「友愛」を叫んでも、生まれる感情は向こう側を差別し闘争を煽るだけなのです。

仏教でいう自由は何事にもとらわれない状態を指します。物事を分別し内外の境を設けるのではなく、ありのままに観て自ずから由として行うことが自由です。そこでは心理的物理的境界が取り払われた全き自在の世界。その象徴として経に描かれている存在が観世音菩薩、俗に言う観音さんです。観音さんは「遊於娑婆世界」で「三十三応化身」[注1]します。娑婆世界を自在に遊行し、世間の人々の救いを求める声を聞きつけるや、相手の姿に応じて千変万化に化身して、苦悩から私たちを救い出してくれる菩薩です。仏教の慈悲の精神である仲間に対する友情と悩めるものに対する同情とを人格化した存在が観音さんです。何ものにもとらわれないありのままの行い「遊」と、生きとし生きるものに平等に注がれるあわれみと慈しみの行い「慈悲」、これが仏の教える自由と友愛です。そこは境界のない所だけに可能な差別も闘争も無い世界なのです。

仏教用語の「境」は、土地や物事の境という用法ではなく、六根の認識対象を指します。六根は「眼，耳，鼻，舌，身，意」のことで五官と心の働き（意）のこと。この六根が認識する対象が境界です。これを六境といいます。六境は「色・声・香・味・触・法[注2]」のこと。人は目で美しい色を愛で、耳障りな声に耳を塞ぎ、いやな香りに鼻を曲げ、美味に舌鼓を打ち、汚物に触れて身を避ける。意識はこれは美、あれは醜と見る。これが六根が認識する六境です。私たちの六根は欲と怒りと無知の煩悩に支配されています。仏教ではその六根の分別する（六境）作用が人間の苦しみの原因であると考えます。私たちは「善・悪」「美・醜」などと、物事に判断の境界を設けることが認識であり知的な営みだと考えていますが、仏教ではそれを煩悩で汚れた状態の六根が認識する我見（邪見、誤った認識）だというのです。我見に対する正見とは六根清浄、つまり煩悩をきれいさっぱり洗い浄めた状態でありのままに世界を観るということです。その正見によって初めて正行が可能になるのです。ありのままに観て（正見）ありのままに行う（正行）こと、これが「仏の自由と友愛」の実践です。世界宗教を精神的支柱とする人たちは、境界の内側で「自由」と「友愛」を標榜しながらも、その外側への「差別」と「闘争」を今に到るまで実践している事実は、もはやその宗教の本質がそこにあると言うことなのでしょう。しかし仏教は境を否定したボーダレスの中で初めて可能となる教えです。唯一「差別」と「闘争」を回避できる可能性のある宗教です。しかし境界内（社会）での実践が個人の覚りのための行いと両立する宗教であるかもまた私たち仏の弟子たちは厳しく自問

しなければなりません。

この所日増しに朝の冷え込みが厳しくなってきました。私は知らぬ間に秋の盛りから晩秋への境に立っていたようです。境は目に見えるものでも手に触れられるものでもなく、心にいつの間にか忍び込んで来るものなのかも知れません。きっと境は私自身の心の産物なのです。この心の産物が日々の行いの障壁となることのないよう、見えない境界を軽やかに行き来する往来の日々を、楽しく豊かに安らかに送りたいものと考えています。

注1：妙法蓮華経「観世音菩薩普門品第二五」注2：法は意識対象の全て

狂言綺語七十六・・歩む人

今年はコロナ禍で様々なイベントや祭が中止になっていることと思います。これを頃合いと、手間暇と予算がかさみ参加者も減少している地域の行事が廃止になったという話も小耳に挟みます。私が五十年以上前に部落対抗年齢別リレーで毎年参加していた町民体育祭も、コロナ禍を潮時として廃止となりました。朝晩の冷え込みが今よりも厳しかった文化の日、町の中心の小学校の校庭は部落の団結力と競争心で老若男女の熱気に溢れていました。「昔はこうだった」というと老境の始まりだそうですが、ついでに回顧話をもう一つ。

小学五、六年生の徒歩遠足は羽黒山に登ることでした。標高四五八ｍ栃木百名山、登山口からの高低差約二七〇ｍ、関東平野の最深部に立つ単独峰です。車を置いて神社の鳥居から四〇分、ほぼ直登で最後は手足を使って登る急坂です。この山に押上小学校の五、六年生は学校から徒歩で頂上を往復します。グーグル地図の道のりは１１．６キロですが、恐らく昔は田圃の畦道を歩き鬼怒川は歩行専用の小橋を渡ったと思うので、八キロくらいでしょうか、それでも往復一六キロ。登山部分で三時間、平地の徒歩で四時間くらいはかかったと思われます。この行事は言うまでもなくとうの昔に廃止になっています。今この様な遠足を強行すれば、当日風邪をひき欠席する児童が続出するか、その前に親から「教育に名を借りたパワハラだ！」と教育委員会に訴えられるか、イヤその前に職員会議で「交通事故、山道滑落、田圃転落、疲労転倒」などと考えられる限りの危険が列挙されて「そんな危険を冒してまで徒歩遠足を強行することは教育的でない」と校長が英断を下すかもしれません。何かをやめることは、それにより何か得るものがなければ、ただ失うだけのものです。押上小学校の後輩たちは徒歩遠足の機会を失うことで何を得たのでしょうか。私は、この遠足だけで根性や忍耐や体力や危機対応能力を身につけたとは言いませんが、少なくとも現在の心身を補強する一つの機会であったことは間違いありません。私はそのような機会を与えてくれた押上小学校の伝統と先生方の尽力に感謝いたします。達成や挫折や種々の経験の蓄積がその伝統と供に、今私の足裏に残っているからこうして歩むことが出来るのです。

お釈迦様は道を歩む人でした。道を切り開く開拓者ではなく、今ある道を丹念に「犀の角のようにただ独り歩む」注1人でした。原始経典「スタニパータ（ブッダのことば）蛇の章三、犀の角」では道を一人歩むお釈迦様が道で出合い考え覚知したことを私たちに示し、お前たちも同じように「犀の角のようにただ独り歩め」と教えています。「お前たちよ、私が新たに切り開いたこの道をあとから付いてまいれ」とは決

して言われてはいません。先人が踏みしめた道を丹念に踏みしめ直し、そこで覚知したことを語っただけです。それは革新的でも奇をてらったものでもなく、「確かにそうですね」と素直に受け入れられるような、語りかけられる人の境遇や疑問に合わせた言葉です。例えば「義ならざるものを見て邪曲にとらわれている悪い朋友をさけよ。貪り耽り怠っている人に、自ら親しむな。犀の角のように独り歩め。」注2私たちはこの言葉を聞いて全くその通りであり、そうありたいと思うでしょう。当たり前すぎて言うまでもないことかもれません。しかし言われた人ははっと気づいたはずです。「私は今までなんと貪り耽り怠っている人と親しんでばかりいたことか。だから私も貪る人となって苦しみにつきまとわれていたのだ」と。私たちが暗闇の道の中で迷っているときに、お釈迦様は「あなたが歩んでいる道はこんな道ですよ」と灯火で照らし、それを素直に受け入れた人は、あなたの道を犀の角のようにただ独り歩んで行けばよいのです。今まであった道が、今までと違う道としてあなたに立ち現れました。道をありのままに観ることができたのです。

お釈迦様の教えは八万四千あるといわれています。各々の相手に合った教説を説いたためその時その場所でその人に最も適した言葉となった教えが八万四千。語った人の数だけ教えがあるのです。ですから哲学教説として論理的に整理されるものでもなく、教えを比較対照すると一見矛盾と思われる言葉にも出会います。先人たちの踏みしめた道（伝統）を改めて踏みしめ（吸収）踏み直し（再編）踏み固めた道（教え）を道に迷う人たちに語りかけた言葉の集成がお釈迦様の教えです。人々が受け継いできた道徳・知恵・社会・生活をお釈迦様はありのままに受け入れ、自分の足裏に先人の教えの遺産として蓄積して歩み続けました。そして四つの根本原理の上にその遺産を再編して私たちの前に示したものが仏教の教えです。その四つとは「諸行無常（すべての物事は移り変わり変わらぬものなどない）」「諸法無我（すべての物事は関係の中で存在し独立したものはない）」「涅槃寂静（悟りを得ることで安らかな境地に達することができる）」「一切皆苦（この世のすべては苦しみである）」です。どれも聞き覚えのある言葉かも知れません。お釈迦様の教えはすべてこの四つの根本原理に帰結します。そしてここに帰結する教えはすべてお釈迦様の教えと言っていいのです。この教えは「毎自作是念　以何令衆生　得入無上道　速成就仏身」注3この二〇文字の願いの実現のためにあります。お釈迦様は私たち衆生をこの上ない悟りへの道（無上道）に入らしめ、自分と同じ境地（涅槃寂静）へ至ってもらいたいと常に願っているのです。仏弟子である私は、お釈迦様が再構築して今に至ったこの伝統を足裏にしっかり蓄積して、同じ境地、つまり安らぎのところへと歩んで行かなければなりません。

コリーナに住むようになって、車ですべて移動してしまうと一日千歩程度しか歩けないことに気づきました。歩かないと足から年を取っていきます。だから車社会の栃木県の平均寿命は男が全国四二位、女が四六位なのでしょう。魅力度調査の最下位よりはましですが、どちらもせっかくの大地と自然と歴史遺産の恵みを生かしていない結果です。それと羽黒山徒歩遠足をやめたことも遠因と考えることは責任転嫁の八つ当たりに聞こえるでしょうか。

注1：スタニバータ（ブッダのことば）中村元訳　注2：同57　注3妙法蓮華経如来寿量品第16

狂言綺語七十七・施

九月初頭に蒔いた大根と蕪は本葉が出たとたん虫たちに丸坊主にされてしまいました。間引いた葉の菜っぱ飯と塩漬けを楽しみにしていたのですが、虫たちの方が上手でした。畑の見回りを二、三日怠ったらこの始末です。美味しいものは人も虫も同じなのでしょう、辺りに大量に生えている雑草には目もくれず、私のおかずを集中攻撃の横取りです。虫食い葉っぱを尻目に我が物顔で増殖する雑草を、しばらく私は除草する気にはなれませんでした。それでも植物はたくましいもので網目状に残されたわずかな緑と根っこさへあれば、いつの間にか地中に大根と蕪を実らせ始めました。昨年よりは小ぶりですがそれでもよく成長しました。

十月に蜂谷柿を物干し竿に三十個つるしました。一ヶ月で食べ頃となり先日の映画会で皆さんに食べてもらいました。美味しい顔を見るとせっせと柿の皮を剥いたかいがあったというものです。少し堅めのものも、と思い残り十五個をつるしたままにしておいた一週間後の朝、洗濯物を干している時は確かに十五個の干し柿は健在でした。ところが今回も皆さんに食べてもらおうと十四時に収穫に向かうと、干し柿は跡形もありません。物干しには白い吊るし紐四本と柿のへたが十五個残されているだけ。鮮やかな柿泥棒です。犯人は誰でしょう。状況から判断するとカラスがホバリングしたまま十五個も食べられるとは思えません。種も食い散らかした跡も残っておらず、実だけをもぎ取っていったようです。手を使える生き物、熊か猿か。現場を押さえても彼らでは如何ともし難いでしょうから、干し柿は今一番必要とする生き物のお腹に収まったと考えて諦めます。

仏道修行の重要な実践徳目である六波羅蜜[注十]の一つに「布施」があります。虫たちに喜んで葉っぱを施す、あるいは獣に喜んで干し柿を施す、これも布施と称するべきと頭では分かっているのですが、やはり食べ物の恨みはそう簡単ではありません。その瞬間は、農薬を撒く（害虫退治！）、唐辛子を練り込んだ干し柿を吊す（リベンジ！）など、煩悩まみれの妄執が頭を駆け巡ります。私は自分の喜びを奪われたと考えたから頭に血が上ったのです。しかしすぐに「布施」の無理解に気づかされました。これは奪われたのではなく自分の欲や妄執を手放したことになるのではないか。これこそ「布施」を体得する機会なのではないかと。

布施は僧侶との関係で見る限り非常に理解しづらいものです。僧侶に宗教的行為をしてもらえば皆さんは布施（金品）を差し出すでしょう。僧侶や寺院はあたり前のようにその布施を受け取ります。これが単なる経済行為であれば宗教活動にも税金をかけなくてはなりません。僧侶は教えを施し（法施）受けた側は代わりに金品を施す（財施）というような論理で布施のやり取りを純粋な宗教活動であると正当化していますが、この説明だけでは布施は何かに対する対価という構造を抜け出すことが出来ません。布施の功徳は巡り巡って回向としていずれ自分に戻ってくるのですと言われても、それは布施を受ける側（僧侶）に都合のよい理屈です。法施と財施が経済関係の中でしか成り立たないのであれば、それは宗教とは無縁のものなのです。

布施は「持てるものを分け隔てなく施す」ものでなければなりません。「施しを必要としている人が、施しを受けることによって救われる」ことが目的ならばそれは「利他」です。寄付と同じ行為です。布施の本来の目的は「自利」です。「施しをすることによって、施しをした人の方が自らの執着をはなれ安らぎの処

へと歩むことができる」という自利のあとに「その施しを受けた人が救われる」という利他があります。自己の修行により得た功徳を自分だけが受けとる（自利）こと、それが他の人々の救済のために尽くすことにつながる（利他）。この両者を完全に両立させた状態に至ることが大乗仏教の理想とするところです。私たちは自分の持てる執着物を喜んでさし出し、それを受けてってくださった生きとし生けるすべてのものに「ありがとうございます」と感謝し続けなければなりません。自分が纏う重たい執着の衣の一枚を受け取ってくださるからです。そしてありのままの自分へとまた歩んでいくことができる、それが布施の行いです。

雑宝蔵経の中に「無財の七施」という教えがあります。財産もない私たちができる施として「常に優しい眼差しで人と接すること（眼施）、いつも和やかに笑顔で人と接すること（和顔施）、優しい言葉で人と接すること（言辞施）、自分の身体で奉仕すること（身施）、他の人に対して心配りをすること（心施）、席や地位を譲ること（床座施）、自分の家や部屋を提供すること（房舎施）」以上の七つがあげられています。私たちも日常的に行うことが可能な施です。思いやりや優しさなどの心があれば実践はさほど難しくないかもしれません。しかし、いつでも、どこでも、誰にでもとなったらどうでしょう。一気にその実践は難しくなるはずです。その理由は簡単です。人の為に行おうとするから難しいのです。私たちに煩悩があるかぎり、ここまでやっているのだからもっと感謝や見返りがあっていいはず、という本音がいつか必ず現われます。自分の為に行っている行為であればそのような気持ちがわき上がる心配はありません。法施も財施も無財の七施もすべて自分自身の執着を手放す自分の為の行いです。法力も財力もない私が、日々を豊かに楽しく心安らかに過ごすためにさし出すことが出来る施は無財の七施だけです。この施を物惜しみせず感謝と喜びとともに行い続けること、そのことが、私がお釈迦様から法施を頂き続けることそのものとなるのです。

虫に食べられた菜っ葉も、獣に取られた干し柿も、彼らにはそれがなければ餓死するかもしない死活問題だったのでしょう。来年はどう対処するか思案のしどころです。今から対策を練って彼らには指一本ふれさせないか、彼らの食欲に任せたままにするか。愛護、共棲、不殺生、慈悲、自利、執着などなど、いろいろな言葉が交錯する中を過ごす毎日が、また豊かで楽しく安らかな日々です。来年の顛末はまた一年後のお楽しみ。

注1：布施　持戒　忍辱　精進　禅定　智慧

狂言綺語七十八・絆（きずな・ほだし）

言葉の誤用がいつの間にか正しい用法として市民権を得、しかも正反対の意味となってしまうことがよくあります。仏教用語にはそれが顕著です。『かつて僧侶たちは、無学な民衆が無分別な考えを持ったら自分たちの言うことを聞かなくなってしまうと恐れ、やたら難しい言葉を使って彼らが自分の頭で考えることを諦めさせたのです。』この文には反対の意味に転化して今に通用している言葉が三つあります。「無学」は学を究め、もはや学ぶものがなくなった悟りの状態。「無分別」は「分別」が煩悩によって物事を差別して見る妄想の見方に対して、物事の平等性を悟ったありのままの見方。「諦める」は断念ではなく物事の真

理を明らかにすることです。いずれの言葉も悟りの領域、仏陀のための言葉です。しかし現在ではこの三つは私たち凡夫のための言葉となりました。私見ですが、この意味の転化は、僧侶たちの、言葉と全く正反対の思考や行動を民衆がしっかり見ていた結果だったのでしょう。つまり（学も分別も行いも無い僧侶たちのもっともらしい説法の姿を見て、仏法に頼ることを断念した）民衆が僧侶の実体を諦めた末の言葉なのです。

老若男女、有名無名、無学有学を問わず「ら抜き言葉」が使われた場合、ＮＨＫは必ず字幕で正しい言葉使いに直しています。その都度「あなたの日本語は間違っている！」と画面で指摘されればインタビューに応じた人もいい気はしないはずですが、これも正しい日本語を守らなければいけないという公共放送の責務なのでしょう。しかし意味の転化に関しては非常に寛大です。先日もアナウンサーが「絆を深めることが大切です」とコメントしていました。私はこの言葉を聞く度に強い違和感を覚えます。一部の辞書では「学校と家庭の絆を深める」との用例[注1]が挙げられているので、この使い方は今や正しいのでしょう。それでも私には「無学」がいつのまにか「学のない人」という意味へ転化していった過程と同じ匂いが「絆」から臭ってくるのです。なにゆえに「絆」という言葉は知らぬ間に「一体感や愛着の念を深める」という意味に転化していったのか、言葉は時代と供に変遷していくとの事実は認めるとしても「絆」の原意が曲げられていった理由を諦めなければ、私たちは知らぬ間に「絆」にがんじがらめにされてしまうことになるでしょう。

「絆」は「強める」ものです。「深める」ものではありません。私が国語を学び難解な言葉は辞書で確認をしていた四〇年ほど前は「絆」は「馬.犬.鷹などの動物をつなぎ止める綱」「断つにしのびない恩愛、離れがたい情実、ほだし、係累、緊縛」[注2]と言う意味でした。要約すれば、逃れようにも逃れがたい、あるいは逃走防止の手かせ足かせです。私たちから自由を奪う束縛です。「絆」はほどけないようにきつく縛らなければ動物は逃げ出し、子は親の言いつけを守らない不孝者となり、世の中は自由という名の放逸で統制がとれなくなってしまうでしょう。だから「絆を強める」必要があるのです。「絆」は生き物と人間、親と子、人と社会の秩序を守るための精神的物理的なつなぎ止めの道具だったのです。ところがいつの間にか「絆」から束縛の意味が抜け落ち、個人主義に陥りがちな現代人の精神的な一体感をあらわす意味へと転化していったようです。束縛を「強める」ニュアンスが排除され、博愛主義や連帯感の象徴のような言葉となった「絆」は、精神的安心感を「深める」誰もが望ましいと感じる美しい日本語に変身することが出来ました。「絆を深める」ことを日々私たちに語りかけ実践している人たちにとっては「絆」が善であり正義であることでしょう。ただ原意が「束縛」のニュアンスの強い言葉だったことはやはり心の隅にとどめておかなければなりません。私たちの自由意志で絆を深めていたつもりが、いつの間にかリーダーと言われる人たちにリードを持たれ、首輪ごとひきずり回されるような「絆」の原意へ戻る日が来ないとも限りませんから。

僧侶が出家の儀式（得度式）で述べる誓いの言葉があります。「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」（三界に生まれた者は愛する者との別れの情は断ちがたい。親子の縁を切り仏門に入ることが、恩に報いる本当の姿である）。この誓いは社会の中で出家者として生きていく意味を明確に言い表しています。出家は社会の絆を断ち切ることと同義です。親子や妻子や社会との関係を断ち切らなければ世界への真の報恩にはならなりません。恩愛の絆は断ちがたく、情にほだされ生死の流転（輪廻）を繰り返す私た

ちは、まず一度その絆を断ち切り自身が自由であることが必要です。それがお釈迦様に帰依すると言うこと。自由になって初めて世界をありのままに観ることが可能となります。ありのままに観た他者とその関係を日々の生活の中で新たに結び直す行為、それが「行い」です。剃髪し袈裟を下げ寺で法要を仕切る者が僧侶ではありません。煩悩の絆に縛られた愛着を反古にし、お釈迦様の教えに従った日々の内に他者との関係を新たに構築していくこと、それが僧侶の役割であり唯一の存在意義です。僧侶は出家によって他者との絆を一度断ち切った者、そして日々の「行い」によって他者との関係を新たに結び直し続ける者でなくてはなりません。

お釈迦様は「(前略) 愛する人も憎む人もいない人々には、わずらわしの絆が存在しない。」注3語っています。この愛は絆に絡め取られた執着や愛欲です。この愛を断ち切ったときに初めて仏さまの慈愛は私達のものとなることができるでしょう。このほかにも「怨みの絆にまつわれて」「人間の絆を越え」「すべての絆を離れた人」などの言葉が出てきます。「絆」を断ち切らなければ「苦」から逃れることが出来ないというお釈迦様の教えの言葉です。長い年月を経て「絆」は「断ち切るべき」ものから「結び深める」ものへと変質していきました。人は絆と絶縁することが不可能と諦めたか、絆に縛られている方が快適と達観したか、いずれにしても絆を操ろうとしている人達に私達の絆の先端を渡してはならないことは確かなはずです。

注1：新明解国語辞典（三省堂）注2：広辞苑第4版、日本国語大辞典（小学館）　注3：「ダンマパダ」211偈

狂言綺語七十九・眼差し

この二ヶ月足らずの間に、会社時代の同僚二人から早期退職に関する相談や報告を受けました。定年まで二年を残して早期退職し今までと全く違う生活をはじめたこの私の、何が彼らの参考になると思ったのかは分かりませんが、元部下の営業部長は平日の朝、新型コロナで自宅リモート作業中の東京から車を飛ばして二時間半、はるばる琉游舎まで相談に訪れました。彼の競技ポーカーの腕は日本トップクラス。海外の大会にも赴いたことがある腕前です。的確な判断力と無鉄砲な度胸、明晰な分析力と根拠のない自信という能力が矛盾無く共存する勝負師。随分私の統括する部署の売り上げに貢献してくれました。そんな彼が稀に見る好条件の早期退職者優遇制度に応募するかどうか迷って私のところへ訪れたというわけです。もう一人の彼は三年後輩、中堅クリエーティブディレクターで活躍中。若い時分は CM プランナーの同僚としてクライアントの困難な要望に応えるためによくスタジオで徹夜をし、私が営業に転じてからはプロデューサーとクリエータという緊張関係の中で仕事をしてきた仲でした。その彼から先日、十二月一杯で早期退職し、故郷の兵庫で親の面倒を見ながら家業の農家を継ぐとのこと、また合わせて中小企業診断士の資格を取得したので今までの経験を地元企業の支援に生かしたいとのメールがありました。過去の延長線上ではなく全く未知の世界の農業をゼロから始めながら、積み上げてきたノウハウも広く役立てたいという志は、形は違えども、私が会社生活で蓄積してきた経験知と仏教の教えの統合の試み、―助け合い組織「コリーナシップ」と集いの場「琉游舎」―を始めるために、過去の絆を断って四年前コリーナに居を構えたことと重なるものがありました。

二人とも仕事上の関係だけで退職後は音信不通だったため、突然の相談と報告に驚きました。もし私の今が、善し悪しは別にして何らかの参考になるのならばこれもまた私の日々の行いの一つです。私に出来ることは真摯に彼らの言葉に耳を傾け、ひたすらその声から観えてくるものを観るだけです。袋小路に入らない限り道は右も左もどちらに行っても正解のはず。例えば勝負師の彼の右に行った先は一匹狼の未踏の道が続き、左は定年までの安定した生活があります。彼の迷いは、今の安定が十年後の定年の先も死ぬまで続くのか、退屈ではないか、それを自分は望んでいるのか。ならば今会社が提示する好条件を受け入れて、勝負師の世界に打って出るか、ということです。彼の名誉のために付け加えると勝負師と言っても非合法の賭博の世界では決してありません。東京大学教育学部卒業の彼は公営ギャンブル、競技麻雀、ポーカーなどの合法的な勝負の世界で勝つためのノウハウを理論的に構築し文書やコンサルとして依頼主に提供していく仕事を考えているようでした。私への話の中で、進むべき左右の分岐点にさしかかるとどちらが正しい道なのかを幾度となく問われました。私はそちらは回り道になるのでは、こちらはまだ方向転換できる時が必ずあるよ、そこは行き止まりかもしれないね、と彼の声から私に観えてきた道の先を示すことだけで、どちらが正解だと答えることはできません。歩くのは私ではなく彼だからです。彼は三時間の話の末に、いずれ時が来るが今がその時ではないと判断し、会社に残ることを選びました。農業を選んだもう一人の彼は今がその時でした。その大きな分岐点での決断の先で、いずれまた小さな分かれ道に遭遇することでしょう。その時のために彼は私を同行の士とみて現況をメールしたに違いありません。直接の言葉や体験だけでなく、どこかで自分の行いを知っている人、観ている人がいる、そう思えるだけでその歩みは自身に満ちたものとなるでしょう。

もし私が彼らの歩みをどこかで観ている人であるとするならば、それはお釈迦様が私を通して彼らに眼差しを注いでいるからなのです。私が今をありのままに躊躇することなく歩むことができるのは、常にお釈迦様が私の行いを観ていて下さるという確信があるからです。「アーナンダよ。[注1]今までも、私の死後も、あなたたちは自分を頼り、法を頼って生きていきなさい。他に寄りかかることなく自分と法とを頼りとして生きる者は、最高の境地にあるだろう。真理を学ぶ心があり修行を続ける者は、誰であってもこの境地に辿り着くのです」お釈迦様が亡くなる直前の最後の旅を書き綴った「大パリニッバーナ経」[注2]第二章の最後の言葉です。とても感動的な経典で私の大切な経のひとつです。「自分と法とを頼りとして生きる者」とは「自灯明」と「法灯明」の指し示すところに向かって自らの足で歩み続ける者のことです。法灯明はお釈迦様の教えであり私達の行いを観ていて下さる眼差し。自灯明はお釈迦様への信とありのままに観る日々が示す行いそのものです。この二つの灯明が私達を「安らぎのところ」へと導きます。お釈迦様の眼差しは勝負師の彼や農業を選んだ彼の言葉や行動を通して私にも注がれます。互いが語り合い行うとき、その眼差しは互いの言葉と行いを通して互いの歩む道に注がれるのです。これが自灯明と法灯明を頼りに生きることなのです。

冬の朝五時頃北の空を見上げると、視線の先に柄杓の形をした北斗七星が輝き下に目を向けると北極星が不動の光を放っています。夜道や海道を進むとき北極星は無数の人たちの指針となります。北極星と私たちの互いの眼差しが出会ったとき、人は安心してその光に導かれるままに進むことが出来るのです。お釈迦様のまなざしに出会うことは北極星に出会うこと同様難しいことではありません。日々私たちが暮らす日常には絶え間なくお釈迦様のまなざしが誰にも平等に注がれています。ただ私たちはそれに気付いて

いないだけなのです。今日道端であいさつを交わした人も、電線で鳴くカラスも、コンビニのカウンターの人も、今日もジャレついて飛び跳ねる犬も、皆その先にはお釈迦様の眼差しがあります。新たな年は昨年以上にその眼差しを全身に浴びることのできる豊かで安らかな日々を送りたいと願い誓い行っていきます。本年もよろしくお願いいたします。

注1：釈迦の侍者、常に説法を聴いていたことから多聞第一と言われる、注2「ブッダ最後の旅」岩波文庫

狂言綺語八十・縁

駅伝は日本発祥の競技です。日本以外の国にも普及させようと、国際陸上競技連盟公認の大会が日本で開催されていたこともありましたがいつの間にか立ち消えとなり、現在日本以外ではほぼ実施されていない極めて日本的な競技です。柔道、競輪、空手も同じく日本発祥の競技ですが今では世界中の人に愛されオリンピック種目にもなっています。一方駅伝は世界に普及しませんでした。何故でしょうか。私はその理由を箱根駅伝の復路スタート風景とゴール地点の読売新聞本社前にみて取りました。以下私の記述は正月の風物詩、箱根駅伝を貶め否定するものではありません。何故これほど日本人に愛される競技が世界では見向きもされないのかという理由は、お釈迦様がそこから逃れることが悟りへの道だと教えていたそこへ、日本人はまたいつのまにか嬉々として舞い戻ってしまっている理由と底流で繋がっていると私は考えているからです。

復路は前日のゴールタイム差に応じた一人ずつでの時差スタート。数秒前からコールが始まり、5秒前4，3，2，1、そして0秒と同時にランナーの前の小旗がさぁ行け（ハイド―）とばかり振り上げられ、人は手繰り寄せられるように道に駆け出します。襷をゴール地点までどのチームよりも早くつなぎ切ることが目的の競技。たった一人で道に押し出されるランナーは孤独に見えますが、実は襷という手綱で次のランナーへと結ばれていくのです。手綱を操るものは絆という名の一体感。ランナーを介して見えざる騎手（絆）が手綱を操り、箱根から東京大手町まで一本の綱が強固につながれています。そのスタート光景は不謹慎かもしれませんが私には次々と馬場に押し出される競走馬に見えてきてしまったのです。その襷を受け取ってしまったからには道を外れることも休むことも許されず、ただ絆に縛られてゴールを目指すしかないランナーたち。自分の為に走るのではなく襷をつなぐために走ることが喜びと教えられたランナーたち。襷の絆はいつの間にか馬などの動物を繋ぎ止める束縛の綱に見えてきてしまいました。絆（ほだし）を打たれた彼らを引っ張っている先端はゴールの大手町読売新聞社前に設置されている「絆の像」に繋がれていました。これは九〇回目の箱根駅伝を記念したモニュメントだそうです。台座には大きく「絆」と刻まれています。

前々回「絆（きずな・ほだし）」について書いたので、言葉の原義については再度述べませんが、日本以外の国がこの絆のリレーを好まないことは容易に理解できます。彼らの歴史は、奴隷からの解放、移動や経済活動の自由、人権の獲得など、束縛する絆から自分自身を解き放つための戦いの歴史です。それは多くの犠牲によって勝ち取った人間の基本的な権利です。その権利をみすみす自分から放棄して喜んで絆の縛に就くことなど考えられません。それはスポーツでも同じです。彼らは個人能力の集積がチームの求心

力を高めると考えるのに対し、日本人はチームへの求心力（絆）が集団の能力を引き出すと考えているからなのです。

仏教は自分と何かを結ぶ絆を断ち切ることが出発点です。お釈迦様は家族や社会の絆は貪欲や愛憎や怒りを生み出す源泉と考えたのです。「絆に囚われていることがこの世の苦しみの原因です。だからその束縛の絆を一度断ち切りなさい。そして自由になりなさい。そこから安らぎの処に向かって歩き続けなさい。」お釈迦様の教えはかくもシンプルです。絆の断ち切り方、安らぎの処やそこに向かう歩き方などが各宗派の教えの違いとなっているだけです。「愛欲を浄らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、身体などを不浄であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう。」[注1]原始経典を開くとあちこちに絆が執着の原因であり心を鎮めてありのままに観じる人は束縛の絆（悪魔）を断ち切ることが出来ると説かれています。自己と他者のあらゆる関係性が物理的な絆となって行いの自由を奪い、その関係性の中で起こる執着（煩悩）が心理的な絆となって心の自由を奪っているという認識の下に、仏教は悟りの道（自由）へと歩み始めました。それは一神教の世界が、人は神の下では平等であるという「信」によって社会的血縁的関係性を解き放ち個人の自由を獲得していったことと、一見「自由」という語彙に於いては類似しているように見えます。しかし根本的な違いがあります。仏教は絆を解き放ち全き自由を獲得したところから安らぎの処への歩みが始まります。一神教は神の手元から伸びる絆に各人が固く結ばれるところから社会的自由獲得への歩みが始まります。神と人との絆が深く結ばれれば結ばれるほど、彼らは強く自由を希求するのです。

お釈迦様の教えに導かれ絆を解き放ち歩み始めた私たち仏の弟子たちは、お釈迦様が亡くなられて二千数百年を経て、今、関係性の糸を求めて彷徨っているようです。どんなに観念で関係性から自由になろうとも、生きている限り関係性の中で生きていかなければ私たちは生きてはいけません。お釈迦様は「絆」は断ち切るべきものと断じています。しかし「関係性」こそが、もののありようのまま、実相、真如と教えています。「縁りて起こる」「縁起」「縁」です。お釈迦様は「絆」の関係性から自由になり「縁」の糸によって新たに編み込まれるありのままの関係性の中を歩んで行きなさいと私たちに教えて下さっているのです。束縛の絆を深めるための日々は楽しいはずはありません。私たちが日々を楽しく豊かに心安らかに過ごす日々は、全き自由を得ることで可能となったありのままの「縁」を、拡げ深める日々そのものなのです。

言論によって社会を制御する機能を持つ機関にとって、「言葉」は命そのものです。新聞社の前に置かれた像の「絆」の文字は言葉の誤用か、意味転化の推進か、絆で社会を制御したいという本音か。関係性の根本にあるものが自由（縁）か束縛（絆）か、それは平等か服従かということと同じです。「言葉」を殺してはなりません。

注1「ダンパダ」３４９．３５０岩波文庫

狂言綺語八十一・書簡

年賀状に代えて寒中見舞いを出すようになって四回目の冬を迎えました。会社員時代に親戚友人の他に

上司部下得意先へ会社・個人名義を合わせて出していた四百通ほどの賀状は、宛名と文面は印刷でも一言添えるために労力と時間が大分割かれたことを記憶しています。賀状を出すことは半ば仕事であり義務と化していたのでしょう。今はもちろん義務で出す必要のない私信ばかりの賀状を頂き、寒中見舞いを送っています。そんな中、仕事を離れても頂くかつての仲間や友人からの賀状は嬉しいものです。クライアントの部長だった二十歳年上の方からは「昔も、今も、ハシゴ好き、昔は飲み屋のハシゴ今は病院。」という三十年来変らぬ自虐的かつユーモラスな賀状を頂きました。数年前に旧東海道を徒歩制覇していた家族は、今は日光街道にチャレンジしているようです。赤ちゃんはいつの間にか少年に、少年はいつの間にか青年に、「とうとう隠居しました」「最後のご奉公で農業委員会の会長をやります」「丑年なので今年は牛首山の写真です」「お店たたみました」「まだシブトク生きています」「いまだに現場・現役」三六五日間の皆さんのありのままの日々と、私の行いの毎日の間に往返信を介して、一年に一回ですが確かに一本の縁の糸が引かれているのが見えます。

面と面を向かい合わせて行う対話は、言葉の他に表情や声色間合い仕草などの身体すべてが伝達の道具となります。「電話やメールで済ませるな、すぐ行って謝ってこい」これは謝罪の基本です。早朝会社の開門前に門前で謝罪相手を待て。そんな昭和時代の会社員心得を伝授された私には、何でもメールやズーム会議で済ますことを良しとするコロナ時代のビジネススタイルに順応することは恐らくできないでしょう。距離や時間の障壁ですぐに面会できない時、かつては手紙を書きました。まだワープロが一般化していない時代は企画書も謝罪文も肉筆です。フォント（活字）に感情や情感を注入することは難しいことです。肉筆にある文字の躍動感や落ち着き、乱れや書き損ないにもそこに書き手の精神状態や意志が現れてくるに違いありません。とはいえ現代人は肉筆文字を書く機会が少なくなってしまいました。かく言う私も年に一回の寒中見舞いに書き添える文言以外に、悪筆を言い訳にして肉筆文をしたためることはありません。そんな希少機会でも年に一回頂く賀状に添えられた肉筆の一言から伸びる縁の糸を、私は今年も有り難く受け取りました。

お釈迦様もキリストもソクラテスも孔子も本人たちは教えを文字に残しませんでした。直接対話を交わすことのできる範囲が活動区域だったのか、あるいは文字の使用が広く行き渡っていなかったことや、紙や筆が手に入りにくかったことが理由でしょうか。今に残る彼らの言葉は弟子たちが口伝し後に文字にして今に伝えてくれたものです。お釈迦様の伝道方法はひたすら歩き旅をし対話することでした。托鉢遊行のスタイルです。教えの伝達はどのような宗教や思想であれ、まずは足によって伝えられ始めたのです。この足による伝道の手段に書簡という新たな方法が加わった事情は、直接対話できない遠隔地の信者が持った、流布するまた聞きの教えへの疑問に答え、仲間割れや誤った解釈などを糺し誡める必要があったからでしょう。例えば新約聖書に集録されているパウロの心のこもったローマの信徒やコリント信徒への手紙が代表例です。

信者以外にはあまり知られていませんが、日本でも親鸞聖人や日蓮聖人の書簡集が宗祖の重要な教えとして読み継がれています。親鸞が弟子たちに送った書簡の四〇通ほど、日蓮は三百通もの書簡が残されています。また驚くことに、日蓮の真筆の書簡は現在も多数保管されています。七百年以上も前に頂いた手紙を今に至るまで虫に食われることなく大切に受け継がれてきた事実は、その中に書かれている教えを忠実に守り受け継いできたという証拠に他なりません。自分の考えを整理して執筆された書物形式に比べて、

その手紙を書かなければならなかった状況の緊迫感や動機などが迫真を以て文字とともに後世の者にも強く訴えてきます。

親鸞、日蓮の書簡に共通することが二点あります。「この文をもて、ひとびとにもみせまいらせたまふべく候」[注1]「一切の諸人これを見聞し、志あらん人々は互いにこれを語れ」[注2]二人とも代表者宛に送っていますが、この内容をみんなで回し読みして語り合いなさいと言っています。もう一点は「方々より御こころざしのものども、かずのままに、たしかにたまはりさふらふ」[注3]「雪のごとく白く候白米一斗。古酒のごとく候油一筒。御布施一貫文。わざわざ使者をもて盆料送給候」[注4]いずれも布施として頂いたものへの御礼から手紙が書きだされています。鎌倉時代になって仏教は初めて庶民のものとなりました。それまでは朝廷や貴族たち権力者のためのものでした。朝廷に正式に承認されていた僧侶は主に精神面から国家守護を担う祈祷担当公務員だったのです。しかし祈祷では民衆は救われないことを当の民衆はよく理解していました。戦乱、飢饉、自然災害、疫病が続く中で、民衆は自分たちの精神的リーダーを切に望み、自分たちのリーダーに直接疑問点をぶつけそれに対する回答を得ることで、「信」を強固にしていきました。書簡を通して双方向の縁の糸が太く長く強く編み込まれていったのです。自分たちのリーダーとの縁の太い糸を仲間たちで共有することは必然です。そしてその縁に感謝しお礼を差し上げる行為もまた必然です。親鸞、日蓮の書簡に共通する二点は、彼らの宗教が民衆からの切なる願いから必然的に生まれたことの確たる証しと私は考えます。

言葉は生き物です。言葉のやり取りによって理解し合いそれが行動となった時に初めて言葉は命を持ちます。一方的な言葉は理解や共感を生むこともなくわたしたちの頭上を虚しく通り過ぎて行くだけ。それは言葉が死んでいるからです。今、為政者がどんなに要望や自粛を語っても誰も死んだ言葉と縁を結ぼうとは思いません。言葉の力を信じている者同士は、賀状の簡潔な言葉にも縁を結べるのです。それは言葉が命を持っている証しなのです。

注1・3：親鸞「末燈抄」注2：日蓮「法華行者値難事」注4：「四条金吾殿御書」

狂言綺語八十二・しもつかれを継承する

初午の日に作る「しもつかれ」という郷土料理が栃木県にあります。今年は立春がその日に当たっていました。節分に撒いた大豆の残り、正月用荒巻鮭の最後まで残った頭部、初冬に収穫して保存食として土中に生け込んでいた大根と人参は鬼おろしで粗くすり下ろす、それらをごちゃ混ぜにして酒の絞りかすで煮込む料理。調味料は使わず、鮭の頭から出る塩分と酒粕で味を調えます。これが基本のレシピです。家庭によっては油揚げや里芋を入れることもありますが、要は冬の食料が少ない時期に正月の残り物と保存した根菜をいっぺんに整理する合理的で栄養価の高い家庭料理です。初午の日に稲荷神社に供える行事食とも言われているので、稲を象徴する農耕神・穀霊神へ収穫の感謝をし豊作の願いを込めて供えた料理なのでしょう。

しもつかれを七軒分食べると無病息災と言う俗言があります。家々で異なる伝統の味があり、またバランスのよい栄養が摂れる食べ物であることがよく分かる言葉です。しかし独特な味や香り、その外見から、

好き嫌いが激しく分かれる食べ物でもあります。まずは全く食欲をそそらない見た目、そして酒粕の発酵臭と鮭の魚臭い香り（匂い）、最後にどろっとした食感。初めて食べる人のほとんどは恐る恐る箸を付けて、一口含んでそのままそっと箸を下ろし、二度と箸を取ることはないでしょう。私が幼少の頃、ご近所からお裾分け頂いたしもつかれが毎年食卓に並びましたが、二度と箸を付けることはありませんでした。ところが今では私の大好物です。二月は毎日食卓にしもつかれが並びます。為に初午を待ちきれずに一回目を作り、店頭に鮭の頭が並んでいる間はもう一回、妻にせがんで作ってもらいます。朝食は日本一美味しい地元産の米と、夕食はこれも日本一美味しい地元産の日本酒を友に食します。米と酒としもつかれのある至福の食事時です。

私の帰依する法華経は「永遠のいのち」を語る経です。私は僧侶ですから、法要の最後に法話をします。そこで語る要旨は次のようなものです。「私たちはいのちを肉体の生とだけ考え、それが滅びることを死と呼んでいます。それは悲しくつらいことですが、残されたあなた方は親しい人の死で千路に乱れた心を両手にすくい取り胸の中に収めて下さい。それが合掌です。その時、肉体として滅びたいのちは、今あなたの中で永遠のいのちとして引き継がれていくのです。」親しい人の死にあたって、人は哀しみに溢れると同時に心に様々な思い出や感謝の念がわき起こってくるでしょう。この気持ちこそが残された人々の胸の中に新しいいのちが生まれるということ、そしてそれが引き継がれていくことが永遠のいのちなのです。これは思い出だけに限りません、遺伝子も財産も技術や知識や思想もすべてひっくるめて人が受け継いできたものを次の人に引き渡すということなのです。法華経の教えはそれを人間だけのこととは考えません。その思想が日本に至り「山川草木悉皆成仏」という独特の仏教思想に結実しました。これは法華経の「永遠のいのち」の思想と、自然との共棲（自然の中に八百万神が居る）という日本固有の思想が融合されたものといわれています。人間だけでなく生きとし生けるものすべて、鳥も獣も虫けらも草も木も山も石ころも雨も風も、それぞれのいのちを生きている（それぞれの役目を果している）、そして互いが依存し合いお互い様の中でいのちをつないでいるという考えです。森羅万象すべては、仏の声、姿、いのち。つまり仏そのものなのです。

話が飛躍するように感じるかもしれませんが、しもつかれに見向きもしなかった私が、今やしもつかれの美味しさを私の体と声を通して次に引き継ぎたいと考えるように至ったことと、法華経の永遠のいのちの語るところは実は全く一緒なのです。仏教の教えは何か小難しく近寄り難いものと思われるかもしれませんが、その教えは私たちの毎日の生活の中、起きて食べて働いて寝るという変哲のない毎日を生きることにあるのです。森羅万象がすべて仏であるならば、その中で私が生きていくということは永遠のいのちを継ぎ、次に引き渡すことです。例えば私がしもつかれの美味しさを継承したいと考えたとき、それはしもつかれの存在だけでなく、その食べ物を育んだ水や風から、土、生き物、植物、人、信仰、記憶、精神、ブランド、レシピに至るまで、しもつかれが纏ってきたいのちをすべて継承するということです。それをそのまま寸分違わず引き継ぐならば、私という人間はただの媒介物でありいのちを継承する者ではありません。私の身体を通して多くの人にもっと深く広くこのいのちを伝えたいと考え実践していくことが永遠のいのちの継承です。

お釈迦様の教えも、誰かの言葉を私がただそのままオウム返しで伝えることには意味がありません。それは私の日々の行いを経ていない、私のいのちを素通りした言葉だからです。仏教に対して何か高尚な理

論を有難り、画期的な御利益を期待し、見返りの功徳があると考えるならばそれはお釈迦様の教えではありません。私たちは森羅万象の一員としてこの世に存在している役割をしっかり果たさなければなりません。それは継承した様々な永遠のいのちを独り占めすることなく、自分自身の行いを通して惜しみなく次に引き渡していくことです。たまたま預かった仏さまからの預かりものを一時でも身に纏ったならば、それを損なうことなくきちんと洗濯し折りたたんで次の方に喜んで纏っていただくこと、それが安らぎの処へと歩む行いなのです。私の所有物などというものはどこにもありません、すべては森羅万象（仏）の預かりものです。

考えれば今の私の手元はまだまだ仏さまからの預かりもので一杯です。預かった言葉や知識は、私の身心を経ていない内はまだ皆さんにお渡しできる代物とはなりません。皆さんに喜んで受け取ってもらうために、当たり前の日々を、倦まず、焦らず行い続ける必要があります。数多の人の舌を経てたどり着いた我家のしもつかれも、喜んで継承して頂けるものかどうか今晩も明日も私の身心を経る確認の日々が続きます。そしてそこには必ず地元大槻の地酒がそばに寄り添ってくれています。合掌

狂言綺語八十三・権威と権力のすき間

世の中がコロナとオリンピックで喧しい中、去る二月一六日は宗祖日蓮聖人のご誕生日でした。千二百二十二年（承久四年）現在の千葉県の太平洋に面する天津小湊町にお生れになり、今年が生誕八百年の記念の年にあたります。この前年に承久の乱がありました。後鳥羽上皇が武家から政治権力を取り戻そうとして仕掛けた戦乱ですが、結局鎌倉幕府側の勝利に終わり、以後朝廷は権力で政治を支配するのではなく、権威で政治や日本人の精神に君臨する役割となり今日に至りました。政治権力者は執権の北条氏でしたが、権威上は朝廷から任命された征夷大将軍を鎌倉幕府に迎えその下で執権が政治を司っていたのです。権力上は北条氏が最上位でも、日本の権威者は天皇であり摂関家から派遣された将軍が幕府の最高権威者です。彼が生まれた時代は新旧の権力と権威が入り乱れた混沌の時代だったのです。仏教界も国家の安寧を祈願する旧仏教と個人の救いを実現する新仏教が烈しくせめぎ合い、仏教の存立基盤が問われた宗教革命の時代でもありました。

現代日本の最高権力者は憲法に「主権在民」とあるように、建前上は国民が日本国の権力を持つと規定されています。名目上の権力者である国民の投票で選ばれた国会議員のそのまた投票で、実質的な権力者総理大臣が選ばれます。民主的な手続きの有無はさておき、今も昔も建前（権威）と実質（権力）の構造が、私には同じように見えてしまいます。朝廷（国民）→鎌倉幕府（国会）→執権（首相）と重ね合わせれば、権威は上へ上へと棚上げされ権力から遠ざけられるに従い、実質的な権力者の権力独占が強まっていくようです。朝廷は精神的権威を継承する有職故実の世界に安住し、権力を求めないことで存続が許され、戦後の日本国民は Screen（ハリウッド）Sport（プロスポーツ）Sex（性産業）を用いて大衆の関心を政治に向けさせないようにする 3S 政策（GHQ＝米国の日本人を骨抜きにするための占領政策といわれる）により、権力の行使である選挙に全く興味を持たせないように飼い慣らされました。名目上の権威（朝廷・国民）と実質的な権力（執権・首相）の二重構造の距離が拡がれば広がるほど、今も昔もそのすき間に災難が

入り込んできます。

「旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地夭・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち広く地上に迸る　牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え云々」日蓮聖人が一二六〇年に幕府に上呈した「立正安国論」の冒頭の言葉です。吾妻鏡[注1]には毎年のように日照り・地震・暴風雨・洪水・疫病の記事が絶えません。特に一二五七年の大地震はまことに凄まじいものだったようで「戌の刻（午後八時）大地震。音あり。神社仏閣一宇として全きことなし。山岳頽崩、人屋顛倒し、築地みなことごとく破損し、所々地裂け、水湧き出づ。地裂け破れその中より火炎燃え出づ」と記録されています。息つく間もなく鎌倉周辺は天変地異に襲われ、飢饉と疫病で牛馬は斃れ伏し、人の骸骨が道に溢れ、大半の人が亡くなる有様でした。一方時の権力者北条時頼は中国から渡来した禅の高僧蘭渓道隆を鎌倉に招き有名な建長寺を建立して彼に与えるなど、神社仏閣は鎌倉中に立ち並び、幕府の保護を受けて仏教はますます興隆しているように見えました。

仏法が盛んな国で何故かくも庶民を苦しめる災害が次々に起こるのか、日蓮聖人はその答えを一切経（釈迦の教説にかかわる経・律・論の経典の総称）に求めました。論理構成をすべてそれに負っているため、現代からみれば科学的根拠のない檄文と見えるかも知れませんが、彼は「日本国で次々に起こる災難は人々が正法に背き悪法に帰依したことが原因。国家滅亡の危機に瀕している今、仏法存続の基礎となる国土と人民の安穏を祈らなければならない」と論じた、当時まれに見る合理的な書です。かつて仏教は最高にして唯一の学問体系でした。それを駆使する僧侶は当代随一の学者であり社会改革者だったのです。その彼の理性的合理的提案はことごとく無視されました。各寺々で怨敵・災厄退散の祈祷が盛んな中、それは過ちだ、正法による正しい政治（祈り）を行いなさいと諫言する人の言葉を権力者は聞けるものではありません。現代でも自然災害に関して人はほとんど無力です。鎌倉時代は尚更です。その自然に権力を行使しなさいと要求されても、幕府は握りつぶすか反逆者と罰するほかないでしょう。権力にとっては現在の権威維持が最重要なのに、個人救済のためにそれを否定せよといわれても聞く耳を持たないのは言うまでもないことなのです。

十年前の震災以来日本を頻繁に襲う台風や洪水噴火などの災害は、コロナ禍を頂点として八百年前と同じ状況を呈しているように思えます。自然災害に対する無力を「想定外」という言葉で正当化して災難を何とかやり過ごそうとしている姿勢は、日蓮聖人の諫言を無視し、実効性のない加持祈祷が最善の道と民衆に信じ込ませた方策と同じです。人の反発や抵抗は想定できても自然の怒りは想定できません。だから「想定外」は加持祈祷と同じように疫病や地震を防げなかったとことを正当化できる都合のよいおまじないなのです。

権威と権力が一致しているならば、危機にあたっては必死になって解決策を考え実行することでしょう。でなければ責任を問われ権力を失うこととなるからです。鎌倉時代の権力者はその解決を仏教権威の加持祈祷と二，三年の短期間で繰り返される改元（元号を新しくする）に委ねました。改元は天皇の専権事項、朝廷の権威を借りて疫病、兵乱、天変地異といった災厄から人心を一新しようとしたのです。権力が権威に災害の解決と責任を肩代わりしてもらい、自らの無作為を正当化しているということです。このすき間に災難が次から次へと入り込んできます。今も同じです。国民に自粛と自助を委ね、祈祷に代えオリンピックで災厄を退散させようとしている権力のやり方は、権威と権力の二重構造を容認し使い分けてきた日

本のありのままの姿です。これが日本の基盤であるならば、権威と権力の程よい距離感を計測する物差しを早急に手に入れ、自助により自らを災厄から守ることが肝要と考えます。

注1：鎌倉時代の歴史記述書

狂言綺語八十四・主客両眼

立春を過ぎてから三寒四温を繰り返す日が続きます。雨の日が周期的に訪れるようになり、気温の変化も日ごとに大きくなってきました。二月二八日の最低気温はマイナス 8.2 度注1でしたがその二日後は 4.4 度、なんと最低気温の差が 12.6 度もあったのです。最高気温も一番高い日が 20.7 度で低い日が 4.3 度、その差は 16.4 度です。まだ冬と思われるこの1ヶ月間で真冬から五月初め頃の気候まで一気に味わえるほど、気温の乱高下が激しい今年の冬でした。そんな中でも春は確実に訪れています。ちょっと油断していたら花開いてしまった蕗の薹。杉花粉がベランダを黄色く染め、啄木鳥の木をつつく音が聞こえはじめたのは二月の中頃。そして二月二六日に鶯の初鳴きを聞きました。今年はちょっと遅かったかなと日記をひもとくと昨年は一九日でした。とは言っても私の耳目の届く限りの記録ですから正確性に欠けます。そこで気象庁の「生物季節観測情報」を閲覧してみました。これは桜の開花日や鳥などの初鳴き日を毎年定点観測してホームページ上で公開されているものです。参考値は二五キロほど南にある宇都宮の記録。去年の初鳴き日は三月一八日、平年値は三月九日でした。

この数字はちょっと不思議ですね。宇都宮より北の寒い場所に住む私は去年も平年値も一ヶ月近くも早く初鳴きを経験しているのです。自然環境の差が主な要因とすれば、鶯はまず私の住むこの森林地帯で鳴き方の練習をして、上手になったところで観測地の里に下りてお披露目する習性があるのではと勝手に想像したくなるような、気象庁（客観）と私の耳（主観）の差です。二月の最高・最低気温の平均値は 7.6 度・マイナス 3.9 度です。この平均値はあくまでも日々の変化や感覚を切り落とした数字であり私の毎日ではありません。私の生活の中では最高気温が 20.7 度の翌日が 4.3 度の日は、その変化に身心共について行けず、風邪をひいたり外に出るのが億劫になってしまうでしょう。気象庁のデータは地球温暖化や動植物の生育や社会生活を予測する研究の客観的な基礎資料ですが、日々私が体感する自然の主観データとは異なるものです。ただこの二つの異なるデータとの差違や共通点にあれこれ思い巡らすこともまた自然と私の行いとの対話なのでしょう。

長い年月を経て今に在る人物は、その行動と思想が数多の人の評価を受け続けていく間に、例えば私の日蓮は私たちの日蓮へそして日蓮宗の日蓮へと変容していきます。人間日蓮から教団の祖師日蓮へ、私の耳目の届く範囲で観た主観の日蓮から、厳しい時間の評価をくぐり抜け誰もがアクセスできる客観的な日蓮への変容です。「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善（法華経）に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。（中略）此の言信ず可く崇む可し」注2（法華経の教えに帰依しなさい。さすればこの世界は仏の国となる。信じなさい）と結ぶ力強い日蓮の宣言です。私はこの言葉をいきなり投げかけられてもそうですねと受け入れるほど素直ではありませんし、論証の末の結論だとしても、対案と比較するなどの精査を経てからではないと人に語ることはできません。一方こんな手紙を頂いたらどうでしょう。信者から届けら

れた芋のお礼の書簡です。恐らく「珍しくもないものですが」という口上が添えられていたのでしょう。すると日蓮の返事は「此の身延の谷には石がたくさんあるが、駿河の芋のように候石は一つも候はず」といきなりありえない「いし」と「いも」の比較をし「芋のめづらしき事暗き夜の灯火にもすぎ、渇ける時の水にもすぎて候ひき、いかに珍しからずとはあそばされて候ぞ、されば其には多く候か、あらこひしあらこひし」注3駿河の芋がどんなに珍しく有り難いものかを大仰とも思える比喩でユーモラスに語ることで感謝の気持ちを伝えています。さらに「法華経・釈迦仏にゆづりまいらせ候いぬ、定めて仏は御志をおさめ給うなれば御悦び候らん（有り難い御供養であるから法華経・釈迦仏にお譲りしました。仏は必ず志を納められお喜びでしょう）」と続けます。この様な手紙を頂いた人は法華経そのものに帰依するのではなく、日蓮の言葉と行いを通して法華経に帰依するのではないでしょうか。私の日蓮（主観）がこの手紙の中に在り、宗祖の日蓮（客観）が立正安国論の思想の中に在るならば、また「信（帰依）」が与えられるものではなく、言葉と行いによって自ら獲得するものならば、その教えと行動とを自分の身に置き換えて、今の私自身の言葉と行いにならなければなりません。ですから私は主客の両視点を持って日蓮と語り合い行い続けなければならないはずなのです。

行うことで初めて「信」を獲得できうる私にとって、数字や記録だけを眺めていても日々の生活の指針にはなりません。まずは私の耳目手足の届く範囲からです。そこからありのままの姿（実相・真如）を観ようとし行うこと、これが私の主観です。その主観は私の日蓮聖人や私のお釈迦様と語り合うことで得られるものです。歴史や思想の中に在る祖師日蓮や釈迦牟尼仏は歴史的事実や文献と同じように権威と権力と正邪の判断権を有する社会の耳目手足です。これは私にとっては客観です。宗教者は主観の人でも客観の人でもいけません。私の耳目手足がありのままに観てありのままに行うことを、社会の耳目手足で照射し、私はそれを確認し確信することが必要なのです。それが「行うことによって信を獲得する」ということです。つまり、宗教者に限らず私たちは主客両眼の人とならなければいけないということです。そのために、私の日蓮聖人、私のお釈迦様、私の自然、私の社会に「信」を置くことのできる「私」にならなければならないのでしょう。

二月中はまだ拙かった鶯の鳴き声が、今ではきれいなホーホケキョに変ってきました。昔の人はこの声を「法（宝）法華経」と記し経読鳥と呼んだようです。「口唱ひまなくせる春の田の蛙の昼夜に鳴くがごとし。ついにまた益なし（念仏や題目をただ唱えるだけでは田圃の蛙のようで益なし）」注4と唱えるだけの無益を語った道元も、私と同様、春の穏やかな心地と桜の開花を連れて来る鶯のホーホケキョには心安らいだことでしょう。

注1：気象庁塩谷町定点観測データーより　注2：立正安国論　注3：九郎太郎殿御返事　注4：道元「正法眼蔵」

狂言綺語八十五・方便

いつの間にか季節は春です。春が始まる日は人それぞれ。私の場合はベランダの手すりが花粉で黄色く染まった日、凍結防止で閉めた水道の元栓を開けた日、鶯の初鳴きを聞いた日、ヒートテックから綿の肌着に着替えた日、畑を耕し畝を調えた日、などなど今の時期は毎日が春の始まる日です。この様な始まり

の日をいくつも重ねることで、私は私の春を次々と身に纏っていきます。それは昨日の冬を脱ぎ捨てていくことでもあるのです。季節を移ろいとともに身に纏い脱ぎ捨てていく、この繰り返しが日々を過ごし年を重ねていくことならば、六十三回目の春を身に纏おうとしている私は、六十二回の春夏秋冬を執着も後悔もすることなく軽やかに脱ぎ捨てることができてきたでしょうか。それは日々の行いが教えてくれることに違いありません。

あまりテレビを見ない私がたまたま国会中継を見ていたときのこと、そこでは自分の過去を脱ぎ捨てることに失敗したのか、他人の過去まで背負わされて身動きが取れなくなったかつてのスターが参考人として答弁をしていました。総務省の接待問題で国会招致された衛星放送会社の社長は、私が駆け出しのCM企画者だった四十年前は、一度は演出をお願いしたいと誰もが思い描くCM業界のスターディレクターでした。多くの広告賞を受賞する中で最高権威を誇るカンヌ国際広告祭（有名な映画祭の広告版）グランプリを受賞した時は広告業界も私も大きなインパクトを受けたものです。この会社は外国テレビ映画の日本語吹替から始まりコマーシャル制作会社として成長してきました。会社の躍進を演出家として支え、経営陣として事業拡大の一翼を担った結果の社長就任、そして国会での答弁。縁なく一度も演出をお願いする機会はありませんでしたが、演出したCMは自分の仕事の参考のために必ず研究していました。その彼の、嘘を嘘として肯定し表情ひとつ変えない答弁に半ば感心しながらも、方便を超越した「嘘」の難攻不落の構えに驚かされました。

テレビCM草創期に大活躍した伝説の演出家[注1]は“リッチでないのにリッチな世界などわかりません。ハッピーでないのにハッピーな世界などえがけません。「夢」がないのに「夢」をうることなどは……とても嘘をついてもばれるものです”という遺書を残して自殺しました。私が広告業界に入る十年ほど前のことです。広告の本質を突いた言葉です。「～でない」という否定を「～でありたい」という願望の言葉に直せば絶望は希望にかわります。豊かで幸せで未来に夢を持ちたいという願いがあるからこそ、豊かで幸せな未来像を描くことができるのです。嘘の世界を描くのではなく、未来に実現するであろう世界を信じて描くことが広告表現の役割です。かの演出家は自分の「リッチ」にも「ハッピー」にも「夢」のどれにも「信」を置くことができず、逆にそれを「嘘」と信じてしまい、それを「方便」と信じられなかったことが彼の不幸でした。

重要な仏教用語のひとつに「方便」があります。サンスクリット語のウパーヤの訳語で「近づく、到達する」の意で「巧みな手段」とも訳されます。仏教の教えや実践は私たちには難しく理解も実行も困難なものです。それを親しみ・分かり易くその人の進度に合わせて示し、最終的に仏教の教えの本旨まで導く方法を「方便」と呼ぶのです。よちよち歩きの幼児の歩みに見えるかも知れませんが、その歩みはお釈迦様の巧みな手段に導かれて、確実に法灯明の指し示す所（安らぎの処）に向かっていきます。それがそれぞれの日々を生きていることであり。自灯明の照らす所を行い歩むと言うことです。私たちは自らの考えや計らいによって日々を生活していると思っているかもしれません。しかし私たちお釈迦様の弟子は、ありのままの毎日がたとえどんなに拙く難しい歩みの日でも、その一日もお釈迦様の与えてくれた方便の日々と信じることで、安らぎの処へと歩み続けることができるのです。「方便」はお釈迦様の与えてくれた道しるべなのです。

「方便」は今や「嘘も方便」という文脈で使われることが大半だと思います。目的のためならば正邪・善

悪を問わず、嘘も便宜的な手段として認められる?という言葉です。仏教用語は人口に膾炙する間に本来と異なる意味になってしまうことがよくあります。僧侶たちは「方便」と称して信も行も伴わない教えをもっともらしく語り続けてきたのでしょう。お釈迦様の教えを信じていないからこそ語ることのできる僧侶たちの「嘘も方便」の言葉です。かの伝説の演出家は自分の作る広告が人々を幸せの処に導く「方便」と信じることができず、ましてや「嘘も方便」とうそぶくこともできず、唯一残された絶望を選択してしまいました。私は広告人であったときは広告の持つ方便の力を信じ、表現に豊かさと幸せの実現の願いを込めて制作してきました。これはビジネスに携わる私の「願い・誓い・行う」ことだったのです。今の私は安らぎの処に常住することを「願い・誓い・行う」宗教人です。私のこの変身は「信行一致」と「誓願」がある限り矛盾無く成立するのです。私は広告の衣装を脱ぎ捨て、お釈迦様の教えの衣を身に纏っただけなのですから。

私は伝説の演出家の絶望を理解し共感します。ただ絶望に止まってしまいそれを希望に変える「信」を見つけることができなかったことが悔やまれます。一方、国会で答弁する演出家には共感はできませんが、驚愕を覚えます。「嘘も方便」という迂遠な方法を取らずに嘘を目的としてしまっていることにです。本来嘘は手段です。目的はその人にとっては「真」ですから、私がそれを嘘を真に変える詭弁強弁と非難しても当の本人の目的である「嘘」はそれ自身「真」なのです。外部がいくらそれは不当と騒ぎ立てても目的の正当性を信じている人達にはなんの痛痒も感じないはずです。広告を嘘の手段と見て自殺した人、片や広告は嘘が目的と喝破してCM業界に一時代を築き、今もその信念を実践する人、その両人の間にある私は「方便」をお釈迦様の与えてくれた道しるべと信じ、六十三回目の春もありのままに身に纏って歩んでいきたいと思います。

注1：杉山登志（1936年-73年）

狂言綺語八十六・天上天下唯我独尊

晩秋はひと雨ごとに寒くなり木々の葉っぱを落としていきますが、初春はひと雨ごとに暖かくなり雑草を生長させていきます。冬の風で北東側に吹きたまっていた枯葉はいつの間にか南風で崖の北斜面へと追いやられていきました。最近まで枯葉を片付けなくてはと気にかけながらもほったらかしにしていた吹きだまりは、あっと言う間に解消です。さてこの様子を見るにつけ、冬期休戦状態だった雑草との格闘は再開するよりも放置しても時が来れば枯れるはずと諦め、雑草と共存和平協定を結んだ方が得策のようにも思えます。

梵天勧請という有名な説話があります。お釈迦様は悟りを開いたとき、その崇高な教えを人々に伝えるのは困難で教えることは無理だと断念したのです。しかしインド古来の神様梵天が、お釈迦様の前に現れ何とか人々にあなたの悟った教えを説法してくださいと懇願しました。その願いを聞き入れてお釈迦様は自分の「信」を私たちに「信ずべき」こととして語りました。この梵天勧請があったからこそ、こうして今もお釈迦様の教えを受け継ぐことが出来ているのです。しかしお釈迦様自身の「信」は彼の経験と思惟と人格の総体、つまりその存在がありのままに受け入れることの出来た彼だけの唯一無二の「信」です。で

すからお釈迦様の「信」は本来お釈迦様だけの「真」なのです。その「信」を私たちが「信ずべき」こととして受け入れたとき、お釈迦様だけの「真」は、私たちにとっても「真である」ことが求められるようになりました。

ありのままの他者をありのままに受け入れるということは、他者と自己が完全に同一化すると言うことです。僭越な喩えですが、私がお釈迦様の「信」をありのままに行うことは私自身がお釈迦様になるということです。それは不可能です。なぜなら私はお釈迦様の行いをそのままに行うことが出来ないからです。つまり同じ「信」を手に入れることは不可能だということです。「信」は各々の「行い」と一体の唯一無二のものなのです。だから私たちはお釈迦様の信行の結果（教え）を言葉を通してでしか受け入れることができないのです。それが「信」ではなく「信ずべき」こととしてお釈迦様を信じるということです。私たちはお釈迦様の「信」を「真」と受容するのではなく、万民共通の絶対的な「信ずべき」ことを不動のものにするために、お釈迦様の言葉を真であると信ずべきであることが求められました。この時お釈迦様は私たちの同行者、善友（善知識）から教祖様となりました。果たしてこれはお釈迦様の望まれたことだったのでしょうか。

仏教は歴史の中で「信ずべき」お釈迦様の言葉を次々と創出してきました。彼の説いたと言われる膨大な数の経は、ほとんどが名前を借りただけの後世の創作です。仏教は個人の創造物ではなく宇宙の大いなる真理がたまたまある人物（お釈迦様）を通して語られたに過ぎないと考えたとき、実在の人物それ自体に意味はなくなり、概念としてのお釈迦様や神格化されたお釈迦様が求められるようになるのです。そこで仏教徒が出来る唯一のことは「真であると信ずべき」お釈迦様の言葉から始めて、自分だけの「信」と「行い」を不断に実践することで「真」へと歩み続けることだけなのです。それは各々が独自の安らぎの処に辿り着くための日々を生きるということであり、ひとりひとりが仏さまになるということそのものなのです。念仏や題目や真言をいくら唱えても、仏像を拝み、厳しい修行や、布施をたっぷりしても決して仏さまになることはありません。そこでは「真であると信ずべき」ことをただ盲信して自分だけの「信」と「行い」の実践を放棄しているだけだからなのです。「信ずべき」お釈迦様の教えは仏の道の門前です。そこに止まっている限り門の先は暗闇です。しかし一歩踏み出した瞬間そこには安らぎの処が開けてくるに違いありません。

お釈迦様は生まれてすぐに七歩歩き、右手で天を左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と言ったとされています。この言葉、素直に読めば「この宇宙の中でただ私一人が尊い」ということでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんがすぐ歩いたり喋ったりするわけもなく、お釈迦様の言葉を集めた原始経典と比べて傲慢に聞こえるこの言葉は似合いません。私はこれを生身の人間であるお釈迦様を後世神格化する必要が生じて作られた伝説の類いと片付けて、納得させてきました。人格と神格の間でこの言葉はいろいろな解釈が可能です。神格派は「私だけが唯一衆生を救済できるから尊い」と言い、一方人格派は「生きとし生けるものはすべて尊い命を持つ存在である」と全存在にまで拡大解釈することもできるでしょう。彼は生まれてすぐ七歩歩いて天と地を指さしました。裸の赤ちゃんは経験も知識も何も所持しないありのままの存在です。天と地は私たちの生きる空間です。歩くことはそこで生きることです。「この世に生まれ出てありのままの日々を生きること、そのことで私は唯一の尊い存在となる」これが私の今観る「天上天下唯我独尊」です。「さあ、あなたたちも自身のありのままの日々を生きなさい。それがあなたがこの宇宙で唯一の尊い

存在である証なのです。私は仏となりました。あなた方もあなただけの仏になりなさい。」「天上天下唯我独尊」はその様に語りかけてきます。門前でうろうろしている私たちを仏道の門の中に足を踏み入れるよう促すお釈迦様の言葉であり、門をくぐり自らの足で仏の道を歩み始めた瞬間から私たち自身が語りうる言葉にもなるのです。

雑草との平和協定をどう結ぼうかと思いあぐねている内に、雑草は日々勢いを増してきて、あっという間に畑は一面の雑草畑となってしまいました。慌てて鍬で掘り起こし雑草を土の中に埋める作業に入りましたが、一週間も経つと性懲りもなく土の中から緑の草が顔を出してきます。また今年もいたちごっこの繰り返しのようです。恐らく私と同じように、雑草たちも「天上天下唯我独尊」といいながらせっせとありのままの日々を過ごしているのでしょう。そう思うことが私の善友であるお釈迦様の望まれたことであるならば、雑草との共存共栄も可能なはず、その思いのままに今年の花まつりを迎えます。

狂言綺語八十七・意思と実践

四年前の今頃、私は身延山で僧侶となるための最後の結界修行をしていました。春とはいえ朝晩の冷え込みが厳しい山の中、早朝四時過ぎの山道を雨の日も風の日も、毎日題目を唱え団扇太鼓をたたきながら素足に下駄ばきで二〇分の山道を上り本山久遠寺の朝勤に臨みます。小一時間の朝勤を終えるとまた山を下り祖廟（日蓮聖人の墓）参拝、道場で朝勤、八時になってやっと朝食です。この間は飲まず食わず、ただひたすら口から経文と題目を発出するばかり。修行で消耗したエネルギーを補給する食事も貴重な修行の一環です。私は毎食どんぶり一杯のご飯を食べていましたが、それでも三五日間の修行を終えた時には五キロもやせていました。

この三五日間の修行の目的は法要式の実践方法と僧侶の威儀を身に纏うことです。これは学習の範疇ですので繰り返し行えば誰でも習得出来ます。しかし若い人達に混じって、当時五九歳の私が寝食を含めた修行全体の流れについて行けるかは当初は不安でした。ところが三日もして日課に慣れてくると何をするにも大概いつも一番乗りとなっていたのです。元来押しつけられた規則や命令に対して拒絶反応を覚え、それを外に知られないように適当に凌いでやり過ごし今まで社会人をやって来た私には、これは驚くべき発見でした。頭で考えるよりも体が勝手にそちらの方に動いてしまうのです。どうやら私の行動は脳ではなく、意思が肉体を制御するらしいと言うことが分かりました。水行も、食事の用意も清掃も整列も、唯一の楽しみ入浴も当番を除けばほぼ一番乗り。特に水行は起床の鉦が鳴った瞬間に飛び起き一分後には頭から水を浴びていました。これがくせになるほど気持ちがよいのです。地下水を貯めた大きな水行プールから手桶で水を汲み、経文を唱えながら作法に則って十回ほど水をかぶります。僧衣に着替え道場で経を読む頃には体はポカポカと温まってきます。頭であれこれ考えれば厭なことつらいことで体は動かなくなります。しかし意思があれば体は勝手にその意思の方向につれて動いてくれます。おかげで、私は楽しく修行期間を過ごすことが出来ました。この「意思」は現在の私の日々の行いをありのままに動かす「信」と呼ぶべきものとなっています。

「自力」と「他力」という仏教用語があります。この言葉は対立概念のように思われています。例えば

「仏教の究極の目的である悟りを得るために自己をよしとし，自分自身の素質や能力に頼る修行法を自力という。これに対し，自己を煩悩具足の凡夫とし自力を否定し自分以外の力，たとえば阿弥陀仏の誓願に帰依する実践を他力という」注1この様な解釈が一般的です。世間的には、親鸞が他力念仏の、道元が自力禅の究極の実践者と認識されているでしょう。果たしてそうでしょうか。私には自力と他力は相反する概念ではなく、表裏一体、或いは同一のものと観えます。仏教学者や宗門の教義から見ればおまえの言葉の定義はあまりに単純化し恣意的だという批判をあえて受ける覚悟で、「自力は私たち凡夫のはからい」「他力は仏のはからい」と定義したいと思います。親鸞はその自力と他力を厳しく峻別し、自力を徹底的に否定しました。親鸞の主張は“私たちはどうやっても煩悩から逃れることができないという人間実存への凝視の末に、凡夫（自力）に悲嘆、絶望し自力を完全に拒絶し、そこで初めて他力（仏）の光に包まれて救われる”と私は理解しています。私と仏とを厳しく相対化することから出発して最終的に仏の中に私を投げ入れることで救いが成就するのです。一方道元や日蓮は法華経の思想を根底にして、片や個人の主体的実践である禅を極め、片や今生きる娑婆こそ安らぎの処であると信じ社会変革の実践の道に進むという両極端を歩んで行きました。しかし二人とも根底には「凡仏一如」の思想があります。私たちは本来私自身が仏そのものだという考えです。ただ娑婆世界の現実相の中ではそれは分離され自覚することが難しいのです。つまり自力（凡夫）と他力（仏）が離ればなれになっているという認識です。それをもう一度合一させる行いを、道元は個人の場で、日蓮は社会の場で実践したということです。三人の祖師たちは意思（信）と実践（行い）方法が異なっていても、目指すところは仏との一体化、凡仏一如、娑婆即浄土です。それは他力と自力が合一するということです。自力と他力とを分けて語ることは、安らぎの処（浄土）へと導く為の手段、方便の言葉なのです。

三人の鎌倉時代の祖師たちの意思（信）と　実践（行い）を比較対照してみると、個の救済を究極まで追求した道元と親鸞の宗教は哲学的になっていくはずです。そこでは個人の主体的あり方と実存が問われるからです。一方日蓮は社会全体の救済と個の救済は同時であるという立場です。彼の宗教は必然的に社会変革の道を歩みます。彼らそれぞれの意思（信）を、今を生きる私たちは正しく受け継いでいるでしょうか。道元と親鸞の法灯を継ぐ者たちの寺院数は圧倒的な数で一位二位を占めています。注2日蓮の法灯を継ぐ宗教団体は日蓮宗を始めとして数多存在します。そこには多くの「意思を受け継ぐ者たち（僧侶）」がいるはずです。意思があれば、行いは必然のものです。私たち意思を継ぐ者たちが、触れて語って日々を分かち意思を共有する人たちの数を少しづつでも増やし続けること、それが実践（行い）です。その行いは念仏や題目を唱え座禅をすることではありません。今私が置かれている時代、社会環境、自然、そこで生きる私と私以外の人々との関係の中で、意思の示すままに実践することだけが唯一意思を継ぐ者たちの「信」と「行」です。

自分の意思が置かれている場所（琉游舎）で意思が示すままに躊躇無く実践の日々を過ごす今の私の原点は、四年前の身延山での修行の一番乗りの経験にあると思っています。意思が行動の原動力であることの自覚です。それを宗教的に言うと「信」が「行い」を導くと言うことでしょう。ただ、信行、意思と実践と構えなくとも、ありのままの毎日が導く「行いたいことを行いたいままに行うこと」が安らぎの処への行いだと信じています。

注1：ネット「コトバンク」より　注2：宗教年鑑

狂言綺語八十八・挨拶

都会の雑踏の中では見知らぬ同士が挨拶をすることはまずありませんが、歩く人の少ない田舎ではすれ違えば知る知らないの関係なく必ず挨拶をします。「こんにちは」と声を掛けることもあれば、五〇㍍くらい手前からずっと「声をかけないで！」とオーラを出している人もたまにはいるので、そんな時は軽く会釈するだけのこともあります。田舎では人の他に犬も挨拶相手です。全身に喜びを溢れさせ飛びかかってくる犬や我れ関せずと無愛想に通り過ぎていく犬、後ずさりをしながらキャンキャン吠える犬、これが犬の挨拶です。猫や狸やカラスに山鳩に蛇、いずれも出会えばこちらをちょっと値踏みをするかのように立ち止まり、害を加えないと分かるとおもむろに立ち去っていきます。これも野生の生き物の人への挨拶なのかもしれません。

挨拶や声かけ運動という地域のコミュニケーション活動は各地で今でも行われていることでしょう。家庭と学校と地域が連携して大人と子供、大人同士、子供同士が知り合い仲良くなるためには、まず挨拶からという主旨の運動です。先日隣町をウォーキングしていると、後ろから自転車で追い抜いていった女子中学生に「こんにちは！」と大きな声をかけられました。畑仕事の初対面のおばさんと道端で作物談義をしていると、男の子が私たちに「こんにちは！」と頭を下げて去って行きました。「この町では子供は見知らぬ人にも挨拶をするのですか」と問えば、おばさんは「そんな不思議かい、昔っからそうだよ」と答えました。挨拶をされていやな気分になる人はまずいません。私の返す挨拶と呼応し気持ちが行き交います。

一方、日を置かずにこんなことがありました。市の依頼で大型連休中の新型コロナ対策を訴える「立哨」を駅前で行ったのです。（市の依頼文に「立哨活動」と書いてあったのでそのまま書きますが、戦時体制でもあるまいし「監視・警戒活動」はふさわしい言葉ではないですね。「街頭広報活動」と言うべきです。余談ですが）その立哨活動の時間帯に道の反対側を何組かの小学校の登校班が通り過ぎて行きました。私は市職員と二人で道の向こう側の子どもたちに「おはようございます」と呼びかけました。たまに元気に挨拶を返す子供もいますが、ほとんどは声の方を振り向きはしても、出所を確かめるとおもむろに前を向き黙々と学校へと向かっていきます。私がよく道で出会う野生の生き物たちのような彼らの応対に、挨拶は宙を漂うばかりです。

この挨拶を廻る二つの出来事で、私は「一挨一拶（いちあいいっさつ）」という禅の言葉を思い出しました。日常使っている言葉の挨拶の語源です。「挨」は軽く「拶」は強く触れるという意で、「挨拶」は押し合いへし合いする中で、前に出ようとしながら相手の力量を見極める行為です。禅では修行者同士が出会ったときに言葉や動作で相手の悟りの深浅などを試すことを表します。挨拶の場で相手の力量が上回ると分かれば教えを乞い、逆であればまた新たな師を求めて挨拶を繰り返す。そのような光景が目に浮かんで来るようです。今日では挨拶は社交儀礼のように思われていますが、本来の意味は修行者が悟りを得るために日々重ねる研鑽方法なのです。ただ、私は公案[注1]を介しての言葉や心のやり取りでその人の悟りの深浅を見極める禅の徒ではありませんので、挨拶は日常のありのままの行いのひとつであればそれだけで充分なのです。

軽く挨拶を交わすことを「会釈」と言います。これは仏教用語にある「和会通釈（わえつうしゃく）」の略語です。経典は永い年月、多くの人の手により書かれたものですから、それぞれは互いに矛盾だらけで

す。しかし人々はそれをお釈迦様が生涯にわたって一人で説かれた教えと、明治になるまで信じてきました。僧侶たちの仕事はこの経典の二律背反（相互に自己矛盾する教説）を照合しながら、矛盾のない解釈を導き出すことにありました。古い教説同士の矛盾点をより高い次元で融合させ新しい教説を提示することと言えばよいでしょうか。西洋哲学で言う止揚（矛盾する諸要素を、対立と闘争の過程を通じて発展的に統一する）の仏教版思弁方法とも言えます。この相互矛盾を高い次元で融和に導き教説の矛盾を解消する「会釈」の意味が、時を経るうちに経典融和から人間融和のための「挨拶」の意味へと転化していったようなのです。

私は挨拶と会釈という日常儀礼言葉の語源が「一挨一拶」と「和会通釈」という仏教用語にあることを説明してきました。悟りのための修練が「挨拶」で、お釈迦様の教えのより高次元での融合が「会釈」という言葉です。この「挨拶」と「会釈」が、今日、日常語として使われる挨拶と会釈となるまでに辿って来た永い年月の道のりを、挨拶には禅の深遠な思想があると語ってもそれはただの蘊蓄であり、挨拶は悟りへの道と、誰彼かまわずの挨拶の実践を推奨しても、それは意味もなく念仏や題目を唱えることと変わりがありません。何かの為にする行為を私は「行い」とは呼びません。「行い」は安らぎの処へと歩むことそのものにあるからです。それはありのままの日々をありのままに過ごすこと。私が日々交わす挨拶は、見知らぬ者同士の相互往来の始まりかもしれませんし、宙を漂うばかりの泡沫かもしれません。ただどちらであろうとも「一挨一拶」であり「和会通釈」です。なぜならそれは自己と他者との間のありのままの姿だからなのです。

日本社会特有の挨拶文化に、例えば年始は「年始御挨拶」とスタンプを押した名刺を持参して挨拶に向かう風習があります。犬のマーキング行動、或いは相手先との従属や忠誠関係の確認行為のようなものでしょう。この日本社会の良き（悪しき）挨拶文化も私の会社員時代末期には時間の無駄と思われたか、虚礼廃止の会社が増えてきました。ただ油断は禁物です。第三者から「戸井さん挨拶はまだなんですって」と言われたら相手先は「まだ挨拶がない」と怒っているか「これは御挨拶だね」と皮肉っているかのどちらかです。今ならそれも「一挨一拶」と思えますが、当時は冷や汗を掻きながら慌てて挨拶に赴いたものでした。

注1：禅宗で参禅者に出される問題

狂言綺語八十九・色読

昨年の一月以来東京都内に足を踏み入れたことはただ一回です。親類の家族葬の依頼を受けて都内の斎場との間を往復しただけで、寄り道することなく帰って来ました。また友人たちと飲食店で食事や酒を酌み交わすことも一切なくなりました。自家用車で長野や見延山に出かけたことはありますが、一番近場の都市である宇都宮には全く足を踏み入れていません。この一年半近くの私の行動を振り返ると、宇都宮餃子を食べなくても映画館や美術館に行かなくても宴会をしなくても全くストレスも不便も感じないということでした。どうやらこれらは私にとって不要不急の用であったようです。かといって琉游舎に閉じこもっていたわけではなく、コロナ禍以前にも増して琉游舎を中心にして同心円状に行いを実践し、日々その

縁の拡がりを更新するありのままの毎日です。奇貨は遠くでなく自分の足下にあることがよく分かったコロナ禍の今です。

今、同心円状に拡がった縁の輪が三重県まで到達しています。私の善知識[注1]の一人、伊賀上野の真宗高田派の僧侶の発案で四月からズーム読書会を始めました。彼は昨年三月まで勤めた横浜の小学校を退職し、実家の寺を拠点にして寺本来の機能の一つ寺子屋活動などの実践の日々を過ごしています。彼の声かけで元大学教授で住職のお父上、働きながら真宗本願寺派の僧侶として修行中の銀行マン、国語教育学の泰斗の先生、行動する日蓮宗僧侶の五人で「無量寿経」の読書会を始めています。異なる経歴の持ち主同士のこの会は、自ずから各々の日々の信行から経の意味を読み解いていこうという流れになりました。距離はネットのズーム会議が埋めてくれます。宗派や宗教の違いは各々の信行のあり方の実践をお互い知りたいという欲求の前では、全く障壁となりません。私が聞く皆さんの話は総て私の信と行の後押しをしてくれるものばかりです。

無量寿経は浄土真宗各派の依り所となる経文です。日蓮宗の所依の経典は法華経ですから、知識として読もうと思わない限り私には全く縁遠い経です。しかも日蓮聖人の著作「立正安国論」は法然の念仏宗を邪法と論破して成立している書物ですから、宗派に囚われると相容れない教えが「南無阿弥陀仏」の念仏と「南無妙法蓮華経」の題目です。私は「経にこう書いてある」「宗祖はこう言っている」と、高座[注2]から教えと称するものを説教するばかりで、一向にそこを下りようとしない人達を僧侶とは呼びません。僧侶は経を色読しなければなりません。色読は日蓮宗に於いて「法華経を教え通りに正しく読み取って実践修行する」ことです。色読は身読であり実践読です。「法華経を余人の読み候は口ばかり、言葉ばかりは読めども心は読まず。心は読めども身に読まず。色心に二法共にあそばされたるこそ貴く候へ」[注3]日蓮聖人が弟子に送ったこの書簡には「世間の人々は法華経を読むのはただ口ばかり言葉ばかりには読むが心には読まぬ、心には読んでも身には読まぬが、あなたは身（色）にも心にも読まれたことは真に貴い事である」と書かれています。私は日蓮聖人の弟子ですから法華経を色読します。そしてその前にお釈迦様の弟子ですから経はすべて色読されるべきものなのです。どの宗派の所依の経典であれその経文は解釈するのではなく、今の自分の行いを通して読み、我が身に当てていくことが色読です。すると私には無縁と思えた無量寿経やその他の経典にも、ありのままのお釈迦様の教えが立ち現れてきます。「あなたの毎日をちゃんと生きなさい、それがあなたを安らぎの処へと導く日々の行いそのものなのです」と。経を色読することは日々を生きることなのです。

お釈迦様にはお釈迦様の、私には私の、あなたにはあなたの「生きる」があります。その生きるがはたらく場のすべてが行です。つまり日々の生活全体が行です。信は私たちが自分の生きるいのちの姿に気づくことであり、いのちそのものに自分自身を帰投（帰依）することです。それが「信」であり「行」です。私は法華経の色読で「永遠のいのち」に帰投した日々を生きます。念仏の徒は無量寿経の色読で「弥陀の本願」に帰投した日々を生きます。いずれも安らぎの道を歩む「行い」なのです。人は他人の行いの日々を肩代わりすることは決してできません。各々の行いはその人だけの行いです。ですからお釈迦様の教えは唯一無二であっても、信行の形は経を色読する者の数だけあるのです。同行の友たちと信行の道を歩んでもそれは何処まで行っても個人の信行であり集団のものではありません。師や宗派の意志に引っ張られて進む道にあるものは盲信行です。自分唯一の信行との確信があってこそ、安らぎの道を歩み続けることが出

来るのです。

「親鸞は弟子一人ももたず候」注4と語りました。厳しいですが仏教の本質を突いた言葉です。親鸞の下で言葉を寸分漏らさず聞き信仰の安心を求めに来ていた人達に対して「私には弟子は一人も居ない、あなたたちは私の弟子ではない」と言い放っているのです。続けて「なぜなら私自身のはからいで他人に念仏させたなら私の弟子と言えるかもしれないが、皆さんは阿弥陀仏のはからいで念仏をしているのですから、その様な方を私の弟子だと言うことは心が寒々する思いです」と語ります。皆さんは親鸞の弟子ではなく阿弥陀様のお弟子なんですよと言われているのです。僧侶は仏の代理人ではありません。皆さんと伴に仏道を歩む同行の友です。そこには出家と在家の区別はありません。在家は経済活動を通して、僧侶の私は永遠のいのちの供養を通して信行を行っているだけです。聖職者も世俗の徒もみな等しくお釈迦様の弟子なのです。

昨年一月以来のコロナ禍と言われる不自由な時代に、ネット会議が心理的物理的距離を一気にゼロ（空）にしてくれました。リアル空間の不便がネット空間での便利と自由を実現してくれたのです。「不便即便利」「自由不自由一如」の「空」の実現と言えば言い過ぎでしょうか。またそこで私は「ありのままに観る」ことと「弥陀のはからい」は全く同じことだということにも気づいてしまいました、がそれはまた不謹慎なことでしょうか。

注1：仏道をともに歩む同行の友　注2：僧が説法する一段高い席注3：日蓮聖人「土籠御書」　注4：歎異抄第六段

狂言綺語九十・無一物

去年はうまくできたからといって、今年も同じようにうまくいくとは限らないのが野菜作りです。昨年は豊作だったタマネギは、未だに土の中でピンポン球以下の大きさです。何が悪かったのか、前回と同じところで苗を買い同じ時期に植え同じように養生したのですが、冬を越しても一向に大きくなる兆候も見せず今に至っています。一方キャベツはしっかり冬を越し、甘くみずみずしい重量感のあるものが収穫できました。三度目にして初めて毎日食べたくなるキャベツです。春野菜はそろそろ夏野菜のために場所を明け渡さなければなりませんが、盛りを過ぎてもまだ花を咲かせるエンドウに早く場所を譲れとも言えません。ただ見た目は柔らかそうでも食べると筋だらけのものが混じるようになりました。種の保存のための防御本能が働くのでしょうか。老いてもまだ盛んなエンドウに引導を渡すタイミングは難しいものです。タマネギはよその畑と比べようもないくらい未熟児のままなので、さっさと見切りを付けるべきなのですが、昨年の大豊作の記憶が消えず、こんなはずはない、いつかは成長するはず、とこのままずるずると時を過ごしそうでなりません。

やめれば楽になるのに失うものを考えるとやめられない。このまま我慢し続ければ事態は好転するはず。私たちの毎日はこのようにやめるにやめられないことばかりです。今まで費やした時間と労力に執着し、自己を恃むばかりで、今の有り様をありのままに観ることができないからです。忍耐と精進を持ってやり続けることは称賛されることであり彼岸への道です。しかしもし忍耐と精進の道に苦しみや迷いを感じたならそれは慢心と執着の道かも知れないのです。我慢、慢心、驕慢、高慢、暴慢、自慢、怠慢、増上慢と

「慢」の付く言葉を並べていくとよい評価に使われる言葉ではないようです。一人「我慢」だけが「自己主張を抑えて辛抱する」という意味でよい評価を与えられた言葉のようですが、この我慢も長い歴史の中でいつの間にか意味が逆転してしまった言葉のひとつなのです。「慢」はサンスクリット語の「マーナ」の音を漢字に当てたものです。「マーナ」は仏教が説く煩悩のひとつで、自己を高みに置いて他者を軽視する自己中心的な思い上がりの心を意味します。ですから我慢は「私の思い上がりの心」のこと、つまり慢心のことです。慢心と執着は煩悩です。煩悩は私たちに「苦」をもたらします。日々自分が精進し忍耐しているつもりの行為に苦しみと迷いを感じたならば、それは我慢と執着です。さっさと捨て去りやめるべきことなのです。

忍耐と精進は安らぎの処（彼岸）へ至るための六つの実践徳目、六波羅蜜のひとつで、その他に布施・持戒・禅定・智慧があります。持てるものを持たざるものに与え、規範を守り、堪え忍び、努力し、心を安らかに保ち、ありのままに観る智慧を身につけたならば私たちは安らぎの処（彼岸・涅槃・悟りの世界）へ辿り着くことができるというお釈迦様の教えです。これは日々の生活の中で実践可能ですが容易ではない徳目です。布施は貪欲、持戒は破戒、忍耐は我慢、精進は執着、禅定は瞋恚、智恵は愚痴[注1]にいつでも変わることができます。私たちはこれらの間を行ったり来たりする日々を生きているのです。人に欲があり、怒りがあり、我慢がある限りこの行ったり来たりの往来を止めることはできません。お釈迦様はこの往来を無くし安らぎの処へ進む方法を様々な言葉で示してくださいました。すべての教えはそこに集約されると言ってもよいでしょう。無作為に拾ってみると例えば「怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とにこだわらず、無一物となった者は、苦悩に追われることがない。」[注2]「無一物」とならない限り、つまり何も所有しない者にならない限り煩悩を捨てて苦悩から解放されることはないと語っています。「何も所有しない」はいのちも所有しないということです。しかしそれは肉体的な死と同一ではありません。人は死ななければ涅槃（安らぎの処）に行くことはできない、死ねば浄土にいけるという考えはお釈迦様の教えを曲解した考えです。「無一物」になることは私が私のいのちや財産や家族や実績や名誉や、何もかもを私が所有し私が行った結果だとする考えを捨て去ることです。そして私が所有していたと慢心し執着していたすべてのものが大いなるいのちのはからいによってここにあると観ることです。それがありのままに観ること、他力のはからいのままに在ること、即身成仏することです。それはお釈迦様の弟子たちがそれぞれの信行の中で獲得してきた「無一物」になるための行いなのです。そして「大いなるいのち」を久遠実成の釈迦牟尼仏や阿弥陀如来や大日如来などと呼ぶことで、具体的な信行のより所としてきたのです。

私たちの日々の生活で「無一物」となることは、教えとして理解できても実践することは不可能に思われます。貪（欲望）瞋（怒り）痴（無智）の煩悩を消滅させることは不可能だからです。しかし私はその自覚があればこそ安らぎの処へ歩む行い（無一物になる）が可能だと考えます。布施と貪欲、持戒と破戒、忍耐と我慢、精進と執着、禅定と瞋恚、智恵と愚痴、この往来の日々を生き続け、それが苦しみや迷いでないと知ったとき、それはありのままの毎日を生きることとなります。つまり「無一物」への道を歩むこととなるのです。煩悩は悟り（菩提）の縁であり、ありのままの状態です。煩悩と菩提は一体一如、「煩悩即菩提」なのです。

やめるにやめられないことと言えば、オリンピックはもう損切りのタイミングを完全に逸してしまった

ようですね。これからは利益でなく損失だけが増え続けることでしょう。かく言う私も退職後の生活資金のためにと社内持ち株会で細々と買いだめしていた株が、現在購入金額の半分となり売るに売れない塩漬け状態です。いつ損切りするか、大仰に言えば、その先にあるのは「無一文」か「無一物」への道か、思案のしどころと「忍耐と我慢」「精進と執着」を行ったり来たりすることも、ありのままの日々の一点描かもしれません。

注1：「貪欲・瞋恚・愚痴」貪り、怒り、無智の苦をもたらす三毒　注2：「ダンマパダ 221」中村元訳　岩波文庫

狂言綺語九十一・如是我聞

先日党首討論会と称する見世物がテレビ中継されていました。討論は互いが意見を出し合い議論を戦わせ可否得失を論じ合うものです。言葉を武器にして自説の正当性を認めさせる場です。新型コロナという見えない敵との戦いに倦む私たちの前でどのように戦うべきかを論じ合い今後の具体的な対応策を指し示してくれるだろうと、また考え方の異なる者の一対一の壮絶なバトルが見られるのではと期待と興味半分で観客席に座りました。ところが予想通りというかまたかというか、三文芝居を見せられただけでした。五七年前の東京オリンピックの思い出という茶飲み話はまさにノーガードの奇策、相手の戦意を削ぐには十分すぎるほどの攻撃でした。それまでも互いにただ空砲を虚空に向かって打つばかりで、議論の体を為していませんでしたが、この瞬間に党首甲は勝手に戦線を離脱し、それを追撃することもなくただ呆然として見送る党首乙。

討論を対話の一形態と考えるならば、党首甲と乙の間には議論も対話も存在していませんでした。対話は問いかけから始まります。その問いかけに答えようとしなければ対話は成立しません。答えようとするにはまず相手の問いかけを聞くことです。対話は聞くことから始まるのです。対話は互いの考えや思いをぶつけ合う中で何らかの共感や合意を形成していく方法です。たとえ異なる意見や立場から議論が始まったとしても、互いの意見にしっかり耳を傾けそれに真摯に答えていけば、必ずある合意点が見いだせるはずです。多くの相違点から始まり、最初は目に見えなかった合意点が、次第にはっきりと形になって表れてくる過程が討論であり民主主義の合意形成の方法です。話を聞かないということは合意形成も民主主義も拒否していることに他なりません。聞くことから私たちの日々と社会との関係が始まると言っても過言ではないのです。

仏教の経典のほとんどは「如是我聞（にょぜがもん）」という言葉から始まります。「わたくし（お釈迦様の弟子阿難）はかくの如くお釈迦様からお聞かせいただきました」という意味です。当時インドに文字文化がなかったわけではありませんが、尊い言葉は文字にせず声に出して伝えるという伝統があったのです。お釈迦様の教え（法）は対話の中から生まれました。原始仏典では、問い掛けにお釈迦様が答えるやりとりの中で教えを自然と受持していく形式のものが多くあります。それは説得や論破では全くありません。問い掛け、聞き入れ、答えるという対話の繰り返しによってこだわりが自然となくなり、大きく開かれたありのままのわたくしの中へ法がそのままに入っていきます。それが「信」です。「聞く」は「信」の門です。聞くの門から入った信は、聞き続けることでその信をさらに強固にしていくのです。「如是我聞」は文

法上は私（阿難）が聞いた形を取っていますが、経を文章として読み文字情報として理解してはいけません。如是我聞の「我」は阿難だけでなくその説法に集う人たちであり、私自身でありあなたたちひとりひとりなのです。私もあなたもお釈迦様の教え（法）を聞いている「我聞」なのです。私が毎朝経を唱えるとき、それはお釈迦様の教えを誰かに聞かせるためだけに声にするのではなく、読誦された教えを私自身が「我聞」すること、それが経を唱えることなのです。如是我聞の内容を私が繰り返し繰り返し読誦し聞くことで信はありのままの「信」になります。これを「聞法歓喜」といいます。教えを聞いて心から歓喜することなのです。

「梁塵秘抄」は平安末期に当時流行した今様などを後白河法皇が分類集成した歌謡集です。二巻中一巻は仏法を説いた文章「法文歌」に分類され、法華経を謡ったものが多く、末法の世に仏に帰依する心情をなだらかな表現で歌いあげたものが中心をなしています。その一つに釈迦の御法は品々に、一実真如の理をぞ説く、経には聞法歓喜讃、聞く人　蓮の身とぞなる（釈迦の法はいろいろな形で真理を説いている。経にも注1あるように、法を聞いて歓喜し讃えるならば聞く人はみな仏の身となる）とあります。ここには法を聞くことの喜びとそれを讃嘆し供養することで成仏できると信じて生きる庶民のささやかな安らぎが表現されています。私はこの俗謡を読むと実際にどのような音調で謡われたか聞いてみたくなります。法を聞き信じそして喜び感謝するということ、つまり「聞く」ことを素直に受け入れることが出来る社会に生きた人々は、たとえ苦しく不便な生活を強いられようとも、実は「聞く」声がない時代を生きる私たちよりもはるかに幸せな毎日を送っていたのではないでしょうか。聞く声のない世界は信ずるべきもののない世界です。聞く人の不在と聞く声の不在は一体です。「聞く」と「語る」は不二だからです。「如是我聞」は私が聞き私が語ることです。私がお釈迦様の声を聞くとき、同時にお釈迦様の言葉を私が語っているのです。

私たちの社会に聞くべき声が存在しなくとも、風や鳥などのあらゆる自然の声を聞くことは出来ます。ただ、現代の「声」が自然の中にしか存在できないとしたらこの社会は果たして健全といえるでしょうか。私はテレビや新聞から聞こえてくる「音」を政治家やジャーナリストの「声」と聴くことはできません。ですからその「音」を「声」と信じることはできないのです。自然の声だけが唯一「信」に値する声だとしたら、私たちはまさしく声なき社会、つまり「法（教え）」なき世、「無法」の闇に生きていることになります。先日の党首討論会は国会という場が、実はこの日本の中で最大のブラックホール、声なき世界であることが図らずも露呈されてしまったようです。誰も聞かない誰も語らない無法世界では、ただ音の空砲が行き交うばかりですが、それを雑音として無視し続けることは社会と断絶していることと同じなのです。鳥の声とともに目覚め虫の声とともに眠る私の安らぎの日々が、その雑音を無視することで可能な日々であるならば、私はお釈迦様の弟子を名乗る資格はないはずです。如是我聞は「聞き」「語り」「行う」ことだからなのです。

注1：法華経「方便品」

狂言綺語九十二・皆順正法

今年は梅が大豊作のようです。昨年は実が全般的に小ぶりであまり質がよくなく値段も高めのため、梅干しと梅ジュースと特製梅酒を一㌔ずつ漬けるにとどめましたが、今年は大きくずっしりと重たい梅を大量に頂き一〇リットル分の梅酒を仕込みました。琉游舎の祭壇の下には梅酒を漬けた瓶がずらりと並んでいます。暗く温度変化がわずかで湿気も少ないこの場所は梅酒が熟成するにはうってつけの場所です。しかも毎日有り難い法華経を聞いているのです。質のよい梅の実エキスとアルコール分と経の功徳が融合した霊験あらたかな梅酒が出来ること間違いなし！健康増進、安眠促進、離苦得楽の境地へ誘う特製梅酒は来春が飲み頃です。

古来、寺院は薬草園をもち薬などをブランド化して製造販売し術を施すなど医療機関の役目も果していました。神仏の霊験と経験知で培った薬などの医学的施術で人々の健康と安らぎを護っていたのです。薬と言えば酒も健康長寿の薬と私は信じています。仏教では「戒」で飲酒は禁じられていますが、そこは日本人のお家芸、外来文化と在来の習俗をうまく融合させたのです。学問的根拠はありませんが、おそらく神様に供えた御神酒を頂く風習を神仏習合の過程で取り入れ、仏様に供えたお酒を般若湯としていただくことで、五戒[注1]のひとつ「不飲酒戒」を有名無実化したのでしょう。因みに般若は仏様の智慧のことですから、お酒を頂くことは仏様の智慧を頂くことです。うまくすり替えました。昔の僧侶は智慧がよく回ったようです。

平安時代から江戸時代初期の頃まで大寺院が醸造販売していた酒は”僧坊酒“と呼ばれ高品質で人気が高い商品でした。もちろん品質だけでなく毎日経を聞いて発酵させているので霊験あらたかな酒でもあります。発酵食品の酒は先端技術バイオテクノロジーの分野です。これを可能にしたのはまだ民間資本が未成熟で分業化以前の産業形態の中では、寺院がすべてを兼ね備えた一大産業センターだったからです。まず荘園から送られる米と貴族からの寄進による資本の集中、布施で生活が可能な不労所得者（修行僧や僧兵）の潤沢な労働力、遣唐使や諸国行脚で得た情報と最高学府としての学術と技術の蓄積、社会からはみ出た奇才や権力争いに敗れた人達が避難する頭脳と人材受け入れのアジール（聖域）の場、これらの要素が揃った場所は大寺院以外ありませんでした。そこから送り出されるものは高品質で最先端の物資と精神だったはずです。寺院は産業で人々の体を支え、教えで心を支える、色心不二（物質と精神はひとつ）の実践の場だったのでしょう。

法華経法師功徳品第十九の一節に「若説俗間経書　治世語言　資生業等　皆順正法」とあります。「（法華経の持経者）が、道徳についての書や政治の言葉や経済活動について説いたとしても、すべてそれらは正しい教え（正法）にかなった言葉である」という意味です。これらは私たちの生活の中に溢れている仏教以外のすべての考え方、「世法」と呼ばれるものです。これに対してお釈迦様の教えは「仏法」です。社会の中で生きていく為に必要な政治経済道徳などの世の中の法は仏の法と一緒だと言うことを述べた経文です。この経文を、仏法の下に世法があるか、二法は現実社会の中で両立するか、などと議論しても意味はありません。法華経の教えを理解した上でこの言葉を読むと「世法即仏法、仏法即世法」なのです。お釈迦様の教えに従い社会で生きることは社会の教えを信じることであり、社会の教えに従い生きることはお

釈迦様の教えを信じることです。どちらか一方だけに従うことは宗教者でもお釈迦様の弟子でもありません。仏教の教えの根底にあるものは諸行無常です。因縁縁起に依って起こるこの世のすべての現象は常に変化して不変のものはないという教えです。諸行無常の日々をありのままに観たとき、私たちの体（色）と心は分裂と融合を繰り返しながらも明らかに安らぎの処へ向かって色心が一体となっていく姿が観えてくることでしょう。世法が物質や身体や社会をつかさどり、仏法が私たちの心をつかさどるものとするならば、この二法との間を常に行き交いながらも互いの法が一体化し一如となるべく日々を生きる（行う）ことが、安らぎの処へと歩むことそのものなのです。私たちが現実の世界の中で仏法を実践することは、色心不二を実践することなのです。

世法即仏法、色心不二を文字で読むと、それが「即」や「不二」で一体・一如を表すといわれても、すんなりと心に落ちてこないものです。日蓮聖人もそこのところを弟子に伝えるために表現を工夫されていました。遺文に「爾前の経の心は心より万法を生ず　譬へば心は大地のごとし　草木は万法のごとしと申す法華経はしからず　心すなはち大地　大地則草木なり（中略）此れをもつてしろしめせ　白米は白米にはあらず　すなはち命なり」注2「法華経以前の諸経では、心から万法が生じてくる。たとえば心は大地のようなもの、そこに生えている草木は万法のようなものであるという。法華経はそうではなく、心がすなわち大地であり、大地はすなわち草木であるというのである。このことから考えてみると、送っていただいた白米はただの白米ではなく、すなわち命である。」万法はすべての存在のありのままの姿です。今までの経はその万法を心の働きによって見ていたから間違いだと聖人は語っています。お釈迦様の教えの原点に立ち返れば万法はありのままに立ち現れ、それをありのままに観たとき色心不二が実践されるのです。ですからある人にとってはただの白米にすぎない物質も、日蓮聖人にありのままに立ち現れた白米は“すなわち命”だったのです。

白米が命ならば酒も命、人それぞれに立ち現れる命は各々にとって命です。この命は色心不二の命、体と心の命です。白米が聖人にとって命であったことは、飢えをしのぎ身体を維持するためだけではありません。送った人の心を聖人が頂いたから命なのです。身体にだけに特化した命はいずれ滅び忘れ去られます。万法の中に在る命はいのちを繋ぎ永遠のいのちとなります。だから“いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり”注3なのです。

注1：五戒　不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つ。注2・3：日蓮聖人遺文：白米一俵御書

狂言綺語九十三・異体同心

”コピペ“は大変便利な機能です。私も狂言綺語で引用する文はこの機能を最大限利用しています。パソコン上の電子データをコピーしそれを別の場所にペースト（転写）すれば、あっと言う間に同じデータが複写されます。これを書写していた時代は時間も手間もかかり写し間違いも多かったはずです。ただし、コピペのメリットは効率よく間違いなく転写できるということだけです。引用は他人の言説をオウム返しに繰り返すことではありません。引用者が自分の考えを述べるためにする創作行為です。例えば浄土真宗の開祖親鸞の主著「教行信証」は”鎌倉前期の仏教書。親鸞撰。六巻。広く経典や解釈論の中から念仏往生

の要文を抜粋・編集し、浄土真宗の教義を組織体系化した書。“[注1]と解説されています。この大著のどのページを開いても経典や経論の引用とそれに対する親鸞の解釈（教義）がコメントされています。彼は今までの念仏浄土に関わる教えに飽き足らず、新たな教義の確立のために要文を引用し編集しているのです。編集は自分の考えを伝えるための知的創造です。その意識も能力もなければ、引用は単なるコピペとなってしまうのです。

“世界が新型コロナという大きな困難に直面する今だからこそ、私たちが団結してこの困難を乗り越えられることを世界に発信する大会としたい” “今回の大会は多くの制約があり、これまでの大会と異なるが、だからこそ安心安全な大会を成功させ、未来を生きる子どもたちに夢と希望を与える歴史に残る大会を実現したい” 先日の首相会見の発言をネットからコピペしたものです。言葉だけを聞くと、国会答弁なのかぶら下がり会見なのか何回目の公式会見なのか、私には区別がつきません。また声と映像がなければ、大会組織委員長か五輪大臣か官房長官かＩＯＣかＪＯＣの会長か誰が語った言葉かも区別がつかないでしょう。それはこの言葉と内容がコピペだからです。この言葉を語る人達には何を伝え行うかの意志がそもそもないからです。意志はそれを実現させるための願いです。「願い、誓い、行う」ための宣言であり出発点です。そこから意志の実現に向けて歩みが始まります。しかし彼らの言葉は決して行いとなって実践されることはないでしょう。権力者のコピペはその行為自体で完結しているからです。学生がネットから他人の論述をコピペしてレポート提出し、バレて落第の憂き目に遭う場合とは全く異なります。これは盗用です。社会経験を積めばこんな単純な盗用はしません。バレないように改ざん・編集をして、何とかコピペの痕跡を隠そうと努力をします。但しバレたときのダメージは絶大で、社会的地位を失ってしまうでしょう。一方、権力者のコピペは、隠すことなく大量に複製しそれを日本中に溢れさせることが目的です。最初は本当にそうかなと疑問を持っても”団結”困難を乗り越える”安心安全”夢と希望“などの耳当りのよい呪文の繰り返しに、私たちの疑問は飲み込まれてしまうでしょう。気分で人々の行動を制御できれば言葉の実現はどうでもよいことなのです。

“異体同心なれば万事を成じ同体異心なれば諸事叶う事なしと申す。（中略）一人の心なれども二つの心あれば其の心たがいて成ずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成ぜん事かたし、日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて一定法華経ひろまりなんと覚へ候”[注2] 日蓮聖人はこの遺文で一人の人間に二つの心があっては何事も成就できない、何百千の人がいても心が一つ（異体同心）であれば必ず事は成就するが、日本国の人は同体異心だから何事も成し遂げることが出来ない。しかし日蓮の信者は数は少なくても異体同心だから法華経の教えは広まるだろうと述べています。この言葉はよくよく身にあてて吟味しなければならない言葉です。人は本来「異体異心」の生き物です。体も心も能力も行動も各々違うからです。一人の人間にも二つの心（迷い）があればどちらつかずで右往左往するばかり、ましてや多くの人間が異体異心のまま世に溢れたら制御不能な社会が出現し、人々は迷いの中で苦悩の日々を送ることになってしまうでしょう。宗教者は人々の心に安らぎを与える方法を示し実践する者です。日蓮聖人は異心の人びとを法華経を紐帯にして同心に導きました。この娑婆世界に寂光土（安らぎの処）を実現させるという誓願が、多くの異体を法華経の実践の下に導き、同心となりました。題目を唱えることが法華経の実践ではありません。それは実践者として同心であることを、自らと同心者と久遠実成の釈迦牟尼仏に報告する行為に過ぎません。

もし、題目を唱えることが聖人の誓願した「異体同心」の実践と主張するならば、それは〝団結〟困難を乗り越える〟〝安心安全〟〝夢と希望〟の呪文をコピペして、感情で「異心」を「同心」へと制御しようとする権力意志の行使です。宗教意志は安らぎの処へ向かって実践の日々をともに歩む意志です。各々の「異体」が各々の実践の歩みに向かって「同心」となる、それが日蓮聖人の言われる「異体同心」です。権力意志は「異体」を同じ感情の中に閉じ込め、その行動をコントロールする意志です。それが権力意志の「異体同心」です。聖人の「異体同心」をよくよく我が身に当てて観たとき、宗教もどきと言われないだけの行ないを実践している宗教者はいるのでしょうか。

ところで２０２０は復興五輪が旗印だったような記憶があるのですが、いつからコロナに打ち勝った証となったのでしょう。まだ勝負が決したわけではないので、正しくはコロナに打ち勝った証としたいと言う願望をコピペ会見は述べただけです。それでも9月になって感染者が増え続けていたら、何と総括するのでしょうか。と今はあれこれ言っている私も、きっと五輪の中継が始まればテレビの前に釘付けになり、日本選手の活躍に、一喜一憂するのでしょう。ハレ（非日常）とケ（日常）で言えば五輪中はハレです。ではコロナはハレでしょうかケでしょうか。民俗学的に言えばケガレかもしれません。であればその期間は喪に服さなければならないのですか、、、

注１：コトバンク「デジタル大辞泉」をコピペ　注２：「異体同心事」日蓮聖人遺文

狂言綺語九十四・たましずめ

鎮魂の季節が今年もまたやって来ました。原爆が投下され止めるに止められなかった戦争が終りを迎えることが出来たのは、暑い夏が鎮魂の季節だったからに違いありません。政治や経済的な利害を合理的に判断すれば本土決戦や一億玉砕ばかりか、米国相手に戦争をはじめることすら不可能です。始めたものを終らせられなかった日本人のあの暑い夏の日を終らせた主体は、幾ばくか心底に残されていた鎮魂の心なのです。

〝心身一如〟が西洋思想に出会うまでの日本人の有るべき様と考えるならば注1、科学と精神を分離した心身二元論の合理主義に出会ってからは、〝心身はひとつ〟ではなく対概念と見て行動した方が政治的経済的に優位に立てることを知りました。その実践が明治維新から今へと続く日本の近代化なのです。経済力は国力を測る大きな指標です。資源、技術、人口、機械化などを数値化すれば客観的な国力が出てきます。ただ権力者はそこに日本人だけに通用する主観的な係数を掛けます。これが大和魂や天皇万歳です。近代化を推し進める彼らは客観的数字では優位に立てない部分を日本人だけが持つ行動原理で補うことを考えました。〝心身一如〟の悪用です。心（大和魂）が勝っていればどんなに身（体格や経済力）が劣っていようが必勝であるとする主観的精神論です。日本の近代化は、精神と科学を別の問題として合理的に分離する心身二元論ではなく、精神の下に科学を従属させる、一如と似て非なる心身一元論を発明しました。心身が共棲しお互い様と労り合う間柄が破綻してしまい、魂は安らぎの場であった身体からの離脱を余儀なくさせられました。身体を失った彷徨える魂はつかの間の安住の地を探し求め、〝神国日本〟の幻の灯に吸い寄せられて行ったのです。

鎮魂は例えば「戦死者を鎮魂する慰霊祭」などのように、死者の霊魂を慰め鎮めることと思われていますが、死者の魂に限らず、生者の魂(心)を落ち着かせ鎮めることが本義です。肉体から遊離しようとする魂や、遊離した魂を肉体に鎮めること、あるいは活力を失った魂に活力を与えて再生することが、鎮魂(たましずめ)です。私たちが死者の魂に安住の場所を作り祀って鎮魂する行為は、先祖の魂が私たちを守護してくれていると信じているが故の行為です。逆に行き場のない魂は怨霊となって人びとに禍をもたらします。死者の魂に限らず私たち生者の魂も事情は同じです。人は自分の魂(心)の安住の場が見つけられず悩み苦しみます。仏教で言う〝一切皆苦〟です。生きることそのものが「苦」であるならば、そこから抜け出そうと、哲学や宗教やスポーツやエンタメなど、各々にふさわしいより所を頼りに「苦」に打ち勝つ日々を送っていくことになるでしょう。私たちの毎日は、各々が魂の安住の場所を探し求め続ける日々を生きるということなのです。そして魂の葛藤を解消し安らぎを与えていこうと毎日を生きること、それが鎮魂ということなのです。

原始仏典によれば、お釈迦様は「霊の問題は語っても意味のないこと、それは答えの出ないことだから語らないことにする(無記)」と述べました。仏教は自己を煩悩から解放するための教えですから霊魂がどうとか悪霊がなにとかなどの宗教とは一線を画し、あくまでもありのままに観る因縁縁起の世界だけを対象とした宗教でした。しかし現在の日本では仏教は主に霊魂を供養する宗教だと考えられ、死後の世界には極楽があるという思想が主流となっています。しかし諸法無我の教えに従えば、私の死後に存続する私の精神的主体(霊)はないと言う結論に達します。ここで大切なことは〝私〟の霊魂というものはどこにもないと言うことです。それを固有名詞の霊魂が存在するかのように信じ込まされ「大切だった誰々の霊を供養しましょう。あなたが死んだらその霊魂は極楽に住まうことができるのです」という仏教者にあるまじき言辞を弄するのです。霊魂は存在します。しかしそれは私の霊魂でもあなたの霊魂でもありません。霊魂は法華経が語る「永遠のいのち」となって私の中にもあなたの中にも生き続けるのです。永遠の過去から引き継がれた「永遠のいのち」を私たちの心身が引き継ぎそして永遠の未来へ引き渡すこと。それが鎮魂ということです。

一九四五年八月、死者の魂は〝神国日本〟が鎮魂の場所ではないことに気付き、もはや守護する気も失せてしまい、生者の魂は身体が受ける現実の苦痛(悲惨な生活)の前に茫然自失。日本中は彷徨える魂で溢れかえってしまいました。そして鎮魂の八月がやって来ました。永遠のいのちとして引き継がれるはずの魂がもはやここまでと観念して悪霊と化す間際に、何が人びとに鎮魂の心を目覚めさせたのか、一閃の光芒か、瓦礫の山か、餓鬼の群れか、戦争を知らない子供たちである私には具体的な理由は分かりません。ただ私の中に引き継がれた永遠のいのち(鎮められた魂)はこう語るのです。〝八月の灼熱の太陽に灼かれて魂が消滅し、ここまで受け継いできた永遠のいのちをここで終らせるわけにはいかない。このいのちをしっかりつなげて欲しい〟魂たちのこの切実な願いが今私の中に生きています。これが八月を鎮魂の季節と私が語る唯一の理由です。

七六年前、鎮魂の場と信じられた〝神国日本〟は、悪霊製造工場だとバレてしまい崩壊しました。震災やコロナ禍や格差拡大で不安な私たちの魂に、二〇二一年の日本は五輪を鎮魂の場としました。心身の安らぎの場であれば祭は鎮魂にふさわしい場です。今、不安な魂は安全と安心に安らぎを求めています。安全は科学的な根拠で測る客観的な状態、安心はその安全を受け入れて心が安らかになることです。安全は科

学で安心は精神の分野です。私には”安全安心の五輪“と聞く度に、国力でかなわない米国へ大和魂で戦争を仕掛けた神国日本の姿が重なります。安全だから安心”ではなく”安心だから安全“だと言っているだけです。この“安心教”念仏は神国日本は必勝と唱えていることと何ら変わりません。鎮魂の祭だと思ったら悪霊祭で私たちの魂は踊らされているだけ。さて祭りの後は、踊りを止められないままに踊り狂う八月か、あの七六年前と同じ鎮魂の季節となるのか。

注1：「五輪書」宮本武蔵「不動智神妙録」沢庵和尚など剣法書に見られる根本思想。

狂言綺語九十五・信仰者

毎月第一日曜一六時からは”無量寿経“読書会の時間です。インターネットを通じて五人で行うこの読書会は、司会者がそろそろ次回の担当者を決めましょうと切り出さなければ、いつまでも時を忘れて語り合う無量寿経を通して豊かな時間を共有するひとときです。学生の頃は仲間を誘って読書会を始めても大概は三回も続けば良い方。サークルや家庭教師の時間などでスケジュールが合わずに一人欠け、二人欠け、あっと言う間に自然消滅です。学生の頃は読書会より楽しいことが多く、優先順位が高くなかったということなのでしょう。

琉游舎の読書会は始まって四年以上経ちます。第二第四火曜日の十三時から一時間半ほど、年末年始を除いて休みなく続けているので、恐らく百回ほど行っているはずです。テキストは”法華経“”般若心経“”歎異抄“”ダンマパダ“と読み現在は”立正安国論＆消息文“を読んでいます。私がレジュメを作りテキストの解説をし、それについて皆さんの感想や疑問に答えていくという形式なので、読書会というよりは私の仏教理解をテキストを通して皆さんにお話ししているといった方が正しいかもしれません。しかし回を重ねるにつれてそれが単なる解説ではなく、語ることがすなわち行ないの道を歩んでいるということに気づきました。語るためにはまずテキストを読み込み解説書をいくつか紐解き理解を深め納得し、そしてそれがどのような行ないに結びつくのかを身にあてて読み込むことで、初めてありのままにそのテキストを観ることができることに気づいたのです。私が語った言葉が自らの行ないを写す鏡となり、聞き手の疑問や感想となって照らし出されます。これは私が皆さんに仏道を語っているのではなく、映し出された鏡の中に自分の行ないの現在を観ているのです。私の現在をありのままに観ることの出来る貴重な機会は、自ら望んでも簡単に得られることではありません。だから私はこの読書会を一人でも参加される方がある限り決してやめることはないでしょう。

無量寿経は浄土三部経のひとつで観無量寿経、阿弥陀経と合わせて念仏の徒には信仰のより所となる所衣の経典です。特に浄土真宗では最重要のものです。この読書会の構成員五人は、浄土真宗髙田派の住職でフッサールの現象学を専門とする元哲学科の教授。彼の子息で昨年横浜の小学校の教師を辞め、故郷の三重の寺で寺子屋活動など新しい寺のあり方を模索し始めた副住職。資産運用のプロとしてまだ現役の銀行マンを続けながら得度した浄土真宗本願寺派の僧侶。大学名誉教授は国語教育学の泰斗、仏教には門外漢といいながら博覧強記からくり出される素朴な質問は、よかれ悪しかれ経典の言葉に慣れてしまった僧侶四人には意表を突く新鮮なものです。そして私は法華経を所衣の経典とし、日蓮を行ないの師と仰ぐ僧

侶、日蓮の弟子です。

琉游舎の読書会で読む〝立正安国論〟は、浄土宗の創始者法然を謗法[注1]を広める悪僧として徹底的に弾劾し鎌倉幕府に念仏の徒を排除しなければ国難は収まらないと訴えた建白書です。浄土真宗の祖師は親鸞です。親鸞の師は法然です。私は法然、親鸞と続く念仏の徒の聖書とも言うべき無量寿経をその弟子たちとともに読みながら、一方で彼らを排除せよと訴える日蓮の告発書を同時に読むという、宗門宗派をよりどころとする僧侶双方から見れば自己矛盾に満ちた行為をしていることになります。例えが適切かどうか分かりませんが、旧約聖書の内容をイスラム教とキリスト教の双方の立場から読んでいるようなものかもしれません。因みに日蓮が他宗を邪宗として非難したときに用いた有名な句に四箇格言があります。念仏無間（念仏は無間地獄に落ちる）、禅天魔（禅は天魔の行為）、真言亡国（真言は国を滅ぼす）、律国賊（律は国賊）の四つです。これを日蓮から投げられた人たちが怒り狂い彼を襲い、権力に訴えて処罰するように要求することは無理もないことです。なぜ日蓮がこの言葉を投げかけなければならなかったか、彼の生きた時代と行いの中で評価しなければならない言葉ですが、あえてここで引用した意味は、この言葉を投げかけ、投げかけられた人々の弟子たちが、ズーム会議システムを使い空間を越えて、豊かで安らかな信仰の時間を共有しているという事実があり、私はこの姿がこれからの信仰の在り方を指し示しているのではないかと考えているからです。

世界は様々な立場の宗教で溢れています。各々がその宗教の立場に従って行動する限り行きつく先は対立です。宗教戦争、異端排斥、宗教弾圧、廃仏毀釈など、それらは宗教の本質と全く相いれない人を不幸に導く結果を引き起こします。一方それぞれの立場を尊重し、領域を侵犯せずに相互理解と共存を図れば世界宗教会議の名のもとに一堂に会することも可能でしょう。しかしそれは国連みたいようなもので、自分の立場と領分を確保したうえで表面的な理解を図るだけのおしゃべりの時間に過ぎません。宗教という言葉を使うとき、行いは対立を生み出し、共存はおしゃべりの時間でしかないとしたら、私は宗教を語ることをやめ自分だけの信仰を実践していきたいと思います。私は日蓮宗の宗教家ではなく、日蓮の行いに共感を覚えその意思を引き継いでいきたいと〝願い誓い行う〟日蓮の誓願の信仰者であり、実践者でありたいということです。

今ここに、私は初めて自己を〝信仰者〟と規定しました。その契機は無量寿経の読書会です。四年間重ねた琉游舎の読書会は、宗教家としての自己の行いを写す鏡であるところまでは分かりましたが、そこに写された私はどうやっても日蓮宗の僧侶である私を写す鏡以上のものではありません。ところが無量寿経の読書会に写る鏡は乱反射するのです。五人銘々の鏡に無限連鎖のように反応し屈折し乱反射した私は、日蓮も親鸞も他力も自力も題目も念仏も様々に反応し合い、その教えや言葉が無無意味化する一瞬が確かに表れるのです。それが宇宙の真理に触れる瞬間と私は信じています。その可能性はいわゆる宗教の中にはありません。そのドグマ[注2]を軽やかに越える瞬間こそが、新しい信仰の在り方です。これを明らかにすることが信仰者である私の行いの日々なのです。

注1：仏法をそしり、真理をないがしろにすること　注2：教・宗派における教義のこと

狂言綺語九十六・発心

自分の誕生日を忘れる人はいないと思いますが、うっかり家族の誕生日を忘れていて慌てて取り繕った経験がある人も多いのではないでしょうか。結婚記念日を忘れていたりしたら大変です。どのような形であれそれについて大きな代償を払うことになることは間違いないでしょう。その人にとってその日そのことが重要であればあるほど忘れるはずもなく、節目の一日として特別な日となるのです。だから一年に一回の記念日は過ぎた一年を振り返り、次の一年へとまた歩み始める節目の日として、人は祝福し合うのです。

国の記念日の一つである祝日は年間一六日あります。私の子供の頃は数も多くなかったので、学校が休みになる祝日を心待ちにし、その日が日曜と重なるとがっかりしたものでした。ところがいつの間にか月曜日が振替え休日になったり、祝日の一部を月曜日に移す「ハッピーマンデー制度」ができたりで、記念日が日にちとして固定されなくなりました。特に今年の七、八月にかけての祝日はカレンダーの変更も間に合わず何の休みの日か訳が分からない状態です。私は毎日が休日のようなものなので“市役所がやっていないけどどうして?”と尋ねて始めて祝日に気づく程度で影響はありませんが、勝手に祝日を異動されて困った人も多かったはずです。記念日が固定されない記念日はさして重要ではない記念日ということなのでしょう。”海の日“ ”体育の日“ 山の日”より五輪の方が重要だったことは言うまでもありません。因みに記念日としてさして重要と国が考えていない記念日は上記の他に“成人の日”” 敬老の日“ です。一月一五日と九月一五日の祝日は月曜を休みにして連休にあてるために固定日ではなくなりました。私は四月六日の誕生日を特別の日と思うには馬齢を重ねすぎてしまっていますが、とは言え四月八日のお釈迦様の誕生の日に間違ってお誕生日おめでとうと祝福されても私は喜ぶ気にはなれないでしょう。他者にとってはどうでもよい日も当事者にとっては特別な日が記念日です。成人の日や敬老の日は果たして国民や国にとって特別な記念日なのでしょうか。それとも当事者の皆さんにとっての節目の一日になるには” 成人”も” 敬老“ も実体のない言葉となってしまったのでしょうか。

成人になることを祝福されず老人になることを敬われないとしたら、誰も成人になりたがらず誰も老人になりたがらないでしょう。今の日本は成人になることも老いることも拒否する人で溢れかえっているような気がします。子供のままの大人と老成しようとしない老体ばかりといえば言い過ぎでしょうか。成人や老人になることが心から祝福されない社会は、子離れ親離れができない親子と既得権を手放さない大人たちでいのちの順送りが機能不全を起こしている社会です。人は心から願いそれを行ない祝福されてこそ前に進むことのできる生き物ではないでしょうか。節目は自分の過去を確認し未来を見つめるために必要な時です。その時を越えて進むことが成人しよう、あるいは老人であろうと発心するということなのです。老いることは「良き生」を生きてきた人が「良き死」に向かって生きていこうと発心することだと私は考えます。同様に、成人になることは今まで親の生を分け与えられて生きてきた若者が、これからは人に自分の良き生を分け与えるために生きていこうと発心することです。発心なき生が良き生であるはずがありません。なぜならば、発心なきところに願いも誓いも行いもなく、またその発心を祝福し見守る眼差しも存在しないからです。

一般的な意味で言えば発心は“物事を始めようと思い立つこと”ですが、私たち信仰者にとってそれは

信仰者であり続けることと同義なのです。お釈迦様を信仰する者の発心は菩提心を発することです。仏の悟りを得ようとする心を起し、仏道に足を踏み入れることです。そしてその仏道を歩み続けることが発心です。道で止まるものは信仰者ではありません。願い誓い行い続けて歩を止めない者が発心する信仰者と呼ばれるのです。信仰者がなぜ発心する者であり続けることができるか、それはお釈迦様が常に信仰者を見続けていてくれるからです。その眼差しは仏の慈悲、教え、法灯明、などと呼ばれるもの。その眼差しを感じるとき信仰者は大きな喜びに包まれます。その喜びの日々が安らぎの処へと歩み続けるありのままの日々なのです。

法華経方便品第二の訓読経文です。「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を**開かしめ**清浄なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生をして仏知見を**示さん**と欲するが故に世に出現したもう。衆生をして仏知見を**悟らしめんと**欲するが故に世に出現したもう。衆生をして仏知見の道に**入らしめん**と欲するが故に世に出現したもう。」これが仏様の発心であり誓願であり行ないです。これを「開示悟入」といいます。仏様が世に現れた目的は「世の人々に、仏の智見を開き、示し、悟らせ、仏道に入らせること」です。私たち仏の信仰者はこの仏様の発心を知り、引き受け、つなぎ、次に引き渡すために存在する者です。仏様の発心を私たちが引き継ぐこと、これが仏様の永遠のいのちをつなぐことです。私たちはかけがえのないその繋ぎ役の一人です。その繋ぎ役が誰もいなくなったとき、私たちの永遠のいのちはそこで終りを迎えるのです。

何者かであろうとする発心がなくなったとき、何者かである実体はもはやないものとなります。祝福されない者に人はあえてなろうとはしないからです。信仰者である私は常にお釈迦様の祝福を身に纏っているので、私のいのちが次へとつながることを確信しています。一方私は今、社会的立ち位置としては成人から老人へと自らを順送りにしていくところにいます。しかし今私たちの社会は成人や老人になることを誰もが心から祝福する社会でしょうか。成人や老人を引き継ぐ者がいなくなったとき、その存在はそこで終りを迎えます。私は私の成人をどこに引き渡せば良いのか、そして私はどこから私の老人を引き受ければ良いのか、信仰者の私が現在の日本社会の中で生活している限り、避けては通れない難問です。

狂言綺語九十七・引導

お盆前後に梅雨が舞い戻ったかのような天気が続きましたが、どうやらあれは秋雨の走りだったようです。八月下旬に暑さが戻っても梅雨明け直後のような強力な陽ざしは現れず、にわか雨が一日のどこかにはやって来てそのまま九月に入ると前線が本州に居座ってしまいました。これは紛れもなく秋雨前線のようです。私の作る畑の作物は今年の安定しない夏の陽ざしと気温で大分迷っているようです。例年であれば夏野菜はほぼ終了して空いた畑に大根や白菜、青菜の種を蒔いているのですが、今年はまだ夏野菜が居座っているため、畑が思うように空きません。例年であればそろそろ枯れ始めるミニトマトもピーマンもまだまだ採れ続けオクラはやっと採れ始めたばかりです。これから最盛期が来ると信じているのか、あるいは延命策を講じているのか、自然任せの夏野菜たちは自らに引導を渡せず、私同様やきもきとしているのではないでしょうか。

私は五八歳で会社を辞めました。五八歳が役職定年だったからです。六三歳まで会社で働くことや系列会社に転じる選択肢もありましたが私は信仰者の道に引導されたのです。「引導」は人びとの先に立って導くことですが、仏教用語になると迷っている者たちを悟りの世界へ導くことを意味します。引導されたその時の私は信仰心のかけらもなく経文の一つも読んだこともなく、信仰から一番遠いところで会社の利益のために毎日を生きる典型的な会社人間でした。だから誰が私を引導したのかと言えば、それはお釈迦様でも久遠実成の釈迦牟尼仏でも阿弥陀仏でもありえません。私を引導して下さった人びとは会社であり部下であり私を取り巻く社会システムです。社会の中の引導システムの一つが定年制や任期制です。後進に道を譲ることや、ポストを明け渡すと言うことです。しかし“余人に代えがたいから任期を延長します”や“若い者にはまだ経験不足だから任せる訳にはいかない”といってそのシステムを恣意的に変更して引導を無視することもできる脆弱なシステムでもあります。自然界では自然環境が生き物を引導し次の世代にいのちを繋ぐシステムができています。それが四季の巡りです。だから今夏のようにまだ引導されていない作物たち自身がやきもきする年があっても、来年もまた何事もなかったように繋がれたいのちの実りを私は受け取ることができるのです。

引導はそれを渡すことができて初めて成立します。”引導を渡す“は、葬儀の際に導師が棺の前に立ち、死者が悟りを得るように引導文を唱え人を仏のもとへ導き今生への別れを告げる儀式を言います。ここでは今生の別れのつらさだけが際だってしまいがちですが、この儀式の本質は全ての生き物を仏の道に導くことにあります。僧侶は亡くなられた人が仏様と共に永遠のいのちを新たに生きて下さいと仏道にお渡しする役割を担っているのです。そして仏様が確かにその引導を受け取って下さり、その結果残された人びとの心の中に永遠のいのちとして生き続けることを明らかにします。これが”引導を渡す”と言うことです。自然界では自然がいのちを繋ぐ役割を担いますが、人間界では人の手を介して行わなければそのいのちの行き場がなくなり鎮魂されない彷徨える魂で溢れてしまいます。これは死者の魂だけの問題ではありません。社会システムの中で生者が引導されるときその受け手は誰なのか、新たな仕事が受け手か、趣味か、社会貢献か、孫の世話か、それは人それぞれにふさわしいところに渡されるはずです。今までの経験やノウハウを引き渡すように社会が要請（引導）し、次の自分にふさわしい役目を渡され引き受けることです。この社会的引導システムが機能しないと社会は停滞し不安や不満が起こります。社会の共有財産であるはずのものがあるべき形で継承されず、受け手のいないまま特定の個人のところで行き止まりになってしまうのです。これは共有財産を勝手に私物化しようとする人びとの執着心の仕業です。一方渡されない引導を受け取ろうにも受け取れないままの社会はいのちが繋がれない社会です。引導が機能しない社会は「貪欲・瞋恚・愚癡」の三毒[注1]に支配された世界です。貪りと憎しみと無智に溢れた社会に生きる私たちが幸せであろうはずがありません。

最近山登りをテーマにした番組をよく見かけます。しかしどの番組も登山シーンだけで下山シーンを描きません。登山中のつらさや植物や景観をエピソードにしながら、頂上に着いたときの達成感を描くことが基本構成であることは理解していても、山の下り方に興味のある私にはどの番組も消化不良のままに終ります。地図に記載されている登山道であれば、足を前に踏み出し続ければ必ず頂上に辿り着きます。急登の岩場であっても手足を使えば足を踏み外すこともなく登ることができます。登り方は誰に教えられることもなく自然に身についたようなのですが、下りは私にはとても難しい歩き方で、未だに身につかずい

つも滑ったり転んだりしています。私には山は登ることよりも下りることの方がはるかに難しく危険なことなのです。理由は簡単です。登る過程の苦労と頂上に着いた達成感とを、そこから下りることで無に帰したくないからです。頂上で味わった喜びに未練と執着があるからです。人は登り続けることはできても自ら下りることができない生き物なのかもしれません。ただ登ったら下りなければ家に帰れません。だから私は山の神から渡される引導を不本意ながらも受け入れて、自らの足でよろけつまずきながらも山を下っていくしかないのです。

五八歳の時引導された私のいのちはお釈迦様に渡され受け取ってもらうことができました。そして私は信仰者となることができたのです。私は社会が引導しお釈迦様に手渡しされた私自身をあるがままに頂くだけでした。山の下り方も同様に山の神の引導をありのままに受けいれて心地よく山を下りたいのですが、何かから下りることはどうやら簡単なことではなさそうなのです。だから引導システムが正しく機能する必要があるのですが、今の日本のそこかしこの頂上は居座って突き落とされない限り下りようとしない人で過密状態の有様にみえます。

注1：仏教では人間の諸悪・苦しみの根源で克服されるべきものとされる

狂言綺語九十八・自力と他力

先日檜枝岐村に行ってきました。目的は燧ヶ岳に登るためでしたが六合目を過ぎた熊沢田代の湿原地帯で雨が本降りになったため、無理をせず引き返してきました。雨で川のようになった急坂の岩場を滑りながら転びながら何とか登山口まで戻ることができました。頂上に辿り着くことができずに引き返したため気分は消化不良ですが、旅館のチェックインまで時間に余裕があったので振り仮名がないと読むことが難しい檜枝岐村（ひのえまたむら）に興味を持つことができました。名前から類推すると桧の枝のように道が二手に分かれている分岐の場所ということでしょうか。実際ここから新潟魚沼に通じる道と群馬の沼田に通じる道が檜枝岐で一本になり、会津若松方面へとつながっていきます。現在車で檜枝岐から沼田へ抜けることができません。峠を下るとそこは尾瀬です。昔は人馬が行き交った尾瀬の袂を通る沼田街道は、今は徒歩でしか歩くことができないのです。尾瀬の自然を保護するために昔の幹線道路は、現在徒歩専用道路となっています。

檜枝岐村は日本有数の豪雪地帯です。二〇年ほど前までは一晩で一㍍も積もったそうですが、最近はせいぜい三〇㎝だとのこと、それは助かりますねと言ったら否定をされました。雪が沢山降らないと尾瀬の植物が元気に咲き誇らず作物も美味しくならないとのことです。雪の下でエネルギーをため込んだ植物の根が雪解け水と初夏の太陽で一気にパワー全開となるからでしょう。雪が多いことの苦労を歎くことよりその雪を恩恵と考え利用することで生活を豊かにできる人びとには、雪をありのままに受け入れる智恵が具わっているに違いありません。雪の冷蔵庫は凍らせることなく食物を保存できるでしょうし、雪が降れば降るほど雪に覆われる保温効果で村全体がかまくらのようになり、思いのほか暖かい冬を過ごせるようなのです。

「ロバを連れた老夫婦」という寓話があります。最近ではトヨタ自動車の社長が株主総会で、マスコミ

の何でも批判する論調を逆批判する文脈で引用していました。話の粗筋は「ある峠道にロバを連れた老夫婦がロバに乗らないで、ロバを連れていると『ロバがいるのに乗らないのか?』『それはもったいない』と言われ、ロバに二人で乗っていると今度は『ロバがかわいそうだ』と言われ、ご主人だけがロバに乗っていると『威張った旦那だ』と言われ、逆に奥さんだけがロバに乗っていると『あの旦那は奥さんに頭が上がらない』と言われる」という寓話です。話のバリエーションはいくつかあっても大意はみな同じです。日本の小学三，四年生向けの道徳授業に「周囲の意見に流されない、自主や自律の大切さ」を学ばせるための教材として「ロバを売りに行く親子」のバージョンが利用されているようです。同じ寓話でも批判をどう受け取るかで引き出される教訓や結論が違ってきます。トヨタの社長が引用した理由は「勝手なことを言う前になぜ老夫婦がロバに乗らずにいるかの理由を理解しなさい」という事でしょう。教科書は「考えがあってロバに乗らずにいるのだから他人の意見に右往左往してはいけない」という事だと思います。寓話は何らかの教訓を人に与えることが目的ですから、人間感情を典型的パターンに類型化しないと寓話として成り立ちません。「もったいない」「かわいそう」「ずるい」「おかしい」などの間で動く感情の揺れをある判断に類型化していくことで教訓を成立させているのです。そしてそこに社会の価値基準を適用したものが道徳です。ところが仏教は人間の感情を執着という言葉で認識し、その執着からどうやったら自分自身が解放されるかを実践する宗教です。仏教術語で言う「真如」や「実相」や「空」、つまり「ありのままに観る」ことは社会が求める人間感情の類型化を拒絶することです。そこから行ないが生れそれが悟りの道であるという教えです。

もし私がロバを連れた老夫婦を見たらどのように観るでしょうか。まずそこで彼らと出会う因縁があります。私にも「もったいない」や「おかしい」などの感情が生まれるかもしれません。しかしその感情を整理したり判断しないことが「ありのままに観る」ことなのです。もしそのまま何事もなくロバが私の前を通り過ぎればそれも彼らとの因縁です。またロバの息が荒いことに気づいたとしたら「老夫婦は疲れたロバを労っているんだ」と思うかもしれません。これも因縁です。その時「ご苦労様」の声を掛けるかもしれませんし、そのまますれ違う行きずりの光景となるだけかもしれません。その因縁のなせるがままに行うことがありのままに観るということです。感情を価値判断することで行動がなされることでは決してないのです。それは社会規範や道徳からまったく関わりの無い、なにものにも束縛されない自由な心と行ないなのです。

それではあなたは流れに流されるままに生きているだけではないか、どこにあなたの自己はあるのか、という批判は当然あるでしょう。信仰者が流れのままに委ねる流れは言うまでもありませんが法律や倫理や利害ではありません。仏教の根本の世界観は諸行無常、諸法無我、つまり世の中のすべての現象は常に因縁によって変化生滅し永久不変なものはなく、不変の実体である我（自己）も存在しないという考えです。そしてその流れ自体が涅槃寂静、つまりやすらぎの処そのものなのです。法華経に信を置く私の流れは久遠実成の釈迦牟尼仏の示す永遠のいのちです。念仏の徒にとってのそれは阿弥陀仏の救いです。その流れのままに流されることが「信」に身を委ねることです。身を委ねることは自力の仕業です。そして流れ自体は他力の仕業です。どこまでが自力でどこまでが他力などと言う議論は無意味です。自他一如、自他不二なのです。

桧枝岐の道の駅では新鮮野菜を売っていません。理由を尋ねるとキノコも山菜も野菜もそのまま食べる

以外はすべて貯蔵用に塩漬けにするからです。半年間の食料をため込まないと春を迎えられないのです。ありのままに豪雪を受け入れた彼らの智慧、と称賛することは容易ですが、顧みて私の日々の日常ではありのままに受け入れて生活していることが何かあるのだろうか、と振り返る桧枝岐紀行となりました。

狂言綺語九十九・無念と残念の間

秋分の日の翌日にまた桧枝岐村に行ってきました。前回から二週間経っただけですが、景色は大きく変化していました。道中一面に白い花が咲いていたそば畑は茶色く枯れて実を付け始めているようです。地上が白から茶色に変ったことと対照的に、上を見上げると緑が茶や赤や黄の色に変わり始めています。桧枝岐村の高い場所では少しずつ葉っぱの色が変化し始めているのです。今回の桧枝岐行きの目的は言うまでも無く前回雨のため六合目で登頂を断念した燧ヶ岳への再チャレンジです。天気予報は晴れ、今日こそは頂上から尾瀬の絶景、東北関東の山々の雄姿が見られるはずと早朝四時半の出発、二時間以上のドライブも苦にならず勇躍して到着した御池登山口の駐車場は白い雲が垂れ込めていたのでした。朝方の靄だろうと楽観的に考えて登り始めては見たものの、八時になっても九時になってもその白い靄は晴れず、これはぶ厚い雲だと断定せざるを得なくなりました。雨に降られることはなくても見上げる景色は前回と全く同じ真っ白。途中の湿原は赤茶色に紅葉した草紅葉のカラフルな世界に変っていましたが、燧ヶ岳があるはずの目線の先は無色の世界です。

白い雲を掻き分けるように黙々と登り続けたおかけで、予定より早く最初の頂上俎嵓に到着。そこから最頂部の柴安嵓まで二〇分ほど。柴安嵓の頂きは広々として見晴らしが良く、お昼を食べたり写真を撮る登山客で賑わっているはずですが、間近にみえるはずの頂きは全く見えません。案内板はなくても間違いようのない道だろうと登山者のあとをついて行ったら、実はそれは下山道の一つだったようで、下るばかりでいつまでも登りが始まらないことに気づいたときは後の祭りで大幅ロスでした。気を取り直しまた柴安嵓を目指し、ついに何も見えない頂上に立ったときはもうこれで燧ヶ岳は満足したことにするか、もう一度晴天の日を狙って再々チャレンジするか、でも天気予報が当たる保証はないしと、達成感に浸るはずの頂上であれこれと迷っている始末です。身の丈に合った決して無理をしない私の山登りの最大の効用は、頭の中を空っぽにできることです。登る途中の、疲れた休みたい喉が渇いた、あの森林の切れ目がひょっとしたら頂上かなどの雑念が頭の中で渦巻いていたものがあるとき急に空っぽになる瞬間があります。念がなくなること、つまり「無念」になる瞬間です。無念は仏教用語で〝妄念のないこと。迷いの心を離れて無我の境地に入り、何事も思わないこと。〟[注1]と言う意味です。悟りの境地、やすらぎの処です。無念であれば迷いが起きるはずがありません。私の数少ない無念のときは、山登りと経を読んでいるときに突然顕われ、一瞬にして去っていきます。その貴重な瞬間をムダにするかのように、東北以北では一番標高の高い山の頂上であれこれと迷っているようでは信仰者の登山姿ではありません。真っ白な頂きから観る真っ白な景色もまたありのままの景色なのです。

風がサーッと吹き抜けていった瞬間に人が崖の方へと動いていきました。雲が風に流されて尾瀬沼の風景が現れたのです。青い水面と湿原の草紅葉が鮮やかなコントラストを見せ、遠くの山々も見えるかと思

った瞬間、また白い雲がやって来て絶景の幕を閉じていきます。幕開きの時間は十秒くらいでしょうか。一瞬の絶景に上がった人びとの歓声が落胆の声に変った瞬間です。しかしまた次の機会がやって来ます。その間五分くらいでしょうか、また風が雲を飛ばし一瞬の青空、そして尾瀬沼の湖面に映し出される空の青。しかし雲の合間に垣間見えたその景色もまた瞬く間に閉じられていきます。その光景の繰り返しに、もっと絶景を堪能したかったという念を残しながら下山を始めました。無念と残念の間を行き来する燧ヶ岳登山行でした。

私は残念と無念の間を行き来し、それをありのままのことと受け入れることがやすらぎの処への歩む行ないと考えます。頂上からの一瞬の絶景に全ての念を忘れて無念になること、しかしそれが瞬く間に遮られて残念の思いに襲われること、頂上での短い時間と狭い場所の繰り返しの経験は、私たちの日常生活の残念と無念の繰り返しの象徴であることに私は気づきました。私たちの日常は悟りと迷い、執着と諦観、無我と我との間を行ったり来たりの繰り返しです。無念と残念の間を生きているのです。悟りや無念は厳しい修行をした僧侶や長い年月を寺で経を読み法話を語ってきた高僧たちの特権ではありません。ランニングをしているとある瞬間を過ぎて頭が空っぽになり重かった足が急に軽くなることがあります。私が走るのではなく体が勝手に走ってくれているのです。ランニングハイというのでしょう。仕事や趣味や勉強に集中していると、時も忘れ寝食も忘れることがあるでしょう。私が山登りで無念になる瞬間は足の存在を忘れる時です。この重い足を一歩一歩前に進めれば頂上へたどり着けるはずだという念がなくなるときです。私が読経で無念になる瞬間は読経を忘れる時です。字と意味を読まなくなったとき声だけが私の体の中から発せられます。

あることに自分の心と体を向けて行うとき、私たちはそこに心と体を集中させます。集中すればそれ以外のことへの意識（雑念）が無くなっていきます。そして意識を集中しようという意識も無くなったときが無念のときです。無我、悟り、諦観です。ただ私たちはこれを無念と残念のときと二つに分けて生活をしているわけではありません。この二つの念を無意識の間に行ったり来たりしていることが私たちの日常です。無念と残念は不二であり一如です。背中合わせの表裏一体、一心同体です。残念があるから無念があるのです。仏教の原則である因縁縁起の考え方からすると悟ったという固定的な状態はあり得ません。だから無念の境地を得たという高僧がいたとしたらそれはまがい物の仏教者です。もし悟るという言葉を使うとしたら「私たちはどうやっても無念の境地に居続けることはできないといことを悟った」ということが「悟る」です。あたり前の生活の中で残念を残念がり無念の瞬間を喜ぶ。その日常そのものがやすらぎの処であり私たちの悟りなのです。

注1：デジタル大辞泉

狂言綺語百・三十三応身

日本人がいろいろな場面で活躍している姿は日本人である私には大変嬉しいことです。直近ではノーベル物理学賞の受賞やオリンピックのメダルラッシュ。オリンピック憲章は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的意見、国や社会的な出身、財産、出自などで差別を受けることなくオリンピックの定め

る権利と自由を享受出来ると謳っています。これはコスモポリタニズムと同義だと私は思うのですが、さて現実はどうでしょう。少なくとも日本人の活躍を見て喜ぶ私は日本人が戦っている試合で相手の選手やチームを応援することは決してありません。オリンピックこそナショナリズム発揚の最高の舞台だと思うのですが。

私たちが日本人というときは言語や出自や国籍で日本人と他国人を区別しているようなのですが、はっきりした定義があるのか私には分かりません。今回ノーベル物理学賞を受けた方は言葉も肌の色も名前も顔の作りもどう見ても日本人にしか見えませんが、受賞発表の場に写されたスライドにはUSAと記されています。選考するスウェーデン王立科学アカデミにとって彼は米国人であって日本人ではないことがよく分かります。しかし報道では日本人がノーベル賞受賞と持ち上げています。法的（国籍）には彼はアメリカ人という客観的な事実がありますが、私たちは心情的主観的に彼を日本人として見ようとするのでしょう。私たちに日本人としての民族意識を満足させ、日本人という曖昧な概念に求心力を与えるには恰好の材料だからです。

見慣れたという表現が差別的で不適切と感じる人がいるかもしれませんが、テレビに映るJーリーグや陸上、テニスなどで活躍する日本国籍を持つ、肌の色も顔の作りも私と異なる日本人を私たち日本人はようやく見慣れたのではないでしょうか。これもテレビなどの報道と彼らの活躍のおかげです。日本国籍という法的事実と主観的感情の乖離が私たちの中で埋められる過程に今あることが、見慣れたという日常的な感情表現となっているのでしょう。元日本国籍の人を日本人と呼び続けたいと思う日本人の心情と、人種や見た目がどうあろうとも日本国籍を持つ人を日本人として受け入れていこうとする心情の間に今立っているとするならば、今が「私たち日本人」という同質民族幻想のくびきを逃れるチャンスです。私がここで何回も「私たち日本人」と記述しなくても良いときが来れば、互いを日本人と分別する必要もなくなるはずなのです。

私たちは例えば国籍などの法的社会的立場や日本人としてなどの心情的な属性に拘泥しなければ、何者にでもなり得るはずです。私の毎日は例えば、父であり夫であり僧侶であり、先生や会長や住職と呼ばれ、運転手をやり、小学生とゲームをし、法要を行い、掃除洗濯食事作りと、たった一日の中でもこれらの役割を演じている事があります。演じるというと役者として虚構の自分を演じることと誤解されそうなので、例えば英語で言う“play”や“perform”の意味と捉えてもらった方が良いでしょう。日々の生活を「行なう」毎日を自由に「遊ぶ」という事です。今ある私に因縁縁起の法がある役を私に演じさせようとし、その役を私はありのままに演じればよいのです。私に「我」があればあるほど様々な役を演じることは難しくなるでしょう。逆に私が「無我」であろうとすれば自由にいろいろな役を演じることができるはずです。社会の役割や立場、国籍思想信条などの属性の衣装を脱ぎ捨てることができたら、つまり「無我」を獲得できれば私たちは何者にもなり得るのです。そして私には、何者にもでもなり得る私であるために願い誓い行う毎日があるのです。

観音菩薩は三十三身に応身すると法華経観世音菩薩普門品に説かれています。観音菩薩が世を救済するために、広く衆生の性格や仏の教えを受け入れる器に応じて、種々の形で世に現れるという教えです。仏のすがたを現して教えを語るべきものには仏の姿で世に現れ、童男童女の場合には童男童女の姿となって彼らに法を説いていく姿が全部で三十三身説かれています。どのような状況でも相手の立場や役割に応じ

て姿を変えてあなたの処に出向き一緒にやすらぎの世界に歩んでいきましょうと私たちを誘う三十三の姿です。法華経を表面的に読めば観音様に祈れば願いが叶うと誤読されてしまいます。それでは法華経は教えとしての価値がなくなります。法華経の文脈の中でこれを読めば、私の外側に観音菩薩がいて一心に祈り布施をすれば願いが叶うなどという詐欺まがいの教えは出てきません。三十三応身は私たち自身なのです。私たちが毎日演じている社会的法的家庭的個人的な種々の行ないが菩薩の三十三応身です。私の中に在る永遠のいのちが観音菩薩となっていろいろな姿の役割を自由にこだわりなく演じさせてくれることが菩薩の三十三応身です。仏も菩薩も私の外側のどこにもいません。それは私自身そしてあなた自身の中にだけ応身し、私たちが「無我」であろうとすればするほど菩薩は私たち自身の中にありとあらゆる姿となって現れ出て来るのです。

法華経の教えは私自身が仏であり菩薩であるという教えです。ただ私達はそれに気づいていないだけなのです。そしてまた私自身が地獄・餓鬼・畜生・阿修羅であるという教えでもあります。菩薩の三十三応身は私が餓鬼であれば餓鬼の姿となって私と共に行ないの道を歩んでくれるのです。それもやすらぎの処へと続く道です。そして気づけば私の中の餓鬼はいつの間にか菩薩となっていることでしょう。今の自分が纏っている種々の衣にこだわることをやめ、その衣を自由に脱ぎ捨て新たな衣を纏う心の自由とそれを楽しみながら娑婆世界を遊ぶ（遊此娑婆世界[注1]）「無我」のところにはいつでも観世音菩薩はやって来てくれるのです。

五輪の日本人の活躍に、政府の思惑通りコロナ禍の状況を私たちは忘れて熱狂しました。しかし終ったとたん無策の矛先は以前に増して政府に向かいました。ナショナリズムの熱狂は熱しやすく冷めやすいのです。国家の欲望と経済亡者の塊の五輪を終結させるためには国旗掲揚、国歌演奏、選手の国所属を止めるときかもしれませんね。

注1：法華経観世音菩薩普門品第二五

狂言綺語百一・檀那

企業のオーナーは功成り名を遂げると何かを残したくなるものなのでしょうか。有り余る創業者利益で球団を買ったり、美術コレクション収蔵のための美術館を作ったり、とスポーツ系か芸術系の大檀那になることが多いように思えます。私がかつて広告代理店の営業だったときは、オーナークライアントがスポンサーとなったチームの応援にしばしば動員され、美術館のイベントに賑やかしでかり出されたこともありました。本来は自腹で贔屓の球団の応援のために野球観戦し、どうしても見たい絵があるから美術館に行くものですが、時間外にも休日勤務にもならず仕事のようで仕事ではない、無料関係者パスを使っての観戦や鑑賞に慣れきってしまうと、好きだったスポーツや芸術もいつの間にか義務のようになって足が遠ざかるようです。

企業のオーナーがスポンサー（大檀那）となる事業で、私が仕事として関わった中でも特異な経験は豆撒きでした。創業者の命日にその一族が眠る寺院を取引業者およそ六十社ばかりの人間が墓参りに訪れ、法要の後に境内に組まれた櫓の上から地元の人びとに向けて豆撒きをするのです。ただ豆を撒くのではな

く、豪華な賞品が当たる抽選番号付きの豆です。毎年恒例のこの行事を皆さん楽しみにしているのでしょう。有名人がいるわけでもないのに沢山の人が訪れます。私も六十社の取引業者の一人として袴に裃を着せられて、櫓の上から豆を撒きました。節分の日にテレビでよく見る相撲取りや歌舞伎役者が豆を撒く光景そのものです。当時は仕事と思って撒いていたつもりですが、どこか心の奥底で、高みから人に施しを与えているというような不遜でごう慢な気持ちが芽生えていなかったかどうか、今思い起こすと冷や汗ものです。と言うのも、先日終ったばかりの選挙で各党から聞こえてくる公約は教育費無料化、十八歳までの子供に十万円給付、給付付き税額控除などなど。候補者たちが選挙カーの高みから得意満面に語る姿と、櫓の上から豆をばらまいていた私の姿が重なって見えてしまったのです。彼らは気持ちよさそうに税金をバラマキ、私も気持ちよさそうに豆をバラマク。施しを与える檀那になることはそんなに気持ちよいことだったのでしょうか。

檀那は旦那とも書きます。旦那は妻が夫を言う時や、商家の主人、金持ちや身分のある人を敬って使う言葉となっていきます。原義はサンスクリット語 dāna（ダーナ）の音写で「施すこと」を意味しましたが、「布施を施す人」へと転化していき檀那（ダーナ）となり、次第に金品を施す人（経済的な援護者）へと意味を拡げ、さらに富裕な家の主人も旦那と呼ばれる現在の使われ方となりました。檀那も原義から大きく逸脱した仏教用語の一つです。「布施」は金品を施すことなどの物のやり取りを表す言葉ではないのです。

ダーナ（布施）はやすらぎの処（彼岸）へ辿り着くための六つの実践徳目（六波羅蜜）「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧」の真っ先に上げられる、最重要の項目です。お釈迦様が生きていた時代の仏教では生産・経済活動は一切禁じられていました。ですから生きていくためには食を乞い（乞食）施しを受けなければならなかったのです。これが布施です。その場の光景は人が物をやり取りしている姿にしか見えませんから、交換（経済）に還元される行為に見えてしまうことでしょう。例えば寺院などが布施を受け取る行為を説明するとき「私たち僧侶は教えを皆さんに施します。代わりに皆さんは私たちに金品（布施）を施すのです」と語るはずです。これは「教え」と「金品」の交換の話です。行き着くところは経済活動です。経済活動を禁じられていたところから始まった布施がいつの間にか経済活動そのものになってしまった矛盾が今私たちの知っている「布施」なのです。布施は何かの対価でも交換でもありません。「行ない」なのです。

お釈迦様に食を施した人たちはかの人の肉体生命を維持するために食を施したのではなく、お釈迦様の教えが未来永劫実践され続けるための行ないだったのです。「行ない」は縁起の法則のままにやすらぎの処に歩み続けることです。お釈迦様に食を施した人もダーナであり、施した食もダーナです。人や物がダーナではなくその行為それ自体がダーナ（布施）なのです。お釈迦様が生きていた原始仏教の時代のダーナは、持てる者が持たざる者に与え、与えられたものたちがそれを集団の中で分かち合うことで仏教教団（教えの継承）を存続させてきました。これを肉体的な命から見れば、原始共産制に通じると見えるかも知れません。しかし根本的な違いがあります。原始共産制は人間の生命と集団の存続を目的とした経済政策ですが、布施の目的はお釈迦様の教えが永遠のいのちとなり生き続けることです。私たちはそれを行ないとして実践する者たちです。布施はそれ自体が目的で手段で結果であるような縁起法則に組み込まれた行ないなのです。だからそこに経済の入る余地はないはずですが、布施が集まると人はそれをあるがままにしておくことに我慢がならないようです。寺院は受け取った布施で豪華絢爛たる堂宇を建て、堂内を巨大な

仏像や金箔で荘厳することが教えの継承と考えたのでしょう、おかげで建物や仏像は今に継承され拝観や祈祷などで布施を稼ぎ出してくれます。今やお札や祈祷や壺や説法などありとあらゆる宗教商品は布施と交換可能です。行ないそのものである布施を何かと交換可能と考える仏教は「行ない」を金品に変えて何も「行なわない」仏教の騙りです。教えの代わりに物や権威や資本を継承して今に到った仏教は、どこで誤ってしまったのでしょうか。

この世で一番の大檀那は意外に思われるかもしれませんがお釈迦様です。お釈迦様は永遠の過去から未来まで、惜しみなく私たちに教えと慈悲の大盤振る舞いをして下さる大檀那です。選挙カーから税金を大盤振る舞いする者たちが「おれたちは日本国の大檀那だ」と嘯いても、彼らはバラマイタ税金は必ず利息を付けて回収する取立て屋です。大檀那と取立て屋の見分けのつかないこの国では、教えの檀那たらんと日々行ない続ける僧侶と、教えのバラマキで布施を我が物とする僧侶の見分けも甚だ困難なことに違いありません

狂言綺語百二・無所得

無所得となってもう五年が過ぎようとしています。失業保険をもらっていた期間以外は収入と呼べるようなものは今までありません。この間は妻の扶養家族となり税金も健康保険料も払わないですむ生活をしてきました。お金を稼ぐという日々に縛られない生活を許してくれた妻にはとても贅沢で貴重な時間をもらったと感謝しています。来年からは年金生活者です。収入と引替えに住民税や健康保険税を払うこととなります。一度収入から解放された生活に慣れてしまうと、生活用の口座に一定金額が定期的に支払われそこから定期的に支出をしてその金額の出入に注意を払うようなかつての生活に戻ることができるかいささか不安です。

無所得の五年間は経済的には貯金を取り崩す日々です。例えばある一定金額を貯金から三ヶ月おきに引き出し、生活費口座に入れるという計画的取り崩しをしていかないとすぐに貯金が底をついてしまいます。ところがこの考えには落とし穴がありました。仮に三ヶ月に一回四十万をとり崩すとすると、三ヶ月で四十万を使ってしまうのです。計画的取り崩し（収入）は計画的浪費（支出）と同じことだったのです。これでは給与生活者の時と根本的には何も変っていません。そこで計画することを止めてみました。すると三ヶ月に一回だった取り崩しが四ヶ月に一回となり、今では五ヶ月に一回です。計画経済に縛られた生活から解放されたとたん、支出も減ったのです。かつてはあった高価なものが美味しいや必要なものと考える価値観が、自然豊かな土地での行ないの日々で雲散霧消してしまったようです。因みに最近のご馳走は採れたてのつまみ菜と赤ちゃん大根を刻んで塩漬けにし、炊きたてのご飯と混ぜて食べる菜っぱ飯でした。これ以上ない至福の食卓です。

「所得」は通常では自分の所有となるもの、利益や収入などを示す言葉です。資本主義の世の中では有所得が多ければ多いほど人から称賛もされ、またそれを目標とした人々が凌ぎを削る勝ち組のための言葉で、これは「勝・負」「得・損」「多・少」などの相対立する二者のうちの前者に執着して初めて実現可能なことです。ところが仏法では「得られるものがあると考えることは、物事に執着すること」ですから、「有

所得」は否定的な意味となります。仏法の基本的な世界観「縁起の法」によれば所得も常なるものではありません。ないものを有ると誤って見てしまった状態が「有所得」です。私たちが生きる社会ではインフレともなればお札は紙切れに、貯蓄は印字された数字と化し得るでしょうが、無常の世界ではそもそもお札も貯蓄もただの幻影に過ぎません。紙切れでも数字ですらもありません。あると思えばある。ないと思えばない、思い込みの産物です。一方「無所得」は通常では収入がないことです。社会生活者として税金の支払いが免除されます。私はその無所得者の一人です。貧乏や負け組の代名詞のように聞こえますが、仏法では悟りの道を歩む教えの勝ち組です。これは決して負け惜しみではありません。仏法者の「無所得」は、なにものにも囚われない、執着から解放された自由の世界、ありのままに観ることのできる境地に在ることなのです。

私は仏道に入ったときに経済活動は一切やらないと決めました。これは給与生活者として自分の心身を元手に取引してきた毎日から離脱することです。それからは誰かの為や何かの為に行動するという行為の交換が一切必要なくなる日々を過ごすこととなりました。自分の時間や体力や気力を何かと交換することは、それに見合う「得る所のもの（所得）」が無ければならないはずです。それは智慧を巡らし計画を立てあらゆる手練手管で、相手より少しでも多くのものを得ることに執着しなければ損をしてしまう取引の世界です。私はその世界から離脱（出世間）する道を選びました。得るところが有る「有所得」の道から得るところを求めることを必要としない「無所得」の道です。そしてそれが安らぎの処へと通じる確かな道なのです。

「布施」と「所得」は全く異なるものです。所得は取引きであり交換によって獲得するものです。私の毎日の行為の対価で得たものがあればそれは所得となります。布施は人や物の対価ではありません。お釈迦様の教えを永遠のいのちとして繋いでいく行いそのものです。それがたとえ食物や金銭の布施行に具現化されているとしても僧侶や寺院や宗教法人が対価として受け取って私有してはならないものです。それを受け取ることのできる唯一の存在はお釈迦様であり教えそのものです。金銭に具現化された布施行を他の布施行に替えうる行ないはお釈迦様の教えを繋いでいく行ない以外にはあり得ないのです。この仏法者としてあたり前の大原則を破り布施を物理的な物品と意図的に解する者たちを破戒僧と言い謗法者[注1]と言うのです。布施を生活費や学費や外車の購入に交換する僧侶、人寄せのために飾り立てる豪華な寺院、世直しのためと称し政治献金する宗教法人、どれもこれもその原資は所得です。布施では決してありません。布施は行いです。その行いは無所得の行いです。無所得者は行い以外の何ものにも布施を替えることはできないのです。何者にも束縛されず、ありのままに観て、ありのままに行うことのできる者が無所得者です。その無所得者になり続けることが私の毎日です。その毎日は何かのためでも、何かに交換できるものでも決してないのです。

来年から年金を受け取ることになります。すると私は無所得者からまた有所得者となってしまうのでしょうか。これは難しい問題です。せっかくこの五年間を無所得者として自由でストレスの無い毎日を過ごすことができたのに、また年金に執着する生活となってしまうのか、とはいえ布施を所得の如くに使いながらこれは布施だからと強弁する謗法者のように、年金所得を無理やりこれは布施だから私は無所得者のままだ、という詭弁を弄すような狂言綺語を書くこともできません。社会の中で生きて生活している、限り、これを言葉の解釈や言い換えで示すことは不可能です。ただ日々の行いだけが、その答えを示すこ

とのできる唯一の方法なのです。

注1：仏法の教えを誘る者

狂言綺語百三・忍耐と我慢

先日家から車で四五分の塩原の温泉に一泊してきました。小旅行とも言えないほどの近場のプチ贅沢は栃木県民が県内の宿泊施設に泊まった場合に割引となる「GO TOトラベル」の栃木県版の利用です。温泉はいつも山登りとセットで疲れを回復するためという大義名分があったのですが、今回の場合は割引という餌に釣られての温泉行。一寸だけ得した気分の目的も名分もない不要不急の支出もたまにはいいものですね。

ここ最近コロナ禍で止まっていた活動が一気に動き出した感があります。車を運転していると年度末でもないのに必ず一箇所は道路工事の現場に遭遇して車を止められます。塩原の旅館の駐車場は一杯。久しぶりに夕食にと出かけたお店も予約客で一杯。一二月に入るとクリスマス商戦でショッピングモールは人で溢れかえることでしょう。マスコミはこれをリベンジ消費と名づけて人々に散財を勧めていますが、私たちは何に「復讐」してお金を「消費」しているのでしょうか。自粛で使いたくても使う機会がなかった反動の消費であればリアクション消費（反動消費）だと思うのですが、ニュースでしきりに〝リベンジ消費〟と言われると、復讐する敵もいないのにお金をあちこちで散財しなければならない気分にさせられてしまうようです。

そろそろ新型コロナウイルスに辛抱を強いられた日常も二年近くとなります。この間の、人それぞれの不自由や不要不急の有り様を一様に括ることはできないでしょう。不自由な社会と総括してしまうとそれはそれで納得してしまいがちですが、その不自由は各々事情が違うはずです。政府やマスコミが総括する不自由や不要を自分の不自由や不要と思い込まずに、何が私の不自由であったのかを考えることで、私のコロナ禍の正体が現れてくるはずです。経済的に困窮された方や、仕事に不便を強いられた方、コロナに冒された方の困難はお察しいたしますが、あえて私の観た私にとってのコロナ禍の正体を申し上げれば、それもありのままの日常の毎日であるということです。行いは停滞するどころか、ますます盛んな日々を過ごし、何一つ我慢の必要がありません。コロナ前にも増して自由自在に遊行する豊かで楽しく安らかな日々です。旅行に行けない宴会を開けない人と会えない、それが我慢の対象ではないと分かると打ち合わせやコミュニケーションは忍耐と工夫によって代替が可能となり、多くの時間を取り戻すことが出来るようになったのです。不自由や不要不急と自ら思い込まされていたものは、我慢すれば不自由、忍耐すれば自由だったのです。

お釈迦様の教えに従えば「忍耐」と「我慢」は全く正反対の言葉です。「忍耐」はやすらぎの処（彼岸）へ辿り着くための六つの実践徳目（六波羅蜜）「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧」のひとつ「忍辱」と同じ言葉です。人間、生きている限り苦境にぶつかり理不尽な思いに駆られることは当たり前のことですが、それをありのままのこと、縁起の法によって無常のものとみればその瞬間を耐え忍びまた前に向かって歩み続けることが出来ます。忍耐は明日へと向かう創造と再生へのエネルギーです。一方ありのまま

の今を受け入れることが出来ずに、不安にかられ我慢することは過ぎ去った「我」への執着です。かつての自分にとって望ましかった「過去」に執着すれば、そうでない「今」に対して抵抗するか我慢するしかありません。その「今」が我慢や抵抗の対象でしかないならば、いつまでたっても「苦」から解放されることはないでしょう。それは「執着」の成れの果てだからです。「我慢」は自己主張を押えた望ましい態度とみられ「忍耐」と同じような意味合いと誤解を受けますが、それは全くの過ちです。「慢」は心のおごり、煩悩のひとつに数えられるもので「我慢」は「我が心の傲り」です。我をよりどころとして心が高慢であること。自らを高しとし、自分自身に固執して他人をあなどることです。我慢は「今」をありのままに観ようとせず「過去」の我に執着する「我執」ですから、どうやっても「苦」から逃れることが出来ないのです。忍耐は、たとえ今この瞬間を不自由と感じたとしても一瞬にしてそれを過去のものとし、お釈迦様の教えと伴に「ありのままの今」を確実に歩ませてくれるのです。「忍耐」が彼岸への六つの実践徳目のひとつであることの訳がここにあります。一方「我慢」は「過去」への執着と「今」への不安や不満足の現れなのです。我慢の果てに我執の過去を再現したとしても、それは今への復讐であり未来に「苦」を再生産するに過ぎないのです。

コロナ禍の今、私の日々を「豊かに楽しく心安らかに過ごし、何も我慢をすることはありません」と語ったならば、現在つらく不安な生活を強いられている人や病で苦しんでいる人がいるのに、何と呑気で傲慢な言いぐさかと非難を受けるかもしれません。しかしそう言われる方自身、果たしてコロナ禍以前の過去は自由で幸福な日々だったのでしょうか。恐らく過去においても不自由で不幸な日々に我慢を強いられていたに違いありません。お釈迦様の教えは「不自由と自由は不二」「幸も不幸も不二」なのです。「我慢」には不自由や不幸の相が、「忍耐」には自由と幸福の相が現われます。コロナ禍の今も常と変わらず、ありのままに観てありのままに受け入れ、忍耐を友として自由自在に遊行する毎日が安らぎの日々なのです。

日本人は昔から仇討ちや仕返しなどの復讐譚が大好きですから、リベンジ消費の宣伝文句は経済や社会生活を傷つけたコロナウイルスへ、刀に変えてお金で復讐するのだと言う日本人好みのかけ声かもしれません。ところが最近の若者の間では「revenge」は「リベンジ」へと意味の転化があったようです。前者は復讐や恨みという陰惨な印象ですが、カタカナになると再チャレンジという前向きな意味になるとのこと。言葉の「陰」の部分を切り離して意味を転じる例は、中国語の「我慢＝煩悩」から日本語の「ガマン＝美徳」への転化と同じです。「revenge」が「リベンジ」へと意味が反転してしまう現象は「陰」より「陽」を好む、あるいは「陰」の部分から目をそむけたがる現代日本人の意識の表れかもしれません。

狂言綺語百四・業と行

コロナ禍のこの二年間、接待が仕事の重要な部分を占めるかつてのわたくしの職場でも、非常事態宣言期間中は、得意先の接待も社内会合（社内接待）も禁止されていたようです。役目柄退職前二年間の私は、夜の接待がほぼ毎日。土日は真夏真冬を除いて毎週ゴルフ接待。仕事でなければ出来なかったでしょう。会社のお金でご馳走を食べてゴルフができると羨ましがる向きもありますが、高価な食事をたらふく食べても翌日にはメニューや味や交際費の金額は忘却の彼方。それよりも昨晩の成果の刈り取りと今晩の接待

の段取りの確認に朝から部下とミーティングです。これではご馳走の味も内容も忘れてしまい、ゴルフの上達も望めませんね。でも接待はそれで構わないのです。それが仕事であるかぎり、接待は成果のためのひとつの手段です。コロナ禍でそのひとつを奪われたかつての同僚たちは、接待に代わる新たな武器を手に入れたでしょうか。

グルメでも酒豪でもなくゴルフは何度やっても一〇〇を切ることが出来ない私にとり、接待は苦手な分野でした。しかし接待がビジネスを良い結果に導く有効な手段と考えられる立場になると、相手に応じて内容や場所や会話を変えることが重要であることを学び、それを実践することで成果が上がることを知りました。現場には現場の、管理職には管理職の、役員には役員の、社長には社長の立場に応じて，店も料理も手土産も話題も変えていくことが肝要です。そのためには相手の趣味趣向はもちろん家族構成まで事前に知っておく必要があります。本人から直接聞くわけにはいきませんから、秘書や部下の方から事前取材して、情報を持ち寄って具体的な接待方法を決め，当日は段取りとみられないようごく自然な流れの中で計画を実践していきます。企業の目的は利益を上げることです。接待はそこに携わる人が智慧を搾り利益に結びつけるための手段の一つです。それは手段（方便）だけでなく強い意志（願い）を必要とするものなのです。そして接待は人をその歩むべき方向へ，自然とこだわりなく足を向けさせることのできる重要なスキルなのです。

法華経は私たちを「方便の教え」から「ありのまま（真実）の教え」に導くことがテーマとなっている経文です。「方便」とは「衆生を仏の真実の教えに導くための巧みな手段、仮の教え」と言う意味です。人それぞれの機根（衆生が教えを理解する能力や素養）に合わせて，段階を追って真実の教えに導く技術と呼ぶべきもので、この根底にあるものは「どんな方法をとってもすべての人を必ず悟りに導く」というお釈迦様の誓願です。「方便」は、お釈迦様の誓願を実践する弟子にとっては最も重要なスキルであり、やすらぎの処へと日々を生きることそのものなのです。その方便のひとつに接待があります。「接待」は布施行のひとつで，修行僧に門前で湯茶を供することです。現代でも四国八十八箇所の巡礼では各所に接待所が設けられ，巡礼者に茶菓などを振る舞う行ないが続いています。これは「サービス」ではありません。サービスは有償の行為、対価を必要とするものです。接待する者は巡礼者を仏の化身と信じ、その功徳により自分自身も仏への道を歩んでいるのだと確信を得ることのできる「行ない」です。ですから布施を受ける者はそれをサービスとして受け取ってはなりません。仏に成り代わって受け取っているのです。接待を施す者も施される者も、互いが布施のやり取りによって仏の道を歩んでいると言うありのままの姿があるだけです。「接待」は何も交換していません。そこにはただお釈迦様の願いを自分の願いとする「行ない」があるだけなのです。

意外に聞こえるかもしれませんが，私の会社員時代の営業と今の行ないは「願い」と言う一点に於いて全く同じ「行ない」です。会社員時代の目的（願い）は会社の利益のために働き（行ない）それが私や家族そして社会の中で豊かに楽しく心安らかに暮すことになると信じて日々を送ることでした。そのためには持てる手段（方便）をもって願いの実現のために働き続けなければなりません。会社員時代は「接待行」ではなく「接待業」です。接待を生業のひとつとして私の利益と相手の利益と会社の利益と社会の利益がひとつと信じ願って「業」を行うことです。目的のために手段を選ばないならばその業は利己的な利益に終止し、その目的が社会全体の利益となることは決してないでしょう。つまりそれは社会の目的には叶って

いない邪な目的なのです。目的が社会の願いであればそこへ導く手段は正しい手段です。ありのままの目的にはありのままの手段が自然と具わってくるものなのです。ですから五年前に「業」を「行」に変えた私の毎日は今も何も変りません。いずれもありのままの今を意志（願い）と巧みな手段（方便）をもって目的（誓願）を実現するための日々です。それが社会の中の「業」からお釈迦様と伴に「行」することに変っただけなのです。

法華経の一節に「若説俗間経書　治世語言　資生業等　皆順正法」注1とあります。「法華経を信じる者が、道徳についての書や政治の言葉や経済活動について説いたとしても,すべてそれらは正しい教え（正法）にかなった言葉である」という経文です。政治・経済・生活など、この世で行う営みのすべては仏道（正法）にかなったものなのです。これを「資生産業　皆順正法」と言います。殊更に世間や出世間と世界を隔てることも、会社員と僧侶と立場を分けて語る必要も全くありません。この世にある生きとし生けるもの皆が日々を「豊かに、楽しく、心安らかに」生きることが仏の願いです。その願いを自分の願いとして、それぞれの場所と立場と機根に応じてありのままに生きていくことが「業」と「行」であり、「皆順正法」なのです。

今年初収穫の大根で煮物とつまみと菜っぱご飯を作りました。かつて接待で食した何ものにも代えがたい美味です。誰でも作ることのできる大根を何故に高価な食材に比して美味と感じるのか、それは自然がこの大根で私を接待したからです。そして自然の接待行を有り難く頂くことが私の接待行なのです。この感謝の功徳によって来年もまた自然は美味しい大根を私に接待してくれることでしょう。

注1：法華経法師功徳品第十九

狂言綺語百五・國 国 圀

いつ頃までだったか、正月帰省の度にコリーナ近くの大槻の造り酒屋で搾りたての日本酒を六本購入していました。火入れをしない生原酒はすぐ変質してしまうため、自宅に戻り次第冷蔵庫に押し込んだものの、早くスペースを空けないと他のものが入れられないと言う理屈を付けて毎晩のように「搾りたて生原酒」を楽しんでいました。一月末には六本全て呑みきりまた翌年帰省するときまでのお楽しみとなっていたのです。

秋に収穫された新米を使って作られる日本酒がこの造り酒屋で初めて絞られるのは、毎十二月も半ばでした。詳しいことは分かりませんが、酒造りにふさわしい気温や湿度、杜氏の確保などの関係で初出荷はどうしても年末ぎりぎりになっていたと推察できます。また温度をコンピュータ管理できるような設備もなかった当時は、味も毎年異なっていたもので、去年と違う味にあれこれ蘊蓄を語り合いながら呑むことや、冬のわずかな期間しか味わえない限定感も搾りたて生原酒の大きな魅力でした。ところがここ最近はどの季節でも毎年安定した美味しさの搾りたて生原酒が味わえるのです。真夏でも酒蔵奥の大型冷蔵庫に保管された生原酒が購入できます。高レベルの美味しさも毎年一定で年による出来不出来の有り様はどこにもありません。まだ今年は出来ていないだろうと思いながら、久しぶりにやって来る息子と父を交えた親子三代で味わうために十二月十八日に買いに行ったところ、嬉しいことに初搾りがあったのです。今年

の初搾りはいつからですかと聞いたところ十一月の初旬ですとの言葉。驚きました。既に一ヶ月半前に味わうことができていたのです。正月帰省の度に楽しみだった「搾りたて生原酒」の味わいは今は昔、いつの間にか杜氏の経験知は学問成果に集約された醸造学とデータ蓄積されたﾊﾟｰ値に取って代わられていたようです。日本酒も職人技だけに頼らない、生産技術による安定供給と高品質商品の提供が可能な産業に仲間入りしていたのです。これを「矢板大槻の地酒」と呼んで良いものか、大槻にもある「美味しい日本酒」と呼ぶべき存在なのか、迷うところです。

経験知からデータ値への移行は使い古された言葉で言えばアナログからデジタルへ、つまり人が物事を認識したり判断したりすることで得た「知」を価値や大きさなどの数値に「値」化したものへと変換することなのです。これにより個人のものであった「知」が可視化され、誰もがアクセスできる公共財となっていくのです。そしてこの潮流はグローバル化をおし進め、経済的にも政治的にも平準化された世の中を実現し、いずれは国や民族という概念が消滅する時代を招き行き着くところ、世界はひとつの米国か、はたまたひとつの中国になっているかもしれません。あるいはグローバル化に抵抗するナショナリズムが今よりもっと細分化された国を作り出すかもしれません。現在主権国家の数は一九六カ国です。うろ覚えですが私が六歳の頃覚えた世界の国旗国名の数は百カ国ほどだったと記憶しています。地球の土地（land）の面積は変らないのに地球の国（state）の数は倍近く増えているのです。これからわたしたちの「国」はどこに向かうのでしょうか。

日蓮上人の主著「立正安国論」は打ち続く天変地異と社会不安について思索した結果、正法（法華経）に帰依する（立正）ことによって、国と民が安泰になる（安国）と確信して書かれた、鎌倉幕府への建白書です。上人自らが控えとして書いた真筆が国宝として現存しています。残念ながら私がこの真筆を拝読する機会は未だありませんが、いくつかの解説書を読むと上人はこの真筆の中で三つの「くに」を使い分けていたようなのです。「國」「国」「圀」の三種の「くに」です。「國」は旧字体で「或」は不確かなもの、未知のものを示す語です。境を設けた地域を武器で守る意を表し「國」となったものと言われています。簡略体の「国」はその境を設けた地域の中に「玉」がいます。玉座という言葉あるように「王」が統治する「王」のための「国」です。古い文書では「玉」が「王」なっているものもあります。「圀」は「民」が中に居ます。「民」のためにある「くに」と言う意味でしょうか。國はLand、国はState、圀はNationの義であろうとする説があります。「國」は私たちの住む国土。「国」は主権の行き届く範囲、国家。「圀」はその国土に住む国民や民族。その様に分類しています。これは非常に重要な視点だと思われます。満州侵略など、帝国軍の軍事行動の精神的バックボーンとなった日蓮主義が、国家主義思想として戦後の民主体制の中では強い非難を受けたことは日蓮上人の受難と言わなければなりません。「立正安国論」はまごうことなき圀家主義の思想書です。しかしそれは過去から今に到るまで正しく読まれてきませんでした。「立正によって安国を実現する」その主体である「くに」を都合のよいように解釈されてきてしまったからです。誤解か故意かは分かりませんが、日蓮上人の三つの「くに」を権力を行使する「国家」の文脈で一括りにして語られたことにあるのです。上人の圀家主義は「民」の住む「国土（或）」が「正しい法（玉）」によって「安国」となるための思想です。国民と国土と国権力が正しい教え（正法）に帰依することで実現される「安国」、つまり私たちの住むこの娑婆世界に霊山浄土を現前させるための「くに」であり「國」「国」「圀」なのです。

年によって味の異なる冬限定の「大槻の地酒」を心待ちしていた経験知の時代と、高品質の「大槻産の日本酒」をいつでも味わえるデータ値の時代は、経済のマクロ視点か個人嗜好のミクロ視点か、の対比ですから比較は意味のないことです。ただ私たちは足下から始めることしかできないのです。私たちの国土である「國」の現実の中で「国」という巨人に向かって、民衆のための「圀」というミクロ視点をもって語った日蓮上人の「行い」は、2022年を迎える今も、私たちのはじめの一歩であるべき行いです。矢板大槻コリーナ琉游舎から、新年も「豊かで楽しく安らかな」年であるように足下の一歩を始めます。そして一年後もまた同じように大槻の搾りたて生原酒を味わいながら2023年を迎えようとしていることでしょう。

狂言綺語百五・日記

日記をつけ始めて今年で六年目の正月を迎えました。学生時代に二、三度試みた日記を付ける習慣も、見事に三日坊主で終っていたことを考えれば、私にとっては驚異的な持続力です。三年連用の日記なので単純にその日に起きたことだけを記述するスペースしかなく、五分も書けばスペースが埋ってしまい何を書こうかなどと思い悩む必要もありません。手帳が未来の行いの予定表であれば、私の日記は過去の行いの備忘録です。

私の日記はその日にあった出来事だけを書き留めそこにまつわる感想や批評などは一切書かないので、ほとんどは書き放しのものですが、備忘録として力を発揮することが年に数回あります。それは毎年同じことの繰り返しとなる畑作業の時期の確認です。コリーナで私が体感する初霜初氷や鶯の初鳴き桜の開花日などの自然の節目の出来事はデータとして五年間日記に備忘されています。この過去のデータと大きな気候の移ろいの実感とを合わせて、畑を耕す時期や苗の植える頃を決めていきます。といってもそんなに大げさなものではなく、そろそろ種を蒔く時期だなと思って備忘録を繰ると、一週間前に蒔き終わっていたなどと言うことがよくあります。三六五日周期で必ず巡ってくる季節のデータは貴重です。このデータとその年特有の雨が多いや日照が少ないなどの体感の中で作物を作っていると、「自然」の几帳面さに感心すると共に「自然」にも感情があることに驚かされます。それは日々の天気の変化であり、平年と違う降雨量や気温ということなのでしょう。そのいつもとちょっとちがうなと感じることが「自然」の感情の揺れを愛おしみ、対話することではないかと思っています。私が三日坊主とならずに日記を書き続けられる理由は「自然」の几帳面さと感情の揺れを、美味しい大根や白菜の収穫のために備忘しておく必要があるからなのかもしれません。

日記を書き始め、今に続く動機は何だったのでしょうか。退職後コリーナに居を定め琉游舎が完成するまでの約十ヶ月間は、毎日読書三昧の日々。規則正しい生活と言えば聞こえがいいのですが、起きて経を唱えラジオ体操をし読書をし食べて飲んで寝ての繰り返しの毎日。いつの間にか曜日の感覚がなくなり一週間前の出来事はおろか、昨日の出来事も思い出せないようになりました。規則正しい生活の中に身を任せると小さな出来事や変化、ちょっとしたつまずきも日常の大きな流れの中に流されて、振り返られないままに過ぎ去ってしまうことに気づいたのです。これはこれでストレスの要因を習慣の中に流してしまえるので、穏やかな毎日です。これと同じ経験を三五日間の信行道場でもしました。四時起床九時消灯まで

の日課は毎日同じです。水行、本山登詣、朝勤、法要課業の繰り返し。ある修行僧が手書きのカレンダーを貼って一日の終りに×印を付けていました。そうしないと今日が何月何日何曜日か分からなくなるからです。私も日記を持ち込んで就寝前のわずかな時間に今日の修行内容を記録していましたが、日課通りで特別なことが何もない毎日の終りに終了の×印をカレンダーに付ける行為と全く同じだったと思われます。人は大きな流れの中に身を委ねていても、そこに何らかの痕跡を残そうとするのです。それが私が日記を付け始めた動機のようです。

「能所」という仏教用語があります。ある行為をなす行為者を「能」といい、その行為がなされる目的や対象を「所」という使われ方です。二元論の世界認識では「主」と「客」となります。仏教の世界認識は「空」「不二」「一如」ですから、本来「能＝主」「所＝客」という説明はあり得ないのですが、論理的説明の過程（方便注1）として聞いて下さい。例えば教化指導する人を「能化」と言い、教化指導される人を「所化」というような使い方です。「主体」と「客体」のことです。また「能縁」は対象となるものを認識する「主観」を言い、「所縁」は認識の主観である心に精神作用を起こさせる「客観」であると説明されています。注2この二元論による認識世界の説明ではいつまでたっても仏教の教えにはたどり着けません。私が今まで仏教について書かれた書物を渉猟する中で、この「能」「所」が使われた言葉が出てくると、とたんに何を語ろうとしているか分からなくなっていました。「仏と我」や「法灯明と自灯明」や「他と自」が一如であり不二であることを教える過程にこの言葉は存在し得ても、これを区別する解釈や論法は仏教の教えではありません。私たちが教え（仏教）に望み歩むべきところは「仏我一如」ですから「能所一如」でなければなりません。もし私が「能」という言葉を説明せよと言われれば、それは「仏」「実相」「ありのまま」、「所」を「我」と答えます。「能」を「諸行無常」と観て、「所」を「諸法無我」と観るときに初めて私たちはありのままの世界の中に安らかに身を委ねることが出来るのです。それが「能所一如」なのです。

日記をつけることがそこまで大仰なことかと言われると自信がないのですが、それは「能所一如」に歩み続ける行いの今を確認する行為なのかもしれません。信行道場での毎日に身を委ねることはとても穏やかで気持ちのいい日々でしたが、それは言うなれば宗門が作った人為の日々です。それはありのままの日々に身を委ねる過程の方便の日々です。だから日記にその日を書き留めることが必要なのでしょう。今現在も、自然の大いなる規則性と人々との関係性の中に身を委ね、それが「能＝仏」の懐の内に「所＝我」が包み込まれていく途上と信じる日々です。そして私がその行いの道を歩み続ける限り、それは「能所一如」への途上であり続けます。ですから現在位置の確認と備忘のために日記はこれからも書き続けられることでしょう。

一年の計は元旦にありと、かつては気負って一年の計を立てたものです。顧みると、その年代と立場で実行するべきこと以外は、計画してもほぼ三日坊主で終っていたことが分かります。これを繰り返した今は、私以外のものが私を行いへと連れて行ってくれるようになりました。二〇二二年も、そのありのままの誘いに身を委ねて琉游舎の日々を送りたいと思います。

注1：真実の教えに導くため、仮にとる便宜的な手段　注2：コトバンク

狂言綺語百六・迷雲

注射が好きな人はいないと思います。針を刺した瞬間のチクッとした痛みから始まり注射液が体内に入っていくときの痛み、終った後も続く腕の違和感。大人になっても注射の瞬間は緊張するものです。ましてや子供であれば白衣を見ただけで注射と察し、泣き出してしまうのも無理のない話です。最近では無痛の注射針が開発され、昔ほど注射前に身構えなくてもよくはなりました。久しぶりの注射だったコロナワクチンはいつ打ったか分からないくらいのあっけなさで痛みを全く感じませんでしたので、これからは注射が嫌いな子供が減るかもしれません。ただ翌日の腕の痛みと発熱に、ワクチンが薬と毒の紙一重だとは実感しました。

小学生のコロナワクチン接種意向の調査結果が報道されています。私はてっきり百%受けたくないという回答かと思っていたら，低学年で五十%高学年で六十%は受けたいと答えていました。保護者はいずれも七十%以上が受けさせたいと答えています。医学的社会的尺度を考慮しなければ子供にとっての注射＝百%「イヤダ！」だと思っていた私には意外な結果です。しかしこの数字をよく見ると、保護者と子供の意向の間には二十%の差があります。大雑把な分類ですが、親の意見を素直に受け入れる子と，親が何を言おうが注射だけはイヤだ!という子の差がこの数字に表れているのではないでしょうか。社会的な意義や医学的な効果を子供は客観的に判断できないと言う理由で接種には保護者の同意が必要とされているのであれば、子供に意向を聞く必要はないでしょう。保護と被保護の関係性が数字に表れてくる調査は本来無意味です。この場合の保護者は親ですから、親の保護義務と親権の前で、子供の人権（意向）を考慮しなければ接種の判断ができないこと自体が親の保護義務の放棄にあたるはずです。それとも世の人々は親に子供のことを全面的に委ねることが不安で、保護されるべき子供の意見を聞かないと正しい判断がされないと思っているのでしょうか。

コロナ禍の現在、私たちは不安の時を過ごしています。不確実な明日の生活と感染の恐怖の中で人々は混迷の道を彷徨っているのです。科学は迷いから抜け出すための合理的な手段であるはずが、その科学も迷っているばかりで、人に意見を聞いてはまた迷うことの繰り返しが起きているようです。専門家や政治家の意見はあなたから迷いを取り除いてくれたでしょうか。エビデンスがない意見は信じないという人だらけになれば、いくら彼らが「私の言うことを信じなさい」と声を大にしても所詮無理な相談です。未来のエビデンスはどこにも存在しないからです。その混迷打開のために子どもにまでワクチン接種の有無を聞いているのかもしれません。手詰まりになれば、いずれ神託祈祷ト占の類いに頼るはずです。経済宗教の出番です！

原始経典「スッタニパータ」でお釈迦様は「瑞兆の占い、天変地異の占い、夢占い、相の占いを完全にやめ、吉凶の判断をともにすてた修行者は、正しく世の中を遍歴するであろう。」[注1]と語っています。インド人の人生最終期の「遍歴期」は社会活動期を終え遊行する日々のこと、私の今の毎日です。加持祈祷ト占に人生を委ねることは「迷い」のままに日々を過ごすことです。「迷い」がもたらすものは「苦」です。一時その迷いの雲を祓ったかに見えてもまた新たな迷雲があなたを覆うでしょう。加持祈祷ト占の類いは「迷い」を「祓う」だけで消し去ることはできないのです。お釈迦様の根本思想「縁起の法」に従えば、祓った迷いもまた次の迷いを生み出す原因でしかないことは歴然です。私たちが唯一日々を委ねることができる

ものは、私たちに「苦」をもたらす「迷雲」をどうすれば消し去ることができるかを、上記のように実践的に説いたお釈迦様の「教え」だけです。教えのままにありのままに歩むとき、「迷い」は私たちの前からいつの間にか消え去っているでしょう。そして初めて人はやすらぎへの道を迷いなく歩むことができるのです。

先日無量寿経の読書会仲間の僧侶からネットの座談会室で「教えてください。日蓮宗や曹洞宗では、なぜ祈祷が行われるのでしょうか?真宗では禁忌です。」との質問を受けました。日蓮宗の僧侶としては答えづらい質問の一つです。既存の仏教で、加持祈祷を行わずお釈迦様の教えを今に正しく受け継ぎ護っている日本の仏教は浄土真宗だけです。日蓮宗寺院のネットのトップページの多くは「縁結び・子授け・安産・虫封じ・厄除け・家内安全・交通安全・営業繁盛・受験合格・就職・病気平癒・家屋祈祷・その他赤ちゃんの名前鑑定と命名・家相方位鑑定・相性鑑定なども行っており、古くから人々の信仰を集めております。」などの宣伝文句が踊っています。日蓮宗は現世にこそ浄土があるという「娑婆即寂光土」の教えです。寺院が衆生の欲望を布施という名の対価と交換に実現させてあげましょうという広告文で経済活動を行うことは、必然の流れです。一方浄土真宗の浄土は西方の阿弥陀仏の住まわれているところにあり、この現世は忌避すべき「厭離穢土」の地です。現世利益を必要としない宗教です。しかしいずれもこれは教科書的な答えです。

日蓮聖人の語る「祈祷」は「祈り」です。祈りは願うことです。「祈り、願い、誓い，行う」ことです。祈りを支えるものは「信」です。「祈り」があるからこその「信行一如」です。これが日蓮聖人の「祈祷」です。一方日蓮宗は「祈祷」ではなく「ご祈祷」です。それはそれ自体を目的とする衆生の「迷い」の受け皿です。迷いはご祈祷によって拡大再生産されてしまうのです。迷雲に絡め取られた私たちは、その受け皿に布施という名の金品を、迷いが祓われる度に積んでいきます。宗教経済学からみれば大変効率のよいビジネスです。宗教を生業とする人々にとっては人の「苦」の種子を再生産できるうまみのある商売なのです。

ウイルスはご祈祷で退治はできません。退治を信じてご祈祷しているならそれは戯画です。ワクチンとご祈祷のどちらが効果あるか問うたら、何と答えるでしょうか。寺院はご祈祷という茶番を止めないといずれ消滅するでしょう。新型コロナウイルスの消滅とどちらが先か競争ですね

注1：岩波文庫「ブッダの言葉」三六〇節

狂言綺語百七・時を知る

毎日五時に起床する生活を始めて五年以上が経ちました。決まった時間に起きれば必ず決まって二十二時に眠くなります。決まった時間の七時と十二時と十九時にお腹がすきます。山登りで四時に起床したときは確実に二十一時には眠くなります。温泉で山の疲れを癒そうとしても、二十一時まで宿で起きていられたことがありません。体内時計が忠実に機能していることがよく分かります。私の一日の活動可能時間は十七時間、エネルギー補給は三回、充電時間は七時間というこの心身のリズム通りに私は毎日を生かされているようなのです。時の法則とともにあると実感できる日々は、時に追われ競争して過ごしたかつて

の日々に比べて贅沢な毎日に違いありません。

同じ五時でも夏と冬の五時は全く違います。夏の五時は既に太陽の光に覆われて、ここから気温はうなぎ登りです。冬の五時は真っ暗。ここから日の出直前までどんどん気温は下がっていきます。五時の夏と冬の気温差は約三十度、明るさは0と100です。本来人間も動物ですから明るくなるとともに活動し気温が下がるとともに活性が鈍るはずです。冬の五時はまだ寝ているはずの時間。活発な活動のできない季節です。原始時代の人類は洞窟にうずくまって冬眠に近い生活を送っていたのでしょう。そう考えると私の体内時計に従った年中不変の毎日は、太陽の運行に従った生活とは異なる人間社会にだけに通用する時間なのかもしれません。

私たちの生活は一日から始まります。生活を支配する最小単位です。人類はその日くらしではないある法則性に従った生き方を選択したために、一日一月一年の長さを知ることが必要となりました。これが時を定め暦を作ることです。時は太陽や月が支配するものです。これは自然の法則、宇宙の真理、神の司るところです。かつてはその法則を知り得たものが地上の支配者となりました。例えば古代中国では天子は太陽や天体の運行を観察して把握することで暦を自在に操り、時を支配していると位置づけられ、天帝（造物主・神）の子として地上の支配権を任されていると考えられたのです。暦を作ることができるのはどこの国でも統治者だけです。日本では朝廷や幕府、そして現在は法律（国家）が暦を定めます。宇宙（神）の法則を人間が生きていくための社会の法則にブレークダウンしたものが暦や時間と考えれば、その国、その民族、その風土、その時代に必要な「時」があってしかるべきものだったのです。かつて暦は農作物の生産のために作られたものでしたが、今は二十四節気七十二候の暦を見て畑を耕したり種を蒔いたりする人はいないでしょう。「時」と人間や社会との関係は時とともに変わっていくものです。今、私たちと「時」はどのような関係にあるのか、その関係性を見定めることで、私たちは自分の持つことが可能な「時」を知ることができるのでしょう。

仏教の時間観に「六時（りくじ）」があります。一昼夜を晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六つに分けたものです。晨朝は朝の六時から十時までの時間です。以下四時間単位で「六時」の時間が移っていきます。仏教が盛んな頃のインドではこの時刻ごとに念仏や読経などの勤行をしました。この時間観がそのまま中国から日本に伝わり、今でも浄土宗の寺院では「六時礼賛」と呼ぶ法要が念仏三昧のひとつとして行われています。四時間ごとに一日六回、まさに四六時中念仏三昧の日々です。これは仏教徒の中でも念仏者の時間観です。私はつい最近までこの「六時」という言葉の意味合いを知りませんでした。ところが読書会で読み始めた「阿弥陀経」の中の極楽を描写する中に「昼夜六時に、曼陀羅華をふらす」という表現があり、初めてこの時間観の本質を知ることができました。念仏者にとっては念仏三昧が信行一致の行いと考えられているため「六時」の時刻、つまり「四六時中」念仏行を行う必要あるのです。「六時」は彼らにとって重要な時間観なのです。行住坐臥すべてが念仏です。つまり歩くこと、止まること、坐ること、臥すことの日常の立ち振る舞いすべてが念仏なのです。ところで、法華経の徒である私の信行一致はこの社会（娑婆）を歩き続けることにあります。歩き続けることで出会った「人」や「事」とともに「行う」ことです。これが私の「行住坐臥」です。ですから私の「信行」に「六時」という時間観がないのは当然のことなのです。

出家者は社会の時間や規範から一度離脱し、修行によって出家者の時間や規範を獲得して再び社会に戻

ってくる者と私は考えます。離脱した時に獲得したお釈迦様の弟子としての「時」を、社会の中で再び生きていくための「時」として行い続けることです。その「時」を獲得するために私は厳しい修行（厳しくはあっても苦しくはありません）をしてきました。これは肉体的精神的な束縛の厳しさではありません。出家者としての時をお釈迦様から与えられるのか、そしてその時のままに行い続けることが出来るのかということが四六時中問われ続ける厳しさです。その問いかけから立ち上がって歩みを始めたその時、私たちはお釈迦様の時を共有することが出来るのです。物理的社会的な時に束縛されない融通無碍、全き自由な「時」です。

現在私の体内に備え付けられた「時」は、果たしてお釈迦様と共有している「時」なのか私には分かりません。ただはっきりと言えることは、毎日五時に起き活動可能な十七時間と三度のエネルギー補給と七時間の充電時間の繰り返しの毎日は、私にとってはありのままに歩むことの出来る自由な「時」だということです。そして、お釈迦様の時と今私の体内に内蔵されている時と社会の時が、一つの時計盤の中で同じ「時」を刻み始めた時、私は私の「時」を知ることが出来るはずです。それは私の行いの指し示す道を知ることなのです。今ある「ありのままの時」に導かれるままに行うこと、それがお釈迦様と時を共有することなのです。

冬の朝は風の音以外は何も聞こえません。夏の朝は鳥の囀りと蝉の鳴き声の競演です。もう二週間もすると鶯の鳴き声で起こされることでしょう。時を知る自然の声に、私も時を知る早朝五時。お釈迦様への朝のごあいさつの時間です。

狂言綺語百八・不可思議

薄暗い朝の六時過ぎ、いつもの日課でコリーナの蓮池の横を私が通ると鴨が十羽ずつくらいの群れとなり一斉に飛び立ちます。いくつかの家族が固まって夜を過ごしていたのでしょうか、私の跫音が鴨の安息を妨げてしまったようです。といっても池から飛び去るわけではなく、同じ池の私から離れた氷の張っていないところにまた舞い降ります。その群れに横着な鴨が一羽あって、泳いで私から遠ざかろうとするのです。ところが途中の氷に躓いて前に進めず慌ててバタバタと飛び上がり、遅れることわずかでまた群れに舞い戻り悠然と泳いでいるのです。何とも微笑ましくユーモラスな光景ですが、あの氷の躓きが横着な鴨の生死を分ける致命的な遅れになることもあると、当の鴨自身が気づいているか心配です。私が狩人でなくて幸いでした。

うっすらと雪が積もった二月のとある早朝は、厳しい冷え込みもなく朝から太陽も顔を出す、穏やかな日和の朝でした。あたり一面まっ白な雪の中、焦げ茶色の生き物が私の目の前を通り過ぎて行きます。狸です。猫はこの距離であれば、一度立ち止まり私を値踏みをするや踵を返して逃げていくほどの近さですが、この狸は私がスマホのカメラに収めようとするときまで気づかずにいました。網を投げたら捕らえられる距離です。もちろん私は猟師ではないので、かの狸も慌てて自分の巣穴に逃げていくことが出来ましたが、この危なっかしい行動が彼個人の能力の故か、狸という種が持つ属性なのかは分かりません。しかし猪も鹿も狐もハクビシンも住んでいるこの山で、あまりにも無防備なあの狸が生き抜いていくことは困

難なことでしょう。

コリーナをくまなく歩いていると様々な生き物やその痕跡に出会います。その生き物たちは自然の摂理と種の本能に従い、おそらく人間を一番の天敵とみて持てる能力の限りを尽くして生きているのです。ですから私の目に映る生き物のほとんどは毅然にして、用心深く人目に姿をさらすことなく、私たちの手の届かないところで生きています。空を飛ぶ鳥と池を泳ぐ魚以外は白昼目にする生き物は犬と猫と人間以外いないのです。自然の摂理に従って生きている生き物は空中か水中かあるいは夜間に活動しているからです。この地のような社会的な生き物と自然の生き物が交わる場所では、人間は両脇に犬と猫を従えて自然の生き物の必死の毎日を他人事のように楽しく眺めていれば、それが自然と共棲することだと思えてくるのでしょう。

今では野生の生き物も保護される立場にありますから、人間が生きていくために彼らを捕えて食べると言うことは基本的にはありません。苦労して彼らを襲わなくても食料をえる方法はいくらでもあるからです。とはいえ、人間の方からもう襲ったりしないから仲良くしようねと語りかけても、何万年にも渡って人間に襲われた記憶がＤＮＡに深く刻み込まれている彼らは、そう簡単に人間に胸襟を開くはずがありません。人間が共棲と思っているだけで自然からすれば未だに人間は恐ろしい破壊者で殺戮者です。彼らは共棲という勝手な幻想を押しつけないでくれ、人と関わりない所でひっそりと生きさせてくれと思っているはずなのです。

仏教用語に「不可思議」があります。不思議のことです。「思議すべからず」と訓読され、仏や菩薩の神通力や行為のように、言葉や思慮の及ばない境地を意味する言葉です。転じて今では人間の判断力では及ばないことや常識で理解できないことが「不思議」の一般的な用法です。この「不可思議」の辞書的説明では誤解を招いてしまいます。仏や菩薩という擬人化された存在が超能力（神通力）をもって世の中を動かすようなイメージに聞こえてしまうからです。「不可思議」は人智では説明のできない、大いなるもの、仏の慈悲、宇宙の真理、自然の摂理、縁起の法則、真如、空、ありのままということ。私たちは不可思議（仏）の光の届く処はどこであろうと自然と共に生きること（共棲）ができます。それがありのままに生きるということです。一方神（絶対神）から自然を支配する権限を与えられていると思い込んだ人間たちは、その権利を自然の搾取や破壊に使ってきました。それが文明の進歩、科学の力です。その根底にはすべての宇宙の現象は「思議」できるという思想があるのです。全能の神が創造した宇宙の支配権が自分たち人間に委ねられていると思い込んだ傲慢な思想です。世界は不可思議であると観る私たち仏教徒は、何でも思議が可能と思い込んでいる彼らを増上慢と呼びます。何も悟っていないのに悟っていると思い込んでいる人達のことです。思議できることは言葉で論理的に説明できるということです。言葉が不可思議な現実と矛盾することになる度に、思議できる言葉と論理を編み出して説明し続けなければなりません。この永遠にやすらぎのない増上慢の思想は何の土台もない思議の楼閣に屋上屋を重ねていることに過ぎません。彼らのいう環境保護や動物愛護の考えは屋上屋を重ねた上でくるくると回る風見鶏のようなものです。私たちは、自然と同じ不可思議の光の下で生かされている存在と知ったとき、氷に躓いてバタバタ飛び立った鴨や、ヨタヨタと目の前を通り過ぎた狸の先祖たちが、私たちの命を今日まで繋いでくれたことを初めて知り感謝することができるのです。

歎異抄の中で親鸞は「念仏には無義をもって義とす、不可称・不可説・不可思議のゆえに」と語っていま

す。念仏者は「念仏」を阿弥陀仏のはからいといいます。仏教の徒であればお釈迦様の教え、真如、空、などと置き換えられる言葉です。私は「ありのままに観る」といいます。「念仏は分別や理性では理解しえないこと（無義）という理解が正しい理解（義）なのです。何故なら口で言うことも言葉で説明することもできない不可思議なものだからです。人間の思議（理性）では到底理解できるものではありません。」このように親鸞は語っています。この言葉は思議を重ねた末に不可思議へ到達した言葉です。理解することが智慧の営みとすれば、その究極は不可思議だったのです。「信行」一筋の私に「智慧」からもやすらぎの処（不可思議）へ歩む道があると示唆してくれた、あの横着な鴨と無防備な狸に私は合掌いたします。

狂言綺語百九・絶対無価値

いつもならば、何も考えることなく冒頭から書き始められるのですが、今回は足踏みしてなかなか前に進めません。散歩しながら見つける蕗の薹、池の中で彫像のように身動きせずに魚を狙う川鵜の姿、霧に覆われた暖かな朝、畑を耕してジャガイモや春蒔き野菜の植え付けの準備を始めなければならない頃です。いつもならばこの春先の光景に触れるところから、私の狂言綺語が始まります。自然とともにある私がありのままの世界に身を委ねる安らぎの時です。犬に吠えられても救急車のサイレンが鳴りひびくともいつもの春です。とその時、爆音とともに頭上を猛スピードの戦闘機が北西に向かって飛んでいきました。いつもと違う空の音が私の歩みを止めます。ロシアのヘリコプターが根室沖を領空侵犯したと、後ほど報道で知りました。

世界で起こっていることが瞬時にお茶の間で見られる今、目に飛び込んでくる映像と言葉から目をそらすことは不可能です。ついこの間までは〝平和の祭典〟が私たちの眼前を覆い尽くしていました。今は爆弾で破壊されたビルや車両、それを正当化する言葉と暴力の前で何もかもが無力な人々。一ヶ月あまりで世界は平和から暴力行使の場へと転換しました。私は思考と感情を自ら放棄してただ傍観者として立ちすくむだけです。お釈迦様の弟子としてどのような言葉を紡ぎ行へばよいか分かりません。暴力反対を唱え加害者を糾弾し被害者の救済を訴えできることから始める、それがお釈迦様の語る安らぎの道とは私には思えないのです。

お前は今現実に起きている暴力を容認するのかとの非難を承知の上で、私は平和は暴力の中に在る、あるいは暴力の中に平和があると語ります。人類の歴史は戦争の歴史です。暴力と平和は相容れないものとして対置し、平和は善、戦争は悪との倫理観の中で、善悪二項対立の解消を図ってきた歴史とも言えるでしょう。しかしこの前提は立場によっていつでもひっくり返ることは、今現実に起こっていることを見れば明らかです。平和と暴力が人類の種の存続を図る先天的な生理欲求に根ざし、善と悪は人間社会を維持するための後天的な倫理欲求に根ざしているのであれば、〝平和のための戦争＝悪を駆逐する善である〟という論理の顛倒がいつでも可能となってしまうからです。互いの「善」をぶつけ合う限り戦争は悪にも善にもなり得るのです。

生物の生存理由は「種」のいのちを未来に繋ぐことにあります。種は進化過程で環境に適合できるよう自らの生態を変化させてきました。人類も生物の種のひとつとして環境に適応して自らの生態を変化させ

てきたはずです。しかし文明の発見以降人類だけは自然環境（気候や天敵）への適応を科学の力に全て委ね、自らの生態変化を放棄し適合から支配へ、共棲から対峙へと方向転換を行いました。その結果人間は自然を制圧し豊かさと安心を得たのです。自然の脅威（暴力）からの解放、自然との闘いの勝利、人類の平和の実現です。地震や火山噴火パンデミックなどの局地戦ゲリラ戦は頻繁に起きても、人類の存続を脅かすような攻撃はありません。一方自然側は人類の存続に適応できない「種」は滅ぼされ破壊されました。そしてついに反攻が始まりました。自然は「地球温暖化」という武器を手に人間側に自然支配の修正を迫って来たのです。

人類への自然の反転攻勢を人間同士の戦争と平和に敷衍して語ることは、宇宙の創造神が人に自然を制御する役目を委ねているという思想に立つ限り理解できないことでしょう。しかしお釈迦様の教えは自然も人間もありのままの存在、支配も破壊も価値として存在しないのです。人間も自然も人間同士にも対立関係を措定できないということなのです。ただ事実として平和も暴力もあります。そこに価値を与えれば善や悪や正義や虚偽や何やらをでっち上げなければならなくなります。お釈迦様は人が事実の価値判断をすることを否定します。縁起の法則に従えば事実も諸行無常で実体のないものです。ですからその事実にもとづく価値などはどこにもないのです。私がありのままに観る今は、平和は暴力の中に在り、暴力の中に平和が在る今です。そこに価値を観ることができない私は傍観者として立ちすくむしかありません。ないものをあるものと思い込みそれが原因で私たちの安らぎの日々が損なわれることは私たち仏教徒の望むことではありません。

私の語る仏教徒はこの二一世紀の世界では敗北主義者と呼ばれるかもしれません。正義のために悪と戦わなければならないという思想に基づき、各各が今できることを考えアクションを起こすことが民主主義の価値観に生きる我々の責務と言われれば返す言葉もありません。我々の国、民族、文化、社会、家族の生命を守るために武器を持って立ちあがる人々にただただ頭が下がるだけです。しかし、私は仏教徒としてお釈迦様の教えを信じ続けなければなりません。ありのままに観る世界には我々の国も民族も社会も家族も私の生命もありません。諸法無我です。ないのですがあるのです。あるのですがないのです。一如、不二、空なのです。

私は安全地帯にいて狂言綺語をここまで綴ってきて、今気づいたことがあります。立ちすくんだままの私がまた歩を進めるためには先人の「信」を私のものにすることから始めなければならないということです。常不軽菩薩は人々から石で追われ棒で打たれて逃げ惑いながら「我は深く汝等を敬い敢えて軽慢せず。所以は何ん、汝等は皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べければなり」[注1]と語り続けました。親鸞の信の基盤は「善人なおもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや」の言葉にあります。ガンジーは「不服従、非暴力」でインドの独立を勝ち取りました。日蓮は「速に実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国其れ衰んや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無んば、身は是れ安全、心は是れ禅定ならん。」[注2]と、暴力と破壊の娑婆世界に安らぎの処を実現しようとしました。彼らは価値の対立項を措定する相対関係を否定し、絶対無価値の「信」に立って、歩み続けた人々です。その後を追う私の日々がまた始まります。

注1：妙法蓮華経常不軽菩薩品第二〇　注2：立正安国論

狂言綺語百十・それぞれの浄土

寒い時期に戸外から戻って冷えた体そのままで風呂に入った瞬間「あ〜、極楽、極楽」という言葉が自然と出てきてしまうことがあります。寒さで身も心も凍えていたものが、暖かな湯に浸かることでたちまちに疲れが癒やされます。大仰に言えば、寒さの苦痛から解放された瞬間がその時の私の「極楽」だったのでしょう。

「お前は極楽とんぼだね」といわれて褒められたと思う人はいないはずです。極楽とんぼとは、俗世間の心配事もなくお気楽に暮している境遇の人のことで、暢気に暮している人を揶揄して言う言葉だからです。自ら韜晦して演じることはできても、芯から極楽とんぼになりきって生活することは理想ではあって現実には難しそうです。ところで喩えに使われた「とんぼ」は果たして極楽の境遇にあるのでしょうか。一見上空で優雅に気ままに暮しているようですが、同じく空を飛ぶ鳥に目を付けられたら地獄に早変わりしてしまうでしょう。

念仏者の聖典とも言うべき浄土三部経のひとつに「阿弥陀経」[注1]があります。この経は極楽浄土の姿を克明に描写しています。極楽浄土とよく一括りにされますが、浄土は悟りを開いた仏が住む清**浄**な国**土**を略して**浄土**と言い、阿弥陀仏の住む浄土を極楽浄土と言います。つまり極楽は念仏者が往生を願う場所として措定された場所です。因みに私たち法華経の徒はお釈迦様が法華経を説いた地「霊鷲山」[注2]が浄土です。ここはお釈迦様が常に実在して法を説く場所で霊山浄土と言われます。念仏の徒は西方の阿弥陀仏が住む極楽浄土に往生成仏を願い、法華の徒は私たちの住む娑婆に実在する霊山を娑婆即寂光土（浄土）と信じ即身成仏を願いました。

霊山浄土は私が常日頃書いている「安らぎのところ」のことです。つまり日々の私たちの生活の中にあるところです。そして安らぎのところは日々の行いによってだけたどり着けるところなのです。私は死後の浄土について、今は全く考えも及びません。日々の行いだけが安らぎのところ（浄土）と信じているからです。極楽浄土についても私は全く信じることができないのです。それは極楽浄土の否定ではなく、今はまだそこまで考える必要がないほどに、日々の行いに安らぎのところを見いだすこと（娑婆即寂光土）ができているからです。とは言っても私もいずれこの娑婆を離れるときが来ます。その時、仏教徒として古来日本人は浄土をどのように希求してきたかを知っていても無駄なことではないと考え、今年一月から読書会で「阿弥陀経」を読むことにしました。平安貴族が願い、法然や親鸞が念仏によって往生できると説いた極楽浄土は、阿弥陀経の中で具体的な映像イメージとなって描かれていました。一言で言えばこの経は大変面白い！そして寺の荘厳がこの経を下敷きにして具体化されていることがよく分かります。とても短い経で理屈っぽくもないのですが、後世の人がいろいろな解釈をしてしまうから小難しくみえてしまうのです。解釈するのではなく書いてあるとおりにありのままに受け取り（受持）分からないところはそのままにする、これが経を読むときの基本的な姿勢です。

「これより西方、十万億土の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という。その土に仏ありて、阿弥陀と号す。今、現に在まして説法したもう。（中略）その国の衆生、もろもろの苦しみあることなく、ただもろもろのたのしみのみ受く。ゆえに極楽と名づく。」阿弥陀経の中に示された「極楽」の定義です。「無有衆苦但受諸楽　故名極楽」、極楽は「苦」の一切ない「楽」だけのある場所、**楽**を**極**めた場所が**極楽**です。何と

シンプルで分かり易い定義でしょうか。このあと具体的な極楽の様相と住人が描かれ、「一心に念仏を唱えれば死の直前に阿弥陀仏がお迎え(来迎)に来て、死とともに極楽浄土へ連れて行ってくれる（往生）」と説きます。この阿弥陀仏の来迎と往生を信じることで初めて極楽が私たちのものとなります。これが阿弥陀経に書かれているありのままの極楽です。ここには解釈も何かを付け加える必要もありません。ただこれを信じた者が受け入れればよいのです。これが経を受持すること。私は経をこの様に受け取ります。次に受持（信）したらどう行うか（行）、これが信行ということです。経は信行の道標、その標の先にあるものは安らぎのところです。阿弥陀経を受持し一心に念仏を唱える（行）ことで極楽への道を歩むこと、これが念仏の徒の信行一致です。

極楽の境地は、富と権力を極めた境地でないことは言うまでもありません。それは極楽を願う浄土信仰が富と権力の頂点にある平安貴族から始まっている事実をみれば充分でしょう。物質欲権力欲名誉欲を満たしてもまだ、人は生ある限り苦しみからも逃れられない存在なのです。であるならば、念仏をただ一心に唱え一刻も早く阿弥陀仏の来迎を願えば良いはずです。しかし人は死ではなく生きることを望みます。歎異抄に「念仏申し候えども、踊躍歓喜の心おろそかに候こと、また急ぎ浄土へ参りたき心の候わぬは、いかにと候べきことにて候やらんと申しいれて候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房、同じ心にてありけり、云々」とあります。「弟子が、念仏を唱えても喜ぶ気持ちも早く極楽浄土に行きたいという気持ちも起きない、と問うと、私（親鸞）もお前と同じ気持ちなのだ。そのことをずっと疑問に思っていたのだ」と答えています。ここに人が浄土を求める気持ちのありのままがあります。つまり生きていくために浄土を希求すると言うことです。念仏宗は阿弥陀仏を念じて極楽浄土を心に現出させることで日々を生き抜く心の糧にし、法華の徒である私は、日々の行いが安らぎのところへ（霊山浄土）と辿る道だと信じて毎日を送る、これは全く同じ願いなのです。それぞれの浄土を願い日々の生活の中に現出させることがお釈迦様の弟子たちのそれぞれの浄土なのです。

他人の浄土を奪うことで自分の浄土を拡張するという思想は、人の浄土を地獄にし自分だけの浄土（地獄）をさらに拡張することになってしまうでしょう。今西方で起きているこの事態は、各各に各各の浄土があるという視点の欠如が原因です。温かな風呂が極楽であろうと、私が極楽とんぼであろうと、それも私の日々の浄土なのです。

注1：浄土三部経（下）岩波文庫　注2：インドに実在する山

狂言綺語百十一・願い

今回の狂言綺語を書いている四月初めは、諏訪で御柱を引いているはずでした。七年目毎の寅と申の年に行われる諏訪大社の御柱祭に氏子の孫たちのお守りを兼ねて御柱を引いている予定だったのです。しかし今年は新型コロナの終息が見通せない中で、四月に行われる三日間の山出しは氏子による曳行を断念し、トレーラーなどの車両で御柱を運搬することとなりました。千年以上の祭りの長い歴史で初めての事態とのことです。テレビでお馴染みの山の斜面を滑り落ちる「木落し」、雪解け水の川を渡る「川越し」などの勇壮な神の示威が見られなくなることは残念です。五月に行われる里曳きは例年通り人力で行うかどうか

はまだ未定のようですが、もはや今年の御柱祭は「お祭」の体裁は整えても「神事」と言えなくなってしまったのではないでしょうか。

6 年前の御柱祭は四月五月の併せて六日間、私は山出しから里曳きそして諏訪大社上社本宮一の柱を立てるところまでを氏子の法被を着て末端ながら神事を目の当たりにすることができました。僧侶の私が六日間もかけて神事に参加し見聞した大きな動機は、古来日本人は御柱祭に何を願い何を実現しようとしたかを知りたかったからであり、日本人の信仰の源に触れることが出来るのではと考えたからです。米の生産高が国力の基準であった日本では、人々の願いは五穀豊穣や国土安寧などで、それほど複雑多岐に渡るものではなかったはずです。ところが四本の柱を四つの社殿の四隅に立てるために、人々は山から里まで合計一六本の樅の木を荒々しくも原始的な方法でひきづり下ろしてくる神事は、穏やかで平和的な農耕風景とは異質なものに私には見えてしまうのです。結局六日間の神事を見物しても、にわか氏子で部外者の私には、御柱の神事に籠められた人々の願いを感じ取ることはできませんでした。そこに私は、奉納や生贄などの見慣れた神への慶祝の行いを観ることが出来なかったのです。ただ黙々と丸太を山から引き吊り下してくる行為に私が観たものは「宇宙の大いなる力(御柱)によって、荒ぶる魂を四か所の捕りこめ所(社殿)に封じ込めなければならない」という恐れや慰撫の発露と強固な意志です。それは六年間は効力が保たれる、だから御柱祭は七年毎におこなわれるのでしょう。

信仰は願うことから始まります。願いがなければ何のために私たちは神仏を拝み供養を行じ祈祷をするのでしょうか。願いがあって初めてそれを叶えようとの誓いが生まれ、強い意志のもと行いに向かうことが出来るのです。「願い・誓い・行う」ことです。願いを起こすことが「発願」。阿弥陀経では極楽浄土の往生を叶えるために「已発願　今発願　当発願　欲生阿弥陀仏国者　是諸人等　皆得不退転　於阿耨多羅三藐三菩提（過去・現在・未来に願を発して阿弥陀仏の国に生まれんと欲せば、この人たちすべて悟りを得て煩悩の世界に戻ることはない)」と発願の意義を語っています。「願」は誓願や本願などとも呼ばれ、それは仏や菩薩だけの願いではなく、私たちひとりひとりが独自の「願」を持つべきものなのです。毎日を楽しく豊かに心安らかに過ごしたいと願えば、今日自分は何をすればよいか自ずとわかるでしょう。それが今日の生活の誓いです。その誓いの通りに行うことが日々を生きることです。それを毎日繰り返せば必ず安らぎの処に辿り着けます。そこは浄土であり仏として生きる所なのです。だから仏の願いは私たちひとりひとりの願いでもあるのです。

私たちの生活は各々異なるものですから、各自の願いは唯一無二のものとなり、日々の行いも独自の行いとなります。宗教は究極、個人的な行いに帰すると私が考える所以です。但し、独自の願いを支えるための共通の願いが必要です。これが「四弘誓願」です。仏教徒はみな四弘誓願のもとに自らの願を立てるのです。宗派によって多少の文言の違いはありますが、願いはみな同じです。そして法要の最後に必ず唱えられるものです。日蓮宗では「衆生無辺誓願度　煩悩無数誓願断　法門無尽誓願知　仏道無上誓願成（全ての生きものを救うことを誓います。無数なる煩悩を断つことを誓います。仏様の教えの全てを知ることを誓います。仏道に入り成仏することを誓います。)」。仏教徒である私はこの四つの願の実現のために「願い・誓い・行う」日々を過ごしているのです。この願に根ざさなければ、私たちの願いは容易に欲望に転化してしまうでしょう。私たち仏教徒が四弘誓願を自分自身の「願」のより所とできるのはお釈迦様の「願」に「信」を置いているからです。自分の足下を照らす自灯明（願）を頼りに、お釈迦様の指し示す法灯明

（願）に向かってたゆまなく歩み続けることができるのも、それはお釈迦様の願い、つまり「すべての人を安らぎのところへ導く（すべての人を仏にならしめる）」との願いを信じているからです。これが信仰です。宗教的日々を生きるということです。これは宗教儀礼や信仰の証を毎日表現することではありません。日々の安らかな生活を各自が願いのままに生きることです。ところが「正義の実現」というような特定の願い（欲望）が私たちの日常を支える根拠になったとたん、宗教的日々は困難なものになります。西方での戦争や新型コロナウイルスとの戦争も、互いの正義を振りかざせば勝負の決着が必要になります。戦いは自分の欲望の実現のために他者の願いを奪うことなのです。

私は人々が御柱に仮託した願いを〝御柱は荒ぶる魂の捕りこめ所〟と認識しても、どこにもそれを記述した文献がなければ妄想とされるでしょう。御柱祭の長い歴史の中でこの神事を始めなければならなかった切実な願いが不明となり、単なる祭りとなってしまったのなら、私は六日間の曳行を通じて御柱に願いの真意を問いただす必要があったのです。私の宗教的日々（信行）はインドを源とする釈迦の智慧と、この心身に脈々と伝わる日本の土に生きた人々の記憶によって支えられています。私は天皇中心に整理された国家神道の系譜ではない、原日本人の信仰の記憶がこの御柱祭に引き継がれていると確信します。新型コロナに負けたから曳航を辞めたというような勝敗の世界に御柱があるのではありません。御柱は私たちの願いのためにあるのです。その願いは大いなる宇宙の真理（神や仏）への願いであり誓いです。それを私たちは次に伝える義務があるのです。

狂言綺語百十二・諦める

私の狂言綺語は一行目を書き始めることができたら、後はあまり思い悩むことなく書き進むことができます。日常の出来事の点描から始まり、その関わりの中に自身の信行の道を見い出しながら、その道が確かにお釈迦様の教えであることを確認する行為が、私が狂言綺語を書くということです。信行を続けていればそれがそのまま自然と文字になってくれます。ところがこの所、最初の一行をなかなか書き出すことができません。その果てに、今回は冒頭の言い訳がましい言葉から始めるほかなくなったという次第です。理由は明白です。ありのままに観てありのままに行うことが私の信行の日々なのに、ありのままを受け入れ難い現実が二ヶ月ほど前からいつ終るとも知れず私たちの前に突きつけられ続けているからです。少々回りくどくなりました。つまり破壊と暴力の前では宗教、特に私が信を置くお釈迦様の教えは無力なのではないかとの思いが錯綜しているからです。

今ある戦争について、人は銘々の立場で価値判断を加えています。私たちが何かを判断するときには、その現象を「暴力」と「平和」や「破壊」と「創造」などの対立項として分別し、それを「善悪」の道徳や「損得」の経済視点など各々が価値基準を定め合理的に判断するというやり方が私たちの慣れ親しんだ世界の見方です。現在は政治、経済、人道などの立場からこの戦争について価値判断がされています。そこに安全保障、歴史観、地政学、民族の記憶、権力構造などのファクターが持ち込まれ、戦争反対、反対しない（賛成）、沈黙（消極的賛成）する、の三つの世界に分裂した現状があります。価値基準が唯一無二の絶対的真理であれば、起こっている事実の判断は同一でなければなりません。一つしかない現実を唯一の価

値基準で合理的に判断したら結論は一つしかないことは自明の理です。世界の多くの人々が殺戮や侵略は絶対悪であると考えれば戦争は起りようがないはずですが、現実はその反対です。今の私たちは、一向に止まない殺戮とそれを支持する人や国が未だに多数存在するという現実に、「戦争＝悪」という価値観が揺らぎ始め迷いと不安に駆られているのです。不安定な価値観の上で不安の日々を生きているのです。そこで私たちはその原因を探し出し、何とかその不安を和らげようとします。例えば「彼らを戦争まで追い込んだ西側に原因がある」「経済的な利害関係を無視はできない」「権力者が悪いのであって国民はかわいそう」「喧嘩両成敗、どっちもどっち」など、原因探しもこうなると収拾がつきません。出口がみつからないならば「戦争＝悪」の出発点に戻る必要がありそうです。

仏教の世界観は一如や、空という言葉で表されています。諸行無常であるということです。絶対や実在、価値などという認識は存在しえないという立場です。つまり「分別」と「価値」では世界認識はできないのです。以前の狂言綺語で書いたことの繰り返しになりますが「価値」という幻想のもとに世界を「分別」し二項対立を措定することは新たな「価値感」に基づく分別と対立関係を生み出す原因にしか成り得ません。「無分別」と「無価値」で世界を観ることがお釈迦様の言われるありのままの世界認識です。縁起の法則に従えば、今ここにある現象も諸行無常で実体はありません。人間も自然も戦争も死も平和も生もありのまま（無分別）の存在です。そこには善も悪も正義も不正もありません（無価値）。常無きものに価値を与えてもその瞬間に価値は無価値になるのです。このような世界認識の中にいる私は「戦争＝悪」から始めることはできないのです。

仏教は「諦めの宗教」です。「諦める」はありのままに観ることです。この世界観（信）のままに生きる（行う）ことが安らぎの処への道を歩み続けることなのです。私が仏教を信じ続ける動機（願）です。この歩みは「諦める」ことから始まります。「諦める」はものごとをつまびらかにすることです。そこで宇宙の実相（真如）が明らかになります。あとはそこに向かって教えのままに歩むことができるのです。もしありのままでない所へ進もうとしていたならばその道を断念することができます。これも「諦める」です。一方、真如を明らかにしないままに断念することは「あきらめる」です。これは世界を自我（煩悩）で認識した結果です。後には後悔や恨みや愚痴が残ります。諦めないままに断念をしたからです。私たちはどんな困難があろうとも、今ここにある戦争を諦める必要があります。戦争というものにまつわる忌避感や闘争本能、人間の記憶の中に刻み込まれた殺戮と死への恐怖と悲哀と生存欲などが複雑に絡み合い、私は今ある戦争を諦めることがまだ出来ません。ただ「戦争＝悪」の価値では何も諦めることが出来ないことを、現実はありのままに示しています。

今、仏教は「諦める」ことが「あきらめる（断念）」に容易に転換しうる危機に瀕しています。今ある戦争をどのように諦めればよいのか、未だ私には分かりません。分からないと認識することが諦めたことなのか、それとも考えることをあきらめる（断念）ことが諦めることなのか、太平洋戦争中の仏教者はどのように日本の侵略を諦めたのか知りたいところです。戦争に積極的に賛意を表した仏教者の話はよく聞きますが、反対を貫いた人の話はほとんど聴くことができません。戦争の前に仏教は無力なのです。そう諦めればまだしも、仏教は何か役に立つことがあるはずだと勘違いをし諦めを放棄した人達が戦争協力をしたのではないでしょうか。戦争は力と力のぶつかり合いです。その力は軍事力、経済力、政治力、情報力、意志力などのパワーの総合体です。それらの力の前に一仏教者である私はどれ一つも持ち合わせない全き

無力です。宗教者には呪術力がありそれが有力な武器と信じられた時代はかつてのこと、現代ではその様なことを信じている人は誰もいません。私は戦争を前にして「仏教は無力である」と諦めるしかないのです。私が有力であれば「戦争＝悪」を標榜しその価値の中に安住することは可能です。しかし私は無力です。無力で無価値で無分別から歩き始めるしかないということをこの戦争は私に教えてくれました。そして各々が「私は無力である」と諦めることができれば「戦争という言葉はなくなるはずだ」と信じ、祈ることが今の私のありのままの無力です。

狂言綺語百十三・汎宗教者

あなたが無人島に持って行く一冊の本は何ですか?との問いを耳にすることがあります。最近は歎異抄がその一冊とよくききますが、三〇分もあれば読了してしまうのが難点です。船の迎えが来るまでに気の遠くなるような回数を読み続けなければなりません。一緒に過ごす本としてはあまりにも短すぎます。私ならば第一候補は妙法蓮華経です。朝勤で毎日読経しているので無人島でも日課通りに過ごすことができます。第二候補は読まなければならないと思いながら,今まで通りの信行の日々が続くなら一生読むことがないだろうと思われる道元の「正法眼蔵」とダンテの「神曲」です。どちらの書物も理解を超えて魂が取り籠められてしまうのではという本能的な恐れが、私をその書物から遠ざけていたのです。が、もし鬼界が島に一人取り残された俊寛と同じ運命にあるのであれば、生死一如を共にする書物としてはこれ以上ふさわしい書物はないと思われるからです。

「正法眼蔵」は仏教思想書です。仏教は生死についての思想です。私の浅薄な理解では道元の死生観は生死一如の絶対浄土を自身の中に現前させる思想です。そのために私たちは世界をどのように捉えその中でどのように信行するかをとことん内省した哲学書です。同じ法華経の世界観から始まっても、日蓮は社会の中で絶対浄土の実現を希求した実践者であったのに対して、道元はそれを自身の内なる宇宙の中に実現しようとした哲学者です。日蓮の弟子として社会実践者の道を歩む私が無人島に置き去りにされては実践のしようがありません。無人島では私の信行は自分の心の中に浄土を観ることが目的となってしまいます。行なき自分だけの浄土に果たして安らぎはあるのか、そこは浄土を騙る地獄なのではないか、という恐れが常に私にはつきまとうのです。

「神曲」は断片も齧ったことはないので辞書類の受け売りです。「中世カトリック的世界観による救済と永遠のいのちを追求したもので、理性を象徴するウェルギリウスから地獄を見せられ、次に罪を浄める煉獄を訪れ、最後にベアトリーチェに従って天国に昇り三位一体の神の姿を見るにいたる壮大な叙事詩。中世ヨーロッパのキリスト教世界観の集大成といわれる文学作品」です。宗教は人間から死の恐怖を除くことが大きな役割りです。生前の罪を浄化し浄土（天国）に至るという考え方は現実の生と死後の永遠の生命の存続を見据えることで死への恐れを軽減しようとする、仏教にもキリスト教にも共通する人間の本質的な欲求です。私は常々狂言綺語の場で西洋合理主義の精神的基礎をなすキリスト教世界観を仏教のありのままの世界観と対比し、二元論が基調をなすこの社会の中で、仏教の一如:不二の信行をし続けることは可能かを自問自省し続けてきました。同じ永遠の生命の希求から始まったキリスト教と仏教が、全く異な

る世界観を導き出すという宗教の不思議。その秘密に触れる危険な感覚は無人島で一人にならないと解消できないかも知れません。ダンテを天国に導くベアトリーチェは彼の終生の理想の女性であったという事実と、神曲が「死をよく知ることが生をよく知ることである」として書かれたものだとすれば、それは法華経の死生観と一にするものです。無人島で私は法華経と神曲の両立を実現するか、どちらかの一方が飲み込まれてしまうのか、いずれ読むべき書が神曲なのでしょう。

永遠の生命という言葉には曖昧性が付きまとうので、ここで少し整理したいと思います。永遠の生命は死への恐怖から逃れるためにこの生命がどのような形で存続可能かを思い巡らしてきた考え方です。例えば仙人が不老不死の仙薬を作り出そうとして努力したり、一度は死んでもミイラとして肉体を保存すればまた生き返るなどの肉体的生命を存続させられるという考え方が一つ。肉体死から解放された霊魂が死後も永遠に存続するという霊魂不滅説が一つ。この考えは死の恐怖を和らげ生命存続の欲求を霊魂という形で満たされることで、多くの宗教に見られるものです。そして私が「永遠のいのち」と表記するものが一つ。これは諸行無常、生滅・変化する現実相の中で今この瞬間につかむ永遠の生命のことです。この生命は自分だけの生命ではなく宇宙の全存在のいのちを今この瞬間に感得し、自分もその一部であることを喜び、その喜び（いのち）を永遠の今に繋ぐことです。それは個体の生命ではなく大いなるもの（神、仏、自然、宇宙）と一体化したいのちです。私自身の肉体の生（現実世界の生命）が「良く生き良く死に」行くことは、永遠のいのちを私以外の生命に繋ぐことなのです。そこに死の恐怖はどこにもありません。ただ今この瞬間に生きる喜びを感得するだけです。私は仏教は生死についての思想であると書きましたが、厳密に言えば「死を正しく（ありのままに）観ることで生きることの喜びを受け取る」思想です。法華経が説く教えの基本は誰もが仏になり得るということです。それは久遠実成の釈迦牟尼仏（永遠のいのち）と私たち衆生が一身一心になることであり、私たち自身も永遠のいのちのひとつであることを実感することです。仏教の教えは「生きる喜び」の教えです。私は法華経を娑婆世界に生きる人々への応援の教えであり生きる賛歌だと考えます。宗教は死者のためのものではありません。いかなる宗教も生きている人の喜びと安楽のためにこそ存在意義があるのです。神曲も正法眼蔵も歎異抄も生きる喜びを伝えるために書かれたものです。その喜びをどうやって摑むかのためにキリストや久遠実成の釈迦牟尼仏や阿弥陀如来が、天国や極楽浄土や常寂光土や地獄を、私たちの一瞬にして永遠の今に立ちあがらせるのです。

私は地獄に対置するところを「安らぎの処」と表記しています。涅槃や悟りの世界です。これは宗教によって表現が異なります。キリスト教は天国（heaven）、念仏の徒は極楽浄土、法華経の徒は常寂光土です。私にはどれも同じ安らぎの処です。地獄はみな同一の表記で通じるのに、正反対の場所にいろいろな表記があるのは何故でしょう。行きたくない処（地獄）は共通でも行きたい処（安らぎの処）は人それぞれだということかも知れません。私は特定の宗教に関わることで安らぎの処を見失うくらいなら、無宗教でいた方が良いと思っている宗教者です。それは各各が見い出した「信」こそが自身の宗教と考える汎宗教者でもあるということです。

狂言綺語百十四・願いに生きる

六年前の四月と五月の併せて六日間、私は御柱という不思議な存在と伴に過ごしました。当時は正式に僧侶となる以前の見習い（沙弥）の立場で、なぜ自分が出家して僧侶になろうとしたかを、自分にも他人にも言葉の説明が困難なままに会社に在籍していた時のことです。御柱祭は山から切り出した木をただひたすら曳いて、最後に神社の社殿の四隅にその木を柱として立てるだけの祭です。諏訪大社は諏訪湖の南に上社本宮と前宮が、北に下社春宮と秋宮の四つの境内地を持っているため合計一一六本の柱が建てられます。私は上社の中で一番栄誉あるとされる本宮一の柱を曳く氏子の一員として末席ながら六日間を一緒に過ごすことができました。

八ヶ岳の麓に置かれた長さ約十七メートル、直径一メートル余り、重さ約十トンの大木を、六年前の私は三日間十七キロの道のりを沢山の氏子に紛れ込み、半分観察者の目で大木から百メートルほどの綱の先端あたりを曳いていました。四月初旬の八ヶ岳はまだ雪山、麓も春になりきらないこの時期に三日間の「山出し」が始まります。柱から角のように突き出す「めどてこ」に「おんべ（御幣）」を振った氏子二十人以上が鈴なりにまたがった大木が、「木遣り」と「喇叭隊」と「ヨイサ、ヨイサ」のかけ声に合わせて厳粛かつ勇壮に曳かれていきます。道路との摩擦で木の底面はささくれ立ち、木屑の跡が道筋となって残っていきます。梃子と綱を操り人力だけでただひたすら曳き続ける、ただそれだけの祭です。道中は時間と技術と経験の粋を尽さなければ通れない難所がいくつかあります。民家が立ち並ぶ狭い道をほぼ直角に曲がる難所では軒先とめどてこが触れ合わんばかりの所を梃子と綱で左右に柱をコントロールして通り抜けます。「木落し」は斜度二十七度の断崖を大勢の氏子を振り落としながら土煙を上げて一気に落ちていきます。宮川の「川越し」は雪解け水で柱を洗い清め、冷たい川をずぶ濡れになりながら渡っていきます。ひたすら目的地へ曳き運ぶためだけの原始的な祭は、三日目の夕方には八本の大木が御柱屋敷に曳き揃い、ひと月後の「里曳き」を待ちます。

五月は「里曳き」です。二日かけて約二キロほどの参道を本宮、前宮の所定の位置まで大木が曳かれていきます。その間、里の祭らしく騎馬行列や花笠踊り龍の舞などが繰り出し花を添えます。三日目が各社殿の四隅に柱を建てる「建て御柱」。大木はめどてこをはずされ、先端を三角錐状に切り落とす「冠落し」が行われ、曳き上げられる柱に乗る氏子数十人を支える「七五三巻き」が木にまかれます。そしてワイヤーを付けて車地が巻かれると、ゆっくりと柱が立ちあがっていきます、十数人の氏子が柱の先端でおんべを振り続け木遣りと喇叭隊とヨイサ、ヨイサのかけ声が鳴りひびき、最後に柱の先端に「御幣」が打ち付けられます。この瞬間に「大木だったものが神様になる」といわれています。これはどう言う意味でしょうか。

大木が御柱（神様）になったのは諏訪神社という社に建てられ、神官が神事を執り行ったから神になったのでしょうか。神社は氏子たちに社殿の四隅に柱を建ててもらえれば、それでこと足れりとし、運搬方法は問わないのでしょうか。であれば、私を含めて氏子たちはただの大木を苦労して社殿まで運ぶ人足代りだったのでしょうか。六年前観察者として御柱祭の有様を観た私は「何故に人は大木を曳き続けるのか」「多くの労力と金銭と時間を使って人は何を得たのか」という疑問を抱えたまま六年後の御柱祭に今年臨

みました。

コロナ禍によって今年の山出しは中止となり、トレーラーに二本ずつ大木を乗せて御柱屋敷まで運ぶこととなりました。木落しも川越しも行われず、柱の浄めは宮川の雪解け水を消防ポンプで汲み上げ放水することで代用です。目の前をあっと言う間に通り過ぎるトレーラーをただ氏子たちは黙って見送るしかなかったはずです。里曳きは通常通り行われたので、私は五月の三日間は六年前と同じように氏子の一員として参加しました。ただ六年前は観察者としての目でしたが、今年は信仰者の目で御柱祭を観ることができたのです。私自身の六年に渡る信行の積み重ねが六年前の私の疑問を氷解させてくれました。大木は神社に建てられたから神になったのではありません。人々が山から切り出した大木を曳き運ぶことで神になったのです。

伝承や文献や宗教学的論証を一切勘案することなく、私が体観し観心した御柱について反論は承知の上で書きます。六年前に行われて今年行われなかったことは「山出し」です。つまり人が木を曳くためだけに曳き続けるという行為がなくなってしまったということです。運ぶだけならトレーラーで十分です。これまでも馬に引かせて運ぶこともできたはずです。今回「曳く」が「運ぶ」に変換されて初めてはっきり観えてきたことがあります。なぜ代用の利くものが代用されずに今まで人は曳き続けてきたか。それは人が曳くことだけが、唯一この大木を御柱（神様）にすることが出来るからです。神様の代理人を自認する人たちが神社に柱として建立し御幣を付けて神事を行えばそこに神が宿ると本気で信じているとしたら、私たち衆生の願いを全く知ることはできないでしょう。その時代その環境その人それぞれの願いが、木遣りと喇叭とヨイサヨイサの声で一歩進むごとに大木に込められていくのです。六日間の間に私たちはどれほど数えきれないその音と声を大木にかけてきたでしょうか、その声その音その行いのひとつひとつが、私たちの願いとして木に託され、木と一体になって自らの中に神を招き入れるのです。大いなるもの（自然、宇宙、神、佛）の依り代となった大木に私たちは願いを込め続けることで、その大木を御柱に変えるのです。願いを受け入れ、神となり、その神が私たち一人一人の願いの中に住み続けてくれると信じられること、つまり人と神と願いが一つとなることが御柱であり、私たちが曳き続けることなのです。信仰のありのままがここにあります。願いを大いなるものと共有し、願いに導かれながら日々を過ごすこと、それは生きる喜びです。御柱は日本人の信仰のあり方の根源であり、願いとともに生き続けることが喜びであることを私に教えてくれました。

狂言綺語百十五・依法不依人

私たちはある物や事を好きになるとそのものだけでなく付随するものまでもが好きになってしまいます。好きな人の好きな唄や食べ物をいつの間にか自分も好きになっていたり「あばたもえくぼ」の諺のようにマイナスと思えることもプラスに見える幸福な心理状態です。好きな人のことは何だって全部好きという好意の拡張現象はその逆もまた真となります。「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」という諺に端的に表されているような嫌悪の根拠なき拡大です。いったん嫌いとなるとその人に関わりのあるものすべてに嫌悪感をいだく心理を、お坊さんが憎くなると身につけていた袈裟まで憎くなると喩えた言葉です。嫌いなのは坊主

の言動や身分だけのはずですが、なんの感情もない衣服までもが憎くなってしまう、大変不幸で後ろ向きの感情です。

個人と国家や個人と民族の問題は今の私には荷が重すぎてここで語ることは不可能です。ただ関東大震災時に日本人が起こした朝鮮人虐殺事件やナチスによるホロコーストの事実を見れば、嫌悪は個人ではなくその属性、例えば民族や国家のもとに無限拡大をおこしていくことは否定のしようがありません。戸井出琉の性格や行動が嫌悪の対象になるのならまだしも、私の与えられた属性が何らかのきっかけで、その属性を持たない人達に嫌悪されるのです。例えばお前は日本人だから嫌いだとかお前は坊主だから嫌いだということです。私の理屈っぽいところや短気なところが嫌いと言われればまだ改善のしようがありますが、お前が日本人だから嫌いと言われれば今の私には対処のしようがありません。ソメイヨシノが「植物界、被子植物門、双子葉植物綱、バラ亜綱、バラ目、バラ科、サクラ亜科、サクラ属」に分類されるように、私は「人間界、黄色門、黒髪網、日本目、雄科」に分類された生き物と考えれば、黄色人種であることや日本人であり男性であることで嫌悪の対象にされたり他者を嫌悪したりする根拠も権利もどこにもないことが分かるはずです。

この根拠なき嫌悪は、トルストイはロシア人だから「戦争と平和」は読まない。チャイコフスキーはロシアの作曲家だから「白鳥の湖」は鑑賞しない。ボルシチはロシア料理だから食べない。というような理不尽な結論に行き着くことを私たちは知っている必要があります。生まれたときに与えられた属性（ロシア）と才能や技術が生みだした作品を不可分と見ると、そこから嫌悪の拡張が始まります。「戦争と平和」を読んで感動するか、ボルシチを食べて美味しいか、それが作品評価の全てです。仏教の世界観「縁起の法則」から見れば「白鳥の湖」はチャイコフスキーが作曲した瞬間に、もう彼の付属物ではなく誰の物でもないありのままの存在となるのです。その時作曲家の名前や国籍は作品の微少な属性の一つにしか過ぎないのです。

ありのままの存在をありのままに観ることはそのものの実相（真如）をつかみ取ることです。これは執着がある限りなかなか観ることができません。何故ならそれは固定的なものではなく常に縁りて起こり（空）続けるものだからです。つまり分類（十把一絡げ）し固定化（執着）することは不可能なのです。しかし私たちの煩悩は無常（空）であるものをそのままにしておくことができません。そこで分類し名付けることで理解しようとするのです。これが知識です。知識は人の論理で無常を固定化したものです。私は今音楽を聴いています。その音の流れの中に身を委ねることができたとき、私はその音楽と共にあるという感動を味わうことができます。音楽をありのままに観る（聞く）ということです。この安らぎの時を私に与えてくれたものがこの音楽のありのままです。芸術に限らず私たちが毎日の生活の中で安らぎの処を感じることができるとき、それは私と対象（他者）がともにありのままの姿を現わし、互いに相観て相照らす（観照）時となることなのです。これが仏の智慧です。人の知識は、この音楽は白鳥の湖、作曲者はチャイコフスキーでロシア人であることを示しますが、この知識（属性）はありのままの音楽とはなんの関係もないことなのです。

仏教徒が依りどころとすべき教えについて涅槃経では「依義不依語（教えの意味に依りて言葉に囚われてはいけない）」「依智不依識（仏の智慧に依りて人間の知識に依ってはいけない）」「依法不依人（教えそのものを依りどころとし、教えを説く人を頼りにしてはいけない）」と説いています。私たちは「依っては

いけない」といわれている「人が語る言葉」「人が教える知識」「教えを説く人」に吸い込まれるように引き寄せられてしまいます。日蓮聖人は現存する著作や消息文の中で「依法不依人（法に依りて人に依らざれ）」の言葉を三〇回以上引用しています。頻繁に注意喚起しなければならないほど、ありのままに教えを受持することは難しいことであり、逆に人の編み出した知識・言語・解説は口当たりがよく我見（執着）を追認してくれる都合のよい言葉なのです。仏の教え（法灯明）のままに歩き続けるためには「ありのままの私の受持（自灯明）」がなければなりません。私とお釈迦様の自由で平等な同行です。しかし自灯明を私でない何か（仮に他灯明と名づけます）、例えば宗門や僧侶やお札や祈祷に預けてしまうと、私は他灯明が示す属性の一員としてある団体や会に分類され、固定化（執着）された「私」となることを余儀なくさせられるのです。私は日蓮宗の僧侶ですが、その前にお釈迦様の弟子です。日蓮宗の僧侶は私の属性です。お釈迦様の弟子はありのままの私です。お釈迦様の弟子でいられる限り私は自由自在に日々を歩むことができます。ありのままの私でいる限り属性が私を固定することは、私自身も私以外の誰もできることではないのです。

あばたもえくぼの好意はいとも簡単に坊主憎けりゃ袈裟まで憎いの嫌悪に取って代わられることは、結婚と離婚の関係を見ればよく分かります。好意と嫌悪は裏表の関係なのでしょう。また蓼食う虫も好き好きのように自分の物差しで好悪を測ることの迂闊さも、その発露も執着のなせるわざと分かっていても、私は日々テレビから流される薄笑いを浮かべて語るロシア人の好悪を保留することが可能だとは思えないのです。

狂言綺語百十六・ありのまま

夏に向って私の寝覚めは鳥の声と伴にあります。梅雨の晴れ間の朝は四時前から鳥の囀りに目をさましてしまうことがよくあります。本当は涼しいうちに起き出して畑作業をすればよいのですが、頭で考えているだけのことで体が動きません。そうこうしているうちに目覚ましだったはずの囀りがいつの間にか心地よい二度寝を誘っていました。もう一度眠りにつける幸せは、暑いさなかの草取りも苦にならないほどの至福です。

三月になるとウグイスの鳴き声が聞こえてきます。最初は下手な鳴き方でなかなか鶯らしい囀りになりません。それでも毎日のようにホーホケキョと練習を続けている内に、いつの間にか立派な鶯の鳴き声です。繁殖相手を引きつけるためか、自分の縄張りを主張するためか私には分かりませんが、練習の成果を競うように梅雨のこの時期は私の枕の四方からホーホケキョが聞こえてきます。よく聞くと音程も長さも微妙に異なる鳴き声です。何羽の鶯がいるのかと耳を澄ましているうちに、ついに目が冴えて眠れなくなりました。

ほととぎすも練習によって鳴き声が上手になっていく鳥のひとつです。五月の終り頃から私の耳に聞こえてくるようになりました。最初の頃は「キョッキョッ キョキョキョキョキョ」とけたたましく聞こえるだけですが、二週間も練習し続けている内に「テッペンカケタカ」と聞こえるようになってきます。しかし早朝や夜にも突然鋭く高い声で鳴くほととぎすは、鶯のように可憐優雅な鳴き声で目覚めを心地よく誘うと

いうよりは、安眠を唐突に襲う妨害者です。調べるとほととぎすは渡り鳥でした。冬はインドなどで越冬し五月になると日本に渡ってきます。夏鳥として飛来するには少し時期が遅いのは、主食が毛虫なので早春に渡来すると餌にありつけないことと、托卵の習性のため対象とする鳥の繁殖に合わせる必要があるためです。繁殖に際し、営巣、抱卵、雛の世話を自分で行わずに、ほかの鳥に親代わりを任せる、抜け目ない、図々しい習性の持ち主なのです。しかも仮親に指名される鳥が鶯なのです。私が耳にする鶯もほととぎすの声も、各各が生きていくための鳴き声と想像はつきますが、あれほど健気に囀り続ける鶯の雛が孵った時に、それが自分の子供で無いと分かったショックはいかばかりか、それをありのままと言うには躊躇を覚えずにはいられません。

ほととぎすは平安の昔から和歌によく読まれていました。百人一首に収録されている有名な歌に「ほととぎす　鳴きつる方を眺むれば　ただ有明の月ぞ残れる」があります。「ほととぎすが鳴いた方を眺めやると、姿は見えずただ明け方の月が淡く空に残っているばかりだった」というような意味でしょうか。姿は見えなくともその声の余韻と残された有明の月にほととぎすの確かな存在が感じられます。おそらく平安時代の歌人は托卵の習性をもつ渡り鳥だとは知らなかったと思います。初夏になると山から下りて晩秋に山に戻っていく鳥に冥界や自然の大いなるもののイメージを重ねたり、明け方の時を告げる声に逢瀬の別れの時やなごり惜しさを仮託して読まれるような題材だったようです。ほととぎすはその姿を人前にほとんど見せない鳥です。見えないからこそ想像力を拡げ情感を込めるにはふさわしい存在だったのでしょう。有明の月にほととぎすを観ることのできることが、平安時代の人々のありのままのほととぎすだったのではないでしょうか。

私が「ありのままに観る」という時、それは縁起の法則によって世界を如実に観ること、仏教用語でいえば「空」「諸法実相」「真如」。これを言葉で語ることの困難さとそれは信と行によって可能となるものであると私はこの場で何度か語ってきました。今私はほととぎすの托卵という生態を知りました。鶯はほととぎすに托卵された卵が孵化したときも、疑うことなく自分の子として巣立ちまで育て続けるのです。そのうえ先に生まれたほととぎすの雛が鶯の卵を巣外に捨て去るために鶯は自分の子を残すことができないのです。これが今私の知るほととぎすと鶯の生態知識です。しかし知識は宇宙の真理（真如）ではありません。今ある知識は次の知識を要求します。例えば自分の子供を育てられない鶯はいずれ絶滅してしまうのではないか、しかし未だに鶯の声が聞こえるということは何らかの戦いや調整が二つの種の間で繰り広げられているのだろうか、それは各各の生態のどの部分が如何に作用した結果なのか、その細部へと分析を重ねた知識が世界認識を可能にすると考える人達が科学者と呼ばれる人達なのでしょう。主体である人（我）が客体である対象物を分析（客観化）する試みです。誤解を恐れずに言えば、世界は人間による分析が可能と考える立場です。一方、ありのままに観る者（信行者）は世界は不可思議（ありのまま）であり、それは仏の智慧だけが知ることのできる世界と観る者です。私（主体）も対象の実在（客体）もありのままの世界では「空」なのです。

私とほととぎすと鶯は、宇宙の真理の中では関係性（因縁縁起）によって生かされている存在（空）です。ありのままに観ると言うことはこの関係が動き出すと言うことです。私が鳥の声で早朝目覚めるという関係性が、その日の私の信行を導いていきます。これを私はありのままに観てありのままに行うと言います。この導きが私を安らぎの処に進む道と信じているからこそ、私は日々をありのままに観ることに委

ねることができるのです。平安の歌人も明け方のほととぎすの鳴き声をありのままに聞いたからこそ、宇宙との交歓を歌にして残すことができたのだと思います。托卵の知識は仏との感応道交の必要十分条件ではないのです。

夏を過ぎ十月頃になるといつの間にか鶯もほととぎすの声も聞こえなくなってしまいます。外敵に襲われないようにひっそりと冬ごもりしている内に鳴き方を忘れてしまったのか、春になって私たちが再びその声を耳にする時は、また振り出しに戻ったようにゼロから鳴き方の練習を始めています。学習効果がないといえばそれまでですが、二つの種はまた来年の今頃、例年と変わらず、托卵と他人の子の抱卵と世話の関係を続けながら、私に朝の目覚めの時を告げてくれることでしょう。

狂言綺語百十七・七面山

先日四回目の七面山登山をしてきました。一回目は六歳の時。祖父が住職をする松山の寺の檀家参拝に栃木から母と伴に参加したと、相当大きくなって教えられたため一回目の登山に換算できるのですが、当時はどの山になんのために登ったのか分からないままの邪気のない山登りでした。二回目は八年前の夏の終り、私の師匠と彼の得度したばかりの十歳の長男、私と妻の四人で霊山への御挨拶登山です。三回目は五年前の日蓮宗公式修行の総仕上げ、信行道場での登山。修行の一環ですから白装束に手甲脚絆地下足袋に網代笠をつけ、題目を唱え続けながら、団扇太鼓の音に合わせて足をひたすら前に繰り出すという、修行登山です。

七面山は山梨県南部にある標高一九八二メートル日本二百名山のひとつです。東側には日蓮宗総本山久遠寺のある身延山。富士川を隔ててその遥か先には富士山がそびえ立ちます。西は北岳を代表とする南アルプスの山塊。東西を日本第一と第二の高さの山に挟まれた屏風のような山容の山です。しかし法華経信者にとって七面山は聖地の山なのです。もともとは山岳信仰の霊山として七面大明神が祀られていたと思われますが、日蓮聖人が一二七四年に身延山に入山されてからは法華経を守護する七面大明神を祀る山として、今に至るまで多くの法華経徒が訪れる法華信仰の山となりました。日蓮聖人と七面山のいわれは「ある時、日蓮聖人が説法をしていると聴衆の中に麗しい女性が熱心に聞いていました。他の信者はその女性を誰も見知っておらず、いぶかしく思っていたところ、聖人が女性に本当の姿を見せてあげるように告げると『私は七面大明神、身延の山と南無妙法蓮華経と唱える者を守護します』と言って龍の姿となって七面山の方へ飛んでいった」という伝説が残されています。それから七五〇年ほどたった今も、日蓮宗の信者に限らず多くの法華経信仰者が訪れる聖地です。山道は大変きれいに整備され、いわゆる山登りとは異なった趣です。登山の目的は通常頂上に登ることですが、信者は山頂間近の広い平坦地にある身延山久遠寺に属する敬慎院に登詣し、身延山を守護する七面大明神にお詣りすることにあります。そして敬慎院の僧坊に一泊して下山をします。道のりは登山口から敬慎院までは全部で五〇丁あり、各丁に石灯籠が建てられ、これを目安に敬慎院がある五〇丁目を目指します。途中に休憩所を兼ねた僧坊茶屋が四ヶ所。そこでお堂に向い経を唱え休憩を繰り返しながら敬慎院を目指すことが信者の登山です。標高差は一五〇〇メートルほどあります。永遠とも思える九十九折りが続き景色の変化も乏しく、ただひたすら足を上に向け

登り続ける単調な登りですが、信仰心さえあれば九〇歳のご老人でも六歳の子供でも、毎日でも、ゆっくりと六時間も時間をかければ誰もが登ることのできる山です。

今回の登山目的は純粋に頂上を目指す通常登山です。敬慎院から頂上往復を一時間プラスと考え往復七時間の予定で朝八時半に登山口から登山を開始しました。当日は梅雨明け直前の蒸し暑さと気温の上昇で、一五分も登ればタオルは汗でびしょ濡れ、用意した飲料水もみるみるなくなってくる有様です。暑さ対策は充分したつもりですが、湿度百%の雲の中を歩いているような状態が二時間も続いた結果、三六丁目を過ぎたあたりで足が動かなくなってきました。水分と塩分が汗で大量に流れ筋肉が軽いけいれん症状を見せてきたようです。今までにない状態に頂上を諦め、敬慎院までは何とか辿り着き、七面大明神にお詣りして戻ることに変更しました。登山中にこれほどの足の筋肉痛は今まで経験したことはありません。天候以外で予定を変更したことも一度もありません。真東に見える富士山も足下に見える身延山も全く臨めないままに下山を始めると、今度は妻が蛭に足首二箇所の血を吸われたり、蛇に遭遇したり、下り続きの足がダメージを受けてがくがくと震えが止まらず足下がおぼつかなくなったりと、四回目の七面山登山から這う這うの体で退散しました。

散々な結果に終った四回目の七面山登山の原因はいくつも考えられます。朝四時起き、四時間近くの運転の後の強烈な暑さと湿度の中での今年最初の登山。年齢の衰え、過去の経験から来る過信。無理な行動計画などきりがありませんが、一番の原因は七面山登山への喜びと敬意がなかったことです。過去三回の「邪気のない登山」「御挨拶登山」「修行登山」は「ありのままの登山」「信の登山」「行の登山」でした。それぞれの山登りは、七面山と対話しこの山と一緒になってその時のありのままの瞬間を堪能する山登りだったのです。最初の登山に限らず、二回目も三回目もいつも最初の登山なのです。山と私との因縁は登る度に新しい喜びをもたらします。登山家はそれをどう表現するのか知りませんが、私は山登り好きの宗教者なので、それを大いなるものとの出会いに包まれる喜びと表現します。七面山が法華信仰の山だからではありません。山の頂上に立ったときに触れる、ありのままの自然（人々が神や仏や宇宙の真理などと呼んできたもの）に出会うことの喜びは、常に新たな喜びなのです。それはまた私の中の新たな仏に出会うことでもあるのです。

四回目の山登りで私は、過去の登山で七面山については何もかも知っているつもりになってそこに登る喜びと対話を望もうとしませんでした。登るという信行に喜びを見いだそうとしなかったのです。何も知ってはいないのに知っているつもりになっている者を「増上慢」と言います。仏教ではまだきちんとした悟りを得ていないのに、すでに悟っていると思い込んでいる状態を指す言葉です。私は四回目の七面山については増上慢だったのです。私たちは知っていることなど何もないのです。唯一知っていることは、ありのままの世界があるということだけです。そしてその世界は増上慢には決して観ることの出来ない世界なのです。登山後四日たってもまだ筋肉痛が治まりません。この筋肉痛は七面大明神の戒めの痛みです。私に増上慢であることを教えてくれたこの痛みへの感謝とお礼のために、「報恩謝徳登山」を近く予定しなければなりません。いつもありのままなのに常に新しい七面山と一体となる、五回目の登山です。

狂言綺語百十八・地球の心身表現

私は地学への興味がなかったため、地層や地質などの地球の物理的な姿には興味が涌かずに今まで年を重ねてきましたが、仏教に帰依してからは地球も宇宙の中の生命個体の一つであるとの視点を持つようになりました。つまり私とその他の生きとし生けるもの、山川草木全ては大いなる宇宙の真理（仏）によって生かされている生命体であると観ることです。地球は私と同じ生き物であり、私たちはまた地球の一部分を担う生き物です。地球はそこに存在するものたちを部分とする全体でもあります。いずれ生き物は必ず物理的な死を迎えます。また各各は「苦」の原因、貪・瞋・痴、の三毒（煩悩）からは逃れられない存在です。己の好物を貪り求める貪欲、嫌いな物を嫌悪する瞋恚、的確な判断を下せず迷い惑う愚痴の三つの毒を断ち切ることを願いながらも、そこから逃れられない己に歎き哀しみ怒る存在が私たち生き物のありのままなのです。

火山噴火は地下のマグマによって引き起こされます。大別するとマグマが直接地表に噴出するマグマ噴火とマグマに熱せられた地下水が水蒸気となり蓄積された圧力によって岩石を破壊し地上に噴出する水蒸気爆発の二種類です。噴火は地表に抑圧されたエネルギーの解放の瞬間とみることができるでしょう。地球に存在するものは、太陽という外的なエネルギーを等しく受ける一方、それぞれが内在エネルギーを抱えています。人で言えば三毒という煩悩エネルギーもそのひとつです。同じように地球はマグマに代表される様々なエネルギーを内在させていると考えれば、噴火は地球が抑圧に堪えられなくなった結果の負のエネルギーの発露です。比喩的に言えば地球の不満や怒りが爆発したということです。私たちはマグマを見ることはできませんが、溶岩、岩石、火砕流を見ることはできます。それは地球の怒りの結果ですが、なぜ地球は怒っているかの原因を知ろうとはしないのです。それは地球が生命体、つまり体と心を持った生きものであるとの視点がないからです。結果から科学的に予知や被害の最小化に備えることはできても、怒りの根源を知ろうとしなければ、地球は今後も様々な形で、噴火に象徴される生命体としての心身表現を止めることはないでしょう。

地球は今、マグマが噴火口を探しながら地下で活発に蠢いているようです。冷戦終了後しばらくの期間、地球に存在するものたちの不満のマグマはなりを潜めていたようでしたが、ついにユーラシア大陸の真ん中で二月に大噴火が起こりました。均衡から対立へ、協調から敵か味方かの二極化へと一気に地球のエネルギーが動き始めました。その時人間は「暴力は許さない、民主主義を守れ」と主張しましたが、未だに噴火は止みません。それは戦争という現象だけを見て、その原因となる地球の人間に対する怒りや要請を見ようとしないからです。地球のエネルギーは人間だけに通用する政治と経済の理論だけでは到底制御できるものではありません。地球は太陽のエネルギーによって生かされています。そして人間を含めた地球上に存在するものたちは、地球と各各の存在との関係性の中で生かされているのです。地球にとってはそこに存在するもの全てが平等です。それがお釈迦様の教えです。人間同士の殺し合いだけなら、地球の生命に影響がないと考え、勝手にどうぞと見過ごしてくれていたでしょう。しかし大地や自然や気候の破壊が地球の存続を危うくしていることを置き去りにして、人間だけにしか分からない屁理屈で戦争にうつつを抜かす人間たちに、地球が愛想を尽かしても不思議はありません。人間以外の他の存在を生かすために、地球からの退場を人間に宣告する必要があると地球が考えているならば、今が、人間と地球との対話と和

解の最後の機会かも知れません。

曹洞宗の祖師道元が詠んだ和歌に「峰の色　谷の響も皆ながら　吾が釈迦牟尼の声と姿と」があります。季節の移ろいとともに変わってゆく峰々の色や聞こえてくる谷川のせせらぎ、自分を取り囲んでいる自然の姿そのものの中にお釈迦様がいる、と詠んでいます。この歌は道元の自然観、地球観、宇宙観です。道元の耳に聞こえ、目に見え、肌に触れ、心に観ずるもの全てが仏そのものだということです。つまり私と私以外の全てとの関係性の中で、そのものたちをありのままに観てありのままに行うとき、そこに大いなる宇宙の真理（仏のはからい）が動き始めるということです。これが私と私以外のものとの感応道交です。その時、私は仏に出会い私自身が仏になるのです。私と地球（私以外）を対置するのではなく、地球の中の私、私の中の地球となるときです。地球も自然もそこに存在する者たちも互いが互いを内在していると観ることなのです。

道元の和歌に代表されるあまりにも仏教的で日本的な世界観に、私は地球から人間が追放されないための最後の対話のチャンスがあると考えます。ここまでの記述が直接的な論述になっていない畏れがあるので、ここに結論だけを述べます。比喩的に噴火という表現で表した地球の心身表現は、地球が勝手に怒りにまかせて噴火を起こし、暴れていると考えてはなりません。地球にある全存在の因果関係によって噴火があるのです。私の中に噴火が在り、噴火の中に私が在るということです。それは私に限らずすべての存在の中にもそれぞれの噴火があるということです。この様に世界を観ることが「ありのままに観る」ことです。そして仏のはからいのままに行うことが「ありのままに行う」ということです。地球の心身表現は私自身の心身表現でもあると観ることができたならば、自ずと私たちが行うべきことは仏のはからいのままに在るはずなのです。

現代に生きる人々は、地球の心身表現を科学によって解明しようと試みています。しかし科学は人間と地球を対置した主客二元論によって立つため「身」の視点のみで「心」の視点が無視されています。そもそも地球に「心」があると考えること自体、科学から見ればナンセンスなことでしょう。しかし仏教は心身一如、主客一如です。私との関係性の中でこそ地球は存在しうると世界を観ることです。その時人類は初めて「地球の支配者人間」という傲慢な考えの過ちに気づくことができるはずなのです。

狂言綺語百十九・騙る者たち

私たちは「信ずる」ことを必要としています。全てが不信だらけであれば心が定まらない毎日を過ごさなければなりません。不安定な心には安らぎはやって来ることはないのです。夜、安らかな眠りにつくことができるのは、明日が自分に訪れると信じられるからです。朝の寝覚めがあるのは、今日も太陽の光が私たちに注ぐことを信じられるからです。しかし病気や事故のような目に見える出来事ばかりでなく、漠然とした孤独感や将来への不安が、そのあたり前の毎日への信頼を損なってしまうことがあります。これは不幸なことです。出来事が招いた不幸だけでなく、その出来事によって安らかな日々がやって来ることを信じられなくなってしまう不幸です。不信の種が心に芽生えはじめるとその不安は果てしなく拡大し続けてしまうのです。

私たちの不安を取り除き、安らぎの処へと導くためにそっと手を差し伸べてくれる「信の手」が宗教です。「導きの手」でもあります。この手に導かれて私たちは自らの足で安らぎのもとへと歩んでゆくのです。仏教の「信行」は「導きの手」が「信」であり法灯明です。「自らの足」が「行」であり自灯明です。「信のままに行うこと」が宗教です。しかしその宗教を騙る人達がこの世には溢れています。彼らは不安を除く素振りをしてそれを増長させるのです。「私たちの用意する不幸発安楽行きの船に乗れば、あなたには必ず幸福が訪れますよ」との勧誘文句に惹きつけられて、高い乗車賃を払って乗船してしまった人は、本当に安楽に行き着くことができるのでしょうか。乗車賃を布施と騙り、乗船を信行と騙る者たちの行為を私は何と呼べばよいのでしょうか。彼らがそれを宗教と呼ぶならば、私の考える宗教には別の名称が必要となります。もし私の宗教を宗教と呼び続けられるならば、彼らの行為は不幸を目的としない限りはビジネスと呼べるかも知れませんが、不幸を増長しているならばそれは詐欺あるいは無限連鎖講という呼び方がふさわしいでしょう。

人が「信ずる」目的はただひとつ、幸せになるためです。信ずることで迷いや不安がなくなり心が安らかになること、それが「幸せ」です。信ずることで自分自身が幸せになることができたならば、それを周りの人達に拡げていき自分の幸せを他者と分かち合うこと、それが「幸せ」です。その実現を信じて日々を信行に生きる人々を信者というのです、自分たちの教義を信じる者だけで徒党を組み、信じない人々をその幸せから排除しても構わないと考える人達を「不信者」といいます。宗教教義を信じることが「信ずる」ことではありません。「信ずる」ことで自らにもたらされた安らぎを喜び感謝する者が信者であり「信ずる」ことです。

信仰に対価を望むならばそれは「信ずる」ことではなく「取引」です。「信の手」を騙る者たちが特等席から船底大部屋までの料金表を片手にあなたたちを不幸から救い出してあげますよと勧誘しています。救いの船に等級や乗船料が必要とされるならば、それは「幸せ」を商品とした取引です。取引にはリスクが伴います。損もすれば得をする人もいます。自己破産、家族離散になる人もいるでしょう。幸福の船に乗ったつもりが不幸の船だったと気付けば下船も可能ですが、取引相手にとっては相手の損は自分の利益です。不信者たちの「あなたの信心が足らないからですよ」という騙りを信じてしまった人々は、不信者の幸せの基準から排除され無限連鎖の不幸の中に堕とされてしまいます。幸せを取引の口上にする船に乗った人達は、決して幸せになることはありません。不信者は不安の種を播き世の中を不安だらけにする人達なのですから。

幸せは人それぞれのものです。幸せの絶対値は存在しません。また幸せは無常のものです。縁起の法則に従えば今の幸せは明日の不幸せにもなってしまうのです。それを追い続ける限りは心の安らぎは訪れません。金儲けに取り憑かれた者が、どれだけ稼いでも満足できずに、金の亡者と化してしまうように、幸せの亡者となってしまうのです。幸せに取り憑かれた者は実は不幸せに取り憑かれた者なのです。今日もつまらない一日だったと思って眠りにつく人は、翌日の朝、今日もまたつまらない一日になるだろうと思ってしまうでしょう。逆に今日一日も楽しい一日だったと眠りにつけば、翌日の朝、今日もまた楽しい一日になるだろうと考えて過ごすでしょう。この楽しい日々を「信ずる」こと、それが「私は幸せである」と言うことなのです。

日々を信じられない不信者たちが互いに騙り合って作った巨大な布施の集金システムが日本中にありま

す。憲法の信仰の自由と宗教法人の特典によって治外法権を与えられたこれらは、政教分離の網をくぐり抜け、政治家と持ちつ持たれつの関係を築き、その維持のために多額の布施を集金し、不幸せの再生産を行っています。彼らは不信者同士で教団という徒党を組み、一様に宗教法人を名乗っています。そのひとつが最近、負のエネルギーを爆発させました。恨みを逆恨みの形で実行したように見えますが、それはありのままに起こったことではありません。教団はピラミッド型で構成され、頂点に近いほど彼らの騙る「除霊・招福」の実現が高まるように見えますが、ありのままに観たときそれは信も不信も幸も不幸も一緒くたに抱えたままの混沌とした不安の人達の集団です。そこには安らぎはなく不信がマグマのように蓄積されているだけです。

騙る者たちは信を騙り善を騙り民主主義を騙り正義を騙ります。それを騙りだと知られても、そうでないと言いくるめる技術と封じ込める権力を持つ者に、私たちは蟷螂の斧すら振り回すこともできません。騙りは社会に深く沈殿し、今や社会の基盤をなし、〝騙らずんば人に非ず〟の体を為しているようです。そこで起きたマグマの爆発は、「信ずる」ことができない者たちの、騙り社会に対する異議申し立てです。それが騙り社会の頂点に立つ象徴的存在に向けられたのです。特定の個人に向けられたものではなく、ましてや特定の宗教や政治信条に向けられたものでもありません。騙る者たちを容認する私たちに「信ずる」ことの復権を迫る銃口なのです。

狂言綺語百二十・いつもと違う夏　同じ夏

今年の夏はいつもの夏と違うという言葉を、ここ数年は毎年のように呟いているような気がします。それでも二〇二二年、今年の夏はいつもにましていつもの夏と違うと書いても間違いではなさそうです。今年は六月下旬から七月初旬にかけて一回目の猛暑がやって来ました。異常に早い梅雨明けです。日照りが続き、水不足が心配され、私の畑も例年を遥かに上回る三五度前後の気温に作物はくたびれ果て、毎日の水やりも追いつかず、成長が止まってしまいました。畑を食い散らかす虫たちも暑さで、なりを潜めたままでした。ところが一転、梅雨が舞い戻ったかのような蒸し暑い雨の日が始まりました。畑の水やりも必要なくなり、作物もぐんぐん生長していきます。日照も大切ですが、生きものに必要なものはまずは水であることがよく分かります。雑草たちが生長を競うかのように畑全面を覆い隠します。雨中の草取りを怠っているうちに、また猛暑が戻って来ました。畑は雑草を住み家とし、作物を食料とする蜂やバッタや様々な虫たちの天国と化しました。私にとってはこれは地獄の責め苦です。彼らには気の毒でしたが、炎天下、三日かけて畑の雑草を全て抜き去り、虫たちの住み家を破壊し、やっと作物のための畑を取り戻しました。それからは食べ切れないほどの胡瓜、茄子、ピーマン、トマトの収穫です。結局紆余曲折はあったものの作物はいつもの夏と変わらない実りの夏です。あれこれあっても喉元過ぎれば熱さを忘れる、今年もそんないつもの暑い夏が終盤に入りました。

いつもと違うことを違うと観ること、そしてその違いを毎日の関わりの中でいつもと同じと観ることができること、これが私が狂言綺語で書き綴っている「ありのままに観てありのままに行う」と言うことです。仏教の思考方法は西洋の論理思考が身についてしまった私たちにはとても言葉で説明し難く、また理

解し難いものです。仏教用語である「諸法の実相」や「一如」や「空」は全部同じことをいっているのですが、実感として私たちの心身に直接語りかける言葉にはなりません。私は仏教書を渉猟していただけの頃はこの言葉が出ると、そこを読み飛ばしていました。机上の言葉にしか過ぎないそれらは私に何の行動も促すことがなく、現実の生活の後追いに留まっていることが分かったからです。それからの私の読書は、日々の信行生活を後から確認するためだけとなり、その時間を経の読誦と日常をありのままに生活することに充てました。すると般若心経の「色即是空　空即是色」や法華経の「諸法実相　所謂諸法　如是相　云々」の言葉が「信」となり、自ずから「行」へと続く道が立ち現れたのです。今日は何をしようか、何をしなければならない、というような思案は全く不要です。毎朝ただ頭を空っぽにして経を唱えるだけの私は、その空っぽの頭のままに日々の生活へと導かれて行くのです。この毎日を続けて六年、今年もいつもと変わらない暑い夏です。

冒頭の今年の私の夏は「ありのままに観てありのままに行う」日々を具体的に書いたものです。今年は確かにいつもの夏と違い、猛暑が六月にやってきて梅雨と猛暑を繰り返し、今この文を書いている八月七日は三回目の梅雨の最中です。季節が段階的に変化していくことがいつもの季節変化ならば、今年の夏は明かにいつもと違う夏です。行ったり来たりの繰り返し、いつ梅雨が明け夏が終わるのか見当がつきませんが、おそらく気づけば秋となっていることでしょう。人間はエアコンで暑さをしのぎ、ダムが水量を調節して何とか夏を乗り切っていますが、自然の生き物も右往左往する天候に見事に対応する能力は備えていました。人から見ると、いつもの時期にいつもの作物の成長や虫の出現が見られなかったのですからいつもと違う夏なのですが、それでも気が付けば、数や量や成長速度や出現時期の違いはあっても、確かに実はなり蜂は花の間を飛び回り、馴染みの虫たちが作物の幹や葉っぱに寄生しています。これはいつもと変わらない夏です。私のこの夏の生活が仏教の教えとどこが関係あるのか、畑と人のある夏の出来事に過ぎないのではないかと疑問を持たれるかもしれません。宗教に何か救いを求め利益を求めるのであれば、それは前回述べたように宗教ではなく取引です。私の宗教は毎日を心安らかに当たり前に生きることにあります。私が信ずる教えはありのままに観てありのままに行えば安らかな毎日を送ることが出来るということ以外にはないのです。違いを嘆きその違いを解消することに力を注ぐことではなく、違いを受け入れその違いとともに歩み続ければ、いずれその違いは互いの中で同化していくのです。今年の夏と私と自然の生き物の関係を言葉に表すとこのようなことでしょう。それが宇宙の真理、仏の導き、大いなるものに抱かれて日々を送るということなのです。

私のありきたりの日常を安らかに過ごすことが私の宗教ならば、あなたの日常を安らかに過ごすためにはあなたの宗教があってしかるべきです。お釈迦様の教えは導きの灯（法灯明）です。あなたの宗教はあなたの日常を生きるあなた自身の中にあります。それが自灯明です。各々が自灯明を足元にかざしながら法灯明の導く所に歩んでいくことが、私のあなたの各々の宗教（信行・日常）です。ですからあなたにもいつもと違う夏がありいつもと同じ夏があるはずです。その夏をありのままに受け入れていることが、あなたが安らぎの処へと歩む道にいるということです。宗教は誰のものでもなくひとりひとりに唯一無二のものなのです。

いつもの夏と違うと観て、未だにそれが私の中で同じ夏と同化できていないことが二点あります。一つはヘビを全く見かけないことです。毎年連休明けから七月ころまで蓮池と山の間を行ったり来たりするヘ

ビがその途中で車に引かれて死骸を晒したり、慌ててシュルシュルと音を立てて逃げ去る姿を、毎日のように目撃したものです。その間携帯蚊取り線香は必需品でした。しかし今年の夏は一度もヘビにお目にかかることもなく、蚊にもほとんど刺されることもありません。ヘビに出会わないことも蚊に刺されないことも有難いことなのですが、この二点だけいつもと違うまま夏を終えてしまうのは、少し心残りかもしれません。

狂言綺語百二十一・山の眼差し

私の山歩きは水と食料と合羽と熊除けの鈴があればその他の装備はあまり必要としません。天候が好転しないと分かれば山登りを途中で切り上げることや登山口からUターンして予約した温泉に直行することもあります。山中泊するような山行は初めから計画をせず、無理せずただひたすら歩き頂上でおにぎりを食べそしてまた降りる。この繰り返しです。眺望は天気次第なので景色を目的に登ることもありません。最近のTVの山番組やYou Tubeではいろいろな材料を持参して頂上で調理したり、花や鳥を観察する楽しみが盛んにレポートされていますが、私にはその様な楽しみ方は全くないのです。登り始めた後は、山頂はまだかまだかの思いが頭を駆け巡るか、逆に頭はすっかり空っぽになってただ足をひたすら前に運んでいるかのどちらかです。

楽しみといえるものに心当たりがあるとすれば、山頂で食べる昼食です。これは妻が早朝握ってくれた梅干しのおにぎり二個と胡瓜の塩漬けです。私はこれさえあれば満足です。卵焼きやプチトマトはおまけです。握り飯と漬物は、塩分と水分とエネルギーの三つの要素があれば生きものは活動が可能であることを教えてくれる食べ物です。登りですっかり消費した三要素を効率よく摂取すると後はもう下るだけ。よくよく考えてみれば、早起きして苦労して山に登っておにぎりを食べてただ山を下りるだけの私の山歩きは、傍目からは何の楽しみも発見も無いように見えるはずです。確かにその通りで私は山頂におにぎりを食べに行っているだけです。雲で何も見えない時も、強風で飛ばされそうな時も、塩と水と米は体への最高のご馳走です。

登山がスポーツや趣味となるまでの頂上は信仰の場でした。そこは行者と神だけが存在することのできる所です。旅人や行商人はわざわざ山頂を目指す必要はありません。効率よくいくつかの峠を上り下りしながら目的地に向かいます。頂上を横目で見ながら人々は峠道を急いだのでしょう。山の頂上は生活や経済活動には無縁の地だったのです。今では、峠道はトンネルに取って代わられているところが多く、古道として草むらに埋もれてしまっているところがほとんどのようです。金精峠は栃木県日光市と群馬県片品村との境にある標高二千ｍを越える峠です。昭和四〇年完成の金精トンネルで、今では峠越えの道を辿ることは不可能になっています。私は金精峠を目指して登山道を上ったことがありますが、場所によっては両手両足を使ってよじ登るような登山でした。かつての峠道はおそらく九十九折の道だったはずですが、それでも屏風のような峠に人は、向こう側にある何かに思いを馳せ、何かが実現できることを願ってこの峠に立ったのでしょう。

「峠」という文字は室町時代に日本で作られた国字（和製漢字）だそうです。国土のほとんどが山地で、

山が人の言葉や生活や文化を隔てる境界となっていた日本の独特の地勢から生まれた漢字であることが頷けます。「山」を「上」り「下」る場所が「峠」です。二つ以上の文字を意味の上から組み合わせて新しい文字を作る「会意文字」のお手本のような字です。かつて峠はクニ境であり、その先は異郷の地でした。上り詰めて峠についたときに初めて向こう側の視界がぱっと開けます。これから異郷の地に足を踏み入れる期待と恐れに心が揺れるとき、ふと周りを見やると高い山の頂が見えます。その山の頂に自然と手を合わせてこれから向かう異郷の地での無事を祈ることは、日本人であれば当たり前の感情ではないでしょうか。金精峠に登った時、私は目の前の男体山と眼下に広がる中禅寺湖の姿に、自然と手を合わせていました。

山そのものの存在が私たちの無事を守護してくれると信じること、誰かに守られ導かれていると実感すること、それが大いなるもの、宇宙の真理との出会いと信じること、それが信仰です。赤ちゃんはお母さんの眼差しに見守られていることを信じているからこそ、母の腕の中にすべてを預けて眠ることが出来るように、私たちは大いなるものに守られていると信じているからこそすべてを預けて日々を心安らかに生きていくことが出来るのです。いつの間にか人は信仰の原初を忘れてしまったのではないでしょうか。私たちを見守る眼差し、その眼差しに抱かれて生きる日々を喜び感謝すること、その日々を信じることのできる安心、これが信仰の原初です。人はそのような眼差しを受け取ったとき、自然と喜びと感謝の念が浮かび、気がつくと眼差しに向って手を合わせているのです。誰に指示されるわけでもなく、何かと引替え取引するわけでもなく、無私、無心の私が私のために注がれた無量の慈悲をありのままに受け取ること、それが信ずることです。

信ずることから遥か遠くに来てしまった今ある宗教は、教義に忠実であることや教祖を崇めることが目的となってしまい、私たちの原初的な信仰をどこかに置き去りにしてしまったようです。もう一度私たちは信ずることの原点を取り戻さなければなりません。なぜ日本の山の頂上にはどの山にもほぼ例外なく祠が祀られているのでしょうか、山頂だけでなく湖の畔にも、道端にも、ビルの屋上にも、民家の庭にも、ありとあらゆる所に祠があるのでしょうか。そこは人が手を合わせたところです。手を合わせたところには、神がいると日本人は信じていたのです。それを古来日本人は「カミ」と称していました。「神、仏、大いなるもの、宇宙の真理、真如、実相、ありのまま」信仰者である私はその名称を問いません。何故なら信仰は私を見守る眼差しと私との間にだけ存在するものだからです。私には私の信仰が、あなたにはあなたの信仰があります。私には私のお釈迦様が、あなたにはあなたのお釈迦様がおのおのを見守ってくれているからなのです。

今年はまだ一度も山歩きに行くことができていません。酷暑と梅雨を繰り返す天候にタイミングを逸している、頻繁に報道される熊との遭遇を恐れている、体力の衰えを自覚し始めた、などと理由は色々ですが、塩、水、米の三拍子揃った梅干し握りと塩漬け胡瓜の山頂極上ランチを今年はまだ味わえていません。そうこうしているうちに自家栽培の胡瓜はもう終了してしまいました。夏も終りですね。

狂言綺語百二十二・宗教は怖い！

宗教は怖い！これが今、大半の日本人の宗教に対する認識ではないでしょうか。得体の知れないもの、近づくと洗脳され全財産を取り込まれてしまうもの、一家破産、離散の憂き目に遭うもの。宗教はその宗教を信じる集団にとっては安住の場所ですが、そうでない人達にとっては危険で忌避すべきもののようです。

宗教は怪しいものでしょうか。私が琉游舎を建立し信行一致の信仰生活に入って五年が立ちました。当初はこの建物の中で怪しげな宗教儀式が行われているのではと不審に思われ、強引な布教活動を始まるのではと、周囲は不安視していたのではないでしょうか。私の宗教は徒党を組み何らかの集団目的を達成するためのものとは全く異なるものです。私の宗教（信心）は、私自身の安らぎの日々のために、お釈迦様の導きのままに毎日を生きることです。お釈迦様がその日々を導いてくれると「信ずる」こと、この一点だけに支えられているのです。私の毎日は私だけの毎日です。あなたの毎日はあなただけの毎日です。集団（徒党）の毎日はその集団の毎日であって、あなたの毎日ではありません。私は私の宗教に人を巻き込むことや強制することをしようとは思いません。する必要もありません。あなたの不安を取り除いてくれるものは、あなただけの信心以外にはないからです。その信心について人から問われれば「あなたのありのままの毎日を信じ感謝し慈しんでください。きっとあなたの明日も安心の日々が巡ってくるに違いありません」と答えるだけです。

宗教は個人的なものです。しかしそれは各各の個人的な宗教と共棲できるものでなければなりません。互いの宗教（信心）を尊重し認め合うことで、初めて信心（宗教）の本来の目的である「安らぎの日々」が私たちのもとに引き寄せられるのです。個人のものである信心の実践（日々を生きること）方法が類似していれば、同行の仲間を募り、ともに歩んでいくことも可能でしょう。それが教団です。その教団の集団目的のために個人の日々の生活が（実践）あるのではなく、それぞれの信心の日々をサポートするために教団があるのです。個人を集団に奉仕させる行為は宗教行為とは言いません。今、世間で宗教法人と認可されている集団のほとんどが、信徒を集団の意志に従属させその意志の実現のために奉仕させているように見えます。教祖や教義を盲信する信徒は、自由な宗教意志を放棄した、永遠に不安から逃れることのできない人々です。教団は信徒の不安を煽ることで更なる奉仕を求める略奪者です。私たちの自由な信仰心を教主・教団信仰に変えていく侵略者です。不安を軽減させるとの言葉を騙り更なる不安を増長させる詐欺集団です。なぜかロシアや中国の権力者の民衆統治方法に似ていませんか。宗教に名を借りた権力行使の組織が今の教団なのです。

宗教は智慧です。個人の不安を軽減し安らぎの処への歩みを導く英知です。お釈迦様の願いはただひとつ「人々から苦を除き安らぎを得させること」です。ただ個人の不安を自分だけで解消することは現実社会の中では不可能です。私の安楽があなたの苦悩となってしまうことは宗教が求めることではありません。だから個人の自由な宗教意志がお互いの自由な宗教意志を尊重し認め合うことで、あなたの家族、隣人、共同体、生きとし生けるもの、自然、地球との共棲を可能にする智慧が必要となってくるのです。これが宗教智です。政治や経済はある集団が利益を得るために存在する社会装置です。国益に代表されるように、

党派を組み、会社を作り、資本を投入し、業界団体や労働組合を組織することは全てある集団の利益実現のために必要とされるシステムです。そこでは対立や利益不利益が常に存在することは必然です。それが社会を維持するために必要不可欠な装置であるからです。その社会装置の埒外にあって宗教智を実践することは不可能です。だからこそ私だけの宗教実践（信心の日々）を、この社会のなかでどうやって実現していくかが、宗教者には問われ続けるのです。これを自問し続けることが私の宗教の自由を社会装置から守る唯一の方策なのです。

宗教は不自由なものです。憲法第二〇条は「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。」とあります。個人の心の中の信仰は反社会的な信仰であろうと、それを行為に表さない限りは何ら制約を受けないと言うことです。その個人が集団を作り宗教活動を行ってもこの原則は適用されると言うことでしょう。しかし集団に所属したとたん個人の信仰の自由はその集団の信仰の自由に召し上げられ、従属させられてしまうことは前述したとおりです。サリンを撒いた集団は明らかな犯罪行為ですから信仰の自由より刑法が優先するという判断に異論は唱えづらいでしょう。しかし壺や印鑑や教祖の書籍をたとえ法外な値段で売ったとしてもそれを反社会的な行為と指弾することは可能でしょうか?合格祈祷をしてもらった人が１００％合格することはあり得ません。しかし不合格になったから祈祷料を返せとは言わないでしょう。布施は非課税であることからして法外なのです。法外である布施行為を法外な値段で買わされた上に期待した効果がなかったから返金せよとの理屈が成立するとは私には思えないのです。反社会的行為と宗教行為との境界線を明確にできない原因は宗教集団が信者の信仰の自由を略奪していることにあります。社会の中で権限行使をしている集団はその段階で社会的存在となり法外に存在することはできません。しかしその構成員である信者は信仰の自由を根拠にして集団に成り代わって、法外にあって法外な値段で布施行為をすることができてしまいます。集団は個人の信仰の自由を盾にしてあたかも集団にも信仰の自由が憲法で保障されているかのように振る舞うことを可能にしているのです。本来宗教集団側からの権力行使を防護するための憲法二〇条（政教分離）が、社会機構に狡猾にもぐり込むために使われているのです。だから宗教は怖く、怪しげなものなのです。いつの時代も宗教を個人的なものとして自由を貫徹することは許されません。宗教とはかように不自由なものなのです。

狂言綺語百二十三・山の不思議

三連休前日の会津駒ヶ岳登山口の駐車場は平日にも関わらず朝の七時前には満車でした。林道の路肩に二〇台ほど駐車できるスペースには東京・横浜・長野や富山ナンバーの遠来の車で一杯。恐らく夜を徹して車を運転し、ここで仮眠を取って早朝登山を開始したに違いありません。私はここまでは二時間少々の道のりなので、余裕を持って五時前に出発したのですが、山登りにかける気持ちが少々劣っていたのか、駐車スペースを見つけることができず、Uターンして林道を少し下った場所に車を止め、届けを七時十分に提出して登山開始です。

登山口からの二時間半ほどはただひたすら急登を上りつめ、やっと見晴らしのあるところに出ます。す

ると駒ヶ岳の名前の由来通りの馬の背の山容があらわれ、木道と階段の緩やかな登りを、その雄大な景色と伴に頂上を目指します。登り三時間半の道のり。最近山歩きの機会が減り、標高差千百メートルの山行も久しぶり、年齢による衰えと日常的な運動不足の不安を覆い隠しながら、いつものように頭を空っぽにして一歩一歩足を上に向けて進めていきます。陽ざしが強く気温もどんどん上昇していく中、聞こえるのは熊除けの鈴の音と、ラジオの声だけ。登山道は非常にきれいに整備され、熊笹も刈られて歩きやすい道です。途中三ヶ所ほど休憩用のベンチがあり、水分や栄養補給中に登山者同士の情報交換が始まります。連休前日からの二日間が久しぶりに好天との予報で、急遽山行を決めた単独行の人達が数人。秋田の測量士は、夜中八時間をかけて近くの道の駅に辿り着き、二時間ほど仮眠を取って登り始めたとのこと。明日は燧ヶ岳に登るので、どのルートがよいかと山形から来たとおぼしき人と話をしていたので、昨年燧ヶ岳に登ったときの経験を情報提供しました。しかし私には駒ヶ岳の翌日に燧ヶ岳に登るようなことは絶対に不可能です。実際、この文章は山行の翌々日に書いていますが、未だに段差のあるところは「よいしょ」とか「いててて」とかのかけ声をかけないと歩き始めることができていないのですから。私には百名山踏破や何座制覇などの具体的な目的はなく、ただ登ることが楽しいので登っているだけなのです。頂上の天気が悪くて何も見えなくても、がっかりすることはありません。天候が悪くなれば躊躇なく途中で切り上げます。ここのところの山行は山頂からは何も見えないことが多かったのですが、今回は快晴の素晴らしい天気でした。三六〇度の眺望、山の名前を特定できるところは、日光白根や男体山など地元栃木の山々ですが、福島や新潟の山々まで見渡すことができました。ただ不思議なことに十㌔ほどしか離れていない燧ヶ岳はそこだけが雲に覆われて見ることができませんでした。

山は不思議と出会う場所。山を下りて疲れ切った体で真っ先に考えることは、次はどの山に登ろうかということ。下山したばかりの山に何か忘れ物をしてきた気持ちにさせられ、性懲りもなくまた同じ山に登りたいと思うこと。登ることが楽しいと言ってはみたものの、何が楽しいのかよく分からないこと。スポーツドリンクより水が、カロリーメイトより梅干しが疲労回復には優れていること（私の場合だけかも知れません）。登りは楽しく、下りは苦痛でしかないこと。歩いていれば必ず頂上に着くということ。せっかく頂上についても、必ず下山しなければいけないということ。もうこれ以上歩けないと思っても、必ずまた歩き出していること。山を見ればどんな山でも登ってみたくなってしまうこと。山は不思議を受け入れ示してくれる場所。

「思議」とは思うことや議論をすることです。「不思議」は「不可思議」の略語で「思議」できないこと、考えを思い巡らすことができないということです。仏の智慧や神通力、仏のはからいなど、言語・思慮の及ばない境地をさしていう言葉です。私たちが社会の中で他者とともに生きていくためには「思議」することが必要です。状況を見て考え判断し、言語にして他者に提案し議論することによって社会秩序が保たれていきます。民主主義は私たちの「思議」に支えられているのです。「思議」はイデオロギーを生みます。そのイデオロギーが例えば正義や人権や富や愛国心を基盤に成立したものであっても、必ず合意とともに対立も生み出します。それは「思議」が人間の理性や感情に寄って立つ人間のための「思議」だからです。人間のためという「思議」は容易に国のため、資本のため、党派のため、教団のためという「思議」に変貌していくことは自明のことでしょう。それが社会に秩序をもたらし、権力と富の基盤ともなるからです。

私たちは「思議」だらけの社会の中で生きて行かざるを得ません。常に考え議論し合意形成を目指す努

力をし続けないと、あっと言う間に他者と対立するか、従属するかの選択を迫られてしまうのです。「思議」に追われる毎日は、私が願い誓い行う信行の毎日と正反対の、心が千々に乱れる毎日です。私たちは生きている限り「思議」から逃れることはできません。しかし「不思議」に私自身の全てを投げ入れ受け入れてもらうことによって心の安らぎを得ることができるのです。それが「信」です。お釈迦様のありのままのはからいを信じそのままに生きる（行う）ことです。親鸞は「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思いたつ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」[注1]と語っています。彼は不思議な阿弥陀の誓願を信受するとき誰一人残すことなく絶対の安らぎに生かされると信じたのです。すべての衆生を救うという阿弥陀仏の誓願を不思議と信受することが親鸞の信仰の全てです。それは彼と彼の宗派だけのものでなく、全ての仏教徒は仏の願いを「不思議」と受用し、その仏のはからい、大いなるもの、ありのまま、真如、自然法爾、のそのままに毎日を生き続けることが、お釈迦様に帰依する人々の信仰です。それがありのままの信行の日々です。思議に追われる毎日の中で、不思議を受用する「観」と「心」が錆び付いていないか、そんな時、山に出かけると「山の不思議」は何の思議もなく私の前に立ち現れてきます。これがきっと私が山に行くことの不思議なのでしょう。

注1：歎異抄

狂言綺語百二十四・夏を終えて

玄関を出ると金木犀の強烈な香りが漂ってきました。お彼岸の中日からちょうど一週間たった朝です。今年の夏は酷暑と梅雨の天気を一週間おきに繰り返すような夏でした。気象庁は関東甲信越の梅雨明けを六月二九日と速報しましたが、後に七月二三日に訂正しています。しかしその後もお盆前くらいから秋の長雨か梅雨の戻りか分からないような天気が続きました。私は今年は四回梅雨があったと日記に記録しています。栃木県北部は関東ですが、やませ（偏東風）の影響を受けやすく低温で天気の悪い日が続くことがよくあります。今年はやませと夏の高気圧が交互に存在を主張し合った結果の天気だったのかもしれません。今年の東北南部の梅雨明け速報値は六月二八日でしたが、後に気象庁は梅雨明けは特定できないと訂正しています。

今年の夏はいつもと違う夏だった、との実感は夏を終えた今でも変わることはありません。毎年、初夏から夏にかけての散歩は蛇との遭遇にどきまぎしながらの散歩なのですが、今年は生きている蛇にも道路で車に轢かれている蛇にも一度も出会うことがありませんでした。また作物の成長期に酷暑で雨が降らず実りが心配されたのですが、胡瓜も茄子も南瓜もいつもの夏以上の豊作でした。一方毎年恒例のテントウ虫やバッタなどの害虫の攻撃はほとんどありませんでした。いつもと違う夏に戸惑っていたのか、害虫の数もまばらでほとんど害をなすようなことはなく、おかげで今年の作物は無農薬無作為の手間いらずで収穫することができました。今年の夏の酷暑と雨の繰り返しは植物には吉と出、虫たちには凶と出たようです。ちなみに雑草は抜いたそばからすぐ生えてきました。油断すると草むらの中の一部に作物が実っているというような状態。朝の6時から何度雑草抜きをしたことでしょうか、今年は雑草との戦いに明け暮れ

たいつもと違う夏でした。

「暑さ寒さも彼岸まで」の言い習わし通り今年の夏もいつものようにお彼岸をもって終了しました。彼岸の間に通過した台風の名残が消えたあとはもう高い秋の空と雲。冷房のスイッチは切られ、布団が一枚追加されました。衣替えの季節です。いつもと今年は違うぞと思っていても、やはりいつもと同じように秋はやってきました。日記を見直すと多少の前後はあっても今の時期に確かに金木犀の香りについて記録しています。ミョウガの収穫は去年と全く同じ日、九月二五日に行っていました。そのほかに私の節目の秋は、初霜と初氷の日、干し柿をつるした日。今年の秋はいつもと同じ秋なのか、それとも違う秋なのか、冬になったら分かることでしょう。今年の夏はいつもと違う夏と言ってはみたものの、いつもと同じように夏は終わりました。

私たちは変化の中で生きています。それをお釈迦様はすべては諸行無常であると説きました。すべては縁によって起こる、因縁生起（縁起）の法則の中で生きているということです。私たちが把握する現象的事物は他との関係が縁となって生起するのであり、それ自身の本質や実体といったものは存在しません。この根本的な世界のとらえ方を仏教は「空」「真如」「実相」などの言葉で表現をしていますが、要はすべては変化（無常）の中で存在していると世界を観ることが「空」なのです。私は信行に生きる以前の、仏教を知識で理解しようとしていた段階では、「空」を全く理解できませんでした。私たちの思考方法は「存在がどのような外的要素にも左右されず、あらゆる検証からも瑕疵のないそのものだけで存在する『本質』と定義できるようなもの」を探し求めるように訓練されているようです。言葉と思考の範疇ではこの思考の営みは「定義」することが目的となります。しかし「本質」を定義したと思った瞬間その定義はするりと逃げて行ってしまい、また「本質」を追いかけて定義する作業をし続けなければなりません。「本質」という存在しないものの定義を試みる、本質定義の「いたちごっこ」です。私はこのような思考の営みを否定するつもりはありません。しかし有史以来今に続くギリシャ哲学の系譜は未だにその「本質」と言われるものを定義することが出来ていません。定義しようとする試みが科学を発展させ社会を豊かにしたことに異を唱えるつもりはありません。しかしその本質と言われるものの追究は人々の心に安らぎを与えることに寄与したでしょうか。

お釈迦様の生きた時代のインドでは哲学的宗教的思想は六十二あったと言われています。お釈迦様は思想家から色々な議論を投げかけられましたが、生きることに直接役立たない形而上学的な問題は質問されても回答せずに判断をしていません。これを「無記」といいます。お釈迦様の唯一の目的は人々から苦を除き心の平安を与えることにあったからです。それ以外の言葉も思考も眼前の苦に苦しむ人には何の役にも立たないことは明白です。お釈迦様は、それぞれの病に応じて処方箋を見出し薬を与える医者に自らを喩えています。お釈迦様は苦を除く医者であり実践者です。その実践の「行」を支える智慧が「縁起」です。世界を「諸行無常」と観る智慧を「信」じ目の前の私と私に縁を持ったものたちの苦を一つ一つ取り除くことが仏教の願いであり実践です。その処方箋は仏教者おのおのが日々の生活の中で見いだしていくものなのです。

いつもと同じ夏も違う夏もそれぞれを「ありのままの今の夏」と観て、受け入れ、慈しみ、楽しみ、感謝すること、それが私の仏教です。二か月前の狂言綺語では「いつもと違う夏　同じ夏」のテーマで盛夏に観た「夏」を書きました。今回はその夏を終えて観た「夏」を書いています。しかし果たしてそれが私の観

た夏の全てであったのか。ありのままに観ることの選択をしていたのではないか。夏を終えてもその問いへの答えは見つかりません。例えば今起きている戦争はその理不尽な振る舞いに慣れてしまい無力感とともに、ありのままに観ることを断念し、私の日々の信行の道から排除されてしまうのです。縁起なきものと関わろうとすることが心の安らぎを乱す原因です。しかし目に入り耳に聞こえることを私に縁なきものと言い切ることができるのか、それとも観たいものだけを見ていただけなのか、その問いを抱えたまま秋を迎えます。

狂言綺語百二十五・壱岐　対馬

対馬に安徳天皇の墓があることを初めて知りました。安徳天皇は源氏との戦いに敗れた平家の公達とともに壇ノ浦で入水したことは平家物語にも書かれ、また史実としても疑いないことだと思われます。源義経＝モンゴルのジンギスカン説や、明智光秀は生き延びて家康のブレーンとなった僧天海だった、などの偉人生存願望説の一つなのでしょう。歴史的事実としては取るに足らない話かもしれませんが、民間伝承として千年近くもの間信じられ遺跡を残し祀られていることは、その伝承を支えにして生きてきた人たちがいるという事実を表しているのではないでしょうか。この島に足を踏み入れ、島の空気と風景を体感しないと、対馬まで逃げ延びた平家の落ち武者たちが、安徳天皇を奉じて再起を図った場所であるとの想像は難しいかもしれません。

二泊三日の壱岐・対馬の旅は大半が移動でした。福岡から約七〇㌔の島が壱岐、そのまた七〇㌔北に行くと対馬、そこから五〇㌔で釜山です。遣唐使も朝鮮通信使も元寇も倭寇も九州―壱岐―対馬―朝鮮半島の海道を行き来し、魏志倭人伝に邪馬台国までの道のりにこの二島が記述されている交通の要衝です。天気は晴れて風が強く玄界灘はフェリーでも大きく揺れ、乗客は船酔いに苦しめられていました。現代の船でも船酔いするわけですから、古代の船の往来は命がけであったことは間違いありません。しかし両島とも島の入り江に入ると風も揺れもぴたりと収まりました。大陸から日本に向かう様々な目的の船がこの二つの島を寄港地とし補給や安全を祈願し風待ちをしていたことが十分実感できる島です。船をおりたら次はバスで島を縦横断です。

壱岐島は山間の所々に平地と水源があり、二期作の風景も見られます。その平野の一つに私の学生時代には全く教科書に出ていなかった原の辻遺跡があります。最近発掘調査が進められ、魏志倭人伝に記された一支国（いきこく）の王都に特定されました。これまでの発掘調査で、日本最古の船着き場の跡や当時の一支国が交易と交流によって栄えていたことを示す住居跡や様々な地域の土器が出土しています。この遺跡の高台に立つと港から水路を通って荷を積み卸しする人たちや、平野で稲作に従事する弥生人の姿を一望できます。稲作と交易の二つの経済活動が両立できる原の辻遺跡は豊かな島国「日本」の原風景を実感できる場所です。対馬は大陸の文化・経済の日本の窓口の役割を果たした交易の島であり、防衛上重要な国境の島でもありました。バスで島を縦断するとほとんどは山間部。道は海岸伝いを通り、リアス式海岸の所々にある集落は山で隔絶された漁村で、農地や田んぼはどこにも見当たりません。山中に逃げ込んでひっそりと暮らす安徳天皇と平家の落人に源氏の探索の目は届かなかったのでしょう。もし見つかりそ

うになれば目と鼻の先の釜山まで船で逃げおおせると考えていたに違いありません。そんなことを想像させる対馬の山と海岸線です。

日本人の信仰の根底には強固な死生観（霊魂観）があることを、対馬で目の当たりすることになりました。対馬藩の城下町、厳原にある八幡宮の摂社今宮若宮神社にはキリシタンの小西夫人マリアが祭神として祀られているのです。秀吉の朝鮮出兵の先鋒となり関ヶ原では家康に敗れ斬首された小西行長の娘で、対馬の領主宗義智に嫁いだ女性です。マリアの勧めで入信した義智は、逆賊行長の娘を正室として置けなくなり、マリアを離縁しました。その後マリアが神になったいきさつは分かりませんが、並んで建つ天神神社の祭神が菅原道真と安徳天皇であることから類推するに、人々はマリアの霊魂を慰めるためではなく、霊魂が怨霊化することを恐れ、鎮めるためにマリアの霊を祀ったと考えられます。そうでなければキリシタンを神とし他の怨霊と並んで祀る対馬の人々の信仰の意味が分からなくなります。源頼朝は死に追いやった安徳天皇の怨霊に悩まされそれが死の原因となったと伝承されています。藤原一族は太宰府に幽閉した菅原道真の怨霊に苦しめられ、彼の魂を鎮めるために北野天満宮に道真を神として祀ることになったのです。理不尽な死に追いやった権力者の後ろめたさに怨霊が取り憑くことを、日本人は誰もが知っていたのです。そしてその怨霊を神殿の中に閉じ込め、神として祀れば怨霊の怒りを鎮めることができると考えたのです。この霊魂に対する日本人の畏怖は、あらゆる宗教を超えて日本人の根本にある死生観です。日本人であれば仏教徒もキリスト教徒もこの死生観からは逃れることはできないのではないでしょうか。私は四百年以上も対馬の人々がキリシタンマリアの霊を慰撫するために今宮若宮神社で手を合わせていた事実について、不審に感じることはありません。マリアがキリシタンであることよりも前に日本人であったからです。日本人は森羅万象、石ころから霊魂まで神になり得ることを知っているからです。神となった霊魂は、生きていく人々のためによく守護してくれることを日本人は知っているからです。これは日本人が仏教の教義もキリスト教の教えも知らされる遙か前に、心身に刻み込まれた霊魂（死者）の刻印です。私は宗教者としてはキリシタンが祭神であることに異議を唱えることはできても、私自身の中にある霊魂の刻印に意義を唱えることはできないのです。

私は霊魂の刻印を持つ者が日本人であるというような乱暴な定義をするつもりはありません。ただ、壱岐の原の辻遺跡の丘から観た弥生人の姿、対馬の烏帽子山から観た海に引かれた国境線と眼下に広がる浅茅湾に点在する集落、その場に立ち、風を受け、そこにありのままに観ることのできる風景は、私がその刻印を持つ者であることを知らしめてくれました。それが今、私が日本人であると言える一つの根拠なのです。

壱岐、対馬は防人の守った島です。広い海が防衛線になっている日本は国境に関して現実感が乏しい民族ですが、古代から後方で西側国境の海を防衛してきた両島があったからこそ、日本はオホーツクの海まで国境線を北へ北へと押し上げて行くことができたのではないでしょうか。平安初期は蝦夷との国境最前線だった下野の地に戻っても、そんな想念に駆られる壱岐、対馬の体験でした。

狂言綺語百二十六・忘れてきた秋

秋です。木の実はもうあらかた地面に落下し、栗拾いをする姿も最近では見かけなくなりました。金木犀の香りも消え、田んぼの稲はすべて刈り取られています。桜の木は真っ先に葉っぱを落とし、コリーナも紅葉と落葉の季節です。朝陽と夕陽に照らされて日々刻々と目に映る色を変えていく木々たちの、芽吹きから落葉までの三六五日をともに生活できる場所。ここには紅葉の中に秋の日々があります。秋を訪ねてあえて紅葉の名所に行く必要がありません。霜が降りると畑の作物も虫や雑草の跳梁から解放されます。いつもと同じ秋を今年も一つ一つ体感しながら、忘れてきた秋がないか、やり残した秋がないかを確かめる秋の日々です。

パン、パン、パンと朝の六時に鳴り響く音、六年前に引っ越してきた当初は十月から十一月にかけての土日には毎週のように聞こえてきた音です。運動会の開催を告げる打ち上げ花火の音。運動会当日が微妙な空模様でもこの音が聞こえた日はどこかで運動会が開かれているのです。農家の多い栃木県北部は秋の稲刈りが終わってからが運動会シーズン。一年で一番忙しい労働を終えて一家総出で子供の運動会の応援です。まだ子供を中心にして家族や学校、地域社会が成立していた時代の名残なのでしょうか、朝のひんやりとした空気の中で聞く運動会決行の花火の音に、子供たちの歓声と応援をする家族の声が重なって聞こえてくるようでした。ところが最近の運動会は、午前中で終了、昼のお弁当の時間もなし、家族も二人までなので孫の走る姿を爺さん婆さんは見ることが出来ません。敬老会や消防団、駐在さんなどの地域を支える人や功労者を来賓として招くこともなくなっているようです。コロナ禍を格好の理由にして、学校の運動会は地域コミュニティの運動会から純粋な学校内行事となったようです。そうなると朝六時の花火は地域の皆さんへのお知らせではなく、ある人にとっては騒音です。ここ数年花火の音を聞かなくなったことが不思議で学校関係者に尋ねたところ、睡眠妨害を訴える人からの抗議が学校や教育委員会にあり打ち上げをやめたとのことです。

ハロウィンは西欧発祥の原始信仰に起源を持つ祭りです。今では子供たちが近くの家々を訪れて「Trick or treat（お菓子をくれなきゃ、いたずらするぞ）」と唱えてお菓子をもらったり、カボチャをくりぬいた中にろうそくを立てる風習などが喧伝され、殊に最近では若者たちの馬鹿騒ぎ、仮装大会の趣が強いイベントです。が、元は秋の収穫を祝い悪霊などを追い出す意味合いが強い西洋人の民間信仰の行事です。キリスト教以前のその民族の住む土地と自然から必然的に生まれた大いなるものへの感謝と畏怖の祀りです。どの民族でも持つ固有の、また一方では人類共通の根源的な信仰とも言えるものではないでしょうか。ハロウィンと似た祭りが栃木県にもあります。ぼうじぼです。稲を収穫後のわらで作った棒（ぼうじぼ）で「ぼうじぼ当たれ、そば当たれ」などと声をかけながら地面をたたいて歩き、各家を回ります。その年の豊かな実りを感謝し、来年の五穀豊穣を祈る祀りです。地面をたたくと作物に害を与えるモグラなどを退治できると言われており、子供たちは各家から褒美にお菓子や駄賃をもらえます。ぼうじぼが全国的なものかどうかは分かりませんが、日本中にこれに類した子供たちの行事があることでしょう。ただぼうじぼに関して言えばもう伝統保存会レベルの行事になっているようです。地域の老人がこの行事を子供たちに伝えようと奮闘しているようですが、地域共棲の意識が希薄となった今、農村地帯の地域の子供や親も、わらを叩いて親交のない近所を回るよりは、仮装した子供と親が集まり同質の関係性を確かめ合うことの方が

遙かに意味のあることなのでしょう。

ハロウィンとぼうじぼは人類の大いなるものに対する共通の信仰心を根底に持ちながら、その土地、民族、自然条件に規定された固有の祀り形態として異なった現象を示しているだけなのかもしれません。季節の農事に根ざし地主神や氏神を祀る祭りの中で、ぼうじぼと同様子供が主役として行う祭りに、私は学校制度が始まって以来の運動会を加えたいと思います。その地域に祀られ続けてきた大いなるもの（神）への奉納が運動会の形をとったという私の妄説です。私の経験してきた運動会は学校行事である前に地域の人たちの祭りでした。おいなりさんや巻き寿司のごちそうを作って豊作と家族の安寧を確かめ喜ぶ秋の一日は、地域に住まう人々の歓声が天まで届けとばかりにあふれかえる日です。花火やマーチや応援合戦の響きにこの土地に住んでいる実感と共感を持った日です。人々が安寧に豊かに過ごすことのできた今年と、そして来年も災いなき年であることを願い感謝し喜び、そのことを大いなるものと共有し合うためのものです。だから花火も歓声も「ぼうじぼ当たれ」の声も地域中に鳴り響くのです。大いなるものに届けとばかりに。

子供の祈りであるぼうじぼがハロウィンに、地域の奉納運動会が学教行事へと取って代わられた今、日本人の心身に刻み込まれてきた信仰の刻印（大いなるものへの感謝と畏怖）はもはや失われてしまったのかもしれません。仏教伝来のはるか以前から日本人に刻まれたこの刻印は、外来文化や社会構造の変化などで脆くも消え去ってしまうものなのでしょうか。ただハロウィンを見ても学校行事の運動会を仄聞しても。そこには延々と受け継がれてきたはずの刻印を見つけることはできません。原始信仰や大いなるものなどと宗教的な言語で語っているように聞こえることが耳障りであれば、このように言い換えます。私たちが受け継いできたその土地に生き続けることの無意識下の記憶を（それを永遠のいのちと私は呼びます）共有する者同士が、その永遠のいのちに奉納し感謝し守護を願う行為を、原始信仰と呼び、永遠のいのちを大いなるものと呼びます。この地に命をつないできた生き物たちと自然と大地との共棲の記憶の継承です。私は仏教者である前に、この地に受け継がれてきた無意識の記憶を次に引き渡すべき者です。私に刻まれているはずの原始信仰の刻印を秋の忘れ物にしたまま仏教者になっていないかを恐れる、いつも変わらぬ私の秋です

狂言綺語百二十七・廃仏毀釈

「撤回」という言葉は大変便利です。テレビから聞こえる「前言を撤回します」は、語る人が異なっても映像と内容は使い回しに見える既視感にあふれた映像です。撤回はあとから不都合や意見が変わったりしたため、途中で「これからはなかったことにします」と、一度出した発言や文書などをひっこめるといった行為のようですが、法律用語では「成立当時は瑕疵はなく、そのあとに問題が生じたためにその行政行為の効力を将来に向けて失わせること」です。であれば撤回前まではその撤回した事案は欠点のない正当な行為であったと認めた上での撤回です。ただ不思議なことに法律を作る立法府に選ばれた政治家だけが撤回の本義を有耶無耶にして、闇雲に自分の言動の不備を撤回という名のゴミ箱に投げ捨てることが許される特権を持っているのです。私たちの耳にする撤回は、法律や道徳の埒外にある権力者専用の言葉

です。自分の本心が非難を浴びると、それは真意ではなかったとその不都合を闇に葬り去るために乱発する政治用語なのです。

「撤回」は自分の行為や発言をなかったもののように見せることはできても、同時に自身の信頼もゴミ箱に捨てていることに気づいていないようです。それとも信頼を失うことをなんとも思っていないのでしょうか。発した言葉を批判されても、政治家は軽々しく撤回はできないもの。語ってきた言葉の信頼を失うだけでなく、これから語る言葉を信じてもらえない恐れが出てくれば、それは自ら政治生命を絶つ行為に等しいからです。今ユーラシア大陸で行われている侵略戦争は、戦況が芳しくなくとも侵略者自らは撤退や戦況不利の言葉を決して語ることはありません。軍の判断や司令官の作戦不備による退却という事実を重ねることで、「撤回」を既成事実化しようとしているのです。「綸言汗のごとし」。君主の言は一度出た汗が再び体内にもどらないように、一度口から出たら、それがどんな不当な言葉であろうとも取り消すことができないのです。裏を返せば権力者は「言葉」から絶対的な「真義」と「信義」を要求されているのです。ですから「特別軍事作戦」という言葉によって行われたアクションは、「撤回」の言葉で終結させることができないはずです。撤回を乱発しても権力の移行は行われず、騒動が収まれば何事もなかったかのようにまた撤回を繰り返すような言葉を無意味化する政治と、多くの命を盾にとり犠牲がどれだけあろうとも、自分の決断の撤回は決してしないであろう言葉に呪縛される政治と、どちらが私たち国民にとって望ましいことなのでしょうか。

「廃仏毀釈」は日本人が受け継いできた精神の刻印を自らの手でむしり取ってしまった自壊行為です。仏教伝来以来、日本のカミと異国のホトケが手を取り合って日本人の精神を支えてきた「神仏習合」の信仰は、薩長の武力革命によって、暴力的に破壊されてしまいました。私はこれを中国の共産革命の総仕上げたる文化大革命にも比するべき暴挙だと考えます。明治維新以降百五十年、この薩長の革命家たちが主導した日本精神の野蛮な破壊行為は今、ほぼ完成に向かっています。廃仏毀釈が神の国本来の日本を取り戻すための政策とするならば、それはあくまでも近代日本（西欧化）の天皇を頂点とする権力構築のために必要であった、政治的要請です。古事記の神々の世界が日本のあるべき姿だと主張するのであれば、それは日本の風土に根ざした人々により自然と形成された原始的な信仰のカミたちを、時の権力者のカミ（天照大神）を頂点として再構築する作業だったのです。しかしその作業はアミニズムを源とする原始宗教の集大成にしか過ぎません。そこに論理的哲学的な言葉と深い精神性をホトケが日本にもたらしました。ここから日本人の風土が育んだいのちの記憶（カミ・魂の刻印）を基盤に、高い精神性と論理を与える生死観（ホトケ・永遠のいのち）が加わり、明治維新までの千年以上の間、日本人の精神と智慧を形成してきたのです。これが「神仏習合」です。

神仏習合はカミとホトケの同化を示すものです。奈良時代に起源をもち，神宮寺の建立が行われ，神前読経や神に菩薩号（八幡大菩薩）をつけるようになりました。中期には個々の神々を仏と結びつける本地垂迹説が現れ，神に権現（仮の姿の意）の称号が与えられ、神社に仏像を置き、寺に鳥居をたてるようになりました。この精神の営みは明治初期の神仏分離令によって否定され、日本人の精神性を破壊する神仏の強制分離が推し進められたのです。この法律を根拠に、国学者などの民間人が権力と結託して寺や仏像を破壊した行為が廃仏毀釈です。神仏習合のような土着の原始宗教と外来の宗教の同化はシンクレティズムと呼ばれ、異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した世界共通の現象です。外来の要素

を取捨選択し今まで作り上げてきた社会的・文化的環境に適合するように独自の意味づけを加えていくという，創造的営為の産物なのです。日本人はいつの時代も文化を外から移入し、それを独自の文化や技術に再創造することで今まで日本人であり続けたのです。その創造的営みを強制的に破壊した暴挙が廃仏毀釈です。肉体や建造物などの物理的な存在は例えば一発の銃弾やミサイルで瞬時に破壊が可能となります。しかし魂に刻まれ受け継がれてきた精神の刻印は瞬時に破壊し尽くすことはできません。廃仏毀釈だけでなく敗戦後のアメリカ文化の浸食によって、千年に渡って培われた日本人とその精神は百五十年を経た今、存亡の淵にあるかのようです。

諏訪では、諏訪大社に併設されていた神宮寺や仏像が、廃仏毀釈によって破却・散逸させられて百五十年後の今、復元の試みが始まっています。それは政治要請であった廃仏毀釈に対して、百五十年後の私たちが精神要請として撤回を求める活動です。私はこの撤回要求に強く共感します。カミもホトケも一緒であり優劣も上下もないことが日本人の精神構造の根本にあることを、仏教者の側から明らかにする必要を私は感じています。「美しい日本」というまがい物の言葉に汚染された日本人の魂の刻印を明らかにし取り戻すために、しばらくは現在における神仏習合の意義を狂言綺語に書き綴っていく予定です。

狂言綺語百二十八・再誕

二〇一七年九月三日発行のコリーナだより第八号に「狂言綺語」と題して当欄を書き始めた私の信行の日々と宗教観は隔週原稿用紙五枚程度に書き綴ること五年間、前回までに一二七回を数えることとなりました。「狂言綺語」は表面を飾った言葉や道理に合わない言葉として中世、仏教・儒教の立場から詩歌・小説・物語や、さらに歌舞・音楽などを、批判的にいう語でした。ところが白居易の「白氏文集」に〈狂言綺語の過ちを転じて……讃仏の因となさん〉とあったことから，平安時代以降，和歌や物語が逆に仏教の修行に繋がりこれを助けるとする考えが起こりました。私がこの言葉を表題に用いた理由は、仏教の教えがあまりにも正しすぎて私たちの生活の実感と大きくかけ離れてしまった中で、僧侶が死の場面、つまり葬式仏教の中でしか存在できない現状を、もう一度私自身の日々の生活から考え直してみたいと考えたからです。仏教の教えから見れば私たちの日常は方便と道理に背いた言葉と巧みに表面を飾った狂言綺語のやりとりをコミュニケーションと名付けて成立している世界です。この世界の善し悪しを評価するのではなく、ありのままの世界とみてそこでお釈迦様の教えを実践（生活）する日々を過ごすこと、これが私の信行と信じることがこの欄の出発点です。

バックナンバーを紐解けば、実は初期の頃から私の語ってきたことに変化はありません。基本的考えは、日々を「ありのままに観て（縁起）」お釈迦様の教え（法灯明）のままに「願い、誓い、行い」安らぎの処（涅槃）へ向かうために毎日を生きること、そして、それが永遠のいのちをつなぐことと信じること。これが私の仏教者として生きることの根底を通奏低音のように流れる音です。つまり生きる（生活する）ことはその日々を惜しみなく豊かに安らかに過ごすことと悟ることです。それは永遠のいのち（久遠実成の釈迦牟尼仏のいのち）と私の命（個体としての生命）との幸福な一体化の実現です。仏教の生命観では個体の身命がありとあらゆる宇宙の存在と連携し互いが連絡し合って法界（仏様の教え）を作り上げている

のです。個体の生命は大いなるものによって生かされ互いに縁起の法則によって連携が図られ、無数の生きとし生けるものを通じて物質的にも精神的にも相通じ合ってありのままにここにあるのです。私は個体の生命の一つとしてこの永遠のいのちの一翼を担うために信行の日々をこれまでも歩んできました。私の生命はその現実の一生にはじまらず、前世、後世、相連絡し単独でなく影響し合い、永遠のいのち（仏）を我が生命の中に融会し互具しているのです。この生命観に生きる私は、必然的に個体の死から私の今ある生を観ていかなければなりません。つまり死は私のいのちの終わりではなく一期の終わりが万世のいのちを生み出すと観ることです。永遠のいのちと出会った私のいのちは、私の死後も永遠のいのちとして生き続けることなのです。それは個体の死を観ることで、いかに生を歩むかを知ることになるということです。お釈迦様の教えは生と死は相離れ得ない「生死不二」「生死一如」です。死を知ることで生きることを知ることが出来るとの教えです。

五年間私はこの教えのもとに日々を送り、その信行を狂言綺語に綴ってきました。そして一二八回目の狂言綺語を送り出すために二か月の時間が経ちました。この空白期間は私の生命が新たないのちを獲得するための時間だったのです。昨年十一月二一日の十時半、私は突如大動脈解離A型を発症し、私の個体は、死の淵を覗き込むところまでに導かれました。救急搬送された病院からまた緊急手術のために埼玉県の病院までドクターヘリで移送され、そこで開胸手術で大動脈を人工血管に置き換える処置を施されました。執刀医の手術前の「手術をしなければ確実に死に至ります」という言葉を最後に麻酔の効果でそのまま意識を失いました。その五時間前に突然の発症で一時意識を失いかけてから、持ち直していた私の意識はそれから八時間、再び私の生命では如何ともしがたい意識の喪失（死）の中にあったのです。そして深夜0時、三人の白衣の医師が私の枕頭に立ち「先ほど手術が終わりました」との声に醒まされるとともに、私は永遠のいのちに生かされることを身をもって実践するお釈迦様の弟子として、この娑婆世界に再誕することとなりました。

再誕から二ヶ月、私は一日のほとんどをベッドで過ごしながら今後の行いの日々のために体力と気力を養うことに努め、お釈迦さまが私をすみやかに閻魔大王に引き渡さず、これからも私が個体の生を生きることを容認し、教えの実践を私に委嘱した意味を考えてきました。発症から今日まで私は家族に多大な迷惑と不安をかけ、友人や一緒に活動してくれている仲間にも心配と不便をおかけしてきました。しかしこの期間は、私にとって永遠のいのちの意味は、理解（信じる）することではなく、我が身に引き当てて行うこととはっきり自覚するための必要な時でした。もう私は完全に新たな生を獲得することができました。私の家族も一緒に活動してくれる方も私と縁のあるすべての皆さんとともに、私が得た新たな生を生き続けることをここに願い誓い行っていきます。二ヶ月前と何が変わるのか、ひょっとしたら表面上の行為は変わらないように見えるかもしれません。それはこれからの、私の行いによって皆さんにお伝えしていかなければならないことだと思っています。ちょっとだけそれを教えの面から覗いてみれば、再誕前の私は法華経と日蓮聖人の信行の教えの理解が行いでした。教えと今ある現実とのギャップをギャップのままに実践していたのです。つまり理解の上での信行です。しかし今からの私は法華経と日蓮聖人の教えは即信行です。教えが即現実として信行が実践を始めるということです。自らの生活が教えの実践であることを私の生命で示すこと。それが永遠のいのちと一体となることなのです。このことを私たちの現実世界を往来する狂言綺語の言葉で伝えることの限界はあります。言葉で伝えることの難しさを自覚しつつ、再誕後

の狂言綺語で、新たな私の生の獲得を皆さんにお伝えしながら、死を知ることが生きることを知ることの意味を考えて行きたいと思います。

狂言綺語百二十九・色読

先日、コリーナでは珍しく太平洋側の南岸低気圧による雪ではなく、強力な寒気がシベリアから下りてきた日本海側からの雪雲による降雪がありました。一日中氷点下となる近年にない雪です。例年であれば日陰以外の道路の雪は翌日には溶けてしまうのですが、今回は気温も低くなかなか溶けてくれないようで、コリーナ敷地内の下りの坂道で、スリップして路側帯にぶつけて破損した車を5年ぶりに目撃しました。矢板市でも最低気温がマイナス十四度となり、近隣の市町村も軒並み観測以来の最低気温を記録したようです。大きな流れは地球温暖化の途上にあることは疑い得ないのでしょうが、電気代、燃料費高騰の折、この寒さは身にも懐にも堪えます。道の凍結でリハビリ散歩もままならない、今年の冬はいつもと違う冬のようです。

外見はよく見ると少し痩せたかなと思われるくらいで、経緯を話さなければ私はいつもと変わらない冬を過ごしているように見えるはずです。私自身、鏡を見ても以前と何も変わらない自分の顔を確認するだけです。昨年の手術以来二ヶ月あまり、以前と同じ生活スタイルに早く戻りたいと少しずつリハビリに励んでいますが、体と意思（心）がなかなかマッチングしない日々に、数え上げればきりがないくらいできないことだらけの冬です。できないことの一番は上半身に負荷をかけられないことです。胸骨を開いて手術をしたため、そこの骨がしっかりと接合して元に戻るまでは、重い荷物を持つことも、ラジオ体操で胸を開くことも、腕立て伏せも厳禁です。今回の降雪の雪かきも妻に止められ、家の前の道路はただ積もるに任せ、溶けるに任せたままでした。これでは当分山歩きも、畑で鍬を振るうこともできそうにありません。急激な温度変化も禁物なため、早朝の朝勤は朝食後に変更となり、寒い日の散歩も取りやめ、終日エアコンで一定の温度に保たれた部屋で過ごしています。ぬくぬくと温室暮らしの毎日で、心身に負荷をかける行為を忌避する毎日です。

日蓮宗には法華経の「色読」という考え方があります。仏教用語で「色」は物質的存在、身体作用を意味します。故に「法華経の色読」は法華経を教え通りに正しく読み取って実践修行することです。「身読」ともいい、自らの行為によって法華経の教えを体現する行いです。日蓮聖人は法華経の行者として鎌倉時代の宗教的政治的な圧力に抗して正法（お釈迦様の正しい教え）によってのみ民衆が安らかに生きることが可能であることを主張し、その実現のために「行」ってきました。日蓮聖人の場合はその実践と実現が死後の浄土ではなく、あくまでも私たちの生きているこの社会（娑婆）での成就を目的とし、正法の実現を個人ではなく同じ国土に生きる社会全体にも分かち合おうとしたことが他宗派と大きく異なるところです。それ故に既存の宗教勢力やそれを支持する権力から大きな弾圧を受けることになったのです。聖人の行いは今に至るまで私たち日蓮聖人の弟子たちに正法（お釈迦様の正しい教え）と国法（権力）の関係を問い続けています。

私は法華経の色読の教えを、今私の生きる時代（時）、社会（国）、教えを受け入れる人々の素地（機根）

の中で実践して行く必要があると考えます。日蓮聖人は「教機時国抄」で「**教**えと、人たちの能力や心構え（**機**）、**時**代にかなっているか、**国**情はどうか」を見極めた上で布教するべきだと述べられています。日蓮聖人の行いはそれらを踏まえた上での実践です。それが法華経の色読です。ところがその弟子たちは実践の方法だけを忠実に受け継ぎ、時の権力に闇雲に正法を問い続けてきたため、何度も弾圧に遭ってきました。その結果日蓮の教えは排他的独善的で戦闘的だというイメージがついてしまったのです。「教・機・時・国」を理解せず、つまり私たちが今生きている社会環境（娑婆）と人々を理解せずには、色読は成立しないのです。私たちは日蓮聖人の生きた時代のままに法華経を色読することは不可能ですし、その必要もありません。今生きている時代の「教・機・時・国」を正しく余すことなくありのままに観ることが必要なのです。それは、日々をありのままに観てありのままに行うことなのです。特別な宗教生活や、出家者としての特別な修行が存在するわけではなく、日常を豊かに楽しく心安らかに過ごすことに生きることなのです。その生活が私だけでなく、私に関係のある人たちにもその毎日を分かち合い共有できると信じて日々を生きることなのです。

私の法華経の色読理解は、聖人の教えを歪曲するものと教団や信奉者から批判されることに躊躇はありません。私の色読は教団や日蓮聖人のものではなく、私が必要とする私のための色読だからです。私はこの二ヶ月の再誕に至る過程で新たな教えを得ました。最初の一ヶ月はほとんど動くことができず、ベッドの上で過ごしました。その後の一ヶ月も、意思（心）と体が一つにならずに、意思だけが逸り、身体がついて行けない状態にもどかしさを覚えました。その時、身体が意思に対してゆっくりと時を待ちなさいと諭し始めたのです。そこで理解したことは、身体は意思が動かすものであるとともに、身体が意思を動かすという事実です。心身一如、心身不二です。この事実は私には大きな発見でした。今までありのままに観ることにすべてを傾けていたのですが、それがありのままに行うという身体行為に結びつかないという現実に直面したのです。動きたくても動けない、歩みたくても歩めない、ならば心身が合一するその時が来るまで待ちなさい。不思議なもので、待つことを理解してからは分離していた体と心が、日々に合一に向かっていることが実感できるようになったのです。　私は病を契機に再誕することとなりました。何を教えとして知りそれを再誕後の日々に生かしていくかが、なぜ私がこうやって今でもお釈迦さまに生かされているかという意味を問うことになるはずです。私の法華経の色読は心身一如であること、それは「教・機・時・国」を知り、そのままに行った時に初めて可能となることを知りました。心身合一に向けて日々を歩むことはまた、私の安らぎのところの回復、リハビリによる社会復帰の過程と呼ばれるものなのでしょう。

狂言綺語百三十・六根清浄

二月に入ると急に空気の流れが春めいたと感じるのは、立春を過ぎて私の気持ちが春を待ち望んで急いでいるばかりではなさそうです。まだまだ寒い日も多いのですが、このところ狸の姿を見かけるようになりました。狸には冬眠をする習性がないようですが、真冬は活性が鈍り餌も少ないので、巣穴でおとなしくしていることが多いと思われます。しかるに自然の推移に敏感な夜行性の狸が、このところ餌を求めてでしょうか日中から人目につくところを歩き回っています。暦の上での春とはいえ、まだ生き物には実質

的には冬です。季節の推移を目や耳や鼻で感じ取る機能が劣化してしまった私たち人間は、天気予報を聞いて生活の目処を立てていますが、自然界では経験と本能だけを頼りに生きていかねばなりません。野生の生き物が季節の推移を掴み損ねると命取りになるのです。えさを求めて狸が姿を晒すのは、私たちの目に届かぬコリーナの山中で、狸や狐や兎や鼬鼠や猪が生死をかけた少ない食料の争奪戦を繰り広げているからなのでしょうか。

自然の中で生き抜いていくために、生き物たちは先祖から引き継いだ生存本能の記憶と己の身体機能を総動員しなければならないはずです。眼に見えるもの、耳に聞こえるもの、鼻がかぎ分けるもの、舌が選別し声が及ぼすもの、そしてそれを判断する意識を生存のための行動に変える身体能力を駆使することで、彼らは種を次につなげようとしているのです。彼らの生存の目的はいかにして個体のいのちを次に繋げ種を保存し続けるかにあります。彼らにとって生きることは生存競争であり他者との戦いに勝つことなのです。私たち人間も本来は生き物の一種ですから、本能の根底には生存競争があります。人間は早々に文明を手に入れて他の種との生存競争に勝利を収め、自然界の生き物の頂点に立つようになりました。すると今度は族間の生存競争が始まってしまったのです。家族、一族、氏族、部族、民族などの族間の競争を生き抜くために、人類は宗教や法律を発明し、社会を形成し時には戦いを、時には平和を選択して今に至りました。その過程で人は眼耳鼻舌身意の認識機能を生存競争のためだけでなく共存のために使う思想を持つようになりました。

法華経法師功徳品第十九に「受持是法華経　若読　若誦　若解説　若書写　是人当得　八百眼功徳　千二百耳功徳　八百鼻功徳　千二百舌功徳　八百身功徳　千二百意功徳　以是功徳　荘厳六根　皆令清浄（この法華経の教えを信じて忘れず、読み、人々に唱え、解説し、書写したならば、この人は、百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意の功徳を得るだろう。この功徳によって六つの感覚器官を飾って悉く浄らかなものとするのである。）」という経文があります。法華経を信じ人々にその教えを広めその通りに行えば六根清浄となり、功徳が得られるであろうという教えです。六根は感覚器官とその器官がもっている能力のことで、「眼・耳・鼻・舌・身・意」のことです。この六根は人間の認識の根幹です。一方これが苦の原因である欲や迷いや執着などの煩悩をもたらします。この六根を執着から遠ざけて清らかで汚れのない状態にすれば、功徳を得て悟りへの正しい道を歩み続けることができるのです。この六根清浄による正しい認識・判断・行動の結果として、種々の功徳があげられています。眼根清浄は善悪美醜を見分ける力が備わり、耳根清浄はあらゆるものの声を聞き分けることが出来その声の喜怒哀楽を共感できる力が備わり、鼻根清浄は香りの善し悪しを嗅ぎ分ける能力が備わります。舌根清浄は美味しく味わう能力と口から出る言葉で人の心を動かす能力が備わり、身根清浄は人に尽くすことに生きがいを感じられ清らかな身体が備わり、意根清浄は感謝と慈悲の心、善悪を正しく判断する心が備わり、厳しさと優しさを備えた強い心の持ち主となれるのです。この六根清浄の功徳で、私たちは六根を己の種の保存のためだけでなく、種間の共棲のために使い、競争ではなく平和な社会の実現を可能としているのです。

仏教は自己の救済（悟り）を目的としています。大乗仏教の思想が「自利利他」、つまり「自らの仏道修行により得た功徳を自分が受け取るとともに，他のための仏法の利益をはかること」にあることは間違いないのですが、他者の救済が究極の目的ではなく、社会の関係性の中で生きている限りは他者の救済がな

ければ自らの救済も不可能であるという思想が根底にあります。個人の六根清浄への願いと行いの総和（正法）が他者に功徳をもたらすと法華経を色読して、そのままに実践を行った日蓮聖人の教団は未だにその実践を成就することができていません。自己の六根清浄が集まって社会の六根清浄を実現すること（自利利他）の困難さがここにあります。共存のための六根が対立のためのものにいつでも変わりうるのです。六根は煩悩を製造し苦をもたらします。しかしその六根を清浄すれば煩悩が消え安らぎの道へと進むことができるのです。誰でも六根清浄を願いそうあろうと試みることは可能です。元来仏教では六根清浄は厳しい修行によって獲得されると考えられていました。しかしそれをどうやって獲得するかは、私は自己の日々の生活のありのままの姿に負うていると考えています。ありのままに観てありのままに行う、六根を己の判断で機能させるのではなく、宇宙の存在そのもののありように任せて六根を働かせること、これが私の六根清浄です。

六根清浄は仏教の世界では難行の道であり、能力のすぐれた人の努めるところである。[注1]と言われています。そうであれば私には無縁の教えとなります。仏教は生死一如ですが、それは生があり日常があるからこその生死一如であると、私は再誕以後その思いをさらに強くしています。大いなるものに身を預け、そのはからいのままに、ありのままに観て、ありのままに行うとき、私の六根は自ずから清浄になっているはずです。仏教は特別な修行や思想の中にあるものではありません。毎日のあたりまえの日常の中に営まれる私と他者との関わり合いの中に自ずから立ち会われて来るものなのです。

注1：歎異抄

狂言綺語百三十一・法と人

天気が周期的に変化するようになりました。三寒四温の寒暖変化が感じられる季節です。本来「三寒四温」の言葉は冬に四日間暖かい日が続くと三日間寒い日が続き，また暖かい日が訪れるというように，七日の周期で寒暖が繰り返される、朝鮮半島や中国北東部の冬に典型的な気象現象の言葉でした。日本の冬はシベリア高気圧の強弱だけでなく、太平洋高気圧の動きも影響するため、大陸の気候のように顕著に三寒四温が表れることはほとんどありません。近年、日本では、春先に低気圧と高気圧が交互にやってきて、気温が周期的に変化する早春の気候を「三寒四温」と呼び、春の訪れを呼び込む言葉となっているようです。池の氷や霜柱が消え、枝が芽吹き、地中の虫がもぞもぞと這いまわるようになりました。霜柱が立たなくなったらそろそろジャガイモの種の植え時です。ただ油断していると四月の初めまで雪が降り積もることがあるので、まだ夏用タイヤに変更できません。三寒四温は寒暖の行ったり来たりに気を遣わなければならない季節です。

人の心身は寒暖の動きに大きく左右されることが、今年になって強く実感できるようになりました。血管の病気には気温の大きな変化が影響を及ぼすため、なるべく一定の温度を保った暖かい部屋でこの冬を過ごしてきました。早朝の気温差は血管へのインパクトが強いため、五時からの朝勤もゴミ捨ても、ラジオ体操も冬の間は中止です。たまに日差しのある日中に外出しても戸外との温度差に益々寒さが身にしみます。そうなると血管への悪影響を懸念して外出を厭うようになり、ぬくぬくとした室内で一日を過ごすようになります。変化より安定が体には良いのかもしれませんが、逆に外からの刺激が減ると心身もその

安定に慣れきって、生命力の活性が鈍ってくるように感じます。療養のためには身体の安定が一番なのでしょうが、その安定が心の不活性化につながるようで、この冬はなんとも心身には居心地の悪い冬を過ごしてきました。

「この十余日はすでに食も殆どとどまりて候ふ上、雪はかさなり、寒はせめ候ふ。身の冷ゆる事石のごとし。胸のつめたき事氷のごとし。しかるにこの酒、温かにさしわかして、かつかうをはたとくい切つて、一度のみて候へば、火を胸にたくがごとし、ゆに入るにたり。汗にあかあらい、しづくに足をすすぐ。（この十日あまりはもう食事もほとんど喉を通らなくなりました。その上、雪は降り積もり、寒さは襲いかかります。体が冷えることは石のようです。胸の冷たいことは氷のようです。ところが、このたび送っていただいた清酒を温かくして、かっこう（藿香：飲み薬）をバリッと食い切って、ひとたび飲み下しますと、火をたいたように胸が熱くなり、湯につかったように体が暖かくなります。流れ出る汗で垢を洗い落とし、したたり落ちる汗で足を濯ぎ清めます。）」[注1]日蓮聖人が身延の山の寒さに体が衰えていく中、檀信徒の上野殿母尼御前から贈られた供物への礼状です。この時聖人は病に冒されていて、翌年療養に向かう途中の武蔵国池上（現東京都大田区池上本門寺）で示寂されました。冬の寒さをしのぐ暖房が火鉢と囲炉裏以外、ほとんど方法がなかった時代、食べ物も喉を通らなくなって衰え冷えた体に、頂いたお酒は何よりの心身への供養となりました。暖められた体から出た汗が心身を清めてくれたのです。お酒を送ってくれた上野殿尼御前にはこれ以上ない感謝の言葉です。人々は物も乏しく寒さにさらされながらも、お互いが持っているものを互いに融通し合って今日まで私たちへといのちを繋いできたのです。言うまでもなくそのいのちは肉体的な命だけでなく、教えと、その教えを語る宗祖の人柄までをもいのちとして私たちに繋いでくれているのです。この礼状が八百年以上の年月を隔てて、今私たちが読むことが出来るのは、教えを支えてくれる檀信徒への聖人の感謝の気持ちとその教えを伝え続けたいと願う人々のいのちが繋いできてくれたものです。今私たちは人情味細やかな人間臭い宗祖の人柄があったからこそ、法華経の教えを色読し続け、教えに（正法）厳格で信徒にもそれを忠実に行うことを求めた聖人の人と教えのいのちを今私たちは受け取ることが出来るのです。

日蓮聖人が書かれた文章は真筆を含めて、今に多く残されてきました。出版や印刷という概念がない時代、信徒たちに教えを伝えるために自筆でしたためられた文章を受け取った人々は、お互いそれを共有して書写し、現代まで繋いできました。指定された信者同士で回し読みしなさいと書かれたものや独自の宗教論を展開する著作のほかに、個人宛の手紙も多く残されています。供物のお礼に始まり信心の厚さを讃え、信仰への様々な疑問に答える形のものとなっています。それらは偽撰と疑われるものと真撰を慎重に判別し、全集にまとめられ出版され、ネットでも簡単にアクセスできます。私はその殆どを詠む中で、日蓮聖人の論理的で実証的な主張に圧倒されます。聖人が生きた時代の学問的成果と経文を丹念に読み込み、そこから独自の法華経の色読の論理を構築し実践した過程が手に取るように分かるのです。論理と実証と実践が三位一体となりぶれがありません。一方その厳格な主張と実践の姿と信者一人一人に書き綴られた人情味豊かで涙もろい人となりの落差に驚かざるを得ません。私たちは教え（法）の内容に意識が行きがちです。そして教えだけでその宗教の内容の優劣や正当性の主張が行われているような気がしてなりません。日蓮の教えは日蓮という人格が生み出したものです。彼の人格に共感し感銘したからこそ彼の教えを人々は信じ、それを今に伝えようとしてきたのではないでしょうか。法は人格を離れて法のみで自立する

という考えが法灯明です。個人崇拝は厳に戒めなければなりませんが、私は自灯明を照らすエネルギー源として日蓮という人格への感銘を必要としているようです。法への帰依と人への感銘、それは日蓮に限らず親鸞でも法然でも必要とされるはずのものです。法と人、この両者が私の中で融解した時この冬私が抱えてきた心身（信と行）への居心地の悪さが解消されるのではないかと期待しています。

注1：上野殿母尼御前

狂言綺語百三十二・生きているからこそ

三月に入って畑の土壌がさらさらとしてきました。冬の間は霜柱が立ちそこに日が当たると溶けて少しぬかるんだ状態になっていたものが、土中の水分を凍らせるほどには気温が下がらなくなり、表面は乾き、内部はしっとりとした耕しがいのある畑になってきました。そうなると今度は雑草も勢いづいてきます。また草むしりとのいたちごっこの始まりです。昨年は大根や白菜の収穫時期に発病してしまい、収穫や保存は妻に任せっきりとなりました。キムチを大量に漬けることと、しもつかれを作ることが目的だったのですが、今冬はすべてキャンセルです。術後三ヶ月は上半身に力を入れたり胸を開いたりする動作は厳禁とされていたため、鬼おろしで大根のすり下ろしができなかったことは単なる言い訳で、実際は寒風の中、土に埋めた大根を掘り起こして洗うという作業をする気にならなかったことが大きな理由です。美味しいものを作って食べたいという欲求より、暖かい部屋でぬくぬくと過ごしたいという怠惰な肉体が勝ったということでしょう。

春の空気はそんな怠惰な心身を吹き飛ばしてくれます。三月に入り土中に保存していた大根を掘り起こし、切り干し大根を作り、畑を耕してジャガイモの種を植え、雑草取りも始めました。冬期はほったらかしで荒れるに任せていた畑に少しづつ人の手が入り、夏野菜の栽培に向かって準備が整っていくようです。温かな空気と畑の整備と軌を一にして、私の心身も術後の寒い期間の分離状態から次第に合一に向かっている実感を覚えます。私の「信」を支える「心」と「行」を支える「身」が合一して信行一致の再始動です。

「日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。これは魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば（中略）未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。（日蓮という法華経の行者は、去年の九月十二日の深夜に頸を刎ねられた。そして、この開目抄は日蓮の魂魄が佐渡の国に到着して、その翌年の二月、雪深い中で著わし、親しい縁に結ばれている弟子たちへ送るのである（中略）これは未来の日本国、つまり今の末法の世を映し出す曇りなき鏡なのである）」注1日蓮聖人の最も重要な著作「開目抄」の一説です。度重なる聖人の諫言に怒った鎌倉幕府に捕らえられ、滝ノ口の刑場で首を切られる寸前で佐渡へ島流しとなり、そこで開目抄は書かれました。いわゆる滝ノ口の法難と呼ばれる事件です。伝承では聖人が首切りの座に据えられた時、にわかに雷鳴が轟き刑吏が振り上げた刀に感電して折れてしまい処刑は不首尾に終わったところに幕府の使者がきて処刑は中止、佐渡への流罪になったといわれています。聖人には何か超人的な法力がありそれによって救われたと絶対視する向きもありますが、それよりも本人が自らの書で首をはねられ魂魄だけが佐渡にたどり着いたと記している真意を正しく観ていくべきでしょう。彼はここで、身体がこの書を書かせたのではなく、彼の肉体はいったん失われ、その

魂（心）だけが佐渡に飛んでいき、魂がしたためたと語っています。そしてそれは未来の日本のあるべき姿を映し出す指針であると弟子たちに宣言しているのです。何という凄まじい言葉でしょうか。この書は自らの再誕の宣言です。そしてそれを「開目」と表現しているのです。彼は心身の分離を契機に彼だけの信行に開目したのです。

私たちは日蓮聖人を法華経の行者、信行一致の実践者として尊敬し宗祖として崇めてきました。しかしその信行一致を私たち自身の生きる社会と日々の生活の中に当てて咀嚼し実践することを怠ってはなりません。宗祖を崇めてその行為を真似たりその言葉を頑なに守ることはややもするとひいきの引き倒しになりかねません。それは「信」ではなく「盲信」です。彼の生きた社会環境が彼だけの独自の信行一致を導き出し規定してきたのですから、それは彼の生きた時代のものであり彼自身のものです。「信」はその中から観念としての普遍性を抽出することは可能かもしれませんが「行」は社会から超然とした「信」の原理だけでは実践は不可能なのです。滝ノ口の法難以前の聖人の信行はその身体に規定された、つまり社会構造や念仏が席巻する当時の宗教状況の中での信行です。その信行は滝ノ口の首の座に引き出されることで、社会と時代から解放されたのです。彼の魂魄（心）は、身体から分離された瞬間に自由を獲得し、私たちは彼の「信」を永遠のいのちとして今に到るまでありのままに受け取ることができるのです。その瞬間が日蓮聖人の再誕、開目の時です。その時聖人の「信」は普遍性を獲得し、今私たちもその一端に与ることができるのです。

日蓮聖人と私の信行一致は言うまでもなく同一ではありません。また彼の信行を忠実になぞる必要もありません。それでは宗祖の教えを信じていないのではないか、尊敬を失しているのではないかと思われるかもしれません。しかしその批判は当たらないのです。聖人の信行の歴史的事実が私の日々の行いに影響することはありません。必要なことは私の行いの実践がしっかりと「信」に支えられているかを自覚できるかです。そこに確信が持てなくなったとき、私は頸をはねられ魂魄が佐渡に至りしたためた聖人の「信」に立ち返れば良いのです。そしてそこからまた私の「行」が歩み出します。それが信行の日々を生きることなのです。私たちは聖人が心身の分離を自覚して獲得した普遍的な「信」のありのままの姿をありのままに受け取りありのままに行うことができるからこそ、日蓮聖人の信者であり教えのいのちを繋ぐ僧侶たり得るのです。

滝ノ口の頸の座で心身の分離を自覚した聖人が、そこから獲得した「信」の普遍性を支えに新たな歩みを始めた信行の道と、私の再誕後の道とは歴史的事実や事態の切迫感からは比較の対象にもなりません。しかし私だけに可能な私だけの信行一致の道を歩むために、私は手術後の再誕と心身分離からの再合一の過程を通して、新たな「信」を獲得することができました。それは「生きているからこそ」という「信」です。この「信」を支えに私だけの信行一致の日々が再始動しました

注1「開目抄」

狂言綺語百三十三・宗教的自由

四月の誕生日が来ると満六五歳になります。先日介護保険証が市から届きました。また六五歳になると

厚生年金、国民年金分の受給予定の満額を受け取ることができます。就職をして厚生年金を納め始めた当時は年金の受給年齢は六〇歳だったのですが、三〇数年後の退職時には六五歳になってしまいました。平行して再雇用や定年延長の対応策がとられましたが、私は早期退職をして仏道に入ったため、最近まで無職、無収入で妻の扶養家族として生活してきました。退職後六五歳になり高齢者として認知されるまでの間私は、会社員などの所属組織に規定される社会から解放された自由な日々を送ることができました。誰かから、何らかの対価として収入を得る行為は税金等の義務や社会人としての立場がありますが、そこに縛られなかったここ数年の私のありのままの毎日も、今後は高齢者や年金生活者という社会制度上の立場を与えられることになるようです。

以前当欄でも言及しましたが、インドのヒンドゥー社会にはアーシュラマ（住期）という理念的な人生区分の考え方があります。アーシュラマは学生期、家住期、林住期、遊行期の四住期です。「学生期」は師のもとでヴェーダを学ぶ時期。ヴェーダは宗教文書であり知識のことですので、まずは一人前になるための学びの時期。学生時代です。「家住期」は家庭にあって子をもうけ一家の祭式を主宰する時期。経済活動を行い家族を守り先祖を祀る一家の大黒柱であり、社会的責任を引き受ける時代です。「林住期」は森林に隠棲して修行する時期。経済活動からの引退。そして一族の財産と祭祀を子供に相続させ、社会的責任から解放されます。社会的存在から宗教的存在への移行です。「遊行期」は一定の住所をもたず乞食遊行する時期。森林での修業を経て真の宗教的自由を得、あるがままに道を遊行する時期です。宗教的生活の実践、信行一致の日々です。この四住期の理念を社会的責任の視点から見ると、基礎（学習）をしっかり作り、その上に組み立てる実践（経済活動）と結果の還元、継承。それらの責任を果たしたのちに社会的責任から解放され、宗教的存在へと移行、そして真の宗教的自由（悟り）の獲得です。インド人が考える人としてこの世に生まれてきた私たちのあるべき理想の姿です。お釈迦様も同じような人生を辿ってきました。小国の王子として生まれ結婚し子供も設け、家住期を果たした上で出家し宗教生活に入り、新しい宗教、「仏教」を創唱します。仏教において宗教的自由は社会的責任を全うすることによって初めて獲得が可能な自由なのです。

仏教は社会的責任の実践を土台にして成立している宗教です。仏教者に、生まれながらにして宗教的人間である人は存在し得ないのです。仏教の目的は「苦」からの解放です。その「苦」は生きることによって否応なしに「生」にまとわりついてきます。「苦」がなんたるかを知らずして「苦」からの解放を教えとして伝えることは不可能です。お釈迦様は「学生期」と「家住期」に「苦」にまとわりつかれる日々を過ごしてきたに違いありません。だからこそ「苦」の源泉である三毒、つまり貪欲（むさぼること）瞋恚（怒ること）愚痴（理非がわからないこと）の三つの煩悩をありのままに観ることができたのです。社会的責任の実践によって悟った「苦」の源泉と解放を、社会的責任から解放された立場で遊行しながら人々に説いてきたのです。四住期の理念に従えば、私たちお釈迦様の弟子たちは自らの「生」にまとわりつく「苦」を払い落とすだけでなく、身近な人から順々に人々の「苦」を払い落とす役割を担う者たちです。社会的責任から解放されて得た宗教的自由を、今度は社会に還元していくことこそ私たちがお釈迦様から委嘱された勤めです。

社会的責任の実践と宗教的自由の獲得、それらの還元と継承。この私たちがインド人に学ぶ人生のあり方が仏教の存在意義でないかと、今私は退職後の遊行期を過ごしてきた宗教的自由の成果をこのように認

識することができます。社会的責務の空白期間（遊行期）に培った「ありのままに観る他者（社会）の捉え方」を「高齢者」と「年金生活者」の名称で私に新たに加わる社会制約の中でどのように実践（行い）の日々を送ることができるか、それは宗教的自由の中で信行した功徳を社会的自由の実現のために回向し続けることと語ることは分不相応な大言壮語に聞こえてしまうでしょうか。日常的な生活に沿って語れば、私が家住期で獲得した利益と経験を遊行期の中で熟成・発酵させ、それを日々の生活の中に還元していくことです。

半年ほど前から、最近亡くなった大江健三郎の小説を読み直しています。高校時代に、栃木の書店で手に入らない本は神田の古書街まで出かけ手に入れようと試み、出版されているすべての小説を読破していました。ところが二〇歳を過ぎたとたん、新作が出ても殆ど手に取ることがなく、四〇年ほど彼の小説とは無縁で過ごしてきました。自己と他者との関係性を難解で韜晦した硬質の文体で語る小説に、まだ社会的に未熟な青年が、当時なぜあれほどまでに熱狂したのか、遊行期を過ごして今やっと分かってきました。四〇年の時を経て、文体の美しさと人間心理の描写が何の抵抗もなく私の中に流れ込んで来るのです。それまでは三島由紀夫の耽美的なきらびやかな文体を美しいと思っていたのですが、それは化粧を施した文体です。ところが大江の文体はすっぴんの美しさです、そして他者と自己の関係性を語るとき、その文体は宗教的な純粋さを指し示します。彼の小説を宗教的と評することに違和感があるかもしれません。私は宗教を自己と他者（他人・社会）の関係性の解決策を示す処方箋と考えます。私は四〇年の経験を熟成発酵させることで彼の小説にその処方箋を明らかに観ることができました。例えば初期の長編「個人的な体験」は主人公鳥（バード）の宗教的覚悟が書かれています。覚悟までの過程が宗教的自由の獲得の過程なのです。生きることの「苦」を他者との関係性の壁に何度も当たりながら解放していったそのことを青年期の私は感覚的に受容していたのでしょう。今私はそれを宗教的自由として受容し還元できることをお釈迦様に感謝致します。

狂言綺語百三十四・告白

三月に再手術を受けることが決まってから一週間に二回ほど手術前検査の病院通いが続いています。昨年十一月の緊急手術時は発症場所から救急車で病院へ、そこで大動脈解離A型と診断され、ドクターヘリで埼玉県の病院に運ばれ発症から六時間後には手術室で麻酔をかけられていました。それから八時間後に集中治療室で麻酔から目覚め、手術が終わったことを知らされたのです。その間検査と言えるものは救急病院でCT検査を受けただけです。CT画像が手術先に送られたかは私の知るところではありませんが、殆ど私の体の状態のデータがない中で、手術を施行した医療スタッフの技術と胆力には驚くばかりです。私は手術前の入念な検査も説明も同意書も何もない状態でただストレッチャーの上に横になっていただけなのです。その間救急医が緊急手術受け入れ先を探す電話のやりとりや、執刀医から手術方法やこの手術を行わないと死に至るということを、ごく短い言葉で説明されたのですが、私の耳には死ぬかもしれない恐怖や、ことの重大さを嘆き心配する感情は湧き上がらず、ただ人ごとのように客観的な言葉が私の耳の横を通り過ぎていくだけでした。

翻って今回の再手術は事前の検査などの期間が一ヶ月もあり、あれこれと考えることや心配することが増えていきます。再手術の目的は再発リスク軽減のためにまだ残存している大動脈の乖離部分に血管内から補強を施すものです。ネットで手術のやり方を調べてみたり、体をくまなく検査した結果何かほかに悪いところが見つかっていないだろうか、今後は以前のように山歩きができるのだろうか、等々いろいろな情報や心配や期待が入り交じった日々は、前回の自分が死の危険にさらされているという状況を理解しないまま、ただなされるがままに心身を預けていた状態とは大違いです。当時は先々のことを思い悩む余地がない状態に置かれ、すべてをありのままに受け入れることの他に選択のすべはなかったからなのでしょう。病床に横たわる私の上をただ時間だけが何事もなく過ぎていき、その流れそのままに心身を任せるだけの日が二週間続きました。知識のないこと、状況判断を求められないこと、思い煩う余地がないことが、穏やかでありのままの日々を私にもたらしたのです。しかし退院して社会復帰のためのリハビリ期間を過ごし、妻から当時の状況をつぶさに聞き、周りから見舞いの声をかけられるに従い、私の穏やかな日々との認識とは大きな乖離があったことを改めて思い知らされました。確かにやりかけのことがたくさんあり、それをほっぽらかして病床で穏やかな毎日を過ごしていたと語ることは、後始末をしてくれた人たちの迷惑や尽力も考えない身勝手な物言いであることは十分承知した上なのですが、それでも何も考えないでよい日々は安らかな日々だったのです。

退院して二ヶ月後、妻の運転で市内に買い物に行き帰途に救急病院からヘリポートまで救急車で搬送されたと同じ道のりを辿った時のこと、妻が言った一言が私には大きな驚きでした。「今だから言えるけどヘリに移された時、これが最後の別れかもしれない、交わす最後の言葉かもしれない」と思ったそうなのです。私はその時の言葉も、どのような心持ちだったかも覚えていません。私はその時自分がこのまま死んでしまうことがあり得るという考えは全く起こらなかったのです。かといってなんとしても生きてまたここに戻ってくるのだという感情も湧き上がりませんでした。ここに私の身体があり、それはすでに私自身が支配できる状態を遙かに超えていたからです。今その状態を振り返るとそれが「ありのままにある」ということなのです。日常生活で他者との関係性の中にある限り「ありのままにある」ということは厳密に言えば「ありのままにあると意識し続けること」です。ありのままに観てそのままに行うことは私の願いであり誓いです。それを行いに変えていくことが信行一致です。そうありたいという願い（意思）が私を安らぎの所に導いてくれると信じることです。ところがあの二週間の私は願いも意思も何もない「空」のまま安らぎに抱かれていました。

私が「願い誓い行う」の意思を無にして空っぽ（空）のままに安らぎに抱かれていたことは、宗教的に解釈すれば己のはからいを超えて大いなるものに心身を委ねたとことで得た安らぎということです。ならば法華経の徒の私は、久遠実成の釈迦牟尼仏や日蓮聖人にその時感謝し思いを致すことがあったと思うかもしれませんが、告白すればその様なことは全くありませんでした。仏教徒であることもお釈迦様の存在も法華経の経文の一句も思い浮かびませんでした。お釈迦様や日蓮の弟子としてはあるまじきことでしょうが、事実です。ただ安らぎの境地にあったという私があるだけです。教祖や宗教を超えて、大いなる存在（神、仏、真如、実相、ありのまま）に見守られる安らぎに無意識（空）の内に身を包まれていたのです。告白すれば自分自身のはからい（意思）を喪失したときに、初めて己の意思を超えた「ありのまま」が獲得できたのであり、それは己の意思を支配できないことが分かって（死の淵にあって）初めて獲得できるも

のであるということです。

今、死の淵から帰還できたので私は大いなるものとの出会いを振り返ることができています。しかしそれはお釈迦様の弟子であることや毎朝勤行をすることのおかげでは全くありません。日蓮聖人やお釈迦様の力であるわけでもありません。それは私の信行を支え、ともに歩んでくれる妻子や親や身内の者たち、豊かに楽しく過ごすとの願いを共に実践する仲間たち、私を僧侶として必要としてくれる人たち、私と出会い関係する全ての人々、何よりも私が呼吸し触れて観る森羅万象あらゆるもの、それらのすべてと私との間にある交わりの蓄積が私を安らぎの所へと誘ってくれたのです。その蓄積が大いなるものとなり私を包んだのです。それは発症後の安らかな日々と、妻をはじめとする人々の意識の乖離を知らされることで初めて認識できたことです。つまり「生きているからこそ」なのです。翌週私は再手術を受け私の「生きているからこそ」の「信」をよりゆるぎないものにして戻ってまいります。

狂言綺語百三十五・遊此娑婆世界

そろそろ遅霜の心配もなくなり、花粉の飛散も収まって、春から初夏へと季節は移ってきているようです。気がつくと木々も若葉に覆われ、花が至るところで咲き誇っています、梅雨前のさわやかな気候に心も体も外に向かって活発に動き始め、この期を逃さず始める夏野菜の準備や草取り、庭造りの心地よい汗が夜の快眠を誘います。暖房も冷房も殆ど必要としない五月は、自然との一体感を生き物たちが実感できる時です。

五月初旬の田園地帯は水に満たされます。用水路や田んぼは水が一面にはられ、田植えが始まり蛙の声があちこちで聞こえ始めます。水面に太陽の光が煌めいて田園は光輝きそして空には鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいます。空高く泳ぐ鯉のぼりは夏の生育と秋の実りをもたらす生命力の象徴のようです。かつては成長や出世を願って男の子が生まれると競うように家々の甍と雲との間を気持ちよさそうに泳いでいたものですが、最近めっきりその風景を見かけなくなりました。子供の減少や鯉のぼりをあげる手間暇がないのか、それとも近所同士で泳ぐ鯉の数や大きさを競ったりすることに倦んだか、子供の成長を願うことで家や集落が末永く続くことを願う気持ちが希薄になったせいなのかもしれません。田園風景に鯉の泳ぐ姿を見かけなくなったのに反して最近観光目的で川や渓谷の両岸を渡って無数の鯉をぶら下げる光景をテレビなどでよく目にします。私にはそのぶら下げられた鯉に自由に大空を泳ぐ姿を重ね合わせることは難しく思えます。

法華経観世音菩薩普門品第二十五は観音さまについて書かれた、日本人に幅広く支持されている観音信仰の根拠となる経文です。次の一説は「世尊　観世音菩薩　云何遊此娑婆世界　云何而為衆生説法（世尊よ、観世音菩薩は、云何にしてこの娑婆世界に遊ぶや。云何にして衆生のために法を説くや）」と、無尽意菩薩が世尊（お釈迦様）に質問している言葉です。娑婆世界に遊ぶという観音さまの行為は衆生のために法を説くという行為です。どのように説くかと問われると、観音さまは世を救済するために、衆生の機根（性格や仏の教えを聞ける器）に応じて、種々の形体（三十三の姿）で現れると答えます。観世音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて「仏身」「声聞身」「梵王身」など、三十三の姿に変身すると説かれて

いるのです。観音さまが三十三ものあらゆる姿に変えて、衆生の状況に応じて済度することができるのは観音さまが「遊此娑婆世界」をしているからなのです。「遊」は何物にも囚われないありのままの世界を生きることです。執着やはからいを脱ぎ捨てて自由自在、縦横無尽に世界とコンタクトし他者と共棲することです。「遊」は趣味でも娯楽でもありません。ましてや仕事でもボランティアでもありません。義務や善意などのはからいや価値の判断から完全に自由になることです。「こだわり」の意識がある限り私たちは他者と共棲することができません。こだわりは受容と拒絶の判断基準となるものです。仏教の行いの根本は「遊」にあります。仕事やボランティアとは極北にあるものです。他者をありのままに観てありのままに共に歩もうとする行いが「遊此娑婆世界」なのです。観音さまは常にそれを望む他者（私たち）と共に一緒に歩み続けてくれるのです。

法華経観世音菩薩普門品ほどお釈迦様の教えとかけ離れて信仰されている経はないのではないかと思われます。確かに経文の字面を辿れば観音さまを信仰すればあらゆる災難から逃れることができ、願いが叶うという現世利益を約束したような言葉が連なっています。しかし仏教の教えの基本は出世間です。つまり世間を出て精神と行動の自由を獲得し執着、つまり苦の世界から自らを解き放つことにあります。法華経の教えは現世を生きながらもそこに安らぎの世界（娑婆即寂光土）を望みその実現のために現世を生きることにあります。ですから現世の利益を得るための観音さま信仰は法華経の教えから正反対のものになります。観音さまを信仰することは観音さまと共に現世の執着（現世利益）から解放されて「遊此娑婆世界」つまり安らぎの処に向かって進もうと願い誓い行うことです。それは信仰者自身が観音さまと一体となることなのです。

仏教用語に十界互具があります。十界は生類の迷いと悟りの生存や境地を十分類したものです。迷いの生存は地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界の六種。ここの生存はその行為（業）によってそれぞれの界に転生するので六道輪廻といわれています。悟りの世界は声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界です。天台宗の祖智顗は十界の一つ一つが、互いに他の九界を備えているということ（十界互具）、地獄の衆生も仏となりうるし、仏も迷界の衆生となりうるという教えを法華経から導き出しています。つまり私自身の中に地獄の性も仏の性も兼ね備えているということです。私たちは仏にもなり得るし閻魔大王にもなり得るのです。もちろん観音さまにもなり得るのです。法華経の教えの柱である「私たちは全て仏になることができる」という教えはこの十界互具の教えが根底にあります。私たちの外側に観音さまがいて私たちの現世の願いを叶えてくれるという教えは法華経からは語られようがないのです。観音さまは私たち自身なのです。

経文を一部だけ抜き出して都合よく解釈され利用されてきたものの一つが法華経観世音菩薩普門品第二十五です。観音さまに現世の自分の願いを全て丸投げすればそれを叶えてくれるなどという、ばかげた教えはそもそも仏教にはあり得ないのです。法華経の根本の教えを踏まえた上で観音さまを信仰すれば、その願いが私たちを動かす原動力となりその実現に向けて自らの足が歩み始めるのです。観音さまは私たちの行いを共に歩み、励まし道を指し示してくれる相談相手、同行者です。観音さまは外部ではなく、私たちの中にいて私たちを内面から突き動かす意思となるのです。その時私たちは観音さまと共に「遊此娑婆世界」にあることを認識できるはずです。琉游舎は観音経の教えに忠実に大空を自由に泳ぐ（游）鯉のぼりのように、「遊此娑婆世界」にあり続けたいと「願い誓い行う」日々を歩み続けていきます。

狂言綺語百三十六・平等と非平等

5月の爽やかな日々は長く続かず、周期的に雨の日がやってきます。翌日は決まって日差しの強い日となり、一気に草が生長します。そして爽やかな空気が次第に湿気を帯びた重苦しい空気に変わり始めると梅雨入り間近です。五月の空気の乾いた新緑の季節も終わり、緑が日に日に濃くなってきます。五月中に猛暑日を記録したとはいえ梅雨寒の日が必ず来るため、夏支度に全部取り替えることもできません。平均温度や雨量に変動はあっても、必ず梅雨はやってきて、その後に夏の熱い日差しが注いでくることは間違いないのですが。

太陽は森羅万象全てに光を与えます。太陽自体が発する光に関すれば、対象を選ばずその光はあまねく分け隔てなく注ぎます。しかしその光はうける側はその環境、性格、能力等のあらゆる条件によって、その光を等しく平等に受け取ることはできません。光を必要とする時は、知恵を絞り太陽の恵みを獲得するために光を求めて行動を起こすでしょう。逆に太陽の光が過多で脅威がもたらされるとき、それを避けるために日陰を作り光を遮断し、自然をコントロールする方法を獲得するでしょう。そして今ではクーラーの効いた部屋で太陽の光の恩恵と暴力を自在に操ることも可能になったように思われます。その反動が地球温暖化と異常気象です。どこかが恵みを受ければ、どこかにその付けが回ってきます。誰かがその恩恵を過度に受け取り、その災厄を誰かに押しつけた結果が、格差です。先進国と言われる国々はその付けをあからさまに途上国に押しつけることは、困難とみて、押しつけておいた災厄を私たちも引き受けるから、あなたたちも引き受けてねと、グローバルサウスといわれる国々を始め、途上国にその災厄を割り振ろうとしているように見えますが、恩恵を受ける前に災厄だけを押しつけられても、ハイ分かりましたと言えないG7以外の国々の立場を私たちは理解しているでしょうか。太陽は光を平等に注ぎます。しかし光をうける側が不平等を作っていることに思いを致すとき、果たして「平等」という思想が人類普遍の思想であると言い張ることは可能なのでしょうか。

雨もまた太陽と同じように平等に降り注ぎ、しかし雨を受ける側にはそれぞれの差異や種別があります。法華経の中にある私の好きな経文、薬草喩品第五です。そこで説かれる譬喩が「三草二木の喩」です。「譬如三千大千世界　山川渓谷土地　所生卉木叢林　及諸薬草　種類若干　名色各異　密雲弥布。徧覆三千大千世界　一時等澍　其沢普洽　卉木叢林　及諸薬草　小根小茎　小枝小葉　中根中茎　中枝中葉　大根大茎　大枝大葉　諸樹大小　随上中下　各有所受　一雲所雨　称其種性　而得生長　華果敷実　雖一地所生　一雨所潤　而諸草木　各有差別（例えば世界の山や川や渓谷や土地に生える草や木や叢、林、諸々の薬草は、様々な種類があり名前も形も異なっている。厚い雲が広がり、普く世界を覆い一時に等しく降り注ぐその雨は、普く草や木や叢や林や諸々の薬草の小さい根、小さい茎、小さい枝、小さい葉や、中ほどの根や茎、枝や葉、大きい根、茎、技、葉を潤す。諸々の樹の大小、上中下に随って各々受ける場所がある。一つの雲から降った雨は、その種となる素質に応じて生長することができて、花をつけ、実をみのらせる。一つの大地から生じ、一つの雨に潤されるのであっても、諸々の草木は、各々差異や種別がある。）」大地に生える草木は、それぞれの種類や大小によって異なるが、大雲が起こり雨が降り注がれると、すべての草木は平等に潤います。お釈迦さまの教えが雨に喩えられているのです。雨はただひとつ、つまり教えはただひとつです、しかしそれを受け取る植物たちは種々あるように、教えを受け取る衆生も受け取り方は様々

です。同じ雨を受けても種々の植物たちは様々な花を咲かせ、実をみのらせます。同じ大地に生えひとつの雨に潤されても草木はそれぞれの性質によって異なった成長と実りを見せるのです。この降り注がれる雨の教えはひとつです。つまり「全ての衆生は等しく仏になることができる」という仏の慈悲です。その教えの雨（慈悲）を等しく受け取った衆生は、それぞれの環境、能力、性格に応じてその平等の慈悲を受け取り、各々の機根、つまり小根小茎　小枝小葉　中根中茎　中枝中葉　大根大茎　大枝大葉　諸樹大小　随上中下、それぞれに応じて、各有所受、それぞれが平等の慈悲を受け取り、その教えを信じて日々を生きていくのです。これが仏教徒です。

平安時代末期に後白河法皇が編纂した今様歌謡集「梁塵秘抄」に「釈迦の御法は唯一つ、一味の雨にぞ似たりける、三草二木は品々に、花咲き実なるぞあはれなる」があります。「三草二木の喩」を詠ったものです。仏教を受持した日本人の精神理念が「あはれ」という情緒観と融合した歌です。以後鎌倉期から今に至るまで日本人の精神基調を支える感性がここにあるように思えます。仏の慈悲は平等に衆生に与えられます（機会平等）。しかしその結果は一律ではなく各々の機根に応じた花実です（結果非平等）。その花実を日本人は詠嘆と喜怒哀楽を込めて「あはれ」と称してきました。それは賞嘆であり、慈しみであり、共感であり、様々な感情が評価を交えずに吐露された言葉です。他者の差異をありのままに共感して受け入れる言葉が「あはれ」です。そこには善悪や好悪、肯定も否定もありません。今そこにある非平等を互いがありのままに受け入れて、お釈迦さまの慈悲を共に感謝する気持ちがあるだけです。この精神が日本人のいのちとして今に継承されているのであれば、あらゆる差異を「不平等」や「差別」と定義し普遍的価値や正義の旗印の下に解消して行こうとするイデオロギーは「あはれ」を生きる私たちには不似合いなのかもしれません。

太陽の光も雨も仏の慈悲も私たちはただありのままに受け入れるだけです。その花実の非平等をもありのままとして受け入れることには、結果的に差別や不平等を容認し人間の自助努力を放棄しているという批判があるかもしれません。難しい問題ですが、私は非平等を自己と他者の視点ではなく、光や雨や慈悲の視点、つまり「おおいなるもの」の視点に返すことでその批判に答えることができるのではと考えています。

狂言綺語百三十七・入無為

活動範囲が狭まるに従って自身の見聞や思考の自由度が狭まるかといえば決してその様なことはなく、私は七年前に会社生活をやめて北関東の矢板の地に居を定めてから、逆にものの見方や思考の視野が格段に広がったことを実感しています。会社員時代の三〇余年間に海外に出張に出かけた回数は三〇回は下らず、日本国内も出張で足を踏み入れなかった県はひとつもないはずです。かといって活動範囲の広がりに比例して人との関係性の範囲も広がった訳では決してありません。退職時に段ボール一箱分ほどあった名刺を全て破棄しても、その後の七年間、困ることは何一つありません。会社員時代はあくまでも「私（存在）」とのではなく、「会社員（属性）」との関係性であったことがよく分かります。相手はビジネスのクライアントやパートナーや競争相手ですから、自ずとビジネス目的達成（利）のための狭い関係と行動に限

られていたのです。

退職後私はそれまでの関係性を維持しようと望むこともなく、きっぱりと属性の衣を脱ぎ捨てることができました。実際、私が望まなくても仕事の切れ目が縁の切れ目だったようで、私自身も相手も会社員でない私と「利」による関係性を維持する必要性がなくなった途端「利」から解放され、私は何者でもありうることのできる自由を得ることができました。それは私が出家することで可能になったことに違いありません。

今まで人から出家の理由を問われると自分自身でもなんと答えてよいか分からないところがありました。コロナ禍でこの三年間行動範囲が極端に狭められただけでなく、半年前の発病で自らも行動範囲を制限せざるを得なくなり、現在徒歩圏内は半径一キロ、車の運転は二〇分以内の距離に行動範囲を限定している状態です。しかしその様な物理的な制限の中でも、私の見聞や思考は制限されることなくコロナ禍や発病前と変わらず自由に飛び回ることができています。人と会って語り合い、場所を訪ねることが生きることの豊かさをもたらし視野を広げることに繋がると思われがちですが、そこに「何かのため」という動機が加わった途端、私たちの関係性はその達成のためにみる間に狭くなってしまうのではないでしょうか。その時私たちの目は見たいものや見る必要のあるものにしか入らないという恣意的な選択が行われているのです。つまり「観る」ことの自由を自ら放棄してしまっているのです。私は出家によって「ありのままに観る」という視点を手に入れることができました。あわせて「何かのため」という動機を手放すことができるようになりました。結果的にはこのふたつを自らのものにしたかったがために私は出家したことになります。そして物理的な活動範囲の制限は「ありのままに観る」ことを阻害せず、逆にその「観る」を研ぎ澄ますことに働いているようです。

十年前に師匠の下で出家得度式を行った時に、私も出家者が必ず唱える偈文「流転三界中　恩愛不能断　棄恩入無為　真実報恩者」を唱えました。これは仏への出家者の決意を述べた言葉です。迷いの世界（三界）の輪廻を繰り返す（流転）間は、肉親血族の情愛（恩愛）を断ち切ることは不可能です。俗世間の情愛を棄てて（棄恩）仏道の世界に入る（入無為）ことが本当の意味で恩に報いる（報恩）ことになるのです。「恩愛」は肉親や親族や同質の利を志向する社会への愛着です。それは社会に執着し、また束縛された愛です。その社会と相容れない別の社会との軋轢を生み出す愛です。仏教では「恩愛」の世界にとどまる限りは、愛着（執着）の苦しみから逃れることはできず、輪廻転生を繰り返すと考えます。流転の鎖を断ち切る唯一の方法は仏道（無為）の道に入ることです。しかし現実には私たちが生きていく場所は俗世間しか存在しません。俗世間の中で出家し「恩愛」を棄てて、いかにして仏の「慈悲」を獲得するか、それが私たち出家者に与えられた仏からの課題です。得度式で与えられたこの課題の実現のために仏教者の「行い」があるのです。

当初仏教は出家集団を対象に個人の救済を志向する教団でした。しかし俗世間との関係を断ち切った（出世間）といくら主張しようが、人は食料を得て雨風をしのがなければ生きていくことはできません。出家集団を維持していくためには俗世間と違うまた別の社会（世間）が必要になるのです。そこに社会がある限り愛着や束縛が生まれます。ここに小乗仏教の出家主義は限界に達してしまったのです。そこで起こった在家仏教者の原点回帰運動が大乗仏教です。自己の救済だけに主眼を置き、出家者だけを対象にする仏教を否定し、個人の救済が他者の救済をももたらすという菩薩行の思想です。自らの悟りのために修行し

努力することと、他の人の救済のために尽くすこと。この二つを共に完全に行うこと（自利利他）の実践です。一切の衆生と共に悟りを目指し、一人残らず平等に悟りを獲得するまで修行の歩みを続ける行いです。菩薩行には完成形はありません。なぜなら実践し続けることそれ自体が菩薩行であるからです。そしてその実践そのものが「真実報恩者」たらしめるのです。それが「恩愛」を棄てて「無為」に入り「慈悲」を獲得することです。

日本では僧侶を名乗っていても、実質的には在家仏教者でしょう。妻帯肉食飲酒を含め、殆どの僧侶が厳しい戒律と無縁の社会生活を送っているはずです。かく言う私も僧体をしていますが、それは一度出世間（得度）してまた真実報恩者たらんとして在家で「願い誓い行う」実践者としての僧体です。それでは私は一度出世間することで何を得たか、それは「無為」の視点を得たことです。仏教用語では「無為」は生滅変化（輪廻）を離れて常在絶対の真実（慈悲）の視点（悟り）を獲得することです。日常語に即していえば自然のままに作為するところのないこと、つまり「ありのままに観る」ことです。仏教の教えに入ることは「無為」に入ることです。「ありのままに観る」ことにも完成形はありません。ありのままであり続けようとすることが、そのまま菩薩行の実践であり続けるために、私は何かのためという動機を手放した今、僧侶という属性も手放すことが、これからもありのままで居続けられる秘訣ではないかと考え始めているところです。

狂言綺語百三十八・自然法爾

移動方法が自家用車だけになってから、意識して歩かないと一日千歩も歩かないことがあります。東京で働いていた頃は地下鉄二駅くらいの移動は歩いていました。地下に入って改札を通り地下鉄に乗って、また地上に戻る手間暇を考えたら、地上を歩いた方が効率よく思われたのです。歩くに少し遠い距離は手を上げればすぐにタクシーに乗ることができる都会暮らしは、便利で選択肢が多いにもかかわらず、こと歩数に関しては、オフィス内の移動や通勤時の電車の乗り降りだけでもかなり歩いていたようで、万歩計を付けなくても一日一万歩は歩いていたという自覚があります。ところが公共交通空白地帯のここコリーナの地は、車がないと買い物にも出かけられない有様です。いずれ免許を返上しなければならない時が必ずやってきます。自動化運転の実用化が先か、私の免許返上が先か、どちらに転んでも大丈夫なように足腰を鍛えておかなければということに気づき「コリーナ内の移動は車を使わない、一日一万歩を歩く」を自らに課して五年が経ちました。ところが半年前の急病からの体力回復が未だ完全ではなく、最近は目標設定を一日五千歩に下方修正せざるを得ません。上り坂の途中では休み休み、かつてはいつも早歩きになり、一緒に歩く妻からもっとゆっくり歩くように注意を受けていましたが、最近はずいぶん歩くのが速くなったねと前方を進む妻に慰められています。

上り坂を意識する時が私にやってきました。この坂道はかつて何度もジョギングで駆け上がった坂道。早歩きで妻を後ろに置いてきぼりにした坂道。そして今では途中で立ち止まり呼吸を整える坂道。ある日ここが上り坂だと分かった途端、体も意識もこの坂道に順応して、今の私のあるがままの状態に即した坂道となりました。この坂道はジョギングの時も早歩きの時も立ち止まるときも、変わらず坂道であり続け

ていますが、私の体と意識がここが今の私にとっての「かくある坂道」と観たとき、そこが今の私の坂道になりました。坂道のあるがままが今の私にここで一息ついて呼吸を整えるように私を自ずから然らしめる（自然）のです。

仏教の宗派では自力と他力が二大派閥を作って、互いの正当性を主張し合っているように見えます。辞書的には「悟りを得るために、自分自身の素質や能力に頼る修行法を自力という。これに対し、自己を煩悩具足の凡夫とし、自力を否定し、自分以外の力、たとえば阿弥陀仏の誓願に帰依する実践を他力という。」この説明は二つを対立概念として捉えているところに、大きな誤謬があります。これは自力座禅と他力念仏と対立的に語られるように座禅という自力の修行によって悟りを得る禅宗に対して、阿弥陀仏の本願に全てを預ける念仏宗という二つの方法論に分けて語る方が、各宗派の違いを明確にできて、双方が優位性を主張しやすいがために編み出された論法です。私の結論から申し上げます。他力も自力も全く同じ力（はたらき）です。大いなるもののはからい、仏の慈悲を、他力や自力と各派閥（宗派）が別々の名称を名付けただけです。お釈迦様のはからいに帰依することを互いが自力や他力と呼び習わしているだけです。仏の力（はからい）は唯一無二です。それを受け取る側がその受け取り方を自らのはからい（自我）によって語っているだけなのです。仏のはからいは私が選択するものではありません、私に注がれるものです。ですから私（我）の側から仏のはたらきを語ることはその段階で仏のはからい、つまり大いなるものの慈悲を自らが取捨選択して受け取ろうという態度です。これは仏教受持の基本、諸法無我（空、ありのまま）と正反対の振る舞いです。この誤った態度の根にある誤謬は「力」を自分（人）の持つ「力」と考えてしまったことにあります。「他力」を他からの助力をあてにすること、「自力」を自分ひとりだけの力と解釈した誤りです。親鸞聖人がいわれているように「他力とは、如来の本願力なり」つまり「力」は仏のはたらきです。その力が浄土にすむ阿弥陀仏（他）の「力」として信ずることが「他力」です。十界互具と法華経が語るように、私の中にある仏性が自ずから私の中（自）ではたらいたその「力」を信じることが「自力」です。仏のはたらき（力）を他（阿弥陀仏）に観るか、私の中に自ずからはたらく力（仏性）に観るかの違いにしか過ぎません。

仏教用語として他力と自力の言葉を使う限り宗派の狭い教義論争から逃れることが難しいので、私はこの二つの言葉を使うことを基本的には避けてきました。どうしても二者択一の二元論の罠に陥ってしまう危険性があるからです。そこで今までは「ありのまま」という言葉や「自ずから然らしむはたらき」と表現してきました。これにふさわしい伝統仏教用語は「自然（じねん）」や「法爾（ほうに）」が恐らくそれだと思われますが、「自然法爾」を親鸞聖人が「自己のはからいを棄てて阿弥陀の本願に全てを委ねて生きること」と定義してしまったので、浄土真宗の言葉のように思われてしまい使いづらくなってしまいました。言葉通りに受け取れば「存在や実践のあり方が、自ずからそうであるありのままのすがた」のはずです。この仏のはたらきを信じて受持することが仏教者です。そろそろ仏教は言葉の解釈や違いを語ることから脱却して、仏のありのままのはたらきを信じて、そのはたらきのままに日々を生きる道に戻る必要があると思われるのです。

日々の生活で私は仏のはたらきを自覚して過ごしているわけではありません。日々、何事もなくありのままに過ごすことができていることが仏のはたらきであると信じている私は、殊更に、日々の歩みのひとつひとつを仏のはたらきと確認する必要はないのです。ただ、いつもと違う意識が私にやってきたときに、

「ああ、これが仏のはからい（自然法爾）なんだ」と、私は仏の慈悲を身に受けていることをはっきりと自覚します。それは例えば「そこが今の私の坂道なんだ」との意識が私に注がれた時です。その時私は生きている喜びを身にまとっていることをはっきり意識できるのです。それが今の私に注がれる仏のはたらきであると信じられることが、坂道で立ち止まって呼吸を整える今の私の喜びなのです。

狂言綺語百三十九・悪人正機

まだ子供が小さかった頃、高速道路移動で一番気を遣わなければならないことはトイレ休憩を取るタイミングだったと思います。子供は渋滞やタイムスケジュールに関係なくトイレに行きたくなったら我慢ができなくなります。同じように眠気も我慢できないようで、今まで活発に動き回っていた子供が突然エネルギーが切れたようにぱたっと静かになり、あっという間に寝息を立てています。今は夫婦二人で移動することが殆どなので、二人のペースで休憩場所も時間も状況に合わせて選ぶことができます。今の瞬間の要求を先のことを見通して処理する能力が長く生きている内に自然と身についたものか、我慢をなんとも思わなくなったのか、何事も子供にとっては今この瞬間が一番大切なので、子供は我慢を望まない生き物なのでしょう。

私は「我慢」という言葉がいつから「耐え忍ぶこと。辛抱」という意味になり美徳のひとつとなったかを知らないのですが、この中国語が移入されたときは、仏語（経文）として入ってきました。経文に書かれている「我慢」の意味は「我に執着しよりどころとする心から、自分を偉いとおごり、他を侮ること。」です。現在の意味と正反対の使われ方です。仏教の基本は「諸法無我」ですから、全ての現象に「我は無い」と観ることです。無い我をあるとみて我の判断をよりどころとしそれに驕ることが「我慢」です。お釈迦様の教えに従えば我慢は「善」ではなく「悪」です。我慢から執着や怒りや無知の「三毒」が引き起こされわたしたちに「苦」をもたらします。仏教は「我慢」から解放されて自由になることを希求する宗教なのです。

もし我慢のきかない子供をわがままと呼びそれを社会的道徳的「悪」と規定していたものから、大人に成長する過程で我慢の経験をくぐり抜け協調性と判断力を身につけることが我慢の成果である「善」と呼ばれるならば、私たちが社会性を身につけ生きるということは、我慢からの解放という仏教の理念に反して我慢を尊び推奨することで、「苦」を増幅させる不幸な社会を作り出していることになるのではないかという疑問が湧いてきます。これは「我慢」の意味が全く逆の意味に転化したことと大きな関係があると思われます。

「我慢」は宗教的な視点から見れば「悪」です。私の我慢は私に苦しみをもたらす原因となるからです。私自身の苦からの解放（悟り）の実現のためには我慢から解放された自由な私（無我）の獲得が絶対的な条件だからです。しかしそれは現実の社会生活、人との関係性の中では実現不可能であることは自明のことです。私の我慢からの解放が逆に他者に我慢を強いることになるという宗教的二律背反が起こってしまうからです。だからお釈迦様は出家をし、社会との関係性を絶ちました。しかしそれでも仏（覚者）となったお釈迦様以外の出家者は無我を獲得するためには自分の肉体の消滅を待たなければなりませんでした。私たちは生きている限り無我にはなれないという現実からは逃れられないのです。親鸞聖人は「私」を徹

底的に見つめることで、「罪悪深重」「煩悩熾盛」という人間の逃れようのない「悪」の姿を明らかにしました。「私が生きる」ことは我慢のまま生きること、「悪」を身に纏い生き続けることだと悟ったのです。そして「私」の全存在を阿弥陀如来にお預けすること（他力）で宗教的な自由の境地（我慢からの解放）を得たのです。ここに社会的道徳的な悪の自覚を経た「我慢」は宗教的な浄化を受けることが可能となりました。現実社会の中で宗教的見地から見た「我慢＝悪」の我が身を阿弥陀如来に預けることで宗教的善に浄化された我が現身は、他力の身のままに（無我）社会生活の中で「我慢＝堪え忍ぶ」生活を続けるのです。「宗教的な悪」が現世の美徳へ、「社会的な善」へと転化していったのです。「罪悪深重」「煩悩熾盛」の罪の自覚をもった我が身を阿弥陀如来の他力に委ねることで、一旦「我慢＝宗教悪」の罪は浄化を受け、その他力の身のままに社会生活を営むことで「我慢＝社会善」の転化が実現したのです。その様に考えなければ親鸞聖人の「善人なおもて往生をとぐ、況んや悪人をや」の言葉もただの宗教的詭弁にしか聞こえないはずです。

私は親鸞聖人のこの有名な「悪人正機説」を決して宗教的詭弁と観ることはできません。お釈迦様の教えは「善対悪」のような二元対立の考えを持たないからです。「諸法無我・諸行無常」の教えは世の中のすべての現象は常に変化し生滅して、永久不変なものはないということです。つまり絶対的な「善」も「悪」もないという教えです。「善悪不二」です。善も悪も二つのものではなく、あらゆる現象をありのままに観ることに帰着するということ、ひとしく真如のあらわれであるということです。「大悪」の自覚を強く持つ者ほど、お釈迦様の慈悲の喜びを大きく実感できるという、宗教的パラドックスがここに成立するのです。そしてその喜びを実感した者、つまり大いなる仏の慈悲を信じる者にはこれはパラドックスではなく、宗教的な絶対善として仏の救済を真っ先に受ける者となり得るのです。それが「悪人正機説」であると私は理解しています。日蓮聖人も大悪は大善を引き出すためには必要不可欠だと考えていました。「日蓮が仏にならん第一のかたうど（方人）は景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平の左衛門の尉・守殿ましまさずんば、いかでか法華経の行者とはなるべきと悦ふ。（種種御振舞御書）」ここにあげられた名前は当時の日蓮の敵対者や迫害者たちです。日蓮は彼らがいたからこそ自分は法華経の行者たる自覚を得、仏の大善に預かることができたと語っているのです。彼は仏となるための大敵（大悪）を一番の方人（味方）、つまり大善であると述べています。大悪と大善が不二であることを物語っているのです。これは日蓮の悪人正機説です。

私は「信」を社会の中でどう実践して行くかを考えるにあたり、常にお釈迦様の教えの原点に帰るようにしています。すると一般的には正反対の考えと思われている日蓮と親鸞の仏法は全く同じことを言っていることに気づきます。このあたりまえのことを我慢することなく語り続けなければならないと考えています。

狂言綺語百四〇・一相一味

今まで一度も言われたことがないのですが、もし「あなたの英語はお上手ですね」とネイティブの方から話す英語を褒められたら、大変嬉しくなってしまうことは間違いありません。衣食住に関わるショップ

やホテル、レストランではなんとか意思を伝えることはできましたが、ビジネスの場では端から英語を聞き取ろうという気持ちは放棄して、通訳に頼るばかりでした。ただレセプションの場などで話しかけられてはどうしようもなく、単語を羅列するか、日本語でまくし立てて相手がこれはダメだと諦めるのを待つか、ただ頷き曖昧な笑いでやり過ごすかのどれかでした。ビジネスマンであった三〇数年間、いくらでも英語を習得し駆使するチャンスはあったのに、結局今の今まで、私は「日本人であること」で過ごして来てしまいました。

孫のジオ君がオーストラリアからやってきました。父は濠州人、母は日本人。生まれも育ちも濠州、現在十歳。週一回の現地の日本語補習校と休日のババとのライン電話の会話以外は基本的には日本語を使う環境にはないにもかかわらず、三週間の我が家での滞在期間は全て私たちとも近所の人たちとも、体験入学で通った小学校の子供たちとも日本語で過ごしています。そこでジオ君が一番困惑したことは「日本語上手だね」や「ハロー」と呼びかけられることでした。彼のナショナリティは日本と濠州の二重国籍、日本では彼は日本人です。「日本語上手ね」の言葉に「外国人なのに」という響きを聞き、ジオ君は自分のナショナリティを否定されていると感じてしまうのでしょう。同様に「ハロー」と呼びかけられることは、ジオ君の容貌が「いわゆる日本人」と異なっていることから発せられる言葉だからです。彼は日本に来て初めて「日本人であること」と「ジオであること」の自分の意識と他者の認識のズレを身をもって学ぶことになりました。

ナショナリティには二つの意味があります。1，国民性、民族性（共通の起源や伝統を持ちしばしば国家を構成している人々）2，国籍（出生または帰化によって特定の国家に属する状態）です。その二つの違いを認識して今までもこれからも生きていくジオ君に対して、「日本人であること」が同時にその二つと一体になっていることに何の疑いもなく生活している私たちのような「いわゆる日本人」との出会いが前述したジオ君の困惑を生み出したのでしょう。ナショナリティに自己のアイデンティティを求めることとナショナリティから解放されることとどちらの方に私たちは進むのか。私たちの世代は「日本人であること」に安住していてもさほど不自由は感じませんでしたが、ジオ君の世代はグローバル化の流れの中で安易にナショナリティを振りかざせば不信と対立を生み出すことは昨今の世界情勢が示している通りです。アイデンティティは畢竟自己と他者との境界認識の問題です。自己の境界を「私」に引くのか、家族、共同体、社会、国家にその境界線を拡大していくかで自己は拡大増殖をし続け、逆に希薄になった「私」は他者と同一化し吸収されてしまうでしょう。私はこれがナショナリズムの本質ではないかと考えます。ナショナリティに自己を同一化させたあげくに自己を失ってしまうと言う自己矛盾が起きてしまうのです。十歳にして「私」である自己と私以外の他者の関係性を、理屈でなく感覚として認識し安易に「日本人であること」や「濠州人であること」に潜り込まないジオ君のアイデンティティに、私はこれからの地球人の生き方を教えてもらいました。

お釈迦様にはナショナリティの考え方は存在しません。衆生は等しく仏の慈悲を与えられるからです。仏の慈悲は無分別無差別です。一五三号の狂言綺語に書きましたが法華経はそのことを薬草喩品第五で分かり易く説明をしています。「如来の説法は一相一味なり（中略）唯如来のみあって、此の衆生の（中略）何の事を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、云何に思し、云何に修し、何の法を以て念じ、何の法を以て思し、何の法を以て修し、何の法を以て何の法を得ということを知れり」仏の教えはただ一

つ（一相一味）です。個々の衆生が何を考え何を知り何を望んでいるかはそれぞれ異なってもその実相は一つ（一相）、つまり機根は違ってもすべて仏性を備えていると衆生を観ることです。お釈迦様はそれぞれの衆生の程度と能力に合わせて各々に分別して差別してその教えを説くのです。説き方は異なってもその教えの帰趨するところは一つ（一味）、すべての生きとし生けるものは仏になることが出来るとの教えです。これが「一相一味」です。仏は私たち衆生に対して慈悲を平等に与えます。しかしその与え方は受け取る衆生の受け取り方に合わせてなのです。衆生一人一人にとりそれは「多相多味」です。各々の相（衆生）に合わせてそれぞれの味（教え）を私たちに注がれる仏の慈悲は、私たちが各々の個性（相）に従ってそれぞれの方法（味）で仏の道へと歩むためのものです。その「多相多味」の導きの下に歩み続けた各々の衆生の帰趨するところは全て同じ処（一相一味）、つまり安らぎの処です。仏教は自己と仏との関係性の宗教です。仏と私が一対一の中で信と慈悲を双方向に注ぎ合う宗教です。仏の教えは「各々の私」のためだけの唯一無二の教えです。それは他者には与えることが不可能な教えです。仏にとり衆生各々はかけがえのない唯一無二の存在です。その衆生を余すところなく仏の道へと救い取ることが仏の「願い、誓い、行い」なのです。仏には各々の存在こそが慈悲の対象です。教団や共同体や国家などの集団は仏の慈悲が注がれるべき対象ではないのです。

一般的に宗教と言えば人間を対象としたものでしょう。ところが仏教が「衆生を救う」と言うとき、それは人間だけではなくこの世の生きとし生けるもの、迷いの世界にあるあらゆる生類、動植物、微生物を含めた言葉です。人間は仏の慈悲の対象の一部にしか過ぎません。仏からみると国家や民族や教団は取るに足らないものなのです。ジオ君が図らずもナショナリティが取るに足らないものと直感したことに、これからの衆生の生きるヒントが隠されていると期待することは過大なことでしょうか。

狂言綺語百四一・随喜

人は何かを表現したい、それを誰かに知ってもらいたいという欲求があるようで、私もクリエーティブな活動を続けてきたといえば聞こえはよいのですが、学生時代には詩の同人誌を出し劇団を主宰し会社ではコマーシャルの企画制作をしてきました。しかし創作は意欲よりも才能が必要であると気づくと、さっさと今までの創作への思いを捨て去り次の表現をまた見つけてはそれに熱中するということを繰り返して来てしまいました。まだコピーもワープロもない時代に同人誌を出すことはそれなりの覚悟が必要で、三人で六万ずつ出し合ったでしょうか（四七年前の六万です！）郵送費も含めると学生の分際ではとても勇気のいることでした。それで果たして何人に届いたことか。芝居の脚本は全て手書き、照明は缶をくり抜き舞台装置はベニヤと垂木で作り上げる。時間と手間とお金と情熱がないとできないことですが、それだけでは続かないのもまた事実です。

パソコンとネットの発明は創作方法と伝達手段に革命をもたらしました。誰でも簡単に安価に多くの人に自分の思いを伝えることが可能になったのです。私はあまりの急激な技術革新に四〇年近い映像制作の現場で何がどう変わり可能になったかの理解を早々に断念しました。かつてはプロの技術だったカメラや編集録音機材などは誰でも操作が可能になり、制作現場がプロの聖域として存在しえなくなってしまった

からです。今やPCとスマホさえあれば望めば誰でも映像を創作できます。創作を一部のプロの手から開放した意味では私たちはその技術革命のまっただ中を生きているわけです。しかしそれはあくまでも技術面からのもので、創作物は玉石混淆、ネットにはあらゆる表現が溢れています。私たちは方法と手段の革命によって創作された混沌とする表現の大海に放り出されているようなものです。それが消費のためではなく誰かに知ってもらいたいというものが見つけられ伝えられた時、技術革命は自由な表現の獲得をもたらしたと言えるでしょう。

私が毎日朝勤で読む経が二千年以上前に編まれインド、西域、中国、朝鮮を経て今、日本で読経されていることに私は何としても伝え続けたいという人々の強い意志を感じずにはいられません。最初は口伝そして書写、木版印刷、活版印刷、今ではネットを通じてモニターで経を読むこともできます。長い年月、人々のこの経を伝えたい皆に読んでもらいたい読んだ喜びを皆と共有したいとの思いが、時の壁を越え伝達技術の飛躍的な発展をもたらしたことは間違いありません。私が受け取ったその思いを、私はここで終わりにすることはできません。私もその思いを次に繋げる一人であらねばならないのです。経文や文学、美術、思想だけでなく、生きとし生けるものの営みを次に繋げるために私たちは生を授かったのです。私が「永遠のいのち」と言うときそれは生物学的な命ではなく、過去から伝えられた思いを未来へと繋いで行くことなのです。

法華経随喜功徳品第十八に「五十展転随喜の功徳」という教えがあります。弥勒菩薩の「釈尊が入滅された後に、この法華経を聴聞して心から喜んで有り難いと思うならば、その人はどれほどの福徳を得るのでしょうか」という質問に対してお釈迦様は「仏の滅後に、誰でも法華経を聞いて随喜し説法の座から出て、様々な処に行って、聞いた通りに父母や親類や友人知人のために力に応じて法を説いたとしよう。この人たちもこれを聞き終わって随喜の心を起こし、さらに他の所に行ってこの教えを伝えていき、次の人も聞き終わって随喜の心を起こし、このように次々と展転して第五十人目の人に至ったとしよう。この第五十番目のただ法華経の教えを聞いただけの人の功徳は、生涯にわたって広く多くの衆生に無量の財施（物の布施）や法施（教えの布施）を与えてきた大施主の功徳よりも遥かに大きいものである」お釈迦様は生涯にわたり人々にあらゆる布施を施し阿羅漢（小乗の悟り）の悟りに導いた大施主の功徳は、五十番目に法華経のわずか一偈を聞いて随喜した人の功徳の百千万億分の一にも及ばないと説いています。この教えの根底には大施主の悟り（小乗）は自分自身の完成のためだけであり、法華経は利他のために生き、他人のために実行することで自利（大乗の悟り）を得ることができる喜びがあるのです。それが五十人目の人まで教えが展転する力となっているのです。教えを聞いた人がその教えを実行し人に伝えることを喜びとすることが随喜です。人に伝えることは勇気とエネルギーを要します。自分がこの教えを知ってよかった、実行してよかったという体験（随喜の実感）がこの喜びを人と分かち合い弘めたいという「願い誓い行い」になり展転するのです。

随喜功徳品には自分の随喜体験を弘めるための重要な言葉が二つあります。それは「聞いたとおりに（如其所聞）」と「力に応じた演説（随力演説）」です。自分の聞いたとおりに伝えることの困難さは伝言ゲームをしたことがある人ならば充分納得できるでしょう。聞いたことに随喜し信解し自らがそのとおりに実行しなければ、他者に自分の随喜を伝えることはできません。言葉の通りに実践したからこそ、その実践は言葉にリアリティを持たせて伝わるのです。言葉の表面を知識としてなぞるのではなく、言葉を自分の血

肉とする実践と喜びがあってこそ、それは伝わります。展転する力は単に言葉を伝えているからではなく随喜を伝えているから発揮される力です。また伝える側も受け取る側もその力を超えてやりとりすることはできません。自分の能力を超えて知識で背伸びした言説には随喜が伴いません。それでは相手に理解されないことがあるでしょう。かといって適当にはしょって説くこともなりません。私の随喜を全力を尽くして説き相手に随喜の心を伝えることではじめて言葉は理解されるのです。伝え伝わるものは言葉ではなく喜びなのです。

未だに懲りずに私は伝えたい想いを、狂言綺語に綴っています。手書き、活版印刷、郵送の時代から、PC で作りネットからメールや SNS などで広く手軽にお届けすることができるのは技術革新のおかげです。しかし手段は便利になっても伝える随喜が手軽ではあってはならないことは言うまでもありません。合掌。

狂言綺語百四二・夏の終わりに

八月一五日を過ぎるとなぜか夏も終わりに近づき名残惜しい気持ちになるのは今も昔も変わりません。まだ残暑の厳しい日が続きますが、それでもたまに吹く秋風は確実に秋の訪れを予感させ、夏野菜を片付けて秋野菜のために畑を耕す時期となります。子供の頃は夏休みの残りはあと何日と指折り数えながら夏にやり遺したことあれこれなどの思いが交錯して、少しセンチな気分になってしまったものです。これは大人になっても変わらない感覚のようで、夏に何か忘れ物をした気分で秋を迎えることは人生の活動期に後悔を残し社会活動から人生の隠棲期を迎えてしまうようなものかもしれません。人の一生を少年、大人、社会人、定年引退、高齢者、後期高齢者のように年齢で区切ってその区分らしく生きることを求められるような生き方は自分の思考を縛られてしまうようで、私は同調しかねますが、盛夏が下りに向かう今頃は、私にとっては少年の時でも高齢者の時でも、これからどちらに向かうのだろうということを意識せずにはいられない日です。

夏休みに話をもどすと、最近の夏休みと私の頃と過ごし方の違いに驚くばかりです。どちらがよいかという価値の問題ではなく日本人の社会や家族のあり方が大きく変化していることがこの違いに大きく現れているようです。かつての夏休みは学校に行かないだけで家庭で学校に行ったと同じように日課に従って規則正しい毎日を送ることが基本的な考えだったように思います。朝起きてまずラジオ体操、カードに出席のはんこを押してもらい午前は涼しい内にドリル学習や読書、午後は友達とプールや虫取り、夕方はその日の出来事を絵日記に記して八時に就寝。今ほど猛暑ではなかったので日中は野球や相撲などで遊ぶ子供たちの声で溢れていました。ゲームも you tube もなかったけれど遊びには困らなかった記憶があります。そして二学期の始まる日に体操カードとドリル帳と絵日記と工作を提出です。みんな真っ黒に日焼けしていました。

一方現代の夏休みにここコリーナでは子供の声が聞こえることはありません。広い空地と雑木林が囲むこの地は子供が外で遊ぶには最適の場所と思われますが、子供たちはどこに行ってしまったのでしょう。六年前からラジオ体操のはんこを押す役を勝手に引受けていますが、参加者は年々減り今年はまだ延べ七回ほど押しただけです。まれに自転車で部活に向かう中学生に出会いますが、小学生はほぼ皆無です。夏

休みの子供は学校に行く代わりに学童保育に通っていたのです。両親共働きの家庭が殆どのため、朝子供を学童に送りそれから出勤、退勤時に子供を迎えに行ってそれから夕食の準備です。ラジオ体操に連れて行く時間も子供のドリルや絵日記を見て上げる時間もないので出される宿題も少なくなります。親が家事をしている間に子供にはゲームやyou tubeのアニメを見せておけば静かにしているので楽ちん。親の生活時間に子供が合わせている内に就寝時間も九時、十時になってしまいます。夏休みは学校通いが学童保育通いになっただけです。学童は保育機関なので学校のように学習環境と規律を重んじた教育環境は望むべくもありません。夏休み中に家庭に求められていた学習や規律ある生活環境も親が忙しいため、困難な状況が今の夏休みのようです。

琉游舎では今年も八月十三日にお盆施餓鬼供養を行いました。お盆は先祖供養をするための日本古来の風習で、元来は仏教とは全く関係ない行事です。一方施餓鬼は盂蘭盆経という中国で作られた偽経由来のもので貪り苦しむ餓鬼に対し飲食を施し、先祖や広く無縁の諸精霊を供養する法要です。日本人の民俗信仰の色合いが濃いローカルなお盆供養をする地方もあれば、寺院が主導して僧侶がお盆の行事を行う所もあるようです。琉游舎のお盆施餓鬼供養は仏教の根底にある永遠のいのちを次に繋げていくことで自分の先祖だけでなく生きとし生けるもの全てのいのちは自分のいのちと繋がっていることを自覚する日と考えます。自らの三毒[注1]を省みるとともに生きとし生けるものすべてに思いを巡らし、布施して頂いた食べ物やお酒、自家製のナスやキュウリで作った馬や牛の似姿をお供えしていのちをつなぐ食べ物に感謝の気持ちを表します。この法要は仏教と古来の民俗信仰の混淆の形態をとっていますので、僧侶の私のよって立つ“仏教の枝葉末節を取り払い原理に立ち返って今の仏教を実践していこう”とする立場に矛盾しているように見えるかもしれません。

夏休みの過ごし方がこの六十年近くの間に大きく変化していったのは私たちがその変化を望み作り出していたからです。社会制度や法律や世論はその変化を後追いしているだけで、現実の変化には追いつけていないのです。あるいは政治や行政はその変化を見て見ぬふりをするか、変化は日本人のあり方に反する（昔はよかった）などと理屈を付け変化の波を押し戻そうとします。夏休みを一例に取りましたが、今地域で起きていることは全て通底しています。かつてお盆はイエ制度（本家を中心とした血縁の結合体）の中核をなす行事だったはずです。お盆は先祖の霊を迎えるために一族が本家に集結し、イエの紐帯を確認する日だったのです。戦後八十年ほどでそのイエ制度は崩壊しそれに伴い地縁や村落の共同体も生滅してしまいました。共同体（地域コミュニティ）が各イエの集合体によって成り立ち、相互扶助の関係にあったものが、今は各家が独立して紐帯も相互扶助も求めない求められない現実が地域の現場にはあるのです。自治会や育成会、老人会などの活動が成立しないことは現在の夏休みのあり方の変容と根底では相通じている現象なのです。

琉游舎のお盆施餓鬼法要、私の仏の弟子としての歩みはいつまで続くのでしょうか。私は人々が仏教に何を求めているのかを知り、その願いが私の仏教と交わる瞬間がある限りは原理に縛られることなく仏の弟子であり続けることができるでしょう。私は変化の波に乗ることでも変化に竿をさすことでもなく、自己と他者の各々の変化の波を尊重しその変化が交わるときにそこに仏のいのちが生まれると信じています。それが諸行無常、縁起の世界を生きることではないかと夏の終わりに思い至ったところです。

注1：三毒（貪・瞋・痴）

狂言綺語百四三・仏の道をあゆむ

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」有名な夏目漱石「草枕」の冒頭です。昔読んだこともありこの一節は引用される機会が多いので、意味を理解していたつもりだったのですが、前回の狂言綺語では「棹さす」の誤用をしてしまいました。前号の末尾で〝私は変化の波に乗ることでも変化に竿をさすことでもなく云々〟と書きましたが、この「変化に竿をさす」は文脈からすると「変化の波に乗ること」と対をなしているので「変化を押し戻す又は止める」という文意で使用していることは明かです。印刷して皆さんに送付し掲示してから気づきましたが、後の祭りです。この用法では変化をさらに推し進めていきますと重ねて言っていることになり誤用です。今までの文脈からすると、変化を止めることも進めることのどちらにも与さずありのままの関係を尊重していこうという文意のつもりだったのです。「綸言汗のごとし」などと大げさなことを言うつもりも、私の言葉にそれほどの影響のないことも自覚しているので、訂正せずにほっておこうと思っていました。

私が狂言綺語を書き綴って今号で百四十三編になります。原稿用紙にして八百枚ほどです。ここまで倦むことなく種切れになることもなく書き続けられたのは、読んでくださる方々のお陰です。感想を送ってくださる方、質問をくださる方、疑問を呈する方など私の善知識（仏教の正しい道理を教え導いてくれる人）の皆さんの言葉が私をありのままの日々の歩みへと導いて下さいます。頂く言葉が私の行いの道しるべとなっているのです。そんな善知識の一人から有難いメールを頂きました。主題は私の書いたイエ制度の崩壊と日本の共同体の変容と生滅についてへの感想と疑問だったのですが、その終わりに（メールの勝手な転載をお許しください）〝最後に、〟私の読み違いだったらすみませんが、「流れに掉をさす」を「流れに逆らう」という意味で使っておられませんか？　「波に乗る」と対句となっているので、そう読み取れます。とすると「流れに乗る」という本来の意味から外れることになります。そういう誤解はよくあるようで、私自身長いこと間違えていたので、気になりました。云々〟と書かれていました。まさしく私の誤用を正しく読んで頂き、続けて自身も草枕の冒頭の一節を引いて、かつて誤った解釈をしていたことに気づいて冷や汗をかいたことを今でも恥ずかしい記憶として覚えているとも書かれていました。ここに改めて前号の言葉の誤用を訂正いたします。

私はこのメールを頂き有り難さと感謝の念を強く持ちました。ひとつはここまでにも私の仏道のあゆみをみつめていただいている眼差しへの感謝。この眼差しは仏の慈悲の「慈」です。そしてひとつは仏の道へと導く叱咤激励の灯火への感謝。この激励は仏の慈悲の「悲」です。「慈悲」という言葉は分かり易いようで逆に定義が難しい言葉です。辞書的に言えば〟「慈」はサンスクリット語のmaitrī（友情）にあたり深い慈しみの心をさし、「悲」はkaruṇā（同情）にあたり、深い憐みの心をさす。〟[注1]となります。衆生に幸福を与えるのが「慈」であり、不幸を抜き去るのが「悲」であるともいいます。喜びを与え苦を除くことが「慈悲」ということになるでしょう。これはやみくもに優しく保護して守ってあげることではありません。優しさと厳しさを合わせ持ちながら私たちが歩くべき道を指し示す、導きの眼差しと灯明です。生まれたばかりの赤子が父母の愛情に導かれ成長していく過程に喩えれば分かり易いかもしれません。母性が「優しく子供を庇護して受け入れる」のに対し、父性は「時に厳しく突き放しながらも社会性を育てながら護

る」というように言えるとしたら、母性は受容する「慈」、父性は保護する「悲」と喩えられるのではないでしょうか。私たちは仏さまの子どもたちです。親である仏の慈悲を一身に浴びて仏の道を歩み続ける仏子たちなのです。

ところで私たちのあゆむ仏の道は特別な道ではありません。私の考える仏の道は何か特別のお祈りをしたり修行をしたり布施をしたりすることでは決してありません。日常を日々悔いなく楽しく心穏やかに過ごすことが仏の道をあゆむことです。ありのままの日々を送ること、仏の慈悲に守られ導かれた日々を生きることです。決してどこかの教祖様の言いなりや、宗派の取り決めに従った宗教活動の日々を送ることではありません。私自身の毎日を私自身がありのままに、観たままに過ごすことです。それが仏さまに出会い続けることなのです。宗教施設の奥に鎮座する偶像や有難い聖典や教祖の言葉を何べん繰り返し拝んでも、唱えても仏さまに出会うことは決してできません。私の諸行無常の毎日と他者の諸行無常の毎日とが交差するところが私たちが仏さまと出会うところなのです。おのおの自身の中に在る仏さまは、他者と互いに交わることでそれぞれの中に現前するのです。仏さまは私たちの当たり前の毎日の中に在るのです。

前号の私の軽率な言葉の誤用から、改めて仏の道や慈悲について私に考え、記述する機会を与えてくれた善知識に感謝します。私の日々と交差する他者がある限り私の仏のあゆみを止めることはできないでしょう。また狂言綺語をこれからも書き続けていくことになるでしょう。これは私の意志ではなく仏さまの導きだからです。それが仏の道をあゆむということなのでしょう。前号の末尾で書いたように、自己と他者の各々の変化の波を尊重しその変化が交わるときにそこに仏のいのちが生まれるということを智慧ではなく行いとして、今回実感を持つことが出来ました。その実感が諸行無常、縁起の世界、つまり仏の道をあゆむことだと改めてここに記述することが出来たことはまた私が仏の道をあゆみ続けていることの証しとなりました。仏の道をあゆみ続けていても、智に働けば角も立ち、情に棹させば流されもし、意地を通せば窮屈なことだらけでしょう。兎角に人の世は住みにくいと分かれば、その住みにくい人の世を、ありのままに観てありのままの日々を生きることを願い誓い行えば、それが仏の道をあゆむこととなるのです。

注1:コトバンク

狂言綺語百四四・名簿

先日五年ぶりに中学校のクラス会を開催することとなり、案内の往復葉書を送付したところです。五〇歳を過ぎたあたりから私を含めて、子供の手間もかからなくなり、生活も安定し、あるいは先行きがだいたい見えてきたところなのか、過去を振り返ってみたくなるようです。その頃から私たちのクラスは会をワールドカップの年に開催しようと言うことになり、四年おきに集まってはかつてを懐かしみ、そして今の自分の位置を確かめるということを繰り返してきました。昨年はまだコロナが収束しないと言うことで、一年延期となり、それが今回の五年ぶりの開催案内となったところです。前回は還暦同窓会という名のもとに、単独クラス会ではなく氏家中学校昭和四八年度卒業生九クラス四百名余りの会を担任の先生方を招待してホテルで開催しました。

案内の漏れがないように各クラス幹事が現住所を整理した結果、ほぼすべての方に案内状を送付できま

した。その過程で亡くなられた方も明らかになったため当日はその方々のお名前を読み上げることにいたしました。先生方は九クラスの担任中二名の方が亡くなられていたのは年齢的に致し方ないのですが、同級生も各クラス一～名二程亡くなられていました。これが日本人の同世代から見て多いのか少ないのか分かりませんが、私のクラス三年三組だけは突出して多く、男子二十六名中六名が亡くなられていました。まだ六十歳前での逝去です。それから五年後の今回、さらにまた二名の方の名前を名簿から削除しなければなりませんでした。六五歳にして男子二六名中八名の死亡、三〇％の死亡率です。これは明らかに高率です。実は私も昨年十一月に九人目の名簿削除者になっていたかもしれませんでした。ドクターヘリと高度医療技術のお陰で緊急手術が成功し、今こうして私は他者の死を名簿から削除する行為を通して、己の「生」を現実のものとして実感しているところです。

名簿はその集団の構成員を証明するものです。逆にその記載から削除されると構成員ではなくなると言うことです。ある組織や集団から脱退するとその名簿から削除されます。私たちも生者の集団から脱退すると公的な名簿、例えば戸籍や住民票、年金などの名簿から削除などの書き換えが行われます。私的な名簿をあげれば通帳やカード、様々な会員、同級会名簿も然りです。この名簿から死によって強制的に削除されることは、生者にとっては耐えがたい苦痛に違いありません。しかしそれは死者が感じる苦痛ではなく生者が死に直面するときあるいは死を考えざるをえなくなったときにある苦痛です。そして身近に死者を迎え入れざるをえなくなった残された生者が感じる苦痛です。死は生者が必ず誰もがくぐり抜けなければいけないところです。くぐり抜けた先の世界はもう誰も経験のしようがない処です。経験のしようがないものについて本来生者は語りようがなく、死の経験者である死者はそれを語る術を持つことができません。私たちが経験のしようのない世界へ抱く不安や苦痛や恐怖が、生者が死を忌避し生へと駆り立てる原動力となり、「死」があることによって「生」を生きることが可能となっているに違いないとすれば、私たちは死にゆくために今があるとも言えるでしょう。であれば私たちに与えられた生き方はよりよく死にゆくためによりよく生きることではないでしょうか。九人目の名簿削除者になったかもしれない私が七人目と八人目の死者を名簿から削除しながら今とりとめもなく綴っていることは、死を意識することが生きることではないかと言うことです。

生者の名簿から削除された死者の名簿は存在するのでしょうか。この名簿は死者が死後にも存在する場所があることを保証するものです。生者が安心して生を生き、心安らかに死を迎え入れることができるように、生者が作る生者のための死者名簿です。墓や位牌は一族の死者名簿、過去帳は寺が作る地域の死者名簿です。毎日位牌に向かうことや月命日、四九日、一周忌、三回忌、三三回忌などの年忌に死者を供養することは、生者が死が誰にも平等に訪れることを認識し、死を受け入れざるをえないことで、今ある生をよりよく生きることを願い誓うことです。名簿にある死者を永遠のいのちとして生者の生命の中に取り込むためのものです。

死者の名簿の存在があると言うことは死後の魂の存在を認めることと同じことになるかも知れません。死者供養は魂の存在を信じているから行われているはずです。仏教が長い時を経て今も存在できているのは、魂の存在を信じる人たちの要望をみたし、魂を供養する役目を担っていたからなのでしょう。死んでも魂が存在しそれを生者が供養してくれるという安心感があるからこそ、人は死を受け入れることができ、よりよい死を受け入れるためによりよい生を望みよりよい生を全うしようとしてきたのだと思います。私

が再三この場で述べてきたように仏教は死者のためにあるのではなく生者のためにあるものです。

私は魂の存在について語ることは致しません。お釈迦様は魂の存在を認めていません。仏教の教えの根本は諸法無我です。固定的な普遍の存在はないという考えです。死者供養は仏教の本質からはかけ離れたものであると見えるかも知れません。恐らく宗教の中で魂の存在を認めていない宗教は仏教だけでしょう。仏教は魂の存在を否定しながら魂の供養を行い続けてきてここまで存在してきた矛盾を私は解決する術もありませんし、また解決する必要もないと考えています。魂というと私たちは固定不変不死の存在と考えるでしょう。しかしお釈迦様は諸法無我、全ては因縁縁起によってあると語っています。物理的な命の終焉（死）の後に残されるものはいわゆる「魂」ではなく仏の教え、つまり法です。空や真如やありのままにあるものです。その法が肉体の生から離れて人々（生者）の生命の中に取り入れることが、永遠のいのちを繋ぐと言うことです。仏教の法要は不変不死の魂を供養するのではなく、かつて生者であった人々が仏となるための日々を過ごした生命（日々の営み）を、永遠のいのちとして残された私たちが頂くことです。僧侶は死者の名簿を書き加えることでその方の永遠のいのちを頂き、生者にそれをお渡しする役目の者だと信じています。

狂言綺語百四五・無為徒食

今回の狂言綺語を書き始めた日は九月一八日です。発行日まで一週間以上ありますが、二三日土曜日は昨年三年ぶりにリニューアル復活したコリーナの祭り「コリーナジャムフェス 2023」の本番の日に当たるため、いつもならゆっくり時間を取れる週末が準備と片付けに追われるに違いないので、少し早めに書き出し始めたわけです。いつも通り今回も何を書こうかも決めず、まずはパソコンの前に座って、さて今の私に縁起するありのままの今はなんだろうと思いを巡らし、それが観えてくると後はそのままに書き留めていくと私の信行の道が現れてくるのですが、今回は一向に縁起の今が現れず冒頭を書き出すことができません。六月から未だ続く暑い夏に狎れきって、日常が停滞しているようです。季節の季節らしい移ろいが待ち遠しいばかりです。

信行の道が現れない言い訳もどきを冒頭に書き綴りながら、気づいたことがあります。それは一八日が敬老の日だということ。朝からテレビや新聞で目にする敬老の日にまつわる数字は全体像や今後を予想するためには必要なものですが、いざそれを自身の身に当てられると私が高齢者と分類される根拠と理由、立ち振る舞いについて無頓着ではいられません。社会制度上で六五歳から高齢者となった私は日本人の二九%、矢板市民の三三%の一員です。五八歳で経済活動から退出したため、無職無収入の毎日を六五歳まで送って来た私は社会制度上はいかなる年齢的な名称も規定もない状態で過ごしてきましたが、これからはまた年齢により統計分類される身分となりました。高齢化社会の現実に照らし合わせて今では六五歳になったからといって敬老者として敬われるような時代ではなくなっています。各地の敬老会招待者も年々基準年齢が上がり、矢板市では八〇歳以上が被敬老者として祝福されます。すると六五歳から八〇歳までの範疇に属する者は高齢者であるが被敬老者ではないということ。私は八〇歳になって晴れて社会から敬老される身分になるまで、高齢者としていかに生きるかを自ら願い誓い行っていかなければならないので

しょう。因みに八〇歳以上は全人口の十％です。高齢者の二五％は仕事についており就業者全体の一三％強です。私を含めた高齢者の七〇％は働いておらず時間だけはふんだんにあります。自らの選択によって仕事もボランティアも趣味に生きることも、どのような生き方でも可能なはずです。そこで私は無為徒食の高齢者として生きていくことを選択したいと考えています。

「無為徒食」はネガティブな印象しかない言葉かもしれません。「なすべきことを何もしないでただ遊び暮らすこと。食べるだけであること」という辞書的な意味に従えば、社会的に役に立たない、無駄めし食いと言われているようです。しかし果たして〝何もしないでただ無駄に毎日を過ごすこと〟は「悪」でしょうか。「徒食」という言葉には既に働かずに遊び暮らす者との意味が込められていますが、生きるためには食べなければならないので、生きている限りは無駄な「食」はないはずです。それよりも何もしないことが問題なのでしょう。つまり「無為」が非難の的になっていると考えられます。仏教用語の「無為」は生滅変化を離れた常住絶対の真実。悟りです。つまり自然のままにして作為しないあるがままにあることです。一方何もしないでぶらぶらしているという意味もあります。「無為無策」や「一日を無為に過ごす」という使われ方です。この意味の二重性は、自分は悟ったと広言を吐く僧侶の説教はごもっともだが、そこに行いが伴わず毎日無駄めしを食べて暮らしているように見える出家者を揶揄するために出てきた意味かもしれません。

今まで、仏語起源の言葉が正反対の意味で現在に流通している言葉について何度か書いてきました。「無為」もその一つに思われます。仏教用語の中でもお釈迦様の教えの原理（法）を表す言葉は「諦める」や「無分別」のように社会の中では意味の反転が起こることはしばしばです。その原因は「法」の言葉が出世間の言葉だからです。出世間の言葉はそこでのみ意味を持つ言葉です。つまり出家した私(個)とお釈迦様（法）とを「信」を媒介にして繋ぐ言葉です。僧侶は出世間することでお釈迦様との間に「信」を結び、それをもって社会に戻りその「信」を支えにして「願い誓い行う」者たちのことです。「法」の言葉を社会生活の中で振り回してもそれは理解されることも共感されることも不可能です。社会の中(娑婆世界）でその言葉を機能させようとしてもそれは虚言か絵空事にしか聞こえないでしょう。なぜならその言葉は「信」のみによって意味をもち機能する言葉だからです。出世間した僧侶は出世間したままでは生きていくことはできません。私たちが食べていく場所はたとえそれが「徒食」にみえようとも娑婆世界以外にはありえないのです。それは僧侶も同じです。僧侶が唯一、偽善や高踏的にはみえない「無為徒食」の者として社会に存在する意味があるとすれば、それは世間（娑婆）に居て出世間で結んだお釈迦様との言葉を支えに「願い誓い行う」ことの日常を生きることに尽きるのです。娑婆(日々の生活）で出世間の言葉を振りかざす僧侶はそれこそ無為徒食（無駄飯食い）の者です。「無為」＝「ありのまま」であるためには法の言葉が他者に説教するためにあるのではなく、自らのお釈迦様との「信」を確認して「行」の道しるべとするための言葉でなければなりません。そして生きるために娑婆で「徒食」する僧侶の私は、ありのままに観てありのままに生きる毎日を送り続けることが、「無為徒食」の高齢者として生きていこうと考える私の願い誓い行いです。社会や他者の何かの為（有為）にではなく、ありのままの為（無為）に日々を送ることがどのような縁起をもたらしそれがまたどのような明日を引き起こすのか、高齢者となってもまだまだワクワクする日々が続きます。

何か（有為）ではなく何物でもないもの（無為）に毎日を生き、そして畑で虫たちと分かち合った野菜が

美味しく頂くことができるならば、たとえそれが日々を無為無策に過ごしているようにみえてしまっても、それは安らぎの処なのではないでしょうか。秋になりきらないある秋の日の無為徒食者の思いです。

狂言綺語百四六・喜怒哀楽

昭和三三年生まれの私は、まだ戦後復興の匂いを残しつつテレビや冷蔵庫などの今どこにでもあたりまえにある家電製品が少しずつ各家庭にそろい始めた成長期の日本とともに幼少期を過ごしてきました。校舎や机、椅子は戦後すぐの新制学校制度が始まったときのままの木製の作りのもの。体育館はなくプールもやっと小学校卒業間近に完成、すきま風だらけの教室の冬は石炭ストーブでしのぎ、夏は窓を全開にして授業を受けても、運動中の水の補給を禁じられていても、誰も熱中症で倒れる生徒がいない環境で逞しく育ちました。まだ不登校や授業中に歩き回る子供や親の対応に先生が追われることもない、学校が社会から敬意をはらわれていた時代です。学校中に当たり前のように存在していた、朝礼、整列、行進、挨拶、校歌、敬意、規律、競争、順位、顕彰などの数々が、私の社会的行動や人格を形成してきたのではないかと思えることは、高齢者のノスタルジーや昔は良かったとの繰り言に聞こえるでしょうか。一人一人の頑張りが個々の能力を引き出し、その集積が社会の成長をもたらすと考えられた時代に育ってきた私の世代は、競争や規律、評価、敬意が時代にそぐわないものとして排除されていこうとする現実とともに社会から引退を迫られているかのようです。

毎月私のもとに地区の小中学校の「学校だより」が届きます。かつては地域コミュニティの一つの括りである小中学区の中核であった学校は、年々希薄になっていく地域住民との関係性を辛うじて保つためのツールの一つとして、学校と直接関係ない私のような世帯にも今の学校の姿を届けてくれているのでしょう。昔はがり版刷りであったものが、今は写真もふんだんに使いカラー印刷です。毎月読んでいますが、仕様の変化とともに内容も変化したように思われます。教員の皆さんが熱意と方針をもって教育に当たられ、子供達もそれに応えて学校生活を送られていることはよく分るのですが、何か大きなものが消滅してしまったような印象を今までずっと拭い去ることが出来ませんでした。ひとりひとりの子どもたちや先生方の肉声や温もり、いわゆる学校生活の喜怒哀楽がきれいさっぱり消毒されて生き生きとした実在感や人の感情が紙面から立ち上がってこないのです。その訳が昨年まで小学校の講師を長年務めていた妻の指摘で氷解しました。その記事は地区新人大会の結果のお知らせです。写真と成績は掲載されているものの、肝心の名前が記載されていないのです。彼らの努力は「名無しの権兵衛」として数字（順位）のみが報告されているだけです。「頑張りました！」と書かれていても、「よかったね、これからも努力しようね」という励ましや期待、喜びがこの誌面を通して当の本人に伝わるでしょうか。もしこれが「学校全体で頑張りました、賞に入らなかった人も参加者全員頑張ったので、皆でその努力を称えましょう、個人を顕彰することは負けた人への配慮から控えましょう」と言うような趣旨ならば、そこから人は前に進もうと考えるでしょうか。努力する権利は全ての人に平等に与えられなければなりませんが、その努力の結果は様々です。それぞれの努力の結果には喜怒哀楽がついて回ります。喜怒哀楽は人に前進する力と達成への意思を与えると私は考えます。喜怒哀楽のエネルギー量が個人、集団、社会、日本の活力の多寡を決することになる

のではないでしょうか。

仏教の目的は「苦」から自分自身を解放することです。「苦」は煩悩、つまり貪欲（むさぼり・欲）瞋恚（怒り・憎しみ）愚痴（おろかさ）の三毒が因となってもたらされるものです。仏教の修行の目標はこの三毒を滅して心安らかな状態にたどり着くことです。これが悟りの境地です。しかし親鸞聖人が看破しているように人は罪悪深重・煩悩熾盛の存在です。どうやっても生きている限り三毒から逃れられない生き物です。本来悟りの境地を示す「涅槃」が肉体的生の消滅を意味する理由はここにあります。仏教は三毒を滅することのできない人間の存在を悲観することでもなく、断念することでもなく、抵抗するでもなく、それをありのままに受け入れて、安らぎの処（涅槃・悟り）へと向かって日々を生きていくことを実践するための宗教です。日々の中で引き起こされる感情の波（喜怒哀楽）を、日々を生き抜くための様々な意志や行動のエネルギーに転化して、喜怒哀楽の波が荒れ狂い三毒の海に溺れることがないよう、安らぎの処へ導いてくれる宗教です。喜怒哀楽は生きていることそのものです。それを取り除いてしまったら、人は肉体の生存はあっても感情は死滅しているのです。もしこれが三毒を滅した末の悟りの境地にみえるとしたら、これは仏教ではありません。物質・肉体面の働き（色）と心の働き（心）は不二、一如です。色心不二なるが故に喜怒哀楽とそれがもたらす行動は不二です。これが私たちがこの世に生きているということに他なりません。

感情（心）は荒れ狂う波のようにのたうち回り、荒れ狂い、時には自身をも傷つけ人に害を及ぼすこともあるでしょう。それば罪悪深重・煩悩熾盛であること、人であることの証です。しかしその波を感情のままに任せっきりにしないのもまた人です。互いの感情の波の接触が異化から同化へ、反から合へと転化させていく過程が私と他者、私と社会との関係をつくることのはずです。その波の境目でその波をありのままに観ることができたならば、「喜」は前進へ「怒」は和解へ「哀」は同情へ「楽」は共有へのエネルギーへとそれぞれが転化されていくはずです。それは仏の慈悲そのものです。慈悲のエネルーギー源である「喜怒哀楽」をオブラートで包み、消毒してしまった社会からは、まず子供たちの歓声や喧嘩の声が聞こえなくなってしまうのではないでしょうか、「学校だより」の一記事からのこの記述が私の誤解で、杞憂かも知れませんが、また蟻の一穴ということもあり得ます。「喜怒哀楽」を表さないことが思いやりや、平等や人権尊重のためともし社会が判断しているならば、それは安らぎの処と真反対の極北に向かって行くことになるでしょう。

狂言綺語百四七・無心

秋の夜長を楽しむ気候になってきました。かといって灯火の下で本を開くような生活にはほど遠く、夕食後はお酒を呑みながらネットサーフィンやＴＶザッピングをしているうちに就寝の時間となり、いつの間にか翌日の朝になっているという毎日が近年の私の夜長の過ごし方になっているようです。テレビやスマホが日常の時間を支配するようになってからは、私たちは読書よりも楽しい娯楽があることに気づいたのか。そもそも読書を娯楽と単純に言ってしまってよいものかもありますが、読書が特殊な時間のように思われ活字離れが進むことが心配です。読書が知識欲をみたすものであれ、娯楽のためであれ、あるいは

たとえ時間つぶしのためでも、本を読むという時間が当人にとって楽しい時間であればそれでよいのではないでしょうか。

す私たちの本との出会いはまずはお母さんの読み聞かせから始まるのでしょう。琉游舎にあるミニ図書館では、幼児が自分に合った本を見つけてはお母さんの所にもっていき、読むようにせがむ光景を何度も見ています。二歳の子も四歳の子も自分に合った本を的確に見つけて持ってきます。この年頃の子どもの読書は言葉を読むものではなく、親の声を通して耳で聞く読書です。聞く子供と語る母の声と作者の絵と言葉が三位一体となった幸せな時間です。もう少し成長して六歳くらいになると自分で読みはじめるようです。最初はお母さんと一緒になって音読です。つっかえながらも文字を音にしていき、その自分の声が奏でた文字の音を自分の耳に再生しているかのようです。文字が眼と耳を通して複合的に読者の身体の中に吸収されていくのでしょう。活字を眼で追い、声で音に替え、耳でその音を自ら聴くという、読み手と聞き手と作者の三者の関係性の読書から、成長とともに作者と読者との一対一の個人的な読書へと、読書の原初体験が変わっていくようです。本を語り聴聞する読書から眼と脳が吸収する読書へ、すると音読は黙読となっていきます。

最近の小学校ではどのような方式か知りませんが、私の頃はまず国語の授業は音読から始まりました。先生や当番の子の音読の先導に始まり、皆が跡を追って教科書を唱和するなどして文字を音にし、各々の耳に届くことでそこにいる人たち全てがその文字の音を共有する読書体験です。そこから読む楽しさ、聞く喜び、それを共有する経験を自然と身につけていたといえば大仰に聞こえるでしょうか。言葉を目で読んで脳を経由して理解するよりも先に、音によって体の中に自然に入っていく言葉の共有体験が、今でも私が本を読む時間を楽しいと感じるもとになっているような気がしてなりません。たとえそれが音読の機会が極端に減った現在の私の読書だとしても、本そのものとの一対一の読書を、言葉を介しての作者や登場人物、本が示す世界との対話だと考えることができるのは、年少の頃の音読体験で知った読む喜びがあるからでしょう。

毎朝の朝勤で行われる読経も音読の場です。と言えば意外に聞こえるかも知れません。法要などの場を除いて私が読経するところでは、聴衆は誰もいないようにみえ、声を出しているのも私一人だけのようにしかみえません。誰に対して何のために読経しているのでしょう。日蓮宗の読経では木鉦を叩きリズムをとり読経を先導します。修行時に身延山の朝勤で百人ほどの僧侶が一緒に読経した時も、琉游舎で私一人が読経するときも同じように木鉦を叩きます。実は読経の場には生きとし生けるものが参集して木鉦でタクトを振るう音に合わせて経文を唱和しているのです。経文はお釈迦様の言葉です。その言葉を聞き逃すまいと読経の声に導かれ衆生（生きとし生けるもの）が集まります。法華経にはお釈迦様の説教の場に四部（比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷）の弟子たちと八部衆（天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦楼羅。緊那羅。摩睺 羅伽）の仏法を守護する眷属。そして人と非人等が集まっていることが随所に記されています。神力品第二一には「受持読誦。解説書写。如説修行（中略）当知是処。即是道場。諸仏於此。得阿耨多羅三藐三菩提。諸仏於此。転於法輪。」（法華経を読誦するところはそこがどこであれ道場となる、そこでは悟りを得ることができ、仏の教えが説かれる）と記されています。経文の読誦（音読）は四部八部衆を含めた衆生が集まって唱和し仏の教えを讃嘆し今日もまたありのままに仏の道をあゆむことを自分自身に願い誓い行う場です。たとえ一人で朝勤の読経を行っているように見えようとも、そこはありとあらゆる存在が

無心に経を唱和することで「教えと一体となる（仏になる）」ことを信じる衆生の無限の喜びが調和し、共有される「場」です。

「無心の音読」この言葉は読書会でご一緒している首藤先生[注1]がフェイスブックに投稿されていた言葉です。今回の狂言綺語はこれに触発されて書きました。主題に続いて記されている言葉は「無心の音読、音読に技巧は不要。ただただ、無心に声に出す。そこに、無限の味わいがある。欲を減らして、声に出してみる。声に出して文字をたどる。ただそれだけでいい。」この言葉はそのまま私の読経の時の言葉「無心の読経」です。無心になった時そこには何もありません。「空」です。そこにありのままの私と縁起の因縁が立ち現れてきます。その時初めて仏との対話が可能になります。対話は私の無心の中に仏が現われ同体となることです。そして同体であることの喜びを仏と分かち合うことです。私の読経の声と仏の言葉が同調し合いハーモニーを奏でる時を求めて、私は無心の読経を願い誓い行う毎日を続けているのでしょう。

人は「有心」の生き物です。「無心」であり続けることが不可能な生き物。しかし大いなるもの（ありのまま）に触れるには無心でなければなりません。人はまた罪悪深重煩悩熾盛の生き物の自覚があるからこそ無心であることを願うのです。無心であることで観るもの、それが読書でも芸術でもスポーツでも読経でも、無心であった瞬間に出会ったそれらと同体となる瞬間を至上の喜びと感じることが出来れば、それは大いなるものとの出会いです。私には仏との出会いとなるのでしょう

注1：国語教育研究者首藤久義氏（無断転載をお許しください）

狂言綺語百四八・合掌

やっと過ごしやすい気候になってきました。スポーツの秋、芸術の秋。コロナとの共存も滞りなく進んでいるようで、三年ほど中止されていた祭りや体育祭、芸術祭などのイベントも各地で復活して多くの人で賑わっているようです。学校の運動会や発表会も親に限定されていた見学が今年は解除されて、先日妻が一年生の孫の音楽発表会に諏訪まで出かけていきました。その模様がスマホで録画されて送られてきて驚きました。まだ入学して半年ほど、幼稚園で楽器を触ったことがある子もいるかも知れませんが、殆どが鍵盤ハーモニカも太鼓もタンバリンも初めての経験だと思います。二十数名ほどの一年生たちが先生の指揮の下、とても素晴らしい演奏が披露されていたのです。曲目は「メリーさんの羊」。短いシンプルな曲ですが、これを指揮に合わせていくつもの変奏曲が奏でられていきます。テンポを変えたり短調やポップ調、打楽器の賑やかな競演と、数種の編曲をそれぞれ見事に演奏し分けていました。ここまでまとめ上げるには担任や学校側の並大抵ならない努力と教育への強い意志がなければできなかったでしょう。そして何よりも子供たちの無限の可能性と、皆で協力して作り上げる創造の喜びが「メリーさんの羊」の演奏を通して聞こえてきました。

私の小学校の学習発表会（学芸会の名称だったかもしれません）経験は今でも覚えています。「ききみみずきん」の演劇と、曲名は忘れましたが木琴を演奏しました。演技や演奏を通して協調し共鳴し合うこと、小道具や大道具を作る苦労や工夫などをひっくるめて思いを一つにして創造し協働し合う経験は、教育効果として絶大なものがあったと思います。ところで、昨今の栃木の小学校では、音楽会などの文化的発表

会は学校行事の中に組み込まれていないようです。妻は長野と東京と栃木の三カ所で小学校の先生をしてきましたが、六年前に栃木に戻ってきて、かつて小学生時代に経験した全校一堂に会する学習発表会に類するものが開かれていないと分かったとき、これは栃木の子供たちにとって大きな損失だと残念がっていました。なぜなら子供の協調や創造、努力、達成感などの能力の開発と社会性や文化的素養の獲得、それらを身につける大切な機会が栃木の子供たちには与えられていないからです。いざ社会に出て様々な教育環境に育ってきた人々が全国から集まり、競争と協調をしていかなければならない時に大きなハンディになるだろうとまで、妻は言っており私も同感です。確かに小学校低学年から二部合唱を教え、高学年では地区の合唱大会を引率し、他流試合を行えるまでに練習に励み指導に尽くした児童も先生も大変な努力と労力であったと、妻は長野での経験を振り返りますが、それ以上に得たものは先生も児童も遥かに大きなものがあったとも語ります。学習発表会を廃止してその指導時間を家庭との連携や学力テスト対策に振替えたためか、教員の働き方改革のためかしれませんが、未来の人材育成のために何が必要かの教育意志の地域差がそのまま地域力の差になる気がします。

「合掌」は左右両方の手のひらを胸の前で合わせ拝むときの所作です。東南アジアでは日常的な挨拶の作法でもありますが、私たち日本人には仏を拝む時の礼法です。私は毎日朝勤のときに仏様に合掌をするだけでなく、人とお会いしたときや頂きものをしたときにも自然と合掌をしています。他者との出会いも、物を介しての関係性も仏との出会うためのものであると考えるからです。出会いによって自己と他者とが共鳴し合い協働することができたとき、それは仏のもとで合一をなしえたということです。私たちが仏となるときです。右左両手を合わせることにより仏の世界と現世が一体となるとの仏教の考えは「右手は仏の象徴で、清らかなものや知恵を表し、左手は衆生、つまり自分自身であり、不浄さを持ってはいるが両手を合わせることにより、仏と一体になることや仏への帰依を示すとされる。」と説明されます。私はあまりこのような理屈は必要ないと考えています。素直に手と手を「合わせる（会う）」と言う自然の行為が自己と他者の出会いです。そして私以外の世界の全てを手の中に包み込むことで私（内）と森羅万象（外）が合一します。それを胸の奥（内）に収めたとき、自己と他者との関係性が生まれます。その関係性をありのままのものと観て、そのままに関係性を紡いでいくならば、協調と共感が生まれるはず。それが仏の道を歩むことなのです。

同じ「がっしょう」の音（おん）なのでと言うわけではありませんが、私は「合掌」も「合唱」も「合奏」も全く同じことだと考えています。合唱も合奏もその声や音が互いに出会い合一になること、それは楽器や音符を通しての自己と他者との出会いではないでしょうか。互いの声や音を聞き、自分の奏でる音と自分以外の音が一つになり、自分でないものと響き合い協調し合うこと、そこに出会いがあり共感があり、創造があるのです。目と耳と五感の全てを通して他者の声を聞き、それを自己の中に頂いて再び自己の声を宇宙に向けて奏でることで、他者（宇宙）と合一することができると信じることそれが仏の道を歩むことです。

仏の道は何か特別の鍛錬や行いが必要なわけではありません。日々を自己と他者が共鳴し合うことを望みそのように行い続ける（生き続ける）ことです。つまり日々他者の声を聞き、その声に共鳴し自分の声と紡ぎ合いその声に合掌し合唱し合奏した自分の声と共にそのままに毎日の生活をおくることです。仏教が森羅万象全てが仏であると言っているのはこのことだと私は信じています。曹洞宗の開祖道元は「峰の

色　谷の響きも　皆ながら　吾が釈迦牟尼の　声と姿と」と詠んでいます。私たちがありのままの日々を送っているならば、眼にする青々とした山並みや谷川のせせらぎが、お釈迦さまの声であり姿となって私たちの前に立ち現れてくるのです。これが日本人の生活の根底に連綿として流れる精神の営みの源流です。森羅万象全ての存在は仏であると信じる仏教も、八百万の神が宿ると信じる神道も精神の源泉は全く同一です。故に日本人には絶対神の無誤謬の論理で組み立てられた正義や真理は馴染まないのではないかと考えます。

狂言綺語百四九・已・今・当

一旦休止していたことを再開するには大変なエネルギーを要すると思われます。理由があって継続していたことが、何らかの理由で休止を余儀なくさせられ、休止の理由が消滅したと思われるのでまた再開しようと言うことになるはずですが、再開の決断は休止期間の人それぞれの事情の変化でなかなか判断が難しいだけでなく、意欲の持続やノウハウの継承などの問題が、このコロナ禍の三年間に顕在化したことを思わずにはいられません。三年ぶりに再開した各地のお祭りで事故が続出しているようです。三年も経てば人は進学も就職も退職もし、病気にもなり亡くなる人もあるでしょう。そのような人の入れ替わりの中で、技術と精神が確実に伝承されていくことの困難さを考えれば、逆に継続することの重要性が明らかになってきます。

昨年の諏訪の御柱祭は以前当欄で報告しました。祭り精神、つまり“何を願ってこの祭りがあるのか”の根本、御柱を氏子たちが山から里まで力を合わせて三日間で引いていく祭事が中止となりトラックで御柱が運ばれて行きました。この「山出し」期間にはいくつかの難所があります。「木落とし」「川越し」などは相当の技術と経験を要するので、そのノウハウが継承されなければ事故は容易に起こり得るのです。七年おきのこの祭りは最後に行われてから次回再開までに「山出し」に関すれば十二年間の空白があります。技術は映像やマニュアルで残してあとで学習することはできるでしょう。しかし精神は記録ではなかなか伝えられません。経験や口伝でしか伝承できないものがあると考えます。私は受け継がれたことは一人でもそれを必要としている人がいればそれを誰かに引き継いでいくことが、永遠のいのちを繋ぐ者の役目のひとつと考えています。

昨年の十一月二十日で私の日記は中断されています。退職して矢板の地コリーナに居を定めてから、日々の備忘録代わりに書き始めた三年連用日記は二冊目の最後の月に達しようかという直前から今日まで一年間空白のままです。日記は翌日の朝勤の後に前日分を記録することを日課にしていた私は、二十日分を記載してわずか数時間後に発症し命の危機に直面しました。幸い高度な医療技術と迅速な救急チームの対応で今まで命を長らえることができています。自分の書いた日記は畑の種まきや収穫の時期を確認する以外読み直すことはなかったのですが、今回は直前まで何をしていたのかを読み直してみました。前々日の土曜日は片岡駅前のイルミネーション作り、午後からは亡くなった同級生のメモリアルイベントの準備、一週間後の「九尾の狐パワースポットマラソン大会」の運営準備、日曜は朝からイベント本番、合間に友人の市会議員と医師から今後の活動に資するためのヒアリング、そしてイベントの後片付けをして帰宅と記

されていました。今考えれば盛りだくさんの活動で走り回っていたようですが、忙しいとか負担だという感覚はなかったように記憶しています。ただ、ここに記載されたどれもが日記の休止と共に未だに休止されたままという事実に正直驚きました。日々をありのままに生きることが私の行いと信じて過ごしてきたわたしは、単なる日記の中断だけでなく、行いのいくつかを昨年の二十一日を境に中断していたのです。私は記録の中断と共に私自身のいのちを繋ぐこと（行い）の一部をも中断していたということです。書くこと、記録することもそのまま日々の行いであり、私自身のいのちを私自身の明日に繋ぐということであることに、今気づくこととなりました。

法華経の本仏は久遠実成の釈迦牟尼仏です。久遠とは永遠の過去、永遠の未来、永遠の現在であると言うことです。経文では過去・現在・未来の三世を已（過去）・今（現在）・当（未来）と表記します。私たちの慣れ親しんだ時の概念からすれば、已・今・当の三世が永遠であるという考えは受け入れることは困難なことでしょう。例えば通常の時間観は私が今ある現在を点とすると、その点から左には過去の歴史があり、その点から右へは未来の明日が繋がっていると見ることができます。過去は事実として実在しその事実の延長線上に未来が存在することが明らかなこととして、現在を受け入れるという時間観ではないでしょうか。直線的平面的あるいは二次元的な時間観です。一方法華経の時間観は私の有る今が過去であり未来でありそれは永遠であるのです。私の今に垂直に未来と過去が包括される立体的三次元的時間。縁起の法則に従い今が過去となり未来となる無常の「時」です。その時間を具現化している存在が久遠実成の釈迦牟尼仏です。今ある私は時間の流れのある一点に在るのではなく、私自身の中にある過去も現在も未来も永遠のいのちとしてありのままに受けとり、久遠そのものになることが仏の道を歩むと言うことであり、永遠のいのちを繋ぐと言うことです。久遠実成の釈迦牟尼仏を私の時間の中に取り込み同体（已・今・当）となることです。

法華経の時間観を生きることに、特別な修行や論理、特定の信仰や思想は必要ありません。ただ日々をつつがなく平穏に安心して過ごすことを願いその願いのままに生きることです。それが私自身のいのちを様々な永遠のいのちに繋いでいくことです。これは私のいのちと他者のいのちが共棲するということ。人それぞれの已・今・当が久遠実成の釈迦牟尼仏と同体になった喜びと共に各々の歩き方で道のりを歩んでいくことで、各々の永遠のいのちが繋がり合い、日々を安らかに豊かにありのままに生きていくことができるのです。

私は一年前に中断していた日記を十一月二十一日から再開することにしました。それで何が始まるわけでも変わるわけでもありませんが、法華経の時間観を生き続けるためには再開が必要と考えたからです。「已・今・当」の時間を生きるためには発症した過去を悔まず恨まず拘らず、その「已」と共棲して「今」をありのままに観て「当」に向かって歩み続けることが法華経の時間を生きることだと、中断直前の日記を「今」に引き当てて読むことが出来たからです。過去を悔み恨めば未来はその後悔に復讐することが必要になることだと、最近の中東やウクライナの戦乱を見て思い至ったことも、また日記を再開し改めて二次元の直線的時間ではなく法華経の永遠の時をあゆみ続けねばと思い至った日記再開の理由のひとつです

狂言綺語百五十・はげ山の幻影

足尾鉱毒事件のドキュメンタリー映画を見ました。日本の公害の原点と言われる事件です。私の育ったところから車で一時間ほどの場所が足尾です。銅の採掘と精錬で富国強兵の旗頭として明治からの工業化、帝国化を先導したこの場所は、昭和三十年代以降の高度成長期に水俣病やイタイイタイ病などの四大公害事件が大きく世間を騒がせた私の成長期に、再び公害の告発と抵抗運動の原点として注目されていました。私の出身県での出来事だったとことや、高校の校長が鉱毒事件を明治天皇に直訴しようと試みた田中正造の研究者で著名であったことの興味だけでなく、正造を主人公とする新劇「明治の柩」や映画「襤褸の旗」を中高生の私が日常的に見られる環境にあったことが私の今の思考を方向づけるひとつになったのかも知れません。現在と比較してオープンに意見を交わし、時に抵抗運動まで起こった昭和の時代は、国家の横暴や企業の不正に真正面から異を唱えるパワーが私たちにはあったことをこのドキュメンタリー映画は思い起こさせました。

今足尾は「足尾に緑を育てる会」の活動によって、かつてのはげ山が、緑の山に生まれ変わろうとしています。死んだ山を再生させようという試みは、着々と実を結んでいるようで、山には徐々に緑が戻ってきています。自然の再生力と人間の共棲への強い思いが結実した大変有意義な事業だとおもわれます。ただ、少し穿った見方をすると、山が再生するにつれてかつての異議申し立てと抵抗の記憶、鉱毒の悲惨な被害の事実認識が徐々に私たちから薄れていってしまうのではないかという懸念も生まれます。自然と人々の生活を破壊した人間の愚行を目の前に草木一本生えない死の山の姿として突きつけられたときに、加害者への怒りと被害者への哀しみを共有することが初めて私たちには可能となるのではないでしょうか。その時私たちはこの愚行を二度と犯してはならないという誓いと共に、その事実をありのままに繋いで行くことを願うはずです。それが足尾の永遠のいのちを繋ぐことだと考えます。足尾の過去現在未来（已・今・当）を永遠のいのちとしてありのままに繋いで行くためには、どのような方法論を採ることが最善なのか、私には判断がつきかねます。足尾の土地のいのちがありのままにあり続けたいという思いが緑の再生なのか、死の山のままにあることなのか、私たちは足尾の土地の地主神（永遠のいのち）の声を聞き続ける必要があるでしょう。

足尾の山の再生のための植樹を主導した一人が栃木県出身の作家立松和平です。生存当時はテレビの報道番組に出演して足尾の山の再生について語っていたことを記憶しています。記憶から次第に薄れかけていた足尾鉱毒事件を再び平成に呼び起こした立松の行動は、足尾のいのちが今に繋げられている契機になりました。その時の彼の発言を辿ってみると、立松はそれまでの足尾が抵抗と告発の歴史、つまり鉱毒事件への反抗活動だったものから、自然(死の山）と人間（愚行）の再生と共棲の活動へと支点を移したことにあります。足尾の問題はその時「事件」から「環境」へと転換したのです。「事件」は解決されることが期待されます。そのために加害と被害を特定しその罪を明確にしたうえで償い（補償や回復）を実現することが図られます。「事件」の運動化は時間的制約がつきまといます。時間経過と共に、当事者や支援者の減少と脱落、世間の関心の希薄化は免れません。加害者の会社や解決の主導者であるべき国(権力）はその希薄化を企図し補償や回復のコストと事件から派生する反権力・反資本意識を最小化しようと努めるでしょう。一方環境運動は大衆運動化が可能です。加害者も被害者も環境の再生と言う目的に向かって敵と味

方(加害と被害)の関係を一度精算することが可能になるからです。死の山の再生と言う目的に賛同する者であれば、この環境運動には誰でも参加できます。いまや「環境」は世界的な課題であり、権力と民衆という利害相反の可能性が高い構図から、国家も国民も共通の敵(環境悪化)を見いだすことで、共闘が可能になったともいえるかもしれません。異議申し立て・抵抗から共闘・共棲へ、足尾鉱毒事件の百数十年に渡る変遷と今とこれからは、私たちが過去から学ぶ人類の智慧を証明してくれるものなのか、それとも同じ過ちと災厄を繰り返す生き物なのか、私は緑の山に再生された山の行く末にまたはげ山の幻影を見てしまう恐れをぬぐい去ることができません。

法華経の教えは「誰もが仏になり得る」という教えです。それはまた「誰もが悪にもなり得る」という教えでもあります。法華経にある十界互具の教えは、衆生は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界の境涯のなかを常に行き来していると言うもの。私たちの存在と境遇は、仏界から地獄界までを包摂しながら生きている生き物なのです。私たちは常に自分が仏になろうと試みながらも、煩悩と欲望にさいなまれながら時には悪魔の所業も厭わない地獄に生きる生き物でもあります。その自覚があってこそ初めて私たちは悪を回避しようとする日々が可能になるのです。日蓮聖人の言葉に「夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はずただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふこれにまよふを凡夫と云う(上野殿後家尼御返事)」とあります。浄土も地獄も外にあるのではなく、ただ私たちの胸の中にあるのです。このことを悟ることを仏といい迷うことを凡夫というと語られています。悟ることとはありのままに観てありのままに行い、日々を心安らかに迷うことなく過ごすことです。しかし心は外からの働きかけによって曇らされて迷いが生じます。この繰り返しと自覚が「私が生きてここにある」ということなのだと私は考えます。

人は過去に学ぶ智慧を未来に生かすことができるのかと言う問いに対して、仏界と地獄界を日々行き来する仏弟子の私は、未来は過去でも現在でもあると言う法華経の時間観に従い「否」と答えてしまうことでしょう。ただ緑の山とはげ山が行き来する幻影が見えている内はまだ悟りと迷いの間を行き来しているということ、つまり「私は生きてここにある」ということなのです。仏界も地獄界も行き来できない境遇に陥りそうになった発病から一年、いまだに悩み迷い考え行い喜怒哀楽の中に生きることが許されたいのちに合掌。

狂言綺語百五十一・不殺生戒

今年はコリーナの蓮池に飛来する鴨の数が例年になく多く、散歩のたびに鴨の姿を楽しんでいます。いつもは多くて二十羽ほど、家族らしき二つほどが群れとなり、悠々と池を泳ぎ回っていました。今年は百羽ほどになるでしょうか。いくつかの群れがさほど広くない池の中を所狭しと、縦横に泳ぎ回っています。ある群れは岸に上がってひなたぼっこ、私が横を通り過ぎると一斉に飛び立って池に戻ります。また水に潜って何かを採っている様子も見えます。かと思えば縄張り争いでしょうか、一羽がもう一羽をものすごい勢いで追い立てている様子も見られます。池のほとりでつい足を止めて、鴨のすがたに見入ってしまい時を忘れそうです。温暖化のため越冬の場所をもっと南に定めなくてもよくなったのか、一月になり池に

氷が張れば、もっと温暖な所に移動するのか分かりませんが、しばらくは鴨の姿を散歩の友として楽しみたいと思います。

鴨は稲や麦、冬場のキャベツを食べてしまう農業被害をもたらす害鳥です。一方鳥獣保護管理法によって勝手に捕ることが禁止されている保護鳥でもあります。害鳥と言われても保護鳥と言われても鴨にとってはいわれのないことでしょう。生きていくためには害鳥にもなり得るし、保護され続けている内に捕獲される危険察知本能を失ってしまうこともあるでしょう。人間生活や自然環境の変化で人間と他の生き物の関係も変わってくるはず。人間が食物連鎖の頂点に立っている限り食べるという行為を基準にして、人は他の生き物との関係を倫理や法律を作って調整し合い共存してきたのでしょう。先日琉旂舎の道を挟んだ所に仕掛けられた檻に猪が捕らえられていました。朝玄関を出ると何かかがぶつかる音がしていたので山側を見ると、猪が罠の檻に入っていたのです。朝の薄暗い中、猪が出口がないかと必死に檻に体をぶつけて脱出しようと暴れ回る音でした。市役所に連絡をすると程なく猟友会の方が来て、手際よく檻ごと搬送していきました。山を下りたところにある田んぼや畑を荒らし回っていた猪のようで自分の家の作物も被害に遭ったと猟友会の方は語っていました。まさしくこの山里で生きていくための人間と猪のあたりまえの営みが、私の目の前で繰り広げられていました。猪を捕らえる人間とそこから逃れようとする猪。「かわいそう」などの情緒的感情が入る余地はありません。いずれあの猪は殺処分されジビエとして食料となることでしょう。食物連鎖の頂点に立つ人間の至極当たり前の行為です。生き物は人間にとり食料でもあるのです。蓮池の鴨たちを見てほほえましいと思う一方、おいしそう、食べてみたいと思ってしまう私は不謹慎な破戒僧なのでしょうか。

仏教徒の肉食は戒律で禁じられていると思われています。江戸時代まで日本人は獣の肉を公には食べることはありませんでした。私も三十五日間の結界修行中は肉も魚も一切口にしませんでした。肉食を忌避する考えは仏教特有のものではなく、多かれ少なかれ他の宗教にもあります。それは何らかの教義を根拠として禁止されているものなのでしょう。仏教徒の肉食禁止の根拠は不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）にあります。創唱者の釈迦牟尼は直接殺のみを明確に禁じて、間接殺のなかでも布施された肉で殺す所を見ていない肉、自分に供するために殺したと聞いていない肉、自分の為に殺したと知らない肉の三つ（三種の浄肉）は食べても問題ないとしました。これは不殺生戒を犯していない肉だという理由です。浄土宗の開祖法然は「もし持戒持律をもって本願とせば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たむ（もし戒律を守ることが本当の仏教ならば、戒律を守れない人は絶対に往生することはできない）」と選択本願念仏集で述べています。続いて「戒律を守る人はおらず、破戒の人がほとんどだ」とあります。親鸞聖人は「煩悩熾盛の凡夫」と自らを規定し、肉食・妻帯という破戒僧の行為を宣言しています。日蓮聖人は本人は肉食も妻帯もしませんでしたが檀信徒の肉食は認めており、また本人は酒を好んで飲んでいました。私は肉食も妻帯も飲酒もする僧侶です。仏教の目的は心安らかに毎日を送ることにあります。安らぎの実現が「救われる」「悟る」ということです。戒律を遵守することが目的ではありません。破戒者の自覚こそが悟りへの道と観た法然も親鸞も日蓮も、戒律を守れない凡夫がどうすれば救われるかを希求し続けて各々の宗派を開いた宗祖なのです。

戒律は悟りの手助けをしてくれる手段と考えます。今まで「戒律」と表記してきましたが「戒」と「律」は元来異なるものです。「戒」はさとりを目指し個人的に課す決まり、良い習慣、道徳的行為です。「律」は

僧侶の集団生活上のルールです。「戒」は仏教徒の心構え「律」は僧院内の法律なのです。釈迦牟尼が創唱した原始仏教から小乗、大乗仏教と多くのの戒律が設定されてきました。信徒と出家者、社会と僧院の関係性の中、教えの維持のために双方が必要とした結果が多くの複雑な戒律が定められた理由だと思われます。私は詳細な戒律の知識は全くありませんが「五戒」と呼ぶ戒だけは仏教徒の基本的な心構えなので理解しています。不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）不偸盗戒（他人のものを盗んではいけない）不邪淫戒（不道徳な性行為を行ってはならない）不妄語戒（ 嘘をついてはいけない）不飲酒戒（酒を飲んではならない）の五つ。私は既にこの五つのうち不飲酒戒を破っています。また不殺生戒も畑を荒らすバッタや蚊などは殺生することがあります。不妄語戒も守られているか怪しいものです。僧侶の私は五戒すら守ることができないのです。親鸞も日蓮もこの自覚から出発して安らぎの道を歩んで行きました。五戒すら守ることのできないという自覚が私たちを仏の道へ歩ませるのです。戒律の存在意義はこの自覚にあるのです。

人間と自然との関係が現状と合わなければ必然的にそこに関わる法律や倫理観も変化するはずです。同じように私たちの信仰も社会の現状が変われば、変化していく必要があるでしょう。私たちはこの社会以外の場所で安らぎの日々を送ることは不可能だからです。私は信仰の原理を守るとの言葉を叫び実行する人々に、信仰の枝葉末節に拘る頑迷さを見てしまいます。その信仰は社会にも信仰者にも不幸をもたらすでしょう。

狂言綺語百五十二・言葉

新聞の購読を十月でやめました。新聞に限らずテレビでも、報道された言葉はすべて同じような言葉にしか聞こえないためです。メディア独自の言葉、つまり独自の取材や視点で伝えられた言葉でなく、取材対象者が発した言葉をただ私たちに垂れ流しているだけの報道は、ネットのまとめニュースを見れば、事は足ります。視聴者が聞きたいことを聞き出して私たちに伝えるのではなく、情報発信者が伝えたいことをそのまま伝えるのであればそれはジャーナリズムではなく、情報の代理店人です。記者クラブに集った仲間内が記者会見で語られる空疎で具体性のない言葉をそのまま伝え、申し訳程度のおざなりの質問には「適切に対処します」「遺憾です」「総合的に判断します」「この場で答える立場にないので差し控えます」の回答で良しとしているのです。では、「どのような時期に具体的にどう対処するのか」や「残念な感想ですね。遺憾の感想をどう政策に具体化するのか」との踏み込んだ質問もなく、仲良しクラブのおしゃべりにしか聞こえないのは言葉に対する覚悟と信頼が発信者伝達者双方に希薄になってきてしまったからではないでしょうか。

公共放送を自負するNHKニュースは以前には、民放と内容も語り口も一線を画していたように記憶しています。大谷選手の移籍や嵐の解散が大衆の関心事であることは否定しませんが、それがトップニュースに来る判断が私には理解できません。大衆をターゲットとするポピュリズム放送ではなく公共の利益のための放送であることが存在意義なのであれば、ウクライナやイスラエルの戦争、派閥のキックバックの問題を真っ先に伝えることの方が遙かに私たち国民の共通利益になると思われます。またNHKが大衆放送局

ではなく公共放送局であるならば最近よく耳にする耳障りな言葉も頂けません。ニュースは男女のアナウンサーの掛け合いで進行することが最近の傾向です。そのやりとりの中で片方の説明や映像にもう一方が「へぇーっ」という相づちを打つことがしばしばです。通常は「はい、ええ、そうですね、なるほど」くらいまでが理解や賛意を示す相づちの言葉だと思うのですが「へぇーっ」まで行くと仲間内のおしゃべりになら通用しますが、公共の場の発言としてはテレビに限らず、聞き苦しい言葉です。また、アナウンサーが漢字の読みを間違えたときに、もう一方が誤りを正すと「あそっかー」と言葉を返したことにも驚きました。これを聞いて私たちは彼らが発する言葉を信ずることができるでしょうか。言葉は今死に向かう病に冒されているようです。

経文は信じる人にとっては聖典ですが、信じることのできない人には荒唐無稽の作り話に見えるでしょう。理性的に解釈しようと試みても矛盾だらけの記述に、論理整合性を見ることは不可能です。経文は解釈して知識として読むものではなく、心と身で受け取り私の中にそのいのち（教え）を頂くものです。心身に頂いたいのちが日々の生活の安らぎを私たちに与えてくれるのです。その安らぎが信じると言うことです。日々を安らぎ（信）と共に生きる（行）ことが、「信行一致」です。経文は信行一致の日々があるからこそ信じることができるのです。仏の智慧（教え）を衆生の知識で理解することは不可能です。仏の智慧は不思議（思議すべからざるもの）だからです。しかしお釈迦様が得た仏の智慧を私たち衆生はなんとかして手に入れたい、またお釈迦様はなんとかして衆生に与えたい、その願いが言葉になったものが経文です。その経文は仏の不可思議の智慧の集大成を言葉（衆生の知識）に翻訳したものです。ですからこれを知識で読んではなりません。「信」と「行」で読まなければなりません。その時初めて、仏の智慧（いのち）は私たち一人一人のいのちと同体同心となることができるのです。私たちは「信」によってのみでしか仏の智慧を手に入れることができません。そして「行」の裏付けがあってこそ「信」は確固としたものとなるのです。

日蓮聖人の書かれた「四信五品抄」に「以信代慧（信を以て慧に代う）」の言葉があります。仏が仏の智慧によって覚知した教えを、私自身の智慧によって覚知する代わりに、仏が説いた教えを信じ行ずることによって、仏が智慧で得るのと同じ功徳を得ることができるということです。仏教は「慧（智慧）」の宗教です。お釈迦様が覚知したその「慧」を私たち衆生は「信」によって得ることができると言うこと。「慧」はお釈迦様が一人一人の「信」と「行」を鑑みて各々に与えてくださった「慧」です。画一的な「慧」ではなく、一人一人に与えられた固有の「慧」です。仏教はひとりひとりの「信行」を通してお釈迦様の「慧」を頂く宗教なのです。そして私たちとお釈迦様を繋ぐ唯一の導線が経文の言葉を受持することです。お釈迦様の言葉（経文）を信じることができなければ信仰は成立しません。言葉が「行」にならなければ、「信」を得ることができません。お釈迦様の「慧（言葉）」を「行」として実践することで「信」を自らのものとし、お釈迦様の「慧」を身に纏う喜びを受持することができます。それが私たちが仏弟子であるということです。

言葉が実践に移されなければ、その言葉はいつまで経っても行き場が定まらず虚空を彷徨うばかりです。言葉が一人一人の身体に届かなければ、私たちの世界は安住の場を奪われた言葉の墓場と化してしまうでしょう。新約聖書「ヨハネによる福音書」に「はじめにロゴスありき」とあります。創世は神の言葉（ロゴス）からはじまった。言葉はすなわち神であり、この世界の根源として神が存在する。と言う意味に解さ

れているようです。ロゴスを神の言葉であるとし、その神を絶対神と規定することの是非を仏教徒の私はひとまず置くとしても、これは本質的に「はじめに仏の智慧（言葉）ありき」と同じ事だと考えられます。私たち仏教徒はその言葉（慧）がお釈迦様の得た仏の智慧、つまり「世界はありのままにある（空）」という縁起の法則を示しているのだということに同意できるでしょう。私たちの他者とのコンタクトはまず言葉を通して始まるはずです。年初に狂言綺語に綴られる言葉についても改めて「信行一致」の言葉たり得るかと言うことを深く考えていかなければならないと思った次第です。あけましておめでとうございます。

狂言綺語百五十三・輪廻

今冬のコリーナの蓮池でくつろぐ鴨は例年にもまして多く百羽は下らず、十二月中は散歩のたびに足を止めて飽きもせず眺めていたものでした。暖かい日が続き、いつもならうっすらと表面に張る氷も無く、鴨にとっては心地よく過ごせる場所だったようです。ところが年が明けて例年の朝晩の冷え込みが襲い氷が張り始めると、いつの間にかあれほどいた鴨たちが、今は十羽ほどの群れが氷のないわずかな場所に固まって身を寄せ合うだけです。たくさんの鴨の姿が当たり前だった日々も、気候が例年に戻るといつもと同じ冬の蓮池の佇まい。つくづく私たちは自然の流れと共に生かされ順応していることを知る鴨の冬ごもりです。

「衆生」は一切の生きとし生けるもののことです。仏教では全ての衆生には仏性が備わっていると説きます。全ての生き物は人間に限らず仏になることができると言うことです。また輪廻の考えから見れば、私たち人間は鴨にも犬にも生まれ変わることがあり得るのです。つまり私が毎日のように眺めている蓮池の鴨は私の来世の姿でもあるのです。これを非科学的や、俗信であると断じることは簡単です。私自身も自分の過去世の姿がなんであり、未来世に何に生まれ変わってくるかなどと考えたことはありませんし、その心配もしていません。人間の姿であるときに善行を積まないと馬や牛に生まれ変わって人間にこき使われるかも知れないとか、蟻となって踏みつぶされるかも知れないと恐れることもありません。現代では生まれ変わりの思想は道徳的な躾に基づいて語られるか、過去世や祖先の行為が現在の不幸をもたらすという言説と組み合わされて宗教権力が民衆をコントロールし富を収奪するための詐言として利用されているかのどちらかでしょう。だから現代では輪廻思想が俗信として捨てられることはいたしかたないことなのです。それでも輪廻観が私たち東洋人の記憶の中に深く刻み込まれて現代まで伝えられていることは重い事実です。それは私たちの自然観や衆生内の人間と他者との関係性を輪廻が無意識のうちに規定しているからだと私は考えます。

人間は物理的な「生」を生きるためには他の衆生を殺しその命を頂いて食べていかなければなりません。また衆生の中で生き抜くためには自己（人間）を害する他者（自然）を駆逐し、あるいは人間を利するために飼い慣らし使役することで生を繋いできました。これは人間が他の衆生を支配する関係です。支配には自己と他者、主・客の関係性が根底にあります。この関係が継続され、それが主客転倒をもたらさない限り、支配の関係性を維持し続けることができるでしょう。しかしその関係性が崩れる恐れがあると、人間は他者の殲滅に向かいます。一方、支配の関係性を維持する事が必要とされれば保護の考え方が生まれま

す。殲滅と保護は支配を基盤として表裏一体の関係にあるのです。ところが私たちのいのちに輪廻の思想が作用するとそこには支配の思想は存在しなくなるのです。なぜならばその自己はまた他者でもあるからです。つまり生きるために鴨（他者）を捕らえて食べることは輪廻によって鴨に生まれ変わった前世の私を頂いていることかも知れないのです。物理的生を生きるために頂いたいのちは、また誰かの生を繋ぐために与えるいのちなのです。私が頂いたいのちはまた私以外の誰か（衆生）に与えられるいのちです。他者のいのちを自己の中に頂き、そのいのちを他者に与えることは、他者（鴨）は自己（来世の私）でも在るということです。輪廻観は自己と他者が同一のいのちであることを知る思想です。自他一如です。他者のいのちを頂くことは他者の仏性を私のいのちの中に頂き合一すると言うこと、仏の道を歩むことは他者のいのち（仏性）を頂き永遠のいのちとして他者にそれを与えて繋いで行くことです。たとえそれが他者の物理的な生を奪う結果になるとしても、支配の関係によって生まれたものではなく、いのちを繋ぐ（仏性を頂く）輪廻の考え方が根底にあるのです。支配ではなく他者との共棲（合一）の思想です。ですから東洋人には不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）があり、いのちを頂いたときの供養があり、慈しみがあり、感謝があるのです。

人間と衆生あるいは自然を「自己と他者」「主と客」の二項関係と見たとき、それは支配と保護の行為を生み出すことは既に述べました。しかし私たち東洋人とくに八百万の神と輪廻や仏教の考え方が習合した「信」のあり方の中で千五百年以上いのちを繋いできた日本人には、どうしても支配と保護の考え方に馴染めないところが在るのではないでしょうか。コリーナの蓮池で鴨たちの自然の流れのまま（ありのまま）に生きる姿に、私自身の何もなく何も望むことのない日々を重ね合わせて飽くことなく眺める時を過ごした後に家に戻り、テレビやネットで知るニュースは私たちはもはや日本人なのだろうかという不安を引き起こします。年初に起きた旅客機と海上保安庁機の衝突でペットが機体と共に焼失し助けられなかったことに対して、ネット上ではなぜ家族同然のペットが乗客と一緒に客室に乗ることができないで、荷物と一緒に貨物庫に入れられなければならないのか、航空会社に改善を求めるとの意見が飛び交っていました。かと思えばニュースでは繁殖犬がお役御免になったあと、面倒を見るためのコストが嵩み老後の扱いに困っている映像と共に、繁殖犬が生んだ子犬たちが専用の競り場でオークションにかけられている映像が流れていました。オークションで競り落とされた子犬を買った人はそれを家族同然と語りますが、それを産んだ繁殖犬は経済論理によって子犬を産まされ、そして用なしとなっていくのです。そこには慈愛も尊敬も感謝もありません。あるのは「かわいそうだから対策を講じなければ」との支配と保護の論理があるだけです。また南北朝時代から続く農作物の作柄を占う神社の「上げ馬神事」で最後の急坂で馬が骨折し殺処分になったことに対し動物虐待との批判が殺到し、神事の変更を余儀なくされたとのことです。以上の三つの最近の出来事に対して私はこれ以上コメントを致しません。ただ動物愛護を語る思想が生きとし生けるもの（衆生）との共棲（いのちを繋ぐ）と相反するのではないか、と言うことを考えずにはいられません。

狂言綺語百五十四・愛

秋に蒔いた大根は例年は十二月に収穫して、食べきれない分は穴を掘って土の中に生け込んで保存をしてきました。こうすれば三月の半ば頃までは美味しく食べることができます。ところが今年は長引く猛暑が収まるのを待って種を蒔いたため成長が遅れ、いつもの収穫期になってもまだ小ぶりのままでした。また今年は暖かい冬なのでそのまま植えっぱなしにして様子を見ていたら、とうとう大寒の季節を大根は畑で過ごすことになってしまいました。この時期になると土の上に出た大根の首は凍ってしまいますが、今年は身も活き活きとしています。草が枯れる頃は鳥が青物を求めて野菜の葉を食べに来るのですが、その被害にも遭わず、葉はいまだに食べられる状態です。今年のような細かい違いはあっても、季節は移ってみればいつもの通りの季節である、ということが生き物のDNAに刻み込まれているはずです。小さな変化に臨機応変に対応しつつ自然の移ろいを信じて準備を怠らないこと、それがありのままに自然と生きることなのでしょう。

今年は年初から自然災害や飛行機事故、政治不祥事などが次々に起こりました。侵略戦争は終結する兆候も見せず、民主主義と正義を標榜する国では、それをあざ笑う言動を取り続ける人物が支配者にならんばかりの勢いです。科学的、理性的に見ればこれらの出来事は個別の理由があり、全く独立した事象であるに違いありません。しかし人々の心情の中では何か今年は騒々しい、良くないことが連鎖して起こるのではないか、不幸で不安定な時代、例えば太平洋戦争直前のような時代がまたやってくるのではないかと不安を覚えている人もいるのではないでしょうか。自然災害と政治不信、民衆の生活困難はいつの時代でも繰り返し起こってきました。平和で戦争のない時代は一世紀も続いたことがあったでしょうか。日本で大地震がなかった時代は百年も続いたことがあったでしょうか。季節が規則正しく繰り返されるように、大災害も戦争も一定の周期で何度も繰り返されてきていたのです。人も自然の移ろいの中で生きているのですから、自然の要請に従って人の行動も規定されてきたはずです。「歴史は繰り返す」という言葉が人間の過去に学ばない態度や愚かさによって語られるだけではなく、宇宙の法則、自然の摂理によって必然的に導かれる人間の行為と考えるべきではないでしょうか。その法則の中で生かされていた人間が、人間にできる微調整で不幸に抵抗しあるいは順応しようとした結果が、科学であり哲学であり宗教だったのでしょう。そしてその微調整を根本的な解決策であると思い込んでしまうことが「歴史が繰り返す」ことの原因ではないでしょうか。

仏教は苦からの解放を希求する宗教です。それは四つの教え(四法印)によって成り立っています。「諸行無常(すべての物事は常ならざるもの)」「諸法無我(すべての物事は我れならざるもの)」「涅槃寂静(涅槃は安らぎの境地)」「一切皆苦(この世のすべては苦しみである)」。世界をこの四法印によって在ると観ることが仏教の全てです。誤解を恐れずに言えばその他のものは教えの枝葉、それが言い過ぎであれば「四法印」と世界を観ること、つまり「ありのままに観る」ことを獲得するための道の歩き方(仏道)を示したものです。念仏も題目も禅も仏道を歩く方法を示したものにすぎません。私たちの願いは「苦」から解放されることですから、その実現のために自分に合った方法を選び独自の道を歩めばよいだけなのです。

仏教が希求する「苦」からの解放を妨げる大きな要因に「愛」があります。キリスト教的な愛は「神があらゆるものを慈しむ。またそのような精神で、自分以外のものをかけがえのないものと思う。」という説明

がされるようですが、私がここで言う「愛」は人が自分や自分以外を愛でることとして語ります。キリスト教的な「神の愛」とは全く異なるのですが、表層面では類似する「仏の慈愛」についてと「愛」とは厳密に区別しなければなりません。さて「愛」は家族愛、人類愛、恋愛、郷土愛、愛国というような文脈で語られ、人が持つべき賞賛される感情と思われています。しかし果たしてそうでしょうか。人は一旦手に入れた愛を容易に手放すことはできないはずです。つまりこれらの愛は容易に「執着」と結びついて「愛着」となります。そしてこれが「苦」の原因となるのです。世界をありのままに観る（諸行無常）とき「愛」は普遍でも絶対でもありません。そもそも諸法無我である私には愛という属性は存在しえないはずなのに、無いもの(無常）を固定的な存在として在ると思い込む私がそこにはいるのです。実在すると思ったものを失うことは苦痛です。失わないようにあらゆる手立てを尽くすとことが執着です。しかし「愛」は自然や権力や家族や見知らぬ誰かなどの他者に容易に奪われてしまうものでもあります。「愛」を奪われないために防御や攻撃が必要になります。「愛」を失なうこと、失わないようにあらゆる手立てを尽くすこと、失うことを恐れること、いずれも「苦」です。「愛」を持つことは同時に「苦」を持つことでもあるのです。愛苦不二です。

「愛」は煩悩です。しかし人である限り「愛」を持つことは生きている証しです。人をして人たらしめているものが煩悩だからです。煩悩があるから科学があり哲学があり文化があるのです。「寂静」を得るためには「涅槃（身体の死）」に入らなければならないのならば、身体が生きている限り煩悩から逃れることはできません。人が生きていくための摂理が煩悩なのです。その煩悩を働かせる原動力のひとつが「愛」といってもよいでしょう。自然災害が自然の摂理により起こるものであるならば、それに人間の摂理(愛）は抵抗できるでしょうか。私たちは大きな災害が起こるたびに「愛」の様々な形を見せられます。自己愛、家族愛、土地や所有物や生業への愛着、そしてその「愛」に伴う様々な「苦」も見ることになります。その時私は「苦」からの解放が安らぎの道なのだからその「愛」を放棄しなさい、「愛」に執着する限りあなたは「苦」から逃れることはできません。と言うことはできるでしょうか。仏教はそれを言ったら仏教ではなくなるでしょう。その矛盾(不二)を生き続けることが仏の道だと信じて私は日々を生きていきたいと思います。

狂言綺語百五十五・同化と異化

先日久しぶりに東京に行ってきました。電車で通過することは二度ほどあったのですが一泊二日で街の中を歩いたのは、コロナ禍が始まる前年の暮れ二〇一九年の一二月以来四年三ヶ月ぶりのことです。四年間という年月はあらゆることが一変してしまうには充分な時間なのでしょう。かつて、地元の人間しか歩いていなかった商店街裏通りの古いビルにあるカフェはどこも行列ができ、若者たちが行き交う通りに一変していました。学生の頃友人が下宿していて何度か訪ねたことのあるこの商店街には、今でも住み続けている方がいるはずですが、田舎から四年ぶりに上京してきた私たち夫婦には場違いで居心地の悪い場所でした。駅周辺もビルが次々と建て替えられ、駅構内から乗り換えや地上に出る導線が全く分かりません。一八歳から四〇年間東京で暮らし通勤で使う駅以外では一番利用していたはずのこのターミナル駅周辺の

街で、私はもはや異邦人です。

変化の中に身を置いている間はその変化を意識することなく受け入れることができるのでしょう。東京に慣れ親しんだ四〇年間の変化を変化とも思わず抵抗感なく順応していたのに、たった四年の空白期間の変化には驚き、ある種の拒絶反応を感じます。私が変化を吸収する若さの柔軟性を失ってしまったから、あるいは変化につきまとう既存の価値観の崩壊を恐れていることが拒絶の理由かも知れません。自然の変化に直面すると心身がついていけずに不調のシグナルを発することがあっても、季節がジグザグに行ったり来たりしている内に心身がその変化を受け入れていきます。同様に急激な社会の環境変化もそこに身を置いている内にいつの間にか順応していくと考えれば、これからしばしば東京に出かけてその変化をジグザグに体験して変化と同化していくことも可能でしょうし、その変化を私には無縁のものとして、必要な時は異邦人となって東京を訪問し、異化する私をありのままに観ようとを試みることも可能だと知った貴重な東京滞在でした。

同化と異化を私の仏教理解を語る言葉としてふさわしいかどうかは定かではありません。辞書には、本来生物学の術語で「生物が外界から摂取した各種の物質を素材として，自己に必要な生体内物質を合成する活動を同化、異化はその逆に生体物質を分解する活動をいう。同化作用と異化作用は新陳代謝の二大局面である。」[注1]と記されています。「変化」は縁起の法則によって今、過去、未来がありのままにあることです。その変化が私と同化したときに私の中に生まれる何か、私と異化作用を起こしたときに私の中から分解される何か、私はその二つの生成と消滅の繰り返しが日々を生活し生きることではないかと考えます。諸行無常の流れの中で私たちは日々同化と異化を繰り返しながら新しいいのち(新陳代謝)を繋いでいるのでしょう。

宮沢賢治の文学は難解と思われ多様な解釈が存在します。その多くは宮沢賢治が熱心な法華経徒、日蓮主義者であること、殊に国柱会（愛国主義を宣揚し満州国建国の思想的支柱なった）のメンバーであったことの信仰背景を排除し、純粋に文字に現れたものを文学的に解釈しようとしたために起きる難解さと多様さです。西欧文学のバックボーンにキリスト教の原理と精神があることは、誰も隠しも否定することもなく、書かれ、読まれていますが、日本では宗教的なバックボーンは隠すか無視するかのどちらかではないでしょうか。日蓮宗の信徒の唯一の願いは私たちが生きている世界(娑婆）に寂光土（浄土）を築くことです。そのために社会や政治、経済、文化に積極的に関与することが信行一致なのです。宮沢賢治はその願いの実現のために詩人、童話作家、農芸化学者、農村指導者であったのです。これがかれの「行」です。そして言うまでもなく「信」は法華経の教えです。宮沢賢治の詩も童話も法華経の教えを言葉にして伝える試みです。なぜなら「信」は「信」そのものとして言葉では伝えられず、「行」によってのみ伝える(布教）ことが可能なものだからです。彼の文学は布教の言葉であり「行」そのものなのです。恐らく賢治の文学を純粋に文学として読みたい人にはこの言説は受け入れがたいでしょう。しかしかつて何度も挑戦して難解さに途中で投げ出してしまった彼の詩や童話は、今の私には平易で、容易に彼の「行」に共感し同化できるものなのです。

彼の詩集「春と修羅」の「序」、冒頭の言葉です。「わたくしといふ現象は　仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です（あらゆる透明な幽霊の複合体）　風景やみんなといつしよに　せはしくせはしく明滅しながら　いかにもたしかにともりつづける　因果交流電燈の　ひとつの青い照明です」この詩の冒

頭は難解といわれて様々な解釈がなされてきました。これは法華経の精神を根底で支える仏教の原理を詩（行）にしたものと私は読みます。「わたくしといふ現象」とは無我であるわたしです。わたしは存在（実体）ではなくわたくしという現象（無我）です。今ここにある無我のわたしを「わたくしという現象」と観ているのです。そのわたしは「仮定された有機交流電燈の　ひとつの青い照明」、つまり生成と消滅、同化と異化、プラスとマイナスの間を絶えず行き来する（縁起の法則）ことによってこの世界にいのちを灯し続けるために今ここにあるわたしです。それが「因果交流電燈の　ひとつの青い照明です」。仏教原理である「諸行無常」「諸法無我」と法華経の教えである「永遠のいのちを繋ぐ」ために今ここにあるのが「わたくしという現象」です。それは「せはしくせはしく明滅しながら（生成と消滅、同化と異化を繰り返しながら）」「ひとつの青い照明」としてこの世界を灯すのです。そのためにわたくしという現象はいまここにあるのです。

少々賢治の信行について言葉を弄しすぎたかもしれません。信行は言葉では説明不可能な不可思議の現象です。ただそれを私たちはありのままに観れば良いのです。その信行が発する灯火を我が身に照らし合わせて自分の信行を歩めばよいだけです。彼の言葉（信行）が照らし出す因果交流電燈の光がわたしと同化する、あるいは異化する、その時わたしの足下を照らし出す灯りがわたしがありのままに観た（同化し異化した）わたくしという現象なのです。

注1：コトバンク

狂言綺語百五十六・羽黒山の鐘の響き

隣町のさくら市はわたしが一八歳までを過ごした土地です。当時は氏家町の名称で人口二万、江戸時代は奥州街道の宿場町で鬼怒川を利用して東北の物資を江戸に運ぶ水運の基地でも発展した交通の要衝です。また全国に拡がる「氏家」姓の本貫地でもあります。平成の大合併で隣の喜連川町と合併してさくら市となりました。喜連川町も奥州街道にあり足利氏の末裔が喜連川藩を治める大名格の格式を持つ城下町でした。この歴史も由緒もある名前の二町が合併してできた市の名称が「さくら市」と知ってわたくしは驚愕しました。歴史も地勢的な痕跡も住む人々の生活も感情も何もかもきれいさっぱり捨て去って、桜が咲く場所なら日本中どこでも当てはまる無味乾燥無個性な名前に変わっていたのです。土地の名前はその地の形状風土歴史の蓄積です。一歩譲ってさくら市の名称を前向きに考えるなら、土地にまつわる垢を洗い流し、新たな未来に向かって歩み出そうとの決意表明とも取れるかも知れません。地方都市唯一無二の市が「さくら市」となるための荒療治、まずは無個性、白紙からの出発の意味と取るしか驚愕を抑える方法がありませんでした。

四〇年間の東京での生活を終い、ふるさとに戻って定住した所は小高い丘陵と川を隔てた隣町矢板市です。かつては急行が止まり、大企業シャープの工場があり、県の出先機関も置かれていました。当時は宇都宮と那須地方の間にある塩谷地区の中心の市でしたが、今では人口が減り続け市の中心を貫く国道四号線の片側を大きく占めたシャープの跡地は、撤退後行政の無為無策で放置されたままでした。一方さくら市の人口は四万五千、ホンダの研究所やテストコースがあり活気溢れ、気がつくと矢板市と立場の逆転が起きてしまったようです。この現象を住む人々の願いや意志の総体、または街を率いる人のリーダーシッ

プの結果と言ってしまえば、住み続けている人には酷に聞こえるかも知れません。現状を直視しないままの衰退と、荒療治でもそれが活気につながっていったことの現実を見れば「さくら市」の名称は吉と出たのかもしれません。

吉と出た名称変更で街の様相も変わった、とわたしが実感することのひとつに「さくら市ミュージアム」があります。先日三〇周年を迎えました。わたしは縁あってここの諮問機関と言えるさくら市博物館協議会の一員となっており、先日周年記念の式典に参加しました。育った当時は文化的催しも施設も皆無だったいわゆる文化不毛の地の氏家町でしたが、この規模の地方都市では分不相応にも見える充実した内容の市営ミュージアムを三〇年も運営し支え続けてきた市民の熱意と努力に、生まれ変わったさくら市の文化的土台を作るとの強い意志と希望を感じます。常設のさくら市の歴史コーナーは私が住んでいた当時は知りたくても知りようがなかった広範な歴史まで資料を提示しながら教えてくれます。ここに学んだ小中学生は強い郷土愛と誇りを抱くはずです。このような環境が授業や教科書からだけでは得られない文化や教養の基礎を養うものです。そして数年後には街の基礎体力を底上げし、街にさらなる活気をもたらすことでしょう。

さくら市ミュージアムは常設の歴史展示だけでなく企画展も充実しています。毎年行われる「春の院展」、また三〇周年記念式典に続いて開催された「平山郁夫展」は今回で七回目になります。大都市に行かなければ見ることのできない展覧会が毎年のように開催されています。今回の平山郁夫展は絵画だけでなく、釈迦の一生を描いた素描や仏教遺産の展示でシルクロードを通って日本に伝来した仏教の道を辿る、とても企画力のある展覧会でした。特に平山夫妻が敦煌やガンダーラなどで収集した仏像などはイスラム原理勢力に破壊された仏教遺産を少しでも後世に伝えたいと言う強い願いの感じられる収集品です。平山郁夫画伯が自ら描くことで、また仏教遺産を守ることで、お釈迦様の永遠のいのちを繋いでいるのです。数え切れない無名の人々のいのちを通してわたくしが今、永遠のいのちに触れることができることを実感する展覧会でした。

シルクロードに残された仏教遺産はイスラム原理主義者に次々に破壊されてきました。二〇〇一年に世界遺産のバーミヤン石仏が破壊された映像はショッキングなものです。私たちには世界遺産（文化財）だと思っても、イスラム教にとっては邪教の偶像崇拝の象徴です。仏教を除けば本来宗教は排他的で攻撃的なものです。他民族、他宗教との接触が増えるに従って排斥と改宗の方法だけでは社会秩序が保たれなくなります。そこで政教分離、法律、倫理、文化、教育というような概念が生まれ、異宗教同士の共存が可能になってきました。協調と平和の実現です。しかしひとたびそのバランスが崩れ政治的な動機が入ると戦争や破壊が始まるでしょう。宗教が文化であることは不可能なのです。宗教は理性によって構成されてはいないからです。

宗教の攻撃性、排他性は一神教を信仰する民族だけではありません。日本でも廃仏毀釈という野蛮で暴力的な排斥が明治維新に起きました。仏教は日本伝来より、土俗の宗教である八百万の神と習合して日本独自の神仏習合の信仰が江戸時代まで続いてきました。神域の神宮寺建設、神前の読経、神へ菩薩号の授与、阿弥陀如来の化身が八幡神と説く本地垂迹説も起こりました。廃仏毀釈が起こるまではカミとホトケは一体となって日本人の信仰を支え、それが日本独自の文化と教養の土台となっていました。ところが明治維新に薩長の文化破壊者たちが天皇の絶対権力の確立の意図に基づき、神道の国教化政策を断行しまし

た。神仏分離令です。この法律を根拠に国学者などに先導された民衆は各地で廃仏毀釈の蛮行を働いたのです。仏堂、仏像、仏具、経巻の破壊です。現在その理不尽な破壊運動をくぐり抜け、文化財として寺や仏像などを見ることができるのは、仏のいのちを今に繋ごうと守ってくれた無名の人々のおかげです。誰もが破壊者になり得るのが私たちである一方、遥かインドからの永遠のいのちを繋ぎ続けたいと願い行うのも私たちです。信仰は理性ではなく人々の願いの軌跡です。近くの羽黒山に登ると、頂上の羽黒山神社の鐘楼で鐘を打つ人々がいます。神社で梵鐘。廃仏毀釈を乗り越えてここにも私たちの願いを響かせる神仏習合のすがたがあります。

狂言綺語百五十七・突端

岬の突端にはほぼ例外なく灯台があります。日本にある灯台の総数は分かりませんが、一六基が登ることのできる灯台とのこと、全てに登ることを目的に灯台巡りをしている人も多いようですが、わたしは灯台に行くことではなく岬の突端に立つことが目的なので、まだ五基を登っただけです。灯台は海上交通の目印になっているため、突端を目指せば灯台まで行くことになります。そこで可能ならば登り無理であれば灯台と一緒に写真を取ることが旅の楽しみのひとつです。突端は大概は断崖絶壁の上にあり、その先は大海原が広がっています。波が激しく打ちつけ風が吹きすさぶ荒々しい場所ですが、なぜか神々しい気持ちになります。

突端の向こうには瀬戸内海でもなければ海と地平線があるだけでしょう。海原の向こうに何があるかと船をこぎ出した人が古来より絶えなかった結果、海を道にして人や物が行き交うことができたのです。ましてや突端の向こうに陸地が見えたならば、泳いでも行ってみたいと思うのが人情のような気がします。二月に本州の北端竜飛岬に立ったとき、目と鼻の先に北海道の陸地が連なっている光景は、ここから津軽海峡を渡って蝦夷地に向かった人々の長きにわたる歴史と人々の複雑な感情をわたしに想起させました。本州を追われて絶望のままに渡った人々もいれば、新天地での新たな希望を抱いて勇躍海峡に船をこぎ出した人もいたでしょう。海峡の先にある松前の街は江戸時代は松前藩が置かれ、アイヌとの交易とアイヌ人支配の根拠地となった場所です。またロシアの南下政策に対する江戸幕府の前線基地でもありました。ここから日本人は北海道を経由しオホーツク海を押し渡り樺太の地まで版図拡げ、そして今では納沙布岬が海原を挟んでロシアの実効支配する北方領土を渡るに渡れぬ海として臨まざるを得ない突端となってしまっています。

突端には侵略や冒険、逃走や開拓の残影が今でも漂っていると考えると、私が突端に魅かれる気持ちが少しは説明可能なのかもしれません。竜飛岬は長年のアイヌ侵略と表裏である大和民族の開拓の意思が交錯し前進させた場所なのでしょう。私は結果としての侵略や支配の是非について語るすべは持ってはいませんし、それを断罪も肯定もするつもりはありません。ただそこにも、ひとりひとりの願いと意思の総体が永遠のいのちの形で突端に繋がれていることを強く感じずにはいられません。歴史や伝承は当時を生きた人々の個々のありようが、絶望や希望を込めて総体として語り継がれてきたものと考えます。それは文献や遺跡が客観的な事実として現れたものを真実として認定する学術的方法論ではなく、信仰や伝説など

に形を変えて、支配者の意思ではなく、毎日をそこに生きる人々が永遠のいのちを繋ぐためにここにある事実と考えます。

竜飛岬から少し南下した三厩の街に義経寺があります。源義経は奥州平泉の衣川で自刃したといわれていますが、源頼朝に追われ、龍飛崎まで逃げて荒れ狂う海を前に観音像に祈ると、三頭の龍馬が現れ、海峡を渡ることができたという伝説が残る寺であります。この北行伝説の延長として幕末以降の近代に登場したのが、義経が蝦夷地から海を越えて大陸へ渡り、ジンギスカンになったとする伝説です。ここまでくると荒唐無稽な伝承でしょうから、その真贋を詮索することは無意味だと思いますが、私はそのような伝承が生まれ伝えられていることに、人々の何らかの願いが込められているのではないかと考えます。義経は衣川で物理的な死を遂げた後に、永遠のいのちとなって人々の中に生き続けることを人々が望んだからの伝承なのです。

竜飛岬を渡って蝦夷地に布教に赴いたと伝えられる日蓮聖人の高弟に日持上人がいます。東北や函館・樺太などには、日持にまつわる伝説が残っています。日持が北海道に渡ったとき、それまで見たことも無い魚が大漁に採れた。「法華の坊さん」が来たからということで、その魚を「ホッケ」と呼ぶようになったという伝説や、アイヌ語で大和民族を「シャモ」と呼ぶのは、日持が自らを「沙門」と名乗ったことに由来するという、これらの真偽を確かめようのない伝説があります。恐らくこれらは日持上人というひとりの高名な僧に仮託して、無名の僧たちが各々の布教を皆で繋いで行こうという願いと意志の集約した「行い」の形なのではないかと思います。未踏の土地に向かうときにはその人の意志と覚悟が錐のように鋭利でなければその地を切り開くことはできないでしょう。竜飛岬は錐の先端ように北海道に向かって鋭利に突端を向けています。ここから未踏の地に向かった無名の数多くの義経や日持たちは、実在の義経や日持上人に自らの行いを仮託して、彼らの行の成就のためにそれらの伝説（永遠のいのち）を繋いできたのです。

突端に立つものの覚悟と困難を表したお釈迦様と弟子の富楼那とのやりとりが原始仏典に残っています。富楼那が「お釈迦様、私はスナーパランタで布教したいと思っています」「そこの人々は攻撃的な面があると聞いている。その地の人々があなたを罵ってきたら、どうするつもりですか?」「もし私を罵ってきたら、この地の人々は良い人々だ、私を殴ったりしないからと思うでしょう」「ではその人々が殴ってきたら?」「この地の人々は良い人々だ、私を棒で殴ったりしないと思うでしょう」（中略）「では刀で切りつけられたら?」「この地の人々は良い人々だ、私を刀で殺したりしないと思うでしょう」「では殺されたら?」「この世界には刀で自分の命を絶つ人もいる。誰かが自分を殺してくれないかと願う人もいる。彼らは私が願わなくても命を絶ってくれた、と私は思うでしょう」お釈迦様は富楼那の覚悟が揺るぎないものと確信し、布教の許可を出したと言うことです。突端に立つと言うこと、そしてその先の世界（未踏の地）に足を踏み入れることの穏やかにして揺るぎのない覚悟が富楼那の言葉にあります。今もここで私が富楼那の覚悟を受け取ることができるのは、今に至るまで無名無数の富楼那たちが繋いできてくれた永遠のいのち（覚悟）のおかげです。本州の突端、竜飛岬に立ってその先の世界を目指した無名無数の義経や日持や富楼那たちのいのちが、津軽海峡冬景色の中、わたしのからだを吹き抜けていきました。合掌。

狂言綺語百五十八・菩提梯

先日身延山にお参りに行ってまいりました。前回がそろそろコロナ禍も収束に向かう一昨年の七月、七面山への登詣も兼ねての参詣でした。梅雨明けのとても蒸し暑い日で途中蛭に血を吸われ、暑さに疲労がたまり七面山奥の院まではなんとかたどり着きましたが、山頂行は断念しました。今回はその年の晩秋に発病し緊急手術を受けてから初めての参詣となります。一刻を争う手術を施され九死に一生を得たのも、日頃からの信心と法華経のご加護のお陰だったと考えることもできますが、信心が足らなかったから発病したのであり、生還後は一層の信心に励まなければと考えることもできます。信心の功徳はどちらにも取ることはできますが、信心ひとつで体のありようが根本的に変わることはないでしょう。しかし心持ち次第で、体のありようもそれに随ってくると考えれば何事もプラス思考に考えた方が安らぎの処に近づくのではないでしょうか。そこでわたしは死の淵からの生還は信心のお陰と信じて、遅ればせながらの身延山へお礼参りです。

ところが、わざわざお礼参りと気張らなくても身延山は以前と変わらぬ様で私を迎えてくれました。身延山が、以前のようにいつものようにありのままの姿で私を迎えてくれたのは、信心が私のありようを変えたのではなく、信心が私をありのままの私でいること望んでいるからだったのです。私の心の持ちようと体の状態が変ったと私が勝手に思い込んでいたようですが、殊更に発病前と発病後を信心と関係づける必要はまったくありませんでした。自然や建物や僧侶や仏像など身延山を形作る森羅万象は少しずつ時の流れに随って存在の姿を変えているはずですが、身延山久遠寺の三門や本堂、祭られている本尊や日蓮聖人像のありようが変わることはありません。物理的な変化は時がしからしめるものですが、「信（教え）」は常住普遍ありのままに「在る」ことを、身延山は改めて私に教えてくれました。私たちの日常は諸行無常、諸法無我と心得ていても、日々をありのままに観てありのままに過ごすことの困難さにかまけて、「信」を朝勤や法要などの形式に還元することだけで良しとしてしまっていることが私の毎日だったのではないかと、身延山は私に教えてくれました。「信」は何かのためでも、誰かのためでもなく、何かをもたらすことも、何かを奪うこともなく、身延山がそこにあるようにただそこに「在る」こと、それが「信（教え）」なのです。

身延山の三門と本堂を一直線に結ぶ急勾配の二八七段の石段は菩提梯と名づけられています。菩提梯とは「覚りに至る階段」の意味。この石段を登ると、涅槃とされる本堂に到着することができます。今では車で本堂脇の駐車場まで行ってしまうことがほとんどですが、今回は初心に帰って、久しぶりに菩提梯に挑戦しました。早朝の朝勤に参加することも大切ですが、体を使い息を切らし汗をかいて菩提梯を登ることで、心身の「信」をリフレッシュすることが出来たのではないかと思います。また身延山に私の「信」が「在る」ことを実感することができ、日々の信行が菩提梯を登る日々そのものであることも教えてくれました。

菩提はサンスクリット語のbodi（ボーディ）の音写です。ボーディはブッドフbudh（目覚める）からつくられた名詞で、真理に対する目覚め、すなわち悟りを表します。仏陀（ブッダ・buddha）は「目覚めた人、覚者」という意味です。つまりお釈迦様を仏陀と呼び仏さまと呼ぶのは彼が真理に目覚めた人だからです。インドでは古来から存する、真理を悟った人の意であり真理の創造者ではありません。本来の意味では仏

陀は多数存在することが出来るのです。過去には仏陀と呼ばれた人はジャイナ教の開祖マハービーラなどがいたようですが、今では、お釈迦さまをさす固有名詞のようになっています。しかしここで重要なことは仏陀が真理に目覚めた人であるということであり、真理を創造した人ではないということです。つまり真理は常にここに「在る」のです。ただそれを私たちは観る（目覚める）ことが出来ないままでいるのです。唯一の真理に目覚めた人仏陀が観たものは、ありのままの世界です。つまり諸行無常、諸法無我です。それは諸法皆空、つまりすべて存在（色）するものには実体（空）がないという真理です。色即是空、空即是色です。空を有と観てしまうから私たちには「苦」がつきまとうのです。これが一切皆苦です。そして目覚めることが出来れば苦から解放され安らぎの処に辿り着くことが出来るのです。これが涅槃寂静です。四法印といわれる、「諸行無常、諸法無我、一切皆苦、涅槃寂静」が仏教の教えの全てです。真理は既に存在しているので、私たちはその真理に目覚めればよいだけです。法華経がすべての人が仏陀になることが出来ると説いたのは、このことです。真理に目覚めるためには世界をありのままに観ることです。私たちはお釈迦さまから真理に目覚める方法を「教え」として与えられました。「信」だけではただ知識として仏教を理解したに過ぎません。「信」のままに日々を生きることが「行」です。信行が一致して初めて仏教の知識は仏の「智慧」となります。仏陀に完成形も終着もありません。仏の智慧を自分自身に纏うために信行の日々を生き続けることが目覚めた人（仏陀）になり続けることなのです。それが菩提梯を登り続けることなのです。

琉游舎では先日涅槃会の法要を初めて催しました。お釈迦様の亡くなられた日に行う法要です。法要は道場にお迎えした仏さまに、各々の本土にお帰りください、そして常に私たちをお守りくださいと願う「奉送」の声明で終えるのが常でしたが、涅槃会に限っては最後に「七佛通戒偈」を唱えます。「諸悪莫作　諸善奉行　自浄其意　是諸仏教（諸々の悪を作すことなく、諸々の善を行い、自ら其の意を浄くする、これが諸々の仏の教えなり）」これはお釈迦様を含む七人の仏（過去七仏）が共通して説いた教えを一つにまとめたとされている偈です。教えを知識として喧伝してきた自称お釈迦様の弟子たちの言葉と異なり、ここには教えの原点、仏の智慧があります。誰にでも理解し自分の信行に替えられる教えです。菩提梯を登る信行の毎日にこの偈を私の心身に当て続けることのできる日々を願って、私は身延山からの帰途につきました。

狂言綺語百五十九・個に帰る

現代は多死社会に入ったと言われています。多死社会とは高齢者の増加により死亡者数が非常に多くなり、人口が少なくなっていく社会のことで、超高齢化社会の次に訪れる社会と位置づけられています。人口の減少につれ人生の最終段階では今まで家族が担ってきた病院へ連れていくことや、介護などの日常生活支援、施設に入る際の身元保証や経済支援、葬儀や家財の片付けなどの死後対応が必要になります。しかし現在、高齢者の独居、身寄りのない人が増えています。子供も遠くに住み親戚づきあいも希薄になる中、多死社会では、家族に頼れない高齢者は、安心して死を迎えることができなくなるでしょう。親の老後は子供が見るという家族制度が崩壊し、今では高齢の親が子供の面倒を見ているという逆転現象も起こ

っています。

僧侶は生と死を繋ぐ媒介者です。寺があり墓があり檀家と菩提寺の関係が先祖と子孫との血縁の維持に大きな役割を果たしてきましたが、今や自分の墓は自分で作り自分たちの始末も自分で行わなければならない時代です。僧侶や寺は家族制度の関係の中に位置づけられていたため、その基盤が崩壊すると本来の僧侶の役割を考えようとせず右往左往するだけです。私たちの生と死を繋ぐに今まで不可欠であった家族と菩提寺が完全に機能不全に陥っている中、問われているのは各々の僧侶が生と死の媒介者として何ができるかを考え実践することで、私たちのいのちを次に永遠のいのちとして繋ぐ役割を担えるかという問いに行動を通して応えることです。私は今、僧侶が自由に本来の宗教者としての役割を担うチャンスが来たのではないかと考えます。家族制度の中に閉じ込められていた寺と僧侶が、その窮屈な関係から脱することで純粋な意味で生と死を繋ぐ役目を与えられると考えるからです。言うまでもなくこの役目は私たちが良き生を送ることで、心安らかに良き死を迎えることができると言うこと、そして残されたもの（血縁に限らず）が、死者のいのちを受け取ってそれを永遠のいのちとして次に繋げようとすること、これが生と死の媒介者の役目です。

私は僧侶となって私的な寺院琉游舎を立ち上げました。日蓮宗の僧侶の資格を持ちながら宗門に属さない、あくまでも独立した宗教施設です。ここは当初からあらゆる宗教も宗派の人にも開かれた寺院であることを標榜しています。ただ弔いや供養は日蓮宗の様式に則った方法で行いますとお話ししています。その中で宗教と無縁で自分の宗派も知らなかった人でも、大切な方をなくした場合にはせめて経を上げて送り出したいと願う人がほとんどだということを知りました。当初私の役割は亡くなった人を弔い、経を唱えて引導を渡す役目に過ぎませんでした。生と死の媒介者とはいえ、実質的には死を媒介にして残された人の「生」と亡くなられた人の「いのち」を繋ぐことを自称する役割でしかなかったのです。しかしこれは宗教側の理屈です。なぜならば死者は自分のいのちが永遠のいのちとして繋がるということを生前に知ることができないからです。だから死者にはその実感と確信がないまま亡くなられていくしかなかったのです。私が志向していたことは宗教側の都合の良い作り話だと言われても仕方がないでしょう。良き生であったと思えることで良き死を迎えることができるようになることが、生きるということであるならば、生きること自体が死を見つめること、死に向かって生きることではないでしょうか。ならば僧侶は「生」から「死」への因縁縁起の過程をともに歩む伴走者でなければ、生死を繋ぐ媒介者と自称することはできないはずです。しかし私が関わる全ての方の生の伴走者となることは不可能です。どうやら出口のない洞穴に入り込んでしまったようです。

ここで私は自らに提案をいたします。自らの死を家族や親族や社会との関係の中で考えるという志向を一回断ち切って、あくまでも自分の死は自分だけの個人的なものだと考えることです。人間は産まれてくるとき「おぎゃー」という声をあげて私はここに「在る」と宣言し生まれてくるのでしょう。丸裸で何の属性も身に着けず「個」と生まれた私の、親子や社会関係の始まりです。生きるということは「個」が「社会」となることなのでしょう。それは「おぎゃー」というコミュニケーションに始まり数多の声を発し続けてコミュニケーションを取り続けていくことなのです。そして声を発しなくなる時、私はここには「無い」と宣言しコミュニケーションのない無言の世界に入るのです。「おぎゃー」に始まった有声の生が無声の死を迎えた時、関係性の世界から個の世界に私は帰っていくのです。死は個に帰ることと考えることが

出来たならば、良き死を迎えるためによき生をどう生きるかも自ずからありのままに観えてくるのではないでしょうか。

多死社会に入った時、死は否応なく個であること、孤独であることを私は知らされることになるはずなのです。が、しかし死者となってしまった私は多死社会の死（孤独）を実感することはできないでしょう。死者は何も実感することのできない無の世界に帰ってしまうからです。ただ何も関係ない人たちが私の死を多死社会の死（孤独死）として知る他人事です。私の死が人に残すものは永遠のいのちどころか、遺体と不要な遺品だけとなってしまうに違いありません。私の死を不要としない人たちが妻や子を含めているに違いない、私の死が残された人たちに意味のあるものであるに違いないと考えることは、未だ死者でない私の生者の傲りです。良き死を迎えることは、再び個に戻ることに向かって今まで社会に纏わされたあるいは纏わざるを得なかった属性をゆっくり脱ぎ捨てていくことではないでしょうか。それが自らの生を良く生きてきたとの実感であり、何の憂いも心配もなく残された人にグッバイと手を振って個に帰ることだと思います。

妻が私の死を覚悟した時からはや一年半が経とうとします。その間に私は自らが纏ってきた属性を脱ぎ捨てるどころか新たにまた数枚纏ってきたに違いありません。肉体が死から遠ざかると個に戻ることはかように困難なことです。まず出来そうなことから，例えば遺品や遺産の目録と行先の整理などからはじめるのはどうでしょう。個に帰るための歩みが、今を良く生きることを強固にすると信じてまずは今できることから。

狂言綺語百六十・順応

朝小鳥の鳴き声で目を覚す季節となりました。小鳥は明るくなるとさえずり始めるので、彼岸から夏至に向かってどんどん日の出が早くなっていくこれからは、今の五時が早くなり四時頃には小鳥に起こされてしまうかと思えばそうでもなく、小鳥の声にいつの間にか慣れてしまい目覚める時間は一定になるはずです。そういえば昔線路脇に住んでいたときのこと、最初は始発電車の音で起こされましたが、三日もすれば慣れて目覚ましをかけなければ起きることができなくなったことを思い出します。一日中車が激しく行き交う幹線道路沿いに住んだこともありますが、どんなに騒音が激しくても眠くなれば眠り、起きる時間になれば起きることができるようになります。環境に順応できる能力は人の生きる知恵のひとつなのかも知れません。

環境に順応していくための時間も負担も人それぞれです。私は環境が変わってもその変化にあまりストレスを感じることなく、精神的にも肉体的にもアレルギーを起こさないで、変化に対応できてきたのではないかと思っています。逆に自ら環境の変化を求めていくようなところがあるようで、定年前に広告代理店を辞めて、東京から自然豊かな矢板に越して僧侶になったことも、理屈をつければいくらでもつけようがありますが、煎じ詰めれば同じ環境に安閑と安住することが苦手だった言うことかも知れません。どっしりと大地に根を下ろして土地を開墾しゼロから作物を育て上げる農耕民族のタイプよりは、新しいもの（獲物）を求めて、土地から土地へと移動し続ける狩猟民族のDNAが色濃いのでしょう。このタイプは何

かひとつのことをじっくり作り上げることが苦手で、技術者や研究職には向かないことは、私自身が充分承知しています。どんな環境も受け入れ、拒絶しない性格にふさわしいだろうと、私を十五年来のクリエーティブ職（広告技術者）から営業職へと異動をさせた当時の上司は、私の適性をよく見抜いていたと今更ながら感心します。

私は今まで狂言綺語の中で、仏の道を歩むことはありのままに観てありのままに行うこと、その道を歩み続けることが安らぎの処（涅槃・悟り）へ向かう行いそのものであり、それが仏になることだと申し上げてきました。またそれは何か特別な難行苦行があるわけではなく、社会生活の中での実践（行）でなければならず、毎日を日々生きることが仏の道を歩むことだと申し上げてきました。つまり仏の道を歩むということは「ありのままに日々を生きる」と言うことです。仏教には数多の仏の教え（経）が存在し、その教えに依拠した数多くの宗教社会（教団・宗派）が存在します。しかしそれは仏教の教えの本質である、諸行無常、諸法無我、涅槃寂静、一切皆苦の四法印から派生したそれぞれの枝葉の部分です。私は今あるそれらの枝葉の部分から仏の道を歩むのではなく、今現在の私の「生」に必然となる教えの本質から始まる仏の道を歩まなければなりません。私自身の仏の道は四法印から今この瞬間も成長し伸び続ける私の枝葉です。その枝葉が私の「ありのままに生きる」ということです。私は人それぞれにありのままがあると思っています。人それぞれのありのままがあれば人それぞれの仏の道があります。つまり人それぞれの「生きる」があるのです。仏の道は宗教社会の中ではなく、「生」を生きる私たちの生活社会の中にあります。人には各々の生活があるように、各々の仏の道があります。仏教の究極が個人的なものであると考える理由はこのことです。

私はどちらかというといろいろなものに順応性がある方だと前半で述べてきました。私の考える仏の道は一見すると既存の宗教社会に順応していない異端の道に見えるかも知れません。それは私がかつてお釈迦様がこう語ったや日蓮聖人がこう述べたと言うことに全く重きを置いていないからなのでしょう。なぜならそれらは彼らの時代の社会状況と個人の経験と思惟によって述べられた言葉だからです。私は彼らの言葉に依るのではなく、実践した「行」とその原動力となった「信」を私の生きる社会と私の経験と知識に立脚して我が身に引き当て歩むことが私の仏の道だと考えます。そしてこれが私の仏教者としての順応のあり方です。

「順応」はある環境に「慣れる」に従ってそこに馴染み習熟することですから、社会生活だけでなくある特定社会（党派・宗派・会社など）の中で自分なりの場所を確保するには重要な能力でしょう。しかし「慣れる」ことに従順で盲目的になると「慣れる」が「馴れる」に容易に変化し馴れ合いの関係が生じるのではないでしょうか。そこからはなあなあの無批判な集団意識が生まれ、ひいては社会と個人が相互依存や支配関係となり、利害や権力構造に組み込まれてしまう危険性があります。社会と個人が馴れ馴れしく振る舞えばその社会の外にいる人には、そこは閉鎖的で保守的な所に見えるでしょう。実際そこに馴れることができない人や馴れたくない人はその社会から排除されてしまうはずです。社会の分断、二分化の始まりです。今の日本の社会は政治や経済だけでなくあらゆることが二者択一、賛成か反対か、敵か味方かの二つのカテゴリーに分断されてしまっているような気がします。それはある社会に同化して自らをそこに没入させてしまうことの居心地の良さに安住してしまえば、何も考えず、何も行わずに日々を過ごすことが可能だからなのでしょう。しかしそれは「順応」ではなく「従属」です。ありのままに生きることの極北に

ある毎日です。

ありのままに観ることは自分の五感と精神を総動員して観ることです。他者のそれに追随することではありません。観る私が全てに渡って自由でなければ、ありのままに観ることができません。それを法華経観世音菩薩普門品第二五では「遊此娑婆世界（この娑婆世界を自由に遊ぶ）」と説いています。そこではあらゆる社会の現実に順応して菩薩の道を実践した姿が書かれています。仏教が社会の環境や境遇に順応して、日蓮聖人の願いである娑婆即寂光土（私たちの生活の場がそのまま安らぎのところ）の実現に向かって歩き続けるためには、あらゆる社会を自由に「遊ぶ」順応の精神から歩みを始めなければならないのではないかと、早朝の小鳥のさえずりを聞きながらあらためて思い至った次第です。

狂言綺語百六十一・寺子屋

三重県伊賀市のケーブルテレビ番組「伊賀びと」で、私の法友[注1]が開いている寺子屋の様子が放映され、その模様がFacebookにアップされていたので私も拝見することが出来ました。彼は四百年続く浄土真宗高田派の寺の副住職で四年前までは横浜で小学校の教師をやっていた方です。教師を辞めてふるさとの伊賀市に戻ると決めたとき私の会社時代の同僚から私のことを聞き及んで、わざわざ話を聞きたいと琉游舎までやってきてくれました。私もまだ琉游舎を開いて二年半あまり、試行錯誤の状態だったので、彼に何か参考になるようなことを具体的に話したわけではないはずですが、琉游舎の理念「老若男女誰もが集える『場』ー集いの場、祈りの場、学びの場、稽古の場、語りの場、瞑想の場ーすべての人に開かれたオープンコミュニケーションスペース」に恐らく彼は共鳴してくれたのだと思います。その後も引っ越し直前にまた訪ねてきてくれたり、帰郷後もネットを通して会話を積み重ねて、毎月の「無量寿経」のオンライン読書会も主催し、僧侶としての信行の道をお互い確認し合いながら今日に至っています。そして今回のドキュメンタリー映像で知った、四年間伊賀の自坊大仙寺で実践している寺子屋活動に、距離は遠く離れ宗派は異なれど、今この時代に私たちが必要としている仏の道を共に歩く、一人の善知識[注1]の姿を見ることができました。

寺子屋の活動について彼は「幸せな子供時代を体験できる場所にしたい。自分たちで価値を作ることの出来る存在であることを、自ら体験的に学べると言うことを大切にしていきたい」と語り、実際勉強も遊びもコミュニケーションも一緒になって同じ目線で楽しみ遊び学び合っている姿は、法華経観世音菩薩普門品第二五に説かれた「遊此娑婆世界（この娑婆世界を自由に遊ぶ）」の菩薩の姿と見事に重なり合います。仏道は日常の中にあると言うことがここに如実に示されています。因みに彼は寺子屋では子供たちから先生とは呼ばれず名前で真人くんと呼ばれています。子供も真人くんも意識することなくごく自然に同じ実践の道、を歩んでいるように私には観ることができるのです。これが私の信じる仏の道の歩むべき姿です。寺の境内は子供たちの声と足跡に溢れています。住職である父上は「翌日の私の仕事のほとんどは境内の掃除に費やされる」と半ば嬉しそうにこぼしていました。遊ぶことは自由になること、そして学ぶこと、他者を思いやること、互いを幸せにし穏やかにすること、そこには狭いながらも安らぎの場所（涅槃）がありました。

映像の中では寺子屋卒業生の高校生が中学生の進路相談もしていました。皆率直に遠慮なく聞きたいこと伝えたいことを話している姿は、親や教師などの大人を通しての相談会では困難な同世代の身近にある体験の共有があるので、少し年上の先輩の言葉に素直に真剣に耳を傾けることが出来ているようでした。最近、放課後子供同士が遊んだり通学班や子供会など学年の異なる子供の交流（学びの場）が見受けられなくなったと感じます。親や教師を介してでは、子供がその年代で共有する価値観と経験による社会性は身につかないでしょう。大人を介した価値観と経験はどこまで行っても既存の価値観のコピーにしか過ぎません。日本が平成になってからずっと停滞を続けているように見えるのは、子供の世界が親や教師の大人のフィルターを通して作られ、子供独自の中から自然と作られる社会性精神性が希薄となったからではないかと考えます。大人たちの価値観を次の世代に強制し続けてきた結果の停滞と考えることは妄言に過ぎないことでしょうか。

真人くんと子供たちの「游此娑婆世界」は寺の境内と堂内です。そこには平等で自由な世界があります。先生と生徒ではなく「くんやちゃん」の関係です。そこで身につけた「自分たちで価値を作ることのできる存在だ」との自信は彼らが世界の枠を外へと拡げるに従って、幾度となく揺らぎ失いかけることがあるでしょう。それが大人になると言うことであり、社会的存在に成長していく過程では避けて通れないことです。そんな時戻ってくる場所にこの寺子屋がなってくれればいいと彼は語ります。それを「揺れている時に掴むつり革のような場所になりたい」と表現しています。つり革は揺れているときに必要なものですが電車が目的地に着いたら揺れは止まり下りることになります。つり革は心の揺れが収まれば手を離す揺れの一時避難所です。そこからまた彼らの住むべき社会に戻って行くための心身を再生するところです。ところで本来最強の一時避難所である親のところはどうでしょうか。そこが「帰ることの出来る場所」であればよいのですが「永遠の避難所」になってはいなか、昨今の家族関係を見るにつけ心配になってしまいます。

宗教が生活全てを規定してしまうことや、宗教を四六時中意識する生活を「宗教的生活」というならば、それは仏教の本質を見誤ることになるでしょう。私は宗教を宗教として意識しない毎日の当たり前の日々の中に、本来の宗教生活があると考えます。他の宗教については「宗教的生活」が何を希求しているのか私は理解していませんが、私の求める仏教は心穏やかに何事にも囚われない日々を望み願い行うことです。だから私は寺子屋で自由に学ぶ子供たちと真人くんに真の宗教生活を観ることができるのです。宗教で規定される教え（法）や戒律に縛られることなくこの世界を游戯（游此娑婆世界）し、そこで毎日が豊かで楽しく心安らかな日々となるように生活することが私の仏教生活です。教え（法）はその仏教生活を享受するためのひとつのアプローチの仕方と考えます。なぜならお釈迦様の唯一の願い（目的）は私たちを安らぎの処（涅槃）に導き常住してもらいたいということだからです。経に書かれた教えといわれるものは、目的のための手段を示している「仏教的教え」です。真の宗教生活は全ての「宗教的教え」から自由になることです。

伊賀から今度は寺で開かれた音楽会の映像が届きました。ピアノとフルートとオカリナが堂内を埋める満員の観客に響き渡ります。みほとけの声、法音です。5月の半ばにはジャズのコンサートが開かれるようです。宗教生活を送る真人くんが作る「場」に帰依します。南無。

注1：仏法の友、注2：人々を仏の道へ誘い導く人。

狂言綺語百六十二・日常と非常

先日久しぶりの大学クラス会で東京に出かけてきました。入学時に出会った同級生の卒業後の進路はバラバラですが、少人数で連絡を取り合っている内に、自然発生的に二〇名ほどの仲間が集まり、五〇歳を過ぎてからは二年に一回ほど集まって旧交を温めてきました。今回はコロナ禍の中断があっての久しぶりの再会となり、一四名が集まりました。六〇歳前に働くことをやめて、育った地元に戻って気ままな毎日を過ごしているのは私だけで、六五歳になってもまだ皆さん非常勤や顧問などの現役で都会で働いている人ばかりでした。高齢者と呼ばれ年金も支給される年齢境界線の六五歳を突破した人たちの集まりは、二時間飲み放題の若者だらけの店でも場違いとは思えないほど飲んで食べて語り合い、二次会まで突入しホテルに戻ったときは十一時半になってしまいました。いつもなら九時に寝ている私には、完全に非日常体験となった東京行でした。

たまに非日常体験をすると見えてくることがあります。卑近な例ですが、街の変化には東京に行く度に驚かされます。今年二月には新しくなった渋谷駅で危うく迷子になりかけました。今回の会場の神楽坂はかつては大人の街で、芸者さんと隠れた名店のある街の印象があったのですが、今では若者で店も歩道も溢れています。物価高も身にしみました。宇都宮線の普通車グリーン券がいつの間にか倍近くに値上がりしていたのです。みどりの窓口の縮小と併せて民営化がもたらす利益至上主義の結果なので、民営化を認めた国民に最終的に累が及ぶことについては甘んじて受けるしかないのでしょう。既にじわじわと押し寄せている郵政民営化の影響も「しょうがないな」から「不便！」というレベルになるのは時間の問題でしょう。また四年前のクラス会で泊った都内のビジネスホテルは七千円でしたが、今回都内で泊まれるところは軒並み一万四千円以上だったので、荒川を渡った埼玉県の川口に一万円で宿泊しました。四年間で宿泊費は驚異的な上昇です。もちろん年金は増えているわけでもなく給料もさほど増えているとは思えません。日々を栃木の田舎でのんびりと暮らして、日常を如何に心安らかに過ごすかを心がけている身にはこの非日常体験（あくまでも私にとっての）はかなりショッキングなことでした。今回の非日常体験で得た私の感慨は「嗚呼、日本は貧乏な国になったな！」です。政治家や経済学者に言わせるとお門違いな感慨かも知れません。「街はどんどん生まれ変わり人もそこかしこに溢れかえっているではないか、どこが貧乏なんだ」と。しかし同額で購えたものが半分の価値のものになっているのですから、貧乏になったとの庶民感情は偽りのないものでしょう。

現在は過去の結果です。現在は未来の原因です。これを仏教の世界観である縁起の法則を適用してみると、私たちの今も未来もすんなりと理解と予測ができるのです。現象的事物はすべて因（直接原因）と縁（間接原因）との二種の原因が働いて生ずるとみる仏教独自のこの教説についてお釈迦様は「縁起をみる者は法（真理）をみ，法をみる者は縁起をみる」また「これ有るが故にかれ有り。これ無きが故にかれ無し」あるいは「これ生ずるが故にかれ生ず。これ滅するが故にかれ滅す」と語っています。現象の生滅も有無もすべて現象間の相互関係によって成立しているので普遍的固定的実体というものは何一つ存在しないのだと言うことです。「諸行無常」です。日蓮聖人が「立正安国論」で蒙古襲来を予測したのも、今の現状をありのままに観てそれがいかなる過去の因縁によって今があるか知り、今の現実が原因となれば未来へとどのように縁起していくかを、ありのままに観ることが出来たからの蒙古襲来の予測です。それは決し

て予言ではありません。過去の因縁（歴史）を分析し、今の因縁（社会状況）を調べ、それを聖人の哲学（法華経）によって体系づけた結果の予測です。これを非科学的であるから非合理な宗教的予言者の妄言と断じることはできません。合理的視点とは常に正誤の分かれ道で理性と数式に還元できる科学に従って正しいと判断された結果選んだ道でしょう。数式に置き換えられる現象は森羅万象の一部にしか過ぎません。理性は善悪や真偽の判断に基づき概念的合理的に思考された結果に過ぎません。善悪や真偽、正邪もある一定の価値観の結果です。価値観を基準にすれば日蓮聖人の予測も信行によって培った価値観です。私はどちらの価値観が正しいのかどうかの立場は取りません。どちらの価値観も等価です。生まれてこの方私たちは教育によって基本的には理性的価値観によって合理的思考を身につける訓練をしてきました。しかし五十歳を過ぎてお釈迦様の法に出会い、信行によって観ることのできる価値観があることを知りました。それは縁起の法則によって観ることのできる、私たちの日々です。日常の土台を毎日しっかり踏みしめながら歩く（生きる）ことに価値の根源を観ると言う毎日です。理性的な価値に基づく合理的生活は今の私にとっては非常なのです。

私は自分の日常だけに生きることは不可能です。私はお釈迦様と理性的の双方の価値観を行き来しながら生活しているはずです。お釈迦様の価値観（私の日常）に逃げ込まず理性的価値観(私の非常）の中で仏の道を続けて行くには、宮沢賢治の姿がひとつの理想像に思えます。「春と修羅」の「序」に彼が書いた「わたくしといふ現象は　仮定された有機交流電燈の　ひとつの青い照明です(中略）たしかにともりつづける因果交流電燈の　ひとつの青い照明です」これは、お釈迦様の日常と社会の非常との間を交流電灯のようにせわしなく行き来する彼自身の姿を表現したものでしょう。あえて私は社会生活を「非常」と表現し私の生活を非常と日常と観ました。非日常が日常となってしまいそこに安住しないためです。縁起の世界をありのままに観るためです。ありのままに観ることは安住することでも流れに任せることでもありません。二つの価値観の間を間断なく行き交い、非常と日常は一如、不二と観ることです。そこに灯る因果交流電灯の青い照明こそが、仏の道を照らす自灯明なのです。私の東京行非日常体験は私の今が過去の因縁によってあり、私の未来が今の因縁により如何に縁起していくかを改め私自身に期待させてくれる貴重なものとなりました。

狂言綺語百六十三・世界の歩き方

狂言綺語を書き始めようとしていた矢先に朝の〆六ニュースで速報が流れました。刑事訴追されていたトランプ元大統領の裁判で陪審員が有罪の評決を下したとのこと。控訴の権利もあるのでまだ有罪が確定したわけではありませんが、陪審員全員一致の判断でなければ評決は下せないはずですから、この判断は非常に重いものだと思います。しかしアメリカの世論もマスコミの論調も秋の大統領選挙には大きな影響はないと考えているようです。当のトランプも「不正で恥ずべき裁判だ。本当の評決は大統領選挙の投票日に国民によって下される」と述べているのです。小国の独裁者ならいざ知らず、大統領はアメリカ国民だけでなく全世界に影響力を行使できる権力を持つ存在です。一見民主主義の基本である国民の自由な意志に委ねる(選挙）という立場を取っていますが「罪状はでっち上げで全てが不正だ」と述べていることは

法律を認めていない証拠です。自分の権力行使の自由(正義)は守るが他者の正義は認めないという独善的自由の考えです。

アメリカは正義を旗印に人権を守り自由を尊重する民主主義を体現した国家であると言われ、また国民もそう信じているのでしょう。そしてその行政執行者がアメリカ大統領です。法律を作る立法府の議会と法律を司る司法の三権分立が厳格であるからこそアメリカは民主主義国家として世界のリーダとなっていたはずですが、その立法府に大統領選挙に不正があったとのトランプの扇動を受け乱入する事件がありました。そして今回の司法判断を不正とする主張です。法を無視し議会を暴力によって制圧しようとする行動は民主主義の対極にあることは自ら民主主義を勝ち取ったわけではない日本人にも、自明の理と思われます。このトランプの主張を聞いてアメリカ国民が彼に NO を突きつけなかったとしたら、正義も自由も人権もそれを行使する権力を持った者が決めるものだと世界に知らしめることになるでしょう。これでは独自の正義を主張するロシアもイスラエルも戦争を自らやめる訳がありません。彼らにとっては戦争を続けることが正義であり善だからです。戦争正当化の主張に対してトランプはお墨付きを与えていることにアメリカ国民は気づかなければなりません。アメリカを先頭にして西欧民主主義国家が主導する民主主義は、普遍的規範のないご都合主義です。彼らの民主主義はルールの適用を自分たちの都合で変えても選挙によって正当性が与えられればそれが正義となる民主主義です。日本は彼らのお先棒を担いでどこまでお猿の篭屋を演じるのでしょう。

私は政治的な闘争には興味がありません。その闘争の根拠が双方異なる論理によって戦われている現実を、お釈迦様の教えを信じて生きる私には全く理解できないのです。諸行無常、ありのままに世界を観て、その世界を「空・一如・不二」と観ることが仏様の智慧です。一方、絶対的価値によって体系づけられたと主張する「善」や「正義」が全く正反対の「悪」や「不義」と主張されてしまう奇妙な現実が、今顕著な対立とともに私たちの前にあります。その対立の根は、人それぞれにいくつもの絶対的価値が存在すると言う絶対矛盾に気づかないふりをしているからです。相手が根拠とする絶対的価値を攻撃することで、自ら信じる絶対的価値の正当性を主張することが対立の原因なのです。お釈迦様の世界に「絶対」はありません。常に縁起の法則によって流れを止めない「運動」する世界です。瞬間はあってもその瞬間はもう今は存在しない何も無い瞬間です。無いものに拘っても何も掴むことは出来ません。だから「空」です。善も悪も。生も死も、何も無いのです。だから「善悪一如」「生死不二」なのです。何もないところに不変絶対を措定して、そこに価値の楼閣を組み立てて正義や善や自由や人権を主張してもそれは砂上の楼閣に過ぎません。双方の楼閣に盤踞している者同士が、殺し合い、なじり合い、恫喝をし合っている現実が私たちの生きる世界です。

そこで仏教は何が出来るかといえば、恐らく何もできないでしょう。それは他の世界宗教(キリスト教とイスラム教)と同じ宗教カテゴリーの中で考えれば何も出来ないでしょうと言う意味です。宗教という言葉が表す意味は広範なので、ここではあえて仏教を宗教とはいいません。私が定義する仏教は「世界の見方(諸行無常)」「自己と他者の関係性(諸法無我)」「私はどこにいるのか(一切皆苦)」「私はどこに向かうのか(涅槃寂静)」についてのガイドです。お釈迦様の教えは「世界の歩き方」の道しるべ、「君たちはどう生きるか」の一人一人への問いかけです。その問いに呼応することが「信」です。信とともに(お釈迦様と)日々を生きることが「行」です。私と信行をともにする仏教はこれが全てです。私に予め与えられている

自由も人権もモラルもありません。日々を生きることでお釈迦様から自然に身に纏わせてもらっている自由や人権やモラルです。日々をありのままに生きることでお釈迦様(世界)が私に与えてくれる贈り物です。それは絶対矛盾の砂上の楼閣に、既知既存のものとして保存されていたものでは決してありません。

世界の価値を築き上げた根っこは宗教と考えても良いでしょう。キリスト教やイスラム教を信奉する人々がその根っこから民族の善や正義や主義主張、政治体制を育て上げたのです。双方が堅固に作り上げた価値体系の根底が異なれば、そこにそびえる価値の楼閣も異なるはずです。世界は二つの大きな楼閣の他にも分派が作る幾つもの楼閣が存在しています。それぞれが「絶対」を主張し合えば世界から闘争はなくなりません。絶対同士の小競り合いがそこら中で起きる毎日か、ある絶対が数多の絶対を無力化して絶対の統一を図るか、世界はそのような方向で動いているように見えます。そこで何も出来ない仏教が唯一出来ることは「絶対はありません」と言い続けることです。絶対がなければ全ての存在も思考も相対的なものです。相対的な価値は互いに打ち消し合い必然的に無力化されるでしょう。価値が「空」になることができれば、富もヒエラルキーも権力もない無価値、平等、自由に満ちた「空」、つまりありのままの世界が現れると考えることはあまりに理想的で、仏教が結局国家の権力の根拠にならなかったことを示しているのかも知れません。

狂言綺語百六十四・仏の光

ここには野生の生き物がたくさん住んでいます。彼らは常に生命の危険と背中合わせが日常ですから、最強ハンターである人前にはうかつに姿を晒しはしません。鼬、狸、兎、鹿、猪、猿、青大将、蝮などを目撃した話をよく聞きます。私もこれらの生き物は車の運転や散歩の時、雪の翌日に見たことのない足跡を見つけて調べるとある野生動物だったりと、熊以外はどこかで何らかの形で遭遇しています。しかし彼らを目撃できるのは一瞬で、カメラで捉えようとするまもなく隠れ去って行きます。地上で生きる野生動物は天敵に視認されることが最大の危機なので大半の生き物の行動は夜間のはずです。夜と昼と活動範囲が異なっているので、人と野生動物の予期せぬ衝突は回避されているのでしょう。昼間に活動する生き物は鷺や川鵜や鴨の水鳥と空を飛ぶ鳥くらいです。彼らは水や空中や木の上にいるので人の手は届きません。彼らなりに人との間合いを計っているのか、例えばわたしが水辺に近づくそぶりを見せただけで、飛び去っていきます。

闇雲に恐れることも排除することも殊更に互いを意識することもなく、ごく自然にあるがままに共存できていることが他者との共棲ではないでしょうか。人間の生活領域を侵犯するときは人も彼らを駆逐する必要があるでしょうが、理由なく侵犯することはないはずです。お互いの生存領域を犯さない限りはたまに粗忽な猪が人前に現れることもあるでしょう。猪が道を横切ったくらいで危険だからなんとかして欲しいと大騒ぎする人間を見て、当の猪は「ミスったな、これでまたそこかしこに罠を仕掛けられてしまう。」と反省しているかどうかは分かりませんが、人間が猪を恐ろしいように、猪も人間が怖いはずです。猪に反省があるならば、人間にはどんな反省があるでしょう。持続的な共棲のためには人の側にも省察が必要なはずです。

わたしの家の庭を我が物顔で歩く猫を野生動物と呼ぶことはふさわしくないでしょう。野良猫は野生でもなく飼われているわけでもない中途半端な立場です。だからというわけでもないでしょうが、野良猫は日中も人前に姿を晒し、逃げることもなく、にらめっこの体でこちらの様子をうかがい、危険がないと分かるとまた悠々と庭の中を気ままに歩き回ります。野良猫に餌をやっている人をよく見かけます。餌をやることはその猫を保護していることになるので飼い主としてその猫に責任を持たなければならないでしょう。それは猫自身だけでなく、回りに住む人々に対する責任でもあるはずです。例えばむやみに子供を産ませないように避妊手術をさせる、よその庭を荒らしたり糞をさせない、自分の敷地内で飼うなどは、餌をやる人の最低限の責任だと思います。一度野良猫の餌やりについて注意喚起をしたところ「猫は家の中では生きられずまた餌をやらないと死んでしまう生き物なので、こうやって餌をやっている。飼っているわけではない」と言われて唖然としたことがあります。可愛いから、可哀想だからと自分がそう思った自己都合で餌をやっていると聞こえてしまいます。人が保護してあげるという動物支配の傲慢さがわたしには見えてしまいます。これを動物愛護と称するならば、それはわたしの考える他者（万物）との共棲とは大きく異なる方法です。

定期的に開いている無量寿経の読書会で無量寿仏（アミターユス・阿弥陀仏）の普く世界を照らす「光」がテーマとなりました。この光を違う言葉に言い換えてみると、例えば仏のはたらき、はからい、宇宙そのもの、仏の慈悲、ありのままの世界を照らす光などです。仏は全ての衆生に「光」を注ぎ照らしているのです。ここで誤ってはいけないことは人間だけに注ぐ光ではないと言うことです。宇宙に存在する生きとし生けるもの（衆生）を含めた万物を照らす光が仏の「光」です。つまりありのままの宇宙、ありのままに万物そのものを照らし出す光なのです。その光は受け取る受け取らないに関わらず、照らし続ける「光」です。だから常住不滅、宇宙そのものなのです。これが「仏」です。仏の照らす「光」を私たちが受け取ることは、わたしと他者（私の内と外）が無限の動因（縁起の法則）の流れにありのままの私を委ねる瞬間、つまり「信」への無垢無礙の帰依です。無量寿経ではそれを南無阿弥陀仏と呼び、法華経では南無妙法蓮華経と呼びます。二つの経には図らずも仏の無限の光が普く三千大世界（宇宙）を照らすことが同じように説かれています。私たちはだれでもその光を等しく受け取ることが出来ます。野生の動物や飼い犬野良猫にも、雑草や枯れ木、岩にも海にも、人にもそそがれている仏の光を私たちは受け取ることができるのです。そしてこれを受容したとき初めて仏の光は私たち万物を照らす光となります。この受容を「信」と名付けるのです。

読書会で「仏の光は等しくパレスチナの子供たちにも注がれているだろうか」との疑問が出されました。もちろん注がれています。しかしその光が彼らに注がれているということを彼らが受容しなければその光との共鳴は起こらないでしょう。仏の光を受け取るとことは私と仏（内と外）が互いに共鳴し合い大いなる宇宙と一体となることです。私に仏が、仏に私が入る相互悟入の瞬間です。私と他者が交響し私が仏になり仏が私になる瞬間です。「信」が仏の光を私たちが受容することを可能にしているのです。仏教以外の宗教を信じる人たちは私が仏の光と称するこの光を受け取ることは出来ないと思われるかも知れません。私はこの光を仏の光と表現していますがその光を発する源（大いなるもののはからい）を私は「仏の光」と呼んでいるだけに過ぎません。各々が自分の信じる「信」にしたがってその光のはからいを受け取れば良いのです。その光は各々の「信」を選ばず普く万物に平等に注がれる光だからです。但しその光は自分

の信じる宗教や民族や特定の神を信じる人たちにしか注がないと考える人たちには、その光は届かないにちがいありません。

仏の光は万物に注ぎます。野生の生き物や野良猫や私の隣人にも等しく普く注いでいるのです。それを各々が受け取りあるがままの日々を生きていくことが仏のはからいに生きることです。人が他者の日々をはからうものではありません。仏のはからいのままに生きることが他者と共棲して生きることでもあるのです。

狂言綺語百六十五・モラル

法律は果たして公正に適用されているのか、無力でないかとの事例を最近よく見せつけられています。例えば政治資金パーティの裏金作りでは事務方が起訴されただけで、主催者の政治家は一切法律的な責任を取らされていません。現場が罪を被りトップは知らぬ存ぜぬが法律的に認められると言う法律の正義を見せつけられて私たちは何を思うでしょうか。それは不公平だと声高に抗議をする人もいるでしょう。大半はいつものことと諦めるでしょうか、或いは法律の不備をくぐり抜ければ罪に問われず好き勝手出来るならば自分もやってみようと考えるかも知れません。法律的には罪がない、条文に沿えば法律違反は何ら犯していないとの結論がもたらす無関心と無気力、モラルの崩壊と不正の助長などの風潮は社会崩壊の兆しともいえるのではないでしょうか。権力を行使する者がモラルより法律の条文を盾にとって思うがままに振る舞うならば、力なき庶民もそれを真似る人が出てくるでしょう。ここのところ選挙運動の妨害行為や選挙ポスター掲示板の使い方にあたっては公職選挙法違反に問われて逮捕されるケースも出ています。その行為を行った者は「法律で禁止されていない」や「表現の自由」と言うことを主張しています。しかしほとんどの人はそれらの行為を見て眉をひそめるでしょう。法律に違反していなくてもモラルに反していると判断しているからです。モラルは言語化して理解するものではありません。行為そのものによって判断されるものがモラルです。

仏教は宗教でないと言われることがあります。世界宗教のキリスト教やイスラム教は創造主である神が世界の体系を構築しています。世界は創造主たる神が作ったものだから、神の思し召すままにそれを受け入れなければならない、それは絶対真である。これが絶対神を創造主と信じる宗教の強固な構造です。創造主の存在を信じない限り成立しないから宗教なのです。しかしお釈迦様は何も創造していません。すでに存在している世界を「縁起の法」によって明らかにしただけです。創造主でも絶対神でもなく、世界の構造を論理的に説明しただけです。世界のあり方を解明した科学者と呼ぶ方がふさわしいかもしれません。私たちは創造主と絶対神の存在を信じているのではなく、お釈迦様が論理的に解明した「縁起の法で世界をありのままに観てありのままに歩むことが安らぎの処にたどり着く唯一の道である」との「行」を信じているのです。

絶対神の意志（神の思し召し）を一人一人に誤解なく正しく伝えることは言葉によってでしか出来ないことでしょう。その伝達の役目が司祭であり予言者であり聖典です。新約聖書「ヨハネによる福音書」の冒頭は有名な「はじめにロゴスありき」で始まります。「創世は神の言葉（ロゴス）からはじまった」と訳

されることが多いようです。ロゴスというギリシャ語は単純に言葉という意味だけでなく「言葉を通して表された理性。言語・思想・理論など」と説明されます。私は宗教学者でも聖書に精通しているわけでもないのですが、彼らの行動も思考も「ロゴス＝言葉」を通してでしか伝えることが出来ないという確固たる信念に基づいていることは間違いないと思われます。一方お釈迦様の教えは「言」ではなく「行」によってでしか私たちには伝えることが出来ないのです。経文があるではないかと言われるかも知れません。しかし経文は意志の伝達ではなく世界の歩き方（行）のガイドです。数多の経文の中で私が読むものは代表的な数点でしかありませんが、いずれも「安らぎの処（涅槃）」にたどり着くための世界のあり方（空）と歩み方（行）とが書かれているだけです。お釈迦様は意志（言）によって私たちの生（行動）を規定するのではなく、それぞれの選んだ歩み方によって各々にふさわしい安らぎの処を目指しなさい（行）と教えてくれているだけなのです。数多の経文とそこに付随する各宗派が仏教において存在するのは、言葉によって生（行動）を規定するのではなく、各々にふさわしい歩み方（行）への導きを指し示してくれている何よりの証拠です。各々にふさわしい歩み方を各々が選んで各々の道をお釈迦様とともに歩むこと（同行）、これが仏教なのです。

法律は社会形成過程で絶対神の意志（ロゴス）を神の言葉から人間の言葉に書き直す必要から生まれたものではないでしょうか。言葉には解釈がつきまといます。その解釈の曖昧さを克服するために、神の言葉を細分化してその時々の人間社会に適合する言葉に書き換えたものが法律と考えれば、絶対神を信じる社会には成文法が必要だったことが理解できます。神の言葉から一気通貫に誰もが共通の行動まで繋がれば良いでしょうが、私たちの前には360度全方位に道が開かれています。行動には選択が伴うのです。神の意志（言葉）を正しく行動に繋げるためには選択への価値判断、つまり善・悪・正義・不正などの評価が必要になるでしょう。その評価の多様性を避けるために言葉による厳格な規定である法律が必要だったのです。しかし法律も言葉で書かれるものですから100%すべての人が同じ行動を取るとは限りません。法律の編み目からこぼれ落ちる行動も出てきます。それでも法律は絶対神の言葉を人間の言葉に細分化したものであるという意識が根底にある限りは、創造主を信じる人々にとって法律は絶対真でなければならないでしょう。

言葉で世界を見て行く限り解釈や価値判断が常に伴うでしょう。言葉で規定しきれない世界の穴をどのように塞ぐかが大きな課題としていつまでも私たちに残されるのです。それは価値判断の対立が永遠に続くということです。言葉（ロゴス）の限界です。一方お釈迦様が教えてくれた世界のあり方は「空」です。絶対的な存在も価値も善悪も何もない「縁起の法」によってこの世界があるのです。そこに生きる私たちは言葉でなく「行」によって生き「行」によって他者との関係を築いていきます。他者も社会も「行」を観るのです。「行」が他者に伝えるものは言葉でなく行為です。その行為に共感し共棲し続ける行為を私はモラルと呼びます。価値判断を必要とする言葉（法律）による制御でなく、行為への共感が新たな行為をもたらす「モラル」は、自らの歩みの中で自然と醸し出される行為だからこそ「行」の根底にあるものだと考えます。

狂言綺語百六十六・わかっちゃいるけどやめられない

この時期になるとすでに数度は蛇に遭遇しているはずなのですが、今年は一回もお目にかかってはおりません。雑木林から溜池に向かう途中で車に轢かれてぺしゃんこになった蛇の亡骸も、藪の中から聞こえるがさごそという音と伴に現れる蛇の姿におびえることも今年は一度もありません。いつもなら蛇が出始める五月中頃からは猛烈な暑さが続いたので、蛇の生態に何らかの影響が出たのか、あるいは今年はすでに三頭ほど罠に捕らえられている猪や、思ったほど痩せずに我が物顔で庭を歩き回っている野良猫の食料になってしまったのかと、蛇を見かけないなら見かけないで今年はどうなっているのだろうと思わずにはいられません。

地球温暖化と言われて久しく時が経ちましたが、かけ声もむなしく年々夏の猛暑は増すばかりです。全世界を挙げて取り組んでいる地球温暖化対策（温室効果ガス削減）が効果を発揮するにはまだ時を要するのか、かけ声倒れに終わり実効が乏しい対策なのか、かけ声だけで実行しない国があるのか、どれが理由か分かりませんが、本当に温室効果ガスを削減することが唯一の対策なのかと疑問を呈する声は聞こえてきません。地球も生き物ですから風邪を引くこともあるし、活動的になれば地球温も上がることもあるでしょう。かつて氷河期があったことを思い起こせばいずれ温暖期が来ることも自然の流れかも知れません。地球も生き物と観ること、それは地球そのものの存在とそこに寄生寄住する人間と伴に森羅万象も含めて観ていくことです。地球がこの宇宙に存在して以来、人が寄生した期間はほんのわずかな時間です。しかもその期間の経緯を記録として遡れる時間はせいぜい数千年もないでしょう。まして科学によってあらゆる事象が解明できると人間が考えそれを実証出来たと主張し始めた期間は、私見ですがルネッサンス或いは宗教改革を経てから以降のように思います。地球生命からすると芥子粒のような時間しか存在していない人間が、地球生命について全て分かったような顔をして地球の命を救う必要がある、そのための今ある唯一の方法は温室効果ガスの削減だと本気で信じているなら、人間とはなんと身勝手でお目出度い存在だと思わずにはいられません。

唐突に聞こえるかも知れませんが、お釈迦様が森羅万象をありのままに観て（空）そのままに歩む（行）歩き方にふさわしいと私が考える、子供の頃によく耳にした二つの歌をご紹介します。有名な歌なのでご存じの方も多いと思います。ドリスデイのオリジナルで日本語訳でもペギー葉山が歌っていた「ケセラセラ（Que Será, Será）」と植木等が歌った「スーダラ節」です。「ケセラセラ」は「なるようになるさ」と和訳されるスペイン語です。なんと投げやりな歌詞とも思いますが、あれこれと気に病んでも仕方がないじゃないか、だから成り行き任せで、前向きに今を受け入れようという超楽天的なニュアンスもまた感じられる歌詞の世界は、当時の私の単純な子供心には複雑な大人心として理解できなかったに違いありません。もっと分からない歌詞は植木等の歌う「わかっちゃいるけどやめられない」のフレーズです。何も分かっていない子供には分かるはずもないのですが、それが良くないこと悪いことと分かっているならばやってはいけませんと躾られ教育されながら大人になっていくとの考えに素直に従って親や先生の意見を受け入れてきた私たち子供が、いきなり「わかっちゃいるけどやめられない」と大人に開き直られてしまったら混乱の極みです。しかしその感想も大人になった私が子供時分は恐らくそう感じたんだろうとの感慨に過ぎないでしょう。

今ならこの二つの歌が私の子供心の何を揺さぶり記憶にとどめさせたかがよく分かります。それは私たち大人が（少なくとも私が）「なるようになるさ」と「わかっちゃいるけどやめられない」の繰り返しで今まで生きてきたからです。歌詞を殊更に抹香臭く分析することは本意ではないので、結論だけ申し上げます。「ケセラセラ」はありのままに観てありのままに歩む（行）実践の言葉です。「なるようになるさ」は現状への諦め（ありのままの認識）です。そこで立ち止まり引き返し怒り悲しんでも、ありのままの今は変わりません。なぜなら諸法無我、因縁縁起によって今があるからです。だからなるようになる今この瞬間を更新続けて歩み続けることが「安らぎの処」へと向かっていること（生の実感）なのです。「わかっちゃいるけどやめられない」は植木等の言葉を借りると、彼の父上は浄土真宗の僧侶で戦時中は戦争反対や部落解放運動の言動で何年も拘束されていた宗教実践者でした。植木本人も無責任男のイメージで売り出しましたが実は厳格な父の教えを受け継ぎ謹厳実直な人柄でした。ところが会社の事情で意に沿わない「スーダラ節」を唄うことになり、父上が息子がこんな不道徳な歌を唄うことを許してくれるだろうかと事前に父上に歌ってみせたそうです。すると「『わかっちゃいるけどやめられない』は人間の矛盾をついた真理で、これこそ親鸞聖人の教えなのだ。そういうものを人類の真理というんだ。上出来だ。がんばってこい！」と励まされたのです。父上の言葉通り「スーダラ節」は大ヒットしました。理由は明白です。表層的で軽薄に見える歌詞を総括する「わかっちゃいるけどやめられない」との言葉に、人々は自分たちの弱点として自覚しながらも、それが人が生きていくことなんだとの生きる「真理」に共感したからなのです。言うまでもなく親鸞聖人の「罪悪深重・煩悩熾盛の凡夫の自覚」の言葉が「わかっちゃいるけどやめられない」の歌詞に体現されたのです。仏の教えは難解な言葉や僧侶や宗教学者の独占物でありません。私たちの生活の中にある何気なくも何か心を揺さぶる言葉の中にあるはずなのです。なぜなら仏の道は私たちの生きることそのものだからです。

梅雨は明けたのかと思われる猛暑が何日も続きましたが、ここのところ梅雨空が復活し、蛇もしばしの暑さからの避難で力を蓄えて梅雨明けには元気な姿を見せるかも知れません。これも「ケセラセラ」です。地球温暖化対策もどんな効果があるかわからないけれど「わかっちゃいるけどやめられない」のかもしれません。でもその自覚が生きることならばこれも「わかっちゃいるけどやめてはいけない」ことなのでしょう。

狂言綺語百六十七・夏安居

学校が夏休みに入りました。夏休み前から猛暑が続いたので、殊更に今日からが全身で夏を満喫する区切りの日となるわけでもないでしょうが、それでも「梅雨明け十日」「雷三日」との言葉通り、梅雨が明けた後の天気予報は晴れマークが続き、九時には三〇度を超える暑さとなります。そして午後から曇り始めて三時頃から夜半まで続けて三日ほど雷が鳴り響き雨が断続的に降り続きます。すると気温が急激に下がり夜も過ごしやすくなるのです。夕立が来ると少しは記憶にある夏らしさを感じて、かつての夏休みを思い出します。

温暖化が取りざたされる以前の私の子供時代はプールや野球の練習は日中行っても熱中症になる心配は

ありませんでした。たまに三〇度を超えたら今日は暑いなと感じるくらいの、今考えると過ごしやすい夏でした。信じられないことに野球の練習中は水分補給禁止です。理由は運動中に水分を取ると体が疲れるからという理由だったような記憶があります。それでも気分が悪くなる子供はいませんでした。練習終了後一目散に水道に駆け込み飲んだ水のおいしさは忘れられません。また、私の地方では夕立の雷を「らいさま」と呼んで畏怖、尊重していました。落雷もしょっちゅうあり恐ろしいものでしたが、三時以降は遠雷が聞こえると農作業も遊びも終わりにして家に戻り夕立に備えていました。停電も頻繁に起こり真っ暗な中、家の真ん中に家族が集まり、或いは蚊帳の中で「らいさま」をやり過ごすのでした。夜は窓を開けて寝ると風邪を引くくらいに気温も下がります。しかしこれが農作物には恵みの夕立なのでしょう。日中との温度差と雨が美味しい作物を育てます。栃木県の農作物が美味しいのは「らいさま」の恵みだと今でも私は確信しています。

　夏の風物詩と言えば朝のラジオ体操と花火があります。夏休みに限らず毎朝六時半に公民館広場で近所の人たちが集まりラジオ体操を行っています。夏休みになるとそこに体操カードをぶら下げた子供達も何人か加わっていたものですが、ここ数年は一週間に一人二人くらいがやって来るだけになりました。それでも判子を押す係がいないと子供ががっかりするので、毎日私は判子を用意して待っています。共働きが増え親も子供をラジオ体操に送り出す時間の余裕が無くなってしまったのでしょう。朝食をさっさと済ませて通勤時間に合わせて子供を学童保育に連れて行かなければいけない事情も理解できますが、近所に虫取り網をかついだ子供の姿や友達を誘う声が聞こえない夏休みは、静かなものです。また、私の住む街の花火大会も今年は中止のようです。理由を一言で言えば「ヒト・モノ・カネ」が集まらなくなったとのこと、付け加えると花火の燃えかすが近辺に落ちて掃除が大変という苦情が来るのも理由のようです。理由はなんであれ、今まで続いていたモノやコトが続かないのは人々がそれを必要としなくなったからです。必然の帰結なのです。

　昔から継承されている祈りや感謝、畏怖、尊敬の行為は様々な祭祀の形を取って今日まで伝えられています。それを伝統というのでしょう。その土地に住む人々の共同体を維持するための紐帯として機能してきた伝統のモノやコト（祭祀）は人々がそれを必要としているからこそ機能するのです。それは意志や願いが具現化された事象と言い換えてもいいでしょう。意志や願いの無いところにはモノやコト、つまり行為は存在し得ないのです。昔からやってきたからやるのではなく、今ここにいる私たちが願いを形にするために必要だったからこその伝統なのです。モノやコトの継続に執着することは保守とも伝統継承者とも言えません。それは形式を維持することだけが目的となった似非保守です。「美しい日本を取り戻す」や「本来の日本の姿を守る」というような耳障りの良い言葉をよく耳にしますが、その継承を必要とする願いも意志も明らかにすることが果たして出来ているでしょうか。彼らの願いも意志も私には全く聞こえてきません。観えてくるものは願いも意志も無い形式継続への妄執だけです。正真の保守が守り伝えるべきことは、私たちが永遠の過去から今に至るまで伝えられた願いと意志を違わずに永遠の未来へと引き渡すことです。モノやコトは時代、場所、機根（能力）、環境、自然に従って変化していくのです。願いと意志を継承するためにはその時々の人々が革新が必要と判断したモノやコトは変えていかなければなりません。秩序を一新するのではなくその秩序を必要とした願いと意志を保守しながらその具現を点検更新していく試みが、願いや意志の継承（保守）のための行為の変革（革新）です。それは仏の道を歩むことの信行規範で

もあると私は考えます。

夏安居（げあんご）は僧が夏一か所に籠って修行することです。夏安居の僧侶の居場所が僧院の始まりともいわれています。インドでは六月頃から雨期に入り、川が氾濫し交通が困難になりますが、高温多雨、草木や虫が良く成長する時期です。最近の六月から八月の高温多湿、ゲリラ豪雨が頻出する日本の気候に近いものかも知れません。雨期のインドでは足元が悪く外出して小虫を踏みつぶしたり新芽を痛める恐れを考えると出かけないのが一番と考え洞窟や寺に籠って修行に専念することになりました。これが夏安居です。生きとし生けるものの不殺生を戒とする仏教の理屈です。しかし人は誰かのいのちを頂かなければ生きていくことは出来ません。不殺生戒は生き物を故意に殺してはならないので、自分で殺生には手を下さず、他者にそれを委ねて乞食でいのちをつなぐ僧侶の理屈は私には屁理屈に聞こえます。このことについてはいずれ書くことにして、今回は夏安居について。これはもっともらしい理屈をつけなくても、僧侶の夏休みと考えればよいのです。一年の大半を遊行（外での修行）と乞食に明け暮れた中で、過酷な気象条件の雨期はゆっくりと一か所に集まり疲弊した肉体を休め、仲間と仏の教えを語り合う修行者の充電期間です。そして雨期の終わりとともに各々は遊行に赴く。ところで現在の日本の僧侶は一年中僧院の中で何をしているのでしょう。まさか毎日が夏安居ではないと思いますが。私は僧侶であることの願いと意志の保守と、今僧侶であることで行うべき革新について,あらためてお釈迦様と語り合うことができる夏安居にしたいと思います。合掌。

狂言綺語百六十八・小熊出没をありのままに観る

この二，三日の間に近辺で小熊の目撃情報が立て続けにありました。いつも車で通る道とたまに散歩で歩く道沿いで自宅から四キロ以内の場所です。ここに住んで八年になりますがこれほど近くで熊の目撃情報があったことは一度もありません。高原山の裾野では何度か目撃情報がありましたが、それも山の中や住宅地から離れた場所でした。今回は住宅が点在し学校への通学路ともなっている所です。つい二ヶ月前も小熊が山伝いに高原山の麓から私の居住地に隣接する山を通って、南の方へと山伝いに移動した様子が目撃されていましたが、今回も小熊とのことなので同じ個体が生活圏と隣接した山林を移動し続けていたということなのかも知れません。ただ親熊の目撃はないので、親とはぐれてしまった小熊なのでしょう。懸命に子供を探している母熊は凶暴です。はぐれた小熊も自分で餌を探さなければなりません。生きるためにみな必死です。

里山との境界が整備されずに放置され、雑木や雑草で棲み分け地が曖昧になってしまったことが原因なのか、山に食料が不足しているのか、人間界に行けば食料にありつけることを学習してしまったのか、何が理由か私には分かりませんが、少なくとも熊に遭遇する危険は遠い山の中の出来事と思っていたことは事実です。ところが私たち住人には現実感のなかった熊遭遇の事態が起こったのです。予想外の出来事に遭遇した人々の反応は千差万別です。目撃した方に直接話を聞いたところ、昼間の運転中に前を素早く道路を横切って山の方にかけていったその姿は黒く小さくかわいらしかったとのこと、一日遅れで目撃情報を知った人は、知らずに道を歩いていたが、その時に襲われたらどうしてくれるんだと、市の危険周知体

制を非難する電話をかけてきました。さっそく熊鈴や熊撃退スプレーを買った人、狸か鼬と見間違えたのではないかと言う人、朝夕の散歩を取りやめた人、何事もなかったように山に入っていく人、深夜獣のうなり声が聞こえたと知らせてくる人、などなど不謹慎なようですが各人の反応の違いはとても興味深いものです。実際に目撃した人は別にして、実害もなく人づての話だけで、かくも人の態度は過剰反応から無関心まで様々になってしまうのです。眼前に危機が迫り実害があると、逃げるか戦うか隠れるか、その時々の状況で対応の選択肢はそう多くはないと思われますが、情報だけで自分が経験しなかったことに関しての方が人は冷静になることが出来ないのかも知れません。そして無責任無関心無批判な意見も、ためらいなく出すことが出来るようです。

仏教では悟りへの道（安らぎの処）を歩むための実践徳目を六波羅蜜と言います。その中のひとつに「禅定」があります。「禅定」は「禅」と「定」の合成語です。心を一つの対象に注いで、心の散乱をしずめるのが「定」、その上で、対象を正しくはっきりとらえて考えるのが「禅」です。つまり心を一点に集中し、雑念を退け、心を統一して静かに対象を観察し、思索して真理を悟ること、諸行無常の理をありのままに観てありのままに行うことです。座禅によってその境地に至ることが出来ると考え修行する方法が禅宗の実践方法です。それもひとつの方法ですがそれが悟りの道への全てではなく、人それぞれの能力と環境に応じて心を統一してありのままに観ることに努める方法を見いだせば良いのです。私たちが社会生活の中で安らぎの処へと歩む実践を続けるためには、特別な修行、例えば座禅やヨガ、読経・念仏三昧などの方法は誰でもいつでもどこでも出来るわけではありません。仏教は修行者や僧侶のためだけにあるのではなく、私たち生活者のためにあるものです。「禅定」はありのままに観る目を養うための方法ですからあらゆる実践方法が可能であると考えます。しかしそれを生活の中で具体的に語ることを私は今までしてきませんでした。なぜならありのままに観たことはその本人だけに縁起の法則が作用する関係性だからです。人には人それぞれのありのままがあると言うことです。だから「ありのままに観る」を理論化一般化することは不可能なのです。

今回の小熊目撃情報の私を含めた人々の反応は千差万別でした。それは人それぞれがありのままに観たことの結果だったのか、それとも我見によって起こった反応だったのかを突き詰めていけば、少なくとも「ありのままに観る」とは、こういうことでは無い（否定）、とだけは明らかになると思われるかもしれません。しかし「ありのままに観る」ことは事象を「空」「一如」「不二」と観ることですから、否定されたものの後に残されたものは肯定されるべきものという考えには至らないのです。否定の中にも肯定があり、肯定の中にも否定がある、それが無限動因（仏のはからい）によってとどまることなく行き交っていると考えることが仏教の世界の捉え方（空）です。だから私が今ここで小熊目撃情報についての千差万別の反応について考えてみても何も結論らしき答えや有効な方策を提示することは出来ないことはご了解ください。なぜならその答えも、無限動因によってその瞬間の未来には無効とされる答えになっているかも知れないからです。

私は小熊目撃情報の人々の反応をありのままに観たとも我見だとも判断できません。私はそれらの判断を無責任無関心無批判で冷静さを見失った結果の反応だと前述しましたが、それも人々が人それぞれのありのままに観た結果だと見ることもできるし、冷静さを欠いた状態だから心を統一して正しく対象を見る「禅定」の状態に至っておらず我見であるとも見ることはできます。無責任無関心無批判もありのままに

観たためのものではなかったと私は判断できないからです。それを判断することは「我見」にしか過ぎないのです。私がこの件で唯一ありのままに観るべきことは千差万別の判断があることをそのまま受け入れてその次の瞬間に自分が観るありのままの土台とすることです。他者との関係性の中で他者の判断をありのままに受け入れ、それを次の自分のありのままに行うことの血肉とすること、それが他者と関係性を取り結ぶことであり共棲していくことではないでしょうか。小熊、母熊、そしてそれに関係する人々をありのままに観ることで小熊目撃情報も私たちの生活の中で他者との共棲の可能性の一助となると考えます。

狂言綺語百六十九・鎮魂の八月

鎮魂の季節、八月が終わろうとしています。夏休みの期間で海も山も行楽で賑わい休暇で心身をリフレッシュする季節だと一般的には思われるでしょうが、私は一年でいちばん鎮魂にふさわしい季節が八月だと考えます。世界で唯一原子爆弾が人を殺戮するために投下された八月、ポツダム宣言を受諾し敗戦を認めた八月、多くの戦争の犠牲者の上に今の私たちの生があることを私たちにあらためて知らしめてくれる八月です。先祖の魂をお迎えして生者と死者が語らうお盆、各地で行われる様々な夏祭りや盆踊り花火や精霊流しは、春や秋の祭りが収穫を神様に感謝し祈願するためのものと違って、いずれも死者を鎮魂するための祭祀です。

八月は死者と生者がまみえ、死者の願いを生者が受け取り、その願いとともにこれからの生を如何に生きるかを改めて自らに問いかける季節です。私たち生者がこれからの生をどのように歩み続けて行くかの導きとエネルギーを死者から頂く時です。生者が死者から生きる力を受け取る夏を生者再生の時と私が考える八月は、形は変われども夏休みという形で日頃の生活や社会との関係を小休止して、家族や親族、他者との関係を様々な祭祀や再会を通して再構築して行くための貴重な季節ではないでしょうか、暑さで活動能力が減衰するから休むのではなく、九月からの活動の季節に向けて、心身とも再充電する八月と考えれば、暑い暑いと言ってクーラーの効いた部屋で昼寝をするのも充電です。休息があって初めて活動が可能になるのです。以前書いた「夏安居（僧侶の夏籠り、夏休み）」を、わたしが如何に過ごしたかで秋からの信行の真価が分かるのでしょう。鎮魂は私たち生者が生を繋ぎ続けるために必要な、私たちのための行いでもあるのです。

鎮魂の原義は魂を落ち着かせ鎮めることにあります。肉体から遊離しようとする魂や、肉体から遊離した魂を肉体に鎮めることです。肉体の生死の有無にかかわらず、魂（心、精神）が本来あるべき姿から離れてしまっている状態を元に戻すことが鎮魂の本来的な意味だと思われます。霊魂が何らかの原因で怨霊となり祟ることや、魂の不調が病気を引き起こすなど、魂の錯乱が引き起こす災厄、自然災害、肉体の不調などを鎮魂によって元の状態に戻すことが原義と考えます。時代とともにその意味は変化し、不慮の死や恨みを飲んでの死、望まない死による魂を含めて、死によって肉体から分離した全ての魂を鎮めることが、今私たちが受け取る鎮魂の意味となっています。本来的な鎮魂から今では慰霊の意味と同義で使われているようです。

慰霊や鎮魂という行為を、私は霊魂を慰め、鎮魂の祈りを通じて永遠のいのちを受け取り次に繋げる行

いと考えます。それはある特定の宗教的動機から行われるものではなく、人が生き物として生命を繋ぎ続けて行くことの根底にある精神（霊魂）の営みだと考えます。これはあらゆる宗教教義を超えて人間のいのちの根源にあるもの、人が人として行き続けていくための精神の本能ではないでしょうか。鎮魂は宗教的動機や儀式には馴染まないものと考えます。もし宗教的動機によって鎮魂する対象を選別したならば、それは精神本能からの祈りではなくなってしまうでしょう。鎮魂の祈りは神や仏への祈りではなく、そのいのち（精神）を引き継ぐ者同士に交わされる祈りだと私は考えたいと思います。肉体の本能があれば精神の本能もあって当たり前です。神や仏などの人為が作り出した精神の支えの前に、命を繋げる生物の営みは肉体と精神の本能の両輪に支えられていると観ることによって、宗教同士の宥和や共存も観えてくるかも知れません。

ところでお釈迦様は霊魂の存在を語っていません。残された言葉から類推すると、あるかないか分からないものを議論してもそれは苦からの解放には役に立たないから語らなかったようです。仏教の原理から観れば諸法無我ですから、私に属する固定的な霊魂は存在しません。宗教は本来死後の世界について語ることで現世を如何に生きるかを説くことにあると思われます。お釈迦様は死後の世界を語ったかどうかについての断定はできませんが、苦からの解放で輪廻の輪を断ち切ることがお釈迦様の教えです。諸法無我と合わせて考えると死後の世界はあっても特定の私（魂）の世界ではなく、無我の魂の輪廻になるはずです。無我である魂に特定の宗教の教えや祈りが必要であるわけはありません。この考えは精神の本能から鎮魂の祈りが捧げられることに矛盾する考えではないでしょう。八月に行われる施餓鬼の法要は全ての生きとし生けるものの鎮魂のための祈りだと私は考え行っています。仏教者のための特定の祈りと考える必要は全くないのです。

鎮魂の季節八月にも関わらず、この季節にふさわしくない身勝手な行動をする人の姿に憤りと哀しみを覚えます。侵略戦争、宗教戦争と言う言葉で括ってしまうと当事者からは反論が出るでしょうが、どのような言葉で取り繕っても、ロシアもイスラエルもそれを援助や黙認する国も、理屈で戦争が正当化されると信じているのならば、どのような言葉を弄しても鎮魂と祈りの言葉は無きに等しいものです。生きとし生けるもののいのちを鎮魂し、そのいのちをつなぎ続けることを願い祈り行うことをわたしは宗教と呼びます。鎮魂と祈りの行い無き行為を宗教と認めることは私には出来ません。宗教を装った政治に鎮魂の祈りが利用されてしまっては、それは精神再生に対する破壊行為です。ましてや死者の魂の慰霊にも鎮魂にもならないはずです。非科学的と思われるかも知れませんが、慰霊も鎮魂もされなかった魂は怨霊となって精神本能から発露された祈りでない見せかけの鎮魂の儀式を行うものたちに祟りをなすかも知れません。何らかの社会不安や災害が同時期に起これば、そして怨霊の仕業だと語れば、平安時代の迷信と笑い飛ばされるだけです。ただその考え方は私たちの精神本能にじわじわと染み渡り、私たちの社会や生活を不安定にしていくこともあるかもしれません。本能は理屈では制御できないものです。日本の八月も見せかけの鎮魂と慰霊が行われていないとは限りません。戦争の犠牲者の慰霊に関わる為政者の言動や他国の反応を観るにつけ、私たちの精神本能もじわじわと蝕まれ、いずれ怨霊の跋扈するときが来るかも知れないとの不安は拭いきれないのです。

狂言綺語百七十・名字

新しい言葉の増殖速度に追いつくことが出来なくなったと自覚し、もう追いつく必要もないと決めたのは会社を辞めて琉游舎を開いてからです。ビジネスをしていくために必要だった新しい言葉との追いかけっこはもうする必要がなくなったとの判断です。その時これらの新造語への違和感が生まれました。その言葉群はある年代、ある階層、ある集団の中にだけ流通するもので、そこに含まれない人たちには全く意味をなさない言葉であることが分かったからです。言葉が全ての日本人に共通のものではなくなりつつあると言うことです。逆に今まで歴史の中で変化しながらも私たちに引き継がれてきた共通の日本語が次第に消えていき、それとともにその意味や振る舞いまで消えていってしまうような気がしてなりません。次々と新しい言葉が生まれそして消えていくことは社会変化そのものとも言えるのかもしれません。しかしこれほどの言葉の大量消費時代はかつてあったでしょうか。言葉が受け継がれなくなったとなれば、今まで連綿と続く日本のかたち（文化）も受け継がれなくなり、それぞれのクラスター（個別の集団）に独自の言葉、つまり様式（振る舞い）が発生し相互連携することなく言葉の分断＝社会の分断が引き起こされるのではないでしょうか。

流行語やネットに氾濫する造語だけでなく、経済や技術、システムに関する横文字の頭文字をつなぎ合わせた省略アルファベット語、絵文字に擬音語、専門家達が作り出す新造語、おびただしい言葉の洪水に立ち向かわなければ世の中を泳いでいけないわけではありませんが、フェイクニュースを見ていても分からない言葉があまりに多いため、自分が世の中と関係できなくなってしまっているのではないかとの不安に襲われてしまいます。ネット空間の省略語や隠語の類いは知る必要がないと思っても、ニュースで流れる言葉は知っておかないとまずいなと思い、その度にスマホでググる（もはや絶滅危惧語か）ことになってしまいます。

先日、画面から「気象病」という言葉が流れてきました。初めて聞く言葉ですが、気象条件が原因で起こる心身の不調を病気と規定しているのだろうと想像はできました。ネットで調べると案の定「気象病とは、気温や気圧など〝気候〟の変化によって引き起こされるさまざまな症状の総称です」との説明。症状は様々で「低気圧が近づくと頭痛がする」「気圧や気温の変化が激しいと体調を崩しやすい」などの様々な症状が訴えられているようで、日本だけでも一千万人以上の人が気象病の症状に悩まされているとのことです。またテレビでは専門の医者が気象病について滔々と心身へのデメリットを説明していました。これらの説明に納得する以前に私は「これを病気と呼んでしまうんだ！」と現象を規定してしまう言語機能の持つ権力に恐ろしさを覚えました。私たちは季節の変わり目、気温の急激な変化、過度な湿度など天候上の変化に心身が不調を来すことは経験的に知っています。そしてその変化に順応することで日々を滞りなく過ごすことが出来るようになる、そうやって生きてきたものたちが私たち人間であり生き物だと思ってきました。ところが病気と規定されれば治療が必要になります。病気をもたらす外的要因の気象変化は治療が恐らく不可能でしょう。そうなれば根治のための治療よりは症状を和らげる対症療法しか思い浮かびません。おびただしい種類の投薬がなされ「気象病」との診断書が書かれ、病人となった人たちは「順応」の機会を「病気」という診断と投薬に阻まれ、学校や会社の出席簿や出勤簿には「気象病により欠席」と記録され

ることになるでしょう。学業は遅れ、企業活動は遅滞し、健康保険システムは破綻の速度を加速するはずです。「季節の変わり目の体調不良は気を付けようね」で済んでいたほとんどの人たちも、気象病の言葉に安住することを選び、巷には気象病の人が溢れかえることでしょう。などという想念を妄想とは呼べない日がくるかもしれません。

今まで「こんなことってみんなあるよね」「これはしょうがないことだよね」と思っていた「これ」を「気象病」名づけることで、社会をある姿に規定することが可能になってくるのです。「言葉」が持つ権力を私たちは過小評価してはなりません。曖昧のままにやり過ごしてきたことも「名づける」ことで実体を持ち、社会や人々の意識を規定することが可能となるからです。それが自然発生的に起こることであればおそらく社会の健全な変化やあるクラスター形成の現れだと見ることはできるでしょう。しかしそれがある意図を持った権威や影響力のために名づけられたとなると、その言葉はたちまち社会生活を規定し権力を有することになるのです。「気象病」がどのような意図によって名づけられ新造語として定着されようとされているか私には分かりません。近年、新しい診療科や病名が次から次へと新造されているように感じます。病名が増えれば病人も増えるのです。このままでは世界はいずれ病人だらけになってしまう恐れがあります。これを回避するために、言葉を扱う者は言語権力の可能性を吟味し厳格かつ公正な言葉の運用を行う必要があります。安易な言葉の運用は真っ当な社会の存立を危うくする危険性があることを知らなければなりません。

仏教では名づけることを「名字」と言います。しかし名字にはとても慎重な態度です。なぜならば名づけることでその事象を固定化し本質と思い込んでしまう恐れがあるからです。その思い込みが執着に変わることは容易です。ものの本質を「空」と観る見方が基盤となる仏教では、名字を与えられることは縁起の法則の否定となる可能性があることを踏まえなければ、容易に執着に変容してしまうのです。名づけることはその事象をありのままに観てそれを認識する手段に過ぎません。その認識が「行い」への歩みへと進むとき、名字は初めて「信行」のかたちとなって仏の道を私たちに示してくれるようになるのです。名字は信から行への橋渡し役を務め、その道への確信を与えてくれるためのもの、常に言葉（信）は振舞い（行）へと導くことが前提となるものです。仏教に限らず名字（名づける）は行い（行為）と一体となって初めて「言葉」となるのです。名ばかりの言葉の洪水から言葉の真を見極める力が今こそ必要な時代になっているようです。

狂言綺語百七十一・自由への道

お釈迦様は私たちの苦の源泉は貪・瞋・痴の三毒にあると教えてくれました。貪欲は貪ること、瞋恚は怒ること、愚痴は理非の分からないことの三つの煩悩です。この三毒は自分を苦しめるばかりか、他者にも毒をまき散らし苦を及ぼしてしまう上に、自身が苦を与えている自覚も苦に喘いでいる自覚もない、始末に負えない迷惑な存在です。人は少なからず三毒の中に生きていることを認めなければなりません。煩悩から解放されるには涅槃（悟り）にたどり着かなければならないのですが、親鸞聖人が看破したように私たちは煩悩熾盛罪悪深重の中に生きているのです。この世の涅槃が肉体的な死を受け入れることでしか

得られないのであれば、私たちは煩悩熾盛罪悪深重の自覚の中に生き続けることが生きることだとの自覚が必要なのです。

ここのところ党の総裁を決める選挙候補の主張がテレビで毎日流されています。実質的には日本の首相を決める選挙なので、党員でない私でも無関心ではいられず各候補の主張はだいたい把握しています。ただその主張は「これは公約ではありません。私が権力を掴んだ暁にはこのような夢を叶えたいとの夢を描いています」の羅列で、具体的なロードマップも財源も仕組みも何一つ示されてはいません。政治家にとって夢を与えること（政策）は必須です。それは言い換えれば「信」です。その夢（目的）の実現のために実行手段（行政）があるのです。それは「行」です。「信行」がなければ私はそれを信仰と呼ばないように、「政策と行政」がなければそれを政治と呼ぶことは出来ないでしょう。実行手段（行政）なき夢（政策）は毒と同じです。何度も夢を見せられたあげくその夢が絵空事の繰り返しになったなら、私たちは彼らが語る夢（政策）の実現を信じなくなるでしょう。悪夢です。政治不信層の増加が示す現状にさらに拍車をかけるような九候補による悪夢の垂れ流しは、日本中に三毒をまき散らしているようにしかみえないのです。彼らの夢（三毒）の放擲は権力奪取のための手段にすぎません。権力を貪り、従わない者に怒りを露わにし、世の人がどのような理非に従って生きているかを知ろうとしない三毒の放擲者無自覚者です。彼らを毎日見せつけられ悪夢をすり込まれると、私自身の煩悩熾盛罪悪深重の自覚も揺らいできてしまう気がしてなりません。

信仰の自由は精神の自由の問題であっても、日々の生活を精神の自由のままに続けることは不可能でしょう。何らかの行政的不自由の中で生活することが社会的な存在に生きることだと考えれば、人権も平等も信仰や表現の自由も何らかの不自由の中でのみ存在しうる自由なのです。だからこそ私たちは不自由の中の自由を慈しみ大切にしてきたはずです。またそれは私たちが過去から受け継ぎ社会的制約の中で守り通してきた日本人の精神的自由が伝統として今に受け継がれていることを意味していることなのです。この伝統の本質（制度ではなく精神）を守り続けることが真の保守の意味であらねばなりません。私たちが引受け次に引き渡すものとは、日本人が連綿と守り通してきた精神の自由です。それは文学・絵画・芸術・芸能・造形・社会制度・政治をも含めた日本人独自の表現と所作に現れた精神です。芸道や武道や政道と呼ばれ続けてきた「道」です。仏道もその「道」のひとつです。しかし精神の継承に付随する制度（権威・権力）の方に重きが置かれ、制度の継続こそが伝統であると故意に読み違え、権力と利権を目的とし制度の維持伝承こそが伝統の継承だと僭称している人たちが出てきます。彼らは自らを保守と規定し日本の良き伝統を守るのは私たちだと声高に叫び続けています。そして精神の自由を引き継ごうとしたものたちは、制度の束縛に絡め取られ精神の自由を次第に奪われてしまうのです。伝統の僭称者、似非保守たちは精神の自由を取り戻すために制度を変えていこうとする者に伝統の破壊者のレッテルを貼り、社会秩序を覆そうとする人々と非難をするのです。制度は作り替えることが可能だから社会は時代の要請に従って制度を作り替えるのです。しかし破壊された精神の自由は一朝一夕には取り戻せないでしょう。精神の自由こそが保守すべき伝統だからです。

夫婦別姓と女系天皇を認めることに賛成する人々を、良き日本の伝統の破壊者と糾弾する人々がいます。彼らの発言は真の保守を自認し信行の道を精神の自由の道と考える私には滑稽で冗談のような主張に聞こえてしまいます。その言説は社会制度の歴史的事実を無視して今ある制度が神話の昔から変わらない日本

人としてのあり方だと強弁しているだけです。都合の良い社会制度を貪り、主張の異なるものたちに怒り、事実を学ばず無痴をさらけ出す三毒の放擲者です。彼らは明治維新になるまで名字が公式に持てたのは権力者だけという歴史的事実、蜻蛉日記の作者が「道綱の母」としか残されていないように、女性の本名が公に記載されていないという歴史的事実になんと答えるのでしょう。今問われている「姓」は明治になって庶民が公的に名字を持つことが出来た、一八七五年二月一三日「苗字必称義務令」に始まる「姓」なのです。それまでの「氏」や「姓（かばね）」「苗字」「名字」と一緒くたに扱うことがそもそも歴史的事実を学んでいないことを示しています。この制度は明治政府の戸籍による国民統制と天皇を頂点とする家父長制度の根本として必要な制度なのです。男系天皇しか認めないことも国家の家父長制の頂点に天皇が規定される必要がある点で、全く同じ論理です。夫婦別姓や男系天皇の議論は制度の議論です。制度が日本人の精神の自由に合致しないと分かれば、さっさと変えるべき制度です。制度の革新が精神の自由を保守する唯一の道なのです。

仏道は仏の道を歩む信行の道です。その道の歩みは煩悩熾盛罪悪深重の自覚の中に生き続けることです。三毒の自覚の中でできる限りの三毒の放擲を抑制しようと試みながら日々を過ごすことです。その信行を私は精神の自由の道と呼びました。その精神の自由は様々な制度や他者との関係性の中の不自由の中で歩むべき自由です。私はその精神の自由を日本人の伝統とその保守の中に見いだし、それを仏の道という形で次へと引き継いでいくことが仏道と考えます。精神の自由（信）は行い（行）の自由なのです。

狂言綺語百七十二・見ると観る

廃墟と遺跡は異なるカテゴリーのものだと考えます。遺跡は原初の姿を志向しているので人々の事跡をビジュアルとしてそのまま目にすることが出来ます。過去に彼らが何を考え、求め、実現したかが視覚として手に取るように分かります。過去がそのまま現在に形として存在しているのです。年月を経ることで劣化してしまう姿をその都度修復することによって現在に姿をとどめている遺跡に対して、廃墟はそのまま時が止まったかのようにそこに崩れ去り破壊され、朽ち果て、土と森と草むらの、何らかの痕跡もとどめていない兵どもの夢の跡の所もあれば、かすかに昔の姿を想像できる瓦礫の山の所もあります。目にはかつての造形物の明確な夢の跡は映りませんが、私は廃墟に遺跡よりもより生々しい人々の息吹を感じてしまいます。

先日アンコールワット遺跡群に三日間行ってきました。事前の勉強不足で現地に行くまではアンコールワット寺院周辺の衛星的な遺跡を巡るだけだろうと思っていましたが、現地についてその遺跡群の多さと面積の広さに驚かされました。中心都市から半径六〇キロぐらいの中に、無数の遺跡群が存在していたのです。年代的に言えば日本の奈良時代から鎌倉時代にかけての遺跡です。そこを支配したクメール王国の王が建立したヒンズー寺院が主なものでした。毎日車で移動しながらいくつかの有名な遺跡を見学しましたが、車で通過する間にも石の建造物やその崩れた廃墟を幾つも目にしました。ポルポト時代の大虐殺と内戦を経て二〇年が経ち、日本やフランスなど各国の支援で遺跡の修復作業が順調に進んでいるようで、メインのアンコールワットはほぼ当時のままに修復されているかのような偉容を見せてくれました。石の

建造物なので材料が朽ち果てることはなく、崩れたものをもう一度組み直し、欠けた所を補修するというような土器などの修復再現作業の巨大な積木ならぬ積石版によって私たちは原型に近いアンコールワット見ることができるのです。アンコールワットが私に示してくれたものは、巨大な権力意志と経済力と技術力、強固な宗教信仰、そしてありとあらゆる石の壁に彫られた彫刻の豊穣な物語性と芸術性です。石は五〇キロほど離れた山から切り出されて水路によって運ばれたようです。建造は王の在位間に行われ、死んだらその寺院は未完成のままとなり、次の王の時代にはまた新しい寺院の建設が始まることの繰り返しが、無数の遺跡群が存在する理由でした。

遺跡によっては積まれた石が土台から崩れ去り、建物の原形をとどめていない瓦礫の山となった廃墟や、半壊した建造物の石の間を数百年に渡って巨木の根が絡みつき、石と木が一体化した廃墟もありました。ベンメリア遺跡やタ・プロム寺院がそのような廃墟遺跡でした。もう再現が不可能なほど大木と一体化した石は、実際再現のために大木を取り除くと、根っこが腐り地下が空洞となる結果、かろうじて全壊を免れていた建造物は跡形もなく崩れ去り、完全な石の山となってしまうとのことです。これを一から積み直して再現するにはどれだけの年月とお金がかかることでしょう。私も同行したガイドさんも同じ考えで、この廃墟はこのままにして修復再現の必要はないと思いました。もし再現されたものを見たならば、その建造物の遺志力に感心し、過去の遺物の偉容に驚き、畏敬の念を抱くことになるでしょう。しかし観えてこないもの、建造物の偉容に隠されてしまうものがあるのです。それは人の営みのある種の愚かさと偉大さ、虚しさと繁栄、変わることのない行為の繰り返しとそれをも変えてしまおうとする意思です。廃墟には矛盾する人間存在そのもののありのままの姿を観ることが出来るのです。そこにある廃墟はかつての原型を全く留めない時の流れの無常があるだけとも観ることができます。一方人間の行為のどうしようもなく変えようのない不変さとも観ることが出来るのです。見るだけでは観ることのできないものを廃墟は観ることを可能にしてくれました。

私は今まで狂言綺語の中で「見る」と「観る」を使い分けてきました。あえてここで説明をするまでもないのですが、廃墟に私が観たものを感覚でなく言葉で表現しなければならないとしたら、ここで改めてこの二つの語彙の使い分けについて説明する必要があるのでしょう。「見る」は視覚を通したビジュアル認識です。目に映ったものを事実としてここにあるものと認識することです。「観る」は五感、つまり私自身を通じて触れた感応認識です。「感応」の語彙を辞書的に説明すると「仏が人に応じたはたらきかけと、人がそれを感じとる心のはたらき」となります。「仏」とはありのままの存在、自然、宇宙のはたらきです。私と他者が出会ったとき他者からのはたらきかけに私が何かを受け取ったと言う体験、そのやりとりが感応道交です。大いなるものとの出会いと交わりです。これが私の仏との出会い、私が仏となることです。私はありのままに「観る」ことによって感応道交が可能であると信じて日々を送っています。これが私の信行です。

説明のためにあえてカテゴリー分けをすると、私のアンコールワット遺跡群経験は「遺跡を見ました。廃墟を観ました。」となります。当時の偉容のままに見せてくれる遺跡は偉大で感動的で素晴らしい体験です。ただただ圧倒されるだけで私の知識と経験を総動員してこの体験をどう表現しようかとなります。宗教的、歴史的、経済的、芸術的解釈など、様々な解釈（論評）は可能ですが、それは私と遺跡の主客間の解釈です。廃墟は直接私の中に入り込んで来て私と同一化するのです。廃墟はヒンズー教の寺院ですが、仏教徒

である私にもお構いなしに万物の一員である人は何者であるかを迫ってくるのです。私も廃墟そのものであると。

廃墟は無常の相を目の前に表します。常なる繁栄も存在もない栄枯盛衰の相です。しかしそれが私と感応道交した瞬間に廃墟は万古不易の相を表します。無常の繰り返しは常住であること、無常即常住、無常常住不二です。自然や宇宙だけが大いなるもののはたらき、仏のはからいではありません。人の営みも仏のはからいの中では自然の営みであること、偉大な建造物が数百年の時を経て廃墟となり自然の大木と一体化し、人の営みが自然そのものとなることを知ることの出来た、アンコールワットへの信行の歩みの報告です。

狂言綺語百七十三・失われた信

言葉の耐えられない軽さに間断なく身を晒されたままでいると、いつの間にかその言葉が示唆するところのことも意味も正邪も善悪もどうでも良くなってくるから不思議です。これが政治家や権力者の使う詐術の一つだと分かるまでに、私もずいぶんと馬齢を重ねてきてしまいました。現在選挙期間中なので、ニュースではどの政党にも平等に選挙公約らしきものが報道されています。よく聞いていると政権に到底届かない政党ほど「この政策を実現します」と主張し、政権与党ほど「この政策を目標とします」と主張しています。どうやっても不可能なことを「実現します」と言い、どうやってもやる気のないことを「目標とします」と言い換えているだけです。どちらも「出来ないのでやりません」と言ってくれれば「では何を実現してくれるのですか」と、改めて有権者から問うことも出来るのですが、それ以前に宙を漂うばかりの言葉の軽さに、対話をしようとの気力も失せてしまいます。すっかり彼らの詐術に嵌まってしまったと言うことでしょう。

政権与党はかつて「実現します」と言ってきた公約を実現できたことがどれだけあったでしょう。私の知る限り公約の採点を自ら行い修正し対策を再提示した政権を寡聞にして知りません。民間会社の事業行動は PDCA サイクルを回し結果で顧客の評価を受けることが基本です。わたしも会社に在籍中は様々な立場で Plan（計画）、Do（実行）、Check（測定・評価）、Action（対策・改善）のプロセスを循環させ、仕事の品質を高める努力をしてきました。このサイクルの基本は失敗と成功を正しく評価し、原因を分析し再計画を策定し実行することにあります。この繰り返しが経済活動の基本です。しかし政治は「やります、出来ます、出来ました」の言葉を繰り返すばかりで、何も「やりません、まだ出来ません、出来るはずです」の結果と言葉の繰り返しです。そこには評価も反省も改善もありません。圧倒的多数となって十年たつ現政権の間に他の国と著しい差をつけられた賃金上昇率と、それに全く見合わない円安と物価上昇の現実に「いつかはやってくれるだろう、そろそろ出来るはず、もう少しの我慢」とのかすかな期待も消え失せてしまいました。その言葉の耐えられない軽さに私たちは諦めと無関心を装わないと、その言葉の詐術が作り出す現実の重さをやり過ごすことも困難になってきた気がします。行動も結果も伴わない言葉をその軽さ故に無意味と思っては決してなりません。その軽さは人々を緩慢な死（無気力、無関心、無責任）へと追いやる凶器なのです。

存在の絶えられない重さに圧倒されたアンコールワット遺跡群から戻ってきても、この国は相変わらず言葉の軽さの中に浮遊したままの姿でした。崩れた石の廃墟はそれ自体が重いだけでなく、積み上げられては崩れ、自然と一体化する石の廃墟群が点在する姿は、積木崩しあるいは砂上の楼閣と二重写しとなり、これが人間の営みの偉大さでもあり愚かさでもある行為の重さだと石の重さと伴に私にのしかかってきます。この石の重みはカンボジアの精神そのもの。ヒンズー教、仏教、ヒンズー教、ポルポト共産主義教、小乗仏教と時代推移と伴に信仰は変遷しましたが、カンボジアで観る景色のどこにでも「信」がバックグランドに描かれていました。一方私の国の生きとし生けるもの達は、浮遊する言葉と伴にあてどなく虚空を彷徨っているようにみえます。一方の国にはあり一方の国には失われたものの姿がそこにはあるのです。それは「信」です。言い換えれば、「祈り」、「畏怖」、「聖」、「信仰」、「尊信」、「帰依」いわば「宗教」です。

この国は明治維新を境に西洋基準に合わせるべく、政教分離を形の上で行いました。それは国家神道による権力の国民精神支配が目的だったのです。そして天皇を頂点とする精神支配と天皇の権威を利用した軍部と資本家による権力支配の構造ができあがったのです。権力と権威の分離を利用することで政教分離を装った、似非政教分離です。実のところは権力（政治）による精神（信）支配の構造が目的でした。侵略戦争の敗戦を経て、天皇権威（国家神道）の精神支配は霧散しました。しかし権力による精神支配は現在まで続いているのです。それは明治維新まで日本人の精神を支えてきた「信」が権力によって破壊され、官製の「人工的な信（国家神道）」を強要された結果なのです。日本人の精神の深部に連綿と引き継がれてきた「信」は、八百万の神（森羅万象）への畏怖と尊信、つまり宇宙に存在する全ての存在には神が宿ると信じるカミと、山川草木や生類すべてに仏性があるとする「一切悉有仏性」のホトケとの出会いと融合にあります。カミ（畏怖）とホトケ（教え・法）が習合して日本人の精神構造（信）を宗教の形に整え、誰もが平等に祈り、畏怖し、帰依することが可能な「信行」のカタチができました。これが奈良時代の神仏習合に始まり明治維新の野蛮な廃仏毀釈まで続いてきた日本人の精神の基盤をなしていたのです。ところが廃仏毀釈が日本人から精神の自由を奪い、国家神道という権力が神仏に代わって国民を自由に操るようになってしまったのです。八百万の神の中から自由に選択できた自分のカミは、天照大神（天皇）を頂点とする神の階級制度によって信仰の自由を奪われてしまいました。仏教に至っては「法」を「行」へ導く精神基盤を奪われた結果「信」そのものが立ちゆかなくなり、現世利益を追求するだけの身勝手な集団の集まりに堕落してしまったのです。

日蓮聖人の仏教観、国家観は要約すると仏法（信行）を王法（権力）の上位概念とすることでした。仏法による王法の支配です。これが非現実的であったとしても、精神の自由まで王法に従属させることは出来ません。「信」は言葉によって受持しその重みによって「行」へと導かれるものです。「信行」があることで初めて私たちは精神の自由を獲得し自覚できるのです。言葉の耐えられない軽さの現代に言葉の重みを取り戻すためには、言葉（信）には常に結果（行）が必要となることを言葉を発するもの全てが自覚しなければなりません。結果には成果も悪果もあります。しかしそれを厭わない信行の姿があってこそ人々はその言葉を信じ、そこに願いを託すことが出来るのです。それが言葉の軽さ（不信）から脱する唯一の方法なのです。

狂言綺語百七十四・一線

「一線を越える」という時の「一線」は、法律や道徳に裏付けされた行動規範を表すときに使われる通常は可視できない線なのでしょう。守るべきことを破り、してはならないことをしてしまったとき「最後の一線を越えてしまった」となり、この線を境に善と悪、正と邪が分別されて社会的に批判され犯罪者ともなってしまいます。この一線は見えない線ですが各々が行動を律するときの判断基準となるものでしょうから、この線が誰にも同じところに引かれていれば迷う必要はありません。ところがこのところ、私の感覚からは一線を越えていると思える行為も法律に書かれていないからと開き直って、堂々と一線の位置を自分の都合によってずらすことに躊躇しない人々を頻繁に見かけます。寛容な社会なのか、倫理観の欠如か、権力の乱用か、法律の不備か、どれも当てはまるのかも知れませんが、この一線が生死に関わるものでない限り、人は裏金を作ろうが脱税もどきをしようが、嘘を平気でつこうが躊躇なく飛び越える生き物なのでしょう。

野生の動物はおのれの一線をわきまえている生き物だと思っていました。私の住まいの山側の道沿いに猪が鼻先で土をひっくり返して土中の生き物を漁った痕跡があったので、猪が近くに出没していることはこれまでも確認できていました。道向かいの山に設置された罠にかかった猪の暴れる音で、朝の四時に起こされたこともこの一年で三回ありました。ただ昨年までは、決して道路を渡って人の領域にやってくることはなかったのです。猪にとって山に沿って走る道路が「一線」だったのです。ところが今年は夏以降、楽々とこの一線を飛び越えて、道を幾つも渡り、収穫前の薩摩芋を食べ尽くし、草刈りをしたばかりの裏庭も、公民館の前庭も、散歩道路も辺り構わずひっくり返していきました。猪がおのれの一線を越えた跳梁跋扈の跡です。夜行性動物なので白昼遭遇して襲われる被害は発生していませんが、深夜寝室の壁一つ隔てて十頭を下らない猪が土中の食糧を漁る真夜中の饗宴は、事実としても想像したくない白昼夢のような出来事です。

なぜ今年になって突如猪が一斉に一線を越える行動に出たかを私は科学的に解明できませんが、想像するに二点考えられます。かつてこの一線は猪の生死の一線だったのです。この線の向こうには死があると記憶の底に刻まれていたのです。ところが、一線を越えれば捕らえられ食べられてしまうとの太古の記憶が今、まさに消え去り、危害を加えなければ殺されないとの記憶を新たに獲得してしまったのでしょう。野生動物を勝手に捕らえ殺してはいけないという法律や動物愛護の現実を経験的に学んだのです。もう一つは多少生死のリスクを侵してでも人間界に行けば食べ物に不自由せず、美味しいものにもありつけることを経験してしまったのでしょう。実際薩摩芋を全部食べられた方の話では、隣に植えた里芋は全部掘り返されたのに、食べずに捨て置かれていたそうです。薩摩芋の方が甘くて美味しいことをその場で学習してしまったに違いありません。食べ物に不自由しない人間界は比較的安全だと言うことを経験してしまった猪は来年はもっと大胆に現れ、薩摩芋畑を食い尽くすことでしょう。もはや人間と猪を隔てる一線は存在しなくなったのです。

人間社会にも自然界にも一線が曖昧になり消えて行こうとしている現実に、宗教に一線は果たして存在しているのかと考えさせられます。戒律は教団社会を維持するために必要な一線です。善悪、正邪、生死の一線もあるでしょう。しかしそれを宗教社会で論じられる限り宗派間の宗論にしか過ぎません。私は信

行の実践者（宗教者）が問題にすべき一線は聖と俗との境界線だと考えます。宗教社会と娑婆社会との一線です。出家は娑婆の一線を越えて「信」に生きることです。「俗」から「聖」への出世間です。宗教者はこの一線を越えることが必須です。しかし「聖」だけに生き続けることは果たして可能でしょうか。もし可能だと言い続ける宗教者がいたとしたら、私は彼らを宗教者とは認めることは出来ません。なぜなら「聖（信）」を生き続ける私たちの生きる場所は「俗（行）」だからです。私は宗教者とは「聖と俗の一線を絶え間なく行き来するもののもの」と定義します。つまり「信行」を生き続けることです。「信」は「聖」に在り「行」は「俗」に在ると言うことです。この一線を常に行き来していることの自覚者が信行の実践者です。

聖と俗の一線を絶え間なく行き来する宗教者の言葉に親鸞聖人の「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」があります。生きるとことは「罪悪深重煩悩熾盛」の自覚を生きる（行）こと、その自覚が深いものほど阿弥陀仏の救いが在る（信）との言葉です。この自己分析と自覚が親鸞聖人の信行であり聖に在って俗を生き続ける真の宗教者の姿なのです。また日蓮聖人の言葉に「衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて　浄土と云ひ穢土と云うも土に二の隔なし　只我等が心の善悪によると見えたり衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し　迷う時は衆生と名け悟る時をば仏と名けたり（一生成仏抄）」浄土（聖）も穢土（俗）もこの一線には隔ては無く、自分の心（信）の善悪（行）のことなのです。仏も衆生も隔てなく、迷うことを衆生と名付け、悟ることを仏と名付けているのですと語っています。日蓮聖人も信行に生きることは聖と俗を絶え間なく行き来することだと語っています。二人は宗派が異なり一般的には互いに相容れない教えだと思われていますが、私には全く同じことを言っているとしか観ることはできないのです。私はこの二人から宗教者とは「聖と俗の一線を絶え間なく行き来するもの」であることを教えられました。

一線について語ることはその一線を絶え間なく行き来することを自覚することなのでしょう。生死も善悪も聖俗もその一線を自覚し、その一線はない（空・一如）と明らかにすること、しかし生きることはその不可視の一線を見つめ続けなくてはならないと自覚しそれを実践する者です。何か特別な考えや行動を起こす者ではなく日々を生き続けることが信行に生きることなのです。信行の生活の中で「一線を越える者」は「一線を自覚する者」と知るとき、そこに「最後の一線」は自ずと観えてくるものなのかも知れません。

狂言綺語百七十五・天災と人災

季節の変わり目には体調を崩しやすいといいますが、変わり目が曖昧になってしまった昨今の気象状況ではどの時点で季節の変化による体調不良と言って良いのか判然としません。春は花粉、梅雨時の湿気、夏の猛暑、秋の長雨、冬の寒さと体調を崩す理由を探すに事欠きませんが、実はその原因は朝晩の寒暖差や気圧の変化などで自律神経の乱れが身体へ影響を及ぼすからのようです。その結果頭痛やだるさなどの心身の不調へ繋がるとのこと。根本原因が天候要因では医療機関にかかっても症状を緩和する対処療法しかないはずです。相手が自然では戦っても勝てるはずがなく、季節の変わり目に自らの体を順応させられるように栄養バランスの良い食事と充分な睡眠を取ることだという、当たり前のことを実践することが一

番なのでしょう。

今年の秋は特に季節が激しく行ったり来たりしているようです。十一月になっても二十度を超える日が続いたかと思えば、いきなり霜が降り山は初冠雪です。ところが翌日にはまた二十度を超える暖かい日。これを小春日和と呼んで季節変化の一服を味わうのが例年の秋なのですが、今年は気象の急激な変化に体が戸惑うばかりです。例年なら五月から九月は散歩の度に蛇の出現に注意を払わなければならないのですが、今年の暑い夏に蛇に遭遇することは殆どありませんでした。逆に十月から十一月に掛けて毎日のように蛇に出会いました。猛暑の間は息を潜めていた蛇にちょうど良い気候になったのでしょう。ところが急に寒い日が来て道路で動けなくなった蛇を何度か見ることになりました。暖かくなり寒くなりまた暖かくなる気候の波に翻弄されるのは、生き物共通のようです。上手に変化の波に乗りきったものだけが生き残ることになるのでしょう。

私たちは気候変動を地球温暖化が原因としています。そして炭酸ガス排出量の抑制が全世界の課題として話し合われ対策が取られていますが、足並みが揃わず遅々として進まない現状があります。気候変動を科学で抑制可能な人災と判断していると言うことなのでしょう。しかし災害は気候変動が引き起こすものだけではありません。火山爆発や地震・津波などは予知まではなんとか出来そうですが、その原因を科学的に除去する方法が見あたらない災害もあります。誤解を恐れずに言えば気候変動も温暖化が唯一の原因と考えられていますが、本当にそれが唯一無二の原因なのでしょか。自然現象を原因、それがもたらす災害を結果と観て、因果を分けて考える必要があるのではないでしょうか。自然現象を科学的に判断しそれを人間が制御できるはずだとする考え方を捨てて、自然現象は人の知恵も制御も及ばないもの、まずそこから出発して、私たちはその現象が引き起こす結果にどのように備え対処できるかを観ていくことが必要だと考えます。

東日本大震災の時にこの災害は「天罰」であるとの発言を述べ激しい非難に晒された政治家がいました。また仏教界からも同様の発言をする方がありました。今ここでその発言の真意を語る用意が出来ていませんが、その非難の根底には因果応報の思想があることから来る天罰発言非難だと思われます。生き物は善悪の因縁に応じて吉凶禍福の果報を受けることと言う考えが、因果応報です。善因には富楽などの善果を受け、悪因には貧苦などの悪果を受けること。つまり自然災害を天罰と捉えるならば、被災した人たちは天罰を受けるにふさわしい行為を過去において行ってきた悪果なのだと言えてしまうと言うことです。「行為」は仏教の言葉で「業」です。人のなした業が善因善果、悪因悪果となると考えるならば、自然災害は天罰によって引き起こされる人災だと言うことになります。この論理が荒唐無稽で受け入れがたいことは論を待ちません。因果応報の考え方で、仏教伝来以来日本人の意識下に勧善懲悪的な道徳観が培われてきた結果なのです。

自然災害を道徳の範疇で語ることは全く意味を持ちません。地震や豪雨は自然現象です。どうやっても人智の及ばない宇宙のはたらきです。仏教者が自然現象とその災害について語るときは、因果応報という道徳観で語ってはならないのです。仏の道は因果応報の鎖を断ち切り、二度とこの世界（此岸）に戻ることのない悟りの世界（彼岸）への道を進むことにあるからです。仏教者は自然現象をありのままに観てありのままに受け入れる者のことです。これは「信」です。しかしそれに伴う災害は私たちの生きる娑婆世界での歩みの障壁となる災いです。この災害の中も歩みを止めず信の道を歩むことが「行」です。自然現

象は宇宙のはたらきですが、自然現象に対する備えと対応は人が行うものです。すなわち自然現象に伴う災害は人為的なものです。自然現象は天の災い（天災）ですが、それに伴う災害は人の災い（人災）なのです。因果応報の考えを絶ちきって、ありのままに観た（信）自然現象が引き起こす災害への対処（行）が仏の道の信行であると考えるならば、災害は自然現象に対する備えをおろそかにし、対応を誤った為政に対する天罰と考えることができるのです。鎌倉時代に日蓮聖人が時の政治に対し建白した「立正安国論」は、「邪法の流通により正法が衰微し、その結果、善神捨国（邪法がはびこると国を護る神々が離れていく）となり災害が発生すると」言う当時の自然災害に対する一般的な認識に沿った政治批判書でした。自然現象の激甚化によって引き起こされる様々な災害を、正しい法（正法）によって防ごうと考えたのです。当時、一般的にそれを天罰と呼びました。日蓮聖人は天変地異による災害は自然発生的にもたらされる宇宙のはたらきではなく、人為的災害であると見なすべきである。つまり政治の問題であり、災害に対する備えや民衆に対するその場の場当たり的な対応ではなく、自然現象に対する確固たる思想・理念が必要だと考えました。ですから日蓮聖人は祈祷などの宗教的方法ではなく時の政治権力者である執権に建白書「立正安国論」を提出したのです。彼は時代的な制約の中でそれを天罰といったことと理解しなければなりません。建白書の本質は、自然現象は宇宙のはからい、災害は人のはからいと観て、今、何を信行すべきかを考えることだったのです。災害の犠牲者は常に民衆です。その被害を最小限に食い止めることが出来るのは為政の力と彼は考えたのです。

狂言綺語百七十六・顕界と冥界

一年中で最も人が亡くなる季節は冬であることはデータが示しているので疑いようがないのですが、私の感覚からすると十月十一月の秋に人が亡くなることが多いように感じます。たまたま私の親しい人や知り合いがこの季節に亡くなられているのでそう感じるのかも知れません。暑さと寒さは健康と密接に関わっているでしょうから、夏と冬の気候を極端に行きつ戻りつする最近の秋は、人の健康にも大きな負荷を与えていることは間違いないでしょう。ここ三十年近く風邪一つ引いたことのないすこぶる健康体だった私が、突如大動脈解離で地獄の入口をのぞき込んだのも二年前の十一月でした。十一月は私にとって生死不二を知る月なのです。

ついこの間も親しい方が救急車で病院に搬送され一週間後に亡くなられ、私は琉游舎で葬儀の導師をつとめることになりました。私は檀家を持つ伝統的な寺の住職ではないので、自ら進んで導師を名乗り出ることはありませんし、殊更に先祖供養の法要を呼び掛けることもありません。私が導師を務めるときは、残された方が亡くなられた方をどのように送っていけばよいか分からない、あるいは迷われている場合です。死者を見送る行為を通夜や葬儀を儀式として執り行うだけであれば私の出番はありません。生者と死者の間に立ち二者の間を行きつ戻りつしながら、互いの心と体の迷いと乱れを安心へと導くことが私の役割なのです。

導師は死者に法名（戒名）を授与し、引導を渡します。引導は顕界（現世）から冥界（来世）への橋渡しです。現世の姿を引導教訣にしたためあの世に引き渡す役割です。戒名は冥界でお釈迦さまの下、仏の道

を歩み続けるための名前です。導師である僧侶は、顕界と冥界の間にあって死者が安心してあの世に赴くことができるよう引導教訣を読み上げます。これは亡くなられた方が冥界でお釈迦さまを初めとした死者たちに温かく迎えられ、安心して暮らしていくことを、現世の生者が確信するとともに、死者も現世に心を残すことなく安心して冥界に旅立つことが出来るための言葉です。導師は生者と死者の間に立って顕界と冥界を繋ぐ者です。ですから導師は引導の場では二つの間を行きつ戻りつしながら残された人（生者）には死者の永遠のいのちを繋ぎ、冥界に旅立つ人（死者）には現世にあなたの永遠のいのちが繋げられた安心を与えなければなりません。私は今までいくつかの導師をつとめ、このことを強く自覚するようになりました。

顕界は私たちの生きている娑婆世界、生者だけが見ることのできる世界です。一方冥界は生者には見ることのできない死者の世界です。その世界を死者は見ることができているのかどうかを顕界に生きる私たちは知ることが出来ません。しかし導師をつとめる僧侶はその二つの世界を繋ぐ役割ですから顕界にとどまっているばかりでは、死者を冥界に導くことはできません。見えない世界をどう観るか、どう観ようとするか、それが僧侶に与えられた役なのです。そして生者には見えない冥界を観て、それを生者に示して生者が安心して死者を冥界に送り届けられるように導く者が僧侶です。悲しみに心が乱れ、胸が引きちぎられそうになっている生者が冥界での死者の安穏を信じることが出来た時、死者は永遠のいのちとなって生者の中に生き続けることとなり、死者の心に寄り添い、死者のいのちを生者のいのちの中に生かそうとの気持ちを生者が持つようになったとき、死者は安心して死出の旅へと赴くことができるようになるのです。これが私たち生者が葬儀を行い死者を弔うことです。導師を仲立ちとして死者と生者がひとつになる生死不二の瞬間です。

伝統的な仏教は冥界を三途の川や閻魔大王や極楽浄土の風景や仏の姿を描くことで可視化し見えるように努力をしてきました。寺院がきらびやかに荘厳され装飾されているのは、経に書かれている仏が観る極楽を、僧侶たちが顕界に可視化したものと考えればよいでしょう。しかしそれらはすべての事象を科学的に解明できると考える合理主義の考えの中では荒唐無稽に見えてしまうことは致し方ないことです。形骸化した寺院の極楽の中でも、形式と段取りで進行する葬儀場の中でも、合理的な考えを身に着けた現代の僧侶たちは、単なる儀式執行者の立場にならざるを得なくなってしまいました。現代の仏教が葬式仏教と揶揄されても致し方ありません。その根本原因は僧侶が顕界と冥界の橋渡し役であるとの立場を忘れたことにあります。顕界に安住して冥界を行き来する心身の労苦を厭うようになったからでしょう。経に書いてある通りに、や宗門が語る冥界を盲信して自分で冥界を観ようとしないからです。自ら冥界に立とうとしないからです。生者や死者がどのような冥界を望んでいるか、どのように弔えば双方が安心できるかを知ろうとしないからです。

私が引導を渡すとき必ず引用する日蓮聖人の言葉があります。「日蓮は日本第一の法華経の行者なり。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮よりのちに来り候らはば、梵天帝釈四天王閻魔法皇の御前にても日本第一の法華経の行者日蓮坊が弟子檀那なりと名乗うて通り給うべし。この法華経は三途の河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては灯となり、霊山へ参る橋なり。霊山へましまして艮(うしとら)の廊（わたりどの）にて尋ねさせ給え。必ず、日蓮は待ち奉るべく候（波木井殿御書）」日蓮聖人が冥界にもし先に至っていれば、必ず霊山浄土の艮の廊でお迎えしますと、顕界で弟子旦那に語った言葉です。顕界で

語ったこの言葉は冥界での約束です。この約束の言葉こそ「信」です。約束に向かって法華経の行者となり日々仏の道を歩むことが「行」です。ならば冥界にてこの約束は必ず果たされるとの確信がここにはあります。これが顕界と冥界を行き来し、その橋渡し役となるお釈迦様の弟子の顕界から冥界へのはなむけの言葉です。

私は未だ、日蓮聖人の言葉を引導文で語っています。この言葉と同じ信行に裏付けられた、現代のはなむけの言葉を私はまだ語る術を持ちません。どのような新しい言葉や語り口で語っても、「信」がなければ冥界への安心はあり得ないでしょう。ましてその言葉に「行」がなければなおさらです。言葉に信を与えるために行があるならば、顕界と冥界を行き来し生死不二の安心を示し続けることが僧侶の役割なのでしょう。

狂言綺語百七十七・自由自然に生きる

やっと本格的な冬が近づいてきたようで、朝の冷え込みも氷点下となり車のフロントガラスも凍る様になりました。冬タイヤへの交換、冬越しの野菜達の養生や落ち葉の整理など冬支度を始めなければならないのですが、急な寒さの到来に、外での作業を何かと言い訳をつけて回避しようとしてしまいます。「寒い朝や雪の日は車で出かけなければいいんだ」、「落ち葉も風が吹けばどこかに飛んで行き、いつかは消えているに違いない」「冬の寒さに耐えた野菜は根が張り春には美味しくなるはず」「暖かい部屋から寒い外に出ると血管が急激に収縮して血圧が上昇するから危険」など、何かと言い訳を探して後回しにしようとします。

先日、一ヶ月ほど我が家に滞在していた孫のジオを送って妻も真夏のオーストラリアに旅立ちました。到着当日には早速ジオがプールで泳いでいる写真を送ってきました。キャンベラの気温は３６度、こちらコリーナの今日の最低気温はマイナス５、９度、気温差４０度です。たった一日でこの気温差に対応して何事もなくプールで泳いでいる十一歳の姿を見ると、五十歳の年の差はやはり埋めがたい差だと実感するしかありません。子供らしい姿だと言えばそれまでですが、恐らく私の五十年前であれば同じようにプールで泳いでいたはずです。年を重ねればその年らしい振る舞いが自分らしい振る舞いとなっていくと言うことならば、寒さにおののいて、言い訳を探して、やるべきことを後回しにすることも高齢者である私らしい当然の振る舞いなのでしょう。

ある俳優が「自分らしくは甘えの言葉、悪魔の言葉」と語っていました。大変示唆に富んだ発言だと思います。子供らしく、女らしく、男らしく、年寄りらしくの「らしく」はどれも自分から積極的に求めた「らしさ」ではなく社会がそのらしさを規定した「らしく」です。他者が求めるらしさです。では自分らしくとは他者から求められるらしさではなく、自分自身が求めるらしさと考えればよいのでしょうか。であるならば、自分とは何者かを知ることから始めなければいけないと思われます。しかしこれは難しいことです。私は何者かと考えたとき私が纏う属性を全て洗い出し、その属性から私が最大公約数として納得できる「らしさ」を抽出してそれを「自分らしさ」と規定することになるのでしょうか。例えばわたしは年金生活者で、高齢者で、僧侶で、地区コミュニティの会長で、琉旂舎の舎主で、共助バスの運転手で、イベン

トの実行委員で、父で、夫で、と数え上げたらきりがありません。ましてそのらしさから最大公約数の自分らしさを抽出することは無限大の営みです。つまり「自分らしさ」という言葉は虚空に浮かぶ無、つまり「空」なのです。私はその無に向かってありとあらゆる自分が纏う属性を演じきることが「自分らしく生きる」と言うことだと考えます。他者が規定した「らしさ」に甘んじることなく、その規定を超えることを目指しながらその規定の中で自分が求める最大限のパフォーマンスを演じきること、それが私の考える「自分らしく生きる」と言うこと、言い換えればありのままに生きると言うことです。他者の規定する「〇〇らしさ」も自分が規定する「自分らしさ」にも執着することなく、「らしさ」を空と観てありのままに生きることです。

「教師の五者」という言葉があります。人に教える立場の者は「学者のように学べ」「医者のように生徒を診よ」「役者のように生徒を魅了せよ」「易者のように生徒の未来を見よ」「芸者のように生徒に寄り添え」と教育者に必要な役割を五つの「者」にたとえた言葉です。しかしこれは教師の専売特許ではありません。僧侶もカウンセラーも、誰であれ人と関りコミュニケーションによって物事を前に進める者には、このような姿勢は必要です。特定の役割に止まらず、他者との関係性の中で「私」が生きていかなければならない限り、誰にでも必要な態度で、意識的でないにしても自然な振る舞いとして出来ていることなのではないでしょうか。生きることはこの五者を代表とするあらゆるものの演者となり続けることなのです。「演者」や「パフォーマンス」というとき、自分が自分で無いものを演じることは自分らしくない、あるいは偽りの自分、仮の自分を演じざるをえない、演じさせられているという意識を持つかも知れません。また積極的に演じることは、他者を欺き、自分を偽り、結果的に互いの関係を傷つけてしまうことにもなりかねない懸念もあるでしょう。しかしそのような懸念は「自分らしさ」という幻への執着、無常の今に対するこだわりの産物だと考えます。執着を離れ「自由」になるとき「自然」に「私」と「演者」は一体となるのです。例えば俳優が舞台や映画で演じるとき、なんとか登場人物と一体化できるようにあらゆる努力を惜しまないはずです。しかし俳優はシナリオの描く世界を現実に生きることは不可能ですから、舞台の上ではどのように試みても俳優と役が同一化することは不可能でしょう。ただ同一化に近づくことは可能です。そのとき人はその演技に感動し、俳優は名優として讃えられることでしょう。それを鑑賞者としてみる私たちは、現実世界のシュミレーションとして、仮想現実を疑似体験しているに過ぎないのです。しかし生きることは現実です。諸行無常、変転流転の現実です。シナリオも練習もコーチもない私が他者との関係性を生きる現実なのです。

仮想の舞台でなく現実の舞台を生きる私たち演者に必要な言葉は「自由」と「自然」です。これは明治になって輸入された意味の「フリーダム」と「ネイチャー」のことではありません。仏教用語の「じゆ」と「じねん」です。自由は「自らに由る」ことです。何ものにも依存せず寄りかからず、それ自体で存在する独立自在にあることを意味します。自然は「自ら然らしむ」ことです。それ自体で存在し自ずからそのようであることを意味します。「私」が「らしく」ありたいと言う自我の執着を離れ無我になるときです。ありのままの自分です。ありのままの自分は自由に自然にあらゆる関係性の中でありのままに行うことが出来るのです。自由と自然の私があるとき、私は自由で自然にあらゆる私を生きることが出来ることでしょう。それが他者との関係を生きる演者であること、ありのままに生きることなのだと考えます。

狂言綺語百七十八・行く年来る年

年末年始の様相も以前とはずいぶん変わりしました。学生時代に東京で一人の正月を過ごしたことがあります。電車は動いているものの、お店は何処も閉まっていてチェーンの喫茶店が開いているだけ、しかも三が日は通常のコーヒーの四倍くらいする正月特別価格で、到底そこでの軽食すら学生の分際では望むべくもありませんでした。コンビニは草創期で見つかるはずもなく、盆と正月は東京にいるものではないと、つくづく思った次第です。ところがいつの間にかデパートもスーパーも元旦から営業を始めるようになり、正月は何処に行っても人で溢れかえるようになりました。年末年始は実家で一族揃ってゆっくり過ごすという習慣はいつの間にか消えていったようです。最近は家族揃って実家に帰省するのではなく、夫と妻はそれぞれの実家に別れて帰省するようです。子供はどちらについて行くのでしょう。保守派が日本的家族制度の維持といって選択的夫婦別姓や女系天皇に反対しても、庶民生活ではとうに日本的家族制度は崩壊しているようです。制度は常に現実の庶民生活の変化を後追いして変わらざるをえなくなってくるものでしょうから、早晩夫婦別姓も女系天皇も認めていかなくてはならなくなるでしょう。私は制度としての家族はなくなってもよいと思いますが、家族そのものの関係を改めて実感する機会として年末年始は貴重な時間だと考えます。

会社に入ったばかりの頃聞いた話では、当社では昭和四〇年代頃までは元旦に新年式を行い、終了後各取引先回りに赴いていたとのこと、元旦から御用聞きに回れば取引先も悪い気はしないでしょう。競合他社に先駆け優位を保つために「鬼十則」という行動規範を掲げ、社員全員にその額を配布する会社は、現在の労働環境からすると到底受け入れられないでしょう。しかし私は辛いともいやだとも感じたことが一度もありませんでした。その昭和の時代らしい行動規範が昭和世代の私には共感できるものだったことは間違いありません。入社当時は元旦出社はなくなっていましたが、年末の二九日は得意先回りでも酒を振る舞われ、戻ってからの仕事納めでも仲間と酒を飲み、家に戻るのはたいてい日付が変わっていました。四日の仕事始めもまた同じことの繰り返し。年末年始は酒の途切れる時がなかったことと、人に会って挨拶をしての繰り返し、ほっとしたひとときが大晦日から元旦を家族とともに実家で過ごす時間だった様な気がします。強引に聞こえるかも知れませんが、行く年を酒を酌み挨拶を交わすことで一年間たまった関係の澱を浄め、来る年を酒を酌み挨拶を交わすことで関係の再生した未来を迎えていたのです。私が過ごしたビジネス社会では、挨拶と酒が浄めと再生の儀式となり、関係の継続を可能にしていたのではないかと、そして家族と過ごす年またぎの静謐な時が、過去（行く年）と未来（来る年）を繋ぐ架け橋になっていたのではないかと、今にして思います。正月は浄めと再生の時、年越しは歳を重ね、行を重ね、それをも一度「無」にして、また、歳を重ね行を重ねる繋ぎ目の時、と言えば大仰に聞こえるかも知れませんが、数え年が年齢を表した時代は誰もが正月に歳を一歳ずつ積み重ねました。誰もが元旦に再生再誕することの現れだったのかも知れません。単なる長期休暇の期間としてしまうには、正月の存在は余りにも多くのことを私たちに語りかけてきます。歳を重ね行を重ねるごとに異なって聞こえる正月の言葉に、今年も耳を傾けることが私の行く年来る年なのです。

日蓮聖人も信者に正月を迎えた喜びを手紙に残しています。「満月のごとくなるもちい二十、かんろのごとくなるせいす一つつ、給び候い畢わんぬ。春のはじめの御悦びは、月のみつるがごとく、しおのさすが

ごとく、草のかこむがごとく、雨のふるがごとしと思しめすべし（四条金吾殿御返事、一月七日）」年末に餅と酒を頂いたお礼の言葉の後に、自然の摂理を挙げて正月の喜びはそれと同じようだと語っています。「正月の一日は、日のはじめ、月の始め、としのはじめ、春の始。此れをもてなす人は、月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく、とく（徳）もまさり、人にもあいせられ候なり。（重須殿女房御返事、一月五日）」こちらも自然の摂理に喩えて、正月を大切にする人は徳を積み人から愛されるのですと語っています。正月を迎え喜ぶことは自然の摂理、つまり宇宙のはからい、ありのままにあることです。それが人のありのままの振る舞い、そして徳のある行いであるのです。日蓮聖人の時代から変わらず、正月は過去を諦め（明らかにし）、今を観て、未来を知るときだったのではないでしょうか。

経文では「已今当（いこんとう）」が頻繁に出てきます。已は過去、今は現在、当は未来をさす言葉です。例えば法華経法師品第十に「我が説く所の経典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし。而も其の中に於いて、此の法華経は最も為れ難信難解なり」法華経の伝統的な解釈では過去の説法（已説）は法華経以前に説かれた諸経、現在の説法（今説）は法華経と同時期の無量義経、未来の説法（当説）は法華経より後に説かれた涅槃経などをさすと解釈しています。法華経を最上の経とする宗派ではこの経文が根拠となっているのですが、この経文から法華経が唯一の正しい教えだと主張することが信行の道を歩むものに取って如何ばかりかの意味があるのでしょう。そもそも経文の優劣を競うことは無意味です。経文は仏説ですが仏説は歴史上の釈迦牟尼が説いた言葉ではありません。「已」に説いた仏説を包摂しつつ「今」に「空」にし「当」に再誕したものが経文として私たちの前に示されているのです。已今当の説法も、已にある仏の言葉を諦め（明らかにし）、今にその経文を引き当てて、当にこれからの法を説くことの繰り返しだったのです。それが私たちが仏の道を歩むことなのです。仏の言葉は固定された唯一無二の実在と思うから優劣が必要になるのです。今に生きる私たちがその仏の言葉をありのままに信受したとき、已今当の法が私の信行となるのです。信行が絶え間ない再誕の繰り返しであるように、私自身の在りようも再誕生の繰り返しです。それを自覚するときのひとつがこの行く年来る年の時なのでしょう。合掌。

狂言綺語百七十九・三国四師

今年は干支の乙巳（きのと・み）の年です。十干十二支六〇通りの組み合わせで暦を表す中国伝来の暦法です。十二支はなじみがありますが、十干は現代では殆ど知られない言葉で、カレンダーの片隅に残っているだけの言葉かも知れませんが、私たちは歴史上改元が頻繁に繰り返されるなかでも書物などに残された干支と元号で正しく歴史の流れを知ることが出来るのです。因みに私が学んだ頃は六四五年を大化の改新の年と覚えましたが、今では乙巳の変の年と覚えるようです。厳密には乙巳の変に始まる一連の政治制度改革を大化の改新と言い、乙巳の変は大化の改新の第一段階であるという歴史認識になっているようです。「乙巳」の干支と「大化」の元号と「六四五年」の西暦が同じ年と限定できるのは言葉として残っているからなのです。

しかし言葉は言葉だけが残るものではありません。それを必要とした人たちの意志（意）と行動（事）が

相まって今に伝えられているのです。本居宣長は「そもそも意（こころ）と事（こと）と言（ことば）とは、みな相称へる物にして……古より云い伝へたるままに記されたれば、その意も事も言も相称へて、皆上つ代の実なり。（古事記伝）」と記しました。古事記は「いささかもさかしら（漢意）を加へずに、古代より言い伝えられたままに記されているのだから、その意と事と言も、互いに一体のもので、皆上代の実そのものである。」と述べ、漢意（からごころ）は日本人本来の「意・事・言」を表していないので、大和心（やまとごころ）を知りそこに戻るべきだとの主旨の文を残しています。国学の始祖のこの言葉をナショナリズムに利用されると天皇制の問題や国粋主義的歴史観などの議論に入ってきてしまう危険性があるので、私は「意・事・言」が三位一体である所に日本人の源流があるとの文明論の視点から観るべき言葉だと考えます。

宣長の考える文明論の源流を古事記時代の日本人固有のものと考え、回帰すべき原理と考えると容易にナショナリズムに転化してしまうでしょう。江戸時代に彼が観た日本人は古事記時代の大和心から遥かに隔てられた漢意、特に儒教に支配された日本人だったことでしょう。これを年月を重ねる中で様々な漢意を政治や文化の中に取り入れて大和心と折衷した文明の融合、日本人独自の文化とも考えることが出来るわけですが、彼にとっては古事記の日本人に比して文化を侵食され破壊された日本人の姿と思えたことでしょう。しかし外部（大陸）の「意・事・言」との接触によって内部（島内）の「意・事・言」が融合し独自の折衷精神を作り上げてきたと考えれば、それが今を生きる日本人の精神であり、固有の文化と言えるのではないでしょうか。宣長の語る大和心はその源流にある「意・事・言」と考えれば、源流が時代の流れの中でどのような大河となったかを、今この時にありのままに観ることが日本人の精神を観ることになるはずです。

世界的にみると文化は破壊と支配の繰り返しだったと思われます。それは文化の源流からの流れを暴力的に断ち切ることなのでしょう。国土の支配より精神の支配の方が遥かに困難だと考える為政者の徹底した占領方法です。特に宗教においては宗教的ジェノサイドともいうべき宗教施設の破壊は民族の精神（文化）支配の手段として行われ続けてきました。しかし日本人は破壊ではなく、融合です。だから宣長は古事記に日本人の源流を辿ることが出来たのです。彼の時代まで神と仏がなぜ仲良く出来ているのか、なぜ異なるカミが共存できていたのか、それを明らかにしたいという動機が彼に日本人の源流を辿らせたのではないでしょうか。この神仏習合と名付けられた精神的融合はインド中国日本の三国の文化と精神の融合です。そして今に至る日本人を作ってきたのです。源流を明らかにし、そこに回帰するべきだと訴えることが日本人固有の精神を語ることではないでしょう。文化も精神も絶えず流れ続けるものです。過去や他者を包摂しながら融合と反発を繰り替えし作り上げた文化（精神）の共棲のあり方を固有の精神と呼ぶべきではないでしょうか。

私は宣長の古事記伝を孫引しているため、正しく彼の考えを理解しているか心許ないと断った上で、彼と同じようにナショナリズムに利用されてしまいかねない思想家に日蓮聖人がいることを語りたいと思います。彼の思想も戦前に日蓮主義として侵略戦争やテロ行為の思想的裏付けとされてしまいました。しかし彼は法華経こそが正しいお釈迦さまの教え（正法）であると証明し仏の道を語る法華経原理主義者でした。古事記に回帰することが日本人の原理であると主張する宣長と基本的には同一の思考経路を辿った人物だと考えられます。日蓮聖人は顕仏未来記に「伝教大師云く『（中略）天台大師は釈迦に信順し法華宗を

助けて震旦に敷揚し・叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す』等云云、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く」、要約すると「伝教大師（最澄）は『釈迦の教え（法華経）を天台大師（智顗）が中国に弘め自分が比叡山に受け継いできた』と語っています。安房の日蓮はこの三師（釈迦、智顗、最澄）を相承し末法の世に広める者である。法華経は三国（印度・中国・日本）に四師（三師に加え日蓮）によって伝えられる教えである。これを『三国四師』と名付ける」と述べています。日蓮聖人が法華経の源流まで辿り、法華経の正当な継承者であることを宣言した言葉が「三国四師」です。お釈迦さまのこころ（意）とおこない（事）とことば（言）、つまりお釈迦さまの「教え」を三国三師継承の跡を辿った末に今の日本から未来へ継承していくのは日蓮であると言う矜持と自覚があります。日蓮は過去ではなく未来の自分の果たすべき役割を語っているのです。過去回帰ではなく自分の源流を明らかにし、その流れを未来へと強く押し進めるためには「意・事・言」を明らかにする必要があったのです。

巳年に喩えれば、源流から流れ始めた「意・事・言」は多くの人のいのちを経て、脱皮を繰り替えして今私たちの手元にあるのでしょう。今私自身が受け取っている様々な「意・事・言」を明らかにし、新たな脱皮を促していのちを繋げていくことが、今を生きる私の信行だと自覚した乙巳の年頭です。

狂言綺語百八〇・お告げ

私が口ずさむことの出来る歌の殆どは、子供時代から聞き慣れた歌謡曲や演歌、年代的に言えばせいぜい平成の初期頃の歌までです。理由は簡単で、歌がどんどん難しくなって私の能力では歌うことが出来なくなってきたことが一番です。リズムもコード進行も昭和生まれのシンプルな身体反応をどんどん裏切るような変化を遂げてきたようで、日本人に染みついた音階とリズムの伝統の中で昭和時代を過ごしてきた私には再現不能の音楽になってしまったようです。ただ最近の BSTV では昭和歌謡の特集が毎日のように放送され、地上波でも昭和や平成に流行った歌の番組がたまに見られるのは、若い世代にもアピールする音楽だと制作者が考えているのか、それともテレビの視聴者の中心が昭和世代になってしまったのかどちらなのでしょう。

広告業界で生きる糧を得てきた私は、時代に寄り添うことで昭和平成を過ごしてきましたが、その果てが今の日本だとしたら、それは幻想に過ぎず、実のところ寄り添ったつもりでいてもどんどん時代から乖離してしまっていたのではなかったかと思ってしまいます。時代を映す鏡であるはずの流行歌や映画も演劇も文学も、今の私には何一つ語りかけてこないのは既に私が時代とは無縁の世界を生きている事になるのでしょうか？それとも時代という概念で今を見ることが不可能なほど現象のひとつひとつが普遍性と共有性で括ることが困難になってしまい、時代性という言葉が機能しなくなってしまったからなのでしょうか？

時代性を顕著に表す広告の世界は、時代を見極め広告表現に変えてマス媒体で不特定多数の人に大量投下すれば効果があったのですが、今はネット広告がターゲットを選別し必要と思われる人にピンポイントで広告する方法に変容しました。表現が時代（社会）に問いかけて購買に導く手法から、個人の趣向欲望

に個別に応える手法へ変容したのです。その結果送り手はデータ取得と解析が容易になり費用対効果が飛躍的に向上しましたが、逆に受け手は自分の見たいもの聞きたいことだけしか受け取ることが出来なくなったのです。正確に言えばそうでない情報も溢れているはずですが、自分が望む情報、同じ考えの情報だけが優先的に届けられるため、他の情報を見る機会も検討する努力も失われてしまいました。かつて情報は国家統制の下、一元的に与えられてそれに従わざるを得なかった不自由の時代があり、戦後の自由主義の時代になると溢れる情報を自分自身で取捨選択する自由のあった時代を経て、今は、自ら情報取得を制限し聞きたいこと見たいことだけしか必要としない情報無価値時代にあると言えるのです。私は社会が情報の真偽優劣を吟味し議論することで初めて情報は価値を持つことが出来ると考えます。その機会も意志も与えられない情報は「あなただけの特別なお知らせですよ」と耳打ちされた公共性（責任）の伴わないお告げにしか過ぎないでしょう。お告げは信じたい人たちだけに告げられる情報です。信じたい人にとってそれは価値のあるものですが、信じない人にとってその情報は無価値です。ここにひとつの情報を挟んで信じる人信じない人の二つに分断が起こることになるでしょう。私たちは今情報の無価値化による分断の世界のただ中に生きているのです。

お告げは神の言葉です。神が不思議な夢や神がかりなどを通して神の意志を人に伝達することです。託宣、神託とも言われます。日常的判断を超える難問の解決に神の意志が必要とされる場合に用いられた方法です。お告げを得る方法は各々の民族や宗教で異なっていても、おおむね夢や占い、天変地異、動物の鳴き声などで神託を得ていたようです。既成宗教が久しく信仰力を失い、新興宗教も完全に保守化高齢化し化石宗教の段階に入ってしまいました。カルト集団とされるオウムや統一教会は言うに及ばず、宗教教団が大きな力になり得なくなってきている状態が現代の宗教環境だと思います。教祖のもとに信者が集まり宗派を作って信仰生活を送るというオールド宗教から、今やマインドフルネスと呼ばれる個人の瞑想体験を通して心身の安定と癒やしを得る個人的な宗教体験へと変容してきたようです。かつては教祖様が託宣を得て信者に伝えていたお告げは、今その仲介者である宗教的職能者（教祖、預言者、巫女、シャーマン）などを必要としなくなり、個々人が神などの絶対者を措定しないまでも、瞑想体験などを通して何か超越的なものに触れることを求めている人々が存在しているのです。もはや人々は宗教的なお告げは必要としなくなってきたかにも見えるのです。私はこのことが、宗教が個人的な体験であるとの流れの中にあるのであれば、宗教が作る支配被支配の関係から個人の自由な信仰へと解放される機会になると考えます。教祖も特定の絶対者も必要としない宗教の実現です。お告げが仲介者を必要とし、教祖と信者の宗教的ヒエラルキーが形成されて行ったと考えれば、お告げを必要としなくなり、大いなるもののはからい、ありのままの世界、宇宙そのものと一対一で対話することのできる、平等と自由、教義に束縛されない真の信行が実現できる宗教になると考えます。

しかし世界的に見ればお告げは形を変え社会への影響力を駆使しようとしているように見えます。政教一致のイスラム国家や、キリスト教福音派が支持基盤であるトランプは、ソーシャルメディアや放送を通して信じたい者だけに理解される言葉（お告げ）を告げているのです。お告げを信じない者にそれを理解してもらう努力は皆無のように見えます。信じない者には暴力や経済力でねじ伏せて屈服させることが出来ると考え実践しているからです。信じない者と、同じ土俵で議論し合意点を得るとの民主的手続きは端から無視しているのです。だから彼らが発する言葉は「情報」でなく「お告げ」なのです。お告げは信じる

者への指令です。支持する者に信じたい言葉（お告げ）を告げる者が現代における神の仲介者、預言者なのです。

世界の潮流に日本だけが関係ないとは言えません。昨今の選挙でのソーシャルメディアの影響力は旧来メディアに慣れ親しんだ昭和世代には異常です。なぜ吟味されない無価値情報を無批判に信じてしまうか未だ理解できません。しかしそれが令和の時代というならば、私はそんな時代性には寄り添いたくはありません。

狂言綺語百八一・功徳を積む

最近「タイパ」という言葉がTVのインタビューシーンで若者の口からよく聞かれるようになってきました。タイムパフォーマンスを略してタイパ。時間対効果のことです。費用対効果を意味するコストパフォーマンスの略語、コスパに続いて、若者（Z世代）に一番重要視される行動指標のようです。コストパフォーマンスは私も仕事の場ではよく耳にしていた言葉でしたが、それはあくまでも企業活動の評価指標であり、私自身の働き方や日常生活の場で使われる言葉ではありませんでした。その効果は数字で計られるものですから、かかった物理的費用や時間、すなわち数値に対する経済利益（数字）として示されるものです。それは物理的投資に対する満足感や達成感という心情的効果は一斉加味されない、無機質な客観的事実なのです。

ところで「コスパ」や「タイパ」のように略語として個人の行動指標に使っているZ世代では、この言葉はかけた費用や時間に対する心情的効果を表しているように見えます。つまり物理的数値を個人の満足度という心情評価の指標に還元していると言うことです。ただ心情評価は定量化ができないものなので、他人の心情評価を共有したり客観化したりすることはかなり難しいことだと思えます。個人の満足度が集団や組織の満足度、ひいては国民の満足度にまで繋がっていかなければ、コスパやタイパによって得られる満足度は個人的な満足、つまり自己満足に終わってしまう可能性もあるはずです。費用対効果や時間対効果といういかめしい語感に残っていた生真面目さや客観性は、略して使われることで主観的刹那的な満足度の表現に変質していなければ良いのですが。コストパフォーマンスやタイムパフォーマンスの言葉が本来持っていた、厳然たる数値事実の重みに比して、略語はいつでも自由に満足値を変えられるような身軽さとともに軽薄さを感じるのは私だけの主観的な見方なのでしょうか。しかしその自己満足がある一定数集まれば社会的な潮流となって、無視できないパワーになってきます。極端な事例に聞こえるかも知れませんが、例えば給食費や高校授業料の無償化を要求する野党の政策などコスパ・タイパ欲求の局地に私には見えてしまうのです。

無償化はコストも時間もゼロで効果だけが得られる仕組みです。要するに只で手に入れられる利益です。投資行為無しの利益享受です。私はコストと時間に費やされたものは必ず何らかの効果があると考えるべきと思います。たとえ赤字となり一時的にマイナス効果となったとしても、経験知として残されるからです。そして経験知こそが私たちの智慧の集積であり、社会を作り上げていく土台となるものと考えます。ところが時間もコストも自ら投資しないで、効果だけを与えられたとしたら、私たちにはどのような経験

知が残るでしょうか。あまりこの問題を論理立てて述べても格差や平等などの視点から異論反論が出るでしょうから、私は先人の経験知によって伝えられている格言を挙げます。「只より高いものはない」です。一時的に無償でも後になってそれ以上の対価を支払うことになるでしょう。また経験知がゼロというだけでなく「要求すれば只で利益が得られる」というマイナスの経験知を積み重ねることになり、ひいてはあらゆる投資行為は、必ずや何らかの利益に還元されるだろうとの、社会発展のための基本的動機を学ばないことになるでしょう。

功徳を積むことは自らへの未来の投資です。そして必ずや回向の形で自らの悟りのためにさしむけられると信じることが、私の信行の歩みを支える基盤です。功徳を投資と表現することに抵抗を感じる仏教関係者もいるかも知れません。しかし悟り（安らぎの処にたどりつく）を得るために信行の道を歩む私には、功徳を積むことで「自利利他」の菩薩行の道を進むことが可能となるのです。自己が行じた善根の功徳をめぐらし、自己だけでなく他者とともに安らぎの処への歩みを進めることが自利利他です。人は一人では生きることが出来ないわけですから、私たちが生きている限り自分だけの安らぎの処への到達は不可能です。もしそれを主張するならその人は偽善者か自らの功徳の施しに自己満足しているだけです。自己の悟りを目指し他者にもその悟りを差し向け、結果的にそれが自己の悟りへ差し向けられることが回向であり、自利利他です。だから功徳は自らへの投資なのです。自利利他は効果です。功徳に対するリターンです。私はこの信行の道の構造を意識的に自覚することが大切だと考えます。人のため世のため未来のためと言うような曖昧なままの行はタイパやコスパと同じように物理的投資を心情的満足にすり替えてよしとする危険性が潜んでいると思います。ですから私は自らの信行を自利利他実現のためと自覚し仏の道を歩む必要があると考えるのです。

功徳を語るときに重要なことがもう一つあります。それは肉体生命のあるうちに功徳のリターンが自利として自分にもたらされると思ってはならないと言うことです。法華経分別功徳品第一七にある経文です。

「余各八生在　当得成仏道　或有四三二　随数生成仏　或一四天下　微塵数菩薩　余有一生在　当得一切智（余各八生あって　当に仏道を如此四天下　微塵数菩薩　成ずることを得べし　或は四三二　此の如き四天下　微塵数の菩薩あって　数の生に随って成仏せん　或は一四天下　微塵数の菩薩余一生あることあって　当に一切智を得べし）」この経文の主旨は「功徳を積めば八回の輪廻（生まれ変わる）あるいは、四，三，二、一回の生で仏道を成就できるだろう。」です。八回生まれ変われば悟りを得ることが出来る者もあれば一回の生で得るものもいる。これが仏教のいのちの考え方、つまり物理的いのちは私の命ではあっても、衆生のいのちではないのです。なぜなら諸法無我だからです。我の肉体的な命の繰り返しの中で衆生は永遠のいのちを繋いで行くという考えです。功徳の回向は我ではなく永遠のいのちにさしむけられる利益なのです。

私たちの生きる世界は現世です。そして現世利益を追求する宗教が多く存在することも事実です。私はそれは正しいことだと思っています。しかし現世は我の肉体生命を存続させる場所ではなく、衆生がいのちを繋ぐ場所です。そこを取り違えると現世利益の追求は利己主義、自己満足の利益となってしまうでしょう。

狂言綺語百八二・うたかた

世相を軽佻浮薄と見る人たちは、時代に浮かれるには年を重ね過ぎて気恥ずかしくなってきた主に高齢世代であることはいつの時代も変わりがないでしょう。かくいう私も若いときは、年上の方々から軽佻浮薄だと思われる日々を送っていたに違いありません。その私が今の時代をもし軽佻浮薄と呼ぶならば、ただ歳を重ねた老いの繰り言にしか聞こえないはずです。世代間の価値観や行動の相違は、変化や成長と呼ぶ波が浚ってはまた寄せて来る繰り替えしによって、いつの間にか新しい価値観や文化に生まれ変わるのでしょう。

国家が文化や風俗を厳しく統制していた時代が敗戦によって一気に解放され、高度成長を邁進、オイルショックを乗り越えてバブル経済で、軽佻浮薄を旨とする大衆文化は頂点に達したと思われます。しかしその熱気と時代を性格づける原動力はバブル崩壊以降、浮かれたくても浮かれられず、熱くなりたくても熱くなれないままに、軽快で熱を帯びた大波は消え去り、局地的に所々に澱んだ波の塊（泡）がぷかぷか浮かんでいるだけに見えるのです。その個性とか〝らしさ〟を自称する塊は、ひとつの大きなうねりとなることもなく〝うたかた〟となっていつの間にか消えていくようです。軽佻浮薄の象徴であった大衆文化、国民文化の波はもはや存在しえなくなり、あとは蛸壺か塹壕とも知れない個性と呼ばれる穴に潜り込むだけなのでしょう。

軽佻浮薄の代表的な唄と言えばクレイジーキャッツのスーダラ節だと思います。無責任男を標榜し、高度成長期に猛烈に働き、遊び、国民全体が上昇志向の塊となってがむしゃらに生きた時代の象徴のような植木等は「分かっちゃいるけどやめられない」というフレーズで自虐的に自らを時代の鏡に映し出していました。時代を代表する彼の軽薄さと熱意と生真面目さ、そして何よりも人間洞察の末の諦念が「分かっちゃいるけどやめられない」の言葉に表れているのではないかと私が思うようになったのは、もはや軽佻浮薄の波に乗る歳でもなくなり、時代の表層に漂うことで生きる糧を得る必要がなくなってからです。植木等の父上は浄土真宗の僧侶にして熱心な社会運動家でした。息子がこのような無責任で開き直ったような唄を歌うことを父が許してくれるだろうかと、おそるおそる聞かせたところ、「スーダラ節の文句は真理を突いている。あの歌詞は親鸞の教えに通じる」と述べたとのことです。「分かっちゃいるけどやめられない」の言葉は、親鸞聖人が「罪悪深重煩悩熾盛」と自覚することで辿り着いた他力本願の教えに通じると、言っているのです。人は「苦」に満ちたこの世界（苦海）を泳ぎ切らなければ溺れてしまいます。この苦海を罪悪深重煩悩熾盛の重い業を背負ったままでは泳ぐことも出来ません。だから「分かっちゃいるけどやめられない」と軽佻浮薄の浮き輪を身に纏い、罪悪深重煩悩熾盛の身のままにこの娑婆世界を泳ぎ切るのだと言う思いが「スーダラ節」の歌詞に込められていると言うことなのです。「分かっちゃいるけどやめられない」と自らに言い続けることが、昭和の時代の無責任男の他力本願、念仏だった言ってしまうと熱心な信者の皆さんから大変な反発とお叱りを受けるかも知れません。しかしその言葉は昭和の高度成長期の人々の心を捉え、罪悪深重煩悩熾盛の自覚を「分かっちゃいるけどやめられない」との言葉に変えて唱え続けることで、時代の苦海を泳ぎ切ることを可能にしたのです。軽佻浮薄（無責任男）の自覚を持っているからこそ「分かっちゃいるけどやめられない」の浮き輪を身に纏うことができ、世相の波となって世の中に新しい価値観や文化を生んできたのでしょう。逆に、私が何であるかの自覚も葛藤もないところでう

たかたとなって漂う無自覚者の行動や言葉は、世相の波を澱ませ、いずれその澱みが腐敗し腐臭を発して世相を蝕んでいくのでしょう。

ネットや TV から聞こえてくる声はいずれもうたかたとみて、消え去っていくだろうと思えば気にならないのですが、弔いに関する声に限れば、私としてはそのまま放置するわけにはいきません。「弔い」は弔う者（生者）がこれからどのように生きていくのかと言うことを、弔われる者（死者）を通して自らに問いかける行為だと私は考えるからです。生者がどのように死者をもう一つの世界に送り届けるかが、弔いの形となって現れるのです。もちろん弔いのカタチは時代や社会構造の変化と伴に変わっていくことは必然です。逆に変わるべきものでしょう。ただ、弔いの本質を自覚しないで表層（形式）だけで弔いのカタチを変えていくことは、死者に対する冒涜であり、生者自身を貶めていることに気がつかなければなりません。弔いの本質は何かと言えば、それは死者が今まで生きてきたいのちを生者が受け取り、そのいのちを頂いて永遠のいのちとして共に生き、繋げていくことです。いのちの相続を死者と生者の間で行うことが弔いなのです。

弔いの場（葬式）で A 氏で死者の言葉と姿を蘇らせ、生者と死者が会話するアトラクションのような葬儀や、お棺に体験入棺する人々が弔いの新しいカタチとして TV で紹介されていました。弔いをショーとして見ないとこのような発想は浮かんでこないでしょう。ショー化することで哀しみを少しでも和らげられると考えているのでしょうか。入棺体験をすることで死者に寄り添うことができると考えているのでしょうか。死者と A 氏を通して会話することで、死者の気持ちに共感できると考えているのでしょうか。これ以上コメントする気にはなれません。弔いはショーでも見世物でもありません。死者のいのちを頂く、いのちといのちのやりとりの場です。この無自覚の軽佻浮薄の風潮がうたかた（泡沫）として消え去れば良いのですが、無自覚のバブルが集まり、世の流れを堰き止めてしまうようになると、世は腐臭を漂わせることになるでしょう。

軽佻浮薄の浮き輪は、罪悪深重煩悩熾盛の身が死を迎えるまで泳ぎ続けるために必要な道具なのです。この自覚があれば、私たちは一時で消え去るうたかたの生ではなく、誰かが繋ぐ永遠のいのちの生を担うことができるはずです。儚く消え去ると思えたうたかたのそれぞれが、世の波に軽やかに浮かんでいるうちに集まり、渦となり大きな波へと変わっていくこと、それが永遠のいのちをつなぐことなのだと考えます。

狂言綺語百八三・レコンキスタ

レコンキスタという言葉は西洋史の授業で学んだだけで、教科書から遠ざかって以来久しく耳にする言葉ではなかったのですが、先日のスペインの旅ではガイドさんが「レコンキスタ」と何度も口にし、それにまつわる遺跡見学をする機会を得たことで、スペイン独自の歴史と人類間の宗教と権力そして文化の関係を改めて考えることができました。レコンキスタはスペイン語の再征服の意味で、国土回復運動と訳される言葉です。八世紀に始まるイスラム支配に対する、イベリア半島のキリスト教徒による反撃の動きで、十一世紀から活発となり、十五世紀末まで続き一四九二年にスペイン王国がイスラム教国のナスル朝の最

後の拠点グラナダを陥落させ、イスラム勢力をイベリア半島から北アフリカへと駆逐した一連の活動のことです。

私が見たレコンキスタの痕跡が色濃く残る遺跡は、コルドバにあるメスキータとグラナダのアルハンブラ宮殿です。メスキータはスペイン語で「モスク」、イスラム教の礼拝堂です。モスクは寺院ではなく礼拝所です。偶像崇拝が固く禁じられているので、中はがらんどうで自然物や文字を意匠した装飾だけのはずですが、メスキータの内部はカソリックの礼拝堂となっており、キリスト教崇拝の彫像や絵画で荘厳されていました。メスキータが建てられた場所は最初キリスト教の聖堂がありましたが、その後イスラムの支配になります。権力者がキリスト教に寛大であったため、聖堂を破壊せずモスクに転用しました。その後何度もの改築を経てイスラム教発祥の地メッカをも上回る世界最大規模のモスクとなりました。内部に立ち並ぶ数百本に及ぶ円柱の森は当時のイスラムの高度な技術と繁栄を偲ばせます。後に十三世紀のレコンキスタによりコルドバは再びキリスト教が支配する土地となり、メスキータはキリスト教の大聖堂に転用されたのです。かつてのイスラムの人々が、キリスト教の大聖堂に敬意を払ったように、今度はキリスト教徒たちがモスクに敬意を表しました。と解説されていますが、本当に宗教的寛大がメスキータが現存する理由なのでしょうか。

アルハンブラ宮殿はイスラムの王の宮殿ですが、都市の性質も備えており、住宅、官庁、軍隊、厩舎、モスク、学校、浴場、墓地、庭園といった様々な施設を備えていた、イベリア半島最後のイスラム支配の城塞都市でした。建物の外観も内部もイスラム様式と宗教思想によって作られていて、レコンキスタ後にキリスト教支配が確立された後も、キリスト教の痕跡は宮殿内部には殆ど認められませんでした。後にこの地を気に入ったスペイン王、カルロス一世が支配の中心地にしようとして城塞内に教会や宮殿を建設しましたが、アルハンブラ宮殿は手つかずにそのまま今に残されています。これも宗教的寛大さの故でしょうか。

一神教は多神教の宗教に比べて宗教的寛容性が低いと思われています。一方多神教のヒンズー支配と仏教の支配が繰り返されたアンコールワットは、徹底的な宗教施設の破壊はされずに残されています。私はそれが寛容度の高いアジア人の宗教、多神教のヒンズーや後に十方世界に様々な仏を措定した多仏教の故かと思っていました。現代でも宗教を旗印にした戦争や迫害、差別は後を絶ちません。記憶に新しいところでは、バーミヤンの仏教遺跡をイスラム原理主義者が破壊した出来事がありました。宗教権力による支配は土地や経済の支配だけでなく精神の支配でもあるはずですから、その象徴である寺院や礼拝所は支配者が変われば徹底的に排除されるべきものではないでしょうか。ところが一神教の両極端にあるようなキリスト教とイスラム教のスペインにおける支配の変遷の痕跡は、両者の宗教的寛容性を示しているかのようだったのです。

私は他宗派の寺院や他教の聖堂を訪ねるとき礼拝は致しません。私の信仰は私の「信」を支えるお釈迦様と日蓮聖人によって支えられているからです。かといって私が歴史的宗教遺跡を訪ねるときは、美術的建築的興味からその中に入るわけでもありません。ただ私と異なる「信」のあるところに立ち、その「信」のありようを体感してみたい為だけなのです。この地に住む人たちがこの地で何を「信」とし、どのようにその「信」を信じ続け、何を求めたか、何が与えられたかを、その「信」の断片だけしか触れられないとしても、私自身が体感し、私の「信」と対比したいという大それた望みがあるからです。そしてそれがまた私自身の「信」を対象化し、それによって強靭化されると強く信じているからです。私は観光客でも比較

宗教の研究者でも、他宗教への反動者でもなく、ただ心静かに他者の「信」の前に佇む異教徒でありたいのです。神も仏も十字架もコーランもないままの、あなたのありのままの「信」のありかを見たいだけなのです。

残念ながら、私の経験では遺跡として残されている宗教施設の中で、他者の「信」に触れることのできた機会は皆無だったと言ってよいでしょう。半ば無い物ねだりであることは分かっているのですが、逆に強烈に私に見せつけてくるのは、宗教遺跡が持つ飽くなき人間の権力意志と自己顕示欲です。しかもそれが宗教という衣を纏いながら私に迫ってくるのですから、私がそこで他者のありのままの「信」に触れることができないことは自明のことなのです。そこにあるものは、権力意志の総体が、宗教意志を仮装して被支配者を心身共に支配しようとする飽くなき欲望、煩悩です。人間の煩悩が要求した具体物が世界遺産として私たちの前に残されているのです。宗教に名を借りた欲望の象徴を人類の遺産とする私たち人間は、何とシニカルな生き物なのでしょう。宗教的寛容性と見えたモノはあからさまの煩悩を包むミエだったのです。

私の「信」があなたの「信」と共存するためには、権力意志を介在させない限り不可能なことなのでしょうか。私の「信」が集団や組織に吸収されない限り信仰は成立しないのでしょうか。しかしそれはもはや私の「信」ではないのです。レコンキスタは宗教権力(集団・組織)の移行でした。その中でも「私の信」を変わらず保ち続けた「私」がいたと信じたいと思います。集団から「私の信」を取り戻すことは可能か、そんなことに思いを馳せた、スペイン、レコンキスタの旅でした。

狂言綺語百八四・菩薩行

日本の国土が徐々に荒廃して来ていると感じるのは私だけの実感なのでしょうか。日本人は「一所懸命」の言葉にあるように、先祖代々の土地を命がけで護ってきたものです。私が関東平野の最北端、里山と田園が隣接する地に引っ越して九年、年を経る毎に荒れ果てていく風景に思うことは、先祖が何百年に渡り貧弱な道具だけで荒れ地を開墾し水を引き畑や田んぼに整えて一所懸命に護ってきた土地は、また元の木阿弥、あっという間に荒れ地に戻ってしまうのではないかとの危惧です。点在する耕作放棄地は三年でそこが田んぼであった姿を留めることなく、ただ雑草の繁茂する荒れ地となりました。五，六年も経つとそこに実生の木が生え、十年もすると雑木林になっているでしょう。またかつては燃料とする薪や肥料となる落ち葉の供給地であった里山の雑木林は荒れるに任せ、猪などの野生動物の住処となりました。一方では戦後の植林政策で植えられた杉や檜は、担い手の高齢化や経済性のため放置され花粉症の供給源となっていたところ、最近の木材価格高騰でやせ細ったままで切り出されています。里山は荒れ果てた雑木林と、やせ細った杉や檜と、それが切られた後のはげ山と、太陽光発電パネルと、不法産廃捨て場の無秩序地帯と成り果てました。

荒廃は里山や田畑の示す自然の風景だけではありません。廃屋もまた風景の荒廃をもたらします。人の住まなくなった家屋は後継者のいない農村部だけでなく、駅前のかつての繁華街も人気のないシャッター街です。雨戸が閉まり蔦が絡まり、庭も雑草が生い茂る無人の家屋は〝兵どもの夢の後〟ではなく、土地に

執着する欲望のなれの果てです。〟一所懸命〝に〟護る〝が〟執着〝へと読み替えることに恥じることのない人の性です。私有財産の権利に所有者も行政も胡座をかいて、無策のまま放置した荒廃の風景です。自然や地域や隣人と共棲して生きていこう、私はそれらに生かされているのだからという感謝と共感の心持ちさえあれば、「私有」に執着する「苦」から解放されるはずなのです。私が今所有していると思わされているものは、たまたま大いなるもの（仏）から一時的に貸し出されたもので、自分が所有するにふさわしくないと判断したら、すみやかにお返しするか、後を継ぐにふさわしいものに委ねるかしなくてはならないのです。それが永遠のいのちをつなぐということです。それが大いなるものに生かされている衆生の生きるということなのです。

風景の荒廃は、自然だけでなく人の営みにも心にも荒廃をもたらします。しかしその荒廃は少しずつ気づかないように進んでいくものです。その土地に住み続けている人にとってはその変化は変化と感じられない、日々の当たり前の日常なのです。だから恐らく荒廃を荒廃と感じないままに、この土地で生活し続けることになるのでしょう。そのような中、故郷が荒廃する姿を敏感に感じとり、何とかかつての故郷を取り戻したいと考え行動に移す人たちがいます。彼らは東京で一家を成し、仕事でも立場を得ている三十代後半の世代です。彼らは十八歳まで育った故郷が帰省の度に荒廃し衰微していく姿に耐えられず、東京での仕事も住居も仕舞い、故郷に戻ってきました。東京で働き続ければ今よりも遥かに高収入の安定した生活を送れたことでしょう。家族も子育てや教育環境を考えると、そのまま都会に住み続けたかったに違いありません。それでも故郷に戻ることを選択した理由は単なる使命感や正義感ではないはずです。恐らく彼らにはその土地を護り続けてきた永遠のいのち達（地主神）の窮状を訴える声に耳を傾けることができたからなのでしょう。

私たちは自分の今立っている大地や吸っている大気や目に入り耳に聞こえる環境と対話しようと心がけているでしょうか。私たちの過去現在未来は縁起の法則、因果関係によってあるのです。その縁起を司っているものが大いなる存在です。それを私は仏と呼びますが、神とも宇宙の摂理とも、あるがままとも、諸法の実相とも、何と呼んでもかまわないのです。ただ私たちは一人で勝手に存在しているのでなく関係性の中で大いなるものに生かされている存在なのです。私たちが関係性の中でお互いが心安らかに豊かに楽しく暮らしていくために必要なことは、自分以外の存在に耳を傾け対話することです。主張からは対話は始まりません。主張には反論や同意など、まず主張に応えることから始めなければならないからです。ありのままの今を語り、ありのままに耳を傾けることから対話が始まります。それは互いを尊重し慈しみ共棲へと繋がる道なのです。自然は互いの声を聞き合っているからこそ自然の変化に応じ、いのちをつなぐことができているはずです。人間だけはその変化に鈍感なのか聞く耳を持たないのか分かりませんが、変化への叫びや哀しみを聞こうとしないようです。自分以外の全てに耳を塞ぎ自分の主張だけを繰り返す世界は、荒廃への道を歩むほかありません。環境だけでなく私たちの生活も心もそれと気づかないままに荒廃に向かっていくのです。

それと気づかないうちに進んでいく自然や生活や心の荒廃の声を聞こうとする人、その声に聞く耳を持つ人を、私の信ずる大乗仏教の教えでは菩薩行を歩む人と名付けます。法華経観世音菩薩普門品第二五は「南無観世音菩薩」と唱えるとたちまち菩薩はその人のために三十三の姿に現身して救いの手を差し伸べると説かれているため現世利益の代表の経文と思われています。仏教が多くの人の支持を集め大衆化する

ためには必要な経文だったのでしょう。その部分を差し引いてこの経の本質を観れば、それは私たちが進むべき菩薩行を示しているのです。菩薩行は「自利、利他」です。自らの悟りのために修行し努力すること、他の人の救済のために尽くすこと。この二つを共に完全に行うことです。自分の幸せは他者も幸せになることで初めて可能となると言う考えです。そのためには「観世音」であること、つまり世の中をありのままに観てその声（音）をよく聞くこと、そしてあらゆる姿（三十三身）に現身して（寄り添って）ともに歩むことが必要になるのです。これが菩薩行です。都会から故郷の荒廃の声を聞きこの地に戻ってきた人たちは菩薩行を歩み始めたようです。彼らに共感を持ってともに歩んでいくこともまた私たちの菩薩行なのです。

狂言綺語百八五・ふるいにかける

網目をどんなに細かくしようが、ざるはざるです。そこに水を注げば必ず水はざるの下にしたたり落ちます。網目を細かくすれば固形物はざるに残り、下に落ちる水は混じり気のない液体に近くなるでしょう。ただどうやっても水がざるの下に落ちることは避けられません。なぜならざるの定義は「食品や食器などの水気を切るのに用いる線状のものを編んだ構造もしくは底部に穴が開けられた構造になっている容器」だからです。だからざるに水を注ぐ行為は何処まで行っても水漏れを容認する行為です。水漏れを絶対起こしてはならないならば、ざるに替えてガラスや陶器などの網目のない器を用いなければならないことは明らかです。

ざる法と呼ばれる法律はしばしば改定しようとする試みがなされます。しかし改定の試みはざるの網目を小さくする試みだけで、違う容器に取り替えることではないようです。ざるといわれたものをどう改良しようともざるはざるです。ざるは抜け穴があることが前提ですから、抜け穴を抜けることのできた不正行為は、法律で罰することはできません。ざる法は法律違反にはならないものの、不正行為は容認するということです。「ざる法」は法律用語ではなく俗語です。法律違反にならなければ法的には正当行為と言えますが、俗語は社会常識や大衆の生活実感から生まれる言葉です。だから大衆感覚から見てそれは不正だと思われても、法律違反にならない法律を「ざる法」と呼んで大衆は異を唱えているのです。日本のざる法の筆頭は政治資金規正法であることは衆目の一致するところでしょう。現在の改定論議の帰趨が、ざる（抜け穴）を容認するか、絶対に抜け穴のない容器に入れ替えるか、私たちの社会常識、大衆倫理が問われることになるでしょう。

ざるとふるいは用途の違いや形状などで別物に分類されていますが、両者とも本質的にはあるものとあるものを選別するために用いられる道具です。選別することは排除もするということ。「ふるいにかける」の言葉が示すように、ある基準によって、多くの人や物を選び分けて、その基準に適さないものを排除することになるからです。典型的な選別方法は物質ではフィルターなど、人ならば入学試験等の試験です。他にもカードや保険の加入、融資を受けるときの審査もあります。病院の入口にはマスクの着用と体温測定の入場審査があります。空港の保安検査も、何らかの団体や施設への参加も、形は違えども選別審査（ふるい）が存在します。私たちの日々の生活では常にふるいによって、選別排除が行われているのです。選別

排除の基準が数値化や可視化されていれば誰もが受け入れざるを得ないはずですが、ざる法という俗語が存在するように、言葉だけの基準ではすべての人がそれを受け入れるとは限りません。言葉が信頼されるのは行動の裏付けがあればこそです。ふるいにかけられた私たちがふるいの存在意義を認めることができるのは、ふるいをかける人の言葉に基準を実証する行為が伴っていたときです。行為なき言葉はでまかせの言葉です。ふるいにかけられることが大半である私たち大衆が信じるべきことは、言葉ではなく行為が示す事実なのです。

宗教にもふるいはあります。「善人なおもって往生を遂ぐ いわんや悪人をや」という有名な親鸞の言葉があります。「善人ですら現世を去って仏の浄土に生まれることができる、ましてや悪人はなおさらである」という ことです。この言葉は一見すると全ての衆生は仏(悟り)の世界に生まれ変わることができると読めます。実際、高校の歴史資料でこの部分を読んだとき、何と慈悲深い大らかな考えだろうと思ったのですが、その有資格者は他力本願、阿弥陀仏に帰依したものだけだと知ったとき、逆に宗教の閉鎖性排他性を感じて、以後、十二年前に出家するまで無神論・無宗教で過してきました。また法華経にも「如是諸人等皆已成仏道」との言葉があります。「仏の言葉を信受し善行を行う者はすでに成仏した者である」と言うことです。ここで言う仏の言葉とは法華経の教えのことです。他宗教でも同じでしょう。神や仏が私たちを救済してくれるのはそれぞれの神や仏の言葉を信受した者だけなのです。すべての人に普く神の恩寵や仏の慈悲が与えられるのではなく、言葉（教え）のふるいにかけられ網目からこぼれ落ちなかったものだけがその恩恵にあずかれるという論理です。この論理に従えば神や仏の名の下に平等や自由や正義が与えられる者は言葉の網目からこぼれ落ちなかった者だけになります。この言葉（教義）は宗教・宗派の数だけ存在するわけですから、それぞれの神や仏の名の下にある行為は宥和より対立、反目の方向へ向かうことは必然なわけです。

宗教からふるいを取り払えば、特定の神も仏も存在し得なくなります。そうなれば宗教は互いを理解し合い尊重し合うことができるようになるでしょうか。しかしそれは無宗教と呼ぶことになるのでしょうか。宗教の一義的な存在価値は個人の救済です。救済の内容は宗教宗派によって異なるものの、個人より先に集団の救済があるわけではありません。個人の救済の願いの総体が教団を形作っているのです。ならば宗教のふるいは、その教えを信受する自分自身がふるいの網の目を計りふるうべきものです。私が信受する言葉は私のものです。あなたが信受する言葉はあなたのものです。それは各々の信のふるいにかけられて残った言葉（教え）です。社会のふるいは自分でふるうことはできませんが、信仰のふるいは自分自身で持つことができるのです。自分自身のふるいにかけられて残った言葉（教え）が私の「信」です。そしてその「信」のままに日々を生きることが私の「行」です。それが私の宗教であり信仰です。わたしのふるったふるいは法華経の言葉そして日蓮聖人の信行に非常に親和性があったからこそ、わたしは日蓮宗の僧侶であるのです。しかしわたしは日蓮聖人のレプリカでもありませんし、日蓮宗に帰依する人々の同質同類でもありません。「信」を教団教派のものから自分自身のものに取り返すために、私たちは「信」のふるいを自らふるわなければならないのです。その時、あなただけの大いなるもの（神や仏）としっかり向き合い対話することができるようになるはずです。それが「信」に帰依し「行」を歩むことだと考えます。

狂言綺語百八六・声

ラジオから流れる音楽は、うるさくなく、邪魔することなく、心地よく、生活の背後を優しく包む環境のようなものかもしれません。受験勉強の時代はDJのお喋りの合間に最新の洋楽やテレビでは放送されないフォークソングやニューミュージックと呼ばれる新しいサウンドが流れる中を、聞き入ることも、鉛筆を止めることもなく勉強に勤しむことができていたはずなのです。ところがあれから五十年、あの当時の音楽がたまたまラジオから流れてくると、読書や狂言綺語の筆を止めて音楽に聴き入ってしまうのです。それが音楽を聴くとともに詞をなぞりながら意味を反芻し、歌の世界を脳裏に映像化するような聴き方になっていることに、我ながら驚きます。さらに、当時は歌謡曲や演歌などの音楽を意識して聴くことはなく、TVなどから流れてくるだけで興味も全くなかった種類の音楽にも反応して、スマホで歌詞を確認したり作曲家作詞家の名前を調べたりするようになりました。かつて無意識下で聞いていた音楽が長い年月と経験を重ねて体内で熟成され、今になって意識下に現れてくる、そんな音楽体験の不思議を最近強く意識しているところです。

この私の音楽体験を果たしてノスタルジーという言葉でまとめてよいものなのでしょうか。「昔の音楽は分かり易く、老若男女誰でも口ずさむことができた。それに比べて今の音楽は何を言っているかも分からないし、複雑なメロディーとリズムで、到底唄うことができない。」確かにその通りだとおもいますが、これでは年長者が「今の若い者は！」と歎くか憤慨しているのと同じことです。彼らの音楽体験が自らの生活の血肉となり得るかは彼ら自身にしか分からないからです。私が五十年経って今やっと私の音楽体験が生活の血肉となっていたことを自覚できるようになったことからも、音楽は消費財ではなく耐久財として生活を支え続けたものと考えるべきです。一時の流行で消費されているように見えても、生活の奥底に埋もれていたそれが、意識の上に昇って来る音楽は、音だけでない何かを私たちに教え続けているからに違いありません。

音楽は純粋に器楽曲として作られた西洋のクラッシック音楽などより、言葉と音と舞踊や劇などの身体表現と融合した形で表現されることの方が遙かに多いと思われます。西洋では歌劇、日本では歌舞伎や能がその代表でしょう。パフォーマンスとして括られるそれらの表現形態は原初は大いなるもの、神や仏と呼ばれるものへの奉納、供養、布施だったと思われます。つまり大いなるもの、宇宙との交信です。交信手段が音と言葉と身体表現へとそれぞれ特化していくにしたがって、自己と他者とのコミュニケーションの手段になっていったのではないでしょうか。ならば音楽も言葉もビジュアルもその原初は「声」を聞くことから始まっているのではないかと考えてみます。音の声、言葉の声、目に映る声、目に見えない声、声なき声。宇宙に鳴り響く様々な声を私たちは様々な表現形態で受信し、発信し、聞き、覚え、語り、伝えていく。様々な他者の声を音楽や絵画、文学、演劇などを通して受持し私の身体を通してまた他者に発信していく、これが私の五十年前の音楽受持経験が、今私の血肉となって何かを私に語り始めている理由なのではないでしょうか。

読経も私たちが宇宙の様々な声と交信するための手段のひとつです。経文はお釈迦様が語った言葉、仏教の教えと定義される表現形式です。では私たちはなぜ経文を唱えるのでしょうか。仏様への供養、経を唱えることが善行である。経の功徳を頂くため、など様々な答えがあるようですが、それは副次的な意味

合いにすぎません。経文の読経は大いなるもの（宇宙、神、仏、真如、など）との交信のためです。読経するときの声が宇宙の声と交信し合い、私が大いなるものの慈悲に触れようとする試みです。私が宇宙へと発する読経の声が、飛び交う様々な声と共振し合い、私に新たな行を促す声となって戻ってくることを望むこと、つまり大いなるものの声の導きを聞くために私たちは読経するのです。「声」は声帯を震わせて音に変換したものだけを言うのではありません。音楽や文字や身体表現や禅定も、日々の生活の様も私は「声」と呼びます。「声」は「意志」です。わたしの「願い、誓い、行う」生活の日々そのものがすべて「声」となり、私はそれを読経という表現形態で仏様に伝え、仏様の意志を頂いてその導きのままに日々を歩んでいるのです。

五種法師の教えがしばしば法華経に示されています。これは法華経が求める菩薩行（信行の歩み）を具体的に教えた言葉です。法師は法華経を受持、読、誦、解説、書写する者のことです。受持は教えを受けそれを守ること、読は経典を見て唱えること、誦は経典をそらで唱えること、解説は経の教えを人々に解説すること、書写は写経することです。この五種の修行が菩薩行を歩む信行の道であることを教えています。経文は仏様の声です。その声を私は受持し私の声で仏様にお返しすることが私の日々の営みです。音の声だけでなく、文字の声（写経）にしてあるいは言葉の声（解説）にして仏様にお返しすることが、五種法師の信行です。このことを布教の道筋を示していると矮小化する向きもありますが、それは誤った考えと私は考えます。信行の道は布教のためにあるのではありません。自分と同じ考えと行動を取る者を集めて集団を作ることはお釈迦さまの願いではないはずです。各々が自分の声で仏様に語りかけ、自分の身体で仏様の声を聞くこと、それが安らぎの処へのみちへと歩む信行です。仏様は各々の声を聞き、各々に向かって、各々に応えてくれる声なのです。私たちは誰かの声（宗派や教祖）を介してでなければ仏様の声を聞くことができないと思わされているだけです。私たちは直接仏様に語りかけ、仏様から語りかけられることができるのです。

道元は「峰のいろ谷のひびきも皆ながらわが釈迦牟尼の声と姿と（峰のいろや谷のひびきといった自然の景色や音が、仏の姿や声そのものを表している）」と詠みました。ここで言う自然は「自ずから然らしむ」ありのままの世界、宇宙そのもののこと。そこに鳴り響く音は全てお釈迦様の声と姿だと観たのです。私たちを包み込むあらゆる声を聞きその声と語り合い互いの声と共鳴し合うこと、それが信行の道なのです。

狂言綺語百八七・メッセージ

十年くらい前になるでしょうか、四月の終わりに中央高速の山間部を移動中、所々に咲く山桜の木に藤の花が垂れ下がっている光景に目を奪われたことがあります。桜と言えばソメイヨシノとばかり思っていた私は、花が最初に咲き、散った後に葉が芽吹き、その後に藤の花や様々な春の花が咲くと思っていたのです。しかし冷涼な山間地に入ると山桜も藤の花も同時に咲き、若葉の芽吹きもまた同時であることを知りました。若葉の黄緑の山を背景に山桜のピンクの控えめな花弁と藤のこれも控えめなうす紫の花弁が調和した姿は、山が生きている事を実感できる光景でした。残念ながら私にはこの感動を言葉や画布や音符に留める才がありませんので、未だにそれを表現する術がありませんが、ただその時の光景は私の中にメ

ッセージとして残り続け、今でも春になると私の暮らす里山にも当時の光景を映し出すことができるのです。それは私にとってのあらたな山桜と藤の花のイメージの創造です。私はこのイメージを再構築する力が想像力だと考えます。

私たちは心を揺り動かされたとき、それを記憶に留めたい、誰かに伝えたいと思うものです。その願いが観た者の五感身体を通して、感動の再生産がなされたとき、感動は新たなメッセージ（イメージ）として他者と共有できるようになるでしょう。そしてさらに新たなイメージを他者が作り出すことも可能となることでしょう。イメージの共有が想像力を喚起し、新たな創造を生み出す、そのことが社会に共感や調和や、そして様々な技術の進化や発見をもたらす原動力と考えるならば、私たちは手軽に他人の経験や言葉、創造物を丸呑みしないことが必要なのではないでしょうか。想像力は五感が観たメッセージの余白に私自身のイメージを与えていくことと考えます。その時私は自分の言葉や音や映像を持つことになるのでしょう。

見渡す限りの満開の桜、小高い丘の全てが芝桜の群生、埋め尽くすネモフィラの花、コキアの赤、藤の花のトンネル。右も左も上を向いても三百六十度同じ植物の花の満開の姿に、私は何をイメージすれば良いのでしょうか。そこには私の想像力を働かせることのできる余地は寸分もありません。ただただ数に圧倒され口をぽかんと開けるだけで思考停止状態に陥ります。「どうだ、マイッタカ」と言われるままに、せめてスマホにその光景を記録させるだけで、花の大群の圧力にひれ伏すしかありません。その時私が見たものはスマホに保管されるだけであり、私の中にイメージの記憶が残される余地を与えてくれないのです。

鯉のぼりは大空をゆったりと、屋根より高く♪大きいまごいは お父さん小さいひごいは 子供たちおもしろそうに 泳いでる ♪はずなのに、最近は鯉が川の向こう岸からこちら岸までびっしりと幾重にもぶら下がっている光景ばかりが目に入ります。大空を泳ぐのでなく空中に吊り下げられているのです。鯉のぼりは男の子の健康な成長を願うと伴に、少し保守的な言い方になりますが、家族に男の子が生まれたことで、伝統的な家父長制度の継承がこの家族にも可能になったことを喜ぶ行事なのではないでしょうか。もちろん現代ではそんなことを考えて鯉のぼりを揚げる人は皆無でしょうが、それにしてもただただ地面に向かって垂直にブラ下がる大量の鯉のぼりの屍に、私たちは何を託そうとしているのでしょうか。「願い」がないところには創造はなく、ただ現実の目に映る光景を無批判、無条件に受け入れるほかないのです。その光景からは私が何らかのメッセージ（イメージ）を受け取ることはできません。だからそこには私のお釈迦さまの姿は見えてこないのです。信行の道もみえてきません。私にとってその光景は何もない光景と同じなのです。

経をどのように読めば良いかと言う問いかけを受けることがあります。理性で読むのか、論理で読むのか、無分別無差別に読むのか、倫理観で読むのか、教義として読むのか、文学として読むのか、全てを信じて読むのか、懐疑的に読むのか、私はどれも当てはまると思いますが、経をひとつの読み方の枠の中で読むことはとても偏狭な読みに陥ってしまう危険があります。私の読み方は上記した読み方の全ての読み方で読みます。異なるそれぞれの読み方で私が受持することはただひとつ、それはお釈迦さまの「願い」を聞くと言うことです。お釈迦さまは私たちに何を願っているかのメッセージ（イメージ）を受持し、そのイメージを私自身の身体を通して「信行」の道に替えていくことが、私の経を読むことです。そしてお釈迦さまから受け取った声、メッセージ、イメージを日々の生活の中で具体的な信行の形に変えていくため

にはたらく力が想像力です。私の生きる社会を取り囲む様々な他者、環境、出来事の全てが私の想像力と融合したとき、私の信行は歩み出し始めます。つまり想像力は構想力、共感力、協働力、共棲力となって私に働きかけるのです。

私が今までに法華経を百回を超える回数を読み続ける理由は、読むことでお釈迦さまの願いを日々新たに更新し、刻々と変わりゆく私を囲む環境への想像力も更新していくことにあります。私がお釈迦様の願いを毎日聞き、信行の毎日を更新していくメッセージは方便品第二にあるこの言葉に尽きます。「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事因縁を以ての故に世に出現したもうとなづく。」仏がこの世に出現した目的は、衆生の全てが仏となるためであると述べているのです。これがお釈迦さまの願いであり私たち衆生へのメッセージです。このメッセージが私の身体を通して日々想像力によって再構築された信行が私の安らぎの処への歩みなのです。

前回に続き再び道元の「峰のいろ谷のひびきも皆ながらわが釈迦牟尼の声と姿と」の和歌です。森羅万象の声は全てお釈迦さまのメッセージです。それを私たちは受け取り想像力によって日々私が求められる行を更新し実践すること、それが安らぎの処へ向かって生き続けることだと私は信じています。

狂言綺語百八八・方便の先へ

母親が知り合いの男二人を連れて小学校に乗り込んだ事件がありました。子供同士の諍いの手打ちに不満のある片方の親が担任の先生の処に直談判に及んだところ破談となり、あらためて酒に酔った舎弟を連れてかちこみをかけたようです。学校を暴力団の事務所と誤認したわけではないでしょうが、やっていることはやくざの論理行動と全く同じです。暴力団であれば子分の行為は使用者責任として、殴り込みを示唆した親分にも責任があるのですが、舎弟は逮捕されても母親は今のところ罪には問われていないようです。不審者の侵入には訓練を施されていた先生方も、保護者の殴り込みまでは想定できなかったはずです。教育の場がある種の聖域であり教師が尊敬に値する存在で、保護者も学校を尊重する時代は遙か遠くになりにけりです。

この事件に遭遇した子供たちが心の傷を負ったことは間違いないでしょう。子供が関わる事故や犯罪で常に言われることは心のケアです。しかしこの事件を報道する各社は一様に子供の顔は映さないまでも直接子供にマイクを向け事件の模様をインタビューして放送していました。この事件を子供に語らせ、反芻させ、放送で何度も自分の記憶をフラッシュバックさせられることは、恐ろしい経験の出来事を増幅させ癒やしがたい傷跡を固定させることだと、報道に携わる人々は考えなかったのでしょうか。インタビュー画面の後、スタジオのいわゆる識者が「これから学校は子供の心のケアをしていかなければなりません」と他人事、訳知り顔で語っていました。心の傷に塩を塗るような行為をしたマスコミ権力がどの口をして言うのでしょう。

財務省が私立大学助成金について文科省と会議した内容が報道されていました。国の厳しい財政状況や少子化を背景に私立大学助成金を見直す議論です。財務省は学生の数などに応じた今の配分の基準について教育の「質」を重視すべきだとして義務教育レベルの大学の講義に否定的な立場を示しました。ある大学では四則演算やbe動詞の用法などをあらためて勉強させていることに対する主張です。文科省の反論はデータサイエンスやAI学習に繋がり、英語の基礎固めは専門分野で英語を学ぶ際に役立つと言っているのです。今まで十二年かけても習得できなかった学習レベルを、小中学レベルの基礎から再度始めて大学の四年間で社会で活用可能な数学や英語の能力が獲得できると本気で文科省は考えているのでしょうか？実はこの論理は先に挙げたマスコミの「子供の心のケア」についてと全く同じ構造の発言です。そのように思っていないのに立場や状況やあるべき姿を装うために弄される、日本の社会構造を根底から腐敗させる言行不一致です。本音を、否定しがたい正論で隠蔽する「方便」を装った「嘘」です。正論は「事実を伝え社会に問題提議する報道の使命」に対し、行動は「視聴率のためなら何でもあり、相手の心情は一切斟酌しない」です。大学の議論も正論は「教育の機会均等、人材の育成、誰も置き去りにしない社会」ですが、行動は「一度出した補助金を廃止したら口利きをした政治家や学校法人の地元有力者に徹底的に反撃を受けるのでできません」です。

仏教が語る「方便」は非常に重要な教化方法です。俄には受け容れがたい仏の教えを伝える為に用いられる巧みな手段、衆生を真実の教えに導くために仮に設けられた教化方法です。私の帰依する法華経の本質は「方便品第二」に代表される、方便の正当性を信行の観点から明らかにし、方便が導く手段によって声聞、縁覚、菩薩の三カテゴリー（三乗）に分裂していた仏道を論理的に統一（一乗）した、野心的で大胆な教えだと私は考えます。しかもそれまでは菩薩道から観ると対立軸にあった声聞、縁覚の立場や実績、行動を毀損することなく、平和的かつ誰もが納得できる論法で統一したのです。大乗仏教の立場から「正（菩薩）」と「反（声聞・縁覚）」を「合（仏道）」へと止揚した大変画期的な論理展開です。この方便手法こそが誰一人として取り残さずに衆生全てを仏の道に導くことを可能にした唯一の手段なのです。そして方便の先には真実の教えが必ずなければなりません。しかし方便を使用する僧侶が権威・権力化していく過程で、目的が僧侶の主張と行動の正当化のために用いられることとなり方便は「嘘も方便」となってしまったのです。

正論や正義の下に組み立てられた論理は、それが嘘も方便であったとしても、方便が詭弁であると指摘し欺瞞を暴くことは大変困難なことです。なぜなら、殆どの民主主義政体においては「自由・平等・博愛」が絶対的「善」であると言う理念に基づいて正論や正義が論理づけられているからです。この三つの理念は天賦のものとして全ての人間に備わった人権とされていますが、では誰から与えられているのでしょう。それは一神教の神からです。ただ理念だけ与えてもそれを事細かく現実の行動に落とし込む役割は神の代理人を名乗る聖職者、そして彼らを自家薬籠中のものとした権力者です。となれば、極端な表現ですが代理人や権力者の数だけ正論も正義もあることになるのです。各々の正論や正義は神の「善」ですから妥協や歩み寄りの余地はありません。絶対「善」同士の対立の解決は言葉では不可能です。唯一の方法は暴力になるのです。

歎異抄十三段、親鸞聖人と唯円の問答は絶対「善」は仏だけが持つもので、人間には貸与されていないと言うことを端的に示すものです。親鸞の言葉に全て従うと答えた唯円にそれでは千人殺してこい、そし

たら極楽に往生できるといわれ、さすがにそれはできませんと返すと、聖人は「何ごとも自分の思った通りにできるのなら、極楽の為に千人殺せと言われたら、素直に殺しに行くだろう。しかし一人も殺すことできないのは、そういう業縁がお前にないからだ。お前の心が善いから殺さないのではない。もしお前にそういう業縁があれば、そんなことをしてはいけないと思っても、百人千人と殺すのだ。」殺すと言う暴力は理念でも正義のために実行するものでもない、「善」の心があるから実行しないのでもない。業縁がないから殺さないだけで、あれば殺すだろうという、諸法無我、諸行無常の仏の法です。「善」は仏のはからい、人間が持つものではない。善悪一如。これが仏教の教えです、そして唯一、非暴力平和への道と私は考えます。

狂言綺語百八九・善悪一如

日本社会はある時を境として、法令遵守（コンプライアンス）と説明責任（アカウンタビリティー）への厳格な運用が求められるようになりました。今まで倫理観や慣習、不文律で上手に回してきた社会も法律の仕組みの中で曖昧な境界線の行為は全て法律の言葉内に狭められる一方、運用する側はその境界線をずらして枠を自由に設定することを可能にしました。私の記憶では約三〇数年ほど前からです。それ以前と以後ではビジネスのやり方も働き方も大きく変わりました。法令遵守はもちろん正しい会計処理、労働時間の制限と健康管理、パワハラセクハラへの対応など、昭和育ちの会社員たちはスタイルと思考方法を根本的に変えなければ会社では生き残れないことを、強制的に突きつけられたのです。年功序列から能力主義へ、四〇才を境にする選別、デジタル化、管理の厳格化等、それらは社員の精神を不安定にし鬱症状を訴える者の急増を招きました。また年収も昇進しない限り頭打ちとなり、ベースアップという考えもなくなりました。あくまでも私の肌感覚ですが、その時期と軌を一にして日本は現在にまで及ぶ長い停滞期に入ってしまったようです。

三四年の会社員生活の中盤で起きた価値の転換、ルールの変更にも何とか対応することができ、恙なく会社生活を終えようとした矢先に、私は人生唯一の懲戒、「戒告」を受けたことがあります。詳細を語る余裕はないので要点だけ申し上げると、会計処理で絶対してはいけないことの二つ、「付け替え」と「期ずれ」に抵触してしまったからです。付け替えは本来の目的以外に「流用」すること、期ずれは売り上げ計上時期をずらすこと、利益隠し税金逃れに通じる行為だからです。不正と認定されたから戒告処分となったのは事実ですが、言い訳をすれば、クライアントの会計処理に不正があり、その不正なお金を当方が売り上げ計上してしまったため、不正と認定せざるを得なかったのが実情なのです。規則運用の境界線は不動の線ではなく、常に運用側の都合で移動可能な線であることを身をもって知らされた出来事でした。不文律や倫理観が曖昧な境界線の役割を果たしていることで、社会の活力や協調を育み、潤滑油の役割を果たすという幻想はやはり幻想に過ぎなかったのです。曖昧さは排除され、厳格な境界線を引くことを社会は要請しているのです。それは境界線の内側が善、外側を悪と規定し緩衝地帯を排除することです。合わせて、境界線の移動を恣意的にできることが権力で、境界線を自在に操ることがまつりごとであることもまた明らかになりました。

善悪の境界線は仏教では「善悪一如」ですから、明確な境界線を引くことは致しません。善悪の判断ができる方はお釈迦様だけです。私たちは善悪の境界線を行ったり来たりする存在です。私がそれを絶対善だと思うことでも他者にとっては息苦しい苦痛かも知れないのです。よかれと思ったことが悪しかれとなることもあるでしょう。「苦」からの解放が悟りの道である仏教では、善悪の境界線を決めることは逆に「苦」をもたらすものになってしまうのです。ただ、「善悪一如」だから何をやっても良いと開き直ることではありません。善も悪も自分の中に絶えず現れる心のあり方、行動だと自覚することから始まらなければなりません。親鸞聖人の煩悩熾盛、罪悪深重の自覚です。それはどのように善悪を理屈づけても体系づけても正当化しても、生きることは煩悩熾盛、罪悪深重の我が身からは逃れることのできない我が身を生きることだとの自覚です。だからこそ、聖人は他力本願の無量光を認識することができたのです。私たちは善悪の境を行ったり来たりの日々を、無量光の光、つまり阿弥陀如来のはからいに全てを委ねるとの覚悟です。これが他力本願です。全てそのはからい、その光へとありのままの日々を送ることが善悪一如、悟りへの道です。

「戒」は五戒に代表される仏教徒の法律のように誤解されていますが、実は規則と全く異なる考えの基にあるものです。不殺生（生命のあるものを殺さない）、不偸盗（与えられないものを取らない）、不邪淫（みだらな男女関係を結ばない）、不妄語(いつわりを語らない)、不飲酒（酒類を飲まない）の五つが五戒です。しかしこれは法律ではなく悟りへと向かう道を歩む者の、自ら心に誓って順守する徳目です。他からの強制されるもの、罰が伴うものでもありません。自らに戒めて実践する間に、自ずからこの徳目が優れた生活習慣となるように導かれる教えです。不殺生戒を字面の通り厳格に運用すれば私たちは食べるものが一切ありません。ただ餓死するしかないでしょう。不殺生戒は私たちが他者のいのちを頂くことによって自分のいのちを繋いで行くこと、そして自分のいのちも他者のいのちを繋ぐためのいのちであることを知ること、その一点だけにある「戒」です。生きとし生けるもののどのいのちをどのような形で頂くかは、すべて自らの安らぎの処へ向かう日々の生活の中で自ら考え判断することです。その考えは我見ではなく善悪一如、お釈迦様のはからいのままに考え、行うことです。このことを日常生活の行動と判断の言葉で語れば、善悪を他者の決めた法律や決まり事で判断されるのではなく、自らの倫理、経験、他者との関係性、お互いの利益、などを計った上で、自ずから心と体の指し示すままに行うことです。それは喜も怒も哀も楽もない融通無碍の行い、自由にあるがままにこの世界を遊ぶことができる安らぎの処なのです。しかしこの考えは法律で全てを判断しようとする人たちには好きなようにつけ込まれてしまうという危惧があります。なぜならば法律を駆使する人たちは、自由にその法律の境界線を変えることができる人たちでもあるからです。

年金法の改正案が国会審議を通過するようです。あの法律は私の会社員時代の経験に照らし合わせると明らかな「付け替え・流用」です。要約すれば厚生年金として集めたお金を基礎年金（国民年金）に流用する法律です。理由は公平、救済など何とでもつけられますが、権力がルールを変更し境界線を自在に変更できる典型的な例です。善と悪が、ある正義からまた別の正義で定義づけられる世界に対して、私たちは善悪一如が導く理想の世界を見据えることしかできないのです。理想なき現実が希望なき世界とならないためにも。

狂言綺語百九十・知性

最近の天気予報は精度が上がり、雲の動きで雨がどのくらい降るか、何時から降るかを高い確率で予報できるようになっていることは、大変有り難いことです。気温も湿度も今の時期であれば真夏並みの暑さから四月初旬の肌寒さまで一週間先くらいを高い確率で示してくれます。そのついでといっては何ですが、今日は傘が一日中必要ですとか、折りたたみの傘を持っていきましょう、上着が必要ですとか、半袖で過ごせるでしょう、水分の補給は頻繁にして下さいと、至れり尽くせり、持ち物や着衣の世話まで焼いてくれます。

余計なお世話と言えば身も蓋もありませんが、世の中の全てに渡って指示する者と指示される者、与える者と与えられる者、保護する者と保護される者の関係の固定化が顕著になっているようです。一度与える側に回った者はいつ誰にどれだけのものを与えるかをコントロールできるようになります。逆に与えられる側はただひたすら与えられることに慣れてしまい、いざ与えられなくなると不満を述べるか、ふて腐れて自分の殻に閉じこもるだけになってしまいます。しかも、そこは与えられる物よりもっと大切で本質的な物を奪われていることに気付かないままの、自分だけに心地よい保護区なのです。しかし実は、それは思考停止、心神喪失状態に陥ってしまっていることではないでしょうか。その保護区は、状況を把握して判断し行動を起こすという生きる力を養う機会を奪われた場所なのです。指示され、与えられ、保護されることが初期設定されるようになった人生は、考え、評価し、判断して行動するという知と実証による学習の機会を奪われあるいは自ら放棄し、指示、与え、保護する者の意のままに生かされることになるのではないでしょうか。

私は教育に代表される「育」が、与える者と与えられる者、育てる者と育てられる者との関係に固定化され硬直化しているのではないかとの危惧があります。教育が知識と体験によって生きる力を育むことであるならば、教育が至れり尽くせりで与える側と与えられる側がそこに固定されてしまうということは結局、育てることが何も育まないと言うことになってしまうでしょう。何を育もうとし、どのように育てられたいかの互いの願いがないところには目的もありません。目的なきところには実現もありません。教育費の無料化、給食費の無償化、子供の能力、行動に対処するため(枠からはみ出る子を隔絶するため)に必要とされる複数クラスの創設、評価の曖昧化による競争力の低下、読み書きの軽視やタブレット利用による日本語力の低下、など数え上げたらきりがありません。これらの現象(方策)の目的は何なのでしょう。私には与えられる側の与える側への過度な要望を奇貨として、それに応えることで、意のままに教育をひいては社会を差配しようとする者たちの計画の一環ではないかと邪推したくもなります。教育現場は与える側と与えられる側両者の板挟みになって過度な要求で身動きが取れなくなっているのです。もはや教え育む場ではないのです。

例えば給食費を滞納している子供の保護者が車を高級車に買い換えて乗り回している事実があったとき、教育現場は何もできません。行政がその給食費を取り立ててくれるでしょうか、新車を差し押さえてくれるでしょうか。そんな保護者に育てられた子供に学校は何を教えられるのでしょうか。これを特殊例であると思ってはなりません。一事が万事、与える側と与えられる側の欲望の間では全てに渡り何もできない

のが教育現場なのです。知と経験により人間形成を育む「知」の実践現場が、欲望と感情に支配された「反知性」の場になっているとの危機感が、如何ともし難いとの絶望感に変わる前にできることはあるのでしょうか。

反知性主義という言葉をよく目にします。作家の佐藤優氏の定義によれば「実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度」です。いくつか具体例が上げられている中で安倍政権時代の政治に反知性主義が顕著に表れていると論評（注1）しています。反知性主義者は歴史的な事実やデータなどを無視して、自分が都合よく作り上げた物語に沿って強引に物事を推し進めようとする人たちのことです。本来民主主義とは、さまざまな立場にある人が議論し合い、お互いを尊重し、妥協点を見出して合意形成していくものです。その前提には、双方が事実を事実として受け入れ、ルールに従って客観的に物事を考える知性が必要です。しかし反知性主義者は端から知性を拒否しているのです。それは対話の拒絶ですから、他者と軋轢が生じても意に介さず、話は永遠に平行線をたどることになるのです。反知性主義者が大衆支持を取り付けるやり方は、知性は特権的な能力、支配するためのツールであると大衆に誤解させることで、知性を使って物事を判断する人たちを敵視させ、独善的な考えで他者をコントロールしようとする者たちです。

お釈迦さまの教えの基盤は知性です。お釈迦さまは教えを対機説法で説かれました。相手の資質に相応して理解のゆくように説き聞かせる方法です。対話のやりとりの中で、相手の考え、資質、環境を理解し受け容れながら相手を教えの理解へと導いていく方法です。教えを感情や好悪で受け容れたのではなく、対話という知的行為を通じて「信」へと導かれていくのです。論破でも強制でもなく、対話と理解の積み重ねによって相手の考えや行動に変容をもたらす、平和的で対等な立場での説法です。教える者、教えられる者の関係ではなく、互いの知性を尊重し耳を傾け、その対話の中でいつの間にかひとつの教えへと収斂していく方法です。この対機説法の場で得た知的実践方法は互いの知的財産となって、次なる実践への知的基盤を強固にするのです。これが教える者と教えられる者相互が「育」の実践の中で営む知的生産活動なのです。

反知性主義者が生産するものは憎悪と分断、支配と服従であることは現在世界中で見られる対立を見ていけば明らかです。しかしそれはある日突然アメリカやロシアに現れたわけではありません。私たちが、与えられ保護され考えないことに安住する怠惰が招いた必然です。そんな世を生き抜くためには、私の知性が自身の「信行」の何処にあるかを、今こそ問い直さなければならないのでしょう。

注1：佐藤優「知性とは何か」

狂言綺語百九十一・還る

英国の下院議会で安楽死の合法化が可決したとのニュースが流れました。認められるのはイングランドとウェールズに居住し、余命六カ月未満と診断された成人（一八歳以上）の患者で、医師二人の同意のほか、弁護士、精神科医、ソーシャルワーカーで構成する専門家パネルの承認が必要となるとのことです。安楽死に関しては社会的対立をもたらしかねないほどに賛否が分かれ、国、宗教、社会体制のあり方でも

異なる考え方が存在する、とても厄介な問題です。安楽死の定義は一般的には「治療法のない病や怪我で死を間近にした人が、身体的苦痛に耐えかねて自らの意思で他人（医師）に人為的に死期を早めてもらうこと」とされているようです。また安楽死と尊厳死を区別して、前者を「医師など第三者が薬物などを投与し患者の死期を積極的に早めること」後者を「延命措置を断って自然死を迎えること」ともされているようです。

安楽死に反対する人たちの主張の根本にあるのは「生命至上主義」だと思われます。根拠として「生命は神や自然から与えられた神聖なものであるという考え」、「一人一人のいのちは唯一無二で代替不可能だという考え」、「生命は全ての人権の前提であるとの考え」その他「生き物が持つ自己保存本能」や「生命は大切だという社会的コンセンサス」などがあげられるようです。また安楽死が主張する「死ぬ権利」が社会的弱者に対して「死ぬ義務」へとのすり替えに繋がる危険があることも主張されています。これらの主張は今まで人間の生命の歴史の中で培われてきた倫理的宗教的社会的そして何よりも心情的な共通認識としてまさしく正論です。この正論に対して安楽死を主張するひとたちの根本にあるのは「自己決定権の尊重」だと思われます。これは自らの意志で死を選ぶことで尊厳ある生き方を全うできると言う考えです。耐えがたい苦痛や、自己決定をする判断ができなくなってしまうことが、自己の尊厳を著しく損なうことであるとの信念があるようです。この二つの賛否を比較してみると、安楽死否定派は宗教観倫理観常識などの社会を形作ってきた集団意志（集団感情）の総体、「共同幻想」の上にたった主張にみえます。一方肯定派は個人の意志を絶対視する理念に基づく主張のようです。歴史の流れからみると、この問題も集団意志に対して個人意思が何処まで尊重され、実現できるかのせめぎ合いの過程にあるとみることができます。今主張されている個人意志が集団意志に変換されない限りは、意志のせめぎ合いが完全な解決に至ることは難しいでしょう。

私は人間の死を「生の意志」からでしか捉えていないことに問題の本質があると考えます。人間は全ての現象を、「死」ですらも生者の意志によってコントロールできると考えているのです。かつてはそれが神の意志と信じられていた時代もありましたが、現代ではそれは科学を操る人間の意志です。科学で全ての現象をコントロールできると考える科学神話に基づいたフィクションです。しかし有史以来人間は己の死から逃れることはできていませんでした。人は生まれれば必ず死にます。死ぬために生まれてくる存在です。生まれるという因は死ぬという果に結実するのです。生死は因果の法則に忠実です。これがありのままの生死のあり方です。であれば人間の意志で生死をコントロールしようとすることは、人間の執着や欲望のなせる業にしか過ぎないはずです。ありのままに生きることを望んだ人間はありのままに死ぬことを望みます。少なくとも私はそうありたいと願っています。ありのままに生きることは生かされることではありません。生かされる生からはありのままの死もありません。生死は諸行無常、因果の縁起の中にある生死不二なのです。

ありのままに死ぬるとはどういうことでしょうか。私はかつて大動脈解離で緊急手術をしなければ命を落とすと言われました。幸い発症から五時間後の手術で、今このように生死を語ることができています。最新の医療技術によって生きることができたのです。もしそこで手術がうまくいかなければそれはありのままの死です。幸い成功したために私はありのままの生を生きることができています。私の母はグループホームで点滴を施すことも体に管を通すこともなく、苦痛を訴えることもなく眠るように亡くなりました。

口から食べ物を受け容れなくなって十日ほど、水を受け容れなくなって三日ほど後のことです。エネルギーを要求しなくなった肉体が、それを分解する水分をもう必要しなくなった故に、灯火が消え入るようにゆっくりと命が消えていく有様を私は母の死に観ることができました。ありのままの死です。私の場合はありのままの死は訪れずに、ありのままの生が与えられ続けました。誰に与えられたのか、それは神でも仏でも絶対者でもありません。ありのままを自然（じねん）と表現するならば、自ずから然らしむ生であり、死です。ありのままの自然（じねん）の生が私の生であり、自然（じねん）の死が母の死です。生死はただそれだけのことです。因果の法則が自ずから然らしめたままのかたちです。そのかたちをそのままにうけとめればいいだけです。

生死の問題は、父母から与えられた命が社会の中で育てられ、血族や社会的なつながりの中で死を迎えると言う考え方がこれを複雑にしているのではないでしょうか。永遠のいのちの受け渡しの中で観れば、生まれる瞬間まで一個の命は「無」です。生まれ出た瞬間にそれは「生」となり「有」となります。「生」に在る間、「私の命」は永遠のいのちを繋ぐ一人としての役目を果たすべく社会生活を送り、そして死を迎えます。それは永遠のいのちを繋ぐ私の役目を全うしたと言うことです。そして「死」によって私の命は「無」に還って行くのです。生死は「無」から「有」、そしてまた「無」へと還っていくことです。死を忌避し恐れるのは「無」に還ることを恐れているからなのでしょう。仏教では涅槃に赴くと言います。そこを浄土や極楽と言うこともあるでしょう。仏教に限らず日本人はそれを「あの世」とも言います。「あの」は指示詞です。在る特定の場所を示す言葉です。それは誰もが知っている「あの」場所です。そこに還ることに何の恐れや躊躇があるでしょうか。私の命は、ただいま、行ってきましたと言って「あの世」に還るだけなのです。

狂言綺語百九十二・諦念

空梅雨、猛暑が相変わらず続いています。ここコリーナでは日中は人もまばら.散歩している人も草刈りしている人もほとんど見かけません。蝉が鳴くには七月初旬は早すぎるようです。鳥も朝の涼しい間は元気に囀っていますが.日中はなりを潜めています。暑さが苦手な犬は散歩が早朝や日が暮れてからのようです。野生の生き物たちも日陰で体力を温存しているのでしょう。猛暑の日中、ここは静けさの中に沈んでいます。

六月末にベトナムの中部.ホイアン、ダナンを四日間旅行してきました。緯度は北緯一六度、コリーナは三六度なので相当の暑さを覚悟していましたが、毎日ほぼ似たような暑さ。朝は湿度が高い曇り空なのですが、八時過ぎくらいから雲の合間から強い日差しが差し込んできます。湿度は高いままなので日陰が欲しくなります。そうこうする内に雷の音が聞こえ、黒い雲が山の方から湧き上がり午後になるとスコールとなることもありますが、そのまま降らずに蒸し暑い夜に突入していく日もあります。気温は三三度前後、雨が降った後は少し過しやすくなりますが、日差しは日本より強いので、日中はあのバイタリティ溢れるバイクの洪水は朝晩に比べて大分少なくなります。聞くところによると学校は七時から始まり、昼時に一度帰宅して食事や昼寝の後また学校に戻るようです。仕事も同じようなパターンで、朝早くに仕事、暑い

日中は休憩そしてまた三時頃から夕方まで働き、その後街に繰り出すようです。暗くなってからも街は人で溢れかえっていました。

そんなベトナムから帰国した早朝の成田も湿度の高い曇り空。蒸し暑いままに次第に太陽が差し込み、午後になると雷とにわか雨、ベトナムと全く変わらない一日。異なることはバイクの洪水とワンと鳴くイヌガエルの存在くらい。ベトナムレストランで聞いた「ワンワン」の声に、思わずイヌが入ってきたようですよとガイドさんに言ったところ、それはカエルですとの応え。所変われば カエルの鳴き声も変わるものだと驚きました。コリーナではモーと鳴くウシガエルの鳴き声が今は盛りです。もはや日本は亜熱帯気候です。

これまで何度か訪れたベトナムは、北のハノイと南のホーチミン(サイゴン)つまりソ連とアメリカの影響力によって南北に分断されたベトナムの首都でした。そこでは戦争の傷跡が分らないくらいに復興し、活力に溢れ、自信に満ちた人々の姿を見ることができました。今回はその二つの勢力が激突した中部です。子供の頃に聞いたことのあるフエの虐殺やテト攻勢の舞台となった地域です。そこも南や北と同じように表面的には戦争の傷跡は人々には見られません。ただ山の中の遺跡がベトコンの武器貯蔵庫や隠れ家になっていたため、米軍の爆撃で破壊された跡がわずかに名残を感じさせるだけです。ところがそんな遺跡を説明するガイドのちょっとした言葉尻に聞こえる、戦争の痕跡を私は見逃すことができませんでした。具体的には申し上げられませんが、未だに戦争の記憶が残り、それを語ることが彼の立場を危うくするであろうことが、平和ぼけした私にも感じることができました。彼は恐らくベトナム戦後の生まれでしょうから、自分が体験したことではなく、親や地域社会で語り継がれたことが、彼の今に大きく影響していることが痛いほどよく分かります。内戦、代理戦争、同じ民族同士の虐殺の事実が、未だに記憶として繋がれていかなければならない現実が、表面的な活力の中に深く沈む静かな深い哀しみを私の前に浮き彫りにしたのです。怒りでも恨みでも復讐心でもない、かといって悲嘆にくれ絶望に沈んでいるわけでもない、物静かな諦念に包まれた冷静な今。ありのままの「今」を受け入れながらも受け入れきれない「今」がそこにはありました。過去の戦争で「今」があるにもかかわらず「今」のままを未来に繋げてよいものかどうか逡巡する様子に思えたのです。

私はなぜこの世に生きているのかを「永遠のいのちを繋ぐため」と語ってきました。また「いのち」と「命」を使い分けてもきました。「命」とは生と伴に活動する体と心のはたらき、仏教で言う「色心」のことです。「命」は「生」によって無から有となり「死」よって有から無に還ります。私の「命」はこの循環のなかの「個」のひとつとして「いのち」を永遠に繋ぐためにこの世に「生」を受けたと考えます。では、「いのち」とはなんのことでしょうか。私が「いのち」と表記するとき、それは生きとし生けるもの全ての、肉体も記憶も文化も精神も道徳も善行も悪行もありとあらゆる永遠の過去から受け継いだ、宇宙の営み、ありのままの世界のことです。それはお釈迦様によって示された「空」、仏の「法」です。私の「命」は永遠の未来へと仏の法(いのち)を繋ぐ者の一個であることで与えられた「生」です。生きることは「いのち」を繋ぐことです。ほとけの「法」と一つになることです。色即是空、空即是色とはまさにこのことです。

ベトナム旅行中のガイドさんの故郷、フエでの戦争の出来事を語る彼にとり、繋ぐべき永遠のいのちとは何であるのか。今彼が観る過去の戦争は、彼が安らぎの所へと歩むためのよすがとなるのでしょうか。

私がベトナムやカンボジアを旅行して、彼らがポルポト、米軍、ベトコンについて語るとき、わずかながら受け取ることのできる感情は、不思議と憎悪や怒り、恨みではないのです。あえて言葉にすれば「諦念」と言うものかも知れません。諦念は断念することと誤解されがちですがそれは誤りです。「諦める」はここにある今を「明らかに観る」、ありのままに観ると言うことです。諦念の示すところは、ありのままに今を観て受け入れそのままに行動すると言うことです。過去を見れば怒りや恨みの感情を抑えることはできないでしょう。過去の「因」が今の「果」であれば、今の「果」は未来の「果」のための「因」です。彼らは未来を観るからこそ過去の「果」を今の「因」として「諦念」しているのでしょう。日本人が引き起こした戦争が終わって八〇年。私たちは今までどのように戦争のいのちを繋いできたのでしょうか。そのいのちは戦争の加害者も犠牲者も伴に永遠のいのちとして私たちが引受けていると言うことを忘れてはならないでしょう。もし気候が人を作るなら亜熱帯と化した日本はベトナム人と同じような諦念を持つことができるのでしょうか。

狂言綺語百九十三・死者との対話

今年も猛暑の夏がやってきました。六月から七月にかけて梅雨が明けたような日々が続いたので、季節の変化が前倒しになって、七月の終わりくらいから秋風が吹き始めるのではないかという、あらぬ期待をかけていましたが、梅雨明けが宣言された後の暑さは例年以上に格別です。しかも夕立雲が素通りしていくので、畑は高温と水不足、実をつけるための花が例年に比べて極端に減少しています。かろうじて我が家で消費する分くらいは実をつけますが、お店では、手頃なはずの夏野菜も冬と同じくらいの値段をつけています。平年並みや例年通りの季節感が通用しなくなったような昨今、いつもの夏を語ることは不可能なのでしょう。

ラジオ体操カードに判子を押してもらうことを楽しみに集まる子供、学校のプールから聞こえる声、甲虫やオニムシを探し回る姿、夏休みにはおなじみだった元気な子供たちはもう見ることはできません。昭和の夏休みを回顧しても始まらないことを承知の上で、朝のラジオ体操は乱れがちな休み中の生活習慣を整えるには格好の朝のスタートでした。クーラーの効いた部屋で一日中ゲームに興じるよりは、プールで真っ黒に日焼けした姿はどれほど健康的でしょうか。甲虫やオニムシは買うものではなく採取するものです。友達同士で雑木林の中に入り、虫に刺されながらも目当てのオニムシを見つけた子供は仲間内の英雄です。勉強やスポーツだけでなく誰もが英雄になれるもののひとつにこのオニムシ捕り名人がいたのです。因みにオニムシという昆虫はクワガタの呼び名で栃木県北部の方言のようです。私は外灯に集まる甲虫はよく捕りましたが、特定の樹液に集まるオニムシを捕まえることはできませんでした。未だに魚捕りやキノコや山菜の採取が得意でないのは、子供の頃にオニムシ捕りで仲間内の英雄に成れなかったことにも現れているのでしょう。

昔を懐かしんでも、昔と今を比べても、今の私たちには何の役にも立ちません。過去の因が現在の果であることを認識している（ありのままに過去を観てありのままの現在を観る）ならば、かつての事実がどのように変遷し今に至ったかを知り、その因縁縁起の流れを来たるべき未来に差し向けることが、過去（意

識や社会の変遷を)を知り私たちの伝統、文化として引受けて保守していくことだと理解できるはずです。人々の意識や社会構造は固定的でも本質的なものでもありません。縁起の法則によって生々流転していくのです。諸行無常です。私たちは過去を観るとき、まずこの点、つまり現在は過去の生々流転の結果なのだと言うことを知らなければなりません。現在が過去の果であると分れば、それはまた未来の因であることも認識できるはずです。つまり過去を観ることは未来を観ることなのです。これが過去から未来へと連綿と繋がれてきた永遠のいのちと私が呼ぶものです。過去を観ることは、単なる懐古趣味や伝統回帰ではないのです。過去は回帰する場所ではなく、未来へと続く現在の源流なのです。それは点としての水源地に戻ることではなく、源流からの流れを流れのままに観ることです。私は諸行無常の流れを流れそのものとして認識し理解し受入れて、その流れの一滴の水となることで、それが安らぎの処へと向かっていると信じ、そして行うのです。

戦争が敗戦で終了し八十年。いわゆる似非保守主義者により戦争と戦後についての「歴史認識」というものが繰り返し、声高に語られています。歴史認識はこの八十年間の過去を正しく認識することだと彼らは主張しますが、それは「歴史的事実」を現在から独善的に解釈したに過ぎません。そもそも解釈はそれ自体がよって立つイデオロギー、道徳、利害などあらゆる人間の執着(煩悩)によって組み立てられたものだからです。事実の解釈は極論すれば解釈する人の欲望の数だけあるのです。異なる解釈を議論してあるひとつの流れに自然に合流していくならば、ありのままの過去となっていく可能性がありますが、実際は異なる認識の者が互いに自分たちの欲望(正義や好悪、利害)を主張し徒党を組み、まつろわぬものどもを排除しようとしているのです。歴史認識を振りかざし過去を解釈したがる者たちは、縁起の法則によって連綿と続く日本の永遠の過去からの永遠の未来を、欲望により堰き止めようと試みる日本の歴史と文化の破壊者なのです。

敗戦後八十年の夏に唯一私たちができることは死者との対話です。この八十年の間、私たちを今ここにあらしめることを可能にしてくれた死者たちを置き去りにして、自分の欲望にかなう過去をねつ造してきたのです。死者を置き去りにした過去などは、私たちの今に繋がる過去ではありません。もし縁起の法則によって在るありのままと思っていた今が、安らぎの処へ歩む道のりから外れているのではないかとの疑念があるならば、今こそ死者との対話を始めなければならなりません。八十年あまり前まで連綿と語り継がれてきた死者の言葉を生きている者が欲望のままに改ざんする行為は、それを歴史認識と正当化しようとも、死者への冒涜に違いないのです。今、死者との対話を始めることで、八十年に渡る冒涜の過去を取り戻さなければなりません。

死者との対話は、死者を畏怖し、祈り、感謝し、敬い、供養すること。八月は死者のことばで溢れる季節です。お盆にはご先祖様が我が家に戻ってきます。施餓鬼供養は有史以来の受難、殉難、遭難、自然災害、人為災害、戦争、病没、ありとあらゆる死者への畏怖と感謝の祈りの場です。この祈りが死者との対話です。必ず死者は祈りの語りかけに言葉を返してくれるはずです。それを真摯に聞くとき、死者に感謝し、恐れ、おののき、人の愚かさと欲望とそして何よりも人の叡智を知ることができるのです。これが大いなるものとの出会い、ありのままの生に触れることのできる生死不二の瞬間です。八十年たってはじめて被爆体験を語り始めた方がいます。従軍加害経験や抑留経験を語らなかった人が、長年の沈黙の末に語り始めたと言う話も聞きます。この長い時は、彼らがありのままに死者と語り合って来たからこそ語ることが

できなかった時です。永遠のいのちを未来に繋ぐとはかくも長い時間と多くの生者と死者によって紡がれていくものなのです。

狂言綺語百九十四・周縁

関東平野の最北端に定住して九年が経ちました。平野と中山間地の境、ぎりぎり平野に属しているところです。近くの標高五百㍍にも満たない羽黒山頂上から南を臨めば空気が澄んでさえいればスカイツリーや富士山まで見通せます。一方西から北に目を遣ると眼下に里山が連なり、その先には日光や那須の山から会津の山まで見渡せます。気候はぎりぎり関東（東京）の天気予報に準じているようですが、たまに福島県の天気予報に近いこともあります。ここは時により南東北にも、関東にもなる土地柄のようです。このような土地にはまた他所にない特別な風習や伝説も生まれるのでしょう。以前も触れましたが、八月一日に地獄の釜の蓋が開いて、ご先祖様が十三日かけて墓から歩いて家に戻り十六日にまた墓に戻って釜の蓋が閉じられるという言い伝えです。道中の食べ物として釜の蓋まんじゅうを供えるのです。これは栃木県北部だけの風習のようです。またクワガタムシをオニムシと呼ぶのもここら辺の方言のようです。戦国時代までは南の宇都宮氏と北の那須氏の勢力拮抗の最前線でした。また大和朝廷の最北端、蝦夷との境界だったこともあったようです。

九尾の狐伝説がこの地にも残されています。九尾の狐は那須の殺生石が有名です。昔、美しい女性の姿に化身した金毛九尾の妖狐がインドや中国での悪事がうまくいかず日本に逃げてきました。狐は玉藻の前という名の宮廷婦人を装い鳥羽上皇に仕えて上皇の寵愛を得ましたが、陰陽師に正体を明らかにされたため、那須に逃げ込みました。長い戦いの後、上皇軍は狐を討伐しましたが、狐は巨石に姿を変え、邪気と有害なガスを出し続けました。数世紀後、ある僧侶が石の呪いを解こうとして法力で石を三つに打ち砕き、一つは会津に、もう一つは備前に飛んで、最後の一つは那須に残りました。これが那須に今に伝わる殺生石です。

一方殆ど知られていませんが、私の住まいの近くにある生駒神社（勝善様）の由緒書きでは「七六代近衛天皇の時代に白面九尾狐が各地を荒らし回っていたところ、天皇は第三王子の勝善親王に討伐を命じ、玉田の地に本陣を構えたが、悪狐は大槻の山を住み家にして各地を荒らし回り、親王自ら陣頭に立ち奮戦するも、大きな槻（欅の古名）、大槻の密林を利用し頑強に抵抗した。親王は夢枕に立った豊受姫命の『槻の木を斧で切りつつ燃やせ』の通りにすると悪狐はたまらず那須原に飛行して殺生石になった」とあります。親王が豊受姫命に感謝し玉田に建立した社が「生駒神社」です。親王が信仰し狐退治の心願を祈った神社が「石上神社」、豊受姫命のお告げで槻の木っ端を燃やすための石の釜は「釜石」として今でも大槻集落に伝えられ残されています。因みに私の住居の大字は大槻、すぐ隣の集落は玉田という地名です。那須と大槻・玉田の九尾伝説にどのような関連があるのかや、実際にあった歴史上の出来事を何らかの事情で言葉に残すことが憚られて、伝説となって語り告げられてきたのかは分りません。神社の宮司さんや氏子の方、郷土史に詳しい人に聞いても分りません。しかし伝説はそれを伝え続けようとした人々の意志です。そこに住む人々が何らかの事実を形を替えてでも伝えていく必然性があったから、今に伝えられているのです。

荒唐無稽に見えるお話も、そこには人々の意志が連綿と紡がれているのです。これが永遠のいのちを繋げると言うことです。

私は二つの九尾伝説の連関や、如何なる歴史的事実が下敷きになっているかを解明する能力はありません。ただ二つの話とも朝廷が討伐軍を組織して、抵抗する九尾の狐を成敗したという話は共通です。ここから朝廷＝権力が、九尾の狐＝反逆者＝まつろわぬ人々を討伐し服従させたという事実が想像できます。征服者が抵抗者の霊を鎮魂し、服従した者の抵抗を抑え、征服者の治政を正当化するためには、形あるものとしての神社、僧侶などの宗教的権威、征服された者たちの存在の証としての記憶（伝説）と鎮魂が必要だったのでしょう。まつろわぬ者をまつろう者に転換させ、被征服者が自分たちの記憶（いのち）を繋ぐことを許容し、両者が共存共栄していく装置、それらが伝説という形をとって私たちにまで繋げられているのだと考えたいと思います。本来、征服者は抵抗する者の文化も記憶も根絶やしにしてきました。そして自らの行動の正当化の証として歴史を記述してきたのです。私たちが知ることのできる過去は征服者が記述した歴史なのです。

私たちが現在知ることのできる歴史は、時の勝者によって何度も上書きされてきたものです。上書きからこぼれ落ちた過去も日記などの形で私たちは知ることができます。ただそれらもやはり時の権力者に近い者たち（中央）の記述でしょうから、敗者や服従させられた者（周縁・地方）の歴史を現存する史料や遺跡から正しく読み取ることは困難です。だからこそ私たちは死者の声を聞かなければならないのです。八月は鎮魂の季節です。かつての辺境の地であったここでは、地獄の釜の蓋が開いて死者がそれぞれのかつての住まいに向かって歩いています。その中には九尾の狐の一族として成敗された霊も歩いているかも知れません。

人の住むところには人々を守護する神社があります。氏神や地主神が祀られる場所です。そこに生きていた者たちの記憶を伝える場所です。記憶の継承者が彼ら固有の神々を供養し感謝し願いを託す場所です。土地には土地の者だけの固有の過去（神）があるのです。権力者（中央）が正当化した正史（神）ではなく、周縁に生きる人々の記憶の底の過去（神）です。歴史事実と認識されることはなくとも、信仰や伝承や風習で今に伝えられているのです。長期間なぜその伝承が可能だったのでしょう。それはそれぞれの地方（周縁）に住む人達が、その地を守ってきた死者と対話し続けてきたからです。中央（権力）によって正当化された過去は、地方（周縁）固有の過去の集積によって成り立っているのではなく、それらを抹消あるいは改竄することによって成立しているのです。中央によって剥奪され画一化された私たちの生活は、周縁を守護する死者（神）の声を聞き、対話することで、固有の生活と経済と文化を再興できるはずです。それが中央支配から脱却して、各々の周縁が独自のやすらぎの日々を可能にする地方再生の道ではないでしょうか。

狂言綺語百九十五・やり玉

世の中、なくても困らないもの、ない方がよいもの、あってはならないものなどいろいろあります。ただこの世に存在するという事実は、それらも必要としている人達がいると言うことです。私はこの夏に見

聞した、益々世の中にない方が世のためだと考えるいくつかを挙げたいとおもいます。不快に感じる人がいるかも知れませんが、これは私のあくまでも個人的な嗜好や実感です。論証したり、異なる意見の人達と議論を交わしたものでもない主観的な意見ですから、必要なければ聞き流し、無視して頂ければと思います。

世界のことは私の手に負えませんが、核兵器と戦争と、その存在故に核も戦争も組織の場で正当化されてしまう国連はあってはならないものでしょう。ここで主張したところで何の効力もないことを承知で書く理由は、あってはならないと思い続けなければ「核武装は最も安上がりだ」や「国益と安全保障のため」などの耳障りのよく、現状の停滞を打破できそうな言説に容易に靡いてしまうからです。これらを必要とする人は、なぜそれを主張するのか、それがなくなったら困る人がいるならばそれは誰だろうか、ということを考えれば自ずから国益を主張する裏に隠された私欲を貪る人々があぶり出されてくるはずです。私たちは国益などと言うかすみでは空腹を満たすことはできません。いのちを繋ぐことが保証される衣食住が整えば、それ以上私たちには何が必要でしょうか。命を繋ぐ望みは無私です。それ以外の全ては私欲に過ぎないのです。

世界から日本に目を移すと、次に私がやり玉に挙げるものは選挙と政治家と民主主義です。私の衣食住を脅かすかも知れないことを主張する者が当選して権力者となれば、彼は民意に添った政治を行っている訳ですが、しかしそれは私の望みに反しています。それが民主主義ならば民主主義は私の意に沿わない意見でも多数であればそれに従うことを強制する政体です。どんなに賛成と反対が拮抗していようが、過半数を取れば勝者となり総取りできるシステムです。そして残りの半数弱は敗者として甘んじなさいという制度です。最大多数の最大幸福が民主主義であるならば、その最大多数とは誰のことでしょう。少数派は不幸でもかまわないと言うことでしょうか。この考え方は誰もが安らぎの処（幸福）へ向かうことを願い誓い行う私たち仏教徒と全く相容れない考えです。私はこの一年間に行われた国政選挙や地方選挙を見るにつけ、勝者の幸福しか認めず、敗者には一片の慈悲さへ施す必要がないと考える方向へ民主主義は舵を切り始めたように思えます。かつてはまだ、たとえおこぼれであろうとも敗者にも慈悲を施そうとしていたはずなのです。しかし精神的にも経済的にも敗者に気を遣うゆとりがなくなった現在の民主主義は、私たちに安らぎではなく格差を作る、先の見えない不安製造装置になってしまったようです。民主主義が不要ならばそれを支える選挙も政治家も不要です。それでは全ての人の願いを聞き入れてそれを実現する政治は可能でしょうか。詳細は述べませんが、例えば「22 世紀の民主主義」で成田悠輔氏が提案しているアルゴリズムによる無意識民主主義は選挙も政治家も不要とし、私たちの望みをデータ化しアルゴリズムで最大多数の最大幸福の最適解を導き出す方法です。今までの民主主義に慣れきった私たちには突拍子もない提案に見えますが、私には説得力のある未来に光明が見える提案です。その光の先には慈悲とありのまま（無意識）の世界が観えるようです。

お茶の間に目を移すと、この夏一番あるべきでないものは高校野球です。これには反論も多いでしょうから、偏見と独断かも知れない私の認識だけを列挙します。高校野球が表で喧伝することは「勝利、美談、感動、青春、汗、涙、教育効果、地域社会への貢献、友情と連帯感、アマチュアリズム、フェアプレー精神」などでしょう。ちらちらと垣間見える裏の面は「経済格差、地域格差、学校格差、商業主義、成長期の心身へのリスク、暴力、いじめ、パワハラ、指導者や先輩への絶対服従、坊主頭、酷暑の健康被害」など書

いていけばきりがありません。表裏一体と言いますが、表の面で弄する言葉は、裏面を映し出す鏡です。表の喧伝文句に歓喜し踊らされているうちに着々と進行する裏面の病巣。これって何か思い当たる節はありませんか?私には表面は大本営発表、裏面は軍隊.兵士・あらゆる戦争関係者の本来であったら表の面であった現実の生活と言葉が裏面に押し込められて私たちが真実を知ることのできなかった事態と重ね合わせずにはいられません。山本七平氏の「日本はなぜ敗れるのか―敗因21カ条」はその構造をある手記をもとに分かり易く解き明かしています。高校野球に歓喜する私たちが大本営発表に狂喜する人々と同じ轍を踏んでいるならば、日本は敗者の道を歩んでいるのです。スポーツは行う者のためにあるはずで、観衆や指導者や、親や、新聞社のためにあるのではありません。プロスポーツはビジネスですから目的は経済利益ですが、アマチュアスポーツはスポーツそのものをありのままに楽しむことが願いだったはずではなかったのでしょうか。

最後に私自身のことをやり玉に挙げます。いずれ自然消滅するであろう寺と僧侶の存在です。誤解なきように言えば、信行する仏教徒（お釈迦様の弟子）は、自身が願い誓い行い安らぎの処をありのままに歩むならば、仏弟子はいなくなりません。いなくなるのは仏弟子を僭称する信行なき僧侶と寺です。この根拠と論理は今まで狂言綺語で書き続けてきたことなので、あらためて述べることは致しません。ただ私自身が今まで書き続けたままに「信行」し続けているかどうかは常に問い直さなければならないのです。「信行とは何か、それは信行なのか」ということです。「信行」を言葉で語ることは、道元が「口声ひまなくせる、春の田の蛙の昼夜に鳴くがごとし。ついにまた益なし」と非難した、念仏や経を唱えるだけではカエルが田んぼで昼夜鳴くようなものと同じことではないかと言うことです。言葉で語り説明している内にその言葉に安住し、言葉自体を唯一の、正義、善、徳行としてしまってはいないでしょうか。そうならないために、私は自分の言葉を含めた全ての言葉が語ることをやり玉に挙げ、省み続けて行かなければならないと考えます

狂言綺語百九十六・稲作

今年もまた稲刈りの季節がやってきました。農事があらゆる生活カレンダーの基準になっていた時代の田舎で幼少時代を過した私には、あきらかに稲作の時期が一ヶ月は前倒しになっているように見えます。田植えは五月から六月にかけて、稲刈りも九月の終わり頃という記憶があるのですが、最近はゴールデンウイーク前には田植えが終了し、稲刈りも八月の終わり頃から始まります。かつては田んぼに水が入るのが三月、苗代が作られ、代掻きが行われます。当初は耕耘機でしたが次第にトラクターに変わり、手押しの田植機から乗用の田植機に変わり、夏の間は稲の間を箱車のようなものを押して草を取っていた姿が記憶に残っています。田んぼではその期間至る所で農家の人が働いている光景を見ることができました。まさしく手作りの米です。

現在、田んぼで見かける人の数はトラクターと田植機とコンバインを動かす時の、せいぜい一枚の田んぼで二、三人です。費やす時間も相当減っているはずです。比べれば、機械化省力化で対労働時間あたりの収益率は飛躍的に増えているはずです。しかし、未だに米作りと言う産業は産業として自立していない

現状はなぜなのでしょう。自立していないとの見方には異論もあると思いますが、ひとつに米の輸入には大きな関税がかけられていること、つまり国際競争力がないこと。もうひとつに殆どの稲作農家が稲作だけでは生活が成り立たないこと、この二点だけでも米作りが産業として自立してないことは明確だと私は考えます。

それでは稲作は日本人にとって産業ではない他の何ものかかと言うことが問われなければなりません。細かい論証はしませんが、一言で言えば稲作は日本人の、文化、精神、社会構造、経済、権力統治の原点、なのです。単に経済合理性という一局面からでは判断できない、社会構造の基盤となるものです。米の収穫高（石高）は権力の源泉であり、経済力です。それを安定、維持、拡大するためにあらゆる社会制度が整えられていったことが、日本を形作ってきたと考えられます。よってその意識が希薄になったとは言え、未だに米は食の安全保障なのです。故に経済システムから外れても生産者と消費者からは米の安定供給と価格の適性維持が求められ、そのバランスが崩れたとき大きな政治社会問題となるのです。経済合理性は一切考えずに生産者はこれからも米を安定供給し続けられること、消費者が主食として適正価格で米を食べ続けられること、それ以外に国が農政として考えることはないはずなのですが、その時々の社会経済状況や声の大きいステイクホルダーの顔色を伺いながら、弥縫策を取り続けて来た結果が現在の米作りなのです。それは単なる米騒動として片付けられる経済事案ではなく、日本人の精神と社会構造、国土の安定を揺るがし荒廃させかねない事態だと、私は心から危惧しています。米作りがなくなることは日本がなくなることなのです。

元来、米作りには大変な労働力と自然の恵みが必要なのです。重労働の米には共同作業が必要です。米を作る最小単位は一家です。それらが他家と時には協働し、時には争い奪い合いながら土地と一家を維持しつつ米作りを行ってきたのです。一家が六親九族、一家一門となり、一村一郷、一国となる過程は、一家の生活が安定的に持続可能であることを願って、自然に形成されていった社会です。一所懸命は米の生産する場所を一家一族の全てをかけて守り続けることです。日本が形作られる基点が、米作りと一家にあると考えれば、先祖代々の土地を子孫へ繋ぐことと、家父長制家族制度への執着は日本人のDNAでもあるのです。

もう一つの要素である自然は、恵みを与えるかと思えば破壊も行います。水も太陽もなくてはならないものですが、それは稲を押し流してしまい田んぼを干上がらせてしまうことにもなります。土地の開墾、治水、用水の整備と、ほぼ人力のみで行われた米のための土地改良作業と生産は、日本人の生活時間の全てだったはずです。日本人は米を作ることが生きることだったのです。しかし生活の全てを捧げても人智人力ではコントロールできないものが自然です。日本人はどうやっても力が及ばない自然がもたらす恵みに感謝し、また避けようのない自然の脅威に恐れおののき、畏怖し、祈りを捧げてきたのです。それを私たちはカミと呼びました。カミは天にも大地にも川にも山にも樹木にも作物にも石ころにさえも宿っているのです。八百万の神です。宇宙、自然、ありのままの世界、大いなるもののはからいです。私たちは今、米が日本人の骨格であり、精神であり、日本の社会の心身を形作る基礎であることをもう一度思い起こす必要があります。

稲作が日本人の原点であることを忘れ去るよう強制されたきっかけが二度あります。ひとつは明治維新の神仏分離令と天皇（天照大神）を頂点とする神の序列化です。これにより一家、一族、一郷村を守ってい

たカミは抹消されてしまいました。その土地の風土と社会が自ずから必要とした氏神や地主神はすべて天照大神の家来となり、各々が自然（カミ）と対話しながら行ってきた稲作は、天皇（天照大神）の権力と権威に吸収されてしまったのです。私たちのカミは貶められ、カミを宗教信仰の面から支えていた「仏」はうち捨てられ、日本人が独自に育ててきた神仏習合の信仰を放棄させられたのです。そしてもう一つのきっかけはGHQの土地政策です。農地解放は農業資本階級の地主から耕作者に土地を開放したという意味で、画期的な民主化政策であることは言うまでもありません。農村の民主化と経済的安定を担ってきた事実は重いものです。しかし戦後八〇年、真の民主化と経済的安定は実現されたのでしょうか。未だに稲作田を票田としかみていない政治家が、稲作を牛耳ってはいないでしょうか。維新後一六〇年、戦後八〇年、その間知らず知らずに蝕まれてきた、日本人の基盤をもう一度再構築するには、今ある稲作の危機を奇貨とするしかないのです。

休耕田が雑草地から雑木林に戻る年数は、田んぼに開墾し水を引いてきた年数より圧倒的に短いに違いありません。田に水を供給する河川も雑草に覆われ、すぐに水が溢れます。雑草と実生の木が茂る中山間地の田園風景を見るにつけ、日本の国土と精神の荒廃を感じずにはいられません。きっとまだ間に合うはずです。

狂言綺語百九十七・畏怖

ついに猪が我が家の庭を闊歩するまでになりました。昨年辺りから畑の被害、道路脇の土を掘り起こした跡深夜の獣の声、目撃情報など、猪に関する話を頻繁に聞くようになりました。家の北側道路を挟んだ山に仕掛けられた箱罠にこの一年で計五回、九頭の大小の猪が捕獲されていました。いずれも深夜に罠に捕らえられ、逃げようと暴れる音に気付いた早朝に捕獲されている姿を確認していましたが、人間界侵入の一線だけは越えないでいたのです。しかし今回は明るい内に堂々と人の住む家の庭を横切り、平然とさらに奥の人家の方へと向かう光景は、驚き意外の何ものでもありません。それは実に堂々と恐れを知らない姿でした。

猪は夜に活動するもの、人家には出没しないものと思っていましたがその通念を、すっかり否定されてしまったのです。時は九月半ばの夕方五時、猪には暗く感じるのかも知れませんが人の目にはまだ明るく陽の残る刻限です。通過した所は、アスファルト道路を横断、玄関に繋がるコンクリートの階段へ、和室の横の砂利を敷き詰めた狭い通路を通り、明かりをつけたばかりのリビングのレースのカーテン越しの前庭を臆することなく悠然と通り過ぎたのです。その姿を私は直接見ていませんが妻はスマフォを見ている目の隅に何やら動くものがあり、また猫かと思い立ち上がると、それは猫や狸より遥かに大きい猪だったとのこと。慌てて琉游舎の私を呼び戻している間に写真を撮るタイミングを失い、やってきたときは二〇メートルほど先の草むらで、何かを漁っているような姿だけを写真に収めることしかできませんでした。窓を開ける音や妻と「あっ、そこにいる、隣の家に入っていく」などの会話の声も聞こえていると思うのですが、慌てて逃げ出すこともなく、居住区域のさらに奥の方へと去って行きました。まるで自分の縄張りを巡視するかのように。

最近の猪の急激な人間界への侵犯は，何を意味しているのでしょうか。本来、人を恐れ、極力避けて生活しているはずの野生動物が、人の生活領域に入り込み、恐れることなくまるで人が存在しないかのように歩き回っている光景は、「人は恐れるに足らず」と侮ってのことか、山の食べ物より豊富で美味しいものを人間界で見つけたのか、かつての住処を人間たちに奪われた猪の国土回復運動なのか、人界で共存して生きていくことは可能だと猪が思い込んでしまったのか、いずれかも知れませんし、それら全てが理由かも知れませんが、私にはそれを断定する材料がありません。ただこの現象が一時的なものとは思えません。いずれ畑だけでなく人的被害もあるのではと警戒しながら、猪対策を取らなければならなくなるはずです。これからは人が猪の存在におびえる番です。これは最近頻発する熊と人間の不幸な遭遇も同根の現象だと思われます。

恐れの感情を失った存在はいずれその存在自身も失うことになるのでしょう。私たちは恐れの感情から危険か安全か、闘争か逃走か、屈服か抵抗か、などの生存のための選択を行ってきたに違いありません。未知の他者との遭遇は、懐疑や恐れなどの排除の感情からまず始まるはずです。決して友愛や協和などの共存感情から始まることはありません。私たちは無造作に握手の手を差し伸べたその瞬間に財産や命さえ奪われるかも知れないとの恐怖から始まることで他者との関係性を作ってきたのではないかでしょうか。共存は恐れの感情から営々と積み上げてきた生き物の、生き続けるための智慧の成果だと思うのです。その様に考えることからもう一度他者との関係性を作り直すことが必要だと私は考えます。まず私でない他者を恐れること。

未知の他者との遭遇が、恐れや拒絶の感情から始まり他者は私と異なるものであると認識していく過程で、他者は私の到底理解と力の及ばない何かを持っていると気付くのです。その時、恐れの感情は畏怖へと変わるのではないでしょうか。恐怖が単なる恐れではなく、それをもたらす巨大な存在（力）が恐れの正体だと知るのです。私たちはその人智人力では捉えようのない存在に頭を垂れ、手を合わせ、恐れ畏まるのです。

私たちは自分にはない他者の存在（力）を知るとき、その存在を認め畏怖します。その存在を私はカミと呼ぶことを憚りません。日本人は他者に人智人力の及ばない力を観ることで自己を認識してきたと考えます。森羅万象、山林川河、生きとし生けるもの全てにカミが宿っているのです。他者への畏怖（カミの認識）はまた自分のありのままの存在がなんであるかを認識することなのです。逆に他者への恐れの感情を失ったとき、恐れは侮りや無関心となり、他者は自分にとって存在しないものとなっていくでしょう。それは他者にとっても自分が存在しないことであり、ひいては自分自身が何ものでもない存在の無化をもたらすのです。

今私たちの生きる世界は、他者が存在しない世界へと変容して行っているような気がしてなりません。他者に対する恐れと畏怖から始まる他者への尊重と共棲への願いは、私が何ものであるか、他者は私にとって何ものであるかをありのままに観ることを可能にしてくれるはずです。ところが今、畏怖の対象である他者を私たちは自ら無化しようとしているように思えます。野生動物が恐れや排除捕獲の対象であったものから、いつの間にか愛護の対象となりました。年長者は長老と呼ばれ畏怖と知恵袋の対象でしたが、今では勤労世代に年金と福祉で面倒を見てもらう存在です。政治家や役人は私たちのためによりよい世の中を作ってくれる役割から、私たちの生活を規制し権力を維持することが目的の存在になりました。学校

の先生は知識と社会性を教育する役割から、保護者に代わって子守りをする存在となりました。私たちは動物や年長者や政治家や先生などの自己ではないあらゆる存在に対して畏怖を覚えなくなってしまったのです。そしていざ他者が自己にとって不都合で不利益な存在になったとたん、他者を嫌悪し排除しそして恐怖するのです。しかしその恐怖は決して畏怖に代わることはないでしょう。侮りや無関心の精神から生まれた恐怖は闘争か逃走しか生じないのです。原始、人が森羅万象あらゆる他者（異界）に遭遇したときの驚きと恐怖とそしてそれが畏怖に変わり共棲の願いへと進む歩みを、もう一度原始に戻って始めることを願わずにはいられません。

狂言綺語百九十八・私の仏様（伊賀の里にて）

伊賀は盆地の中にありました。奈良から鉄道で約一時間、木津川沿いの渓谷を抜けていくと急に盆地が開けてそこが伊賀市です。忍者の里、芭蕉の生誕地という観光資源があるためそれに関係する施設が点在していますが、今回の伊賀訪問の目的は観光ではありません。浄土真宗高田派のお寺、大仙寺での「秋季彼岸会 永代経法要」とその後の「講演会」に参加するためです。講演会の講師は私、日蓮宗僧侶戸井出琉です。

仏教は排他的な宗教ではないので、異端として他宗派を排除することはないのですが、とはいえ教義も本尊もよって立つ経文も違うわけですから、殊更に他宗派同士が交流することもありません。そんな宗派関係の中で、今回の私の訪問は大仙寺にとっても、檀家の皆さんにとっても初めての出来事だったかもしれません。その様な宗派間の基本的な関係の中だからこそ、私は今回の体験をとても得がたく、今後の信行の道筋が一層視界良好となり、多くの道が眼前に開けたことを強く実感することのできた貴重な経験となりました。

私は日蓮宗の僧侶としての信行も自負も人には劣らないと思っています。その自負の根本には、日蓮聖人に信行の実践を学び、その方法論と精神を通して自分自身の仏の道を歩むことが私の仏教であるとの確固たる信があります。各々が仏の道を歩む道筋は各々の方法論があり、それを誰に学びどのように実践するかは、一人一人が決められること、決めるべきことです。それが仏に帰依することなのです。自分の帰依するものが私にとっての唯一無二のものです。それを仏法とも仏宝とも呼んでよいでしょう。自分の宝を唯一無二のものとする者は、他者の宝も自分の宝と異なっていようが尊重し、自分の宝と同じように敬い賞賛するべき宝なのです。これが仏教の底流に通奏低音のように流れる仏様の願いです。そしてこの願いの実践が仏の道を歩むこと、実践を支えてくれるものが仏の慈悲です。これは言葉や約束や契約として仏様と仏教者の間で交わされたことではありません。それは大いなるものの慈悲、ありのままの世界、宇宙のはからい、その様なものに私たちが触れたときに、自ずから自然に生まれる「信」です。誰を通して、何をきっかけに触れたのかは人それぞれです。恐らく私は日蓮聖人の信行の実践を通して触れたのでしょう。大仙寺に集う皆さんは親鸞聖人の言葉に込められた願いを通して触れたのです。ありのままの今を信じて帰依する人達が一同に集まった「場」には「信」の喜びが充ち満ちています。そこでは日蓮聖人はこう言ったや親鸞聖人はこのように考えていたはずだは何の意味もないのです。ただ安心と信頼と共棲の「場」

であることに安らぎを覚える人々がいるだけなのです。仏教が安らぎの処（浄土・涅槃）へと歩む宗教であるとはこのことなのです。

なぜ私が大仙寺の「場」に在ることができたのか。それにはきっかけがあり、出会いがあり、継続と展開がありと、その経緯を辿ることは可能です。しかしその経緯を解き明かしてもその「場」に私が在ることには何も変わりはありません。そこに私をあらしめたことがありのままの今なのです。それをお釈迦様は「因縁」と名付け、縁起の法則として私たちに示しました。そこに在る私は、大仙寺で法要に参加し、浄土真宗髙田派の信者と僧侶の皆さんに「私の仏様」についてお話をするように導かれたに過ぎないのです。仏様の縁です。ありのままの今です。大いなるものの導きです。私は仏と名付けられたもののはからいのままに、大仙寺で「私の仏様」への「信」の確かさをあらためて認識し、その姿を目の当たりにした皆さんは「私の仏様」に思いを寄せてもらいながら「各々自身の仏様」への信の確信と安らぎに身を任せていたのです。

私が日蓮宗教師となるための修行期間で徹底的に教えられたことは、仏法僧の三宝への「尊重の心」と「厳粛な態度」です。それを正しい所作と姿勢で行い、三宝への給仕の心と儀礼を身につけることでした。その結果僧侶は導師として衆生を導く役割を認められることになります。日蓮宗では僧侶は衆生を教化し法華経の教えに導く「師」なのです。つまり仏様と衆生の間を一本の線で導く仏様の仲介者のような役割なのです。ですから僧侶には親しみやすさや庶民的な佇まいよりも、荘厳された環境と尊厳のある言葉と態度が必要とされるのです。心と所作（信行）が一致すればよいのですが、それがカタチに頼るようになると、僧侶は単なる権威となり、儀式の主催者に成り下がってしまうでしょう。私はその危険性を修行時代から本能的に感じ取っていたので、儀式に頼らず「行」によって三宝への給仕を実践することを心がけてきました。

大仙寺で彼岸の法会が始まりました。住職と副住職の先導で法要は進むのですが、その雰囲気が非常に和やかなのです。住職がご宝前でいくつかの所作を行い（日蓮宗の所作とは全く異なります）、その後長い偈文が読まれます。親鸞聖人の言葉を抑揚（節）をつけながら檀家の皆さんと一緒に十五分くらい唱和するのです。そこには親鸞聖人の言葉を皆で唱和することの一体感、連帯感、同胞感を門外者の私も強く感じました。他宗派が仏と衆生を直線で結ぶ導きの宗派であるならば、浄土真宗髙田派は仏様を真ん中にして、僧侶も信者も門外者もぐるりと仏様を取り囲む車座の宗派だったのです。浄土真宗の他の寺派の法要を経験したことがないので、確定的なことは言えませんが、少なくとも大仙寺では僧侶も信徒も真中に阿弥陀仏があり、それを親鸞聖人の言葉を通して各々が互いの声を聞き合いながら、そこに仏様の声を聞く「場」だったのです。

仏教と一括りにして語ることに抵抗を覚える方もいるかも知れません。それほど仏教は多様性に充ち満ちています。しかし今回の伊賀行で強く確信したことがひとつあります。それは、仏教は人それぞれが「私の仏様」を持つことのできる宗教だと言うことです。日蓮宗の僧侶が浄土真宗髙田派の寺で住職や信者の皆さんと、親鸞聖人の言葉を唱和したとき、「私の仏様」とともに信行することを「願い、誓い、行う」ことはひとつであることを確信しました。仏教には大いなるもの（仏様）がすべての衆生を大きく包み込む慈悲があるのです。それを信じることのできる人は「私の仏様」を信じることができるのです。

狂言綺語百九十九・鬼十則

ワークライフバランスと言う言葉があります。これは内閣府が二〇〇七年に策定した「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」に基づいており、仕事と私生活の両方を充実させることを意味するとのことです。昭和世代の私は常々この言葉に違和感を覚えていました。私が給与生活者だった時の実感と現在の社会が理解する仕事と生活の関係が異なっていると感じるからです。その原因は仕事と私生活を分離して考えようとすることにあるのではないでしょうか。仕事の選択と行為は私的な判断と生活の延長にあるものでしょう。そして私生活の延長上にある仕事は、仕事の場に立った時にプライベートからパブリックに変わります。その境目は通勤電車の中で文庫本を拡げている間に変化していくグラデーションだったかも知れませんし、家でスーツに着替えネクタイを締め、家を出た瞬間だったかも知れません。いずれにしてもその毎日は仕事と私生活を行ったり来たりしながら、互いがオーバーラップしつつも、日々を楽しく健やかに過すことができることを「願い、誓い、行う」ことだったのです。それは今の私の信行の日々と全く同じ毎日だったのです。

給与生活者時代の私は仕事と私生活を行ったり来たりする日々が楽しく、充実していました。恵まれた環境だったのかも知れませんが、私は仕事が辛いと感じたことは一度もありません。ましてや上司や会社から「馬車馬のように働いていただきます」とも社長自らが「私自身もワークライフバランスという言葉を捨てます。働いて、働いて、働いて、働いてまいります」と発したことを聞いた記憶もありません。自ら前線に立つそぶりを見せながら、部下に突撃を命じる旧軍司令官のような言葉は、社員の自主性と創造力を損なってしまうのです。このことを理解している会社で働くことができたことは大変恵まれたことでした。

自主、自由、自立の精神に満ちた会社の労働環境も、昭和、平成と日本が成長から停滞に向かっていくに従って、労働時間や社員の健康などの労務管理がマネジメントの中心となりました。すると今まで仕事は自ら意識的に行うものと考えて実践していた社員から、働く喜びや自主性が奪われ、管理することと管理されることが日々の重要事になってしまったのです。つまりマネジメントに決められたとおりに動くことが仕事であると言うことです。確かに組織の命令系統から見るならば、管理者から求められたことをやっていればそれ以上のことはしなくてよい、あるいはしてはいけないという立場が労働者なのでしょう。しかし、少なくとも私の所属した会社はある時期までは仕事は自ら行うべきものという行動原理によって機能していました。しかしコンプライアンス（法令遵守）やアカウンタビリティー（説明責任）、ガバナンス（企業統治・組織管理））などの経営概念がアメリカから輸入され、今までの個人の常識と倫理観によって統制されていた行動原理が、規則とマニュアルの中に押し込められてしまいました。規則に書かれた瞬間、リスクを恐れて会社も社員も挑戦を望まなくなり、安定、安全、恙ない日々を送ることが働くこと（行動原理）となってしまったのです。本来私生活がその場であったはずなのに、仕事も私生活も何処に行っても求められ望まれることは安定、安全の無難な日々です。その結果が現在の、出口の見えない閉塞感に覆われた日本です。

私の退職の間際、会社は今までの働き方を強制的に変えなければならなくなりました。それはある社員の過重労働の末の自殺に対する司法判断です。その結果、会社の行動原理であった「鬼十則」は社内から

物理的にも精神的にも撤去されたのです。入社以来、常に耳と目の届くところにあり、社員すべてはこの十則（教え）を実践すれば結果が出ると信じた行動原理です。これが昭和、平成と情報・コミュニケーション業界を先導してきた原動力です。また私が真に心身ともワークライフバランスが実現できていたと信じる日々の実践の礎なので、もはや時代錯誤の言葉と感じられるかも知れませんが、あえてここに全文を記載します。

鬼十則

「仕事は自ら創るべきで、与えられるべきでない」

「仕事とは、先手先手と働き掛けていくことで、受け身でやるものではない」

「大きな仕事と取り組め、小さな仕事はおのれを小さくする」

「難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある」

「取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは……」

「周囲を引きずり回せ、引きずるのと引きずられるのとでは、永い　間に天地のひらきができる」

「計画を持て、長期の計画を持っていれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生まれる」

「自信を持て、自信がないから君の仕事には、迫力も粘りも、そして厚味すらがない」

「頭は常に全回転、八方に気を配って一分の隙もあってはならぬ、サービスとはそのようなものだ」

「摩擦をれるな、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でないと君は卑屈未練になる」

この鬼十則は時代錯誤でしょうか、パワハラでしょうか、理不尽でしょうか。私は在職中鬼十則通りに行動することを上司から要求されたことも社から指示されたこともありません。会議や集会などで唱和させられたこともありません。行動原理ですが行動を規定し指示するための言葉ではないのです。各々が自分の行動の指針とし、自発的に受入れ、自身の行動の検証・計画・実践のための道標なのです。唐突に聞こえるかも知れませんが、私の会社時代のそれは鬼十則で、僧侶になった私のそれが法華経であり日蓮聖人の言葉です。

かつて私が仕事と私生活の往来で心身バランスを保ち、楽しく安らかで豊かな日々を送ることができたのは、それを実践可能としてくれる会社への「信」があったからです。今私は僧侶と世間の間を毎日往復しながら信行の日々を送っています。それは何らかつての仕事と私生活の往来と変わりません。私が今立つ所への信がなければ、その場からの信も私は得られないでしょう。互いの信がないところでは心身のバランスも保つことはできません。まずは失われたと私が実感する社会と個の間の「信」の再興が必要だと考えます。

狂言綺語二百・信頼と信行

やっと秋らしくなってきました。今年もいつも通り木々の葉っぱが色づき、雑草は枯れ始め、柿や栗が実り、虫の音に秋の夜長を感じるようになりました。一雨ごとに気温が下がっていく毎日を体感すると、ついこの間までは、このまま日本は亜熱帯気候となって、四季もなくなり乾季と雨季だけになってしまうのではないかと、秋や冬の到来を疑っていたこともすっかり忘れ、衣替えを急ぎ、こたつ布団を引っ張り

出して、秋の深まりに備えています。山もそろそろ雪が降り始めることでしょう。ただ今年は暑さが長引いたため、畑を準備する気力が失せて、八月の終わりに蒔かなければならない大根などの秋冬野菜は、全く手当ができないまま十月になってしまいました。やっと草刈りができる気候になったので、牧草状態の畑の草を刈り、耕して、やっと冬越し野菜の玉葱やサヤエンドウの作付け準備が始まったところです。秋が来ると信じても、信じ切れない毎日が続いた結果の、いつもと違う秋の畑、自然への信頼が少し揺らいだ今年の秋でした。

私たちの日々は、明日も今日と同じような日が来ると信じることができることによって、初めて　今日の安心を得ることができるのではないでしょうか。今日の安心を信じ、頼りにすることで、安心の明日が迎えられることを信じることができるのです、これを「信頼」と呼びます。信頼は、今知りうる相手側の意思や能力、人格などに対し、将来的な安心感や確信を持ち、信じて頼りにすることです。それによって相手側が期待通りの結果をもたらすだろうということを期待するのです。もし期待通りの結果が得られなかったら、信頼が裏切られたことになります。それは精神的な痛手ばかりでなく、経済的、物理的な損失ももたらすことになるでしょう。最近「首脳同士の個人的信頼関係を作る」という言葉を頻繁に耳にします。互いの国のトップ同士に個人的な信頼関係があれば、互いの国も信頼関係にあるという「個人＝国」の文脈で語られる言葉です。他国との折衝が国益のためであれば、本来相反するはずの国益を調整して、互いの利益が五分五分と思える程度の結論に導くことが、外交折衝のはずです。ところがその前提が、個人同士の信頼関係ならば、国益を首脳同士の個人の感情や人格や能力に全面的に委任してしまうことにはならないでしょうか。少なくとも個人的な信頼関係を作りたいと思っている当の両首脳の意志や人格に関しては、私は到底信頼できるものではありません。互いの首脳も信頼は国益を自国に有利に導くための手段だと思っているのでしょう。

信頼が目的のための手段だとすれば、信頼することもされることも互いの信頼関係を利用した化かし合いの陥穽に落ちてしまうはずです。それは、私たちが「信」に「頼る」あるいは、「頼られる」ことで何らかの果実を望むことが目的となってしまうからでしょう。何らかの見返りを望むからこそ信じるという構造です。その結果頼りにする対象を信じるのではなく、その対象がもたらす結果を信じるという本末転倒が起こるのです。「信」に「頼る」ことは互いが依存し合う仲です。社会生活の中では化かし合いの陥穽におちいる可能性があろうとも、たとえそこに主従関係や上下関係が生まれようとも、互いのコミュニケーションの手段として有効に機能する限り、社会の仕組みとして容認できることとして、それで良しとなるはずです。

ところで「信頼」に互いが頼る依存関係が宗教の世界で機能するとき、信頼は経済論理に還元されてしまうことがあります。宗教活動が資本も設備投資も必要としない、新手のビジネスと思えるような活動をしている宗教教団が多いと感じるのは私だけではないはずです。布施と称して教団に財産を上納する人達は、何を信じ、何を頼り、何の果実を期待しているのか、そして頼られた教団は何を果実として与えているのか、しかしそれを第三者だけでなく、信仰の埒外の親子が知ることができなくても問題はありません。信仰の本質は、信じるものと信じられるものとの一対一の関係性にある、と考えれば当事者同士が分っていればよいことです。互いがそれで安楽を得られていると思えれば、それが信仰だからです。寡聞にして仏教以外の宗教が信頼関係を教義の基盤としているかどうかは知りません。ただ私は「信頼」を基盤にし

た宗教は、例外なく頼るものが何らかの果実を期待すると言う構造にならざるを得ないと考えます。それは宗教でしょうか。

お釈迦さまへの「信」は、私たちを安らぎの処へと導くための「信」です。何らかの「果」を期待するための「信」ではありません。なぜなら、安らぎの処への道のりは自己のはからいでも他者のはからいの結果でもなく、ありのままの歩みが導く「果」だからです。諸行無常、縁起の法則の「果」なのです。だから仏教には互いの信頼関係という打算的な言葉は存在しません。あるのは「信」と「信」への無私（諸法無我）の帰依だけです。「信」は対象（神や仏）に頼ることを望むのでなく「信」によってその「信」が私自身に安楽をもたらすことを信じて、「信」の指し示すところに向かって歩み始めるためにあるのです。そしてその歩みが「行」です。私はお釈迦さまを信頼したことは一度もありません。自ら歩み始めない限り、頼ったところで何も与えてくれないからです。お釈迦さまの「法（教え）」が照らす（法灯明）道を自らの足（自灯明）で歩き続ければ、必ず安らぎの処へ辿り着くことができると言うことを信じることが私の「信」です。それがお釈迦さまへの帰依です。「信」が「行」となったとき、それは自ずから「果」となるのです。

「信頼」は社会生活では必要な基盤ですが、それは娑婆だけに通用する概念です。信仰の世界では「信頼」すべき対象は存在しません。あるのは各々の「信行」だけです。娑婆では神様仏様を拝んで、何らかのご利益を望むことが宗教と思われていますが、現実に神仏は具体的な御利益を与えてくれることはありません。それがあると主張する方に私は「それは幻想です。」と申し上げます。信仰の世界では「信行」だけが大いなるもの（神仏）との対話を可能にしてくれるのです。それが信仰です。御利益を頼りに神仏をただ拝んでも布施に励んでも、それは口をポカンと開けて永遠に入らない御利益を待つことにしか過ぎないのです。

狂言綺語二百一・陀羅尼

我が家に隣接する土地の松が三本倒れました。松食い虫にやられていたようなので、倒木の危険を土地所有者には知らせてはいたのですが、夜中の雨と風で、朝起きてみたら道路に倒れていました。台風でも竜巻でもなく、強い雨でも風でもなかったのですが、人や車が通行しているところに倒れたら、電線を切断したら、我が家の屋根に倒れたらなど考えると、対処の仕方が事前にあったのだろうと思わずにはいられません。自然災害の起こる原因は防ぎようがありませんが、災害に対する備えは常にしておかなければいけないと言うことです。しかし私を含め、いつ起こるかも知れないこと、自分の身に起こるかどうかも知れないことへの日頃の備えに人が切迫感を持てないことは、防災対策の難しさです。災害を備えの不備の点からは人災、人智で及ばない自然の脅威を天災と呼ぶのはきっと自身の備え不足を糊塗したいからなのかもしれません。

地震はなくすことが不可能な災害ですし、突然やってくるので退避もできません。予知ができるとは言っても、確実性の点で社会生活を犠牲にしてまで、その予知に従うことには無理があります。できることは地震が起きたあとの、できる限りその被害を拡大させないための、自分自身への備えだけです。特に大

地震が起きた瞬間は、心の余裕もなく、早くこの揺れが収まって欲しい、これ以上強く揺れないで欲しいと心に念ずるしか方法はないと思われます。私の亡くなった母は、地震が大の苦手で揺れが来た瞬間「ナンミョホウレンゲキョ、ナンミョホウレンゲキョ」と、手をすりあわせて早口小声で何回も繰り返していたことをよく覚えています。この呪文のようなまじないの言葉は、早く揺れが収まって欲しい、これ以上大きくならないで欲しいと神仏に訴えるためだったのか、自分の動転を鎮めて正気を取り戻すためだったのか、地震の主を呪う言葉だったのかは分りません。ただ子供の私には、呪文を唱えている母の姿は鮮明に覚えています。後になってこれが「南無妙法蓮華経」のことだと知って、呪文ではないことを知りました。僧侶の私にとって「南無妙法蓮華経」は法華経の教えへの帰依の言葉であり、信仰告白の言葉です。しかし母にとっては、人間の力の及ばない自然の力を、呪文の霊力で押さえ込もうとした試みではなかったのではと思っています。

法華経陀羅尼品第二六は呪文の章です。陀羅尼はサンスクリット語の「ダーラニ（dhāraṇī）」を漢字に音写した言葉で、「総持」と訳されます。仏教語としての厳密な意味は、「いっさいの言語説法を記憶して忘れないとの意味であり、陀羅尼を繰り返し繰り返しとなえれば雑念がなくなって禅定に入り，その結果いっさいの言語説法を記憶することができる」と言うことですが、原意は「呪文」です。法華経陀羅尼品のサンスクリット語からの訳文も「呪文」となっています。呪文を宗教学的に位置づける能力は私にはないので、「呪」という言葉から受ける一般的な視点からみると、第一は「他人に災いが生じるように神に願う、呪いや呪詛」、次に「自分の災いを取り除くために神仏に願うまじない」が、仏教者以外のごく常識的な受け取りだと思われます。最後は仏教者の理解としての陀羅尼（総持）となります。これは「真言」とも言います。

私は僧侶となるまで呪文が仏教文脈の中で語られていることを知りませんでした。原始信仰、民間信仰の範疇の、不可視でおどろおどろしい霊力が作用する、超自然的世界の言葉だと思っていました。仏教はお釈迦様の教え（法）にすべての「信」をおくことから、日々の行為が始まると言うことが、私の仏教理解です。「信」が指し示す安らぎの処への道をありのままに進むことが「行」であると言う「信行」が仏教です。だから、ありのままの世界、大いなる宇宙の真理以外に、私に慈悲と安らぎを与えてくれるものはないのです。しかし、現実に唱えられる真言や総持は加持祈祷のためのものです。それはある霊力をもつ超自然的な存在に私の「行」を丸投げする行為です。私にはそれがお釈迦様とともに歩む「信行」の道とは思えません。私の理解の限りでは、お釈迦様がダーラニを唱えることが安らぎの道への歩みだと語ったことはありません。原始仏典の記述では、霊力について語ることはなく、心の平安を得るために如何に清浄な日々を送るかについての、自らの行動規範と方法を語っているということが私のお釈迦様の言葉の理解です。自らの日々を陀羅尼や真言に託して、超自然的世界に預けることが安らぎの道を歩むとはどう読んでも読めないのです。恐らく、陀羅尼や真言に己を預ける人達は、超自然的な存在そのものが仏様だというのでしょうが、仏様は預ける存在ではありません。預ける対象は仏様の法（教え）です。それが「信」です。超自然的な存在を措定して、そこに己の存在を丸投げしてしまっては、自らの行動の手足となる自灯明を自ら吹き消していることと同じなのです。法灯明を信じ、自灯明の照らす足下を歩むことが仏の道を歩むこと、それが仏教です。

法華経の陀羅尼品の呪文は何を意味するのでしょう。「この呪文を加持祈祷に使いなさい。呪文を聞いた

霊力があなたの災いを払い、願いを叶えてくれるでしょう」とは何処にも書かれていません。呪文を仏様に提案した菩薩や天は「法華経を説法し修行する者を守護するため、信行を妨げるものを寄せ付けないため」と述べています。この陀羅尼は法華経の行者を守護するための呪文なのです。漢文に音写された陀羅尼は音だけで、その意味を辿ることは不可能ですが、サンスクリット語では守護する言葉の投げかけの意味を辿ることは可能です。例えば冒頭の「安爾　曼爾　摩禰　摩摩禰　旨隷　遮梨第　賒咩　賒履　多瑋　、、、」は「不思議よ、思う所よ、心よ、無心よ、永遠よ、修行よ、寂静よ、淡泊よ、変化よりの離脱よ、、、」注1と訳すことができるようです。これらの陀羅尼によって心置きなく信行の道を歩むことができると言うことに陀羅尼品が法華経に存在する意味があるのです。ところが仏教伝来以来、陀羅尼が信行者を守護するためのものでなく、願いを霊力に丸投げする道具になっているように思えてなりません。これは仏教が仏教以外のものに浸食されているということなのではないでしょうか。

注1：庭野日敬「法華経の新しい解釈」

狂言綺語二百二・ジレンマ

風が吹き抜けるたびに、頭上から茶や赤や黄色の枯れ葉がシャワーのように降り注いできます。目の前に色とりどりの枯れ葉のカーテンが降ろされたかのようです。年にわずかだけ、紅葉の終わりに見られる光景です。落葉の跡は、葉っぱを落とした大木の先に拡がる初冬の青空と道一杯に敷き詰められた枯れ葉の絨毯。私はこの絨毯を歩くときの音に心を強く引かれます。大きく膝を挙げ、上から強く踏みしめてるときのさくさくの音や、靴を葉の下に潜らして滑るように歩く感触とかさかさの音の、落ち葉との戯れを楽しみます。

道を埋め尽くした枯れ葉はいつの間にか吹きだまりとなって一か所に追いやられ、そのまま朽ち果てていきます。土の上ならばいずれ土に還っていきますが、道の際や屋根樋にたまった枯れ葉は、片付けない限りいずれそこから雑草が生えてきたり、ミミズの住処となって猪に掘り起こされることになります。かつて山の落ち葉は腐葉土として貴重な肥料になったものですが、今では落ち葉を集めている人は殆ど見かけなくなりました。山の雑木もかつては薪となる貴重な資源だったので、山に人が入り、定期的に整備していたと言うことですが、今では薪のためや堆肥のために山に入る人もいないので、里山は荒れ果て、人の住処と獣の住処が隣接するようになってしまったようです。人と獣の間に緩衝地帯がなくなってしまったと言うことです。

人と自然との共棲は言うは易しです。が、人を襲う熊や農作物を荒らす猪は人間の生活範囲に出てもらっては困るので、駆除してくれと言うのが、そこに住む人の偽らざる心境です。生物の保護と人の生活はその境界線上に住む人間にとってはジレンマの対象でしかありません。人間界でも互いに利害の反する集団間の境界は常に諍いの種です。話し合いで解決できればよいのですが、脅しや暴力、戦争の結果のどちらかの屈服まで行かないと解決できないことは、現実が証明しています。しかしそれは一時的な解決で、火種が残り続け、それが何時発火するかも知れないことは、歴史を顧みれば明らかなことです。それほど境界を挟んで互いが平穏に生活し続けることは困難なことです。人権、自由、平等と言う言葉を隠れ蓑に

したとしても、結局は集団間のパワーバランス（経済力と武力）が境界の帰趨を決めることになることは言うまでもありません。

生物界の頂点に立つ人類は自然界で圧倒的な経済力と武力を持っているので、人の生存を脅かす他者に対しては、そのパワーを遺憾なく発揮してきました。そして生き物（他者）を絶滅に追いやり自然を破壊してきた過去からの推移と足並みをそろえるようにして、人類は技術の進歩や生活の豊かさを獲得してきたのでしょう。しかしそれが行き着くところは、地球の破壊であることに人類は気づいてしまったのです。人類を幸福にするはずだった他者への支配が、結局はブーメランのように人類への災厄となりました。たこが自分の足を食べてしまったのです。その根本原因はなにか、それは自然は支配できるという思い上がった考えを人類が神の意志だと考えたことです。主観対客観、善対悪、人類対自然などの二元論を論理の根底に置き、それが理性の働きによって証明される絶対的な真理と考えたことにあるのです。この絶対神信仰から作られた論理は破綻しているのではないかとの嫌疑は、一九世紀後半辺りから哲学的思考の大きな潮流となっていきますが、未だにその答えは見つかっていません。つまり人類は人対他者（自然）のジレンマ、「こちらを立てればあちらが立たず、そうであれば、あちらに消えてもらおうか、しかしそうなればいずれこちらにも災厄が及んでしまう」という他者との二項対立のジレンマを理性（神の意志）で解決できていないからです。

諸行無常、一切皆空の世界に生きる私たち仏教徒から見ると、彼らのジレンマは永遠に解決できないと思われます。なぜならば彼らの原理は二元論にあること、そしてその二元論の根本には神の意志があることです。この西洋の論理が日本に輸入されてから一五〇年以上経ち、その間日本人は何とかその西洋論理を身体化しようと努力してきましたが、やはりそれまで身体に受け継がれてきた八百万のカミと諸行無常の心身は、おいそれと絶対神に取って代わることはできなかったのでしょう。個人対神の向き合い方は日本人にはできないと言うことです。そしてそこから自ずと引き出される、個性の重視、個の権利、個人主義の徹底による社会の構築と言う西洋社会制度は形式的模倣に終始し、日本人には血肉化されることはなかったと言うことが、今、この時代の日本なのだと私は考えます。日本社会に現在起きている様々な対立や分断はカタチだけの西洋社会制度の中で生きる私たち日本人が、西洋社会制度と古来以来血肉化されてきた八百万のカミと諸行無常の心身との間で激しいジレンマを起こしていることに原因があるのではないかと考えるのです。

神の意志に生きる西洋社会の原理は「個」、つまり個人主義にあるとしたら、八百万のカミと諸行無常が習合（神仏習合）した日本人の原理は何かと言うことを考える必要があります。それを「個」に対して「相互」という言葉で表されるのではないかと考えます。個人主義に対して関係主義、「個」に対して「集団」と言うことです。なぜなら八百万のカミの原理は、すべての存在にカミは宿るということ、森羅万象全てはカミ、そして私自身もカミであるということ。それは相互にカミとして尊重畏怖し、感謝し、慈悲を施し合うと言うことです。そして諸行無常はすべての存在は固定的なものではなく常に変化し、互いは相互依存的な現象に過ぎないという考えです。一切皆空、すべてはありのままにあると言うことです。善も悪も、正も誤も、真実も偽りも、それは「個」が理性という名の固定的視点で見るから起こる結果に過ぎないのです。もし私たち日本人が二項対立のジレンマに晒されているのであれば、何らかの境界線上に立たされているのが日本の現在と考えるべきなのです。それが分れば、神仏習合が血肉化されているはずの日本人

には、本来二項対立によるジレンマは起こりえないはずです。人と獣の境界線では、「個」の視点だけでは八百万のカミの中で生きることはできないと、落葉を踏みしめるさくさくの音が私に語りかけたことです。

狂言綺語二百三・カミとホトケの出会い

初詣と言う習俗はよく考えると不思議なものです。皆さんはお寺に行くのか神社に行くのかそれとも両方を参拝するのかどちらでしょうか。新年最初に神社やお寺へ参拝して、旧年の感謝と新年の健康、安全、幸福を祈願する年中行事を初詣と呼ぶのでしょうが、不思議なことは、神仏両方に祈願することが日本人には可能であり、矛盾しないと信じて詣でていることです。かく言う私は僧侶ですから、元旦にはお釈迦様と日蓮聖人の前で自ら新年の法要を行い、旧年の感謝をし、新年の安らかな日々を誓います。その後近所の生駒神社（勝善さん）に行き頭を下げ、数日内に羽黒山を四十分登り羽黒神社で頭を下げ、最後は車で一時間半ほどの古峰神社へ干支の土鈴を買いに行きます。これがここ八年間の年始の一連の初詣と思われる私の行動です。

この行動が僧侶の私の中で矛盾なく行われていることは、日本人以外の信仰者には信じられないことだと思います。日本人であっても僧侶にあるまじき行動と非難する者はいるでしょう。日蓮聖人のご遺文「三沢抄」には「内房の尼御前が氏神への参詣のついでに身延の日蓮大聖人を訪ね、面会したいと申し出たことについて、その本末をわきまえない不心得を正し、法華経を根本とする信心の基本姿勢を教えるために面会しなかった」と記されています。しかし聖人は神様を排除していたのではなく「神は所従なり法華経は主君なり」と語られていたように、法華経では神は独立した信仰の対象ではなく法華経と法華経の受持者を守護する働きという考えです。つまり主君である法華経に対して神は家来の立場であり、家来のついでに主君を訪ねることは仏法の道理にも世間の道理にも合わないと聖人は言われているのです。これが神仏習合の考え方です。これに対して明治維新の行った神仏分離令は神を仏の家来から解放し、あらためて天照大神（天皇）を頂点とした信仰のピラミッドを作ることが目的でした。しかしその陰謀は果たして成就したのでしょうか。

私が出家した当時、大きな違和感を覚えたのは、神仏習合の考え方でした。それまで一切の宗教知識や宗教生活から離れたところで生きていた私は、出家以来、猛烈な勢いで仏教の基本、法華経、日蓮の思想について本を読み、仏教の基礎知識を身につけようとしていました。しかしそこで得られた論理的な知識と、実際の生活の中にある寺院や僧侶などの宗教的な環境との間に大きなギャップを感じずにはいられませんでした。例えば寺院の中の本尊がお釈迦様だけでなく、様々な仏が存在すること、菩薩の位置付けも分かりづらく曖昧です。本尊の回りを守護すると称して配された神々、また神である北斗妙見菩薩や鬼子母神などが単独で祀られていることもあります。私たちの信仰の対象は何であるか（本尊）が、寺によって分りづらいのです。しかしそれに対して納得できる論証は何処にもないことに、同じ宗教とはいえ仏教は他の国々で信仰されている一神教の宗教と根本的な相違があるのではと思い始めました。仏教は異端を排除せず、布教の先々の民族の原始信仰をも取り入れていく寛容な宗教ではないかと言うことです。事実仏教には異端裁判も異端を判断する宗教会議もありません。教えの根本さえ押えていればそれぞれの民俗信仰

（原始宗教）と融合し異端として排除されない宗教なのです。では仏教の教えの根本は何か、それは世界の捉え方にあるのです。「諸行無常」「諸法無我」「一切皆苦」「涅槃寂静」です。この根本と仏教の持つ寛容（慈悲）の精神と、一神教の根幹にある「絶対者の意志（真理）」というものはない、という仏教真理を受容すれば、神仏習合の精神は日本人にとって必然なのです。私の神仏習合への違和感は西洋的思考に制御されていたということです。

しかし、私は日蓮聖人を始め、日本仏教の創始者や継承者の考える「神は仏の権現（仮の姿）であり、仏は神の上位概念にある」という仏教者から見た考えは採りません。仏教が日本に受容される以前の日本に立ち返って、名もなきわたしたちがホトケとカミの出会いを目の当たりにし、わたしの中で神仏が習合していく過程を見るべきではないかと思っています。私にはそれを学術的に論じる能力はありません。しかし、全くの宗教的白紙状態だった私が、出家以来十二年間に自らの「知と情と意」に書き込んできたカミとホトケの軌跡を省みることで、日本人の神仏習合受容の一端でもとらえることができるのではないかと考えています。

仏教伝来以前の日本人は八百万のカミと共に暮らしてきました。それは世界を思考で把握することではなく、私自身が自然（世界）と共存しながら生きているのだという、感覚的精神的な世界把握だったのでしょう。世界との一体感（生きると言うこと）が八百万のカミとの共存を実感する世界、それは時には豊かさや優しさを、時には苦難や厳しさをもたらす生きることそのもののカミです。私はそれが日本人の「情（精神）」として流れる生きる力だと考えます。一方、仏教は世界をありのままに把握する智恵を与えてくれました。仏の法（知）です。それがここまで日本人が存在できた生きる智慧です。ここに八百万のカミ（情）とホトケ（知）が出会い神と仏に合体しました。日本人オリジナルの神の精神と仏の智慧との出会いです。

日本人は、明治維新によって日本人の精神と智恵の根底にある神と仏の共存（神仏習合）の考え方を無理矢理引き裂かれてしまいました。西洋文明の受容によって日本の植民地化を阻止するという大義は理解したとしても、日本固有の精神と智慧まで破壊する必要はなかったと思います。西洋の絶対神の論理に従って世界を見ることを強要されておよそ百五十年、主観と客観（私とあなた）の融合あるいは屈服・征服の二項対立の中で世界の真理（本質）を組み立てるという理性の絶対化の限界が、今はっきりしてきたのだと私は考えます。つまりは日本人の一神教化、絶対神信仰は無理だと言うこと、その論理（理性）に従って世界構築をしてきた日本の、西洋との同一化は根本的に不可能だと言うことです。それは日本人が世界を理性で理解することも不可能だと言うことです。つまり、日本も日本人の信仰も日本人のあり方も理性と一神教の世界が規定する方法論で説明し理解し実践することは不可能だというとんでもない結論にならざるを得ないのです。

狂言綺語二百四・カミとホトケの出会いⅡ（承前）

カミとホトケに出会いがあれば、その別れもあります。出会いから融合までは多くの年月と人々の精神の営みがあったはずです。そして出会いの積み重ねが、私たちの精神の奥底を流れる「信行」の道となっ

たとき、初めてそれを伝統や民族精神と呼べるのです。それが私たちの心底を流れるまでに必要とした膨大な年月と、名もなき人々の無限の精神の営みは、しかしある特定の力によって強制的に引き裂かれました。明治元年三月二八日の神仏分離令です。出会いから融合までの流れが人々の自然な精神活動の結果であるならば、別れは維新の政治権力による強制的な別れです。神仏分離令は政府が「王政復古」「祭政一致」の理想実現のために、神道の国教化を企図したものです。天照大神(天皇)を頂点とする祭政一致の統治です。今までの、権力(摂関政治・幕府)と権威(天皇)の祭政分離の統治方法から、すべての国家権力と権威を天皇を頂点として再編し直すという、日本人が営々と積み上げてきた権威と権力の関係性を土台からひっくり返すような革命です。しかし祭政一致の政治は、西洋の列強国と伍して行くための現実的な方法ではないことに気づき、制度上、祭政一致の統治は不発に終わりました。そして廃仏毀釈は政府でなく民衆によって行われたのです。

私たち僧侶はなぜ廃仏毀釈に抵抗しなかったのか、一五〇年後の今、仏教がどのように変容していったのかを、自らに問うてきたでしょうか。神仏分離令は、神社と寺院を分離してそれぞれを独立させ、神社に奉仕していた僧侶には還俗を命じたほか、神道の神に仏具を供えることや、御神体を仏像とすることも禁じました。この法令を根拠に民衆は廃仏毀釈を実行したのです。寺や仏像は破却され、同時に日本人のよりどころであったホトケの法(知)とカミの精神(情)もいともたやすく破却しようとしたのです。今ここで詳しく述べる余裕はありませんが、なぜ、日本人はそのよりどころをこうも簡単に捨て去ることができたのか、その理由を考えるに、宗教が民衆の間では単なる現世利益と娯楽の対象と成り下がってしまったからに違いありません。そうでなければ権力の命令に廃仏毀釈という自らの精神のよりどころを破却する暴挙には走らなかったはずです。政治は布告はしましたが実行したのは私たち民衆です。人々は、仏教が救済の宗教として機能していないことを見抜いていたからなのでしょう。そして今も機能しているとは到底思えないのです。

先日、六日間の山口県長期滞在ツアーに参加して、県内の主要観光地をほぼすべて巡ってきました。私は出家以来、神仏分離令を命じた薩長の指導者たちがどのような風土でその精神性を培ってきたのかを体感したいと思っていました。人は地域の自然(地形、気候、土地)、つまり風土によって育まれ、その風土が作る集団(社会)によって智慧と精神は大きく規定されるのではないかと考えるからです。その土地を訪ね、その地方が見渡せる城山(必ずあります)に上って、街を一望し、その後にその町並みを自分の足で歩くことで、その土地固有の精神性に触れることが可能であるのではと私は考えます。薩摩については数年前に既に城山に上って西郷隆盛終焉の地に立ちました。大久保利通も暗殺されているので、結果的には薩摩は維新の原動力になったとしても、長州との権力闘争に敗れて、その後の近代日本の道筋を今に至るまで推進する風土とはなれなかったものと思われます。結局維新以来、日本の権力の道筋を作ったのは、長州の風土だと私は考えます。山口県で体感した長州の風土と、知りうる歴史の事実を重ね合わせてみると、観えてきものがあります。日本人の精神性に本源的にはなかった祭政一致、神仏分離、神の序列化は、なぜ保守すべき伝統として維新以来今に至っているか、それは長州の風土が作った現実主義的な精神にあると思われたのです。

ここから述べることは、個人的な上に実証的な検証もされていない私の観た長州の風土とその現実主義的な行動です。山口市は県のほぼ中央にある盆地です。幕末に長州藩の藩庁が萩から移されて、それから

今まで県庁所在地となっている都市です。四方を山に囲まれ、今では車でないと東西南北どちらにも行くにも不便する、交通の要衝とは思えないところです。それまで藩庁のあった萩は日本海に面し、夷狄の攻撃をたやすく受けやすい地理上の欠点があるため、藩防衛の観点から政庁を室町時代に西ノ京と呼ばれた山口に移しました。山口は山に囲まれているため防衛上のメリットもあり、徒歩と馬で移動するには藩の中心に位置するため、それなりに当時は交通の要衝だったのかも知れません。実際萩にも、九州への玄関口下関にも、瀬戸内の海軍・海運の拠点三田尻(防府市)にも、山越えながらほぼ車で一時間内外の移動距離です。このような地理条件を概観する中で、一番の驚きは萩城のある地勢でした。海岸にできた三角州の中にある小高い山の上の萩城は三方を海に囲まれ、狭い平地の向こうは山です。ここは外洋以外からは日本国内のどこからも攻撃されない、防衛拠点として作ったとしか思えない城です。つまり関ヶ原で徳川に敵対した毛利が、江戸時代になっても、まだ徳川の攻撃を恐れて、物流には不便だが防御にすぐれた萩の地を選んだとしか思えません。穿った見方をすれば、その他に萩が藩庁所在地である利点は、大陸との交易(密貿易)を考えていたこと以外、地勢的には思い浮かびません。幕末には列強国に喧嘩を売って(攘夷)手ひどい被害を受けたとたん、内陸部に逃げ出して、今度は外(攘夷)と戦うのではなく、内(倒幕)に向かって兵を進めました。尊皇攘夷の看板は、あっという間に尊皇倒幕の錦の御旗に宗旨替えをしたのです。そのためには外にだけ開けている萩より、内に向かって京にも、江戸にも、九州にも行き来のしやすい山口に拠点を移したことは、非常に合理的で現実的な判断と私には思えます。現実的な風土については紙面が尽きました。今回はここまでです。

私は長州の現実的対応を原理原則や思想性に寄らないご都合主義と非難するつもりはありません。神仏分離令も廃仏毀釈も、全てこの長州の(あるいは現在の日本)の現実主義の文脈で観ることで、私たちが今どのような日本を生き、世界はその日本をどう見ているかが分ったような気がする山口の旅だったのです。

狂言綺語二百五・カミとホトケの出会い 旦(承前)

今年も散歩道沿いの鴨池に氷がうっすらと張るようになって、鴨たちの整列姿が見られるようになりました。鴨は所々に張った薄氷を避けるように泳ぎながら、池の表面に浮かぶ太い倒木の上に集まってきます。一列に羽毛を大きく膨らませながら等間隔で太陽に向かって整列する光景は、穏やかな真冬の一点景です。昼頃になると氷も溶けてきて池の中を自由に泳ぎ回るようになり、時たま水の中に顔を突っ込んでは、なにやら食べている様子。気ままに泳いでいるようにみえても、家族同士なのか七,八羽くらいが集まって、動き回っているようにもみえます。それは鴨たちの独自の秩序のようにもみえます。たまに争いらしき光景を目撃しますが、それでも内輪もめ程度ですぐにまたのんびりと水面を泳ぎ、倒木に上がり太陽に向かってひなたぼっこを始めます。鴨社会の平和と秩序を保つために鴨社会独自のルールがあるに違いありません。

鴨社会のルールはどのような原理で成り立っているのか、私には知るよしもありません。しかし個人や群れ(家族)が生き続けて子孫を残すためであることは、生き物の本能、種の保存から考えれば間違いのないところでしょう。ただそれが一羽の鴨のため、家族のため、池を泳ぐいくつかの集団のため、それと

も鴨という種全体のためなのか、そのメカニズムは分りません。一方、人間界のルールは誰のためで誰がルールを作るのかは、今やはっきりしたようです。国益や安全保障、歴史認識の下に行われている様々な侵略や主権侵害、内政干渉、経済的圧力は、力（軍事と経済力）を持つものが自らのために自らルールを作りそのルールを正義あるいは真理（絶対者の意志）の名の下に遂行しているという事実を何度も目撃させられています。それは私たちが、自由や人権や平等などが幻想にしか過ぎないと言うことを認識するには充分すぎるほどの力の行使です。民主主義が絶対的な価値としてきた自己の存立基盤（自由・人権・平等）は、人類の、あるいは民族、国家、部族、宗派、政党、企業、はたまた個人のすべての存在の利益と幸福のためにあると思っていたところが、それは実は権力意志の都合で基盤（ルール）を自由に変えてもよいことがあきらかになりました。その新しいルールに対抗するには「力」を持ってするほかないのですが、そもそも力の無いものがルールを叫んでも無力であることもまた明らかになりました。年明け早々のドンロー主義の蛮行に対しても、有事発言への意趣返しの中華思想の履行にも、発言はするもののそこに行為が伴わなければ、とりあえずは「言ってはみました」だけの、民主主義の価値観共有にもならない日本の独り言なのです。それが維新以来長州が推進してきた現実主義の伝統に則っているならば、まさしく正当保守の伝統芸ともいえるのでしょう。

明治以来日本が進んできた道に主義と言えるものがあるならば、それは現実主義、折衷主義だと思われます。主義がある理念や絶対意志に立脚しているならば、それははっきりと民族の背骨として歴史を貫いているはずです。例えば西洋は神の意志とその実現のための理性、中国であれば中華思想であるように。ところが日本にはその背骨が見当たらないのです。万世一系の天皇がその背骨だと主張したがる人はいるでしょうが、それは時の権力が日本人の「カミへの情」を時々で都合よく利用してきた結果だと私は考えます。背骨は本質であり、真理であり、不変のものです。私たち日本人には生来の背骨はありませんでした。常に外から与えられ、何とかそれらを生得のものにしようと試みましたが、背骨の構築は不発におわったのです。

私は日本人にある唯一の生得のものは「カミへの情」だと考えます。この情が、あらゆる自然、生きとし生けるものをカミと観て、カミの精神と繋がることで、私たちはこの過酷な自然の中に生活をし続けることを可能としたのです。精神活動の根本と哲学者カントが考える「知・情・意」のうち、「情」として日本人が交わす対象は「カミ」です。では「知」はどこからやってきたか、まずは中国経由でやってきた「仏教」です。現在日本にある仏教は、印度発祥のお釈迦さまの仏教とは似ても似つかない仏教となっています。それは「カミとホトケの出会い」の結果です。神仏習合により「知」をホトケが、「情」をカミがひきうけることで日本人は生来のカミと外来者のホトケを折衷し、日本独自の精神世界を作り上げました。維新以降、政府は日本人の生得のものとなっていいた「知」と「情」を神仏分離令で引き裂こうとしました。そこに西洋の「知と情」であるキリスト教の概念を取り入れようとしましたが百五十年経ってもそれは実現していません。早々に西洋から学ぶものは西洋の「知と情」が結果として生み出した「技術」だけという現実主義・折衷主義に宗旨替えをしたのです。見事な変わり身の早さです。中国発祥の「儒教」や「朱子学」も同様の結果です。それらの「知」の根本は中華思想です。支配者が支配を行うための倫理と論理です。それは易姓革命という中国の王朝交代を正当化するための論理です。つまり易姓革命を背後から支える思想が儒教です。ですからその思想が日本の天皇制と相容れないことは自明なのです。日本人は儒教か

ら民衆支配のための倫理観を抽出し、日本にあるシステムとの折衷を図ったのです。つまり「仁義礼智忠信孝悌」の実践と日本的システムの現実的な統合です、その結果、天皇制維持、家父長制、武士道などの概念が生まれたのでしょう。

私は日本人の現実主義・折衷主義をデメリットではなく逆に強みだと思っています。それは「知・情・意」のうち「意」がないことにあると考えます。日本人にも「意」があると言われるかも知れませんが、それは「知・情」の精神の営みの結果を行動に移すときの意識や意志というものです。ところが西洋では、まずイデア（真理）の獲得という意志が知と情の活動を指揮するという方向に精神活動が行われているのです。そしてキリスト教の発明と共にイデア（真理）の獲得は絶対神の意志であるとなったと考えます。一方が「知と情」が主で「意」が従であるのに対し、絶対神の「意」が主となり「情と知」を動かす、正反対の道を辿っていると思われるのです。それを強みと考える理由はこれから明らかにできればと考えています。

狂言綺語二百六・カミとホトケの出会いⅣ（承前）

「カミとホトケの出会い」についてこの場を借りて三回私の考えを書いてきました。学問的精査に基づく論述でもなく、また論証の瑕疵も検討しないままでの乱暴な論旨であることも充分自覚した上での記述です。この論旨の基盤を作ったものは出家してからの宗教書の濫読と琉游舎を構えてからの九年に渡る共棲体験から導き出されたものです。その共棲体験は信行体験と呼んでもいいものです。今までその時々の経験を手がかりに自然を含むあらゆる他者との関係性を観ることで、縁起の法則の中にある、ありのままの今を、ありのままに受け入れ、ありのままに過すことを「願い誓い行う」日々を生きようと試みた末の記述です。その願いが叶うことが道の終点ではなく、その道を生きることを私は共棲あるいは信行と呼んで生きてきました。

その道の出発点には「カミとホトケの出会い」があったと言うことに、私は九年掛けて辿り着きました。それまでにも、そう考える断片は時々の狂言綺語で書いてきていましたが、それがはっきりと形となり、自らの信心の（生きることの）礎になっていることを発見したのは、皮肉なことに昨今の政治主張や宗教の現状に、言いようのない胡散臭さを感じたことでした。その原因は、とくに伝統や保守の標榜、信仰の自由、権利や平等や自由などの主張が、私の考える「カミとホトケの出会い」以来の日本人の精神と智慧の伝統に全く相反する考え方であるとはっきり認識できたことです。その伝統を無視した考え方が、いつ何処でどのような意図の下に捏造され、保守すべき日本の伝統とすり替えられたかを認識することが、私の「信行」の道を間違えないための重要なポイントなのです。なぜならば私は「カミとホトケの出会い」に日本人の「精神」と「智慧」の原点があると信じる、筋金入りの保守主義者である自覚の下に信行を生きる者だからです。

ここで保守伝統主義者である私の論旨を要約します。①カミは日本人の精神（情）である。②ホトケは日本人の智慧（知）である。③「情」は生きとし生けるものをカミと観て、その精神と繋がり他者との共棲を可能とした。④「知」はホトケの慈悲を教えとして受容し、他者への寛容と共棲の智慧を与えた。⑤「知」

は諸行無常、縁起の法則に裏打ちされたもの。⑥「情」は全ての他者を八百万のカミと観る。⑦神仏習合は日本人の「知」と「情」の統合の具体的な表現。⑧この日本人の営みを私は伝統と呼び保守すべき日本人の精神と智慧の営みと呼ぶ。⑨明治維新の神仏分離令によって日本人の「知」と「情」は強制的に分断された。⑩それまで日本人になかった「意」の概念が輸入された。⑪日本人に西洋的な概念の「意」がなかった理由は諸行無常の思想が根底にあるから⑫西洋の「意」は絶対者の意思の実現（絶対善と絶対真）。それを人類は絶対神から委託されている。⑬日本人には絶対真も善もない。全ては「空」、「ありのまま」⑭日本人の意志は自己の「知」と「情」の営みをもって他者との関係の中で生きること。⑮それを「意」と呼ぶなら日本人の「意」は関係性の中の「行い」へと向かう自己の行為。⑯一方西洋の「意」は絶対神の意志の実現。⑰ホトケとカミは人に分け隔てなく慈悲と共棲の光を注ぐ、誰も選ばない、誰も排除しない。これがカミとホトケの与えてくれた真の「平等」。⑱西洋の絶対神が与える平等は選ばれし者への平等であることは自明。

有史以来カミとの「情」の交歓で過酷な自然を生き抜いてきた日本人は、外来者のホトケの「知」を移入して初めて独自の精神世界を確立したのです。これが私の考える伝統と守るべき日本人の姿です。生来のカミと外来者のホトケとの幸福な出会い（習合）です。しかし明治維新以降、その幸福な出会いは分断されて今に至りました。その結果何がもたらされたのでしょう。端的に申し上げれば終わりなき侵略戦争と敗戦、その後八〇年の日本人精神の不在。さまよえる日本人です。なぜならば民主主義が絶対的な価値としてきた自己の存立基盤（自由・人権・平等）は西洋の「意」、絶対者の意志として作られた概念だからです。その基盤の「意」がない日本人にはその根本思想が理解できるはずもありません。だから西洋移入の民主主義の絶対的価値も理屈で理解しようとしても、精神の営みとして生来のものとはなり得ないのです。絶対者から与えられた「自由・人権・平等」の概念以前に、日本人にはホトケの慈悲と、八百万の精神が全ての生きとし生けるものに分け隔てなく注ぐ光がありました。それこそが真の自由と人権と平等の光ではないでしょうか。社会制度、社会統治のための絶対者意志（自由・人権・平等）は私たちの精神の営みには不必要なものだったのです。カミとホトケの出会いが願い誓い行う私たちの日々は、自己が他者との関係性の中で心安らかに豊かに過すことのできる寛容と慈悲と共棲の光に普く覆われた日々です。そのためには、必然的に真の自由と人権と平等の精神が自らのものとなっていなければ、その光を受け取ることはできないはずなのです。

声高に保守もどきを唱える回帰場所は明治維新です。そこからもう一度今に至った日本を繰り返すことが彼らの唱える伝統です。西洋が絶対意思の実現で作り上げた社会制度と秩序とその思想を、再び移入の時代（明治維新）に戻り、当時の日本が折衷策として作り上げた、天皇制度、家族制度、社会制度、経済、外交、防衛政策をもう一度やり直すことで、強い日本を実現できると信じているようです。私はそこに回帰してもまた同じ歴史が繰り返されるだけだと思います。私たちは西洋精神の営みを我が物とすることができないこと、だから制度や思想を折衷して生きていかなければならないことをデメリットと考えるべきではないのです。日本人にだけ生来の精神として与えられた「カミとホトケ」は間違いなく世界で唯一のものです。そこから世界で唯一の日本ができあがるはずです。日本の折衷主義は大いなるメリット、オリジナルの無二の世界ができるはずなのです。そのためにはカミとホトケの出会いが営々と営んできた日本人精神の原点を自覚することが必要です。その精神活動に基づき他者（他の国々）との関係性を構築する

ことは、日本人ならば可能です。なぜならカミとホトケは自己と他者の関係性を寛容と慈悲と共棲の精神で繋ぐ力があるからです。

狂言綺語二百七・カミとホトケの出会いV（承前）

節分は文字通り季節の分かれ目とは分っていても、立春以降は季節は春とは分っていても、やはりそれは暦の上だけです。まだ水道管の破裂を心配しなくてはならないし、雨や雪の後の道路の凍結も心配しなくてはなりません。それでも今年は例年より朝晩の冷え込みが弱いようで、蓮池は全面結氷することなく、鴨も氷のない日当たりのよい池の岸近くに固まって越冬しています。そろそろジャガイモの種芋が店頭に並ぶ頃です。三月に向けて畑を耕して準備を始めなければいけない季節です。そう考えると気候はまだ冬でも、気持ちは春に向かって動き始めたようです。実際この前まで地面は茶色の枯れ草だらけでしたが、所々から青い草がみえています。樹木もよく見ると一枚も葉っぱがない枝に青い芽が見えてきました。春が観えます。

自然は再現性の法則の中に生きています。今年で十回目の冬をこの地で迎えることになりましたが、例外なく冬の後には春がやってきました。一年は必ず繰り返されてきました。日々の移ろいにいつもと違う変化を感じたとしても、それは自然は必ず再現される（繰り返される）という安心感に裏付けされた、一瞬の心の揺らぎ、情緒の表れです。それは自然が示す再現性に慣れた日常へのささやかなアクセントなのかも知れません。その戸惑いはすぐに信頼へと変わるでしょう。例えばそれは手を合わせる、頭を下げる、と言うような形になって表れる自然との対話です。自然への信頼、感謝、畏怖。私たちの力も考えも及ばない大いなるものへの礼拝です。時にはその信頼を打ち砕くような打撃（災害）を与えられることもあるでしょう。それでも人はまた自然があいつもの自然であることを信じて、手を合わせ頭を垂れるのです。そして自然は何事もなかったようにまた次の季節を用意してくれるでしょう。季節が季節を再現する、それが自然です。

三島由紀夫は「文化防衛論」で日本文化の特質は「再帰性・全体性・主体性」の三つに要約されると述べています。この三つの要約に関しては全面的に肯定するにしても、天皇を日本文化特有の「菊と刀（文武両道）」の根源と位置づけ、日本文化の危機（戦後一貫して日本文化は危機にあると言う三島の認識、それは今日まで続いている）において、天皇が再帰的な文化防衛の主体となると言う主張には私は同調できません。「菊と刀」はルイス・ベネディクトが戦時中のアメリカ政府の要請を受けて書いた日本文化の研究書です。日本文化の特質を優美な芸術を愛する「菊」と厳格な武士道「刀」の矛盾する両面から解明した名著ですが、そこでは三島の言う「全体性（菊と刀の矛盾を美的に容認すること）」の中心に天皇を位置づけている訳ではありません。もちろん天皇がその要素のひとつではありますが、義理や恩、共同体、恥、徳、修業、人情などの私たちありふれた日本人の精神の底流を流れる、道徳観・倫理観を分析し、それが日本人の行動原理となっていることを解明しています。私はその精神を天皇中心に集約される単純なものではなく、仏教や儒教や道教や西洋理性などのあらゆる外来の考え方がカミと融合、折衷して形成された日本文化だと考えます。

私は私の考える「カミ」を日本の自然と同義であると考えます。自然そのものが私たちのカミです。自然は三六五日で再現されます。その再現性を信じて、人は感謝し畏怖し崇拝したのです。その回帰は自然の輪廻です。しかも必ず三六五日の間に真円となって繰り返されるホトケの法です。八百万のカミ（情）とホトケの法（知）の出会いです。真円は法の真理と絶対性の具現です。自然は真円で輪廻する不死の存在です。一方、私たちは死すべき存在です。日本文化の再帰性と三島が言うとき、その再帰性とは文化（知と情）は過去にのみ属する「完結したもの（博物館の陳列物）」ではなく、現在を生きる私たちの知と情に連続性と再帰性が喚起されると述べています。再現される自然（カミとホトケ）、つまり不死の存在に死すべき人が文化として受け継いできた知と情を、今を生きる私の中に再帰させることを繰り返してきた形が日本文化の伝統と呼ばれるものです。ホトケの法は日本のカミ（自然）と出会って、再現する自然＝カミ（情）に再帰することを可能としたのです。それはカミに空の視点を与えることです。縁起の法です。ありのままと観る世界が、必ず一年と言う時を経て再現される自然をホトケの法と観る視点です。私たちはそのカミとホトケの出会いの所に再帰し続けることで、永遠の生（日本人の文化や精神）を未来へと繋げることができているのです。それが三島の言うところの日本文化の三要素、「再帰性」「全体性」「主体性」です。しかしそれは、三島の考える天皇中心に集約される三要素ではありません。あくまでもその文化の再帰は私たち各人のカミとホトケにあるからです。それは外から与えられるものではなく、各自の「情」と「知」が自ずと受け継ぎ、受け渡そうとするカミとホトケだからです。自然をありのままに観る各々の視点が各々のカミとホトケに出会うことから、文化の再帰が始まると考えます。天皇に再帰しても私には如何なるカミも立ち現れません。

カミとホトケの出会い以来、日本ではお釈迦様の考えた仏教は大きく変質しました。それが象徴的に表れている言葉は以前この欄でも言及しました。「草木国土悉皆成仏」と道元禅師の和歌「峰の色　谷の響も皆ながら　吾が釈迦牟尼の声と姿と」です。前者の言葉は印度の思想にはなく、六世紀の中国仏教の中に見いだされるようですが、大きく思想として定着したのは日本です。国土全体が緑と水に囲まれ四季の変化が様々な自然の姿を見せてくれる日本だから可能だった考え方です。草木や大地のような非情なものも、仏性を持っていて成仏する、森羅万象全てがホトケであるという考えです。道元の和歌も全く同じです。日本の国土全てが釈迦牟尼の声と姿です。自然そのもの＝八百万のカミの中にホトケ様がおわします。これは原始信仰（カミ・情）と普遍宗教（ホトケ・知）の融合です。絶対神が西欧を席巻するとき、各民族の原始信仰を取り入れたという主張もありますが、それは絶対神への吸収合併です。しかし日本の場合は原始と普遍双方の融合で作られた新たな日本独自の信仰です。だから日本独自、一無二の精神の基礎となり得たのです。

狂言綺語二百八・中観・中道（カミとホトケの出会いVI）

私は「カミとホトケの出会いを五回に渡り考察していくなかで「自然そのものが私たちのカミ」であると言う結論に至りました。恐らくこの考えに疑問のある方や、立証して欲しいと考える方もおられると思います。私のこの考えは、今までの学術的成果と論理的な思考の末に得られた結論ではありません。私のこ

れまでの実体験の中から得られたものです。それはこの地で育った一八歳までの、何の発見も感慨もなかった自然と生活への無関心だった時。四〇年間の都会生活での自然と生活が無関係だった時。そしてこの十年間の自然をありのままに観る時。この三つの時を過したからこその「自然そのものがカミ」であるとの発見です。自然の厄介さ、恵み、多様性、何よりも自然の不変再生を実感しなければ、仏教の実践思想「中道」を全く理解できないままだったでしょう。そして西洋思想の基礎原理「イデア」の絶対性がなぜ理解できなかったかの理由も分らないままだったでしょう。私のホトケとの出会いが自然へカミへと再帰させてくれたのです。

私とホトケの出会いが私の世の中を生きるあり方を変えました。それをありのままに観てありのままに生きると言う言葉で私は表現してきました。これを仏教用語で言うと、ありのままに観るは「空観」あるいは「中観」と呼ばれるもので、一切は縁起の法則により「空」と観る世界把握です。空観は私たちにありのままに生きることを要請します。それが「中道」を生きることです。「有と無」、「常と断」、「善と悪」、「快と苦」などの二項対立の世界把握で生きるのではなく、どちらにも偏らない実践の道（生き方）を「中道」とお釈迦様は呼びました。ありのままに観る＝中観は「智慧」、ありのままに生きる＝中道は「実践」です。お釈迦様の智慧を信じ、お釈迦様の実践を行うこと、それこそが私の仏様であり私の信行の道です。

中観は「正と反」の二項を措定しないことでありのままの道（中道）を観じ、理解することです。中道はその生き方の実践です。お釈迦さまはその生き方の実践方法として八つの正しい道（八正道）を示されました。中道を歩むための正しい生活態度です。1，正見：物事をありのままに正しく見ること、正しい見解を持つこと。2，正思惟：自己中心的ではない、正しい考え方をすること。3，正語：真実を話し、人を傷つけない正しい言葉を使うこと。4，正業：貪瞋痴の三毒を離れ、善い行動をとること、正しい行いをすること。5，正命：正しい手段で生計を立て、清らかな生活を送ること。6，正精進：善い行いを努力し、実践し続けること、正しく努力すること。7，正念：心を安定させ、真理を忘れない、心の安定した状態を保つこと。8，正定：正しい精神統一をすることで心を安定させ、動揺のない迷いのない境地に入ること。

これらがお釈迦様の示した中道を歩むための八つの実践態度です。一見、私たちの日常の道徳規範、倫理規範に見えます。社会生活のための当たり前の態度ともいえます。しかし簡単そうに見えるこれら八つの道を実践するとなれば、とても困難であることもすぐ見て取れると思います。なぜならば、私たちは「正」に対して「誤」が、「正」がもたらす結果の「善」に対して「悪」が対峙される論理の社会に生きているからです。世界を二項対立で判断する思考回路です。これはお釈迦さまの考える「正」ではありません。「正」でも「誤」でもない、「善」でも「悪」でもない、どちらにも偏らないありのままに観ることが、お釈迦様の語る「正」です。これが「中観」「中道」です。しかし世界では異なる考えに対して、屁理屈とも思える「正」を標榜することで対立を招く、自己正当化の論理と実践に溢れています。このことは世界を見ればすぐに理解できることではないでしょうか。本来「正しい道」の実践が「善」へと導かれなければならないのに、最終的に導かれるところは、「正しさ」とは正反対の結果です。「正」が「正義」となり、「益」や「利」の争奪から「対立」「闘争」「迫害」や「差別」「格差」へと辿り着いてしまう皮肉は、「正」を語る人々の中に「悪」が措定されてしまっているからです。「悪」を前提としなければ「善」を語れない考え方は、「絶対善」の存在から「善」の履行と「悪」の駆逐を委託されているとの考えを採らなければできないことでしょう。仏教には「絶対」はありません。故に絶対善も絶対悪もありません。あるのは「ありのまま」です。「善

悪一如」「善悪不二」です。絶対善を絶対者から委託された人々は、絶対者の意志の履行の名の下「正義」を躊躇なく履行できるのです。それは履行するものの意志ではなく絶対者の意志だからです。

お釈迦様の「正」を実践しようとする私たちには「絶対」と名付けられるものがないだけではなく、誰からも何も委託をされていません。私自身の目で観て、自身の心と頭で信じ、自身の足で歩むのです。それは私たちの自由意志です。私たちにとっての絶対があるとすれば、お釈迦様が教えてくれた中観（智慧）と中道（実践）を信じることだけです。絶対に向かって実践をするのではありません。ありのままに観たものが差し示すところを、ありのままに（八正道のままに）歩むだけです。歩む足も私の足、道を観る眼も私の眼、私たちは絶対善と呼ばれるものに向かって歩むのではなく、ありのままに歩んだところがお釈迦様の教えてくれた「善」、その歩み自体が「善」であると信じて生きることが、中観の智慧で中道を生きることです。

自然そのものが私たちのカミであるとの結論は、立証は不可能です。それは縁起の法則を信じるが故の結論だからです。絶対真理の「イデア」に向かって立証し論理整合性があればそれを「真」と認められる生き方を、お釈迦様の徒はとらないからです。私がカミとホトケの出会いを体感したとき、「中観」「中道」を一瞬にして悟り「イデア」の理解が不必要だと知ったことは、お釈迦様への「信」がなせるものなのです。（閑話休題）中道の言葉は、昨今政治用語として使われています。私の「中道」理解と全く異なることは歴然です。左と右の道を措定して、その中間の道を取るという政治姿勢は、二項対立を前提とする立場であることは明らかです。借り物の概念はイデア（絶対真）に基づく理解と実践が難しいことと同じですね。

狂言綺語二百九・カミ・ホトケ・神・仏（カミとホトケの出会い㈣）

毎朝、起床後には寝室のある母屋から西隣の琉游舎へ短い外階段を下りて向かいます。出かけている日を除いては欠かさず毎日、朝食前と後、昼、夕方と最低三往復はする短い行き来をもう十年近く続けています。ところが、そんなありふれたルーティーンに思いがけない発見と驚きがあったのです。先日朝食後に琉游舎に向かう階段の半ばで、たまたま顔を前方に向けると、そこには雪をかぶった男体山の姿がありました。今まで前方の林に視界を遮られ、西方は全く臨めないと思い込んでいましたが、男体山の山肌の特徴的な雪の筋が数本、神々しく朝日に輝いていたのです。冬になって葉っぱが全部落ちてしまっていた。朝陽がちょうどよい角度で山肌を照らしていた。たまたま足下ではなく顔を上げていた。など偶然の要素はあったものの、既に一万遍は往復しているに違いない道のりで一度も気づかなかったという事実に、私はそこに在るものを何も観てはいなかったという、ありのままに観ることの難しさを痛感することとなりました。その後、何度もあのときの男体山の姿を見ようと試みていますが、あの時の姿を視界が捉えることができていません。

そこに在るのに、そこに在ることに気づかないままにそこに在るものを、私たちはどれほど多く見過ごしてきたか分りません。同様に、そこに在ったものが常にそこに在り続けると信じ込んでしまい、そこになくなってしまったことに気づかないことも、またどれほど多いことか。実際、何度もあの時と同じ男体山を観ようと試みましたが、再度同じ姿を見せてはくれません。光の差し方や空気の流れ、私の体調や精

神が、あのときを再現できていないのかも知れません。ありのままに観たと私が信じたものは、縁起の法則の中で、一瞬の出会いが与えてくれた僥倖なのでしょうか。また、そこに在ったはずのものを再び観たいと願っても再び出会うことが叶わないとしたら、それは幻だったのでしょうか。決してそれは僥倖でも幻でもありません。なぜなら現象は諸行無常、空です。だから僥倖や幻と感じてしまうのです。ありのままの瞬間はカミ（自然）とホトケ（ありのまま）に出会う瞬間です。それは諸行無常の瞬間に出会えた喜びとともに、私の智慧（ホトケ）と精神（カミ）となって私に再帰し続けます。ありのままに生き続けたいと「願い、誓い、行う」ことが、私にあの瞬間へと再帰させ続けてくれるのです。それが信行の道を歩むことなのです。

読経の前にどの宗派も開経偈を読みます。日蓮宗で唱える開経偈の冒頭は「無上甚深微妙の法は百千万劫にも遭い奉ること難し　我今見聞し受持することを得たり　願わくは如来の第一義を解せん」と唱えます。永遠の時をかけてもとても遭いがたい如来の法（教え）に出会えた喜びを表明した言葉です。また法華経の中で唱えられることの多い自我偈では「常住此説法　我常住於此　以諸神通力　令顛倒衆生　雖近而不見　（常に此に住して法を説く　我常に此に住すれども　諸の神通力を以て　顛倒の衆生をして　近しと雖も而も　見ざらしむ）」ここでは仏様は常に私たちのもとにあって教えを説いてくれているが、顛倒の衆生（世界をありのままに観ることができず、煩悩によって見てしまう私たちのこと）は、仏様が傍らにいることがわからないのです。と語っています。また日蓮聖人は「重須殿女房御返事」の遺文の中で「抑も地獄と佛とはいずれの所に候ぞとたずね候えば（中略）我等が五尺の身の内に候とみえて候。（中略）。佛と申す事も我等の心の内におわします。譬えば石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。我等凡夫はまつげの近きと虚空の遠きとは見候事なし。我等が心の内に佛はおわしましけるを知り候わざりけるぞ。」地獄も仏も私たちの心の中にいらっしゃると聖人は語っています。例えば石の中に火が（火打ち石）あるように、凡夫が近すぎる自分のまつげも、遠すぎる宇宙の果ても見ることができないと同じように、私たちの心の中にいる仏も知らないままでいるのです。と語っています。私たちは顛倒の衆生、凡夫です。だから仏に出会うことも、カミとホトケの出会いを観ることもとても困難なことです。だからこそ仏に出会えた瞬間は無上の喜びなのです。そのためには常にありのままに観ることを実践して行かなければなりません。ありのままに観る（カミとホトケの出会い）ことは困難であるが、観ることを願い誓い行い続けることが、私たちに唯一できることであり、出会うための唯一の実践の方法であると上記の三つの引用は語っていると私は考えます。

私は数回にわたり「カミとホトケの出会い」について書いてきました。そして今回は「カミとホトケの出会いの瞬間に在る」ことは大変困難である点について考察しました。ここで混乱を招くといけないので、私の言葉の用法について整理いたします。「カミ」と「ホトケ」と「神」と「仏」の記述について、まず「カミ」は日本人の精神の基礎をなす八百万のカミのこと、そしてそれは現在に於いては「ありのままに観た自然」と同義であること。次に「ホトケ」は、最初期に思想として輸入された仏教の基本原理である縁起の法。諸行無常の現象を観る（ありのままに観る）ための智慧と実践方法です。そして「神」は各氏族の氏神、各土地の地主神として祀る対象とされた存在。狭義には明治維新以降、天照大神（天皇）を頂点に序列化された国家神道下における神。最後に「仏」は神仏習合（カミとホトケの出会い）以来、日本人の精神と智慧を担ってきた、日本人であり続けるための基盤となる、日本独自の「信」です。以上のように整理しま

す。

明治新政府の発令した神仏分離令から百五十年たった今、私たちは何を願い、誓い、行う毎日を過せばよいのでしょうか。私はこの百五十年を安らぎの日々へ向かう信行が見えなくなっていった日々だったと考えます。神仏習合以来日本人の精神と智慧の基盤であった「仏」は、「神様（神社）」と「宗派仏教」に引き裂かれてしまいました。これが日本人が生き続けるための「智慧」と「精神」の分離をもたらしてしまったのです。願わくば今一度、私たちの智慧と精神を取り戻すことができれば、きっと私はまたありのままの男体山の山容を観ることができるはずです。そうなればそこは私のカミとホトケが出会った場所となることでしょう。

狂言綺語二百十・逝きし世の面影（カミとホトケの出会い㈣）

寡聞にして著者も書物の存在も知らなかったのですが、ある方の紹介で渡辺京二著「逝きし世の面影」を読みました。この著作の存在をもっと早く知っていればよかったとの思いが湧き上がってくる一方、私が今までの信行で確認してきた「カミとホトケの出会い」とは何かを、学術的、論理的に裏付けてくれる大著であることに気づきました。この著作は信仰を正面から扱った書物ではありませんが、日本人とは何であったのか、という問いを民衆の生活から解き明かす大著です。私は「カミとホトケの出会い」が江戸期までの日本人の文化と人格と社会の基礎となっていること、それが明治維新の廃仏毀釈によって破壊されてしまって現代に至るという仮説をたて、信行によって破壊からの再生に努めてきました。この渡辺氏の著作は、維新以降西洋近代の価値観を取り入れることで、日本独自の文化と生活が失われてしまい現代に至っているという論点にたった著作です。僭越ながら、私の「カミとホトケとの出会いとその別れ」を基点にして日本及び日本人について考える視点と全く同じ所に立っている著作でした。しかも膨大な資料を読み解き、説得力のある内容に、私は自分の仮説とその信行の道を進み続けることの意をさらに強く持つことができました。

この著作は幕末から明治時代初期にかけて日本を訪れた西洋人の記録を分析したものです。それらの記録には、西洋人から見た当時の日本が西洋とは異なる独自の文明を築き、その素晴らしさに多くの人が驚嘆していたことが描かれています。そして明治以降の近代化によって、その文明は失われたと著者は指摘しています。この西洋人の見方を従来は「オリエンタリズム」として日本を美化していると否定的に読まれてきました。しかし著者はその批判に対して彼らの見たものは根拠があり、それが「逝きし世」の魅力であったとの主張です。江戸末期の日本社会を西洋から見た「前近代」ではなく、独自の価値観を持った独自の文明と捉えています。それを西洋近代文明とは全く異なる価値体系の文明であることを庶民の生活、気質、倫理観に焦点を当てて、実証しているのです。ですから西洋価値体系からオリエンタリズムであるとする批判は全く的外れであることも、この著作を読めばよく分ります。この著作のもととなった西洋人の記録をオリエンタリズムに毒されているから、それに基づく渡辺氏の著作も誤った視点に立っていると批判する人々も、西洋の価値観に毒され続けて今に至る日本の知識人たちであることを、図らずも浮き彫りにしてしまいました。

当時の西洋人が見た庶民の姿を要約すると、人々は陽気で、貧しくても明るく、平和な暮らしを送っていた。街が清潔で治安がよい。家屋も屋内も非常に清潔であった。美意識が生活全てに行き届いている。調和と礼節 に溢れ、身分差があっても対等に会話する場面があった。豊かな自然や動物との共存と関係性を大切にしていた。子どもを愛護する気風 、子育てが非常に寛容であった。性に対しておおらかであった。人々の暮らし自体は貧しいものにみえたが、痩せた人や物乞いも見当たらず、みなよく笑い、好奇心旺盛で、屈託がないという印象だった。などとどの西洋人も一様に語っています。封建制の抑圧下に置かれている民衆は、肉体的にも精神的にも貧しく、陰鬱で活気がなく打ちひしがれていると考える西洋人の視点からは、とても素直な驚きであったことは引用された文章のどこからも見て取れます。また、多くの西洋人は、当時の日本を「夢のように美しい国」と表現し、その文明の豊かさに感銘を受けていました。しかしながら彼らは、日本が開国し、外国の影響を受けることで、この普遍的な幸福が失われるのではないかと懸念もしていました。そしてそれは現実のものとなりました。今となっては完全に「逝きし世の面影」となってしまったのです。それは西洋近代とは異なる、しかし決し劣らない「もう一つの可能性」だったのです。しかしその可能性を失ってしまった今、明治維新以降と以前の日本及び日本人は、もう全く異なる存在となりました。

「逝きし世の面影」は著者の日本及び日本人への挽歌、墓碑銘だったのでしょう。私たちが古典文学で知る日本人の感性や、伝統と考えられている芸能も、逝きし日本人の遺物です。文化遺産、鑑賞の対象として残されているだけの、ごく一部の好事家のための愛玩物です。ごく普通の日本人の誰もが兼ね備えていた日本人の精神と智慧（これを私はカミとホトケと呼びます）は文化、文明、価値観として血肉に受け継がれることなく形骸化し、古典芸能や文芸、工芸などにその形式だけが残されているだけです。形だけで精神や価値観の継承を必要としなかった日本人に、「逝きし世の面影」に書き残されたかつての日本人の姿を観ることは、もう不可能なはずです。西洋文明と異なる価値体系を作り上げた日本及び日本人は、明治維新を境に、江戸時代以前の日本人の精神と智慧を否定し、西洋文明の価値体系を選択したのです。それが西洋の国と伍して行くための唯一の方法であると信じ、今に至っているからです。美しい日本や伝統を唱える人達の大半は明治維新以降の日本、要約すれば明治二十二年に施行された大日本帝国憲法から昭和二十二年に施行された日本国憲法の間の時代に戻ることが、日本の伝統であり美しい日本のあるべき姿だと主張します。しかし「逝きし世の面影」を読めば、それは西洋思想と価値観によって再構築された新ジャパニーズ及び新ジャパンです。

私たちはカミ（自然）とホトケ（ありのまま）と共に生きていた原日本人に戻ることは可能なのか。それともそこに戻ることを望んでいないのか。他国に奇襲攻撃を仕掛け、世界を暴力支配しようと試みる人物を「世界に平和と繁栄をもたらすことができるのは彼だけだ」と公言するリーダーや、反天皇を掲げる異国のキリスト教系宗教団体に支援を仰ぐ男系天皇死守主義者が、今、新ジャパンの代表たちである現実を私は認めざるをえないでしょう。ありのままの自然と、その自然と共に生きたありのままの原日本人でありたいと願う私は、逝きし世の日本の挽歌を歌うことではなく、たとえ蟷螂の斧とであろうとも、カミの自然とホトケのありのままに生き続けなければならないと、あらためて「逝きし世の面影」に教えられました。

狂言綺語二百十一・擬死（カミとホトケの出会いⅨ）

いつもならば早朝から、騒々しく箱罠で暴れる音に眠りが覚されてしまうのですが、今回は様子が違いました。冬の間は猪も活性が鈍るのか、人目につくところに出没することは殆どありません。我が家の前の山林に仕掛けられた箱罠にも、真冬の間は猪がかかることはありません。例年だとウグイスが鳴き始める三月になるとそろそろ猪が箱罠にかかる頃だと、妻と話していました。そのまま一向に猪が箱罠で暴れる音を聞くことができないでいた三月半ばの朝、散歩に出て何気なく罠の方を見ると、天井に黒い塊がなにやらみえています。そばに寄ってみると、天井に逆さになった焦げ茶色の獣がへばりついていたのでした。そばに寄ってみてもぴくりともしません。罠の入口は開いたままです。死んでいるならば落下してしまうはずですが、四本の足は仰向けになりながらしっかり鉄の柵を握っています。でも全く反応しません。気味が悪いのでそのまま立ち去り一時間の散歩に出ましたが、戻ってきてもまだ同じ格好のままぶらさがっていました。

いつもならば、Wi-Fiで映像が猟友会の方の所に届き、既に猪の回収は終わっているはずなのに、九時過ぎになっても天井の黒い塊はそのままです。猟友会の方に電話をしてみると「承知しています。狸が逃げられるように扉は開けてあるので、いずれいなくなるでしょう。今、棒でつつくと暴れますよ」とのお答えでした。確かに、三〇分後に確認しに行くと、黒い塊は跡形もなく消えてなくなっていました。早速AIに「狸の死んだふり」と聞いてみたところ、狸は擬死状態にあったとの回答がありました。擬死は動物が外敵に襲われた際などに、死んだように動かなくなる防御行動を指し、これは意識的な「死んだふり」ではなく、刺激に対する反射的な不動状態とのこと。擬死は、昆虫から哺乳類まで幅広い動物に見られる現象で、体温や心拍数、呼吸数が低下し筋肉が硬直することもあるようです。なぜ擬死となるのかは、捕食者から逃れるための生存戦略なのです。捕食者は被食者が急に動かなくなると力を緩める傾向があり、このような時に捕食者から逃避できる可能性が生まれ、捕食を免れる可能性が高まり、また、無理に抵抗して身体を損傷するリスクを避ける効果もあるとのこと。これは「逃げる」「戦う」以外に生き物が持つ効果的な生存戦略なのです。

罠にかかった擬死状態の狸に遭遇したことで、果たして人は擬死状態になるのだろうか、もしそうななら ば、虎や熊に襲われたときに人は捕食を免れることができるのかと言うことを考えさせられました。実は「狸の死んだふり」のAI回答の末尾に、補足のように「狸の擬死状態は狸寝入りの語源になったと考えられる」とあったのです。狸寝入りならば私もしたことがあります。都合の悪いことを頼まれたときは、寝返りを打ったり、いびきをひときわ高くして狸寝入りを装ったものです。つまり寝たふりです。寝たふりをしていることは先方も（たいてい妻か母）承知しているので「狸寝入りをしててもダメよ」の一声に起こされた風を装って渋々起き出すのです。お互い承知の上の猿芝居の一コマと思えばよいでしょう。ところが狸の擬死は狸寝入りの「寝たふり」のような意識的な行為ではなく、本能がなせる無意識の「死んだふり」です。逃げることも戦うことも叶わなかった弱者に、究極の選択として自然（カミ）が与えた生存能力です。弱者は生き抜くためならば意識すらも消し去ることができるのです。しかし人は全ての生き物の食物連鎖の頂点に立つ強者ですから、殆どの場合は捕食されることはなく、擬死を装う必要もありません。野獣に襲われる場合も彼らは捕食のためではなく、自身や子の身を守るための先制攻撃とみれば、し

かるべき武器を持って防御し人は生き抜くことができるでしょう。恐怖で気絶することは擬死体験と呼ぶことができるかも知れません。しかし、意識がなくなっている間に捕食されるかも知れないとの恐怖が勝てば、おちおち気絶などできないはずです。人は他者に対して行なっていることは、他者も自分に対して行なうだろうと考える生き物です。ですから敵の前では気絶して相手に自分の身柄を委ねる（擬死）というような賭に出るよりも、抵抗や逃走、降参の判断をするはずです。人は本能よりも、経験によって獲得した智慧で生きる動物なのです。

死んだふりをして死を免れるならば、人同士の殺し合いは起こらないのではないでしょうか。しかし実際の所、人は闘争を仕掛けられたら逃げるより抵抗や反撃を選ぶようです。逃げるとしても何処に逃げればよいのでしょう。特に人の動きが全て空中から補足されうる現代に、一度捕食者から標的にされたら、逃げるところなどありません。降参しても復讐を恐れてそう簡単に降伏を受入れてはもらえないでしょう。その民族がもう二度と復讐という考えを起こさないほどに徹底的に痛めつけないと、安心できないのです。逃走も降参も根本的な解決にはなりません。ましてや擬死状態はとどめを刺されるだけです。人が争いで獲得した智慧は、闘争か逃走、服従か復讐が永遠に繰り返される智慧です。種の生存戦略の智慧でなく制圧のための智慧です。人間は他の生き物が本能で生きるのに対し、経験知を駆使して生き残ろうとする生き物なのです。

生存闘争の果てに得た智慧が、止むことのない人間同士の闘争へと駆り立てる智慧であるとするならば、このような智慧は一度初期化して人間が本能で生きる生き物であった時代に戻ることは可能だろうかと、夢想せずにはいられません。あの箱罠に仰向けになってブラ下がっていた無抵抗な擬死狸を、誰が捕らえて亡き者にしようとするでしょうか。この宇宙の中で（天上天下）誰とも代わることのできない一人として、何一つ加える必要もなくうまれてきたそのありのままのいのちが、誰であれ、何であれ、唯一尊い（唯我独尊）と思うことができるならば、生きようとしている生き物の、たとえそれが擬死状態でも、人はその命を奪うことはできないのではないでしょうか。それぞれの唯一の命をありのままのいのちと知る智慧が、経験知に取って代わる慈悲の智慧となれば、命は奪うものではなく、互いの尊いいのちを唯一尊いと知ることができるでしょう。私はそれをカミ（自然）とホトケ(智慧）が出会うことで可能になると信じたいのです。

狂言綺語二百十二・解放（カミとホトケの出会いX）

歩道に植えられたツツジに、薄緑色の手のひらくらいの大きさのものが張り付いたように動きません。大きな葉っぱか色紙が風に舞って辿り着いたかのような光景です。ソメイヨシノはすでに散ってしまい、山桜は若葉と花が同居して黄緑と薄ピンクの対比が鮮やかです。周りは低木も高木も若葉が芽吹きはじめ、全体が春霞に覆われた色彩の中へ朝日が差して、この時期でしか味わえない風景です。里山の淡い緑色の朝です。

それは景色全体が薄緑の中に、保護色のようになって動かない二対の蛾でした。二羽が向かい合ったまま全く動きません。写真を撮ろうと至近距離まで寄っても飛び立つこともなく、生きているのか死んでい

るのかも分らないような状態です。これもまた先日遭遇した狸寝入り、生き物の擬死状態かとも思いました。早速 AI に聞いてみたところ、それは日本にすむ大型の蛾（ヤママユガの仲間）で「オナガミズアオ」と言う準絶滅危惧種の名前でした。子供の頃の夏の朝、よく見かけた私の蛾の記憶は、太い胴体と黄土色に毒々しい模様の羽。その開いたままの羽が朝の窓辺にくっついている姿は、何かまがまがしいもののように思われて、気持ちのよいものではありませんでした。ところがオナガミズアオは、全体が薄い水色で、透明感のある色合い。後翅の尾が長く伸びて、ひらひらと優雅に見えます。その色合いとじっとして動かない佇まいに、私はオナガミズアオの儚いいのちを感じてしまいました。実際、AI の説明によると、オナガミズアオの成虫は、およそ数日から長くて一週間前後くらいの寿命と考えられているとのこと。また成虫になると口がほとんど機能せず、何も食べずに生きていて、羽化してからは、ほぼ交尾と産卵のためだけの期間となると言うことです。つまり子孫を残すために羽化して、この世に儚い姿を現したのです。事実、朝の六時に見つけたときから午後の三時くらいまで、二羽は向き合ったまま全く動かず体を合わせたままでした。暗くなる前にもう一度確かめに行くと、今度は体を離して互いの位置が変わっていました。交尾を終えて、産卵の準備ができたのでしょう。翌朝、二羽の姿はもうありませんでした。産卵の場所を見つけに飛び立ったのでしょうか。

私が「カミとホトケの出会い」について考えるきっかけは、神仏習合がなぜ日本人の宗教観の根底を作っているかを、理性によってでは理解できなかったことにあります。仏教寺院の中には、今でも様々な「神」が祀られている事実、明治維新の神仏分離令までは、神社と寺院が同居していたという事実、廃仏毀釈以降も人は神社にも寺院にも分け隔てなく初詣やお払い、祈祷に出向くという事実。いずれも信と慧と行で安らぎの日々を実現したいと考えて日々を過す私の理性的思考では全く理解できないことでした。そこで狂言綺語では十回にわたって、理性では理解できない理由を考えてきました。そして辿り着いた結論は、「カミ」とは、自然と語り暮らし共棲する「精神」のありよう。「ホトケ」とは、その自然を無常（ありのまま）と観て、ありのままに自然と語り、暮らし、共棲する「智慧」であると言うことです。自然は森羅万象、私たちの存在する場所のありのままの姿です。無常は森羅万象をありのままに観ることです。このカミとホトケの出会いと習合が今の私たちの精神と智慧の基盤となったと言うことを、私の信行経験をもとに、私自身が納得し理解できることとして記述してきました。もとより学術的な裏付けも論証もないことは承知の上ですので、私はこれらの記述が客観的に正しいかまちがっているかを問うことはいたしません。しかし、少なくとも私がかつて学んだ、西洋哲学（イデアと理性）の呪縛から自らを解放できたと言うことは間違いありません。つまり、カミとホトケの出会いが私たちに与えてくれた精神と智慧は、この日本の自然とそこに生きる日本人が、安らぎの処に向かって歩み続ける唯一の必要十分条件であることが分ったのです。逆にイデアも理性も私の信行の歩みを阻害する論理であることが認識できました。西洋論理の呪縛からの解放です。今、私は「カミとホトケの出会い」の意味を、信行の観点から充分に確信できた、信行の自由の中にあります。

私は「カミとホトケの出会い」について、日本の自然と精神の視点で記述してきました。そこには、いわゆる宗教も、お釈迦様も法華経も日蓮聖人も、数多の仏、菩薩、祖師たちも必要ではありません。正確に言うと、宗教も、宗教者の誰が何を考えどのように行動したかといったときの、「誰が」という固有名詞も「何を」「どのように」考え行なったかの事跡も必要のないと言う意味です。まして、それらを後付でまとめた

「教理」も必要ありません。固有名詞と事実は既に、「自然」と「無常（ありのまま）」の時の中で、私たちの前に「カミとホトケ」となって、現われているからです。私たちの精神と智慧の血肉となっているからです。自然の営みとその自然と対話し共棲してきた生きとし生けるもののいのちが、今ここにある森羅万象そのものとして、私たち自身の内にあるからです。森羅万象は私たち一人一人の中にあるとともに、私たちは、森羅万象の中にある限りなく無(空)であるいのちのひとつでもあるのです。あの狸寝入りをしていた箱罠の中の擬死狸も、薄緑色の春霞に溶け込んで動かないオナガミズアオも、そしてそれを観る私も、カミとホトケそのものであり、その無限の精神と智慧を、有限の生の中で繋ぐ一匹、一羽、一人なのです。

カミとホトケについての考察はこれが最後でしょう。お釈迦さまの弟子となって十五年。その歩みの中で得た仏教者の視点から、自分の信行を理解しようと試みるそのものが私の信行の道でした。それは仏の智慧を頼りの歩みです。しかし今私は、その仏の智慧だよりの歩みからも解放されたのでしょう。カミとホトケの視点の獲得ができたからです。恐らく私は六十年近く前の今頃、狸寝入りの擬死狸にも、交尾する二対のオナガミズアオにも出会っていたに違いありません。しかし、それが互いのありのままと認識するまでには六十年近くの年月が必要だったのです。私が生の歩みを始めて六十八年、イデアも理性も仏の智慧からも解放されたと宣言する今、それが真の自由と解放ならばこれからの私が何処に歩んでいくのか、我が事ながら楽しみです

狂言綺語二百十三・何が分らないかを正確に知ること

私は一ヶ月に一回ほど古本のブックオフに行き百円の文庫本や新書版を5．6冊買い込みます。アマゾンで買うときは、例えば今読んでいる本に引用され、興味を持ったものなどを買うので内容にがっかりすることは殆どないのですが、ブックオフの百円本も結構高い頻度で私の問題意識に合うような掘り出し物が見つかります。内容や価値，稀覯本などで値段設定されている古書店に比べて、値付けの根拠が売れ筋、きれい、新しいなどでつけられているようなので，十年．二十年前の本でも私の興味を引く本が、百円で売られていることがあるのです。その様な本は、時の変遷で色あせることがない内容なので私は重宝しています。

現在私は、イデアも理性も仏の智慧からも解放されたと宣言したことで、何かの為に考える、判断する、記述する、伝える、行動すると言うことからも解放されました。それは誰にも、何事にも束縛されない無限の自由を獲得したことだと思っていました。しかしその結果、何をしてもいい、何もしなくてもいいという毎日を送ることは難しいことだと言うことも分ってしまいました。ありのままの日々を送ればいいとは言っても、それは何も考えず、ただおなかがすけば食べて、眠たくなれば眠るだけでいいと言うことでもなさそうなことが、今更ながら分ったと言うことです。それならば、今までと異なる新しい毎日の過ごし方があるのかと、しかしそうはいっても、毎日おなかはすくし眠くもなります。本も読みたくなれば、興味が湧いたことを知りたくもなります。そこで少し分ったことがあります。無限の自由を得た後も、私は人に会えば話をし、人から請われれば、できることはやってみようかなと思い、行動に移しているのです。つまり何も日々の行為は変わっていないと言うことです。ただ、こうしなければならないとか、そう

することが正しい、これは善行だ、これは悪行だと判断する意志によって動くのではなく、自然と体や頭が動いているのではないかと思い始めたのです、つまり、判断や意志と言う後天的あるいは他者から与えられた規範に頼るのではなく、自ずから然らしむ自然（じねん）の行為と言うものが少しながら私の心身も分ってきたようなのです。

そんな私の現在を肯定する本に，ブックオフの百円本で出会うことができました。マイケル・サンデル著の「これからの『正義』の話をしよう　いまを生き延びるための哲学」です。この本はハーバード大学の政治哲学の講座科目「正義（justice）」の講義をまとめたもので，大学でのあまりの人気ぶりに講義がテレビ番組で一般公開され，日本でも２０１０年にNHK教育テレビで「ハーバード白熱教室」として放送され評判となった著作です。しかし私は「正義」を唱える立場や人達に胡散臭さを感じて，興味もなく素通りしてきました。ところが昨今の「正義」を掲げることで全ての行為が正当化されるという、権力行使の実体を見るにつけ、西洋哲学は「正義」をどう定義づけるかに興味を覚えて手に取ってみることにしたのです。結論を言えば、哲学の最高知を駆使しても「正義」を定義できず、いまを生き延びるための術も与えてくれませんでした。

この著作を簡単に要約してみます。サンデル教授は「正義」を考える際に三つのアプローチを提示しています。一つ目は「功利主義」です。「最大多数の最大幸福」を目指す考え方で、行為の結果として生じる幸福や効用を最大化することが正しいとする立場です。しかし少数者の権利侵害や幸福の比較不可能性という問題を抱える。と指摘されます。二つめは「自由主義」です。これはさらに「リバタリアニズム（自由至上主義）」と「リベラリズム（平等を重視する自由主義）」に分けられます。前者は個人の選択の自由を最重視し、後者は公正な機会均等を重視します。この個人の自由と自己所有権を最重視する考えは、しかし臓器売買や貧困下の「自由な選択」は本当に自由なのかという批判があると指摘されます。また 市場原理がすべてを決めてよいのか。兵役制度や代理出産などを例に、市場では扱えない価値（尊厳・美徳）があることが指摘されます。三つめは「共同主義」です。これはアリストテレスの思想を源流とし、カントの説く動機の純粋性と人間の尊厳を重視し人を手段として扱う行為を否定する道徳論。ロールズは無知のベールの思考実験から、平等で公正な社会原理を導く考え方。そしてアリストテレスの説く共通善や美徳を重視し、社会の一員としての責任や連帯を強調した考え方から導き出される「正義」、つまり「正義は社会が何を価値あるものとみなすかに関わること、だから正義は共同体の価値観と切り離せないもの」がサンデル教授が支持する立場のようです。と言うようなことはなんとなく本書から読み取れたのですが，それをどうやって実現するか、つまりどうやって行いに導くかと言うことに関しては私は理解できなかったので，それをまたAIに聞いてみたところ、本書のメッセージは「共通善や美徳を重視し、社会の一員としての責任や連帯をしていくこと」で実現しようと言うことらしいのです。社会が国や宗教、民族単位で存在する限り、アリストテレスの時代から二〇〇〇年以上かけて実現できなかったことをこれから実現できるとは，私は到底思えないのです。

分らないことを分ろうとして、悪戦苦闘してきた歴史が西洋哲学とするならば，お釈迦様は分らないことは「無記」と言って語りませんでした。例えば霊の存在や死後のことなどです。分らないことを分らないと言えなかった西洋哲学は、「正義」と言う概念はないと語る覚悟がないと，私はサンデルの著書を読み確信しました。知と情に自ずから導かれた意ではなく、意によって導かれて知と情を規定することが西洋

哲学の語り口であるような気がしてなりません。例えば「正義」の意志を実現するためには，知と情はどうあるべきかという語り方です。しかしお釈迦さまは何が分らないかを正確に知っているから，分らないことは無記と言って語らないのです。語ることの無意味、それが苦からの解放に意味がないどころか益々苦を強めてしまうからです。もし世界が、正義の概念はない、分ろうとしても分らないから正義は無記であると言えたら、ひょっとして争いがなくなるかも知れないと、反面教師としてこの著作を読んで夢想してしまいました。

狂言綺語二百十四・選択（せんじゃく）

自然豊かな土地では、散歩をしていると名前の知らない花や鳥の鳴き声ばかりです。家に戻って記憶を呼び覚まし、辞書を頼りに一生懸命調べるか、そんな労力は無駄と諦めて知らないままに放っておくか，どちらのタイプかと言えば，私は間違いなく後者です。そしてまた散歩の時にこの花の名前は何だろう，あの鳥の鳴き声は変わっているがどこからやってきたのだろうとの思いを繰り返すだけです。好奇心はあってもそれを地道に調べて突き止めたいという学究肌ではないことは間違いなさそうです。それでも琉游舎の書棚には父が買いそろえていた植物や昆虫など生物の図鑑全集のほか、種々の辞典類、百科事典、国語や漢和の大辞典集などの辞書類が、二〇桶は下らない漬け物樽の重石になりそうなだけの重量で書棚に鎮座しています。

経文を読み始めた一五年ほど前の頃は，漢字や言葉を調べるために大辞典類はまだ重宝でした。AIもネットの写真検索で即座に答えてくれるような機能もなかったので、地道に辞書を引く方が答えを得ることができていたのです。しかしいつの間にかスマホに検索カメラの機能がついてきました。グーグルレンズの機能を使うと無料で即座に花の名前も生態も教えてくれます。専用アプリで鳥の声を入力すると即座に名前でもなんでも教えてくれます。瞬時に知ったことは、忘れるのもあっという間です。後日同じ道を通った時、忘れてしまった花の名を再びスマホに聞いてみるのか，またどうせ忘れるのだからと素通りするかのどちらかです。苦労や努力なしで知ったことは，あっという間に忘れて身につかないと言うことなのでしょうか。

現在琉游舎の読書会は、四名のメンバーで法然聖人の「選択本願念仏集」を読んでいます。この書は日本の浄土思想の拡がりの原点となり、鎌倉仏教という仏教の民衆化の端緒となった書です。現在の浄土宗、浄土真宗の始原の書です。一方私の属する宗派の宗祖日蓮聖人は、彼のほぼ処女作となる「守護国家論」でこの法然の著作を謗法の書として厳しく批判しました。法然の語る浄土の教えは浄土三部経（無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経）の経典や念仏以外の修業を「捨てる」「閉じる」「閣（お）く」「抛（なげうつ）」の「捨・閉・閣・抛（しゃへいかくほう）」したため、これまでの既存仏教の修行体系や聖典を否定する主張と捉えられ大きな批判を浴び続けてきました。しかし五〇年後の日蓮の時代には大きな宗教勢力となっていたのです。ですから、日蓮に帰依する私は、正しい教え（正法）を軽んじ、背き、誹謗して仏の教えを妨げる重い罪の謗法の書を読書会で読んでいることになります。謗法の書として無視し排除することはたやすいことです。しかしなぜ日蓮が大変な労力をかけて守護国家論を叙述したか、なぜ八百年の時を経ても

選択本願念仏集は読まれ続けているのか、なぜ今日この書をよりどころとする宗派が大きな宗教的力となっているのか、それらを問うことは、私たちの信心の根底を鷲掴みにする「信」の正体が何であるかを問うことなのです。

私は二つの正反対の書を読むことで，日蓮の教えの正当性を主張しようとしているわけでも、法然の考えを否定し「捨・閉・閣・抛」しようとしているわけでもありません。私はこの二つの書を今回で三度読んでいます。読む度に思うことは論理構成の緻密さと明快な主張、経律論の三論の膨大な引用による論理の客観性、どれもがすぐれて分かり易く、説得力を持って迫ってくるのです。端的に言うと両方の書とも読んでいて何より面白いのです。読んでいて楽しいのです。読んでいてなるほどとうなずいてしまうのです。全く正反対の主張をしているにもかかわらず、その論理構成、結論のプロセス、引用の使い方がよく似ているのです。日蓮が法然の論理構成を後追いしたという見方もできますが、単なる批判の書であれば，逐一論理的矛盾を突いていけば成立するはずです。しかし日蓮は釈尊一代の金口(経文）の評価から始まりその浅深、優劣、方便を判じた上で，それを過去の論師たちがどのように律と論で評価し今に教えとして繋がれてきたかを、丹念に追いながら法然の教えが謗法であると結論づけています。唯一論理構成の違いがあるとすれば法然は中国の浄土思想の論師から説き起こしているのに対して、日蓮は釈尊一代の金口から説き起こしていることでしょうか。なぜ日蓮はそうしたのか，それは恐らく法然の論理には逐一矛盾を突く隙がなかったからだと思います。ですから日蓮も論理の瑕疵が生じないよう，誰もが否定できない経文から始めたのでしょう。

なぜ完璧な論理構成だと思える二つの書が，全く正反対の仏の教えを主張することになってしまうのか。これが西洋哲学ならばあり得ないことでしょう。金口を源流とした流れが枝分かれしているうちに違う所に流れ着いてしまうことはあったとしても、法然も日蓮も常に注意深く金口に戻って源流を確かめているのです。つまり二人とも源流からの正しい流れが今ある仏の教えであると語っているのです。哲学は今ある社会や文化、知識の蓄積からその思想の源流は何かと言うことを探っていく作業に思われます。源流が客観的論理的に証明されたときに初めてそれは「真」となるのでしょう。しかし宗教に置いては、常に源流は明らかなのです。仏教のそれは歴史上の釈尊が語った言葉です。そしてその源流から流れ着いた今が、仏教にとっての「信」の根幹なのです。仏教は源流を訪ねるのではなく、源流の流れの今をくみ上げる宗教なのです。

源流から流れる今をくみ取る作業、それが法然や日蓮の行なった作業です。そしてそれは「選択（せんじゃく）」すると言うことです。法然は「選択本願念仏集」の書で彼の今における選択を世に問うたのです。

紙数が尽きたので「選択」については今後時間をかけて書いていきたいと思います。最後にひとつ、今回のこの二つの書だけでなく，親鸞の「教行信証」にしても、辞書もコピーもない時代に、経律論の三論の書物が収蔵されている数少ない経蔵に赴いて、恐らく数年にわたって寝食を惜しんで一切経と格闘した彼らの姿が、その書物たちから立ち現れてきます。それは「信」への揺るぎのない姿です。何事も手軽に知ることのできるこの時代に、私たちは確固たる「信」を持てるのか、彼らの姿を見て不安にならざるを得ません。

狂言綺語二百十五・選択（未来を語る）

一日の温度差が激しいほど、また昨日と今日の温度差が激しいほど、体への負担が大きいと言われています。今年の春から初夏にかけては以前にも増してこの温度差が激しく、体調を崩す人も多いようです。最高気温が三十度を超える真夏日になったかと思うと、翌日はやっと十度を超える三月初めの気温です。一日の間でも朝は霜が降りたかと思うと、日中の最高気温は二五度となる夏日です。まだ湿度が低いのと、そよ風が心地よいので何とか過ごせますが、今年初めて三十度を超えた日は湿度も高く体がだるい一日でした。ジェットコースターのような気温変化が体調を不安定にするのと同様、一本調子で右肩上がりに上昇する物価や住宅ローン、あるいは落ち始めると坂を転げ落ちるように下がる円と内閣支持率のように、急激な変化は私たちの心身だけでなく、政治や経済も翻弄し、将来への不安だけが増幅する不安定な環境の中で生活しなければならないのです。嵐に巻き込まれた船に乗り合わせた私たちは、何かに掴まっていなければたちまち溺れてしまいます。そんな不安定な時に頼りとして現われるのが、宗教家と政治家と詐欺師なのではないでしょうか。

宗教家は未来を語る人達です。未来を語ると言うことは、過去の因が現在の果であるとの今をありのままに観ることによって、今の因が果となる未来をありのままに語ることです。そのためにお釈迦様はありのままに観るための方法として八正道を提示しました。・正見：物事を偏見なく正しく見ること・正思惟：欲や怒りに流されず正しく考えること・正語：うそや悪口を避け、誠実に正しく語ること・正業：正しい行ないをすること・正命：正しい生活をすること・正精進：正しい努力をすること・正念：正見を得る目的を念じ忘れないこと・正定：正しく清浄な心を安定させる禅定に入ること、以上の八つの道を正しく歩めば、私たちは望むべく未来へ正しく歩んでいけるとお釈迦さまは教えてくれているのです。信心を持つことで望む未来とは具体的には人それぞれかもしれません。しかしその具体的な望みの総体は「安らぎ」と呼ぶことができるものでしょう。お釈迦さまはそれを印度の言葉では「ニルバーナ」、「涅槃」と呼びました。悟りの境地のことです。そこは心の平和と安定が実現するところ、私はその境地を「安らぎの処」と呼んでいます。

八正道を言葉で説明すれば、当たり前に私たちが日常で判断している行動です。しかもその判断はそうすることが、自分の安らぎのためであると言う「正しい」判断です。しかし判断は常にいくつかの選択肢のどれを選ぶかの判断になります。それが自分にとっての正しい未来への道だと判断するためにはある道を選び、その他の道を破棄しなければならないのです。選択本願念仏集で法然聖人は「選択とはすなわちこれ取捨の義なり」と。選択はまさしく何かを取捨選択すると言うことです。また「選択と摂取とその言は異なりといえどもその意これ同じ」と語っています。取捨した選択を含めて全てが選択の中に取り込まれている（摂取）と語っているのです。選択することは過去の因を全て受入れた（摂取）上で、未来の果を望んで歩み続けることなのです。これが宗教家が未来を語る八正道の実践方法です。選択本願念仏集を徹底的に批判した日蓮聖人もその著作「守護国家論」で、過去からの先人の選択を正しく観て、その選択の上に彼自身が未来に向けて自分はどのような選択をしたかを語っているのです。安らぎの処への道の辿り方は法然も日蓮も互いに異なりますが、共に選択の正しさへの信念と覚悟を持って、それを私たちの進むべき未来と示しているのです。過去の因も現在の果も八正道の実践がありのままに観ることを可能にし、

未来の道を指し示すことができるのです。宗教家の役割は、その未来が安らぎの処、悟りの境地であることを示すことにあるのです。

宗教家の語る未来は、各々の選択と道筋は異なれども衆生に共通の未来です。つまり安らぎの未来です。私が信じる選択をして、その選択のままに日々を生きることが信仰です。各々の因も果も、各々の因果です。その因も果も自ら選択したものです。ですから、もし他者が「これがあなたの因果です」と示すとすれば、ある目的のためにあなたの因を捏造し、あなたの因果と信じ込ませようとしているだけなのです。あなたの過去を騙りその過去を信じ込ませることで利益を得る、宗教を手段とする詐欺師です。彼らは「あなたの祖先の悪行が因となって、今のあなたに不幸があるのです。教団に寄付をして祖先の悪行(因)を消さなければなりません」と騙るでしょう。宗教者は過去をありのままに観てありのままの今を選択して、安らぎの未来を指し示す者です。一方、宗教を騙る詐欺師は過去の因を捏造し、人々の未来に悪果をもたらす者です。

信仰は個人の選択です。因果は自らの選択によって与えられるわけです。これが自業自得です。選択の自由とその因果は全て選択した本人に帰するのです。しかし社会的存在である私たちは、権力行使者の選択に生活の選択を委ねるしかないのです。政治家が過去をありのままに観ることなく未来を語り始めたら、その先の道は何処に続くのだろうと、私たちは不安に晒されるでしょう。過去をありのままに観る(八正道)ことなく語(騙)られた今と未来は、国民もそれを語る政治家にも悪果がもたらされるはずです。政治家は自業自得ですが、私たちはとばっちりと思うでしょう。しかし私たちもそれを選択した一員(民主主義の原理)として、それも自業自得なのです。ここに個人の信仰と社会の一員としての選択の困難と矛盾があります。日蓮は仏法(信仰)を王法(法律)の上位概念とすることで解消しようとしましたが、未だ実現していません。

与党の政策責任者(未来を作る責任者)の発言です。「皇室についての議論は非常に重い。初代の神武天皇から一二六代にわたり、様々な過程を経ながらただ一度の例外もなく、男系で継承されてきた。」古事記では神武天皇は一三七歳まで生きました。一四代の仲哀天皇までは神話時代の天皇と呼ばれ、いずれも百歳以上の長寿です。古代人は今より遥かに長寿だったとの事実を認めないと、彼はこれを伝統である今に続く正当な選択の結果として未来を語ることはできないでしょう。神話と事実を混同して語ることは既に騙りなのです。

狂言綺語二百十六・選択・取捨・摂取

先日、シーズンには二ヶ月早い台風が日本列島に上陸しました。刷新された気象警戒レベルの周知もあり、前日から天気予報は台風の接近による気象警戒予報をしきりに放送していました。予報情報は災害への備えのためには大変重要です。しかしあくまでも予報ですから実際の天気と異なることは致し方ないことです。今回の台風では前日の昼過ぎには市内の小中高校の休校決定が出ていました。当日の天気がどう転ぶか分らない内の決定は早すぎるのかなとも思いましたが、転ばぬ先の杖と言うことなのでしょう。最近は何事も先手の危険回避判断が多くなりました。国や行政機関が指示をしてくれるので、自分たちでの

判断機会が少なくなりましたが、指示待ちとなって、危機回避本能は衰えてきてしまっているのではないか心配です。

台風接近の当日の天気は、雨は年に数回程度ある強い降り方、風は雨の降っているときは殆どなく、止んだ後に翌日まで強く風が吹いたぐらいで、冠水や倒木の被害も私の知る限りありませんでした。結局、休校にするほどの雨風ではなかったと言うことです。台風は予想ほど危険ではなかったいうことは結果論なのですが、昭和育ちの私は何か一日損をした気分になってしまいます。こう言う発言はもはや昭和の遺物なのでしょうか。この間も、熊一頭の出没で五一万の人口を有する県庁所在地の公立小中学高校の全てが三日間休校となりました。三日間の授業の遅れをとり戻すことは先生も生徒も大変です。また昭和の話を持ち出して恐縮ですが、私の小中高校生時代には自然の脅威で休校になったことは、大雪で一回あっただけと記憶しています。自家用車の普及していない時代なので、雨が降ろうが雪が降ろうが、傘を差しカッパを着て歩いてあるいは自転車で学校や駅に向かったものです。靴の中がびしょ濡れになっても、午前中の授業の半ば頃までに靴下も乾いていました。それでも親も子供も不満も不安もなくこれが当たり前のことと思っていました。

昭和時代の話に意味があるとするならば、それは獲得したメリットに対して、失ったものは何かと言うことを考える機会ができることではないでしょうか。ノスタルジックな回顧ではなく、私たちの心身は何を選択し、何を取捨したのかを考えることです。自然の脅威について語るとき、現代は昭和に比べて遥かに脅威から守られる時代となっています。予想の進歩、国土強靭化と備えの強化で、私たちは以前に比べて遥かに安全に暮らせるようになりました。これは社会が豊かになり、私たちの生活もより安全で安心した日々が送れるようになったと言うことです。私たちは国や地域社会の行政力によって、自然の脅威や犯罪などから情報力を含め保護されているということなのです。国の国民保護力が向上してきた事実が私たちの得たメリットと考えられます。これは国が様々な選択の結果、国民が現在得ることのできた安全です。しかし選択は常に取捨と一体です。私たちが取捨してきた物は何か、それは矛盾するように聞こえますが選択する力だと私は考えます。私自身が選択した判断ならば私が取捨したものも私の判断です。しかし他者が私の判断に先回りして行なった選択は私の判断ではありません。だから他者が何を取捨したのかも私には分らないのです。

前回も引用しましたが再び法然上人の「選択本願念仏集」の言葉です。「選択とはすなわちこれ取捨の義なり」「選択と摂取とその言は異なりといえどもその意これ同じ」。これは一見すると矛盾する言葉のように聞こえます。選択と取捨と摂取は同義であると言っているのです。選ぶことと捨て去ることと全てを包摂することは同じ意味であるとの言葉は集合の概念から見れば論理矛盾です。しかし私はこの考え方にこそ仏の慈悲と空（ありのまま）の本質があると考えます。論理的に考えれば選択することはある集合体から選択したこと以外を取捨すること、排除することです。選択されたものだけが選ばれたものとして次のステップに進むことができるのです。そして取捨されたものは捨てられ忘れ去られていきます。この考え方を押し進めていくと「選民思想」に行き着く危険性を感じませんか？しかし仏教においては、選択が選ぶのは方法論です。つまり私の選択は安らぎへの道へ辿り着くある歩き方を私自身が選択して進むためのものです。その他の歩き方を私は取捨しています。しかし仏の慈悲は私が取捨した選択も含めて全ての選択肢を摂取して、安らぎの処へ導いてくれるのです。私は選択して取捨します。その時仏は私の取捨した

道を含めた全ての選択（大いなるもの・宇宙）を摂取して仏の慈悲へと迎え入れてくれるのです。その仏は私自身の中にある仏なのです。ですから私は選択取捨したと同時に仏の慈悲の全てを選択摂取したことになるのです。この論理矛盾にみえかねない選択思想に支えられた私の信仰は、日蓮聖人の選択した法華経を選択したにもかかわらず、法然の選択を取捨しても排除することなく、私自身の安らぎへの道の歩みの中に摂取されているのです。

今ここで、仏教の選択の考えを現代社会に応用してみることで、私たちは何を取捨して、何を置き去りにしたり排除したりしていないかどうかを考えることも、意味のないことではないと思います。台風や熊の危険があることによる選択は、その危険が**我が身**に迫る確率が何％であるかを休校の判断としているのではなく、**誰か**に危機が迫る確率が限りなく０％にならなければ他の選択肢は採らないと言う選択だと、私には見えるのです。これを私は仮にデジタル選択と名付けようと思います。確率が〇か一〇〇かのデジタル選択は、曖昧なアナログ的な選択判断、例えば悩みや逡巡、可能性の考察、データ解析など様々な考察と葛藤などの、その選択までのプロセスを全て排除してしまいます。それは私たちから考えること、調べること、判断することなどの自己判断を放棄させることにも繋がってしまうでしょう。逆にアナログ判断は私たちに考える力を与えてくれるはずです。それは生きる力と言い換えてもいいでしょう。迷い、悩み、考え、学び、そして決断する力だと思います。選択は私たち自身が**我が身**のためにするもので、与えられるものではありません。この仏教の「選択、取捨、摂取」こそ、私たちが今を生き抜くために必要な考えではないでしょうか。

狂言綺語二百十七・ゆでガエルにならないために

夜寝る前には翌日着ていく服を枕元に置き、教科書や学習用具をランドセルに入れてから布団に入ったものです。それがいつまで続いてきたか記憶にありませんが、少なくとも学校に通っている間は、その様な習慣があったことは間違いありません。朝起きてから慌てないように、忘れ物をしないように、遅刻をしないように、あるいは天気や体調も含めて自分で判断して翌日に備えなさいとの、子供に対する親心、躾のひとつだったのでしょう。お陰で今でもその躾の通り、何事も事前の準備をして、当日の用件に備える習慣が染みついています。ですから今まで、遅刻や、忘れ物や、準備不足で大失態を犯すことも無く、無事六八歳まで過すことができてきました。たとえその時、もし何らかの瑕疵があったとしても自分で判断して準備したことなので、その場での簡単なリカバーは可能ですし、何よりも失敗は次に繋がる大事な経験と考え、反省して二度と同じ失敗を繰り返さないよう対策を練るはずです。失敗をしなければ何が成功なのかも分らないでしょうし、自ら改善しようとする意志も起きないでしょう。「失敗は成功の母」とはよくいったものです。

赤ん坊に自らの選択判断を求めることは無理な相談です。保護なしでは赤ん坊は生きていけません。子供を育てることは、判断（保護）の柵を親が家族へ学校へ地域へ社会へ世界へと拡げていき、最後は親の保護の柵を解放することではないでしょうか。成長に従って親はその時々の判断を少しずつ子供に委ねていくことが親の愛情であり、子の自立の過程だと考えれば、いつまでも親が柵の解放を渋ることは、子供

の判断力と社会性を奪い、結局親がいなければこの社会の中で生きていけなくなってしまうでしょう。通常は親が先に死にます。そうなると今まで親の柵の中で生活してきた年の嵩んだ子供たちは、柵から解放されて自由を得たと喜ぶのか、新たな柵（保護）を求めて彷徨うのか、自ら柵を作りその中に閉じこもるのか。

親の柵を親子問題の範疇と考えるのは大きな間違いです。社会の最小単位の家族は、社会全体を映す鏡でもあるのです。私には現代の親子関係が、昭和に機能していた親子関係から明らかに変質していると思われるのです。毎度の昭和の話ですが、あの時代に私が親から受けた愛情と躾が、どのように受け継がれているのか、あるいは受け継がれなかったのかを検証することが今、必要なのです。それは現代社会は、どのような柵を必要としているのか、そしてそれが私たちの選択の自由にどのような影響を及ぼしているのかを考えることになるからです。選択判断は私（個人）の所有する数少ない自由です。それを他者に委ねることは、私の心身の帰趨を他者に委ねることと同じと考えます。社会の柵は私たちの自由を奪う可能性がある一方、社会（国）が一定の大きさの柵を決めて、その中で国民を保護しているとき、私たちがそこに不快や不便を感じなければ、人はその柵の中に安住することを望むことでしょう。しかしその柵の中に安住しきった末に、柵が移動してしまったり、柵が何らかの力で破壊されてしまったとき、私たちの社会はそれに対応して、柵を作り直すための判断力と選択肢を持ち続けていることが、今現在果たしてできているでしょうか。

他者に判断を委ね、その保護の中で判断停止（ストレスゼロ）の環境を生きることは、心地よく安全なことと思いがちですが、それは冷たい水につかっていたカエルが徐々に温度を上げられている変化に気づかず、茹で上がってしまう「ゆでガエル」のようなものなのです。これから私が例示する天気予報の話はあまりにも些細な話と感じるかも知れません。しかし何か違和感を感じたとき、茹で上がる前に湯から飛び出す判断能力を失ってはならないためにも、私が最近感じた些細な違和感について話します。私が小学校に通う頃から欠かさず見ていた番組に夜七時のニュースと直前の天気予報があります。その頃の予報はせいぜい明日の天気まで、気温は今日の最低と最高気温だけでした。ただ天気図だけは気圧も含めて結構丁寧に説明されていたので、この天気図だと雨が降るのか、気温が高いか低いかなど、翌日の天気変化はなんとなく分ったものです。それがいつの間にか週間の天気や気温の予想、雨や発雷の確率まで教えてくれるようになりました。雨雲予想で、どこに雨雲があり、いつ降り始めいつまで降り続くか、や雨量まで予想してくれます。この至れり尽くせりの天気予報に、最近は朝七時に今日一日の服装のおすすめ「日中は半袖で過ごせますが、夜は冷えるので羽織るもの一枚持参、傘は持っていった方がよい」など、持ち物や服装まで指示してくれる、もはや余計なお世話の予報です。小学生の時に親から教えられた立ち振る舞いは、親の柵から解放されて初めて、自分のものとなるのです。それは親の慈悲の故です。そのお陰で、私たちは社会のいろいろな柵を自分の意志と選択で乗り越えられる力を身につけることができるようになりました。私が天の邪鬼だからかも知れませんが、あえて穿った見方をします。社会の様々な親切の柵がお為ごかしに見えてしまうのです。しかし私はゆでガエルになりたくないので、言います「今日の持ち物と服装くらいは自分で考えさせてくれ！」と。

親の保護の柵から解放されても、社会は可視化されていない柵だらけです。親の保護から解放された私たちは、社会の柵に囚われたり、つまずかないように、お釈迦様の慈悲の光が様々な柵を照らして、歩む

べき道、越えるべき柵を指し示してくれるのです。子供には親がお釈迦様です。お釈迦様は私たちの親です。私たちはお釈迦様の子供です。親もお釈迦様もともに慈悲の光を我が子に注いでくれているのです。「慈悲」とは、仏や菩薩、人が他者の苦しみを抜き、安楽を与えようとする深い思いやりの心です。「慈」は楽を与える、「悲」は苦を抜く、この二つを合わせた「慈悲」によって私たちは生かされているのです。

親の慈悲から仏様の慈悲へ我が身を委ねることは、子も親も勇気がいることでしょう。しかし仏様の慈悲に身を委ねることは、何事も囚われないありのままの自由を手に入れることだと私は考えています。ゆでガエルを作る社会の柵に安閑とするのではなく、私は仏様の慈悲に身を委ねた自由に安住したいと考えます。

狂言綺語二百十八・保守

今年が昭和百年の年に当たると言うことで、昭和天皇の誕生日である四月二九日に昭和百年記念式典が開かれました。ニュースではあまり報じられていなかったので、その式典の内容は知らなかったのですが、ネットではご臨席を賜った天皇皇后両陛下のお言葉がなかったことが議論を呼んでいるようなので、内閣府のホームページで案内されている式典の動画を見てみました。昭和という時代を未だに総括できないままに、平成、令和と権力を行使してきた為政者たちが、百年という節目に元号や天皇の権威と権力、天皇の存在の意味を、どのように位置づけるか注目に値する式典だったはずです。ところがあまりにもお粗末で幼稚な内容に私は唖然としてしまい、途中で見るのをやめてしまいました。今までの曖昧で八方美人のような総括もどきには、まだ昭和を総括しきれない迷いのままに、何かを語らねばとの意志は感じられていました。しかし今回の保守を自認する人達の挙行する式典は、語る言葉を放棄した昭和歌謡の祭典と化していたのです。

昭和は戦前の大日本帝国憲法の時代と、敗戦後の日本国憲法の時代とを分割して語られることが多いように思えます。しかし日本の元首である昭和天皇は、国体である天皇と象徴である天皇とで体制は異なりましたが、存在としては連続したものです。元号の昭和と機能としての昭和天皇は本来一体化しているものと考えるべきだと思います。戦前と戦後は連続した昭和です。連続性の中で、真摯に過去の事実をありのままに見つめ、それを真実として今に伝える努力を怠ってきた付けが、この式典にも現われていました。当時の為政者の誰もが侵略戦争の理念を説明できないままに始めてしまった戦争から、昭和天皇以外やめることを決断できなかった敗戦へ、そしてアメリカの占領下から未だに脱却できず現在に至る日本の歩みを象徴している式典です。過去の事実を無かったことにするか、書き換えて捏造してそれを歴史認識という名で糊塗することで、昭和という時代の事実を百年たった今日も未だに知ろうとしない伝統的な為政者の姿がここにもありました。我こそは伝統の保持者、保守と自負もし、支持を得ているようですが、もしそれを伝統の保守というならば、藤原氏以来今日まで天皇家を傀儡として権力を行使してきた貴族、武家、政治家の伝統をそのまま保守しているに違いないのです。為政者の傀儡である天皇家を保守し続けることが令和の今も権力者の意志であることがはっきりしたことは明白です。為政者の皇室に関わる法律を含めたあらゆるアクションが、天皇を傀儡としてきた伝統の維持に他ならないと言うことを私たちは今更なが

ら認識した次第です。

「保守せんがために改革せん」とは英国の保守党理論家、エドマンド・パークの言葉です。この言葉は真性保守の真髄を表わしています。守るべきもの（国家や伝統）を固定化して硬直させれば、時代の変化に適応できず、還って崩壊を招いてしまうでしょう。根本的な理念や価値を堅持(保守）しつつも、表面的な仕組みや制度を時代の変化に合わせて自発的に変えていく(改革）との考え方です。政治の、特に政策立案者の役目は客観的に誰もが理解し納得できる過去の事実や現在のデータに基づき明日を設計し、未来の方向性を示すことです。その責任者の語った次の言葉には何処にも事実(客観性）を発見することができません。「皇室についての議論は非常に重い。初代の神武天皇から一二六代にわたり、様々な過程を経ながらただ一度の例外もなく、男系で継承されてきた。世界に唯一無二の伝統と重みを謙虚に受け止める必要がある。」神武天皇は一二七歳まで生きました。十代の崇神天皇は一六八歳です。これを事実と認定するならば当時の人は長寿で医療も栄養も今より優れていたと考えるしかありません。それとも天皇だけには特別な神通力が備わっていたのか、はたまた捏造の産物か。その評価を私はするつもりはありません。それを盲信し、それが日本の伝統であり、それを保守することが自分達の利益のためと考える人達に、過半数の人達が信任の札を入れたと言う事実があるからです。私は政治的なことを語るつもりも、今後も語ることもありません。私が問いたいことは日本人の保守すべき国家や伝統は何かと言うことです。それを作り上げてきた日本人の精神は何かと言うことです。これを政治の問題にしてはなりません。なぜなら利権の問題にすり替え可能だからです。私たちがそれを問うことは日本人とは何か、何を考え何を行い、何を願って歩んで来たのかを問うことです。私たちのアイデンティティを問うことなのです。それを為政者が捏造することを許してはならないのです。

私は日本人のアイデンティティを「カミとホトケの出合い」に観ることができるのではないかと考えてきました。学者ではなく実践家なので、これを論理で立証することは私にはできません。それでも実在のお釈迦さまに始まるホトケが、中国を経て日本に移入され、そしてカミと融合して今に至る変遷を辿ると、まさしく「保守せんがために改革せん」の姿勢に貫かれていることがよく分ります。お釈迦さまが教えてくれた世界の捉え方、「縁起の法則(空、ありのまま)」が仏教の守るべき原理です。その土台に、どうやれば私たちは一切皆苦の世界から逃れる（解脱）ことができるかを、お釈迦様の弟子たちが、何世紀にもわたって追求してきたからこその仏の教えです。お釈迦さまの教えを保守せんがために改革され続けた仏教が、今ここにある仏教です。私は、お釈迦様から連綿と保守され、改革され、日蓮聖人の革命的な変革の後もまた飽くなき改革が続けられた教えを、今受け取ることができ、それを未来に繋げようとしている一人なのです。

カミとホトケが日本人の精神と智慧を形作ってきたという私の仮説には、無論そのカミの一翼を担った天皇の存在もあります。カミが私たちの精神の柱になっているとするならば、天皇は各々の日本人の総体である国民統合の象徴です。憲法に記されている通り八〇年間国民の統合の柱となってきていたのです。守るべき伝統は言うまでも無く、この統合の柱である天皇の精神的存在です。それを形式に拘ることが伝統を保守することだとして精神を蔑ろにした時、本末転倒、日本人の保守すべき精神は崩壊することでしょう。合掌

狂言綺語二百十九・ハングル酔いから醒めて

近くて遠い国、韓国を初めて訪れたのはソウル五輪から三年後でした。それから二五回ほど旅行や仕事で韓国を訪問した理由は、ハングル酔いの心地よさや固有の食べ物、日本では失われてしまった猥雑感に魅せられたからだったのでしょう。私が六歳の時に開催された東京オリンピックが、戦後の昭和から豊かな昭和へと歩む契機となったイベントであったならば、ソウル五輪はまさしく韓国に於ける豊かな国への歩みの一歩となったイベントと私には感じられました。感傷的な言い方になるかも知れませんが、バブルがはじけて低迷期に入った日本のビジネスマンの一人として、韓国の猥雑なエネルギーに日本の失われた昭和を邂逅していたのかも知れません。当時、既にビジネス現場では韓国のパワーに圧倒されていたことは否めません。

先頃、約二〇年ぶりに韓国を訪れました。今回はツアーで釜山から慶州、全州、水原、ソウルへと韓国を縦断する四日間の旅でした。私が韓国を訪問していなかった期間に、K-pop は世界の音楽シーンを席巻し、韓ドラは日本女性の心を掴んでいました。今や、半導体、電子機器、自動車、エンターテインメントなど幅広い分野で世界をリードするような国が，以前の韓国と同じ訳がないのは当たり前です。韓国は以前の私が知る、猥雑なエネルギーに溢れ、個性に満ちた愛すべき国では無くなっていました。一言で言えば洗練された先進国のひとつ、この国に行かなければ出会えない強烈な個性（時には他者が受け入れを躊躇するような）の、角が取れて丸くなった国になったように感じました。一旅行者の今回のささやかな見聞と、二〇年前に韓国に魅せられた時の印象とを比較することに説得力があるとも思えません。ただ、私は韓国はその他多くの先進国と同じ豊かな国となったことと引き替えに、個性と魅力を失ったのではないかと危惧しているのです。

かつてのソウルの国際空港、金浦に降り立ちターミナルに入ったとたんに旅行者を迎えたのは、強烈なキムチの匂いとハングルの洪水でした。新しい仁川の空港も同じです。国全体がキムチの国だったのです。でもそれが私に日本ではない他処にお邪魔しているという自覚を与えてくれるのです。今私は、異なる文化と風習を紡いできた国の上に立っているとの自覚です。キムチほどではないにしても，かつて仕事で欧米や東南アジアに行っていた頃は、多かれ少なかれ、ターミナルに降り立つ毎に、その国特有の匂いを感じたものです。日本も日本人が気づいていない，味噌や醤油、タクワンの匂いを外国の方は感じているかも知れません。気づかないのは，当の国民ばかりと言うことです。ところが、今回韓国に最初に下りた空港、釜山の金海空港では、拍子抜けするくらい無臭だったのです。街の中を歩いても飲食店に入ってもキムチの匂いはしません。食事には必ずキムチがついてくるのですが、量はわずか、辛さも熟成度もうまみも，味の複雑さもかつてのここだけのキムチではなく、個性のないキムチでした。これなら我が家で毎年作るキムチの方が遙かに美味しいと思ったのです。かつては私は韓国に行くたびにキムチの匂いを振りまく迷惑を省みず、白菜の他，あらゆる種類のキムチをトランクに詰めて帰ってきたのですが、今回は買う必要を感じませんでした。

キムチを代表にしましたが，他にいくらでもあります。かつては殆どの飲食店にはなかったマッコリ（日本のどぶろく）が，今はどこの店にもあります。しかも飲み易くジュースみたいな味。かつてはマッコリを飲める店を訪ね歩き、やっと見つけたそれは，大きな花瓶のような容器の口から発酵した泡がブクブク

と出ていました。また郊外に出ると道端で老婆の何人もがしゃがみ込んで、瓶で自家製マッコリを売っていました。また東大門市場はスリやぼったくりの心配が無いくらい整然とした佇まいで、市場特有の危なさを一切感じません。以前は食べることを躊躇した道路を占領していた屋台も食中毒の懸念もなさそうです。偽ブランドは見かけはしますが、本物と偽って売ることも、店の最前列でこれ見よがしに売ることもありません。

食べ物や街の印象は感覚的なものなので，多分に個人の主観や思い入れが入るでしょう。しかし建物や道路の目に見える構造物には驚かされました。韓国縦断は高速道路を利用したバス移動です。日本の高速のように片側三車線や二車線、対面交通などのちまちました高速ではなく。米国並みの広い道路です。片側四車線が多く、東西南北と縦横に走っています。また高層マンションと思われるビル群はソウルや釜山だけでなく、高速で十分も走るごとに通過する中小都市にも必ず数棟は林立していました。東京を抜けるとこれだけ高層ビルが集中している都市を日本では見たことがありません。この二つの構造物を見るだけで，韓国は明らかに経済的に豊かな国であり、グローバルな国になっていることは間違いありません。そして国全体から受ける印象は，常に意識が外に向かっているという能動的思考です。実証的に語る能力はありませんが、例えば観光を経済資源として構築していく基本概念は、どうやってこの文化的遺産をかつて存在したありのままに残すかと言うことではなく、文化遺産をベースにどう再構築すれば観光資源として有効かということであるように思えました。王宮も城郭都市も寺も歴史的町並み保存地区も、どこもフォトスポットには人が列を作っていました。しかし私はその場所に宗教的な感慨や、かつての王侯貴族や庶民生活や文化を観ることはできませんでした。好意的に解釈すれば過去を保守するのでなく，未来を作るために過去をどう利用するかと言う考え方です。こう考えると政治的な言辞としてしばしば言及される、日本に対する過去の反省要求も理解できます。過去を材料にして未来にそれをどう生かすかという政治的欲求に基づく言辞なのです。

仏教は韓国経由で日本に伝わりました。しかし町には全く仏教の痕跡は感じられません。たまに教会を目にしますが、それだけです。仏国寺にいきましたが、そこも信仰の場と言う雰囲気はなく、世界遺産の一つという印象です。韓国から日本には仏教や儒教も統一教会もやってきましたが、街から信仰の空気を感じなかったのは，私の観察不足なのか、それともそれが近くて遠い国の故なのか、未知の国韓国の旅報告でした。

狂言綺語二百二十・熱い夏を繋ぐ

夏休みはおじいちゃんおばあちゃんの忙しい季節です。我が家には∞月に入って小1、小2、小4の三人の孫が一週間から十日、親元を離れて預けられています。高齢者二人の静かな日常から、孫たちの動きに右往左往させられるドタバタの日々が続きます。この期間は子供を預かっているという責任の緊張感から、何とかこの喧噪の日々を乗り越えることができるでしょうが、帰った後の静けさと虚脱感はひとしおです。あと何回くらい孫を預かることができるかは、体力的に定かではありませんが、恐らく中学生にもなると、孫たちも祖父母の家で夏休みを過したいとは言わなくなるでしょう。六十年の歳の差は、食事の

嗜好から興味、思考回路、行動様式まで何もかも異なって当然ですが、ここまで違うのかと驚くばかりです。歳を重ねること、成長していくことは世代間で引き継いでいくべきことを引き継ぎ、不必要なものを捨て去って更新していくことの繰り返しなのでしょう。何世代繰り替えしていけば、当初の世代が引き渡したものが更新され百％全く異なったものになっているのでしょうか、そんなことを考えさせられる孫と過す夏休みの十日間です。

私が僧侶になって初めて「僧侶として生きることはなんであるか」を理解したこと、そしてそれが私が僧侶として生き続けるためには不可避、不可欠であり、全てであるとの考えに至った認識が、「ホトケのいのちを繋ぐ」ということです。「いのちを繋ぐ」ことを具体的に規定することも、誰もが疑問の余地のない定理として示すことも不可能です。なぜならそれは、各々が各々の安らぎの処へと至る道を、各々の選択に従って日々生き続けることだからです。各々が選択した道の歩き方全てが、「仏の教え(法)」なのです。ですから有史以来連綿と繋がれたいのちは、各々の選択したいのちの継承によって、生きとし生けるもの、森羅万象のいのちとなって、今ここにあるのです。その故に、私たち自身の今あるいのちだけでなく、他者のいのちも自分自身のいのちと同様に慈しむことが、私たちが生きることの全てとなることができるのです。これが「ホトケのいのちを繋ぐ」ことであり、お釈迦様の弟子として信行の道を生きる私の自覚なのです。

以上のことを私は今回で二二〇回に渡り、この狂言綺語の欄で書いてきました。それは私が日々をこの自覚のもとに歩み続けているかの備忘録であり、反省録でもあります。最初からこの自覚に基づいて書き初めていたわけではありません。私なりの信行の経験から導き出された反省と発見の道筋が少しづつ言葉に置き換えることができるにつれて、自覚が形作られたと言うところが本当のところだと思われます。しかし、今読み返してみても、その自覚へ至る道筋は、最初から一本の道筋としてすでに与えられていたのではないかと思えるのです。なぜなら言葉や表現は違えども、私は初期から常に「いのちを繋ぐ」ことについて書いてきていたからです。その過程は「いのち」がホトケのいのちであり、私たちのいのちであると言うこと、つまり私とホトケはひとつであるという考えに至る一本の道だったのです。そしてその道は私が自ら切り開いたものでは決してありません。ありのままに歩もうと常に心がけ、しかしその通りに歩むことができていないのではないかという恐れにも不信を抱かず、これもありのままの道と信じて進んでいく先に辿り着く安らぎの処です。そのところへ、生きとし生けるもの、有情、無情、森羅万象の全てが辿り着こうと願い誓い歩み続けることができれば、全てが互いを慈しみ合い、尊重し合うことができるようになるはずなのです。

互いを慈しみ合い、尊重し合うことができれば、生きとし生けるものは互いを憎しみ合ったり、殺し合ったりすることはできないはずです。日本人が自らの意志で他者を蔑み、殺戮する戦争は八一年前を最後に起こしていません。その最後の日となった熱い夏から、私たちは熱い夏のいのちを今につなぐことができているでしょうか。このいのちは主義主張や信条や利害や感情で繋ぐものではありません。自分自身を慈しみ尊重することで、自然と培われる智慧と精神によって繋がれるものです。智慧と精神は私一人単独で存在できるものではありません。常に他者との関係性の中で、私の智慧と精神のありのままの発露が、**自**ずから他者の智慧と精神に共鳴して**然**らしむ、**自然**（じねん）の共鳴が、他者をも慈しみ尊重する智慧と精神となっていくのです。これは理想論や夢物語ではありません。心底から私はありのままに生き続けた

いと望み、誓い、行いさえすれば、私は他者との自然の共鳴があると信じています。なぜならそれはホトケの慈悲だからです。

仏の慈悲をその時代、その社会に合わせて繋いで行くためのキーワードが「カミとホトケの出合い」と「選択と摂取」「保守」です。私が信行を言葉に置き換える過程で言語化することのできた、ホトケの教えです。今までの繰り返しになりますが、日本古来の八百万のカミと、印度、中国を経由して日本にもたらされたホトケが出会ったとき、日本独自の文化、社会が生まれました。カミは日本人の精神を、ホトケは智慧を形成してきました。その精神と智慧を繋いで行く努力を現在まで二千年近く続けてきて、今ここにある日本があるのです。その過程で社会や意識の変化に合わせて「選択」を行なってきました。その選択はそれ以外を排除する選択ではなく、されなかったものも摂取する選択です。カミとホトケの慈悲(精神と智慧)が排除でなく摂取することを望んでいるのです。だからこそ、私たちに引き継がれた社会を私たちは次の世代に繋ぐ義務があります。なぜならそれが私たちのアイデンティティそのものだからです。その教えを繋ぐための基本理念が「保守」です。保守すべきもの選択し「保守せんがために改革」し続けて今があるのです。

保守は進化や革新に反対し、既得権益を守ろうとする立場と思われがちです。しかし私は保守を、変化に対応するために事実を正しく認識し、選択摂取して改革する考えが本来の「保守」と考えます。そうでない巷に溢れる偏狭ナショナリズム的言動は似非保守、保守反動と呼ぶべきものです。その反動者が、熱い夏を熱いままに繋ぐことを無視拒絶し、また新たな熱い夏を再現しようと目論んでいるように思えてなりません。

狂言綺語二百二十一・経験の継承

今年から四〇度を超える日は酷暑日と名付けられましたが、今年の私の八月は、猛暑日どころかクーラの必要は殆どなく、熱帯夜もありません。明け方は風邪を引かないよう、肌掛け布団を用意してから寝ます。毎日湿度が高く、激しいにわか雨が降ったかと思うまもなく、急に強い太陽の日差しが差し込む繰り返し。雨の止み間に散歩に出たところ、急に雨がザーッと降りだし、慌てて家まで駆け戻ることもありました。私の記憶するかつての夏は、露の下りる清々しい朝、過しやすい午前中も次第に気温が上昇していき、ピークは午後二時くらい、山の方に入道雲が立ち、今日は雷雨があるかなと心配しながら、蜩の声を聞く頃には、扇風機で夕涼みをして一日が終わります。毎日がこの通りであったか、確信は持てませんが、これが私の記憶に残る夏の経験です。ところがここ数年は猛暑が六月から始まり九月まで続くようになり、その間、二四時間エアコンはつけっぱなし。これが新しい定番の夏だと思い始めていた矢先の今年の夏です。それは私の記憶にも経験にもない新しい夏。あえて比較するならば、旅行で行った雨期のカンボジアやベトナムで体験した気候のようです。これからの夏は、一日で強烈な日差しと雷雨を何度も繰り返す亜熱帯性気候になるのでしょうか。

私たちの思考や行動は、自らの経験の繰り返しが土台になっているはずです。経験は記憶となって心身に蓄積され、それが血肉となり更新し続けた結果が、今の私なのでしょう。食べ物や運動が身体を作り続

けるのに対して、経験が私の精神と智慧を作り続けているはずです。経験は常に上書きされ続けているのです。これを社会や国家ならば、その構成員の経験の総体が更新され続け、今の社会や国があるのでしょう。現首相がかつて「自分は戦後生まれで戦争をしていないのに、なぜ謝るのか」との主旨の発言をしていました。確かに本人の体験としての戦争は経験していません。しかし経験は体験だけでは得られも与えられもしません。知識、情報、対話、見聞などによって得られた事実やそれに対する智慧や感情こそが経験です。自分一人だけの体験だけではわずかな経験しか得ることはできません。他人の体験を見聞して自らの智慧と精神の中に取り込むことで、私たちの経験は豊かで多様なものになります。それは歴史（先人の経験）を自らの経験に生かしてそれを未来を生きる人に伝えていくことです。それが文化であり伝統といわれるものなのです。

私はお釈迦さまの弟子、日蓮宗の僧侶です。私はお釈迦さまや日蓮聖人、その経験を長年に渡って更新し続けて私に受け渡してくれた人々の経験を、今受け取っています。それはお釈迦様や日蓮聖人の経験（伝えられた言葉）をなぞることではなく、それをどのようにして自らの経験とし、次に繋げていくかということです。その数多の経験から、私が選択した経験の中にそうでなかったものも摂取して信行し続けることが僧侶なのです。残された言葉や行動記録をお釈迦様や日蓮の教えだとオウムの如く繰り返すだけの人々は、何を経験として人々に繋げたいと願っているのか理解できません。そして僧侶を名乗る人々の大半は、私には理解できない人達です。僧侶がその人々を意味する名称ならば、私は僧侶の名称を捨てることも厭いません。

日蓮の言葉（経験）の中で、ひときわ影響力が強く、未だに日蓮宗も強く発信し続けている言葉に「我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん」があります。流刑地佐渡で記した「開目抄」の中の「三大誓願」と呼ばれるものです。日蓮はこの誓願の実現のために生き、信行し続けたのです。この誓願は勿論、日蓮の信行（経験）が語らせた言葉（経験）です。言葉の表面だけをなぞるだけならば、日蓮の言葉は何の意味も価値もありません。この言葉（経験）を多くの日蓮の経験を繋ぐ者たちが、自らの経験と融合させて、新たな経験を私たちに示し、示された私たちがそれをまた次に繋ごうとすることで、初めて意味を持つ言葉なのです。これが真の意味での教えの継承、信仰の実践（信行）なのです。

先人たちは日蓮の経験をどのように継承してきたかを概観してみます。一、単に教えの解釈ではなく、命を賭して教義を実践する「行者」の覚悟と主体性を提示した。二、国家的難局における蒙古襲来などの外患と国内の混乱が重なる時代に、政治権力に頼るのではなく、自らの信仰と信念によって「国家・民衆の精神的支柱になる」という強い自負を示した。この二つが日蓮の経験が私たちに示した言葉（信）。それを実践（行）で受け継いだ人々は、思想的には左右両極端の信行へと分かれていきます。ひとつは、近代に於ける国体論や超国家主義運動へと向かいました。それは田中智学や石原莞爾の提唱する日蓮主義に基づく「日本国家の世界的使命」となって、最終的には軍国主義から戦争へと向かいました。もうひとつは権力に対する批評精神の源流となり、思想運動や社会運動へと向かいました。キリスト教の思想家内村鑑三や、作家の宮沢賢治、社会活動家として戦中のファシズムと戦った妹尾義郎などです。極右から左翼の実践家まで数多の信行者に日蓮の経験は受け継がれました。私は、それぞれの経験の正否、善悪を問おうとはいたしません。「信」は個人の心のもの「行」は社会の体制の中で実践されるものだからです。個人の「信」を組織化して社会の「信」に変えなければ実践は不可能なのです。だからどんなに個人の「信」が強固なも

のであっても、信行の正否も成否も社会と時代に判断を委ねなければなりません。言葉だけに安住して行の伴わない者は「信」を裏切る者です。自分の可能な信行の道を見極め進むこと、唯一それが日蓮の経験の継承者なのです。

自ら体験していない戦争を謝る必要は無いと言い放った日本の指導者の、今までに上書きされ続けた経験は果たしてどんなものなのでしょう。少なくとも日本が戦争を起こしたという事実は彼女の経験、つまり精神と智慧の一部分とはなっていないということでしょう。それは敷衍してみれば、日本人が積み重ねてきた歴史（先人の経験）を知ろうとしないと言うことです。その様な指導者が騙る日本の文化や伝統は改竄されたものにならざるを得ません。その様な指導者に私たちは未来を委ねていることを、自覚すべき今なのです。

最後までお読みいただきありがとうございます。
琉游舎ではホームページを作っています。
アクセスいただければバックナンバーも掲載しています。
ぜひともご覧ください。
アトリエ琉游舎　ryuyusha.com/
琉游舎 for healing　https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

戸井　出琉